



# 日本漢文史

籍叢刊

第三輯

雜史

十七



上海交通大學出版社  
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS



圖書在版編目(CIP)數據

日本漢文史籍叢刊. 第3輯, 雜史 / 周斌, 孫錦泉,  
粟品孝主編 — 上海: 上海交通大學出版社, 2014

ISBN 978-7-313-11956-8

I. ①日… II. ①周… ②孫… ③粟… III. 日本—  
歷史—史籍—叢刊②日本—歷史—雜史 IV. ①K313-55

中國版本圖書館 CIP 數據核字(2014)第 199077 號

日本漢文史籍叢刊 第三輯 雜史

主 編 周 斌 孫錦泉 粟品孝

副主編 陳小法 尤 佳

上海交通大學出版社出版發行 北京人天書店有限公司經銷

(上海市番禺路 951 號 郵政編碼 200030)

電話:64071208 出版人:韓建民

北京中獻拓方科技發展有限公司印刷

開本:889mm×1194mm 1/16

印張:946 字數:18920 千字

2014 年 9 月第 1 版 2014 年 9 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-313-11956-8/K

定價:23800.00 圓(全二十八冊)

版權所有 侵權必究

統 籌 陳建華 施 維 劉邦權

責任編輯 陳建華 劉邦權

裝幀設計 陳燕靜

# 第三輯目錄

## 第一冊目錄（總第62冊）

雜史

佛教

元亨釋書

（目錄、表、卷一—卷三十）

本朝高僧傳

（總目、序、凡例、援引書目、卷一—卷二）

四三五

## 第二冊目錄（總第63冊）

本朝高僧傳

續（卷三—卷四十七）

一

## 第三冊目錄（總第64冊）

本朝高僧傳

續（卷四十八—卷七十五）

一

東國高僧傳

（序、卷一—卷十）

二四三

續日本高僧傳

（序、總目、援引書目、凡例、卷一—卷九）

三七九

## 第四冊目錄（總第65冊）

續日本高僧傳

續（卷十一—卷十一）

一

吉水實錄

（序、卷第一—卷第十四）

三七

正法山六祖傳

.....

二五五

日本往生全傳

（序、極樂記、續本朝往生傳、拾遺往生傳、後拾遺往生傳、本國新修往生傳）

二七三

扶桑往生傳

（序、卷上—卷下）

四〇九

總目錄

淨土真宗付法傳 ..... 四五五

三國高僧略傳 (序、例言、卷之上—卷之中) ..... 四七五

第五冊目錄 (總第66冊)

三國高僧略傳 續 (卷之下) ..... 一

近世禪林僧寶傳 (序、凡例、目錄、卷之上—卷之下) ..... 二七

高僧名士傳 ..... 一二七

和漢高僧傳 ..... 一五三

門跡傳 ..... 二四一

天台圓宗列祖略傳 ..... 三〇三

密宗血脉鈔 ..... 三二九

日本國大師一覽 ..... 四五一

唐鑑真過海大師東征傳 ..... 四五九

東福開山聖一國師年譜 ..... 四八七

蒼龍窟年譜 ..... 五〇九

東海一休和尚一代記 (上) ..... 五二九

第六冊目錄 (總第67冊)

東海一休和尚一代記 續 (下) ..... 一

智証大師年譜 ..... 一三

正受老人崇行錄 ..... 三五

東海鐵塔諸祖年譜略頌 ..... 六一

峨山禪師行實並法語 ..... 九一

方廣開山無文元選禪師行狀 ..... 九九

越溪道蹟 ..... 一一三

損翁老人見聞寶永記 ..... 一二一

近世高僧年表 ..... 一六三

淨土傳燈總系譜 (序、卷上、中、下) ..... 一九九

東大寺要錄 (序、卷一—卷六) ..... 二六九

興福寺年代記 (序、卷一—卷六) ..... 三八五

長谷寺緣起 ..... 四三九

扶桑伽藍紀要 ..... 四六一

慧超往五天竺國傳箋釋 ..... 四七七

### 第七冊目錄 (總第68冊)

入唐求法巡禮行記 (卷第一—卷第四) ..... 一

參天台五臺山記 (卷第一—卷第八) ..... 一四九

### 神道

神道五部書 (卷第一—卷第五) ..... 三〇五

皇國神社志 ..... 三七三

古義神代考 (卷第一—卷第三) ..... 三九三

天滿宮世家 ..... 四三七

祖志 (序、緒論、目次、卷一—卷三) ..... 四五五

### 第八冊目錄 (總第69冊)

祖志 續 (卷四—卷六) ..... 一



雜紀

古事記 (卷一—卷三) ..... 八三

春記 (卷一—卷三) ..... 一六三

玉葉 (序、例言、目錄、卷一—卷十二) ..... 二一七

第九冊目錄 (總第70冊) ..... 一

玉葉 續 (卷十三—卷二十六) ..... 一

第十冊目錄 (總第71冊) ..... 一

玉葉 續 (卷二十七—卷四十) ..... 一

第十一冊目錄 (總第72冊) ..... 一

玉葉 續 (卷四十一—卷五十五) ..... 一

第十二冊目錄 (總第73冊) ..... 一

玉葉 續 (卷五十六—卷六十六) ..... 一

明月記 (諸言、目次、第一) ..... 三九一

第十三冊目錄 (總第74冊) ..... 一

明月記 續 (第一、第二) ..... 一

第十四冊目錄 (總第75冊) ..... 一

明月記 續 (第二、第三) ..... 一

第十五冊目錄 (總第76冊) ..... 一

明月記 續 (第三、補遺) ..... 一

古語拾遺 ..... 三四三

將門記 ..... 三六一

大塔物語 ..... 三八三

保建大記 (卷上—卷下) ..... 四〇九

本朝稽古篇 (上中下、續上中下) ..... 四三七

十三朝紀聞 (慶弘紀聞) (序、卷一—卷三) ..... 四七五

第十六冊目錄 (總第77冊)

十三朝紀聞 續 (卷四—卷七、跋) ..... 一

今日鈔 (卷一—卷七) ..... 七五

柱史鈔 (卷上—卷下) ..... 一七七

近古史談 (卷一—卷四) ..... 二二一

近世史談 (卷一—卷四) ..... 二九三

帝國史談 (卷上—卷下) ..... 三六五

續近事紀略 (卷一—卷三、征臺略記) ..... 四一五

尊攘紀事 (卷之一—卷之六) ..... 四七三

第十七冊目錄 (總第78冊)

尊攘紀事 續 (卷七—卷八、跋) ..... 一

尊攘紀事補遺 (卷一—卷四) ..... 二五

行在或問 (卷上—卷下) ..... 七九

皇朝靖獻遺言 (卷一—卷八) ..... 九五

慶安小史 ..... 一七一

先朝私記 ..... 一八五

遠野史談 (卷上—卷下) ..... 二一一

西京傳新記	(初編—四編)	二三七
-------	---------	-----

日本詩史	(卷一—卷五)	三三三
------	---------	-----

回天詩史	(卷上—卷下)	三九一
------	---------	-----

和漢茶誌	(卷一—卷三)	四三一
------	---------	-----

本朝畫史	(卷上中下)	五一
------	--------	----

第十八冊目錄 (總第79冊)

續本朝畫史	(卷上—卷下)	一
-------	---------	---

近世畫史	(卷一—卷五)	二七
------	---------	----

雲煙略傳	(卷上—卷下)	一一五
------	---------	-----

日本國事跡考		一五七
--------	--	-----

史館茗話		一九七
------	--	-----

寤眠錄		二二三
-----	--	-----

幽囚錄		二三九
-----	--	-----

在津紀事	(卷一—卷二)	二六五
------	---------	-----

正名緒言	(上下)	二八九
------	------	-----

本朝蒙求	(上中下)	三三三
------	-------	-----

扶桑蒙求	(上中下)	四〇九
------	-------	-----

神代千字文		四九五
-------	--	-----

本朝千字文		五〇九
-------	--	-----

內國千字文		五二一
-------	--	-----

日本千字文		五三三
-------	--	-----

第十九冊目錄（總第80冊）

大統歌（上下）.....一

盡忠錄.....一九

涉史偶筆（卷一—卷六）、涉史續筆（卷一—卷七）.....四一

香亭雅談（上下）.....一八九

櫻史新編.....二三五

酒史新編（上下）.....二五五

國朝佳節錄.....二九七

外史劄記.....三一

歷代君臣名功錄（上中下）.....三三三

傳疑小史.....三九三

仙臺支傾錄.....四〇九

先哲醫話（上下）.....四三七

奇談新編.....五二三

第二十冊目錄（總第81冊）

中朝事實（上下）.....一

潛中紀事（卷一—卷六）.....一〇七

正保野史.....二六五

稽古要略.....二七三

丙丁炯戒錄（上下）.....二八五

養真亭藏泉譜.....三二一



新撰寬永泉譜 (前編—後編) ..... 三九九

明治新撰泉譜 (一集—三集) ..... 四二一

明治新撰泉譜別集 (初編—貳編) ..... 四八三

大東世語 (序、卷一—卷二) ..... 五一七

第二十一冊目錄 (總第82冊) ..... 一

大東世語 續 (卷三—卷五) ..... 一

近世叢語 (卷一—卷六) ..... 三五

新撰叢語 (卷一—卷三) ..... 一〇七

修身叢語 (上下) ..... 一五一

日本智囊 (卷一—卷十) ..... 二二三

皇朝金鑑 (上書、序、凡例、總目、卷一—卷十七) ..... 三三九

第二十二冊目錄 (總第83冊) ..... 一

皇朝金鑑 續 (卷十八—卷五十五、跋) ..... 一

戰略新編 (序、目錄、卷一—卷五) ..... 四一七

第二十三冊目錄 (總第84冊) ..... 一

戰略新編 續 (卷六—卷十一) ..... 一

策府 (題、序、凡例、目次、卷一—卷二十四) ..... 七九

第二十四冊目錄 (總第85冊) ..... 一

策府 續 (卷二十五—卷三十、跋) ..... 一

外史

日本外史前記 (卷一—卷五) ..... 九七

日本外史	(序、例言、引用書目、目次、卷一—十八)	二二九
------	----------------------	-----

第二十五冊目錄(總第86冊)

日本外史	續(卷十九—卷二十二)	一
續日本外史	(卷一—卷十)	七三
近世日本外史	(卷一—卷八)	二五三
續近世日本外史	(卷一—卷二)	三九一
日本外史補	(自序、凡例、目次、引用書目、卷一—卷七)	四四一

第二十六冊目錄(總第87冊)

日本外史補	續(卷八—卷十四)	一
江戶將軍外史	(卷一—卷五)	六一

史表

皇朝金石年表	二五五
日本金石年表	二八七
史籍年表	三一九
日本史籍年表	三五九

第二十七冊目錄(總第88冊)

日本史籍年表	續(前編續—後編)	一
--------	-----------	---

第二十八冊目錄(總第89冊)

日本史籍年表	續(後編續)	一
銅鑄和漢年契		四五
增訂新撰年表		七七

近世儒林年表	.....	一三五
日本外史年表	.....	二三五
重撰和漢皇統編年合運圖 (上下)	.....	二六三
年代紀略	.....	三四一
新編分類本朝年代記 (卷一—卷七)	.....	三六一
國史年表	.....	五二九
逸號年表	.....	五三九

第十七冊目錄(總第78冊)

尊攘紀事	續(卷七—卷八、跋)	.....	一
尊攘紀事補遺	(卷一—卷四)	.....	二五
行在或問	(卷上—卷下)	.....	七九
皇朝靖猷遺言	(卷一—卷八)	.....	九五
慶安小史	.....	.....	一七一
先朝私記	.....	.....	一八五
遠野史談	(卷上—卷下)	.....	二一一
西京傳新記	(初編—四編)	.....	二三七
日本詩史	(卷一—卷五)	.....	三三三
回天詩史	(卷上—卷下)	.....	三九一
和漢茶誌	(卷一—卷三)	.....	四三一
本朝畫史(卷上中下)	.....	.....	五一



尊攘紀事卷七

宮城縣 岡千仞振衣撰

毛利氏決定國論

本原曰太平三百  
年十八人開國  
肉體筋力無一堪  
其事者大政維新  
祿秀制訂此輩流  
難飢寒者自晨者

毛利氏之唱攘夷久坂寺島高杉諸氏以膏粱子弟  
孱弱不中用採軀幹強壯者編一隊號令嚴明雖兇  
暴無賴者俯伏就約束號曰奇兵隊五度攘夷其功  
居多及久坂寺島死高杉專將之及國論一變三宰  
伏戮高杉以為誅俗吏一士心高壘深池以待幕軍  
幕軍百萬何難敵之有罵當路者為俗論黨少壯過  
激者皆附之總督下令移五卿高杉深持不可曰五  
卿窮投我我移之不義也與各隊及浮浪來客者擁

尊攘記事 卷之七

字々風箱足勢激  
一藩士氣

五卿於府中以抗當路者於是藩告總督斬其魁七  
人高杉遁筑前以俟時慶應元年正月二日總督以  
毛利氏之伏罪撤兵是夜高杉以奇兵隊八十人襲  
赤馬關驅逐官吏取糧仗軍艦傳檄四疆曰藩公父  
子繼襲祖河春公貽謀奔走東西盡力王事而俗吏  
癩蔽託名恭順導敵毀城戮忠義之士辱家國之名  
而猶不足將割封土取悅幕吏我輩世浴國恩義不  
與是輩共戴天茲舉義師誅誤國者將慰河春公靈  
於地下耀藩公大節于天下後世冀有志者來戮  
力義舉矣於是兵隊候動靜者爭來効力立得數百  
人諸不服國論者亦各募同志編兵隊旬日間其黨

川島曰是何所異  
田草一胡獲七十  
一城

河野曰翻動至此  
耳目一新既知悉  
去天下之事始可  
有為也

尊攘記事 卷之七

着手方法然皆  
序

本原曰總兵非是  
則不可水戶七八  
以御校為電營亦  
是意

滋蔓兵勢大振當路者大驚令國中討伐激徒粟屋  
帶刀將兵出禦一戰敗走高杉率各隊席卷而進直  
入山口敬親使世子出郊詰狀高杉以下陳當路諸  
人誤國之罪曰臣等非有他心請除是輩次國論  
以伸大義於天下敬親父子自引過斬用事者數人  
舉激論黨參政事會門閥世臣與之誓曰確守國論  
輯和衆心以伸大義於天下於是藩論歸一築壇祭  
其祖元就會支族以下誓曰外夷構難以來國內騷  
擾日瀕危殆此皆寡人父子不明不德之所致追悔  
無及自今謝罪先靈立誓明神慎黜陟明賞罰去壅  
蔽開言路確定國論以維持祖業汝衆庶亦體寡人  
斯心莫敢或怠次日誓諸士次日誓各隊次日親出  
綏撫村落罹兵火者如秋亦如此國內無敢唱異論  
者乃會支藩以下曰今日舉動無非一所以激幕府  
彼大舉再征有一死殉國而已且以防長二國敵天  
下大兵縱無所成亦可以揚義名於天下慰死者於  
泉下也唯舉大事不可無名宜外主恭順內實武備  
乃分遣諸隊屯守要害屯御楯隊于三田尻鴻城隊  
于山口游擊隊于高森南園隊于萩齊懲隊于德地  
奇兵隊于赤馬關於岩城山八幡隊于小郡集義隊  
于松本諸士不與激論者亦約為一團號曰于城隊  
屯于萩及山口少壯者皆在屯營專事綜練是春幕

府戮武田田丸以下數百人國人皆曰彼就大藩請降且猶不免我藩抗幕府倍彼一日請降示如此而已於是舉國決于防戰而病和銃不中用高杉伊藤二氏航抵上海賣汽艦買大小銃雇洋船載歸英公使告諸幕府幕府固非尾張氏不交一矢而撤兵皆勸家茂再討四月令曰毛利父子既受大討不敢改圖益煽其逆寡人將親將問其罪報至山口一藩皆曰幕府不聽我請大義所在有一戰送死而已於是鎖四疆令國內以致死力報國恩改軍制廢刀槍甲冑以施條銃代之專練隊伍一仿洋法至是島津氏君臣相議曰方今萬國爭雄德川氏不知英法虎視

尊攘記事 卷之七

兩雄合謀天下之事唯其所欲為即土肥非不然而亦見及之實為一番所致也

有此精神而後可

其後構兵國內自弱其力不可共謀家國方今急務在定國是一人心率天下尊奉朝廷以護皇家於無窮因解長藩俘虜授旨禮遣尋發使臣請釋宿怨共盡力國事敬親使眾議高杉曰我以最兩防長當百萬之兵有食盡力窮死殉社稷耳危急至此庶人力謀自完則天下後世謂之何眾皆曰我於島津氏非有深讐今彼重大義捐小怨為國家行成而我峻拒不允不可謂之義矣且均盡力國家也坐待滅亡孰與戮力圖存匡濟國事宜允其請敬親父子然之自是薩長通使交際日密幕府未之知五卿之在長府筑前藩以總督命移太宰府細川鍋島島津有馬黑

田五氏各出藩士警衛五卿不敢携其操與五藩通聲息專以恢復為事五藩士人稍稍應之

余與高杉晉作同學於昌平黌晉作氣宇開濶不苟言笑余知其為偉器癸亥冬余為藩邸教授携客觀橫濱飲神奈川海亭有一人聞余聲出見即晉作也握手大笑歡飲序濶談及時事晉作扼腕曰余近遊上海觀髮賊與洋人戰髮賊以古銃鉞刀洋人以施條銃而一勝一敗不甚相讓今也邦人落膽於大艦巨砲歐米為不可敵者不知兵為何物也余因問策所出晉作笑不言後數日余聞家嚴疾急發江戶途見烈焰烘天市人狂走曰殿

尊攘記事 卷之七

河野曰紀事小按議論論發得體

噫歎出之猶是歐六丈之風神

山洋館火焚春見松本奎堂於京師始知晉作是時在神奈川謀火橫濱不成遂火殿山洋館晉作當藩人戮三宰請罪軍門銳氣沮喪束手受制之時奔竄隣疆僅保一生以僅僅八十人之兵唱義於草木皆兵之餘一移機而全國皆兵遂奉藩主定國論以最爾防長二國抗天下大兵戰必克攻必敗天下無復與之爭強者嗟乎何其雄也抑維新大業成於薩長而長人翻義旗於百城望風之日實由晉作此舉其功果為如何惜乎不及目維新之盛而天奪之命也

築橫須賀造船場

本原曰有船塢而無造船場此亦有脚而不能行走者

元治元年十二月幕府聘法國學士維爾爾築造船場於橫須賀自米舶來航幕府開長崎傳習所聘荷蘭學士學航海造船測量諸技術購求觀光朝陽咸臨蟠龍鳳翔諸艦而以鍛鐵工作未開每有幾損赴上海囑洋人修繕工費不貲勘定奉行小栗上州有大畧以爲國事日非財用不給給之無用不如設一造船場給之不朽工業以便後人乃因法國公使聘致維爾爾工場尤難其地乃檢沿海諸地至橫須賀大悅曰是地群巒屏擁風濤恬然此殆天爲工場而設者乃仿地中海通倫造船場鑿渠大小二築工場

尊攘記事

卷之七

五

三府庫廨廠副之費額洋銀三百四十萬元期四年竣功又開一製鐵場於橫濱安佐賀藩所獻器械上州又以步騎砲三隊取法譯書殆類兒戲建議遣柴田福地二氏法國聘致各科博士設校舍學法語改革軍制專仿法國兵律

鹿門說經往往出異見此其一

河野曰自幕府廢論元三代聖賢以學得才西學亦不外此意

余曾閱歐米各國史工作創設器械發明必書蓋作曰聖述曰賢夫子於易叙庖犧氏以來歷聖製作亦不外此顧歐土學術即物窮理專主實用其發明蒸氣力用之工場資器械製作用之舟車資貨物運搬功用之大精巧之極深得三代聖賢以述作爲事之遺意矣而我邦通歐米僅僅不過十

爲拒一洋敵三桅橫須賀無異當將假借文典氏休息易地外事或是一術

尊攘記事

卷之七

六

年而小栗氏首知船舶急於我破群議興大工出百萬巨額於國事紛亂府庫空匱之餘遂使天下親目器械之妙理享舟楫之實利此宜揭之史乘使後人知所由來也蓋德川家光禁耶蘇教意以爲絕妖教禍源無若定船舶制度狹少其製以絕內外往來於是禁船舶設三桅檣自是國內船舶無一中用者又禁外船舶航渡僅許漢土荷蘭二國來長崎爾來邦人徒以瀛海爲天險知見日隘規模日狹遂致有今日之事蓋我邦往時以善航海著稱無論明國朝鮮如安南大宛占城臺灣呂宋暹邏皆海賈商舶所旦夕往來當時大商角倉茶屋伏水末次諸氏皆造大船請朱章往來販鬻于域外一船所載三四百人其大可知也顧我邦國於海心漕運之便懋遷之利得之天寵者而航海不開船舶不中用此何異有脚而不能步走因思米艦始來磐翁示余獻芥微衷且曰我爲歐米所凌蔑子爲始于何時余曰大猷公今天下禁三桅檣實爲之俑翁愕然余時始來江戶年僅弱冠翁一見期以後來實由是言也

重爵曰此有識見者言一部說并微衷恐無此活眼

再討長藩

慶應元年德川慶勝班軍奏防長平定詔旨慰勞詔



本原曰不特幕府不能廢分毛利氏其實慶應亦不知其下手也蓋慶應此際雖自一思大政事還以外無良圖

尊攘記事

卷之七

七

將軍上京處分毛利氏之罪公卿諸藩各樹異見互相附黨議論不一會津氏固非慶勝之交矣兵請曰臣親東下促將軍入朝而後議毛利氏處分初幕府聞毛利氏之服罪將乘是機張幕威命松平阿部兩閣老率銃隊上京遣大監察塚原昌義傳命敬親父子來江戶受處分又命五藩護送五卿尋命淺野脇坂伊達加藤四氏諭敬親父子應召慶勝聞是事駭曰防長士民世蒙國恩豈袖手傍觀其主就擒乎是命一下則防長致死於此國家禍亂不知所底止淺野脇坂以下亦辭命藤堂氏上書幕府曰方今急務在正名分施恩德正名分在尊崇天朝幕府尊崇天

尊攘記事

卷之七

八

一橋氏問長人謀不容易何事一橋氏謝曰臣在京師不與此議慶勝深懷憂懼使弟茂德辭前軍總督且告幕府曰臣往奉西討之命深恐軍鋒不振以瀆幕威幸憑天朝幕府之靈兵不血刃敬親父子伏罪今未有所處分俄出再征之師臣竊恐天下大亂在此一舉也今大兵所以為名則曰謀不容易彼果謀不軌何不揚其虐跡暴白于天下不容易三字恐不足服天下之心幕吏固不悅慶勝之班軍以為此設異同自為分鮮肥後岡山越前諸藩亦持不可曰罪一匹夫猶不可無名况討一大諸侯乎若夫激徒騷擾宜命藩主及支藩討平藩力不足則出軍助之若激徒勢盛擁藩主抗大命則宜鳴抗上之罪使天下征討今以不服之兵討不明之罪彼將闔藩憤激致死於我臣竊為幕府寒心皆不省五月十六日將軍率大兵發江戶紀伊氏將後軍并伊柳原二氏為前軍他侯伯皆隸中軍二十二日入朝賜對詔贈其祖秀忠家光神號辭曰征長功成而後拜寵命關白奉旨問再討故將軍對曰敬親既伏罪而激徒私圖非舉結外人購兵器為罪不細關白傳旨曰兵凶器不可輕用宜駐大坂先糾其罪而後從事家茂請筆記以賜關白手草曰動兵國家大事長防罪狀未明宜駐牙大坂悉眾議擬至當處分以請天裁閣老觀之

重野曰幕府失細天下所藉口今又起論其無名則也



河野曰：私船海外  
賣賣，應買以此  
把國法，不若  
使外人其說，則下  
憂無解，事與外  
人如虎，故無由可

尊攘紀事

卷之七

愕然。與諸卿論爭徹夜。家茂會諸老二條城大議。二  
十四日赴大坂。一橋會津二氏西下。議是事。長入聞  
將軍大舉遣吉川經幹就藝藩訴情事。曰：寡君父子  
伏罪以後。上下謹慎。以待天裁。惟小臣居間。壅蔽舉  
國憤懣。一時擾亂。而敬親父子親諭。今已鎮定。今也  
幕府誣寡君通外夷謀。不容易。如謀不軌者。事至今  
日。吞冤而死。無太所恨。但通外夷謀。不軌一語。關係  
國體。流醜萬世。臣子之不可忍。者。願究是言所由出  
以雪寡君之冤。藝人曰：雖吾藩亦不審其故。蓋諸購  
銃砲外國。再修山口城。與外人往來也。曰：購銃砲非  
敬親父子所與知。其在山口城。鳳激徒再起也。與外

人往來。無根之浮說。藝藩陳狀幕府。會荷艦泊馬關。  
長人詰其告藩人通外國之狀。荷人曰：休戰後。貴藩  
士人二人來橫濱。謝和成。因有是言。將軍再征。由小  
倉藩告外舶。屢往來馬關。長人遺書小倉藩。詰之。小  
倉藩具狀幕府。曰：長藩責臣以荷人之言。請聞其詳。  
追閣老松前氏。松前氏怒。無禮却之。監察塚原氏在  
小倉。以是言出。宇和島藩與書詰所由。宇和島藩曰：  
藩士告世間所傳風說。吉川氏非有他所據。將軍已  
受朝諭。議曰：先召支族。糾其修戎備。親洋人二項。然  
後進軍。一橋會津二氏入奏。朝廷可之。七月召毛利  
元閭。吉川經幹。藝藩傳幕命。長入遣藩宰穴戶備前

本原曰：長入等為  
遷延。特外使幕軍  
疲。疲。疲。疲。疲。  
備日。備。備。備。備。  
有謀也。

尊攘紀事

卷之七

致二氏乞延期之書。且曰：獎藩非敢拒命。惟不知再  
討何故。去年總督檢三謀臣首級。察其無他。班軍後  
國內雖小擾。藩人私闢。固不足煩大討。今又召元閭  
經幹。士民益惑。請辭是疑。而後就召。不然則國人  
不服。擾亂益甚。藝藩陳狀幕府。斥之。更命曰：元閭經幹  
病。則毛利元周若元絕。來大坂受命。以九月廿七日  
為期。曰：過期有所屬。長藩請緩期。如前。藝藩野村帶  
刀諭曰：幕府旨在寬典。勸之應召。其人曰：未知幕府  
所寬何如。嚮戮三字。以謝犯闕之罪。而今將軍再舉。  
此以前罰為未當也。請聞幕旨所在。而後就召。帶刀  
至大坂。稟幕府曰：強召恐激大變。幕議曰：梗命至此。

不可不計。進軍議決。將軍從會津一橋二氏入奏曰：  
二支藩過期日不至。請進軍。國疆問其罪。會英法軍  
艦闖入兵庫。要請開港。廷臣皆曰：暫舍征長。攘斥外  
艦。一橋氏曰：諸侯且不能制。何以制外國。如外艦以  
計長事。急諭之。彼必退去。會島津氏使大久保利通  
詣關白。第論伐長之不可。朝議又變。一橋氏艱然曰：  
昨日所決。今日忽變。今日所是。明日為非。朝廷無定  
論。臣等三人不知所為。有辭職耳。關白深恐官武自  
是睽違。諭諸卿。寢議。翌日家茂入見。勅允所請。曰：速  
竣事。奏狀。是為九月二十三日。既而外艦強請。以事  
情迫切。家茂命尾張氏上辭職表。倉皇發大坂。

河野曰幕府之未廢。今次骨。在法致人而不致於人。如藩致人者。則幕府致人者。

朝威之不行于天下也久矣。及薩長二藩入京師。天下曉然知朝廷御九五之尊。儼臨於億兆之上。至外國交際國體所關。以幕府之權將軍之威。不可得而擅之。二藩之功於朝廷也大矣。皇上之眷於二藩也殷矣。而及長藩執掃攘薩藩執開港。意見不合。為界門之變。為犯關之亂。而幕府不能自立。常為二藩所控制。列藩少有勢力者。漸不屑受幕府之制。爭朝京師。周旋國事。進退操縱之權。隱然歸朝廷。幕府惴惴焉奔走於東西內。為列藩所逼。外為英法所要。情窘勢窮。形露痕著。天下集觀。相傳嘲笑。而幕吏不之悟。聖上罷親征。譴長藩。揚

尊攘記事 卷之七

揚然曰。掃攘之不可為。果如我所論。尋長人犯關。一敗塗地。愈為得時。殊不知親征中止。長藩失勢。皆由薩人為之內也。而其擊走三宰。亦借力薩人而薩意固在。戴朝廷。其故附幕府。待其時而有為也。尾張氏之西旆。舉天下之大兵。不交一矢。一任西鄉氏所為。非特恐兵端一開。禍延宗社。當時大權固已在島津氏也。而幕吏悻悻然以為將軍親發。麾下八萬家門譜第半天下。天下無不可為也。勝算無可言。名義無所據。暴大兵於京攝之郊。半歲軍需不給。括之民間。上下困弊。進退維谷。列藩見大事已去。爭論朝廷無罪。長藩之意。幕府

本原曰。如斯論去。幕公平。太平三百年。東照氏繼。于泉下也。況幕。政權於王家乎。

任其怨而朝廷收其德。朝威日隆。輿望日傾。蓋家康臨薨。告外藩列侯曰。子孫為政。不公平則諸君代之。天下天下之天下。吾不敢私也。顧外國事興以來。幕府之失政不一而足。天下紛起論其不足。以托天下。彼薩長二氏。外藩最雄者。其交起論幕政之失。家康告外藩列侯。固如此也。而一橋會津諸氏。以抑朝威。拒雄藩。為盡力幕府。抑未達家康公天下之旨也。

開兵庫港

四國既聽毛利氏和。英公使巴亞玖氏與三公使謀

尊攘記事 卷之七

彼過我稍過。與兒孫。

曰。政府頻年多故。財用不給。若鉅抵償金額。則勢不能應償。因逼之先期開兵庫。二港以外。更開一港。充抵償。必如所欲。此一舉兩得者。乃合議逼政府曰。納二百萬金。以償長人砲擊之罪。出一百萬金。以償政府失職之罪。私外國奉行竹本氏曰。若政府不能償。則先期開兵庫。四港以外。更開一港。以充其半額。竹本氏因與水野諏訪二老謀曰。乘此勢大。舉問毛利氏犯關之罪。防長二州唯意所欲為。因開馬關。以充償額。則易與也。復各公使曰。二百萬金。非一藩侯所能辦。政府宜代償。更就內海開一港。以充百萬金。馬氏欣然曰。外人固不利償金。貴國能待外人以誠實。

三百萬金。無一所可存。計之二日之下。此輩將以何立。

不勝事情。此是  
意。不知然否。

彼此人民幸福無甚焉。請以是告本國政府取裁。期  
十八月爲完償之期。既而尾張氏班軍。諸老以爲彼  
既服罪。此機不可失。阿部松平二氏率槍銃隊西上。  
擬張兵威。威劫關白以下。而後逼朝廷。開兵庫二氏  
相踵入京。朝廷察異圖。禁募兵異裝。徘徊輦下。詰二  
氏來故。二氏默然。乃責曰。嚮詔將軍入朝。議毛利氏  
處分。遲延至今。日。非忽朝命而何也。二人不知所答。  
阿部氏曰。臣請東下。促將軍入朝。乃付勅書東歸。松  
平氏亦託辭防禦攝海。率銃隊赴大坂。先是會津氏  
發使促將軍上京。且說毛利氏服罪之無實。會得長  
人通外國。及暴徒再起之狀。伐長論起。語見前。九月

尊攘記事

卷之七

十三

河野曰。英法諸大  
洋。已氏在北。東條

英政府命巴氏曰。以開兵庫港。減海關稅。日本皇帝  
批准現行條約。三事。充償金三分二。巴氏與三國公  
使議曰。今也將軍在大坂。乘此機擁軍艦赴兵庫。要  
請三事。若將軍阻之。則直逼京師。謁皇帝。請批准事  
可立定。三公使以巴氏盛用事。不敢拒。乃告狀政府。  
老中大驚。急命外國奉行山口監察小笠原二人西  
上。大老酒井氏猶不自安。尋遣松平宗秀西上。十七  
日四公使率軍艦九艘入兵庫港。巴氏率三艘入大  
坂灣。會將軍上京奏進兵。監察永井氏乘艦問來意。  
巴氏曰。見阿部松平二氏達國命。二氏皆從將軍在  
京。巴氏稱國命不敢退。將軍聞警倉皇歸大坂。遣阿

中。和泉實業將進  
在北。京兵火。清帝  
北。道實。所入之。議  
也。彼。與。中。國。已。無  
日本國。

部氏至英艦。四公使要三事曰。決答限七日。過期則  
嚴兵入京。親見皇帝。請是事。將軍不知所爲。急召一  
橋會津二氏。二氏大驚。遣阿部立花二氏拒之。巴氏  
抗論不屈。二氏往復七日。期逼。請更緩七日。巴氏督  
促日急。一日。四方洩聞。人心頗動。大原重德上疏曰。  
醜虜逼近。畿轉禍爲福。今日之事。爲好機會。宜選藩  
士有大畧者。任折衝之責。以大義說諭。彼若不聽。則  
下命防禦。諸藩殲滅之。耀神州威武。是時爲然。諸藩  
士皆曰。彼擁軍艦逼近。畿。以暴威要朝廷。侮蔑至此。  
有戰而已。相率至大坂城。與諸曹論爭曰。彼不肯從  
我所論。則諸藩盡死力。禦之京郊外。薩因備諸藩以

尊攘記事

卷之七

十四

安達曰。情事。集到  
議論。由。是。當。時。乎。

爲閣老已許開港。請誅幕吏主是謀者。朝廷恐其激  
變。命將軍阿部松平二老。麾下土扈將軍者。相傳  
失色。將軍召尾紀二侯以下議之。衆論鼎沸。皆曰。閣  
老將軍腹心。黜陟與奪。一皆仰朝旨。是無幕府也。且  
外而防長征討。內而外國要請。而將軍總大政。不得  
行其職。不若速讓軍職一橋氏。表不敢負朝廷之誠。  
家茂凄然曰。寡人年少膺大任。前政後奄至此。極避  
職讓賢。固其當。乃黜二閣老。命監察向山一履草辭  
表。左右嗚咽。無敢仰視者。表凡二通。一請讓將軍職。  
一論外國交際。不可失信。曰。臣家茂謹察宇內大勢。  
萬國互結條約。通貿易。此風氣一變。天時令然者。勢



傳此書心以不若於其所以請天下其言則一發誠實非偽然也

不可拒絕也。而皇國固執舊法。拒外交。殆如恆怯畏避者。然非所以尊國體也。故米使來浦賀。先臣家定量時。勢計和親。上奏請允。而聖詔責臣以拒絕。臣率群下從事掃攘。而聖諭禁其妄開戰端。臣亦以爲國本不立。則廣懲之典不可舉。故專與物產貿易之利。以富民產。開器械諸技術。以利民用。造堅艦大砲。以脩武備。將待國本立而後從事掃攘。以耀皇威於海外也。臣今夏以來。留牙大坂。議防長處分。曷圖夷舶入兵庫。逼請勅準條約。臣命諸臣諭其不可。彼強請不聽。切恐一朝開戰。百萬靡爛。宗社危急。上悖陛下覆育億兆之仁德。下乖賤臣受托宗社之職任。伏望

尊攘記事 卷之七

五

河野曰。此以辭職要請。名義。出於人得已。亦急矣。

傳此書心以不若於其所以請天下其言則一發誠實非偽然也

陛下運英斷下聖詔。允準各國條約。如此則臣雖不肖。外修制馭外國之實備。內立蕩平叛亂之實功。以對歷世寵眷之恩。曩四國使臣要請此事。臣使諸臣力諭待朝命於兵庫。刻七日爲期。請速賜宸裁。特命族德川茂德入朝奉表。翌日倉皇發大坂東下。左右錯愕。飲泣追及。一橋會津二氏大驚。要之伏水。諭待朝報不聽。反覆強留。二人入朝狀。請勅允。廷議紛然。論連二晝夜。至六日始決。勅允三港條約。不一語及兵庫。閣老松平奉行山口二氏至英艦傳勅。巴氏艱然取勅書投地曰。不許兵庫違所約也。聞皇帝權重將軍。吾且往見皇帝。逼請是事。二人曰。將軍百方力

佐田曰。余此時在獄。聞三港和約。

尊攘記事 卷之七

六

聖上所以爲天朝。深誠不欺。自問天之威私。草書曰。幸玉露。

請始得三港勅準。皇帝深慮國人持異議。故不及兵庫而已。巴氏不答。山口氏固知法公使異論。乃往說法公使曰。開兵庫蓋非貴國之意。今也將軍出征未功。大藩窺隙。加之各國軍艦來要。危急亦甚。請諒照情事。爲將軍說。英公使退軍艦橫濱。與諸老熟議此事。公使曰。余固悉政府情事。唯巴氏意既決。不可復說。已而抵掌曰。卿作閣老連署書付僕。請爲諸君說。英公使二人草松平小笠原以下連署書曰。現行條約政府所結。非朝廷之所允。將軍反覆固請。始得勅允。若夫減關稅。百分五。先期開兵庫。以此二項充馬關償金。固政府所諾。江戶諸老熟議。而後允諸公所

本原曰諸事動車  
大將斷外人之體

尊攘記事

卷之七

十七

巴氏實為此際江  
已嚴裁本國故因  
執不可如法亦因  
以三百萬為過額  
開米政府已有定  
反此金銀議

贈閣老連署書。政府所不與知。請反本書。法公使曰。兵庫果不可開。則別開一港。二氏乃遺書四公使曰。諸公常曰。使我別開一港。益盛貿易。則勝得償金。予也。朝廷勅允條約。此厚交際盛貿易之基也。得此勅。非特開一港之比。既勅允三港。不出數年。各港隨開。此一事固足以抵馬關償金二分之一。請致此意本國政府。諸公使皆以得勅允減貨稅二項為足。英公使持不可。曰。非先期開兵庫。則金額不可得。而減朝廷命收連署書。水野氏以英使固執書。曰。請曰。已拒兵庫。無已。則開他港代之。板倉小笠原二閣老不聽。但曰。彼若欲再逼攝海。則當有別所處。至此栗本從

最曰連條約。其  
之萬國公法。其  
罪然公法行。諸國  
而不行。諸國利大  
國而不利。小國彼  
見利忘義。區區條  
約何足道。

尊攘記事

卷之七

十八

本原曰。方今少年  
輩。學洋學。嗜義  
攘夷。一字為宗。  
此論實為頂門一  
針。

胞亦可也。是以宇內各國往來。有無貿易。互講交際。此天地自然之理。而宇內各國大小不一。強弱不同。勢不能不生兼并凌奪之弊。於是。有條約以堅其交際。條約一結。則大不能以兼小。強不能以凌弱。重信尚義。永矢不諉。苟或違之。則覆亡不旋踵。臣故曰。隣國不可失信。條約不可中變。今也。皇朝交通外國。取長補短。大講富強之術。既開三港。獨於兵庫一港。未允彼約。失信各國。貽禍無窮。進不足以示威。退不足以自守。臣竊為非皇國長策。仰望陛下。明鑒古今之變。洞察萬國之勢。尚信重義。從既許之條約。特勅允兵庫準三港。益立富強之基。大開進取之畧。如斯則河海之量。覆載之德。可以鎮服宇內。耀皇威於千萬里之外也。朝議不敢輕決。乃詔各藩熟議。整因備三藩固執不可。他皆可之。廷議從衆。勅四國允。本年十二月。開兵庫如約。後改期明年三月。自幕府與四國結條約。十八年於此。至此奏請。再次。遂勅允條約。開四港。世追論是事者。或曰。先帝不諳外國事情。以攘夷二字率天下。天下大亂。殆危宗社矣。噫。為是論者。不特不可與論我邦立國大體。又不察今日之所以致維新之大業也。蓋我邦創國以來。未曾為外國所凌辱。其為源為平。為北條氏。皆失於此。而得于彼。一興一敗。未足為得

失也。唯事涉外國。國體屈伸所關。故必安於蒙古。慶長於朝鮮。致全國死力於此。未嘗取辱外國。此我肇國以來。所以稱雄東洋也。彼英米於我。何有悍然擁軍艦。威政府。曰。不許。吾所請。則有戰而已。顧幕府之所以世任征夷之職。率三百牧伯奉事朝廷者。固將盡天下之力。征服海皇國者也。而幕府不能盡其職。許彼請於一呵喝之下。以堂堂獨立國。辱國體如斯。四方萬國。其謂之何。此先帝之所以誓天地。以掃攘大義也。而竟不察於此。徒曰。先帝不諳外國事情。豈可。顧先帝以掃攘大義。誓上下神祇。故聖訓之所風動。威怒之所激

尊攘記事

卷之七

十九

發四方奮起。大平文具。不令而除。遊惰士風。不矯而改。俊偉魁傑之才。不擢而用。讒佞橫邪之徒。不懲而伏。八百年僭亂國體。不釐而正。三百藩戶位素餐。不變而革。不經一再紀將軍。自知不副輿望。追悔祖宗私朝權。俯伏階下。奉還大政。此皆由先帝以掃攘大義。誓上下神祇也。嗚呼。當堀田井伊諸人逼請勅許通商條約之時。使先帝少自貶下。允其所請。則雖有文武大略如烈公。盡國力勤王事。如毛利氏健馬壯士。挫強英於一擊之下。如島津氏奔走四方。鼓舞志士。振作義氣。如百千浮浪者。亦無由獻其丹誠而効其忠節。彼彼為思。是者

河野曰。此尊攘二字之頭腦。故略極論不少留餘力。

尊攘記事

卷之七

二十

視我無能。威我以大艦大砲。嗚呼。我以甘言好辭。其所以凌轢我者。何所不至。法之於安南。英之於印度。殷鑒不遠。真不可寒心乎。故余曰。世為此論者。不特不可與論我立國大體。不察今日之所以致維新大業也。

尊攘紀事卷七終



尊攘紀事卷八

宮城縣 岡千仞振衣撰

幕軍敗潰

河野曰。開後令。無窮不見。此。事以文書。不問。

幕府之召毛利元周毛利元純。期九月廿七日。請緩期日。不聽。井原主計穴戶備後介代二氏赴大坂途。聞外艦逼兵庫將軍上辭表還。既而幕府遣監察永井尚志抵廣島。召見井原穴戶。詰問曰。敬親父子仍在山口。忽幕命也。二人曰。敬親父子深恐激徒再起。重罪幕府。故不敢去山口。曰。嚮命毀山口。今加修築。置武器何故。曰。有司爲藩主假構屋舍。世或傳爲加修築置武器。爾曰英艦泊下關。藩人欲接何故。曰。藩

尊攘紀事

卷之八

士固警視外夷。唯恐彼啓釁。故給薪水順適彼意也。曰。賣瀛艦外人多購銃砲。何也。曰。此外間誣罔聞村田藏六輩竊賣廢艦。非敬親父子之所預知。曰。支族遷延不奉幕命。何故。曰。彼多蓄臣卒。聞武田藤田以下處斬。恐其主亦如斯。族擁不敢出。本藩亦無如之何。尚志以其言不足疑。遣二人。二人不敢去。曰。必得答辭。而後去。尚志復命。一橋會津二氏曰。如是坐爲彼所欺也。板倉小笠原二老爭曰。兵氣不振。不如因彼所分疏。寬容其罪。一橋會津固執不可。諸家茂曰。敬親父子雖陽唱恭順。陰懷異圖。聞穴戶備後其實山縣半藏冒門姓稱藩宰。其反覆欺罔。槩皆類此。且

本原曰。幕府。第。至。此。代。亦。已。不。伐。亦。亡。唯。亡。有。遺。遺。而已。

觀其答辭。陰矜藩主之勞。揚幕府之過。伏罪之實安在。唯彼口唱伏罪。未可直致討伐。且遣閣老臨彼疆。召敬親父子。究詰情僞。明著順逆。而後處分其罪。若不奉命。則大兵衝巢窟。誅贊父子爲虐者。不然。則彼狃我恩。侮我武。他日公然入京。誑惑搢紳。交結浪徒。雖悔莫及。況今再動大兵。撲殺終局。縱令防長歸無事。奈幕威掃地何。願殿下熟圖莫遺。悔他日往復連日。議始決。慶應二年正月。小笠原松平二閣老入朝。上奏防長處分。曰。廢敬親父子。令孫興九承後。削封土十萬石。絕三宰之祀。檻致高杉桂山形以下。閱白傳旨曰。上深嘉毛利氏之世勲。宜至當處分以加仁

尊攘紀事

卷之八

此。場。動。人。心。之。策。其。言。之。行。合。固。不。問。也。

恩。二老固爭。因改曰。上思毛利氏先世之舊功。宜速平定國內。以安宸襟。至處分方法。宜如所奏。大久保利通詣近衛氏。論處分過刻。至此更擬撰副勅。上近衛氏曰。已可所奏。唯方今內外多事。深勞。敬慮。若事涉粗暴。恐爲屬陷。宜至當處分。使人心悅服。則封土亦宜收瘠地。莫使民心激動。近衛氏示之廷臣。衆多興之。長人泄聞幕議。與書藝藩藩曰。如聞幕府罰弊藩以三條。果如此。則曩日穴戶備後就永井氏所詰。分疏藩情。未足以解幕府之疑。歟。輦下暴動。藩主父子所不關。唯不能訓戒三臣於未舉事之前。實不追其罪。故尾張總督之臨疆。謹戮三臣。及與其謀者以謝。

安達曰。有此甚久。故牧諸子。千載有生。氣。卒不為徒死也。

爾來屏居思愆三年於今日。夜延頸望恩命之下。區區誠衷。猶不為幕府所察。將因何人訴冤乎。抑三臣暴舉。源幕府之不奉詔旨。幕府已奉詔旨。須告掃攘期日。故弊藩砲擊外艦。而幕府以是罪弊藩。弊藩為公武奔走。不為不力矣。若使幕府奉朝命。攘外夷。則固無致此暴舉也。幕府不察暴舉所源。唯未節之問。不特非忠恕待人之旨。朝廷寬大聖旨。恐不如此也。二月小笠原松平二氏督軍務。置牙營于廣島。召敬親父子不至。召三支藩亦不至。長行曰。已經朝裁。彼不奉命。則直進大兵。遣歸井原穴戶二人曰。幕府有所命。召敬親父子及孫興丸。期四月廿一日不至。

尊攘記事

卷之八

川島曰。至此猶為此言。其迂亦甚矣。

則別有處分。分遣軍監各藩營。戒嚴待期。蓋藩固知軍無功。遣世子茂勲東上。說將軍。已發。長行驚以幕命追止。命藩宰辻將曹代往。已至。會桑藩士爭迎。問狀。將曹曰。防長激徒。日得氣勢。怒氣如火。今下嚴命。開兵端。各藩兵士暴露客土。日夜思歸。日愈疲弊。此未戰而勝。敗已判者。不如止干戈。以保無事。諸士憤然曰。舉天下之兵以討一藩侯。何謂無勝算。將曹造城請見閣老。監察代見。乃呈藩主書。且說以止軍。一橋會津二氏不聽。且懼浮言動朝議。入奏曰。事至今日。朝議一動。則天下自此大亂。關白慰諭曰。吾在誓不變朝議。長行怒。藝藩忽幕旨。命鋼將曹。藩人不服。

本原曰。薩人為寇。為龍變。化百出。此以當時。人。會始出此書。殆與范蠡。越。同手段。

交起論長行之專。不止。茂勲恐生事。親見諭止。薩人屢論毛利氏處分。至此上書幕府曰。防長處分。關天下之興廢。最者尾張總督。納其謝罪。下令班兵。而幕府再動干戈。天下皆不知出兵何名。且朝議處以寬典。幕府輒曰。削其封土。朝議待以舊恩。幕府輒曰。廢其父子。四方相傳。非幕府所為。夫征伐國家之大事。弊藩義不能出無名之師。敢告板倉氏。召見大久保利通。百方說諭。利通更數幕府失體。論爭不屈。板倉氏召藩宰島津伊勢。病辭。幕府元因島津氏抗毛利氏至此始知為其所賣。四月廿一日。期至。穴戶備後捐取素彦。與支藩使臣抵廣島。復曰。敬親父子以下。

尊攘記事

卷之八

病不能應召。命賤臣二人代受幕命。五月朔日。小笠原氏將傳幕命。召二人皆病辭不至。乃召三支藩使臣。傳幕命曰。敬親父子統御失道。肆宰臣干戈犯闕。罪宜服嚴典。嚮戮三宰及與其謀者。表誠故枉嚴典。削封十萬石。廢敬親父子。使孫興丸食二十六萬石。檻致高杉桂小田村以下十三人。若不肯奉命。則三道進兵以問其罪。三人皆曰。宗藩使臣。備後在臣等不敢奉命。長行曰。汝致命。汝主汝主致之。宗家三人曰。臣料宗藩臣民不奉是命。臣輩不顧事體。安奉嚴命。此窘臣上也。請待備後病瘥。長行趣之。遣去。執穴戶。捐取二人。鋼之藝藩。尋三支藩書。請曰。防長士民。



川島曰使命諸將  
者出彼先

尊攘記事

河野曰幕軍與  
朱櫻若其不撤  
且恐軍決

聞嚴命新下號呼道路迫臣等請寬敬親父子罪臣等欲傳嚴命恐立致擾亂願寬嚴命長行却之閣老松平宗秀副德川茂承督藝石兩道軍務小笠原氏抵小倉總西海軍務少老京極高富總南海軍務阿波藩不敢出兵曰少老職掌麾下士不可令列藩諸軍高富默然宗秀命藝藩進兵托事辭先鋒六月八日幕海軍與松山藩兵夾攻大島土兵棄糧仗而遁林半七將一隊出禦設伏挑戰松山兵乘勝追北中道逢伏其將佐久間一學死之期幕軍不至遂乘艦走嚴島十四日拂曉彦根高田藩兵與幕海軍攻岩國長人邀擊砲戰別伏一隊火村落絕歸路幕海軍失期不至二藩兵腹背受敵死傷無算走出海岸兩侯乘漕船僅遁餘兵走小瀨彈藥糧仗皆為敵所獲十六日長人分道入石見津和野藩不戰而走一隊抵高津福山藩兵邀擊長人引退翌日濱田藩兵抵萬福寺防戰福山兵來援長兵用施條銃利鈍不敵乃棄銃短兵接戰長兵隱樹陰踞山巔發砲狙擊二藩力拒監軍三枝刑部死之請援紀藩不至退保濱田十九日長人踰四十八坂攻大野幕兵與越前紀伊藩兵逆擊却之廿五日長人再攻紀宰水野氏防戰其苦幕兵與大垣藩出援退之二道兵勢日屈告急廣島至此穴戶氏語護卒曰藩主決無抗幕軍之

宗秀庸愚雖此一  
事可知也且是當  
極氣如失之長兵  
其敗藩無足怪也

尊攘記事

源離尾羽此真  
高月候

意今日之事皆中間梗命者之為宗秀聞之以為可用也召見問故穴戶說激徒誤國巔末且曰臣能說藩主奉幕命宗秀大悅陰釋歸之令諸藩停進軍紀侯大怒書告將軍曰茂承不自量叨當總督重寄而宗秀進退各軍不與臣議至以獨斷放重囚總督有名而無實請解本任宗秀亦辨曰防長未可力爭故臣授旨備後放還之意謂事成則與總督以下共其功事不成則總督以下皆辱其職也此臣之所以不顧專斷之罪也今也西南諸道藩兵未集而薩藩陰鼓動長人諸藩兵槩皆和銃而長人農兵屠兒亦皆用施條銃勢力懸絕無一勝算若借法國軍艦二三十艘或有可克不然則有用說客而已將軍慰諭茂承召還宗秀疏職已而備後致書藝藩曰僕代藩主使于幕軍哀訴國情不蒙聽納無復顏視二州人士宮津侯以大事囑僕僕代藩主使于幕軍固不能奉侯意說藩主請致此意宮津侯眾相傳為笑柄長人入石州者席卷而進因幡出雲福山三藩兵皆退保濱田紀宰安藤忠祐戰于周布村敗走濱田藩拒而不容長人得勢日愈強盛濱田藩見各藩不競長人旦暮薄城下遣重臣請緩進軍不可會藩主松平武聰病篤夜為左右所扶乘舟而遁夫人堀田氏誓與城俱斃侍女強擁而出火城走出雲松平慶倫

三令五申。愈足以  
取敵情而已。

以封土危不告退兵。茂承召各藩將校曰。我軍每戰  
誤機賊勢猖獗。人懷危疑。寡人將死戰以鼓士氣。諸  
君悉此意。又諭幕軍曰。幕府興亡在此。戰卿等應  
奮勇爲諸藩標準。部署已定。廿八日與幕軍及彦根  
高田明石三藩兵。海陸並進攻大野。長兵當二道之  
衝。逆戰互有死傷。及暮交綏。晦日進取大野。八月二  
日再攻。長兵分隊拒戰。紀兵力戰自朝至晡。互有勝  
敗。幕軍自島村進入玖波。頻奪二壘。長人據第三壘。  
防戰至夜。幕軍無後繼。彈藥已盡。放火收兵。七日長  
人肩曉襲大野。紀兵與幕軍夾擊走之。一隊自宮內  
衝高田藩營。狼狽出走。彦根兵亦不支而走。紀兵以

尊攘記事 卷之八

七

本原。長人初戰  
處雖以乘隙得  
戰。故日愈。而  
諸藩兵未嘗日  
破此。以不敵。其  
勝之者。其  
地不特爲幕軍

敵取宮內。窺大野之背。命彦根高田藩往援。二藩戎  
具不給。遣幕兵二小隊自海路迎歸。舟狹不容。餘兵  
徑海岸而退。茂承連戰失機。乃會各藩兵曰。寡人以  
年少非才。叨任總督。指揮失機。軍鋒不競。石州已陷。  
進退之決在今日。爲之如何。榊原政敬曰。諸道兵衆  
未會。蓋窺將軍舉動也。臣屢遣人請進大櫛。如聞將  
軍病日重。人心危懼。宜量情勢以退大兵。藝藩亦聞  
將軍大故。遣使長藩。請退兵境上。長人曰。貴藩果說  
幕府班師。則不蹂躪貴境。乃限玖波爲疆。發使出雲  
藩。責以大義。藩人曰。將軍出征。寡君以死諫止。不敢  
敵貴藩。使者曰。徒言不足以爲證。乃書寫其言付使

我邦海國。而有陸  
戰。無海戰。此歐米  
人所以見爲兒戲。  
此役以軍艦馳逐  
海上。大快人意。

尊攘記事 卷之八

八

者。小笠原氏抵小倉。諸藩兵未會。六月十七日長軍  
艦五艘乘朝霧砲擊門司田浦。小倉隊將鳴村志津  
馬鼓舞守兵奮鬪。擊破一艦。長人上岸步鬪。軍艦發  
砲爲之聲勢。守兵不支。間道走大里。小倉危急。會肥  
後久留米藩兵至。長行命二藩守大里。小倉人稍安。  
七月三日長人小舟架巨砲。乘曉霧薄擊富士艦。一  
隊據弟子松砲臺。砲擊大里。伏兵門司襲其背。小倉  
兵退築障壁。殊死防戰。富士迅動鳳翔三艦發砲助  
勢。長三艦格鬪。勢不相下。入夜交綏。勵士養銳。翌日  
長艦砲擊大里。乘勢上岸。守兵已逃。長驅直入新町  
火民家。肥後小倉兵邀擊之。赤坂八町坂。富士回天

宗秀致四。長行舟  
道是。諸藩軍連敗  
盡死力。

二艦發砲爲聲勢。長人殊死奮鬪。肥後兵善禦。獲三  
十八級。長人遂退。回天艦進衝赤馬關砲臺。大砲烈  
戰。遂不能克。廿八日長人再攻。肥後兵僵樹塞路。清  
野以待。長兵不能逼。小笠原氏誚其擅伐樹木。肥後  
兵怒曰。諸藩傍觀不戰。我獨當敵。衝伐樹塞路。固戰  
畧之所爲。何可誚之。有。各藩亦怒。長行輕舉失機。不  
敢盡力防禦。晦日肥後不告撤兵。久留米柳川二藩  
相踵而去。長行不能獨留。率屬兵駕富士艦走長崎。  
小倉藩火城退保香春。長人入小倉逼香春。小倉氏  
進退策窮。就薩肥護五卿者。請行成。長人曰。毀金邊  
狸山二壘。則聽所請。乃如所言。長人直據二險。分兵

安建曰：列藩不約而出于一，猶元弘末年，勤王義兵集西國起者。

尊攘記事

卷之八

九

逼香春。小倉愈窮。發使馬關請和。長人嬰曰：質世子。乃遣宰臣請哀。不可。乃令臣服束裝。書告致封上而去。長人曰：吾非附強凌弱者。豈忍旁觀隣藩君臣彷徨道途乎。召宰臣立約曰：若幕府出兵。居中諫止。不得諸藩兵次封內。企救一郡。俟他日寃白還之。初將軍得三道之敗報。令率從駕諸侯進牙于廣島。德川慶勝諫曰：諸藩疲奔命。國力不給。況今物價騰揚。窮民騷擾。一旦有變。起肘腋。何以防之。願息干戈。以救眼前之急。因藝阿三侯亦上書朝廷。請宿衛曰：天下人心不直。伐長。今也兵結寇連。近畿諸藩大半服事。軍役若浮浪無賴。發變輩下。何以防禦。況外夷四來。以窺我隙乎。臣等願入京宿衛九門。至此越前氏上京。見一橋氏論征長不可。不聽。乃上書將軍曰：長藩暴動。原由于幕府失體。今日之務。在去私心。從公議。宜召諸侯異議者。虛心聽衆議。以定國是。否則朝亡一長。夕又生一長。況英法各國虎視其後乎。請明內外本末之辨。更爲良計。不報。會兵庫大坂細民苦米貴。蜂起毀富豪屋舍。四方騷然。薩藩發兵上言朝廷曰：外夷事起以來。憂國志士棄生唱義。勤王諸藩奔走東西。不敢寧居。而幕府統御無道。忠言讜議盡屬畫餅。今也將軍屯大兵於大坂。而不能禁閭閻小民之橫行。幕府之政權已替矣。且臣之所不解者。曩日

水原曰：至此出兵公然揚言幕府之失敗。若中機此舉蓋一世者。

尊攘記事

卷之八

十

幕府聽毛利氏之謝罪。爲之解兵。今也無故再尋干戈。拘留使者。掠畧細民。不特防長二州懷憤惋。天下人心皆不服。願朝廷明日達四聰。以寬大聖旨。下需然恩命。持危扶顛。以圖中興之大業矣。會有流言。薩藩謀移鳳輦。會津氏衷甲以備市人恟恟。薩藩致書。請辨浮言。解士衆之惑。以安慰市民。閣老深虞薩命勝義邦說之義。邦曰：會人執拗惡異。不先諭會藩。則不可說薩藩。乃見容保論征長無策。且曰：方今之計。宜以寬洪大量。綏服長人。蘇息國內。退又書論曰：當今風氣日開。人智日進。而在人上者。暗于下情。迂于時務。此國事之所以日愈紛然也。今日之事。宜爲天下謀。不宜爲德川氏一家謀。爲一家。則不免偏私。爲天下。則公明正大。容保嘉之。不能從。義邦以押邪小人。當要路。徒以俗論壅蔽君相。不知國家大計。謂板倉氏曰：方今急務。在戮橫邪小人。三四輩以謝天下。幕府有何宿怨於毛利氏。而縮國命耗國力。不知自反也。聞有策借金外國以繼急乏者。果然則其亂不止。防長二州勝成默然。蓋池田長發使法國私約藉其力以張幕威也。義邦見國事日非。不勝憤憤。請歸休。不允。適聞將軍病。憂憤特甚。乃建言曰：方今亂形已成。萬一天不吊。吾君四分五裂。不可復挽。請付臣二三軍艦。直衝防長要害。得一戰相當。然後問

舊幕承運。才庸陋。有池舟一人。獨不赴。唯飯食氏爲以斯人口舌。可謂薩藩何等迂。

切當會藩公之病。

水原曰：麾下八萬海舟以外。無一人辭事者乎。噫。

此亦時機已失。故義邦決以養止戰。



侯伯意見察天下人心之所向以處分大事則不出旬月而西陲紛擾可解也不報將軍家茂患脚腫至此病勢日漸七月二十日薨遺言委慶喜征長事務慶喜銳意用兵將親將大軍繼之兵發有日會得小倉敗報知不可爲乃用越前氏言命義邦使長藩告將軍喪休兵

傳曰孔子修春秋亂臣賊子懼夫春秋托始隱公豈非以魯有亂臣賊子始干公子孫父之故耶蓋自文武創國至此四百年不特王室衰亂大小侯伯亦皆尸其位不知宗社安危生民疾苦爲何物哀公對孔子曰寡人長於深宮婦人之手未知哀

尊攘記事 卷之八

未知樂夫不知哀樂爲何物以是位侯伯之尊衆庶之上此賞罰之所以顛倒亂臣賊子之所以紛起而孔子寓王法於二百四十二年實有故也顧德川氏創封建之制二百年於此不特幕府政綱紊亂威德日衰列侯尸位門族曠職無一異春秋末世也余猶及幕府末運大小侯伯族輿馬飾鹵簿呼號道路互以資格相加望之儼然如神就之溫然如春而問其爲人哀公所謂寡人長於深宮婦人之手未知哀未知樂者而其世卿大夫爲衆庶所推者亦皆擁臣族宏門第務爲深深穆穆金穀出入官僚黜陟尺寸以上皆使吏曹議例格以

非及當時者不知此論之妙

土草木偶四字寫盡當時情切實

尊攘記事 卷之八

行此以家國安危生民疾苦委之士草木偶也夫天下活物豈土草木偶所能御乎士子春余始游江戶翌年米國軍艦入浦賀將軍家慶已病聞急報大驚愈危篤遂不起是秋家定拜將軍勅使奉宣辭東下列藩群侯盛儀入賀儀從雲從輿馬如龍大城內外無立錐之地余觀是盛儀以爲幕府威權赫耀臣服海內如此天下何爲而不可成翌年米艦再度目其營議紛紜諸司狼狽列藩群侯束手茫然無一所爲心竊恠焉蓋天下活物固不可以土草木偶爲之也爾來變故百出海內鼎沸而觀有傑然者出爲天下之用無一非寒素書生

河野曰以春秋爲反影描寫幕府末運一實際至此點出曹氏全篇活動何等妙絕

嘗盡人間甘酸者而若水戶氏若薩長氏周旋朝幕鼓動列藩翼贊維新之盛業者亦皆由其藩重文學破資格登用寒素書生與之謀家國大事也嗟乎余於是愈知春秋二百四十二年間亂臣賊子之紛然交起爲晉楚交霸爲戰國七雄至暴秦坑儒焚書而後已者皆由封建爲弊大小侯伯世卿大夫徒矜閥閱傲然據人上也曹劌謂桓公曰肉食者鄙矣識者固已知其弊之所在也而我邦始之以先帝之剛果承之以今上之嚴聖廢幕府改封建之制大小侯伯爲華族門閥世族爲士族自幕府失德亂勢始兆未經二紀天下貼然人安

本原曰：漢書曰：秦之焚書坑儒而後已者，幸由先帝赫怒，救大亂於始兆之日也。

無事。然則我之不至如亂賊紛起，輾轉喪亂，至暴秦之焚書坑儒而後已者，幸由先帝赫怒，救大亂於始兆之日也。

### 先帝崩御，勅毛利氏休兵。

將軍家茂已薨，板倉勝成與會桑二氏，請朝廷傳統慶喜。慶喜辭，關白苦諭，乃入嗣宗統，讓將軍職不拜。越前氏說之曰：閣下承宗辭軍職，兵權無所歸，請以之稟朝廷，解防長之兵，則閣下辭軍職之實，暴白于天下。朝廷果欲委政柄如祖宗，則宜會天下諸侯聽衆議，而後拜命。防長處分亦皆付衆議，一決則閣下

### 尊攘記事

#### 卷之八

十三

此言在橋氏高策，不得泰而不能。用者，津氏之說。先人爲主也。一橋氏末路舉動，不勸平生，豈坐待尊死，後補遺其八歟。

之所以奉體朝旨，彰然著于天下。億兆之惑釋，而閣下義名立矣。慶喜不能用，是時防長備兵，天下騷然。慶喜將立軍，切挽回衰運，遷改軍制，編番士爲游擊隊，麾下食大祿者，悉編入隊伍。家臣從僕亦編爲銃隊，謗議紛然。朝廷召關白以下會議，正親町三條實愛進曰：天下大事，非微臣所能知，然而將軍即世，幕軍不振，惟有會列侯議處分耳。山階親王曰：然，今也兵連寇結，百萬靡爛，而將軍新喪，宜告大故，托喪弭兵。衆然之。召慶喜告之，慶喜銳意用兵，不可。八月八日入朝，陛辭。期十二日西發。十日夜得小倉敗報，愕然始悟軍功之不可冀。銳氣頓沮，召越前氏商議，俄

一橋氏前後所爲，明暗判然。如出一人，其意必曰：已受朝廷之力，所及死。

而後已，亦其說也。

一語已驚敵人。

### 尊攘記事

#### 卷之八

十四

尤得大體。

令停出征。十六日入奏曰：臣暗時機，叨膺大任，前日陸辭將除梗，命者以耀天威。今聞小倉失守，諸藩歛兵，願朝廷急召列侯以議防長處分，乃命勝義邦告將軍喪于毛利氏。且諭停兵，義邦馳抵廣島，告使命。吉川氏請稟宗藩以答義邦曰：從前使命往復，皆介藝藩，故彼此情實互不相悉。今單身入貴境，將面見諸君親達一橋氏之旨，僕固分百死。若蒙暴徒殺害，不敢以是歸罪貴藩。長藩遣廣澤兵助出接，義邦執禮甚恭，告將軍新喪及一橋氏承宗，且曰：貴藩處分國事最急者，請退兵疆內，以待後命。兵助辨藩主之冤，義邦不敢答，唯說將軍新逝，國家多故，在今日宜鑒印度覆轍，去小怨以濟國家之難。兵助曰：我藩固不牽幕府大故，妄尋干戈，但未見大政更張，寡君雪冤之實，不敢退兵。義邦不能強，尋使藝人致朝詔曰：將軍新薨，百姓悲哀，宜姑休干戈，防長士民亦宜返其所侵掠。長藩不受曰：朝廷已鑒照我藩情，今曰侵掠恐非，勅語朝廷固諒我之無罪，今曰姑休兵，此他日再用也。我士民暴骸原野，若退一步，則無復雪主冤之期。尋幕府令撤藝石兩道諸藩兵，二十八日詔召尾紀加薩以下二十藩曰：朕將聽衆議有所處分。越前氏與書島津山內二氏趣入朝曰：一橋氏悔悟征長之非，將會侯伯議國是，辭軍職不敢入二條城。

王政復古已後  
皇親此大興  
氏以下會於京之  
日圖已論及王政  
復古之事也

佐田曰幕制大行  
後過廢七日將軍  
入朝改大制爲大  
行後過廢五日將軍  
自左大臣及將軍  
軍後過廢三日

本原曰實以尊攘  
爲名不可無此大  
手筆也二帝頃揚  
聖德極得體要

河野曰腹下下  
二十年故是年

尊攘記事

卷之八

十五

是寔千歲一時爲皇國立長策之秋也機不再至請速入朝効力國家茂承收兵至大坂移病就國上書曰慶喜承宗但未拜軍職方今外夷猖獗海內擾亂人人不知所向願率舊典正位號此非臣一人之私願實天下萬民之所欲也池田蜂須賀藤堂前田及細川澄助相踵至京十二月叙慶喜正二位補征夷大將軍是月十七日皇上患痘二十二日崩朝野悲慟且以國事日急訛言紛起四方相傳爲大變在邇命山陵奉行戶田忠至議定葬儀三年正月二十七日葬於泉山陵上謚曰孝明天皇御壽三十七年慶喜使藝藩論大喪長藩歛疆外兵還侵地長藩答曰

貴藩爲寡君盡力宜奉朝諭撤兵還地至豐石兩疆請埃免白之日而後撤之慶喜無如之何

先帝在位廿年至此崩御帝盛德大業非卑賤如臣者所能窺知唯就其德澤光被于四表者而考功烈之原于一德者猶有窺其一斑也蓋先帝剛果似後三條帝而規模之大過之英邁似後醍醐帝而度量之宏過之夫後三條帝抑諸藤令攝錄以下屏息就我者實由剛果有餘也而不能使之中心悅服改其驕橫中道崩殂諸藤相慶轉相彼狃此猶有所憾于規模之不大也後醍醐帝奮冒大難蒙塵山野播遷海島遂能鼓舞海內義氣僵

立論正大體辭炳

尊攘記事

卷之八

十六

九世蟠結北條氏於一擊之下非英邁之主而能之乎而復祚未幾孽孽變童用事忠直捐棄刑賞濫施社稷安而又危天下治而又亂天步艱難偏安以亡此猶有所憾于度量之宏也夫德川氏之擅制萬非諸藤之比井伊直弼挾幼主以暴威錮三卿何異北條氏以陪臣逼朝廷乎而帝斷然以掃攘大義誓天地不少枉其志曰朕以是爲賊臣所中始可以見祖宗于地下非兼有後三條之剛果後醍醐之英邁而能毅然樹立如斯乎當島津毛利二氏翼戴朝廷勤王義士四方雲應猶能參之天時驗之人事委天下之事於一橋會津尾張越前諸氏不有敢所爲毛利氏之建白大和行幸關白鷹司氏在內主其議七卿將親兵爲之外加之浮浪有志所在響應可以有爲也而猶非其過激授旨中川親王援島津氏抗之不動干戈不驚視聽使天下大勢不借人爲自然去幕府而歸朝廷不知其所以然猶天地不言四時錯行造化無跡百物並化此非有其度量之宏規模之大與神祖神孫同符於百世之上者而能如斯乎蓋後三條後醍醐二帝所憤曰諸藤之專權也曰北條氏之擅制也若帝則曰我邦肇國未曾取辱于外國而歐米各國恃大艦巨炮凌壓我以逞其大欲

立論正大體辭炳  
環抑揚頓挫感通  
聖德政記諸論悉  
體若其後



重野曰：并舉四聖，  
歸重先朝，誠難矣。

尊攘記事

卷之八

十七

實錄：幕府得勝後，  
南先朝紀略，誠難矣。  
可先傳不此。

基礎德業之盛功烈之偉配之。三帝宗祀之千萬世固無異論也。

幕府奉還政權

河野曰：天下之事  
至此猶待數節  
以後不復贅力。

慶應丁卯正月薩肥以下連署請因大喪赦五卿一條鷲尾二卿亦請召還五卿并釋親王公卿諸以國事蒙譴者朝議可之。令幕府下命五藩送還五卿四月薩土諸藩皆論毛利氏之無可罪幕議却之。朝議以輿論之所歸命幕府寬毛利氏之罪七月幕府召毛利氏支族及吉川氏未至小松帶力西鄉隆盛赴山口見藩主父子密議合兵大舉逼幕府奉還政權

重野曰：此事出于  
小松而謂大久保  
三人授旨中井私  
三說後幕衆次即  
是時中井有改藩  
厚待後藤氏金

尊攘記事

卷之八

十六

本原曰：此書筆致  
風貌氣魄雄大誠  
論公明非此不足  
以舉動三百藩一  
變八百年舊國  
體矣幸得傳人再  
造家國余聞家  
公爲人常服其不  
九

于朝廷山內氏亦屢論政令出二途之害至此有所深考稱病發京途建白幕府曰天下之憂莫大於憂世之上噤口不言也方今朝廷幕府公卿列侯互相猜忌相目不言漂漂乎且不測夕而天下至此極罪當歸何人唯願殿下以大活眼大英斷與天下萬民同心協力立亘萬世而不墜對萬國而不愧之大規模也臣私以爲方今大計在廢幕府一變國體以至誠奉朝廷以信義接萬國因陳所見供殿下採用曰建上下議政局上局公卿列侯忠誠者爲議事官下局正義藩士公明純正者爲議事官制度法令一切萬機經聖裁決于此召歐米各國公使於兵庫港與兩局諸官會議結明確條約以表信義於同盟各國置軍局於京都大坂練海陸軍立稱雄萬國之武備議事官以公明心事處分大政不問既往與天下更始洗刷舊弊剪除枝葉參考時勢創獨立地球上之磐石基礎方今急務舍此數者無他良策若殿下以臣言爲狂暴不足採則不特臣一人所痛惜實爲天下所大息也授旨寺村後藤福岡神山四臣持書上京見慶喜說方法薩藝備前尾張宇和島五藩亦上書贊是事慶喜固知幕威日微不可以制天下遂決意作手書示親藩諸第曰保平以還權移武門下戈相踵天下塗炭我先世起參河戡定喪亂勤勞王事

至此不動其心。慶  
嘉氏常服烈公之  
刑久之復本心也。

累蒙寵眷。子孫世襲閫外之任。二百餘年。于今孤以  
非德。擢大任。舉措失當。國事日非。顧今外夷來逼。國  
步艱難。而政令不一。綱紀不立。何以維持國家。孤將  
奉還大權。政無大小。一仰宸裁。諸氏體孤斯志。協力  
外藩。保護皇基。於無窮。此孤所以報涓埃忠朝廷也。  
群下愕然。議論鼎沸。慶喜不以爲意。十月十四日上  
表辭軍職。曰。王綱解絕。天不福皇家。攝錄世私朝權。  
保平之亂。政權移武門。反亂交起。世無寧歲。臣祖家  
康蒙寵眷。拜征夷將軍。子孫世任閫職。至臣政刑失  
當。內訌外懼。日急一日。此皆臣薄德所致。况方今外  
國交際。臣一家所能總。伏請自今內外廢政。一仰

尊攘記事

卷之八

聖斷。與億兆衆庶同心協力。以保護皇土。庶幾與海  
外萬國并立。臣慶喜盡忠國家。有此事而已。謹奉  
還政權。以待後命。翌日入朝。有旨曰。汝家世襲閫職。  
總大政。今也考察宇內形勢。奉還大政。朕深嘉之。從  
今戮力諸藩。維持皇國。以安宸襟。尋詔列侯上京。令  
諸藩士議五卿處分。及待外國之法。尾張越前彥根  
安藝薩摩諸侯上京。餘皆病辭。長藩以二大隊東上  
屯西宮。詔赦敬親父子及支藩復官位如故。薩土諸  
藩私議曰。大勢將定。下而遲疑不決。坐失時機。天  
下之事未可知也。十二月八日。中山大納言日野中  
納言德大寺右近衛督岩倉中將尾張越前薩摩安

不及會衆信譽  
慶喜大敗意。

藝士佐五氏及臣僚會議殿上。議論徹曉。翌日免會。

藝士佐五氏及臣僚會議殿上。議論徹曉。翌日免會。  
桑二藩九門警衛。以薩藝土三藩兵代之。禁內六門  
晝閉。停公卿隨僕從參內。詔曰。癸卯以來。國家多難。  
先帝幽宸襟。天下所知。今也新復土政。挽回國威。庶  
政一決于公議。與天下更始。廢縉紳武冕門閥資格。  
停攝關議奏。傳奏守護職所司代諸官。更設總裁議  
定。參與三職。有栖川親王爲總裁。中山日野岩倉諸  
卿尾張越前土佐三氏爲議定。大原萬里小路長谷  
橋本諸卿及尾薩土藝越五藩士爲參與。以綜大政。  
詔曰。今日以往。大小政令。自朝廷出。四方其體是。且  
尊王之說。始于水戶氏。成於島津毛利二氏。及山

尊攘記事

卷之八

內氏建白出。列藩贊成。無敢沮之者。蓋我邦神聖  
立極。固曰。秋津洲我子孫所王。寶祚之隆。與天壤  
無窮。其變爲鎌倉氏。爲室町氏。爲群雄割據。爲封  
建列藩。皆一時英雄。因不得不然之時勢。立姑息  
治法。一切武斷。戡定亂畧者。固非神聖立國之旨  
也。水戶義公著日本史。固已寓微意於此。及外夷  
事起。烈公以尊攘爲說。豈非以國體不正。大本不  
立。不可與萬國講交際之故耶。若使幕府奉朝命。  
委烈公以天下大事。則必將有所大爲也。而太平  
日久。門閥爲俗。例格爲政。天下之權歸吏曹。吏曹  
任是責者。概皆輕儇奔競。唯利之謀。無論朝廷幕

森曰。維新大業。成  
於薩長土肥四藩。  
八人所知。此篇首  
序先帝之宸襟。水  
戶論道烈公。以此  
始要終。微闡開國  
得春秋之筆法。

以此謂閣議。蓋  
大體猶外史以總  
川氏之盛極矣。一  
句收局也。



本原曰明治維新之業成三大藩之力而水戶爲經緯長爲緯左提右挈挽回大運其榮傳矣獨水戶氏泣裂不能鼓力維新之且而首唱之功不可泯此篇首序烈公之事至此論水戶氏首唱之功以終篇三氏事蹟隆然指成經緯其始要終極爲精密如斯而後可開筆

尊攘記事

卷之八

二十一

府大小列藩皆無不然。而烈公員文武之大畧。遂爲是輩所忌。不得有爲。怏鬱以終。毛利島津二氏繼起。皆以雄藩繫名望。其國富強。其士忠勇。觀洋夷之強梁。幕政之衰替。聖上焦勞不安。寢食慨然。以挽回自任。其入京師。建白國事。固將一變國體。與天下一新。而後與萬國講交際。如今日之所爲也。而先帝以攘夷誓天地。口未嘗說和一字。蓋以爲太平三百年。非百戰以一新天下之耳目。振起國家之元氣。則不可有爲也。其頒告攘夷期日。毛利氏先天下砲擊外艦。島津氏亦憤國辱。邀英艦鹿灣。挫強鋒於彈丸雨注之下。而二藩威望日隆。兵勢日振。遂因其力。奏維新大業。蓋天下人心之戴朝廷。固非一朝一夕之故也。抑大政維新。薩長土肥四藩。以勲勞尤大。位朝班。霑榮寵。而水戶氏首唱尊攘大義。忠勇志士。竭力國事者。或觸刀鋸。或僵囹圄。流離困辱。死亡畧盡。而世談維新者。亦不甚說水戶氏何天厚于爲之終者。而薄于爲之始者乎。按烈公二十一子。一橋氏以下。冒他姓列華族者。若干人。此水戶氏所獨蓋天不容欺。烈公首唱之功。固已爲天所寵異也。

尊攘紀事卷八大終

跋

仙臺固君天爵夙有文名。歷游三都。交通海內。客秋游我下宅。到處杯酒款接。送迎如雲。而君驩然忘別。迄夜分人足。輒手刪此卷。鵲鳴不已。余竊服其精力兼人。乃謂余曰。脫稿之日。必經子一閱。而後付梓。歸京不幾。郵寄稿本俾余論定。且徵言。余謂此書体裁。擬紀事本末。保建大記等。自嘉永來使航渡。至慶應將軍還政。凡二十年間。內外機勢。天地災異。可鑒王霸隆替。卜國家妖孽者。及廷議野諫。忠莖淑慝。可供

尊攘紀事

跋

人臣勸戒。悉當時事情者。大義所係。逐次撰出。有餘而不索。目張而無漏。每篇論斷。權平衡正。褒貶不苟。與奪必慎。其言鑒乎中肯。縻近世所稀見也。曩君著米法二志。內外盛傳。清國黃公度王紫詮輩。推獎不置。此編之於二志。異撰同工。無有軒輊。然彼有隔韓之恨。而此有麻姑之快。何也。彼待譯者。以異域之人。記異代之事。鉅筆端有神。其有不盡。固其所也。此編則不然。君躬親操觚。叙近代之事。以閱歷之手。且會脫羈絆。縱橫如意。復過二志。職是之由。

尊攘紀事

跋

黃王二氏或說之。不知其擊節何如也。初君之在史局。探金匱。拾逸乘。旁搜博索。起是稿。昨秋以來。改竄數次。釐為八卷。考諸史之精。因羅之富。實為完備。世或惜其懷史之才。不能久其職。余謂不然。諸編之成。弊皆在退休後。先輩評東山潛輝曰。弱冠為水府所羅致。竭力行史。其才亦大見于世。然則出入史館。依人成事。謂文士之幸末也。嗚呼。君猶在職。晨入夜歸。掣肘牽累。久踣階轅下。則欲縱橫揮霍。自展驥足。如此。決不可得焉。其得失有不待辨者矣。若

夫叙事簡潔。議論精確。說者自識之。豈須余贅言。

明治壬午四月念日

下野

森保定撰



明治十五年二月二十二日版權免許  
明治十五年八月 出版

著述人

宮城縣士族

岡千仞

東京府芝區芝町三丁目番地寄留

出版人

東京府士族

前田圓

東京府京橋區加賀町十八番地住

發兌所

東京芝區三島町十番地

甘泉堂

同 京橋區銀坐町一丁目番地

博聞社

同 同 加賀町十八番地

鳳文館



岡千仞 著

尊攘紀事補遺

明治十七年（一八八四）東京府鳳文館刻本

據明治十七年（二八八四）  
東京府鳳文館刻本影印

鹿門岡千仞著

訂正尊攘紀事補遺

東京 鳳文館

尊攘紀事序

宮城岡君天爵強識多聞仿通鑑紀事本末之例著書以紀國故始嘉永癸丑迄慶應丁卯凡十五年四十篇命曰尊攘紀事蓋取尊王攘夷之說而名也行有年矣天爵乞予序之日本沿古封建制度諸侯建國七十有三其後分多至二百七十餘而諸侯之中又有所謂大將軍者為羣藩長天皇位雖尊然惟大將軍乃得專決國事號稱幕府文祿慶長之際德川氏秉政天皇恭己以聽虛擁神器幾三百年至嘉永中西洋英俄美先後叩關乞互市兵威強盛大將軍不能拒於是鄰藩水戶氏倡攘夷之說士夫左袒闕然一辭欲以奪將軍柄而德川氏不悟遽起大獄激怒之適以速覆亡之禍內訌外沮迫脅無聊卒乃稽顙歸政奉還大權成其為尊王之局雖曰人事實亦天運使然莫之為而為者矣私獨恠當時士大夫以尊攘為名氣銳甚既擯德川氏不用意必掃境攻戰盡反幕府所為申大義於海內乃不旋踵明治改元即舉向所攘斥者一變而悉從之而水戶之論絕不復聞推移反掌何其速也然則夷不夷亦因心之異視已耳於人國無與孔子作春秋明王道制義法諸侯用夷禮則夷之進於中國則中國之可知夷狄無定名定形褒譏予奪

尊攘紀事

一本政教而言非謂舍已以外綜地球七萬里而皆可禽擾獸畜也史記大宛列傳載安息在大宛西最為大國臨鳩水有市民商賈用車船行旁國或數千里以銀為錢錢如其王面王死輒更錢致王面焉畫革旁行為書記以證今日歐羅巴事甚明而後漢時之大秦即今意大利史稱其俗力田作多種樹蠶桑銀錢十當金錢一質直無二價國用富饒各有官曹文書置三十六將會議國事其王無常人皆簡立賢者人民長大平正有類中國故謂之大秦定遠侯班超嘗遣掾甘英往通之不能得當其時羅馬并兼歐土廣制萬里政教號令郁然可觀浸與漢

尊攘記事

家冠帶比倫矣况更千數百年間殊勢異變益務強兵并敵雜霸王假仁義以修盟會若今西國者哉是以君子鑒往矯失將善謀其國懍懍焉慎固封域舍已短益彼長不敢輕喪所守亦不欲賤簡他人以詒釁端庶幾乎保邦常道天爵著書或亦有見於是歟至其文詞健快如水溢雲涌馬逸不可止自謂必傳無疑天爵既已知之矣予又何言

大清光緒九年癸未二月遵義黎庶昌序

頃得函鹿門所著尊攘記事一讀之不覺拍案稱快歎矣蓋非生平之為快快其能之而余以言也鹿門少於余廿歲然歷觀世故則同未嘗以煇然蒙罪林不獨舊吉田藩不出城門者數年矣時吾門遊學四方或在江都或京汴年注交天下英俊士故其所目擊親聞反多於余其

尊攘記事

或於懷樓於心或怒或憂者必不少也夫幕府之未造實為天下一大變局內而多事在無生人故可為之歎可怖可哀者歷歷如指諸掌所記傍觀者不忍坐視慷慨激昂之詞力語已值其後迂愚如余亦不免禁錮信可笑也鹿門蓄其所懷恨鬱結乎當口者今舉皆洩之



於此書故其快不可言也吁余亦嘗有  
志于作一書以記當時事而未果今  
讀此編則盡知而無遺復何勞老  
後杜茅耶但其議論非無一二不滿  
吾意者然合未固多不害其為同焉  
將見見花門舉一太白加貞此書之  
成也

明治十五年九月初五日

尊攘記事

湖山小聖愿誌時年六十九

緒言

一余嚮刻尊攘紀事。以與坊間諸書紕謬錯出者。稍異其撰。傳播四方。而與及當時者。病其多遺漏。乃每得一異聞。編輯爲篇。得十六篇。乃命曰補遺。付刻問世。

一魏默深聖武紀。經三刻始爲完書。余於是書。將續續追補。至無一遺漏。而後嚴加筆削。爲完書。觀者幸指摘謬誤。或逸事可補者。私乘筆錄。可以供採輯者。賜投示實爲素望。

一此編紀米使要請。取彼理日記譯本。紀俄國蠶唐太始末。取官撰柯太概覽。紀僧月照西遁。取小河

尊攘記事

緒言

一敏手錄。紀浮浪唱義。取清川八郎潛中日記。小河一敏義舉錄。紀大和之亂。取初秋夢南山踏雲錄。紀水戶浮浪西上。取加藩館撰書。紀薩長二藩釋怨。取坂本龍馬傳。紀復古王政。取岩倉大久保二大臣行狀。其他猶有數十種。間交得于傳聞者。編爲四卷。

明治甲申五月

岡 千仞誌

訂尊攘紀事補遺目錄

卷之一

宋國使艦入浦賀

俄國使艦入長崎

約宋國開下田函館二港給欽乏物貨

卷之二

吉田佐久間二氏下獄

約俄國唐太悉仍舊貫

俄人蠶食唐太

僧月照通薩摩投海

浮浪唱義

尊攘記事

目錄

卷之三

島津久光入京奏時事

島津氏護大原卿東下

親征中止

浮浪起兵大和

卷之四

水戸浮浪遁圍西上

竹內小出使俄國論唐太疆界

坂本龍馬和薩長二藩

幕府奉還大政朝廷置三職議德川氏處分

正訂 尊攘紀事補遺卷一

宮城縣 岡千仞振衣撰

米國使艦入浦賀

森保定以香山島嶼傳之於島史此亦一戰史丁荷者何也

嘉永六年六月亞米利加合衆國軍艦四隻駛入相模浦賀鎮臺戶田氏榮遣屬吏香山中嶋二人問狀曰米國海軍督將彼理奉國書請隣交通商見重官達國命二人諭我國長崎以外禁外艦進港彼理令屬將答曰我大統領命督將奉國書使貴國不欲與位卑者交言直詣江戶見國王達使命下哨船測量海口發大砲張聲勢殺氣凜然氏榮告測量發砲爲國禁曰測量發砲米國軍律貴國安得以國禁遏我

尊攘記事

卷之一

軍律乎氏榮恐生變告曰得政府旨以復請緩進入三日乃陳狀曰彼不得所請立生大變請權受國書閣老阿部勢州會宗藩及諸曹議之議論紛然無所統一是時水戶中納言名望重天下得罪幽別邸勢州奉將軍旨親往請起參大議辭病不見苦請至夜乃出見曰力病奉台旨翌日入見與閣老及諸曹議拒絕方畧曰不一戰以折彼驕傲則國威挫屈無復可爲意甚決諸曹枉爲說曰權受國書遷延答期待戎備稍整而後戰於是受書議決令香山告曰政府重大國使命特發重官受國書浦賀禁外艦進港他日來長崎取答書彼理拂然曰米國發重使請隣交

以姑息始之以姑息終之

無礼不遜一至此

尊攘記事

卷之一

小野湖山曰當時江戶警備嚴密浦賀鎮臺亦在其間彼等欲以折辱之口實入堪痛預

非荷蘭漢土比吾不獲政府要答則有一戰而已香山曰政府發重官受國書一如所請而猶爲不足何故彼理和顏告國書授受禮式氏榮恐生事一順適彼意且令香山私曰留此待答乎彼理不敢答於是測大砲可及之地定九里濱爲兩國接見之地急築館舍晝夜督作本日會津彦根川越忍四藩嚴兵備海陸彼理進四艦距岸數町分軍隊爲二一備艦上一自隨曰彼若設詐誘我則列砲齊發殲之一擊之下駕哨船上岸艦上發祝砲校將揮白刃令軍各隊整列簇擁入館館隘遏衛兵進入不聽戶田井戶二官出迎禮揖彼理不敢答禮直就賓位二童子捧國書二壯夫介之授受儀了二官書告曰此地禁延外人政府特重大國使命屈國法延使者所請各件廟堂大議非時月所能決他日再度取答書彼理曰去此歷觀琉球廣東明春再度入江戶城見貴官陳使命受答辭氏榮曰再度之日止此四艦乎曰是行在琉球待艦隊尾來未至故止四艦氏榮問漢土兵亂不答整隊而退衆意稍安是日海陸衛兵數萬旗幟翻風兵仗耀日彼不以爲意直駛四艦至本牧下哨船測量氏榮大驚遣吏詰問傲然曰明春再航不得所請則有戰而已故測量列艦隊之地吏盛言國禁忽國禁笑曰督將業經上列書表懇親貴國豈可

我測量行艦之地乎。更進數里。止艦望見大森品川。知爲大城外郭。曰渠已受國書。安加暴橫。使國人憤激。非謀也。乃反艦過浦賀。見香山中島諸人。謝厚意。直出海口而去。彼理在浦賀。僅十日。閣老諸曹。深恐激變。甘爲彼所恐喝。破大禁受國書。廢彼所望而去。書凡三通。一爲大統領上政府書。曰我亞米利加合衆國。隔大洋與貴國相隣。若駛走汽艦。則可十八晝夜而達我國。雖新造生齒。日繁。貿易日盛。貴國能開海港通關市。其爲國益不細。若爲不可。則試行數年。無益而後止。米國捕鯨船及商舶。航漢土者。或遭颶風。或絕煤炭。漂至貴國者。無歲無之。而貴國虐待無

人理。切望除此舊法。一加給卹。以盡善隣之義。一爲委使人全權書。曰彼理有才識。我所一心委囑。貴國大臣與之議定。交信通商章程。一爲彼理上政府書。曰歐人檢出米國。實爲歐人始航貴國之時。爾來四方移住。今爲殷富大國。貴國間大洋爲隣。域而無故。讎視我國。非保長久之道。故彼理叩國命。謀與貴國結交際。開兩國人民之公益。唯兩國講好。事體極大。非一朝所議決。明春再度陳懇。欸此時太平年久。內外忘兵。而一旦有此警急。命諸藩發兵。戍沿海。朝野驚愕。不知所出水戶中納言。專主拒絕。諸曹一意恐怖。枉爲之說。受國書中納言。作書論陳。不可和十

所謂國有。理唯  
要以此。豈可無所  
軍事。

河野通之曰當時  
余年少。微聞此事。  
試思彼勢。則能斷  
明成出何等事。

事勢。州不能斷。是月廿二日。德川家慶薨。家慶深憂外難。臨死囑諸老曰。水戶中納言用心當世。一切外國事務。委水戶氏處分。七月會列侯。示三通國書。且諭曰。國法禁近外人。前日之事。出于一時權宜。不可爲常。彼書所要請。皆家國大事。宜各陳所見。窮論得失。無有忌憚。於是列藩競論防禦方法和戰利害。或謂絕彼請。則不得不戰。戰則兵備不整。彼再度要決。答遷延期。日待武備畧完。而後掃攘。或謂統御不得其人。則衆心不一。若委一切海防事務。水戶中納言。則紀綱一新。士氣振起。何患外難之爲。或謂一朝許彼請。則英法諸國各倣其所爲。陸續來請。國力有限。要求無厭。嚴絕彼請。無遺憾他日。或謂講好通商。國法之所禁。但撫漂民給薪炭二事。許彼所請。以探海外動靜。或謂幕府職征夷。一旦怖彼囑喝。許所要請。失職無甚焉。請大舉掃攘。挽回頹風。更張國勢。尋諭曰。衆議雖有異同。其要歸和戰二字。願邊防未整。兵備未完。未可妄開釁端。彼明歲再度姑以婉辭弭之。唯彼以暴威來迫。勢不可不應。互用力實地。抑忠憤。蓄義勇。莫汚國體。於是築七砲臺。品川海。命江川英龍鑄大砲。宥高嶋秋帆授砲術。下曾根佐久間諸氏。亦集徒授大小砲。火器盛行。儒生劍客爭論國事。天下騷然。八月薩藩報曰。米艦繫泊琉球。乃囑荷蘭

森曰。見盜案。何復



人在長崎者告曰將軍新薨嗣君未行承統之禮明春再度不復暇決答請更期年月彼理書答曰將軍生死無關兩國之大事航度之日見宰臣而取決答語左右曰向日本答俄人亦以將軍喪日本用漢土禮喪服限三四月此托名國喪延誓答期而已豈可爲彼所欺罔乎

海外各國以通信交商要請我始于此是秋余巡視相房海岸至浦賀見香山中島諸人間其說汽艦運轉火器精妙眇視我國如不介意者然愈知字內大勢一變而我邦孤立東海竟不免此患也先是水戶烈公慨我狃昇平忽武備鑄大砲修戎

尊攘記事

卷之一

五

具將以是率天下一洗太平游惰之習藤田會澤青山豐田諸儒著書專說神聖國體冠萬國指陳時弊痛斥外夷而米艦入浦賀其所要請如諸儒所擬議時論欽然宗其言而烈公解幽閉參大政藤田戶田諸賢輔佐烈公天下想望風采皆曰國家治亂安危一繫公之進退公亦慨然以天下自任宏謨碩畫將有所出群小不便譏謗紛起遂逮浮浪儒生論國事者鍛鍊細故起大獄株連宗藩列侯人心離散內訌外懼叛亂四起繼以滅亡嗚呼使幕府終始依賴斯人仗宗戚之重養天下之望則不至內外武備如此萎靡天下政綱如此陵

此篇以烈公悲感此作者三致意者

水原節大曰尊攘二字實出于水戶

事野成實已論傳當日情形然在

夫一旦緩急舉其所素養文武諸士任之天下之事則不必至狼狽失措取侮海外如此太甚也及一朝事急始解幽閉既已無及而起之不盡其用黜之不以其道此自壞萬里長城者如之何不釀其亂而速其覆亡乎噫

俄國使艦入長崎

是年七月俄羅斯軍艦四隻入長崎港旁近諸藩發兵備之遣吏問詰曰俄國使臣布帖廷奉國書有所請是時米艦發浦賀朝野始爲貼席之念忽得是警人心恟恟乃命長崎奉行受書書副漢文荷蘭文曰

尊攘記事

卷之一

六

俄國皇帝欲與貴國講好以福兩國人民俄國版圖跨三洲固無意廣疆土唯福兩國人民非劃定疆界則不可請貴國與使臣議定北陲疆界使兩國人民各保其堵安其治俄國船艦往來亞米利加屬地及東薩加者必經貴國洋海請爲俄國開一二港使得繫泊船艦購求薪炭食料布氏亦書請曰疆界一事非面議不悉事情請至江戶見重官議定是事幕府命筒井憲川路聖謨赴長崎見俄使會松前藩報俄國軍艦入唐太久春古丹發砲上陸官吏奔竄發兵守宗谷衆議紛然乃先告將軍新喪不暇外事布氏留書而發曰國書已陳大意貴國北邊曠漠不及今

此文據曰唐太我國時爲他國所乘爲俄國所困不知何時自今日今孫中山

河野曰當時以是  
為國法身今而追  
思不知何心

安達清風已以  
皇帝勅諭為國  
而據實錄卷一  
語及之者何此

尊攘記事

卷之一

七

定疆界則移住俄民造家屋營產業勢不得不與貴國開界隙擇捉俄民所漁獵而貴國人民肆然來住唐太土人請屬俄而南一隅貴國人占居貴國劃定何地為疆界貴國設法禁通商外國船艦入海港者給薪炭糧食不取其價方今航海盛開船舶往來歲多一歲苟以此法待外國船艦雖盡國入恐或不給盍公然許外國通商有無貿易以資其利米國北陲及東薩加皆屬俄國船艦往來必經貴國洋海宜為俄國開江戶近海及東北一二要津以許俄泊船購求物品使臣將與貴國大臣議定此數事設條約令兩國人民有所遵守請擬議各條以待再度之日

十二月筒井川路二氏至長崎四艦亦至乃見布氏授答書曰兩國古來各土其土民其民互不相通問今定疆界當先按圖籍檢地理確有證據而後分割兩國所屬此非一朝所能辦互市通信我國法所禁今夏米國亦發使請是事今也宇內大勢一變不可拘泥舊法然而許貴國拒米國固為不可若許貴國及米國則萬國並請殆非國力所能給且改祖宗舊法且與列藩熟議奏朝廷以仰皇帝勅裁而將軍新立國事多端請待三四年後自我報答布氏就書反覆論難陳奉使大旨聖謨因答書而對布氏怫然曰俄帝委臣使命全權而二君所論不出答書有赴江

本原曰穀雖不備  
餘力足於此

尊攘記事

卷之一

八

戶與大臣論而已二氏問故曰千嶋古來屬俄聖謨曰千嶋屬我近為貴國所占據貴國元良印論國境以得撫為間地禁兩國人民之占居故我守是約以擇捉為千嶋東境布氏曰元氏非政府使臣其言不足以為證五十年前擇捉實屬俄聖謨曰若論其舊雖東薩加亦我屬地且國書不及擇捉而閣下強辯如此我恐國人傳是事憤怒離視貴國也且國書曰俄地跨三州不欲益地而今也率軍艦入唐太如畧人土然僕不知何故布氏曰久春古丹唐太要地而貴國人住此者僅僅廿名我國深慮外人畧有此土故發兵備之非有他心唯事在使臣發國以後故國

書不及是事切恐此輩一旦居住漸重離土遂開兩國界隙此使臣之所以請速發大臣按檢地理一定疆界也聖謨曰此事非議列藩奏朝廷以待勅裁則不可也待廟議一決自我報答布氏曰唐太屬日本限何地聖謨以荷蘭輿地圖劃五十度為日俄疆界答曰唐太南半島屬我布氏曰貴國人所來往限南一隅俄人新就南地開石炭礦不可舉南半島屬貴國且地有山河犬牙相接非就實地而議則不可也二君盍附乘漁艦往檢地理分割山河以劃日俄屬地如此不出旬日而事決何待三四年之為聖謨曰重官不宜輕自進退曰貴國已知時勢一變舊法之

不曾知俄書不於  
此而猶曰我上幾  
何不為彼所侮



難得此等如牛  
口舌所不能言

不可拘而曰待三四年使臣所不解聖謨曰貴國嚮  
得我北邊聞寂五十年而今難待三四年何也曰方  
今氣艦凌逆風火器碎堅城冰海夜國無地不可航  
貴國表立東海猶欲脫然獨異如五十年前乎使臣  
將別有所論既而書陳曰貴國四邊環海巖嶮錯立  
狂風激浪輒壞船艦故外人不取近今也機工日開  
製氣艦測量天度往來萬國互講隣交而貴國鎖海  
港絕外交不知變通適時外人恤貴國漂民萬里護  
送而却之不受外人毀船艦危性命此人理宜救濟  
者而拒之不近讎視禮義之國頑然自是以此俗處  
此世勢不得不開戰端而貴國不見干戈二百年武

尊攘記事 卷之一

九

備解池沿海砲臺無一足戰船隻脆薄無一足用若  
使歐人率一二軍艦衝要港扼咽喉之地則國內運  
漕路梗立逼危難不知貴國何備以防之凡富國土  
在開海港通貿易我之請通商非為貴國之不利將  
為貴國立富強之基也凡經國土定疆界所以護兩  
國人民我之請劃疆界非為貴國之大害將為貴國  
除爭戰之端也言頗適切二氏唯曰答書已悉至江  
戶見宰臣不能動一字布氏不敢迫正月四日饗二  
氏本艦觀漁車模形及艦卒鍊兵水子攀櫓且曰貴  
國他日許外國通商隣交宜以俄國為第一所許外  
國一切權利且首許俄國二氏亦掃館盛饗二氏觀

聖達曰彼指此圖  
亦恐有誤

本京口俄使館極  
覽所當皆碎

艦室所揭輿地圖判唐太五十度為日俄疆界乃與  
書曰唐太南半島屬我雖歐土地圖亦然廿八日留  
書而發曰兩國論國界豈可以坊間地圖為證乎且  
度數屬天非就地而畫者山河形勢豈可以度數分  
割乎使臣奉命貴國實委專對特權今貴國不委專  
對特權二君千言萬語皆屬無用使臣將航北海親  
檢地理再詣江戶見諸大臣受決答請二君報是言  
嗚呼武備之不可不嚴如斯也歟夫俄米無所擇  
於我也而川路氏接俄於長崎反覆國命不毫假  
借彼雖銳意申請亦不敢加無禮此亦完敵國體  
面者矣若夫林氏接米論一延見地而猶不可奪

尊攘記事 卷之一

十

及其館接橫濱未及措辭為彼所一言喝破至舉  
祖宗大禁許之一接面之下此殆蔑國體者矣蓋  
長崎有黑田鍋島二氏壯砲臺嚴兵備大村松浦  
唐津諸藩犬牙棋峙一朝有事十萬兵可立具故  
俄在敵圍中有所反顧不至如米艦在內海輕蔑  
凌暴無所不至也江戶海實為我邦咽喉而延袤  
三十里非有壘壁可以據而抗外艦如黑田鍋島  
於長崎故米人一見眇然曰此可以威兵逞素謀  
也一言忤彼意輒以用兵啊喝幕府亦知無可以  
戰戒林氏開釁端已不能戰此有許其請而已曩  
使幕府以江戶為根本之地壯砲臺嚴兵備盡旗

按日本史蝦夷傳多叙蝦夷猾與羽且其所載止白河朝永保三年與今蝦夷無所關涉也余曾考書傳參所聞畧得要領曰蠣崎氏畧有蝦夷全嶋奉貢物大坂豐太閤大悅賜金印曰世主其土而蠣崎氏政令所及限國後擇捉面北一方直接地

下八萬兵力備不虞爲可戰如黑田鍋嶋二氏於長崎則米人亦又有所反顧不敢加無禮如俄之於長崎也必矣武備之不可不嚴如斯也歟抑方今五港外艦之所輻輳而欲壯砲臺嚴兵備如黑田鍋嶋二氏盡藩力戍長崎之時而不可得吾恐後視今猶今視古也

尊攘記事

卷之一

十二

樞古來邦人未曾窮其地俄人已畧西伯里始搜索此間嶋嶼其始至東薩加實在延享寬延年間後約土人歲獻獸皮置官舍派吏胥畧有旁近二十一嶋寬政四年護漂民來根室請通商幕府遣石川村上二監察賜物給信牌曰有所請則來長崎蓋謂彼難海路遼遠必絕望於我也後航得撫擇捉勢漸駸駸乃遣渡邊大河內三橋三吏巡察邊海愈知邊備不可忽以蝦夷東南部置官舍十所命南部藩守根室國後擇捉津輕藩守佐原許士人移住造船艦便搬運近藤守重最上德內諸人巡檢全嶋開拓之議盛起享和元年松平忠

本原曰嗚呼是地予平之所以有二國通商也抑難哉天下名相有此遠慮處分何也

尊攘記事

卷之一

十三

明行西部石川忠房行東部忠明命屬吏中村高橋二人巡行唐太中村行東岸百五十里高橋行西岸百六十里以糧盡還曰幌古丹以北窟居野處漁獵爲業種類不一常與滿洲貿易自稱曰愛儂風俗與我蝦夷相類特以政令不及故淪外俗二年始置蝦夷奉行治箱館文化元年俄國使艦帶信牌來長崎奉國書請兩國通商長講善隣之義鎮臺肥田成瀨二氏中國法却之俄使憤甚至東薩加謀守官發米屬地商會船舶寇唐太火稅舖掠奪金穀尋寇擇捉南部藩防戰以炮藥盡遁歸秋田津輕南部鶴岡四藩發兵守箱館命參政堀田正敦大監察中川忠英出鎮俄人還囚虜告曰貴國待我使艦無禮故蹂躪北疆觀我伎倆貴國不許我請則我且畧擇捉唐太邊警薦臻東北騷然乃移封蠣崎氏陸奧梁川大修邊備五年命仙臺藩守國後會津藩守唐太松前傳十郎間宮林藏探唐太北陲備嘗艱苦窮滿洲而還尋命南部津輕戍東西蝦夷八年南部戍兵在國後者虜俄人八名其長曰兀羅印詰寇掠狀曰東薩加貧暴無賴者所爲非政府所與知十年俄人來國後返所捕賈人高田嘉平嘉平虜東薩加七年學彼言語始得俄情乃照會西伯里守官還兀羅印以

此處係俗史論

下八人論曰互市國家大禁自今外艦近海岸者不論何國砲火擊碎又曰我國限擇捉俄國限下尻中間得撫一嶋爲閑地兩國不得占居元羅印臨發呈西伯里守官書請正國界及擇北陸一地爲兩國人民交見之地却之既而以蝦夷開拓徒廢國用茫無以驗復蝦夷全地蠣崎氏蠣崎氏以論者輒說邊事恐其生事端嚴拒國人入蝦夷專事掩蔽我忽邊事如此此亦慢藏誨盜者噫

約米國開下田函館二港給缺乏物貨

彼理已發浦賀遣一艦上海調糧食一艦報狀本國

尊攘記事

卷之十三

十三

小野曰當時倭如馬假令林井戶有出人之思亦不可爲

率二艦抵琉球琉球小嶋供億維度至翌春幫艦來會以爲琉球控日本東南諸嶋此行不得逞則可先取琉球爲根據之地留十餘人而發途會幫艦二隻相率指浦賀直入內海鎮臺遣吏上艦艦兵擬砲麾避至本牧岬下錨是爲安政元年正月十三日幕府命儒員林大學市尹井戶對刺往接請辭曰不許彼請又不絕彼望託言左右遷延時月使彼辭歸以俟決答乃擬鎌倉浦賀二所爲延見之地急築亭館遣人告曰重官在浦賀以待副將亞旦出接曰浦賀距此十里蓋於此地曰政府築館浦賀爲延大使之地亞旦正色曰強要我浦賀則直入江戶見大官取決

河野通之曰浦賀猶如野原地所非大體町因而使客上反此所以爲遲彼侮也

答翌日遣一吏曰政府敬大國特命重官延見亞旦曰於何地曰鎌倉曰昨言浦賀今言鎌倉何爾相反曰浦賀鎌倉唯大使所擇亞旦傳彼理命曰嚮幫艦過鎌倉膠沙泥此地難繫泊且遠都城別擇一好處吏固請不已亞旦怫然曰不敢退此一步汝猶固請恐非汝國利吏無言而退更遣一吏曰前呈國書九里濱今難浦賀者何亞旦曰當時固言明春詣江戶見大官議定使事吏曰大使欲面重官宜來近海曰重官欲見大使宜來艦上曰重官不可輕進退曰吾無用重官將赴江戶取決答吏默然而退彼理遣亞旦乘一艦至浦賀書告曰浦賀風浪無時非泊大艦

尊攘記事

卷之十四

十四

之地歐米各國遇使臣必於國都江戶距此咫尺蓋延見於此吏導亞旦入新館禮待極殷林氏出見曰政府爲大使築亭館供張以待亞旦變色曰此地風浪猛惡諸君強要豈欲我覆船艦乎重官若欲有言從我來本艦且我來此幾日論一會見之地遷延不決我將告本國益發兵艦拂袂而起衆皆失色會風浪暴起泊舟兩夜彼理切齒曰豎子破大事令各艦進江戶海直逼品川砲臺連發大砲響達府下百萬員擔而立林氏大驚米艦初航香山榮左專任應接爲彼所悅及是林氏授旨榮左追見亞旦告橫濱爲延見之地林氏累日論會見之地皆爲彼所恐喝遂



安達曰余見時受  
藩命伐本牧畢  
涉堀河而奔  
乃槍大小砲  
足用林氏日記  
嚴亦不誣也

本原曰當時  
無戰心故如  
耳若有一層  
案決策則自  
兵可立見

尊攘記事

卷之一

十五

改爲橫濱彼理欣然書告衆曰凡與外人論事一言  
出我口不問事理不要應確然固執不少屈撓以達  
本旨余數與各國人論事常以之取勝若拘泥瑣末  
往復論難遂爲其所論破枉本旨此輩不足與謀也  
是時烏取藩戌本牧熊本藩戌羽根田松山藩戌神  
奈川沿岸一帶列大小砲兵營相望彼理不以爲意  
繫九隻軍艦日放火砲下哨船測量港灣邏卒呵止  
不可遣吏告測量爲國禁艦將曰我未與貴國講隣  
交兩軍對峙豈可少懈測量乎香山導亞旦弗加南  
二將一見橫濱地勢以其地距本艦一里彈丸所及  
可之乃夷田里起館舍林井戸以下移館神奈川遣  
香山托事探彼意所在輒曰開海港通貿易香山難  
此二事輒曰子等卑賤何與兩國大議二氏狀聞擬  
各問各款請旨水戸中納言與閣老論且數日乃令  
曰通商決不可許彼以是啓覺亦不得已者意無暴  
戾至此之理乃期二月十日會見彼理在琉球以爲  
賑漂民給糧食二事可以口舌得唯開港通商非用  
兵則不可得顧此三者成其一可以籍辭復命也及  
是觀諸官一意恐怖事無大小順適我意以爲此可  
以恐喝成也本日松代小倉二藩出兵警備彼理揭  
國旗裝飾軍艦駕哨船十七隻上岸校將揮劍麾衆  
全隊分爲方陣彼理從書記舌人上陸方陣分爲鶴

此阮英散等上使  
爲彼所害見況

尊攘記事

卷之一

十六

翼捧銃敬禮本艦放祝砲十七發整隊就館哨船放  
祝砲二十一發曰壽日本國王放十七發曰祝林氏  
林氏從井戸伊澤鵜殿松崎五官出接既而請別室  
饗茶菓乃書示曰將軍新喪百事倥傯所請各款不  
遑熟議唯貴國船艦投海港加修繕調薪炭食料皆  
情誼不得已者宜開兩三港當之隣交通商國法所  
禁與列藩反覆討論待議定之日而後決答彼理一  
見曰此大事敢煩高官手書出示漢土條約曰兩國  
條約宜一効之若貴國不肯則本國多發軍艦有所  
再請唯虐不幸我所不欲高官思之林氏默然彼理  
出書一通曰貴國百方拒和親托事故延替決答真  
屬無謂僕所率軍艦僅僅數隻若貴國延替決答則  
本國直發軍艦貴國不幸無大焉僕嚮呈國書直去  
浦賀將使貴國熟圖此事也而曰將軍新喪百事倥  
傯此僕所不解大統領爲貴國也至矣獻武器機器  
摸形數十品而貴國以辭敵待我僕恐大舉一開百  
萬糜爛追悔無及也我國爲貴國謀非歐土諸國比  
日本海我邦船艦之所必由獵鯨船營業海上者千  
百數彼此人民脈乏繼絕互篤懇親隣國通義宇內  
各國皆無不然貴國獨有拒之之理乎諸官傳觀默  
然會見儀畢陳設饗饌不復論使事彼理庭陳望遠  
鏡時錶表大小砲電線瀛車摸形數十種皆邦人所

河野曰見據此原  
意出丁天然良  
者當得此意  
藩乃固執其意

水曰曰大統領獻日本國王林井戶以下爭傳觀先是衆競論拒絕至是觀彼戎器精鍊機工巧妙衆心稍傾乃遣吏請再見且書告曰貴國欲我仿漢土訂通商條約我邦未達貿易方法荷蘭通商二百年于今未見其益金銀貨幣彼是不均語言文字互異其音故祖宗設法禁歐人通商唯貴國厚意不可不答請爲貴國開長崎港給薪炭食料漸熟貿易方法至四五年之後更開他港彼理曰可說翌日減儀衛上陸來見曰貴國遇漢土荷蘭猶遇囚人然彼此人民皆天帝之所寵宜許其自便長崎我所不欲宜開浦賀慶嶋函館琉球等五六港唯今日之事三港而足

尊攘記事

卷之一

十七

本途已指是向於  
三百里之故也

林井戶答以國法難俄變彼理反覆論難聲色愈勵二氏乃許下田函館二港彼理色降曰請先檢地勢乃發校將駛艦往觀蓋彼理意以爲己開海港勢不得不通貿易故專逼以開港而我不知通商與開港異其名而同一實也林氏以彼贈遺隆渥不可不報盛陳刀劍甲冑陶漆器具延見彼理曰敢贈大統領又贈彼理黃金若干彼理拜賜林氏曰猶未更堆積米數百苞沙上使力人搬運艦上彼理恠其肥大多少力艱體執役搬運已了就場角觖其狀類野獸交噬不覺失笑乃曰羈人無歡諸君請使艦卒節隊以供覽將校率各隊上岸挺刃指揮奇正變化如臂使指

森曰閱後已見據  
此人文開不之

所屬  
此邦人心醉  
之始

小野曰勢利不足  
言前中劉亦歎  
然何也

尊攘記事

卷之一

十八

爲米國謀真忠

大言雖可惡亦非  
無理

又試所贈大小砲電線氣車機關巧妙不知所以然衆皆慨然彼理以兩國歸好設盛饌饗林井戶及屬負優及僕從邦人始嘗外味皆窮醉飽一官大醉就彼理坐撫其頭曰兩域一致衆自旁扶出既而校將歸自下田知其爲良港乃議定下田函館二港給薪炭食糧黑川森山與亞旦商議條約起草阿部勢州見草案怒其所許太濫水戶中納言尤不懌林井戶曰彼所要不止此臣等百方抗辯僅得如此若拒之則有戰焉耳沿海兵備殆如兒戲戰敗而後和其所許豈止此乎中納言默然竟可之三月三日延見彼理假訂條約曰開下田函館二港給薪炭食料曰米人漂至者護送二港曰待米人不得如漢土荷蘭人曰二港得遊步七里曰賣買物品一仰官吏之許曰今後所許他國必許米國曰若有事難處者置領事官理之是類十二條曰自今閱十八月施行彼理贈林氏米國旗章曰爲兩國忠謀設盛宴饗彼理以下宴半林氏曰卿謂條約議定則赴江戶謁國君卿入江戶府民騷擾願止是事彼理作色曰此非是席所宜言翌日使人告曰吾將進艦江戶灣林氏大驚遣吏諭止不可進二艦至大森岬眺望萬瓦鱗次樓櫓接天謂左右曰火百萬人家於一發彈之下兩三艦而足於是思林氏言及艦十三日發神奈川赴下田



安達曰此亦理  
唯性受來不却  
類有餘也

尊攘記事

卷之一

十九

借一寺為游息所。測量港灣深淺。海岬廣狹。議定游步路程。留二旬餘。去航函館。見守官示條約本書曰。徘徊市街。販賣貨物。一如所約。松前藩未知幕府開函館遣重官接見。乃館三寺院測量海陸地勢。購求凡百貨物。唯意所欲。為轉入室蘭港。港有米人墓。典祭而去。閱二旬。歸下田。見都築駿州。議二港條規十。二章。六月發下田留書。反覆論鎖國舊法。不可不除。及是水戶中納言以議不合。稱病辭參大議。林氏亦自知不滿輿論。引過曰。臣以短才。當大任。不能副台旨。罪當萬死。唯爭瑣事。啓大釁。非官任臣大事之本旨。故寧犯罪。謹以完和好。會筒井川路二氏歸自長崎。曰。臣等反覆宣國禁拒彼請。而官遽許米國二港。俄人聞之。必謂臣等居間矯台旨。此使俄人有辭也。且彼所要何限。而我一一許之。則各藩憤恚。遂釀喪亂。十二月亞旦來下田。呈大統領親署條約書。請換將軍親署書。林井戶力辨將軍無親署之理。乃使閣老代署。旁書代將軍三字。翌年三月米艦二隻入下田。請測量沿海列藩發論爭拒。曰。四方環海。我之所以據為金湯。一許彼測量。何以立國。我邦立極以來。未曾有受辱外國。如橫濱此事者。彼勢剽以閣老統機務。事無大小。無不出其議。而猶不滿其意。況於閣老以外。不參其議者乎。況於

條自進一層論  
公平

尊攘記事

卷之一

二十

河野曰此天地公道待聖人而不疑者

自擊彼侮蔑人國。蹂躪內海。藉口用兵。呵喝要求之狀乎。且當時水戶氏受故將軍之命。參大議。天下名望之所歸。不在將軍與勢州。而在水戶氏。而水戶氏以議不合。辭參大議。此天下無所繫望也。皇上負祖宗付托之事。任神人之享不國體之伸縮。而一朝會此變。此皇上之所以誓天地神祇。以雪此辱。屢勅幕府。以攘夷之大義也。然而此自國內而論者。若自域外而視之。公論之所與。不在此而在彼也。彼理日紀論此事。曰。米國發使艦論者。或為失計。曰。日本土地狹少。人心偏固。確守鎖港舊法。一旦要求通信。交商。極為難事。吾以為宇內萬國。誰不欲通信。誰不望交商。交商通信。本出於天地之自然。苟以此理開導之。彼豈有不悟。鎖港之非乎。日本拒絕外交二百年。其遇荷蘭人館孤。鳴禁國人交際。猶待囚虜。然其為固陋如斯。若逼之不以漸。則必破大事。故余說日本。先就彼易入者。而開之端。曰。優待米國。不得如荷蘭漢土人。曰。除虐漂民之法。給薪水食料。專加仁卹。曰。若有事難處者。置領事理之。其所訂約。雖未完全。端緒略開。彼後來通域外事情。與歐米各國通信。交商。實此約啓之也。余又料知英法各國接踵東海。使日本一掃固陋。舊習漸向歐米風化。加一條曰。後來

通鑑紀事本末卷之四  
地祇明神

喻得視切  
此准  
而却也者

尊攘記事

卷之一

廿

所許各國必先許之米國。可謂英雄圖事也。遠矣。  
論者或曰：萬里奉使，不能使彼悉許我所請，僅了  
數條規約而還，嗟呼！此何言。日本懲羅馬人開教  
法亂入國，設國憲不許歐人近海岸，而此行不用  
寸兵尺鐵，緩頰進說，使彼悟鎖港之非，除祖宗之  
舊法，折衝於樽俎之間，不戰而勝，善又善者矣。歐  
米知老前長日本，知淺術短，譬猶兄於弟，姊於妹。  
兄也姊也，觀弟也妹也，未能步步則倒求與之齊。  
肩並步而可乎。宜提挈之，哺乳之，規導之，訓誨之。  
以待其日成月長，能自周旋於兄也姊也之間也。  
嗚呼！此事距今幾時。聖朝赫怒，戡定內亂，首發大  
使與歐米各國修交際，其立制度開技術修海陸  
軍政一取法于歐米，觀彼理此言，安得不爽然自  
失乎。

正訂  
尊攘紀事補遺卷一終

正訂 尊攘紀事補遺卷二

宮城縣 岡千仞振衣撰

吉田佐久間二氏下獄

長州藩士吉田寅次英邁不群。少講韜略。藩主聽其講。孫吳歎曰。頓使七書爭光。六經游學江戶。用心時事。米艦入浦。賀草私言急勢。時勢條議接夷私議三篇。曰。彼固侮我。不有所懲。則無以張國威。是時佐久間修理。修洋學。講炮術。以慷慨論時事為一時所宗。上書阿部勢州。論開航海學為急務。不報。憤曰。九里濱之事。何異城下之盟。寅次往見。痛論時事。頗會其心。會俄艦入長崎。奮曰。知彼知己。兵家第一義。我邦

安達曰。此語當時與論。

河野曰。此全得于象山者。

尊攘記事 卷之二

禁外交。離陸咫尺。茫不辨東西。幾何不長。彼侮慢乎。余將私請俄人乘艦偵海外各國修理。亦深以用間為急。大嘉其志。贈詩勗之。比至長崎。俄艦已去。途經熊本。訪宮部鼎藏。與論時勢。慨然共東。會米艦入內海。以用兵要我。幕吏恐怖。築館橫濱。見彼理二人往觀。不勝憤懣。攬袂曰。刺乎。鼎藏掉頭曰。無益。於是意以為私見米人。懇請附乘。可以達素志。夜會同友語。志眾拊髀贊之。鼎藏沈吟久之。曰。徒危身耳。寅次奮曰。成否。天也。豈可坐失機會乎。揮袂而起。金子貞吉微者也。從寅次受學。慷慨請從。乃赴下田夜棹小舟。近米艦。艦卒堅拒。不得乘。艦翌日途見米人投書陳

喻曰。此等國無一非跛者。陰謀正如何。

尊攘記事 卷之二

命野之謂之痛有餘痛。

安達曰。此口則快。絕自非秘陰則不能如此。

情曰。僕輩不幸生東洋。一小島周游國內。不能出十數緯度。比之諸君周游五洲。何啻甕鷄於鵬鯢乎。夫跛者。羨步者。步者。羨騎者。人情之自然。僕輩局束一隅。自諸君大艦大砲。豪游五洲者。而觀之。跛者耳。步者耳。其所以欽羨果為何如。願諸君收僕等二人為役卒。令得一游海外。是夜駕漁船近艦。艦無梯索。解帶縛棹竿。攀艦。米人知其有所請。指示本艦。乃棹達本艦。攀梯索。艦人恠訝。手執棍揮。權一人執手板上。示畫間所投書。曰。督將嘉二君志。唯兩國禁私交。君等盍請官游海外。貞吉加手其頸曰。僕等已犯國法。還則斬戮。米人曰。暮夜無知者。寅次請見解漢文者。筆陳情事。不許驅迫下艦。風暴波高。漁舟已為激浪所漂。佩刀行李。不知所在。米人下小舸送達岸上。寅次仰天太息曰。天也將引決。恐累君父。貞吉曰。盍首實。曰。不可。累象山先生。彷徨至曉。米人報狀官吏。會舟人上二人所遺佩刀行李。發卒索捕二人。囚一村家有三人。過其前。慙然近視。寅次出筆書示曰。英雄之謀。事成則坐廊廟。擁矛戟。與王侯齒。敗則陷繯紲。宛轉鼎鑊。與盜賊伍。古今皆然。僕童卯聞有五大洲。欲就諸君。果四方之志。不幸罹此禍。以六尺身材。坐臥樊籠之中。欲泣近思。欲笑類狂。嗟乎。可如何。彼理曰。此豪傑之士也。發使告官吏曰。此人容貌魁梧。

志氣不凡。余爲貴國惜此壯士。莫以犯禁之故罪之。吏檢漁舟所載行李。得修理送別詩。修理固以慷慨論事爲俗吏所指目。乃并逮修理下獄。詰狀寅次勵聲曰。吾豈受人旨而謀大事者乎。且此事成則上供國用。下報藩恩。敗則延首伏戮。貫高所謂成則歸王。敗則獨身坐者。固不受人指導也。吏爲之改容。九月檻致二人。其藩輿僅半間。交膝起卧。貞吉不勝靳辱。憤悲罵詈。且泣曰。余與先生謀此事。飽肉鯨鯢。暴骨原野。固所不辭。唯受辱至此。何顏視息人間。寅次正色曰。不知命則無以爲君子。貞吉謝曰。吾病熱喪心。乃爾二人坐獄。踰歲貞吉瘐死。藩王固奇寅次。銅諸

何似東林講字有

尊攘記事

卷之二

其家。許集弟徒講書。修理亦銅本藩志士下獄。始于此。

余曾草吉田佐久間二子合傳。黃公度病其太詳。曰。刪去過半。則爲佳文。顧二人慷慨論國事。四方志士爲其所風動。爭起論事。其益風教裨家國。唯恐立傳不詳。今節錄片段于此。蓋吾邦鎖國爲法二百年。水戶氏唱攘夷二字。萬口一辭。牢不可破。先是幕府懲蝦夷之亂。除外艦近海岸者。一切砲擊之。令後高野長英渡邊華山聞英國議發使日本。著論諷鎖港之爲陋法。松陰已以知彼知己爲第一義。象山贊其游海外。後毛利氏盛唱攘夷說。

若使當時幕吏有此等作用。則可救亡也。

尊攘記事

卷之二

如此論去始悉松陰之本領。余爲松陰贊得身後之知己。

象山作詩辭其聘。有王道無偏黨。願傳蕩蕩風句。蓋不與攘夷也。彼當舉世唱攘夷之時。能見及之。可不謂俊傑之士乎。抑橫濱之事。幕吏已許彼所請。此明知攘夷之不可爲也。而攘夷之不可爲。不可戶諭而家說。而象山松陰二氏幸着眼于此。此與當時吏曹所見合符節者。若使當時拔擢二氏。縲紲之餘。稠衆之中。命之遣外國。使天下洞知幕旨之所向。時勢之所急。不在此而在彼。庶幾可以一變舉世物論之所歸也。且松陰之爲偉器。彼以異域人猶能知之一見之下。而幕府不知爲天下惜人才。拘執之靳辱之。使松陰尋常庸人則已苟少有節慨。則固將奮起謀所以雪斯辱。漏斯憤。彼在罪籍之中。鼓舞尊攘二字。使一藩子弟歛然致死于此。抑亦幕府自取也。嗚呼。此事何唯松陰爲然。

約俄國唐太悉仍舊貫

筒井川路二氏之在長崎。見俄國意在蠶食唐太。狀陳曰。彼既據要地。若不遣吏區畫。則唐太非吾有。安政元年。命堀利熙村垣範正往檢。至則俄人已徹去。布氏留一書曰。貴國已許米國所請。豈可獨拒我乎。蓋布氏發長崎至東薩加。歷探唐太東西海。憎其迹。

彼無圖計。月而後發。與我食卒違更。實別。



漫筆其說俄人

尊攘記事

卷之二

五

河野曰此島上  
俄全在五里霧中  
而不自知者

類侵畧。徹久春古丹兵也。二人四發屬吏。搜索地理。狀所見曰。唐太南半嶋。松前氏政令所及。自幌古丹以北。與滿人往來。人種風俗自異。其地沍寒窮陰。五穀不生。宜割爲俄屬。此際峻嶺絕險。驗之天度。爲五十度之地。以是爲兩國疆界。置官吏開漁場。移旁近土人。盡力綏撫。夏秋間置番兵。以備彼侵略。可以少保無事。然此非策之上者。東薩加雖屬俄。唐太全嶋未曾受彼羈絆。唯落石距幌古丹二十里。俄人開炭礦。其人僅僅不過廿人。土人亦不服。聞滿人與俄人戰黑龍江。壞俄艦二隻。彼畧有西伯里。而不能服。滿人安能越海畧我唐太乎。若落膽于一使艦之呵喝。勿卒劃國疆。此在彼術中。而不自知者。臣私以爲俄使再度計之入下田函館。需薪水食料。準米國可以少饜彼望。國疆一事。托言遷延。以其間布恩德。收攬土人之心。命奧羽諸藩發戍兵。修海備。唐太全嶋可有也。七月令蠣崎氏納蝦夷全地。任堀竹內二人函館奉行。利熙巡視蝦夷全島。陳所見曰。命仙臺秋田盛岡弘前四藩。戍要衝各地。北地沍寒。不可劇開拓。請募移民。墾箱館旁近。待其稍諳風土熟氣候。移之北地。一切漁獲租稅。悉充開拓用度。水戶中納言曾慨俄窺北地。發家臣探其地。及此駁利熙議曰。北陲與強俄接壤。唐太擇捉國後三嶋。凜乎其危。

北下手於此條理  
執然然者眼

安達曰當時烈公  
既言是語足證公  
之所以爲國也豈  
飾也

尊攘記事

卷之二

六

此全是偽詐。設立  
陷詐術者耳

宜急移身材勇壯。沈毅有大略者。爲北門鎖鑰。蝦夷全島。亘七八百里。宜請朝廷別置北海一道。分爲七八國。與西海南海二道首尾相接。如常山蛇勢。開拓之要在造船。艦輪糧伏遷人民。北地曠漠。鱗介羽毛。海草木材。足以饒國產。巨艦搭載。販之四方。所獲巨萬。足以資開拓。松前城爲北陲巨鎮。宜準大坂置城。代如唐太擇捉國後厚岸宗谷。置奉行。聚落滿百戶。置代官。一切開拓事務。城代總奉行。奉行總代官。庶幾政令統一。人人盡力其業。臣廿年前請移封蝦夷。盡一藩死力。以備外患。籌此事頗熟。請下諸司熟議。堀竹內駁其廣張大過。議格不行。是歲六月布氏以軍艦入大坂。城代土屋氏飛檄戒各藩出兵。梅田源次謀率十津川鄉民往討。大原三位固慨外事。微行至大坂。曰。東下見德川慶昭謀國事。幾旬騷擾。布氏亦察其異。回艦入下田。筒井川路二氏往接。布氏歷陳其所見。逼請劃疆界。聖謨曰。唐太至黑龍江對岸。我邦政教之所及。松本村垣二姓。世管是地。且就而質。布氏愕然。村垣進曰。余世受官命。管唐太實在蠣崎氏之前。今春受命往檢。土人納貢賦。營生業。不異舊時。白主以北百三十里。皆愛儂人種所住。愛儂人種之所住。皆我邦政教之所及。愛儂不知何謂。此間土人自呼曰愛儂。故舉爲人種之稱。布氏訝難曰。唐





姚曰山丹恐三姓之訛

尊攘記事 卷之二

前氏言狀幕府遣其臣高橋寬光置廠舍白主久春古丹綏撫土人文化四年幕府交黏皮二千六百四十張償山丹負債自是山丹交易全絕明清地誌無山丹近藤守重曰土人皆云潮黑龍江數里南岸有一部落曰山丹屬滿洲與唐太西岸隔海相對滿洲古肅慎之地後漢曰挹婁元魏曰勿吉隋唐曰黑水靺鞨強盛號渤海曰大夏渤海來貢是也渤海為契丹所併蒙古以其地曠濶置五府分領黑龍江南北其間因部族所居置都司官拜酋長為都督給印信各統其屬清祖平三姓之亂居寧古塔建國號曰滿洲及都于燕京以東北諸部屬寧古塔移鎮吉林烏刺城留副都統鎮寧古塔清一統誌曰烏刺城東北三十餘里混同江海口有大洲南北二千餘里東西數百里距西岸近所僅百里許有山曰圖可蘇庫其長竟洲林木深翳有小水數十東西分入海按黑龍江合嫩江松花江曰混同江入海所謂太州謂唐太也安永年間唐太土酋長至山丹見滿洲官人官人命名曰楊忠貞授印信令管理部屬印方二寸刻篆字滿字文曰管理三姓地方兵千副都統印最上德內巡視唐太親見印信云寬政元年俄人至唐太西岸彰備見土人度身材截頭髮與燧石而去三年

至頃內五年來根室送漂民請貿易寬保三年荷蘭人所刊地圖有薩哈連河河口一嶋曰薩哈連嶋唐太是也盛京通志曰黑龍江即薩哈連江薩哈連者黑也其呼太洲呼薩哈連皆外人所命而我呼唐太亦唐人之義蓋異域視之也唯風俗言語同我北海道土人足徵其為同一人種也

尊攘記事 卷之二

俄人蠶食唐太  
安政四年六月俄人三十八名來那與盧伐木材構屋宇官吏誰何其人曰嚮僕輩移住久春古丹有故撤歸更奉國命移住官吏曰此地屬日本不許外人居住其人傲然曰本國已發渝船告狀長崎鎮臺七月移久春古丹結巨屋四五宇門標俄國旗章無幾空屋宇而去五年六月二十二名載糧食雞豚來住增築屋舍為永住之計官吏難之輒曰奉尼加拉斯府命移住曰此地屬日本何為肆移住曰全嶋不劃疆界何屬日本之有村垣氏具狀且曰肆彼所為則國權不立唯條約不定國疆無可以為辭衆始知為布氏所謀七月布氏廷來江戶見將軍交換條約堀利熙出接曰幌古丹以南愛儂人種所住我政教之所及而貴國擅移人民此不仍舊貫者布氏曰僕此役不關唐太疆界事今也兩國訂隣交爭此等瑣事

鈴木大亮口出沒變化使人不可捉捉是彼之手段

俄曰黑龍江近海之地國初時之疆利本俄地也時時擾我民故康熙中遷其人設二城并為我版圖後俄與

尊攘記事

卷之二

我國疆界之是非有所失也

大為不可。既而俄領事來官函館。津田村垣二氏建白曰。俄人陸續來往。苟肆彼所為。則唐太非我有。宜見領事論詰此事。彼若以非所職辭之。則因領事贈書政府。改訂條約。曰。俄不過幌古丹而南。邦人不過幌古丹而北。庶幾可以保無事。眾議紛然。不敢決。六年七月。俄軍艦七隻入品川海。曰。兩國訂約通交。實俄帝所嘉。唯重大一事未決。外臣牟朗比雍奉國命。將見貴官面決此事。乃遣外國奉行。不肯見曰。牟朗氏。俄國貴族。請見貴官達國命。參政遠藤胤統酒井忠毗往見牟朗氏曰。弊國新與漢土訂隣交。與之約曰。黑龍江一帶永屬俄。黑龍江薩哈連同一地而貴國人占居南岸。業漁獵。弊國固不欲擾此輩生業。唯土地不可無所屬。請以唐太宗谷中間海峽為疆界。歐人呼唐太滿洲中間海灣曰薩哈連峽。稱唐太曰薩哈連。二人愕然曰。今日來見勞大使。遠來請期他日議是事。乃館天德寺。從堀村垣二氏往見牟朗氏曰。薩哈連往古屬俄。百十七年前屬漢土。今也漢土與我約曰。薩哈連以北永屬俄。此地曠漠。前年置戍久春古丹。以寡兵且惡疫。撤去。今也將置大兵以備外寇。請速定疆界。二人舉條約答之。牟朗氏曰。俄帝不敢委布氏定疆土之權。故布氏不敢決此事。二氏曰。布氏奉國書。請止疆界。何謂無權。牟朗氏曰。使俄

河時曰。萬國公法。列國使官必歸君

王奉極。當此之來。不亦難哉。牟朗氏曰。此

尊攘記事

卷之二

帝委布氏定唐太疆界之權。則布氏不敢徒還也。乃出示俄帝。委牟朗氏定唐太疆界之權。證狀曰。薩哈連東陸衝要之地。而不置戍兵。若為外寇所乘。不特害俄國。亦不利貴國也。貴國雖宗谷以內。不置一兵。至唐太土人而已。漁民而已。一旦有外寇。何以防禦。若箱館。若長崎。外國來攻。非俄國之憂。唯唐太。彼此無所屬。一旦為外國之所略。有則俄國之憂也。故俄帝切欲速定疆界。置戍兵。西伯里薩哈連屬僕所管。貴國人民業漁獵者。不論久春古丹。踰黑龍江入滿洲。亦不敢拒之。貴國曰。愛俄人種之所往。日本政令之所及。既曰。愛俄人種。非日本人種也。審矣。愛俄已為同一人種。若以半嶋分疆界。則南隅屬貴國。日羅困苦。北隅屬俄國。日享逸樂。他日以是懷向背。互開爭端。非兩國之利也。況漢土條約有明文曰。黑龍江一帶。自今屬俄。請以唐太宗谷海峽劃疆界。二人茫然。不知所答。曰。劃疆域。國家大事。請思其次。曰。薩哈連全嶋。遺守土。必為外國所乘。此地曠漠。豈箱館奉行所能守乎。利。熙變色曰。僕雖驚為箱館奉行。卿何以知其不能守。薩哈連全島曰。若使足下不能守。為貴國大耻。故言爾。二人曰。日已晚。請期他日。唯海峽為疆界。國論之所不與。請思其次。牟朗氏曰。外臣奉使命。不可移易。一辭。貴國不允。無復可為。請拔錨而

安達曰。凌侮至此。豈有敵國。九十年。國者。華俄也。出



言今出於直利  
無始言唐太金局  
可有至此勝悔

推論一層尤覺切  
實

河野曰諸書論無  
一所得明博諸何  
益

尊攘記事

卷之二

十三

去諸老驚愕村垣堀二氏進言曰唐太窮陰沍寒至  
冬云海水皆凍故邦人往漁其地者皆春往秋歸疆界  
事起以來勤番諸人深體盛旨奮發勇往忍凍涉踰  
年歲其志可嘉而徒糜廩米無補實備近散萬金開  
漁場連年不漁得不償失大野藩士萬里移住亦不  
過仰官助開漁場秋田藩戍久春古丹富内二所深  
難海嶋遼遠屢請徹歸外人來寇不能保一朝實如  
彼所論唯彼却我無兵備攫取唐太則英佛諸國亦  
將却我無兵備瓜分我地雖蝦夷内部亦不能保且  
論無兵備則佐渡對馬伊豆七嶋無一戍兵危急如  
此爲可寒心唯有內修兵備外守信義以待彼暴橫

耳臣始論割幌古丹以北以五十度爲國疆而今不  
可得若割自白渚至久春内以北亦可以少贖彼欲  
聲請博諮列侯英斷處分莫遺悔他日乃下諸司議  
外國奉行曰幌古丹以南俄人足跡所不及布氏亦  
未曾斷言全嶋爲俄屬南半嶋屬我萬國地圖皆無  
不然彼覬覦人國貪婪無厭若許彼請縮疆域雖宗  
谷亦不可保請斷然拒絕專修兵備守要害使彼不  
得加暴橫評定諸曹曰聞宋人云俄將據唐太奪滿  
州侵漢土而後及印度英人悟其謀將取唐太絕禍  
根此言未知實否唯唐太半嶋屬我不特列國所明  
知布氏亦明言就嶋内而劃境界而今啊喝百方至

尊攘記事

卷之二

十四

言布氏無定疆之權無謂之甚者唯割久春内以北  
避彼兇鋒如堀村垣二人所策亦可以保一時也  
柯太概覽載牟朗氏第一會問答不載第二會問  
答牟朗氏暴橫殆所不勝豈幕吏忌其貽詬辱不  
存其籍歟嗚呼唐太疆界使筒井川路二人當布  
氏來請之初以誠實款待之與布氏按檢其地因  
山河形勢劃兩國所屬與之申盟誓則庶幾可以  
保面南一隅也及牟朗氏再航彼漸觀我俗吏無  
能爲徒爭勝於口舌之末以爲此可以虛勢奄奪  
也其暴橫固無足咤者矣聞牟羅氏在愛渾城視  
漢土東南各省蒙兵亂舉彼得帝以前舊證逼覺  
羅氏論疆界遂并滿州沿海至朝鮮國疆數千里  
地于一啊喝下新訂條約彼所謂西伯里薩哈連  
僕所管轄謂是事也彼乘逼覺羅氏之勢鼓餘勇  
加我氣已吞東洋各國唐太之事不可復爲也俄  
已得此地移尼加羅伊斯居民開烏拉惹斯德克  
港賣屬地在米者移其民唐太其勢駸駸乎如將  
轉其鋒東洋各國者此亦殆宇内大勢之一變者  
矣聞勝房州見布氏于長崎布氏示輿地圖曰俄  
僻在歐北距西伯里三千餘里其地概不毛而略  
滿州沿海開一港於黑龍江口交通漢土則鐵道  
可興海軍可置不出數十年俄國軍艦輻輳于東

洋諸港是時俄方伐土兒其與英法二國構兵前後覆敗國事方棘而內講攻禦之策外運遠大之畧居之綽然無異平日膽識之壯規模之恢其稱雄宇內實有以也

僧月照遁薩摩投海

彦根大老起水戶獄先使間部總州林肥州西上搜索輦下逮布衣儒生及諸藩士出入公卿者是時清水寺僧月照與小林民部賴三樹梅田源二等往來屢謁尊融親王近衛關白有所經畫及獄起近衛公以月照與機密尤多囑西鄉隆盛潛匿南都隆盛與

河野曰段外人如虎獸國人如走之何不

尊攘記事

卷之二

十五

載月照與海江田信義及筑人北條右門擁衛前後偵卒尾至見三人面貌凜然不敢逼已至大坂曰偵卒耳目極密唯薩摩西僻可以潛匿也乃乘舟潛發至下關投白石氏會薩老疾請暇就國隆盛將追躡小倉達關白命先發月照待報不至乃航博多信義亦曰見隆盛謀事先發會白石氏告偵卒搜索甚急北條竹內二氏為月照謀曰平野國臣志切勤王可以囑大事國臣福岡藩士慷慨國事不得志其藩曾游京師交賴梅田諸人于二公卿迎國臣告實國臣慨然曰吾能護師達鹿嶋於是月照伴稱南都一乘院使僧鍬水至市來關吏誰何轉至黑濱廣造路

安達曰當時金是事者誰也如小戶藩主最

引以示關吏不惟乃至鹿嶋是時舊君新薨藩論一變諸臣怕幕威爭排隆盛曰月照有罪逃亡藩府安得私匿罪人唯縱偵卒捕逃人大為失體宜先乘舟避日向徐為之謀隆盛原受先君密旨在京師謀事諸有司不知是事曰隆盛匿私交非藩府所知隆盛無如之何乃往見月照退左右告實月照曰余固分萬死唯一旦就逮下吏累及尊融親王近衛關白伸首逼隆盛曰余寧死于同志之手隆盛亦知命窮乃走出命舟曰月色如畫今夜航日向至松神岬月照立松首詠和歌諷調忽與隆盛相抱投海舉船驚愕舟人入海救出不得忽見兩尸浮波上撈取上岸救

尊攘記事

卷之二

十六

治百方隆盛蘇生月照遂死隆盛流大嶋不問國臣乃奇異其服徘徊市街大久保海江田諸子私通音書遣旅費國臣以事關朝廷潛行上京詣近衛氏上月照所懷文書

余驗古英雄成大事創大業者其未得志必先罹困阨觸危難取新辱瀕死亡百折千挫不敢變其節而後天鑒其精誠漸通其命達其業其生於憂患而死於安樂古今如出一轍者蓋英雄雖有出倫之畧超世之才必也一投其身逆境勞其筋骨餓其體膚行拂亂其所為而後心膽百鍊操節一定可以擔天下之大事辦天下之大用也願隆

河野曰段亦一投身逆境百鍊操節以明不



蓋此本而說出始  
學之不然

尊攘記事

卷之二

十七

盛以薩藩翼戴聖朝。開中興之大運。而其始謀大  
事。數窮命塞。遂至投身海中。死而復蘇。此殆子興  
氏所謂天將降大任於斯人者矣。抑世談隆盛烈  
者。皆好說此事。余特疑隆盛資位不太貴。而近衛  
氏以關白之尊。囑之潛匿亡人。而不自疑。不知隆  
盛何所挾而得信于關白如斯之殷也。吾聞薩舊  
君慨幕府政體日非。將有所大為。器隆盛擢群衆  
授密旨。奔走東西。周旋於公卿及諸藩士之間。是  
時日下部勝野諸人上京。因三條氏有所謀。隆盛  
止之曰。待我藩奉勅東下。與天下諸藩議大政。此  
事未發。薩侯不幸在國薨。朝廷以無復大藩足依  
賴者。於是賜勅水戶氏之議始興。唯此事無文書  
可徵。暫記以質及知當時者。

浮浪唱義

森曰諸浪士勤王  
事。此篇不特  
于千歲此爲筆

外國事興以來。書生劍客。慷慨國事。競爲詭激。腰橫  
大刀。曰攘夷。刀脚穿濶袴。曰脫藩袴。論及尊攘。切齒  
扼腕。罵要路權貴爲姦物。嘲老成宿儒爲迂腐。悲歌  
劍舞。繼以泣涕。轉輾相倣。殆爲一世風尚。清川八郎  
爲庄內鄉士。以善劍遊四方。家固豪富。散千金結交  
四方。轟飲放歌。以豪傑自許。常曰。刃一醜虜。刺一官  
吏。丈夫之所不爲。余將與有志義徒唱大義。聞水戶

安達曰想是本案  
天狗

事者不戒有死而  
已浮浪之公案

尊攘記事

卷之二

十八

士人所在屯集。掠金穀爲軍備。以爲可與謀大事。去  
赴水戶。見其徒飲一酒店。通名姓。其人見八郎帶長  
劍。容貌魁梧。逡巡遁去。八郎大笑。觀者傳曰。八郎大  
喝。判天狗鼻。天狗水戶。正黨。緯號乃歸江戶。會同志  
四十餘名。謀曰。火橫濱。殲醜虜。奏狀闕下。則可以解  
宸憂。率天下舉膺德之典也。事若不成。有死而已。期  
秋冬之交。轟飲而散。途斬行人。邏卒四索。八郎恐謀  
泄。與其徒安積武貞遁跡出走。幕吏固目八郎舉動  
及是恐其激大變。逮其友池田中村嵩諸人下獄。搜  
索極嚴。此爲辛酉五月。八郎變。安入水戶。因薩人伊  
牟田尚平見黨士約義舉。潛匿與羽待期。尚平踵至  
曰。水戶空。論寡要無足與爲。乃經北越西上。備嘗艱  
苦。遂出京都。因田中河州見中山忠愛。忠愛大納言  
忠能長子。幼侍上側。有故屏居。薩長諸藩游京師者。  
竊因河州通聲息。八郎爲危言。却忠愛曰。如聞幕吏  
謀逼皇上讓位。不及今決事。則無復及也。忠愛然之。  
河州與八郎謀曰。方今天下誰直。幕府而不敢發事。  
無所受命也。今青蓮院官負冤禁錮。天下皆稱其賢。  
明若稱受親王密旨。募天下之義士。以是動西南藩  
士。其人入京。則因河州見忠愛公。爲通親王者。可以  
煽動四方舉大事也。八郎踴躍稱善曰。此行無所爲。  
則吾不復丈夫自居。乃使忠愛作與薩藩某某以下

命關字者。連帶  
故事。於此淨浪之  
流耳

論始有攝府

書河州亦作書數通村八郎乃與武貞尚平西航自稱受青蓮院宮密旨募義士肥後宮部鼎藏松村大成筑前平野國臣筑後真木保臣大鳥井敬太豐後小河一敏固慨幕府蔑朝威聞八郎是言謂千歲一時皆效効力王事國臣曰吾曹空奉唱義不若因大藩之力也曩余護月照入薩後又爲人僕入薩見大久保堀有馬諸氏談志此可以動也余屢與筑後真木保臣謀此事保臣世爲永天宮祝人讀會澤氏新論歎曰真我師也游水戶周旋會澤藤田諸氏之間西歸以尊王大義鼓舞弟徒久留米高山仲繩自殺之地士人多慕仲繩遺風其說大行家固饒富傾產

尊攘記事

卷之十一

十九

義和團之起下自生風

結交談及國事切齒扼腕曰天下有事我舉族殉王事小河一敏岡藩門族夙學國典以報國自期田中河州西游一見許以腹心於是諸人見八郎曰幕吏大逆至謀逼皇上讓大位豈義士旁觀之時乎國臣深憂輕舉誤事曰余見西鄉大久保諸人論國事皆有爲之士齊彬公雖已逝介弟泉州君豪邁有大志可與謀大事也衆然之乃期往復十日而發八郎作與高橋樞渡神田橋諸人書付伊牟田氏遣之國臣至覺嶋說義舉以答天下望呈所草管見錄培覆論培覆謂培朝廷覆幕府也泉州深嘉其志操賜金遣歸且告曰孤將待來春東上舉事諸君糾合同志會

八郎一西動天下亦大膽

於大坂國臣入薩三回始得要領而出伊牟田尚平見藩宰小松氏曲陳與八郎間關四方盡力王事小松氏慰勞同遣諸士踴躍爭募同志八郎曰事已成吾且上京奉中山卿再下乃留武貞東上報事田中氏此爲文久壬戌正月而同志諸人不知此事出于八郎僞託相傳爲急四方來集會井伊氏奉使西上恐謀漏泄率同志匿大坂薩邸邸吏拒不容堀貞通至自江戶乃空邸舍以待與木小河諸士待八郎不至泉州東發期逼乃率同志入薩保臣固爲本藩所屬目以事逼晝日挺刃發家藩發卒追捕遁入薩大鳥居氏闖死約西鄉大久保諸人會於大坂國臣亦

尊攘記事

卷之十二

二十

孫曰雖憤憤然四字括盡幕府之勢

至四方浮浪聞之來會大坂者百數日夜繕武具修戎備而衆皆烏合雖同唱勤王意見不一八郎曰先戮九條關白酒井所司代藉島津氏之兵鳴幕府之罪國臣曰奉鳳駕大坂下令七道以討幕府之罪而貞通在內參機密專主調訂國臣私就朝貴建言曰方今黠夷逼於外大姦驕於內如癰疽潰發天下安危旦不謀夕本年十月實爲大坂兵庫開港之期期至彼必借名起商館築壘壁繫軍艦兵庫爲畿甸之咽喉坐爲彼所扼何異借寇兵齎盜糧乎四方志士切齒扼腕將糾合同志舉義旗四方響應已至數百人然非籍大藩有勢力者不可以成大事今也嶋津

安達以是時國  
自大城合諸島  
余亦滿半  
力王學  
見國臣已

尊攘記事 卷之二

廿二

氏從壯士上京。此誠千歲之一時。謹獻三策。曰。發勅  
使。命久光。分軍為三。一拔浪華。二火彦根。三屠三條  
城。而後遷鳳駕大坂城。勅七道諸侯。親統六師討幕  
府之罪。其次勅久光。黜幕府有司。奉青蓮院親王。二  
條城。募四方義徒。鳳駕御大坂城。待大兵四集。勅親  
王統六師。問幕府之罪。其次從久光所言。黜幕吏張  
皇威。大坂城為行在。會諸藩。議尊攘之略。此三者。一  
斷聖衷。莫失千歲一時之機也。會黑田侯東觀至播  
國。臣將往說。衆皆危之。國臣奮曰。侯為久光諸父。余  
世係藩籍。以至誠說之。或可動也。乃從伊牟田尚平  
往說。侯愕胎。遽移病西歸。縛國臣檻歸。付尚平薩邸。  
先是越人本間精一。航南海。說土佐藩。抵長藩。見久  
坂寺島諸人。說以不可後薩人。馳至大坂。見八郎武  
貞。相携舟游。乘醉劫邏卒。幕吏難薩邸。薩人固苦  
此輩粗暴。辭八郎以下。四月十三日。泉州留浮浪其  
邸東發。因近衛氏奏。四方浮浪會京。擣謀暴舉。有勅  
留鎮關下。

余是時寓浪華。熟聞浮浪諸士所區畫。皆曰。襲九  
條關。白酒井所司代第。正其阿附幕府。逼朝廷之  
罪。顧彼以門族任世職。其罪三公幽三藩。皆出幕  
府之命者。彦老以此死于浮浪之手。亦可以已也。  
若朝廷肆是輩所為。使后族戚畹列族大官。無擇

浮浪此語不實  
為當時之京師  
則以浮浪為名  
入京不允此舉  
亦宜也  
數句狀其浮浪

尊攘記事 卷之二

廿三

老幼男女。蹂躪砲火。宛轉鋒鏑。罹屠殺之慘。則不  
特乖聖上卹民之旨。又將使幕府有所籍口。天下  
公論。亦將不與朝廷左暴徒肆濫殺也。蓋當時浮  
浪。概皆書生。劍客。激客。氣逼義憤。知勤王之為大  
名。而不知時勢人情之為何物。知攘夷之為大義。  
而不知歐米各國交際之為何物。問其言。則赤心  
報國。問其人。則無賴無行。其所謂奉獻旨問幕府  
之罪。則似矣。而與之論方略。輒曰。事成則山河事  
業不成。則死而已。此輩生死無所輕重於天下。其  
視死如塵。亦固其宜也。皇上任神人之責。公卿任  
宗祀之重。列侯任家國之寄。若使之輕生死如一

浮浪然。則神人無所屬統。宗祀無所托重。家國無  
所寄責。干戈繁興。叛亂交起。不特襲元弘之覆轍。  
為可畏。歐米各國亦將觀其後。逞其所欲。為獨不  
可疎毛髮乎。當時朝廷勅島津氏鎮其暴動。實有  
故也。抑當時浮浪蜂起。幕府不知所為。而朝廷推  
獎之水戶薩長諸藩。甘為之淵叢助之聲勢。猶恐  
不及者何也。蓋天下不用兵。三百年于此。武門世  
族。孱弱如婦女。家國元氣奄奄不振。猶衰老人在  
褥待斃者。加之歐米各國以大艦大砲。恐喝幕吏。  
其勢凜然。且不保夕。當是時。疾聲大呼。一洗太平  
積弱之弊。而復有為元氣。將望于武門世族孱弱

河野曰。如此論去  
而後浮浪為非  
命者。應所恨。就  
下振。至當時。則  
輩。歌。心。皆  
言。次。實。無。世。浮

海濱  
餘日印之使  
人拍案呼快

如婦人者也。耶將又望干。浮浪暴徒視死如磨芥  
者也。耶余嘗論維新大業成於浮浪之手。十居七  
八。以是也。

尊攘紀事

卷之二

廿三

訂正  
尊攘紀事補遺卷二終



尊攘紀事補遺卷三

宮城縣 岡千仞振衣撰

島津久光入京奏時事

島津氏以鎮西大藩繫天下之望先中納言齊彬用心國事慨然有匡濟之志常憂邦人不涉域外事情歷訪洋學耆譯航海造船鑄砲用兵諸書將改革藩政充實武備而後及天下未有所爲而薨弟久光攝藩政砥礪上節修繕戎器常以繼齊彬遺志爲事彦老已薨浮浪四起天下騷然久光將有所出會平野國臣來薩說尊親親王有密旨募浮浪乃決計上京先命大久保利通私詣近衛氏有所上聞是時天

尊攘記事 卷之三

下同注曰島津氏浮浪世聞是事爭馳書四方募同志久光深恐是輩輕舉破大事戒藩士曰烏合浪徒藉口尊攘煽動四方結合同志謀舉大事藩人亦往往與之交通切恐萬一暴動破國家大事釀出天下之擾亂遂爲外夷之所乘大機一失噬臍無及汝輩深戒于此進退一用孤命文久二年四月從壯士一千戊備準之東上四方志士田中清川平時小河以下途擁久光請與義舉者自數乃室人坂藩邸館待之先是長藩遺長井雅樂上京建白時事及此藩人久坂寺島諸氏恐後薩人奉宰臣浦肉戶二氏上京浮浪往來二藩之間物論大動久光意在奉勅黜姦

尊攘記事 卷之三

聞舉正議公卿列侯改革幕府失政深恐浮浪輩生事令左右懇諭曰凡事不得大裁則名義不立久光將詣近衛氏上奏時事以請宸斷諸君鎮靜以待乃留壯士一隊鎮足輩十三日發大坂四方傳聞浮浪館薩邸爲有異圖爭放訛言人心洶洶所司代酒井忠績大恐以幕府之法禁諸侯入京公卿見藩上使近衛氏馳書止久光上京又遍告朝貴莫得輒動若倉大原二卿在內私告久光以鎮浮浪爲名入京近衛氏固爲島津氏姻戚乃因近衛氏奏曰戊午以還幕政失當權臣擅制外夷乘釁上勞敝慮下失民心而浮浪輩妄唱尊攘之議四方響應天下騷然臣久

光將觀江戶謝賤息茂久屢違東觀之期曷圖浮浪輩途要臣駕議大事臣常服先臣齊彬遺訓將爲朝廷幕府効微力竊恐浮浪過激一旦暴動喋血簞下釀成禍亂也於是自不顧卑賤親詣闕下將口陳所見伏仰天威有旨翌日議奏傳奏見久光於近衛氏第曰聖旨將寬幕府違勅旨責攘夷之實効卿能體斯旨久光謹對曰夷狄外也非內也請先修內以及外乃條陳解青蓮院宮及鷹司大閣近衛左府鷹司右府幽厄釋二橋尾張越前土佐宇和島四氏幽閉以從天下之望且曰臣鄙人未悉九條關白酒井所司代何罪唯浮浪輩欲獲二氏而甘心不速免二氏



爲之所恐變發且夕幕府大政之所出黜閣老安藤氏舉一橋氏輔佐將軍越前氏任大老立上下尊卑之策明邪正淑慝之辨然後採天下之公論立待外夷之法正親町三條氏難釋尾張越前二氏久光正色曰此等瑣事猶不得如敵旨則如大焉者何敵斷一決則臣請奉以周旋若幕府拒命則有天討而已上嘉納之乃令閣老久世氏曰馳駟上京先是浮浪不平久光不與謀大事又聞久光受朝命鎮浮浪憤然曰余輩爲天下唱義泉州將何鎮有馬正義田中盛明私語曰吾黨一死唱義迂緩如此直使姦回得謀今日之事非斃關白所司代以霹靂手段一新天下

尊攘記事 卷之三

下之耳目則尊攘不可爲也若自吾而發事以勢逼泉州將有大處分也浮浪同然一辭期日舉事會大久保利通來傳久光命曰朝廷議新置親兵將薦諸君充其撰衆怫然曰僕輩皆雪國辱豈圖一身之榮乎聖上數責幕府之攘夷而朝貴軟弱如婦人女子今日之急在使朝貴卒勵義氣悚動天下利通默然浮浪愈以爲久光不足屬大事說長藩浦肉戶應之廿三日夜真木田中以其黨潛發薩人與之者三十人隊長長田佐一強留不可奮然曰奉命無狀自屠死之久光聞報大驚曰吾奉勅鎮暴徒而藩人黨之罪不可逭遣能劍者八人命之曰渠不聽則任汝

此亦應然事段

所爲八人馳至伏見諸士方食論君命不聽乃格闘斬有馬田中以下九人猶原氏投刀踞坐曰諸君山聞聞余所說吾言窮則死乃諭以大義諸士投刀就縛真木田中以下在次室不敢出手猶原曰寡君固不拒諸君義舉乃護送真木田中以下閉邸舍後付之本藩田中請赴薩摩舟中爲薩人所殺小河一敏以後期且告實不問

尊攘記事 卷之三

浮浪此舉始期十八日後期廿一日長藩諸士議所向曰浦氏護禁闕久坂氏攻所司代戒備以待是時余在大坂泄聞是事慨然曰天下之大事也十八日夜乘舟溯淀川風露滿天月色如畫舟人

雅斯之事成于足  
卷之三尊攘記事

皆睡余以是事在臆終宵不交睫平明至伏見聞然無事疑爲人所欺抵藩邸邸人蒼皇曰昨夜有令云二條市街老幼婦女空舍遶出余始知謀已破既而有廿三日之變嗟乎又急矣聞島津先中納言西下次伏見微行謁近衛關白關白以皇上深憤外夷凌辱私從齊彬進謁使殿皇上慨國事大息齊彬悚然曰陛下焦勞至此臣雖不肖願盡國力從事於此領旨而出齊彬在當時與水戶鍋島二侯稱爲三明君米國要請列藩獻策爭論拒絕如出一口而齊彬獨以造巨艦鑄大砲講航海之術爲急勢一言不及拒絕其在國聘荷蘭人長

蘇曰卿亦以爲不幸也

尊攘記事

卷之三

五

崎親出郊迎。屬之築六範臺。使諸士就學。建築。後半擊走英艦。實由有此備也。是時勝房。則從荷蘭人赴薩齊彬。一見爲布衣之交。余嘗見其答房。則書曰。水戶浮浪。襲東禪寺英館。至今猶持頑論。可長大息。嗚呼。當舉世瞋瞋。競排外人之時。能着眼於此。可不謂先見之明乎。其授旨西鄉。大久保。諸氏東西奔走。與各藩志士。出入朝貴周旋。時事。又命新進年少。有氣槩者。游學江戶。以講技藝。蓋將供他日之用也。其不及有所爲而薨。非特朝廷不幸。抑亦天下之不幸也。久光所奏。服先臣齊彬遺訓云。蓋齊彬臨死。托是事久光也。而久光入京。奏大事曰。夷狄外也。非內也。請治內而及外。語及攘夷之實効。則曰。採天下之公論。立待外夷之法。而不論及開港之事。此亦有說也。當是時。使久光公然論拒絕之非。則不特爲浮浪所唾棄。將使衰季幕府。愈事偷安。頽情萎靡。至不可救藥。顧此事當時一二腹心所知。雖所從壯士。猶不得與知。無惟浮浪輩。爭爲過激。爲不足與謀也。或曰。此役西鄉隆盛。從至兵庫。有罪謫大島隆盛。持論亦同。浮浪會堀貞通。至自江戶。久光頓變其說。假鎮浮浪之名。入京。隆盛遂以是得罪。今皆不可知。

河野曰。浮浪輩。非久光之所與知。

島津氏議大原卿東下

後日事見

尊攘記事

卷之三

六

久光留閣下。有曰。恐久世氏遷延。各回投間。坐失機會。建議發勅。使就幕府。諭朝旨。詔舉其人大原三位。固以正議爲朝野所依賴。及是上書自薦。詔舉副使。三位曰。二人必有二人之見。不如遣一人也。五月九日。特旨任左衛門督。叙從二位。奉使幕府。宣書諭旨曰。日來列藩憂國事。獻謀猷。如島津毛利氏。親遣親戚若重臣奏事。朕深嘉之。而四方志士。密獻策曰。朕親統六師。駐蹕函嶺。討幕府違勅之罪。或曰。首除姦回在京者。勅五畿七道。掃攘外夷。其言雖出。憂國至誠。粗暴輕忽。難遽施行。朕將使幕府更張內外。紀綱興復。祖先遺烈。大要三項。曰。將軍率列侯入朝。議釐革內政。處分外夷之方法。曰。依豐臣氏之例。命五雄藩爲五大老。以修沿海戎備。曰。將軍年幼未熟。政體舉一橋刑部卿爲輔佐。越前中將爲大老。以總幕政。汝論是旨。與老臣商議。三項施行。其第一項。出長藩之獻策。第二項。朝臣之所擬議。第三項。久光之建議。更有一篇。叙甲寅以來。幕府蒙蔽朝廷。曰。往年幕府遣小吏請勅。許外夷通商。朕却之。翌年堀田正睦上京。苦請勅許外夷通商。朕恐汚國體。不敢輒許。命與列侯熟議。上奏而幕府違朕命。擅許米英各國通商。與訂條約。朕不敢責讓。召三藩若大老。而幕

諸卿似此。雖非上照大公之罪也。

寧遠曰：臣聞陛下  
至此其來天  
怒此輩自取

沉痛之極

尊攘記事

卷之三

七

雖然管以此言  
所謂主情也  
一掃八百年  
天下實有故

府阻閣朕命。錮正議三宗藩。朕恐國內鼎沸。外夷乘其隙。特勅德川慶昭與列藩協力。輔佐將軍而幕府不奉命。遣間部詮勝上京。逼朕所信任親王大臣。幽閉盡逮。朝野慨國事者。檻送下獄。奏曰：訂各國條約。堀田正睦所為。今劇絕彼條約。立生大變。行待武備充實而後從事。於掃攘朕責其與日耳曼伊太里結條約。及許英米築商館。測量環海。幕府曰：一時權宜。勢不得不然。又曰：公武一和而後奏掃攘之功。請降皇妹尚將軍。顧古來無武臣尚皇女之例。朕深思不可以一妹易祖宗天下。乃約不出十年。奏掃攘之功。許其尚皇妹。顧外夷事起。志士慨家國蒙冤枉死。非命者不知幾數。今也皇妹降嫁。東西一家。宜大赦天下。釋親王大臣以下之幽厄。限十年舉海內全力。掃攘戎虜。以匡濟神州之厄。若因循姑息。坐陷彼術中。如水益深。火益熱。遂蹈印度支那之覆轍。何以謝神聖在天之靈。朕將倣神武神功之遺烈。率公卿百官四方牧伯。親征戎虜。汝等體朕此旨。事達江戶幕府。震驚急免。安藤閣老釋一橋尾張水戶越前四氏之罪。令溜詰諸藩上所見。延見在府列侯。親諭曰：泰平日久。綱紀頹弛。武備廢壞。外夷乘是虛隙。續來要皇上為之焦勞。孤將入朝。親奏國事。取天裁以更張國威。建不世之偉業。卿等有所見。極言無忌。眾皆悚然。

此語猶如  
推腹不可解者

尊攘記事

卷之三

八

不假借一生不  
則名分掃地

尋大原卿至。禮待有加。久光首詣越前氏。圖議使事。將軍率越前會津二侯及諸老。延大原卿拜受使命。曰：敬領勅旨。熟議以聞。卿退見越前氏。反覆懇諭。而諸老恐權勢歸一橋。越前二氏曰：將軍已長用輔佐。親藩為大老。無前例。久光見脇坂氏曰：聖上發特旨諭幕府。豈可拘泥末節。墨守古例乎。又曰：將軍入朝。少緩其期。似無不可。且將軍入朝。廟堂異見。蜂起處分甚難。不若越前氏為政事總裁。代將軍入朝。陳大議。候聖旨。為事至。易閣下其思之。脇坂氏領之。猶難。一橋氏為輔佐。曰：此有二將軍也。與板倉氏詣大原卿館。請曰：使一橋氏參政。務謹奉勅旨。唯除輔佐名稱。卿不肯。廿九日登營。囑後事從者。意色甚決。曰：奉使無狀。何顏視人。脇坂氏進出曰：勅旨不可違。請為準。輔佐卿正色曰：纔有準一字。此不奉勅旨也。脇坂氏語塞。曰：謹奉命。卿猶恐幕議難保。不敢發。七月九日幕府命一橋氏將軍。輔佐越前氏政事總裁。久光與二氏相得甚歡。屢共議國事。揆定所司。代改官武中間名。稱失體者。追褒故水戶中納言。追責井伊直弼。責罰酒井間部安藤三氏。及朝貴附直弼者。遣歸列侯。在府妻孥。緩參觀期。命大藩護衛京師。如此類數十條。八月廿一日。大原卿以使事。丁酉發前。一日。久光途斬英人遞駕者。以故駐品川三日。或勸取。



自是此公卜也

蘇氏和議

先見何事  
昭昭可見

尊攘記事

安達曰老臣憂國  
之語

森曰此  
論中外人心  
時已論及可謂  
矣

道本曾不可請從護卒亦不可西上復命賜物賞勞  
詔久光入朝辭曰臣一布衣官武有常典非賤人所  
勝乃任大隅守命駐京護禁關時毛利氏蒙天眷盛  
用事公卿爭延浮浪又以內旨徵因土諸藩攘夷之  
說盛起久光上書曰幕府新奉勅宜徐察政績不可  
叨以橫議者言聞之近日內旨四出擅召列侯恐一  
橋越前二氏不自安漸生嫌隙不省在京月餘日賜  
劍及物西歸將發近衛氏密問意見乃手書以答曰  
幕府舉越前一橋二氏閣老私忌之且勢使大權歸  
二氏不然則勅意不行二氏亦無能為也幕府人才  
無踰二氏者二氏無所為則幕府不可復為越前氏

卷之三

之入朝且問十年以後處外夷之方如何攘夷一事  
且使官武列藩熟議而後相宜處分開鎖一大難題  
幕府已開港朝廷強之掃攘則勢不得不奉命而掃  
攘不可為如此則朝命廢而天威殞浮浪蜂起國內  
大亂實為可虞今疆外人在橫濱者臣一家兵已足  
唯各國合兵以討我不義不信之罪則我忘兵三百  
年勝算不可必故臣常謂方今急務在一洗舊弊充  
實武備唯以攘夷唱天下則激論之士得志益肆暴  
橫而不唱攘夷則無武備充實之期臣竊恐遂以是  
蹈印度支那之覆轍也今也幕府悔過委政一橋越  
前二氏二氏亦日夜勵精從事於此若二氏偷安眼

機以道直當時  
生論及國事口  
出津貼如驚風  
在下

尊攘記事

卷之三

此事以下承接不  
其體九篇叙五  
悲壯淋漓感憤  
之抑壓門數語  
之不令終所以  
其身二二遇者  
必得解一水

自古雄才

前無所施為則朝廷有煥發大號與天下更始而已  
余先米使航度一年游江戶入昌平覺前後在贊  
九年其於當時之形勢畧得其要領彦老遭阮翌  
年游京攝仰皇居之巍然追思王朝之盛時憑今  
吊古慨然而歎松本土權松林伯鴻為同窓舊交  
握手大笑曰百年奇遇矣乃借一鄧同居京攝占  
天下之上流為人文之淵藪而我三人所父皆磊  
落奇偉跌宕不羈之士日與之論天下之勢古今  
之故言及當世則痛論極言拔劍而彷徨仰天而  
歎息會島津氏率壯士入朝將有所為乃與二人  
談志慨然以為千歲一時矣入京于一二公卿往

來薩長二藩及浮浪諸士是時暴徒數刺為幕吏  
耳目者梟首二條債官不敢問余一日會諸友語  
曰北魏高歡觀衛兵火張藝宅曰事可知歸家傾  
產結士顧彥老以幕府大老鹵簿儉從道路填咽  
而為十八浪士所要喪元路傍時事至此余將歸  
鄉學高歡所為諸友壯之拂袂而起遂為藩邸所  
召再入京都此事距今廿餘年當時所交諸士士  
權伯鴻以下或死刺客或死兵戈而戊辰之事揆  
風雲乘際會列名爵班撫恤者不在干彼而在于  
此何天之薄於為始者而厚於為終者也嗟乎英  
雄事業固非一書生所辨唯遭亂世處事變名義



所在扶鴈絕脰斷行其志此謂之大大天其重大義仗大節如諸士真爲可尚而已

親征中止

親征有日因備米澤三侯及阿波世子入諫上漸有悔心中川親王曰陛下尙知其不可斷之宸衷則臣請盡力處分乃協謀薩藩及曾榮二侯八月十八日鷄鳴參內入奏會衆定三侯尋朝勅關唐門及九門雖公卿不得出入因備各藩率兵入朝警衛非常號砲一發會薩二藩兵族至屯凝華門於是召近衛氏父子二條德大寺四卿有旨停傳奏議奏及參政寄

尊攘記事

卷之三

十一

人之參內禁長藩及親兵入九門親王與四卿列座御前傳旨任柳原中納言議奏曰親征大事內議所未決而議奏以下爲長藩暴徒所逼叨稱敕旨頒告中外長藩煽動浮浪要請親征過激粗暴殆亂天下汝知朕是旨召中山大納言正親町三條中納言阿野宰相中將復任議奏三卿恐怖固辭乃爲署準議奏命正親町大納言庭田中納言集室左大辨宰相署議奏班會衆以下列侯進見議奏諭旨曰毛利氏挾野心運姦詐以親征要朝廷此親王以下所不與汝列藩體聖上是旨毛利元純吉川經幹聞歸促爲變起率衆而入各門稱命不通乃赴德川關白處

卷之三

曰各藩戎服禁內騷擾而諸門拒臣衆敢問何故關白遣人問狀諸門呵止元純經幹逼關白以事狀群衆充溢第內驚覺會柳原大納言至傳旨關白參內勅曰夷狄征討時機未至權停行李列藩親兵聞變入諸門皆閉三條實美第在九門外衆群至會實美衆朝旨譴責親兵憤然皆曰卿正議精誠天下所觀此命必有所由族擁至關白關白不在是時長藩衛塚町門有旨徹衛會薩二藩代之長藩不奉命柳原大納言往諭曰權退衆郎內待後命衆不可大納言赴關白邸見益田彈正諭旨且曰毛利氏効力王事敕旨所嘉唯親征處分迹涉粗暴敕念不安宜權

尊攘記事

卷之三

十二

退士衆嚴鎮暴動彈正曰夜來關下騷擾諸藩戎壯奔走而三條卿以下無故停朝臣等職守禁門備非常請釋疑而徹衛大納言反覆開諭是時會薩兵士進塚町門內前列大砲長藩士奮激如將戰者大納言諭會薩轉砲準長藩乃付塚町門所司代退衆詎言三條實美集親兵作亂勅清水谷宰相中將責問其肆率親兵實美不在長藩已徹塚町以衆奉三條氏屯洛東妙法院三條西四條東久世錦小路壬生澤豐岡七卿來會皆曰薩人假朝命復私怨三條氏固不善中川親王又以爲親王所陷憤懣曰乘機討二姦三宰曰讒構已深宜西下岡後舉三條氏

親兵。真木淵上水野宮部上。方提六人。從馬豐岡。托事遁去。二宰留書上言曰。弊藩已免塚町警衛。外夷開戰以來。兵事方殷。臣等以眾西歸。專盡力海防。足夕詔告中外。曰。親征本非朕旨。二三朝臣不達大體。名爲長藩暴徒之所誑。誤矯旨。頒告本月十七日以前。告命悉皆是徒所爲。朕本旨不在此也。鷹司關白上表請免。乃勅二條卿代之。廿日削三條卿以下六卿官位。停毛利氏父子入京。逐長藩士在京者。廢參政寄人。放還諸藩親兵。薩長二藩首入京。帥論國事。天下始知勤王大義。而二藩旗鼓自立。勢不相容。至是互構嫌隙。因備阿藝憂之上。書曰。攘夷之本在

列藩協心。而薩長二藩唱大義。朝廷依賴。所謂同心一體者。伏望降旨。調停使二藩戮力。以責其成功。不報。

余於前編論是事。曰。先帝熟考大勢。幹旋時機。運神算於方寸之中。奏偉績於年月之後。蓋天機霸府之德。將復大權於朝廷。此天意人心之昭然者。先帝斷之於方寸之中。不少疑也。而外夷事起以來。天下論事者。紛紛擾擾。毛利氏曰。攘夷島津氏曰。開港。先帝以攘夷大義誓天神地祇。其刻攘夷期日。今天下。天下不應。至以乘輿親征。號令天下。抑亦逼矣。而天下除毛利氏以外。無復贊成之者。

於是聖衷不安。漸生悔心。曰。攘夷開港。此兩者水火不相容。而雄藩借此互爭勢力。此殆天將合之。必先離之。將治之。必先亂之。者。勢非人力所能支也。且與奪大權。方在幕府。黜之。罰之。怨歸幕府。而朕位億兆之上。一勝一敗。無一所關。徐相大勢之所歸。輿論之所推。爲之處分。可也。毛利氏之乃心於王室。盡力於朝廷。固不以一朝疎斥之故。放貳其節也。故此變斷然斥毛利氏。不少疑也。嗚呼。毛利氏先天下入京。師輔翼朝廷。朝威日隆。而朝得黜罰。蒙詆罵。天下誰不爲朝廷寒心乎。而毛利氏以是砥勵操節。奮發志氣。六卿在西。鎮西諸藩

人心日傾。勢力日旺。三宰之犯關。全軍敗潰。名義不立。凜乎其危。而闔藩君臣投身死地。百折千挫。鋒銳毅然。破環疆幕軍。千一擊之下。遂連四藩。與討幕之義兵。奏回天之大功。抑亦偉矣。夫天下大物也。其出于意料之表。有如此者。而先帝斷然下此命。震驚天下。運神算於方寸之中。奏偉績于年月之後。此豈尋常庸衆人所能測知乎。

浮浪起兵大和

凡藩士犯幕。憲綱大法。必累及藩主。故外國事起以來。志士慨國事者。往往請脫藩籍。稱浪人。奔走四方。

互募黨援脫藩浮浪年多一年天下嗷然三河松本  
衡以儒生備前藤本真金以畫工下帷筆下名聞四  
方真金與清川八郎以下投薩邸以論不合去衡與  
梅田賴諸人與謀韜迹而免浮浪間舉正議之士必  
稱兩本侍從中山忠光年少好義俠潛游長州與日  
下高杉諸人交結爲浮浪之所歸心長藩之志自親  
征衡真金游說朝貴煽動浪徒頗力親征諸下  
歲時矣與吉村寅太池內藏太以下二十八人奉  
忠光至大坂稱朝使赴下關乘大船一隻出大保山  
海口衆皆剪髮投海矢死生無他曉至堺港館狹山  
一寺遺寅太邑主北條氏曰皇上下詔親征此臣子

尊攘記事

卷之三

十五

効力國家之秋忠光將行募義士迎鳳駕於大和神  
武帝陵北條氏名族切冀盡力王事無以辱家名藩  
人驚愕使宰臣來答曰皇駕已戒敢不致力邑富家  
水郡氏因通謀浮浪掃館候迎乃領軍令衆皆戎裝  
帷幕旗幟皆畫菊章陣二日市觀心寺并楠方將塚  
納甲冑禱捷真金率同志出迎路左五條隸幕府代  
官治焉乃分諸士爲槍銃兩隊攻官舍責鈴木源內  
剥民膏厚自封殖梟其首論邑人以朝旨榜所在曰  
皇祖天照皇大神開天地生萬物凡食土者孰非  
其胤皇上以神胄御天位億兆各修其職以奉皇上  
此天地之大經不毫髮容疑者汝衆庶辨此義官今

尊攘記事

卷之三

十六

戴皇上奉朝廷以報天祖天孫之皇恩又曰皇上慨  
洋夷汚巖皇國親詔行幸大和議軍畧於春日社率  
六師征醜虜忠光先天下舉義首誅姦吏苦民者當  
發號之日昧大義誤方向者宜移兵糾其罪八師伴  
林牧岡岡見原田諸士四方馳至已而中川親王通  
謀薩會諸藩沮止親征長藩得罪六卿西遁廟議一  
變衆聞是事愕然先是平野國臣奉朝旨止忠光暴  
舉至則諸士已畧五條勢不可中止會安積武貞池  
田謙率同志十餘人來會曰皇上爲賊臣所蒙無  
復可爲已開兵端有張軍威待天定而已乃議軍畧  
松本衡固結十津川土豪曰十津川大塔皇子所潛  
匿其民沈毅其地險阻以此地爲根據可以支時月  
乃留安積水郡諸士督五條民政奉忠光赴十津川  
途過天辻四周絕壁爲天險之地乃定爲本營日役  
民丁運糧食繕戎器遣人十津川說以義舉邑豪族  
乾野崎氏來屬遠近奔附衆凡千二百人高取藩  
高野僧徒通使贈物聞紀州郡山二藩合兵來討出  
兵吉野川至則訛傳高取藩食言不贈糧食乃以兵  
五百往攻藩兵據城發砲十津川隊聞砲聲潰亂餘  
衆不支乃退天辻吉村中垣小川以下愠其無功乘  
夜入城觀一隊將巡夜鏖殺之吉村中銃丸左右扶  
歸既而紀州藤堂彥根諸藩大兵來討衆退保十津



尊攘記事

卷之三

川松本牧岡森下保天辻安積池田岡見保和田設奇誘敵每戰皆利乃謂十津川地淺不如潰一方出大坂航西海乃奉忠光營天辻遣瀧谷伊豫作藤堂氏營曰親征詔下忠光將與同志護鳳駕効力戎馬會一二賊臣矯詔旨止親征忠光此舉將糾合同志討賊臣誤國者以安宸襟也因辨前後勅書真偽不屈乃飲之伺睡縛之隊將感其志請充諸士攘夷先鋒立功令自償不報當是時紀藩兵塞吹口藤堂氏屯五條井伊氏屯下市浮浪鋒漸銳九月移營上峯山與藤堂氏戰於大日川却之彥根藤堂兩道來攻眾負險奮擊自午至暮是夜森下前田甘名潛襲下市縱殺番兵放火鼓噪而進敵疲晝戰變出不意狼狽委糧仗而走翌日藤堂氏來攻聞井伊氏大敗引退藤堂氏將遺書諭曰天下孰不知諸君赤心勤王若投兵來降奏狀請生真金書答曰姦徒矯旨天下之所切齒盡戮力義士盡勤王之實中川親王遣人諭十津川豪族叡旨所在眾相告逃散人無守心忠光知不可為集眾訣別曰天涯地角唯其所去請生死相俱者四十餘人將踰熊野出新宮緣藤葛攀崖壁夜至大峯絕頂候木本尾鷲紀兵伐樹塞路列營嚴備乃轉路山谷間闕出河內宿白川眾疲憊不能步休兩日藤堂氏令村民曰舍浪徒及供使役者悉

尊攘記事

卷之三

刑眾大恐空舍出避諸士昇病傷夜踰山嶺至伯母谷曰彥根藩兵屯和田距此一里乃撰壯者為先鋒冒進至和田村丁群集不見敵骨迫令擔戎兵暨進里許已暮見農夫知為敵候脅為行導至荒田口間道登小埠下瞰敵兵一隊篝火就途一隊下發砲更隔數町篝火照綴是為本營乃以天誅一字為暗號疾呼衝本營營兵四出殘卒僅六七十名急遽發砲短兵已薄眾固苦無死所縱橫衝突殺敵略盡忠光與左右五人挺進僵二人傷八人繞出營背前後夾擊餘兵散走乃放火民家候卒言紀兵距此半里篝火嚴守來暗散走可期萬一少延遲則無全理松本藤本病傷不能步奮激自刃餘或自屠或就擒忠光從七人穿林莽攀險峻晝伏夜行間關經三和櫻井出大坂從池內藏太一人投毛利氏邸逮卒擁門邸人答曰不知私命舟遁長州自浮浪舉事至此四十日紀州藤堂彥根三人藩多亡士眾僅致蕩平談者皆壯浮浪所為而嘲三藩兵無能為矣平野國臣歸自五條廟議一變六卿西奔國臣亦在罪籍中乃與同志西走投長州說三條卿以舉兵應大和不可澤宜嘉奮曰豈可不贊志上義舉乎國臣與美玉三平堀義則仙田正弘戶原繼明白石廉作小田村信一等奉澤卿航至播磨會大和軍敗事不可



爲國臣不欲變初心。入但馬襲生野代官舍略金穀。集徒衆草檄鳴幕府要朝廷矯詔。斥正議公卿。罰勤土諸藩之罪。國臣有人節水戶長州諸土相傳會集。立得百餘人。一舉略生野。出石姬路龍野豐岡諸藩。合兵來討。國臣奉宣嘉妙見山挺身格鬪。銃丸中腰。人息曰可以死。囑宣嘉田岡高橋二人遁伊豫。十月十三日軍敗美玉堀以下或戰死。或自屠。國臣爲出石藩所擒。送京獄。翌年長兵犯關。幕吏或勸王諸士內應。斬國臣以下三十三人。

世傳南山日記曰。松本奎堂振奎堂自刃鷲鹿口。此書叙忠光入大坂。蓋以奎堂有文名托名而已。

尊攘記事

卷之三

九

此書叙此書三致意

卷首記舉兵本旨曰。朝廷責幕府以攘夷。擢一橋越前二氏輔佐將軍。而二氏不奉攘夷之命。幸天未絕我命。聖上赫怒。以攘夷大義誓天地。廿四卿確持正議。毛利氏與四方志士盡力國家。替成親征大策。聖上嘉納。頒告進鳳。駕會天下義士於春日社。議攻取之略。奏聞天之偉業。在此一舉。而中川親王持異論。辭鎮西將軍。一條二條德大寺諸卿亦多構異。同爲應乘時。叙旨中沮事至此極。臣等恐皇威不立。正氣不振。遂至率天下陷夷狄術中。且太平三百文。怙武烈士氣掃地。自非用于戈。疎動天下。則國論不可得。而一焉國脉不可得。而

此當時之漢文也

尊攘記事

卷之三

一

河野曰。廣門府云。亦有。負死。及。子。游。大。和。前。等。道。諸。卿。等。於。此。也。此。事。不。到。死。友。皆。

維持焉。臣等不自量。糾合同志。唱大義於天下。爲攘夷先鋒矣。中山忠光臨發。與三條東久。里爲丸諸卿書曰。幕府違勅不一。而足朝恩寬大。不問其罪。彼愈爲得計。其所上言。書辭悖逆。所謂是可忍也。孰不可忍也者。臣等不禁憤悶。與同志謀義舉。有日。會詔旨親征。頒告中外。實爲千歲一時。綸言一出。空論無用。臣將途出攝泉。行募義徒。赴南都奉迎。龍駕機事。尙常用兵。要神速。今已頒告親征。宜即日進鳳。駕若遷延。度日奸徒乘機。以弄唇吻。以枉聖旨。則大機失。百事瓦解。賊臣跋扈。外夷猖獗。神州陸沈。而諸君立廟堂。參樞要。無可復遁。罪于天下後世也。觀此二書。可知當時浮浪之志也。或謂此輩剽略城邑。殺戮無辜。破瓦盡墟。無一利益。謂之吾志在勤王。可乎。嗚呼。此因成敗而立論者。顧他日薩長諸士。謀王政復占。若使足事不幸中敗。則天下又將笑其破瓦盡墟。無一利益。況此時廟議一決。頒告親征。而此輩投死地。以振起士氣。宣揚皇威。爲已任。略其終而原其始。恕其迹而取其志。則此舉及筑波浪徒。固將在識者所贊。歎稱揚也。

正尊攘紀事補遺卷四

宮城縣 岡千仞振衣撰

水戸浮浪道團西上

十月廿二日諸士通姦徒者皆出降。幕軍乘機齊進。火起四方。武田山國以下殊死奮鬪。衝重圍而遁出。黑澤本間尼子飯田諸人死之。諸生隊扼大宮。以七  
安達、除、森、山、本、間、尼、子、飯、田、諸、人、死、之、諸、生、隊、扼、大、宮、以、七、大、砲、進、擊、走、之、疏、波、湊、小、川、潮、來、諸、隊、來、會、衆、猶、千、餘、人、曰、猶、可、爲、也、次、大、子、村、諸、生、隊、據、山、嶺、砲、擊、武、田、率、一、隊、仰、攻、岡、部、貞、治、死、之、乃、退、衆、相、議、曰、吾、曹、將、勦、絕、醜、虜、以、成、先、君、之、遺、志、不、幸、爲、姦、黨、所、陷、得、罪、天、下、事、至、此、唯、有、西、上、因、一、橋、公、訴、情、事、朝、廷、而、

尊攘記事 卷之四

已分全隊爲五隊。田丸山岡藤田井田諸人各統一隊。乃推武田爲總督。出下野川上。村民空舍而避。黑羽藩兵二百人。倒木石塞道路以待。砲戰敗走。轉出蘆野。發使告情。邑主不敢防。至越堀。幕軍遁走。大田原藩使來告曰。小藩寡兵。固無抗諸君之力。唯諸君出城上。乃寡君死期至也。衆義之。聞道經那須野。出日光道。村民恐怖。供張以待。至木崎。安部氏兵守焉。曰。不得通一兵。衆嚴隊而進。守兵辟易。既去里許。自後發砲。至本庄。發使告情。吉井藩不敢支吾。次下仁田。平明高崎藩兵來襲。衆皆甲冑。井田一見曰。易與也。以廿七人衝突全隊。繼進。敵死者六七十名。一軍

小藩無足觀。比比皆是也。

是時尾藩不出兵。

尊攘記事 卷之四

奔潰。衆勝而進。藩兵墜橋。自山上發砲。山岡桴鼓。亂流而進。藩兵知勢不敵。放火而退。踰荒船山。出下望月。松本藩兵退保和田嶺。翌日踰嶺至豐橋。松本諏訪二藩兵凡二千。僵木石斷澗橋。列營五所以待。挾澗砲戰。勝敗未決。武田魁助潛兵攀山巖。砲擊其橫。敵駭。顧本隊得勢。吶喊竝進。二藩兵大敗。已夜。躡尾冒進。至下諏訪。捕獲無算。轉出伊奈。發使飯田藩。藩導由間道。除街威沙。供待頗盛。過清內寺關。邏卒避遁。出水曾道。此地屬尾張藩。驛吏出接。禮意殷勤。過鵜沼。距犬山城半里。不復出一兵。度鄉土川。大垣藩兵守揖斐。轉出長峯山。險不通車馬。凡百器仗。每人負檐。出大河原。更踰一山險。曰蠅嶺。此爲濃越國疆。戎器以外。悉投溪谷。負病傷者。閒關出黑遠土。大野藩火民家。倒巨木以防。時方嚴冬。積雪滿山。衆皆露次。凍飢交逼。日行二三里。達今庄。彥根藩兵退屯府中。先是。橋氏得警大驚。上奏曰。浮浪蔑天憲。橫行至此。臣罪也。請親出征討。與弟昭武率會衆以下各藩兵在京者。出次疋田。大垣彥根越前三藩兵爲先鋒。命加賀藩夾攻。賀藩大兵陣新保。四面皆敵。進退維谷。使告曰。臣等奉先君攘夷之遺訓。常恐失墜。爲姦黨市川朝比奈諸人所陷。蒙幕府之譴。無由雪冤。一橋公實先君寵子。而寡君貴介弟。將上京訴微忱。

安達曰。橋氏獨不從。故幕府上京之時。亦不從。

尊攘記事 卷之四

請爲臣等開道曰日本藩受一橋氏之命守此衆始知一橋氏將大兵出討曰我輩素志將明大義於天下耀皇威於海外也而區區本志未明徒蒙亂名而今橋公統軍征討此投戈歸誠之時宜表誠軍門委死生之命衆或曰大炊公以本藩支族蒙鎮撫台命而猶不免坐蹈覆轍不知百戰力盡而死武田不可詣軍門陳狀曰市川佐藤朝比奈三臣實爲逆臣結城寅壽殘黨率諸生輩構非圖謁中納言公誣罔百端遂黜藩宰代之布列其黨要官從腹心五六十人徘徊殿中以暴威脅一藩正生列老職深恐逆黨跋扈遂忽攘夷之勅命得罪天朝與同志東上幕府設關不入留八日得始入上邸陳狀中納言公三姦得罪東歸衛城門築壘壁以爲戰備國內騷擾幕府奉宗藩大炊公往鎮正生奉故左衛門神主從之奸徒悍然發砲以抗諸上遠近來保正生輔大炊公次湊館延賓閣奸徒戮力幕兵戰爭日夜大炊公爲其所誘殺至十月僞誘諸士內應乃與田丸山國以下出圍將西上訴冤一橋公遂戰于下仁田和田嶺始不知何敵後聞捕虜言知其爲某某藩臣等心事非有他志伏請大藩照察微衷永原甚一深感其義周旋備至一橋氏以其迹涉亂逆却之乃請降曰臣等誤抗幕府又騷擾沿道諸藩犯法觸憲爲罪不細謹歸

尊攘記事 卷之四

命韓門既分萬死亦復何言唯素志在憤亂賊僞家國而死蒙流賊汚名大藩少賜照諒命錮加藩藩兵護至敦賀收刀槍武器館本勝寺衆凡八百二十三藩請命諸士攘夷先鋒令立功自償不報翌年正月十五日參政田沼代傳幕命斬武田藤田以下三百五十二人流百三十六人朝比奈黨又收武田田丸山國諸人子女在水戶者無少長處斬因藩安達清風深傷武田絕嗣謀承原匿其幼子源五後入政維新正黨在京者奉勅東下討朝比奈佐藤市川以下姦黨爭三十年烈公所素養文武人才死亡略盡  
此前年余以事赴江戶訪武田耕雲延余上座曰余耳熟子名常以不相見爲憾是時一橋氏東下日議攘夷有勅再上余因問曰先生亦能陪一橋公乎耕雲正色曰余昨奉勅陪一橋氏於京師與在京諸藩士奔走日夜刻攘夷期日奉藩主東還暫贊幕府攘醜虜而今無狀如此何顏西上前日見一橋公辭曰公欲臣再上蓋斷臣白髮頭顱以謝罪闕下耕雲決死也久矣事至此固有不不得不然者也此役旁近諸藩出兵征討我藩亦有出援之命余屢見藩宰論無征討之理藩主上書辭之



小野曰：當時見方  
相：提議時人皆  
可說今用之矣  
及長相：蘇丹亦  
同乎如此

錄于此。曰：幕府已奉掃攘之命，而因循時月，無一  
所爲。故水戶藩士慷慨奮激，至互構干戈。幕府果  
能大舉掃攘，則此輩奮躍致命於鋒鏑，此公侯之  
干城者。此輩雖火人家，掠金穀，迹涉亂逆，原其始  
心，皆重國體，尊攘之大義者。名義所在，縱令奏  
勦絕之功，隨滅隨起，爭亂益甚。且浮浪嘯集，幕府  
出兵征討，此以石壓卵者。而更命與羽諸藩應援，此  
坐損威名也。此雖細故，頗關大體，故正言不諱，請諸  
老再思。幕府不復強會家茂西征，命我藩衛江戶城。

### 竹內小出出使俄國論唐太疆界

#### 尊攘記事 卷之四

牟朗氏來使以後，俄人陸續南徙，其勢駸駸。函館鎮  
臺屢論不及，今劃疆界坐爲彼所有。會竹內野州松  
本石州使歐上列國，請延兵庫開港期，乃命逼俄國  
劃唐太疆界。文久二年七月，至俄呈國書，宰臣伊克  
知由布出接，問唐太土人自稱愛儂何謂。人曰：土  
人稱來如此，不知何謂。伊克氏曰：發檢此島實爲俄  
國。漢土人命此島曰薩哈連，舊圖陸接西伯里，今也  
地勢一變，環島可通舟船。滿人往來漁獵，未曾服貴  
國政令。故曩發牟朗氏，請劃海峽爲疆，二人曰：唐太  
占連黑人種屬滿州，愛儂人種屬日本。伊克氏曰：占  
連黑即滿州人種，愛儂爲千島人種，此二種容貌

於今日本圖  
亦有此島

平定曰：自北而南  
易自南而北難者是也  
俄國日本故然

語判然不同，皆自北而南遷者。貴國書曰：自北而南  
易自南而北難者是也。二人曰：國書所稱言人情移  
暖地則易，移寒地則難，不及今定疆界，則貴國人民  
南遷者日衆也。弊國深恐彼此混居，漸生爭隙，以害  
兩國親睦之本旨。五十度以南，日本政令之所及，故  
欲以此地爲疆界也。伊克氏曰：往年我邦發檢中人  
以其民專營漁獵，日逼凍餓，故發吏民撫卹之，以延  
疫流行，微歸當時不見。日人二人曰：爾時屬松前  
藩治之，故忽無卹也。八年前收爲公領，置吏胥布政，  
今伊克氏出與地圖，指示滿州沿海曰：俄國版圖，且  
卅五萬里，固不欲爭，最爾海島唯不可無，故割土域

#### 尊攘記事 卷之四

俄國接漢土固涉東洋地勢，滿州沿海二百年前皆  
屬俄國，以其僻遠，徹兵衛，竟爲清國所并。前年與清  
國論爭，復此土蝦夷人自稱曰愛儂，蓋此地邊鄙不  
多接外人，外人問其名，自稱曰愛儂，愛儂猶言人敢  
問唐太何義。二人陳不知，伊克氏曰：使唐太爲日本  
疆域，豈有不知唐太爲何義之理乎。二人默然。伊克  
氏曰：欲完四隣信義，無若因天然山海形勢爲疆域。  
俄與清國接壤，亘千百里，未曾爭疆界者，無他，因天  
然山河形勢而爲之界限也。唐太最爾孤島，以五十  
度劃疆界，則牛馬風逸，爭論不斷，勢將至用于戈，故  
切欲以唐太宗谷中間海峽爲疆界。二人曰：南半島

俄人何憚人其  
河野正清人全  
練也



屬我記載歷歷豈可無故付他國乎。曰日人往來此地爲四五十年來之事。土人亦自稱滿州屬地。且此地屬貴國。往年我置中兵。何故不誰何。曰此地極寒。戌人春往秋歸。貴國發兵。會其微歸也。往年貴國人入久春古丹。火官舍掠財貨。是時貴國以無故寇隣。國罰是輩。貴國固認此地爲日本也。曰我邦舊記具在此。入得撫擇捉也。曰前寇得撫擇捉後寇久春古丹。曰此事既往。不足以爲證。屢請海峽爲疆界。將以完兩國隣交也。若以半島爲疆則彼此紛爭。勢不得不開兩國罅隙。不若姑固下田條約以全懇親本旨也。二人曰我邦固不強人土爲己土。視古丹以南

算據記事 卷之四

我政令所及此地實爲五十度。不特我邦記載可徵。萬國輿地圖皆以五十度爲日俄疆界。頃者觀草木園地球圖。亦以五十度以南爲日本。是雖貴國以五十度爲日俄疆域也。曰龍動刊行圖以滿州爲英屬。若使英人舉是爲證。滿人豈肯之乎。此地地理家所未搜索我國檢出。亦爲近年之事。布氏奉使命始論疆界。已無疆界坊間播行地圖。以誤傳誤。特屬無謂。二人曰。癸國命仙臺會津南部秋田四藩。戌是地方。今國人屢殺害外人。貴國所知彼此雜居。交以兵隊。竊恐一日事故開兩國大隙。曰貴國雖蝦夷內部。又不置兵。今越海峽。唐太別有所慮乎。曰松前藩忽

算據記事 卷之四

防禦故爲貴國所乘。其置兵備他盜也。一人論難連日伊克氏不敢屈說。曰水自水。油自油。使者所論將變水爲油。豈可屈從乎。唯二君踰萬里達國命不可無所報。來年發全權使臣於函館。貴國使臣至尼加刺伊。斯就實際而論定。唯我已設兵營久春內。此地四十八度。不得以五十度爲疆。二人曰。大野藩士開鶴城。鶴城在久春內。以北按檢實地。就五十度內外而劃城。曰此事在委任使臣所爲。次會伊克氏指坐中。一人曰。此名虛多。迺志計久任唐太。能知事情。其人進出曰。小人陳實。二君不得掩飾。唐太。空島之義久春古丹以北日人絕迹。六七年來。貴國始發遣吏人。此全出于貴國欲開國疆乎。將出于恐唐太歸外國乎。二人曰。日來政府以松前藩忽屬地。收其地。施政令。卒朗氏危其無兵備。故新命四藩。戌之曰。貴國逼上人。今自證爲日屬。特屬無謂。貴國開鶴城在訂約以後。約曰。唐太不分疆界。事仍舊貫。今貴國移民北土。我不得不南移。以報之。貴國不踐條約。勢不得不繫軍艦於久春古丹。二人不肯答。謂伊克氏曰。明年發使果出于諒我。二人所論乎。曰。前年卒朗氏請以海峽爲疆。貴國不可。今二君請以五十度爲疆。俄帝不允。此所以發使臣按驗實地也。二人以此事復命。三年七月俄領事告曰。西伯里督將加佐計。宇伊

河野曰此書以俄  
知矣

尊攘記事 卷之四

知受國命。見貴國重官。議定疆界。請導貴國使臣。至  
尼加刺伊。斯會伐長事。與國內騷擾。不果。發使四年。  
領事告加佐氏。待使臣不至。歸國。慶應元年。俄男女  
百餘名。移住久春。古丹築壘。壁列大砲。吏詰之曰。受  
國命。移住英人。覬覦此地。不可不備。富內奈與盧白  
渾三處。四樹標木。測量地理。規畫漸大小。出新藤二  
氏。上書曰。不及今發使。論決疆界事。愈不可為。外國  
奉行議曰。唐太北陞一離島。地圖以五十度劃。日俄  
疆界。皆據臆見者。我以人種同異。地勢向背。為說。皆  
不足以服彼。我自暖地而就寒地。人情之所不欲。彼  
自寒地而就暖地。人情所樂為。況彼兵威強盛。英法

此書實錄  
此書實錄

此書實錄  
此書實錄

之所畏。而今挾暴威加我。我無復如之何。唯置之不  
問。彼愈肆然蠶食。不得不開釁端。往者遣竹內野州  
彼曰。已置兵久春。丹久春。丹在五十度以南。若割久  
春內以北。據山河形勢。劃疆界。可以少免侵略也。慶  
應二年。命小出和州。石川駿州。出使俄。十二月。詣俄  
呈國書。重臣斯地列蒙接見。曰。曩發全權使臣。期貴  
國使臣於尼加刺伊。斯貴國食約五年於今。歐土各  
國公法。罰不復約者。我邦重降。証故不敢論是事。和  
州謝曰。國內亂起。遂失大信。乃稱國命。論唐太疆界  
斯地氏曰。唐太為我安卒爾鎮。府對岸。若為他國所  
奪。安卒爾以西。皆被寇害。切欲貴國舉唐太付我和

谷海峽為疆而貴國不肯請以得撫以東諸島易唐  
太和州曰文化年間貴國亂民擅寇唐太此明以  
唐太為日本也布氏國書明記唐太南岸屬日本而  
牟朗氏所請求前後反覆天下豈有此理俄帝仁德  
萬國之所稱豈事聘詭辯略人土乎斯地氏曰貴國  
不欲彼此雜居故與國請割得撫諸島易此土耳和  
州曰往發使臣請以五十度為疆界貴國以久春內  
在五十度以南不敢許請原是言以久春內劃疆界

尊攘記事 卷之四

州曰此土未分疆界貴國肆置兵隊此蔑如與國也  
若外人來侵與國固將盡國力防禦斯地氏曰此地  
歸外人為與國大害故俄帝嚮遣牟朗氏請以宗  
谷海峽為疆而貴國不肯請以得撫以東諸島易唐  
太和州曰文化年間貴國亂民擅寇唐太此明以  
唐太為日本也布氏國書明記唐太南岸屬日本而  
牟朗氏所請求前後反覆天下豈有此理俄帝仁德  
萬國之所稱豈事聘詭辯略人土乎斯地氏曰貴國  
不欲彼此雜居故與國請割得撫諸島易此土耳和  
州曰往發使臣請以五十度為疆界貴國以久春內  
在五十度以南不敢許請原是言以久春內劃疆界

俄國對岸  
俄國對岸

此書實錄  
此書實錄

曰唐太不劃疆界外人侵略俄兵防禦疆界一劃則  
外人侵略俄無可防禦久春內以南歸外人永為我  
患譬猶香港香港為俄清雜居之地豈無故付英人  
乎和州怫然曰貴國以香港例我唐太此將據唐太  
略我蝦夷全島乎斯地氏變色問其說曰往日貴國  
無故入對州何故曰將修敗艦也俄國豈肯略人國  
乎和州曰世皆謂貴國略奪漢土北疆曰此地舊屬  
俄故生清國復之備有盟誓文書曰貴國逼我略唐  
太亦必曰非奪略備有盟誓文書斯地氏怫然曰何  
爾不禮次會和州稱病駿州代接曰有二族同居者  
其一欲踞其一欲坐意見不合動相論爭於是相隨

如漢書

古傳原

尊攘記事

卷之四

十二

乃訂雅居盟約三條而還

屋修一族此豈人情乎若就所居設障壁各有其半則二族各適其願長莫相爭斯地氏曰高說似而未爲得有一族共庭園者一族不能有其居舉所居付他人則大害庭園有二入共一衣者以其不便剪爲兩片則二人皆失其用若裁一衣使二人各有一衣則各受其用和州會見五次反覆論難遂不得要領乃曰貴國謂英德微弱不足有唐太故不肯分界僕輩二人萬里奉使命不可以此言復斯地氏曰我邦發使兩次皆不得要領而還今也俄帝諒二君之誠懇欲以得撫諸島代唐太此所以厚貴國俄帝一決於此不可復移動若貴國不肯有仍布氏舊約而已

自一千九百一十一年  
論議者不可不以此  
此議

振衣與入與島  
論議者不可不以此  
此議

余游北海道過後志望後方羊蹄山磅礴于天半慨然曰阿部比羅大率舟師八百征服蝦夷置戍于此此後田村將軍北伐至陸奧建碑題曰日本中央當時王略東及千島北窮地極然則陸奧爲全國中央也必矣當時王略之盛可以類推也此後皇德漸衰東陸叛服無常源氏父子之比伐九年于前三年于後爲勞亦甚而朝廷爲私鬪不賞其功藤原氏以源氏裨將三世主其土私其征稅略其國上而朝廷利其賄許其爲鎮守府將軍陸奧之爲中央猶胡越不相聞者然況於距陸奧千

如漢書

河野曰此策亦時  
所小約略也然  
論議者不可不以此  
此議

尊攘記事

卷之四

十三

松前函館以外皆稱爲蝦夷者今也朝廷雖置

百里者乎是後源賴朝以一切詐術籠絡天下姦雄交起爭亂無已至德川氏瓜分國內世襲封土舉蝦夷全島委蠣崎氏漠然付不問及一朝俄使論疆以區區口舌爭漠付不問者爲我疆土亦不可得也抑德川義公慨國體不立名分不明聘一代名儒撰日本史而編入蝦夷外國傳與肅慎靺鞨並列而當時史官無一論駁之書成上進朝廷嘉賞其勞不復聞一朝貴論其失體此天下萬目皆以蝦夷爲外國無異論也吾以外國視蝦夷彼以外國視蝦夷此所謂吾自壞而後人壞之者固莫恠彼狡焉爭爲版圖外之地也意北海全道除

雖志業已既雖大  
國無形似之海山  
皆欲得地中漁戶  
西又欲得及斯海  
千兩而盡不遂于  
是時諸人下東  
往江戶而歸而  
日者欲得及斯海  
出關而歸而  
有得大川而歸  
來東內而歸而  
開通而歸而

縣設政莽蒼原野渺亘全道而國人不甚吝其地猶外國視之者然余恐俄所染顧不特止唐太一島也今論國家急務者以唐太爲殷鑒可也  
俄既不得志於土耳其以其國僻在北偏不得爭衡于英法慨然西之舍而東之圖溯黑龍江五十里置府于尼加刺伊斯而其地沍寒水凍物產不殖海漕不便於是求可輻輳船舶運漕物貨以開一大都府者以唐太斗出大海東南海岸風波隱慰爲天然良港以爲可開都府以形勢雄視東洋



原稿  
其時人其年  
惟日本國  
孫也

原稿  
其時人其年  
惟日本國  
孫也

尊攘記事

卷之四

諸國此俄之所以乘我無備啊喝白方運取唐太  
之策也此後逼漢土取滿州沿海朝鮮以北悉屬  
俄領其開島刺惹斯德克為太府豈非以唐太偏  
東北非爭衡之地之故乎此所領愈大而所圖更  
大者夫俄英法之所畏而彼據富強之勢形勝之  
地西之舍而東之圖是東洋大局一變者矣而東  
洋各國獨立抗彼勢者除愛親覺羅氏以外獨有  
朝鮮耳獨有日本耳而愛親覺羅氏已不說而我  
與朝鮮一小偏土彼陸通鐵路海浮鐵艦南窺燕  
雲之甘東南逼朝鮮及我國之腸腹東洋諸國之  
多事始于此矣往歲俄人繫軍艦于對馬幕吏請

英國公使諭去英使語人曰彼西伯里為根據逼  
日本併蝦夷以大艦巨砲逞其所欲為則雖英法  
無知之何者經十年之後豈以我輩言為意乎噫  
亦危矣

坂本龍馬和薩長二藩

繼薩長二藩而盡力王事者為山內氏山內氏藩于  
南海人重節義士人奮起死于國事者武市間崎平  
井吉村望月伊藤能瀨清岡諸人皆卓卓可紀而和  
薩長兩藩戮力國事者實出于坂本龍馬也島津氏  
之入京浮浪四募同志龍馬慨然上京至則浮浪謀

龍馬學士  
中第

尊攘記事

卷之四

已敗乃游江戶學劍千葉氏後從勝房州聞其說海  
外大勢始悟攘夷之為陋見奔走四方為浮浪之所  
宗意以為薩長勢力動天下若和此兩藩使之戮力  
協心以翼王家則皇運可挽回也是時尾張氏討毛  
利氏以三宰伏罪返兵高杉晉作不服起兵討俗論  
黨專修戰守之策龍馬曰此可以說也往見小松大  
久保西鄉三氏曰我邦雖小地靈人傑可與萬國並  
立而幕府統御無法各藩各懷異心上崩瓦解亂勢  
已成若貴藩解憾毛利氏左提右挈以謀天下之事  
則我邦獨立之大本可立也不然則國內四分五裂  
英佛諸強國磨牙乘隙則行踏印度波蘭之轍而已  
不可為皇國寒心乎三氏曰此固我輩所憂念於是  
告藩主先釋捕虜賜物遣歸將發使通好難其發言  
龍馬奮曰余請任是事乃赴長州見水戶孝九說薩  
藩孝九告旨藩主會諸臣議晉作固持不可龍馬往  
見曰貴藩已和歐米各國而獨難薩藩此親異類殊  
俗而疎同胞兄弟也晉作大笑首肯已而黑田大山  
二氏奉藩命來使見藩主父子藩主亦私遣水戶品  
川二氏見小松大久保諸子一藩交誼日密而幕府  
未之知爭非尾張氏之反兵尋將軍大舉親討薩藩  
上書論伐長之無名幕吏始知為其所謀此時龍馬  
變姓名舍伏見幕吏登空園舍龍馬短銃射殺起隣



屋通去龍馬從勝房州講海軍術觀紀伊彦根諸藩進兵防長日急將募浮浪編海軍爲長藩一臂是時浮浪在長藩者借薩藩名購求軍艦標薩藩旗章繫赤馬關長藩將置將帥浮浪不服龍馬至乃責近藤和私附長藩令自殺代督其衆六月幕府艦隊來伐大島龍馬投策晉作乘曉霧馳瀨艦出艦隊中開縱橫砲擊艦將失措比具成徐徐西走將追擊艦將固疑薩藩助戰止之曰此薩人所誘若暴進必陷彼計晉作攻小倉頗難幕府艦隊而龍馬督海軍扼赤馬咽喉親當富士迅動鳳翔回天四艦連日烈戰未嘗取敗小倉已陷小笠原總督不知所爲乘富士艦走

此風聲鶴唳皆故

尊攘記事

卷之四

十三

長崎龍馬名震于一方先是土藩將興海軍命後藤象次往來長崎購求瀨艦見龍馬論時事大悅龍馬亦以土藩爲父母之邦請以所率軍艦聽命象次說藩公聽之於是併督土藩諸艦稱海援隊先是中岡慎太亦團結浮浪謀援長藩又同龍馬以所督聽命稱陸援隊藩子弟往往入隊勢日強盛土藩傾國力編兵勢與薩長抗一日龍馬駛瀨艦過水島灘時方暗夜衝突紀藩瀨艦毀機關沈沒衆皆移乘紀艦龍馬直投舷燈逼艦將責其犯航海規則共至長崎訴鎮臺紀藩爲幕府宗藩不敢判適土艦至自上海乃正砲準對紀艦如將戰者書生自鎮臺曰艦兵憤公判

步達口上與基澤  
道辨片情

此艦係在暗中  
而不知者

尊攘記事

卷之四

十四

因循爲羣脫藩至爲可慮鎮臺恐其生變令紀藩出贖金幕府征長無功威望掃地薩長二藩約大舉除梗王命者龍馬往來二藩之間與聞密謀乃購得洋銃二千此歲九月歸土佐獻火器說藩主連謀二藩諸士泄聞此事爭理戎具勢不可壓抑是時藩主遣後藤象次建白復古王政不敢動龍馬乃與中岡慎太上京是時慶喜上表請復政權會在京諸藩士告旨特引見小松後藤二人有所諮問後數日永井主水召後藤諭慶喜旨曰德川氏辭世職就藩列勢有難行者後藤慨然曰吾藩爲德川氏謀至矣而猶不覺悟者何也先是長藩先隊進屯二田尻待報疑其有變廣澤品川二氏馳至與薩土二藩謀曰有大舉除梗命者而已乃奉密勅約期日同發歸藩是時會衆以下逼二條關白曰朝廷倉卒廢將軍洋浪陪臣橫行于殿陛之上而朝廷無寸兵尺鐵何以制其暴橫關白頗惑之象次往見曰天下將歸一而殿下在中持異議殿下不聞乎才谷梅次爲浪徒巨魁曩臣奉藩旨見將軍梅次誠臣曰若將軍不可復古之議則足下自及殿前僕要途刺將軍此輩泄聞殿下持異議則怒如烈火臣爲殿下危之關白顏色如土曰敢不奉教無幾勅允慶喜之請才谷梅次龍馬變名也一日中岡過龍馬有所謀有三人通名求見僕入

薩藩公卿與伊豆  
薩藩公卿與伊豆

行命三人尾而入亂斬龍馬中岡二人傷重遂死是為十月十五日中國亦慷慨義士訂交浮浪屢游鎮西盡力於國事其督陸援隊一時與龍馬並稱撥亂事業十成八九而同僊于刺客眾皆悼惜

余曩刻正篇岩倉右大臣公以其叙幕府奉還大政未悉召余親說當時事且曰坂本龍馬說薩長釋憾大功于國家而不片語及之特為可憾蓋余草正篇急于成書多所闕略且復占頤末諸家記述未出故壁舉上藩建白及坊間所傳序槩略因請命侍臣筆錄公諾之無幾公病薨適土人濱田源為余說龍馬履歷頗悉因舉梗槩草此篇嗚呼

尊攘記事 卷之四

龍馬說薩長大功於天下固知右大臣公所稱然而余追考當時參之所聞薩藩宿謀固如此也蓋薩長一藩先天下上京為朝廷書策東西牧伯仿其所為朝綱一振皇威日隆此為朝廷股肱贊盛事者一藩豈有所挾于其心乎唯薩因中川宮長因三條卿薩主綏撫長主拒絕薩閉關謝浮浪長傾意集浮浪遂至兩雄不容漸構釁隙親征之中止薩藩助會桑遂六卿禁長入京三宰之犯關薩兵助幕府逆擊平之當時浮浪稱曰薩賊會桑薩盡力王事豈有意助幕府乎且幕府之不可助也久矣唯幕府積威百年勢不得不以漸親征中

尊攘記事 卷之四

止詔召將軍薩人草詔書曰毛利氏暴臣愚弄其主彼毛利氏盡力王事亦至而一朝領是詔此非三宰憤激所以決犯關之舉乎而名義不立喋血筆下三宰僅以身免一藩怨氣鬱結果為如何於是隆盛意謂時至矣單身往來防藝之間說尾張氏以誅三宰以是為名反旆而長人怨次骨憤其削封土廢父子彼有死而不為也如此則毛利氏服罪有名而無實會桑以下固不平尾張氏之反兵其勢不得不興再討之兵嗚呼幕府致亡勢誘形導猶良平策劉項者然安知非大久保西鄉諸人審圖熟謀胸有一定成算而後下手乎余聞之佐田白茅隆盛謀鎮西四藩置六卿太宰府語人曰三條卿風采英爽此為他日大臣者然則薩長連謀唱義天下隆盛固已決策於此時也龍馬以一浮浪出入于白死之地協合義徒揣摩時勢固已雄矣然而使西鄉大久保諸人無此宿謀安能合兩雄藩于一掉舌之下乎此時板倉閣老召大久保懇懇諭出兵利通偽變為朝旨討幕府者愕然答曰幕府雖有罪可討情誼所不忍然而朝旨至重不敢不告寡君閣老大聲辨說利通故為不解而退幕府政令集成是輩為薩長諸藩之所謀也久矣

幕府卒還大政朝廷置二職議德川氏處分

幕府陸軍潰于久坡坂石州不守海軍衝赤馬關不克小倉尋陷會將軍家茂薨慶喜嗣立托喪休戰毛利氏威名震于天下先是薩藩通毛利氏將有所大爲薩藩曩依中川親王拒長藩親王始無定見小松大久保物色公卿可與有爲者無若岩倉前中將是時前中將落飾歸佛獨處北山深自韜晦小松大久保暮夜往來計畫大事近衛內大臣爲島津氏世感利通唯戒其勢持大體莫爲群議所怵而密算秘策多就前中將而決至是謀前中將取藩王旨赴長州

河野曰蚊龍村案  
雨果非池中之物

尊攘記事

卷之四

安達白、一海嶺下  
敵況一薄、今舉步

見慶親父子。說曰：天下紛亂至此，皆幕府之罪也。請奉朝命，兩藩大舉，鳴幕府之罪。一掃僭亂國體，以建百世不拔之皇基。慶親曰：此固寡人之所欲。退見木戶、廣澤品川以下，熟議藝藩亦請効力。方略一定，上京復命。廣澤品川尋至，因中御門中納言中山前大納言正親町三條前大納言奏兩藩情實。先是，土藩與薩尾越四藩建議，復古王政。慶喜亦察知大勢所趨。十月十四日，上表請奉還政權。會衆以下諸第諸臣固執不可。慶喜惑之。前中將曰：此天下難事，非空論所能濟。因中御門中山正親町三條諸卿密奏，降內勅薩長二藩曰：各率兵三千上京。西鄉大久保廣

抑亦急矣

尊攘記事

卷之四

澤品川以下連署奉命曰辱領宸旨卑賤陪臣不勝感激馳告寡君闔藩大舉誓天地安宸襟四人星馳傳旨其藩且曰天下屬自我一藩非忠誠心事感動天地則不能奏回天之功區區利害得失不足顧慮也是月十六日制允將軍請曰列侯衆議處分詔召列侯旣而薩大兵入京未有所爲長藩二大隊至西宮薩土諸藩曰可十二月八日赦太宰府六卿毛利父子及岩倉久我十種諸卿之罪是日慶喜與會桑以下會議殿上達曉已退傳令免會桑以下衛兵以薩藝尾三藩代之勅廢公武門閤資格罷攝政關白傳奏議奏將軍守護所司代置總裁議定參與三職

正親町三條中御門三卿及薩尾藝越土五侯爲議定大原萬里小路長谷岩倉橋本五卿及薩尾越土藝五藩士爲參與詔曰癸丑以來國家多難先帝憂勞天下所知今也大權歸朝廷大小庶政一決于公議與天下更始即日會三職議德川氏處分尾越土三侯曰召慶喜班議定首座岩倉卿與薩侯固執不可命尾越一侯諭慶喜辭內大臣納封額若干供政府之用慶喜請物議稍定大久保西鄉諸子恐朝議因循誤大機書陳曰一掃二百年太平舊習建萬古不拔之皇基非用于戈一新天下之耳目則不可也

卷之四



此確據實有

戰之為難事固也。而僅置三職議決大政。將以是澤  
朝威於海內。比戰為更難。古來英主創立大業。誰不  
資千丈之力。況元氣委恭士風衰頹。至今日非一戰  
則不可也。國家危急至此。極皆幕府之所為。曩降密  
勅。獻斷既決于此。今日之事。責慶喜降官位。納封土。  
謝罪闕下。而後朝威隆赫。可以承服天下之人心也。  
若因循姑息。徒幸無事。則誤初政第一著。朝威無所  
振起。人心無所懲艾。大機一去。大命不再。可不深思  
而熟圖乎。岩倉卿恐諸藩互構異同。書二項。使三職  
議曰。不奉朝旨者。不問衆議。斷然命薩長二藩討罰。  
以委成敗于天曰。尾越二藩處間調理。慶喜果悔前

尊攘記事

卷之四

過則不咎。既往召參朝議。此兩者孰與衆皆與第二  
項。利通草勅論曰。官銜依舊。稱前內大臣。納封額若  
干。以供政府之用度。尾越二侯爭納封額。遂改作納  
管地租額若干。供政府之用度。尾越乃奉旨往諭。會  
桑之免禁衛。憤薩人擅斷。與諸第列侯在京諸藩。奉  
慶喜一條城晝夜嚴隊。篝火耀天。慶喜恐其生變。率  
會桑以下。南下保大坂城。及是慶喜奉命將入朝。是  
時禁會桑入京。衆或曰。待慶喜遣會桑二藩。而後許  
其入朝。議未決。會幕府以浮浪潛匿薩邸。行諸不義。  
命庄內上田二藩出兵砲擊。邸人放火而遁。報達薩  
人憤怒。朝議一變。既而慶喜命會桑先鋒大舉北上。

敗歸也。一報如  
亦大也。

河野曰。當時  
巧妙。無不自是洋  
人口氣。

尊攘記事

卷之四

薩長二藩曰。慶喜反狀已著。即日發薩長土三藩兵。  
戊伏見鳥羽。勅嘉彰親王為征討將軍。賜錦旗節刀。  
督禁衛兵。命備越衛禁闕。內備一藩備兵。待後命。先  
是鷲尾卿私率浮浪赴高野。以備紀藩。乃命衛大坂  
之背。且諭紀藩動王大義。部署已定。明治元年正月  
三日。官軍邀擊會桑先鋒於伏見鳥羽。大捷。慶喜聞  
敗。倉皇乘氣船東走。

米人希利比士論我邦沿革曰。米艦入浦賀以前。  
人心已厭幕府。譬猶陽氣微動。積雪漸解。凝結力。  
外國要幕府。猶積雪驟得暖風。一時融解。水潦橫  
流。瀰滿平地。而皇室位于幕府之上。屬億兆之望。  
猶諾亞巨船。巍然浮出于大波之上。水潦愈橫。動  
力愈盛。於是始悟。壑谷危險。損毀舟艦。傾改方向。  
驅順風離陸地。出大洋。待水潦稍治。而後回航。維  
新政府是也。此言殆洞觀我臟腑者。然而彼外人  
安能知我邦有國體者。而祖宗相傳以至今日。固  
宜如此乎。蓋我邦表立于東海。神武定鼎。檀原二  
千年于今。取法隋唐。徵貢三韓。肅慎。靺鞨。渤海。安  
南諸國。無不奉水土貢物。皇化布被中外。果為如  
何。中古皇德漸衰。源右府以一切詐術。箱制上下。  
姦雄蕃興。亂賊接踵。如北條氏。三上皇。足利氏。  
遷後醍醐帝於芳野。實臣子之所不忍言。然而至



其事涉外國國體伸蹙所關則上下一心爭出死命以防外侮蒙古興于漠北滅國四十平西域統一漠土病我守國體不屈膝幢十萬寇我西陲而北條時宗盡國內精銳一舉勦絕之于五龍山豐臣秀吉憤韓人闕朝貢命諸將征討蹂躪八道直陷韓京朱明大兵前後出援殲之蔚山潰之碧蹄館耀國威於瀛海之外此皆我邦國體祖宗相傳以至今日者故賴朝創鎌府以來必先拜征夷將軍而後得代朝廷爲政天下夫歐米強且大固非蒙古朝鮮流也然而卒然擁軍艦肆無禮曰不許我所請則火汝城郭屠汝人民而幕吏恒怯不奏

尊攘記事

卷之四

朝廷不謀諸侯許其所請於一呵喝之下爲域外萬國之所傳笑我邦立國以來未曾有受外侮辱國體如此之甚者也此不特北條豐臣二氏所愧竝稱實祖宗神靈之所不與意薩長二氏一藩侯爾而名義之所歸條理之所在斷然開戰待勝敗一決而後和彼德川氏八萬麾下三百諸侯唯其所令而恒怯狼狽甘爲彼所要脅辱亦甚矣且攘夷不能爲則已彼明知攘夷之不可爲而刻拒絕期日頒告天下欺罔朝廷擾亂天下唯姑息之事如此而不速亡此殆無國體也彼希利比士知幕府亡所由來久矣而不知我邦勇武立國受外侮

此處曰此等八等  
攘夷之事上有  
此語而後後之  
字有所謂可以  
終此篇

辱國體如德川氏者天必降之禍不即踵故余詳論以終是篇云

尊攘記事

卷之四

吾友田天爵嚮紀自弘化嘉永  
至明治維新之事爲八卷名曰  
尊攘紀事採摭廣博議論精  
確讀者莫不擊節呼妙誠可謂  
當代董狐矣余竊備私史然而  
天爵則倣宋史紀事本末余則

尊攘紀事

跋

倣史記列傳而至其文學史漢  
未曾不同也頃天爵編遺漏著  
補遺四卷屬余以一言受而閱之  
其紀本倣使艦來浦賀以後委  
曲明瞭衆之前編使讀者如身在  
其時與其事慷慨切齒不自己魏文

帝有言曰文章經國之大業不朽  
之盛事年壽有時而盡榮樂亡乎  
其身曩者天爵在官途不得其志  
退溫舊業有以大著以傳天以沒世  
則復何羨夫世榮乎余之身世  
上略與天爵相似余序固不足以爲

尊攘紀事

跋

天爵之輕重然而天爵曾序余  
偉人傳其屬誼不可辭遂書  
卷末

明治十七年甲申春三月

東京蒲生重章子聞



明治十七年三月十一日版權免許  
明治十七年五月出版

編輯人

宮城縣士族

岡 千仞

東京府芝區愛宕下町四丁目 番地寄留

出版人

東京府士族

前田 圓

同京橋區南鍋町二丁目十番地

發兌所

東京京橋區南鍋町二丁目十二番地

鳳文館本鋪

大坂東區唐物町二丁目十九番地

鳳文館支鋪

牧園豬 著

行在或問

文政十一年（一八二八）序刊本



據文政十一年（一八二八）  
序刊本影印

行在或問序

一日友人會集談及南國行在之事就中質問最慶後龜山二院及椿正儀等之事余考索其事日久未審其事實姑舉佗日所推考應其問訊友人咸請筆之余以證考之未悉臆度之尚多辭之固請不止於是錄而多之名曰行在或問答好事之士訂正其誤安使其事蹟得遍于真實余之大幸也文政十一年戊子三月柳河牧園豬識



關思亮書



余折衷諸書意如左

太平記紀載該傳當時事狀可概見也。其傳會安誼不為少矣。然此記之後閱南北之事。如閭中摸索。此記亦可抵於吾邦之一史乘。

太平記國大曆以後。行在紀載之存者。新葉和歌集。嘉喜門院集。李花集。及諸寺諸家文書。可謂僅僅曉星矣。亦可以為確據。李花集編撰未精。

花營三代記。後愚昧記。後深心院關白記。無論平為當時實錄。其施及於南國之事。多一時風聽不審。始末情實。而記載者。故讀者不以意逆之。或誤其真。一行在或問。

行在或問

折衷

一〇

切據為斷。案亦未為得矣。國大曆主北朝。然此公有時通於行宮。故其載南國之事。勝於後愚昧記等矣。梅松論成乎。足利氏其為尊氏直義文固矣。亦有詳確於太平記者。

古野物語古而未純。三法師物語假設之文。亦不成乎。近世之手豫章記。瑣瑣碎碎。所謂排沙揀金者。

櫻雲記南方紀傳後人之作。追考未切。

世間相傳為真書者。其所舉間不確者有矣。又相傳為偽書者。其所載間不妄者有矣。

明李攀龍曰。不晦者心不朽者文。元劉因有詩曰。記

錄紛紛已失真。語言輕重在詞臣。若於事事求心跡。恐有無邊受屈人。可為讀經史法。

茅山緒識

行在或問

折衷

二〇

竊惟我邦 皇祚無疆 自藤原氏攝籙以降 事故相

仍威福轉移海內之權歸於北條氏後醍醐帝天姿

英拔履涉艱難克誅北條氏其烈赫著是時內有四

房外有<sub>二</sub>成<sub>〇</sub>所諮詢謀度非乏其人帝亦頗好典籍

於是時帝嚴恭寅畏不敢荒寧銓定公家武家爵祿

及功臣賞格。無偏無黨。建用皇極。則恢復之業立。四

海寧一矣。然其所爲反是。遺孽始艾。大亂因生。竟至

致足利氏大興。帝南幸矣。先是武家握權已久。而朝

廷暴屈卑之。武人咸恚怒焉。亂之又生。雖本乎帝之

行在或問

德。其兩胚胎。已在此也。異邦聖王。繼前代制禮樂。

必有所損益。以維持六七百年後世開國之主。雖不

及乎此亦觀時勢。制治體得保二三百年。帝之業不

出乎此一朝土崩遺圖不振悲哉

太平記載公卿奏議有不可信者。如藤原藤房龍馬

之諫類是也。其記載出雲州貢馬。奇偉駿絕。號龍馬。

帝玩賞以爲天馬。屢臨觀焉。一日公卿畢集。帝問天

馬之來符。進何如。滕原公賢稱其嘉瑞。群臣皆奉賀。

帝尋意其。藤房後至。帝又問之。藤房稱漢文光武與

周魯之事。判其卽用吉也。遂因緣乎其焉。慙攸舉當。

時秕政譏短論駁無復餘蘊帝勃然群臣失色以余

觀之必不然夫藤房以忠良之藎居納言之牘帝信

任亦舊矣其諫說啟沃必承間察幾親密懇到使帝

感悟悔悛而止其前後所匡救補益可想也及帝志

滿欲飽。急縱荒淫。誨諫之不行。即決然而作。晦其蹤。

跡是所以爲藤房也。如帝問天馬之應，下廼對以周漢。

之故事必有之矣。抑當帝觀遊娛樂公卿會集之時。

事非有緩急。而攢然斥短一時得失。竦動四座也。不

徒無益將杜他日納諫說之路。是悻悻自喜沽虛譽。

者之所爲也。誰謂藤房有此事也。如其所諫說啟沃。

行在或間  
附錄  
二〇

必絕口焚草不泄乎人間。孰得聞知之。此條記者舉

俗說巷議託諸藤房。其意欲崇藤房。不覺反賊其人。

如此類讀者察諸。嗚呼大厦之將壞非一繩之所支。

也。藤房去之。正成死之。

太平記載。尊氏反。源義貞賜節刀。東伐屢戰連捷敵。

大沮。若義貞徑進尊氏。不得保鎌倉矣。義貞緩故敵。

復蘇。余按梅松論不然。直義之敗于海道。與諸將退。

保指根。扼大師于其險。義貞來攻。不爲遲緩。先是尊。

氏陽引違詔之罪。陰結衆人之心。又簡小山結賊寺。

自備。聞直義之收。即率其精兵趨於足柄。教偏師備



大師之後。使其不戰潰散。其兵略出乎義貞之上矣。論者又謂。義貞將西赴。眷戀邦媛。怠失兵機。竟致朝廷之傾覆。亦非公論也。尊氏之奔。使老僧狡黠。若赤松當大師衝要。細川舉族據于四國。其他族人諸將。分樹山陽山陰。又還佐竹於東國。其臨狼狽之時。施後拒方略。極精當。而躬率親戚麾下。赴海西。其意固有九國。義貞蹶尾亦難捷矣。此時朝廷失控馭之道。海內喁然。望武家復興。而尊氏奸猾雄略。蓋籠一世。其視帝之為。如祿山之於明皇。雖諸將勇謀。亦知其無能為而已。夫驅將背之衆。向受降之敵。其勝敗不

行在或問

附錄

三〇

待戰而決矣。豈獨罪義貞乎。

吾藩之佐田氏。出乎新田氏。有世譜舊記。世間所未見。故今舉其三條。

義貞之父曰滿氏。初名氏光。早死。祖父朝氏養義貞為嗣。義貞年十三。將加元服。朝氏曰。汝父初名氏光。汝今繼之名。汝曰氏繼。可乎。義貞曰。小子聞之。先人之加服也。延足利家時為帽父。家時授先人初名。其後先人自改後名。曰家時汰甚。自處以宗家。視我以支流。吾豈默默自貶家尊乎。今小子雖劣承其適宗義。不欲處支流。朝氏奇之。蓋新田足利兩流。名加氏

字者。宗子踐之。支子戴之。故滿氏義貞云。

義貞年十七。謂族人曰。吾家世世任朝廷爪牙。討叛撥亂。義不貞。則不可。自名曰義貞。謂弟小次郎曰。吾舉義。則義宜為其狀。延名之曰義助。後醍醐帝在立置山。義貞欲舉兵。馳使者乞綸旨。未到行在。義貞輟。

尊氏之西遁。帝勅義貞管領山陰山陽十六國。窺討之。義貞拜誓首曰。臣奉此詔也。生則有榮焉。死則有名焉。臣不敢愛死。又不敢離詔書。願生死服之。帝嘉之。更小詔書賜之。便置于甲冑間。

行在或問

附錄

四〇

吾藩之名和氏。伯耆守長年之裔也。長年之孫顯興。從征西親王于肥後。為彈正大弼。領八代宇土等邑。家傳伯耆卷。寬正中。其曾孫顯忠。祇役于京師。及長門海上。遇惡風。裝資多沒。伯耆卷亦在其中。其後八代漁者獲大石首魚。獻諸顯忠。顯忠獲伯耆卷于其腹中。無有敗損。迺祠祀其魚云。其裔事于吾藩。其伯耆卷系圖今存。

吾藩之五條氏。少納言清原賴元。左馬權頭賴治之裔也。賴元從前征西親王。任內外之事。甚見倚賴焉。賴治從後征西王有功。至于元中十二年。猶奉王禦

蘇王賜書嘉之世世領州之矢部大淵等相傳到于  
近世家藏行在勅書征西將軍令旨等又藏金烏之  
幟征西王之所賜云其文書載于鎮西文書編年錄  
柳河藩牧園豬識

行在或問

附錄

五〇

行在或問上

柳河文學 牧園猪大野著

或問曰。中務卿宗良親王撰新葉和歌集。序列後醍醐後村上後龜山。為三代帝統。而不載長慶焉。其故何也。答曰。竊惟蓋後村上未立東宮而崩。長慶長。後龜山少。長慶不受禪而立。其後無幾。後龜山即位。故親王撰此集。斥長慶為閑位。空其統紀矣乎。紹運錄為自立。近是。

又問。長慶既長。其不為東宮。何也。答曰。其所誕未詳。或前女御北畠源氏之所誕。源氏有罪。見廢。故其皇子無寵。而不為東宮乎。或其所誕卑賤。或壯武好兵。故帝不欲立之乎。

又問。後龜山如何。答曰。後龜山者。嘉喜門院之所誕。其貴宜立。按新葉集。福恩寺內府上梅花唱和之時。其將為東宮之意見焉。其集中。此公繫年紀之歌。訖于公平十八年。其上梅花之時。亦必不其後矣。曰。然則其既為東宮。亦未可知也。答曰。其既為東宮。則長慶雖馮陵。公卿雖懦弱。豈有死先主。躐太子乎。其未為東宮可知也。

又問。後村上崩。年四十一。其未立東宮。不太晚乎。答

曰。竊惟後村上欲立後龜山。以長慶之長未果也。先是其有密詔。不可知也。後醍醐崩。年五十二。其年立後村上為東宮。其有密詔在前年矣。夫欲舍長立少。而憚長。古今之通情也。雖譽田天皇之明聖。欲立菟道皇子而憚長皇子。可以推也。

或問曰。嘉喜門院集。公平二十三年三月。後村上崩。後有稱內御方。有稱春宮。有稱倚廬御所。果指誰誰乎。答曰。稱春宮。或倚廬御所者。皆指後龜山乎。其前後哀傷之歌。及天授二年懷舊淚歌相肖也。其稱內御方者。或長慶既稱帝。故太后云云乎。然其集中。長

慶唱和不別見。或諒陰中兩皇子位未定。後龜山宜立。故太后指後龜山云云。及長慶自立。以後龜山為皇太弟。太后更稱後龜山為春宮乎。未詳。

或問曰。應仁記同別記載。小倉王忍執政王。自屏居于吉野山云。小倉王如指後龜山。執政王如指長慶。然後龜山恐長慶。而屏居于吉野。定在何時乎。答曰。如夫二王者。吾子之說是矣。按新葉集。後龜山之后詠名所松叙曰。公平二十四年春在吉野行宮。其後歷年月復行幸于其山云。其妃在吉野。後龜山率來胥宇。可知也。意者。其在此時矣。其時長慶新立後龜

山爲太茅。楠正儀有異同。輿說紛紛。嫌疑交生。故後龜山懼焉。避難于吉野乎。

十四の在  
我方のふ  
あはとハ  
お  
るうや  
のあ井  
るうや  
ふし  
ふし

又問。後龜山即位。在何年月乎。答曰。新葉集載建德元年正月。後龜山松契。還丰歌云云。是即位後之辭矣。又嘉喜門院集建德二年九月。後龜山之后尚爲女御也。上紅葉于太后。太后賜歌謝之。其歌述將爲中宮之意。帝代其妃和之。其叙亦稱內御方。據此等觀之。其即位或在公平二十四年中矣。是春後龜山在吉野。長慶舉兵。逐正儀。人心不帖服。內地分崩。故公卿逆後龜山立之。以鎮靖內地矣。其月日未詳。文行在或問上。

二〇

中二年八月。帝奉神器如吉野。其後吉野復爲行在所。故建德文中皆後龜山之紀號。

又問。花營三代記載。應安六年八月二日。南方奉讓位于太茅云云。是文中二年矣。是說如何。答曰。竊惟先是。後龜山即位也。新葉集可爲確據矣。是時兵後擾擾。帝幸于吉野。北方隔闕。不審行宮事實。訛傳以爲讓位乎。

又問。嘉喜門院集中。二年十一月。大雪。帝憶去年於阿左野看雪。詠歌寄呈于太后。其唱和如懷思阿左野然。阿左野定爲何地乎。答曰。或國字末左易。訛

故誤。阿末野爲阿左野乎。或河內攝津等之地。數年爲行宮乎。今不可考。是後後龜山之車詳于諸書故不贅

或問。長慶始末。答曰。竊惟長慶在天野。壯武尤強。有祖皇之風。不喜偏安之業。其意汲汲乎攻伐。恢復與前內府藤原隆俊和泉守和田正武。橋本湯淺等相結納。其徒豪強。傾一時。板援得自立。抑後龜山爲太茅。公卿多不睦之。楠正儀有異同。後龜山自屏于吉野。長慶使和田橋本等攻正儀。正儀出走。復居河內之北境。公卿逆後龜山立之。非長慶之意也。長慶又使諸將攻正儀焉。細川賴之援正儀焉。文中二年八月。後龜山奉神器如吉野。藤原隆俊襲北軍。不克。死之。於是長慶不能保天野。退于紀伊。而天野行宮廢矣。其後橋本氏據于和泉之土九城。湯淺氏據于紀伊之藤波等城。爲上皇舉兵。北軍比年攻陷焉。至于元中中。上皇猶厲餘衆。禱戰勝于高野山。其後薙髮。稱長慶院法皇。在玉川宮。崩年未考。是其概略也。或曰。長慶法皇經歷諸國。余又閱五條氏藏書。有征西王啟于行宮書殘闕案。曰。如勢州之事。無復疑。未審仙洞及李部大王所在。且吉野鄉。悉屬於凶徒乎。敢問云云。

上

四〇

問云云。



右大將藤原長親跋仙源抄曰此抄者長慶院法皇之聖製也云云諸書記此抄長親之所撰也余以爲其必然矣今竊推長親之意宗良親王撰新葉集一切不載長慶院法皇其於法皇有遺憾焉故舉已所撰之抄讓於法皇使法皇可傳於後代也矣長親居其父內府之喪爲服三年又服後村上之喪忠孝之厚一時無比其意必不遺法皇矣又著倭片假字反切義解和歌口傳等以貽後進雖其緒餘足以窺所蘊焉或曰足利直義直冬降于行宮廷議將授元帥之任長親固爭其不可云應永中長親薙髮歸花山行在或問上耕雲散人明魏居于花頂山有係于長慶院故論附于此

行在或問上

行在或問下

柳河文學 牧園豬大野著

或問曰吾疑楠正儀久矣。正平六年行在使正儀之人賜書於足利直義直義復就正儀之人上書啟事不允復使正儀之人却其書其使者至尊氏尊氏寵賂之其使者曰公家武家之和議不可復成以北畠禪門等拒塞之也楠已屬於武家若速發大將軍攻吉野楠竭力從事於斯其取吉野不久時日矣地蔵院記園大曆云然則是時正儀已通於足利氏圖行在者非耶答曰不然初直義之乞降也主正儀正儀行在或問

下

一。

奏請其事故吉野事書曰東條之徒有請云既而直義復叛故賜書於直義責讓之直義復上書乞舉軍國之事委任於武家而不允却其書也其每使正儀之人往復者正儀主其事故也正儀之使者至尊氏尊氏寵賂之云云者是時尊氏直義外相和好內實相諭猶矣尊氏又欲講和於行在故延正儀使者寵賂之要使正儀復圖和議也其使者知和之不就故且爲詭激之辭以謝其事也其言楠已屬於武家者先是朝廷以直義爲武將勅官軍悉隸之故云爾非其使者有反心也又非正儀之所知也夫兵家使者

入敵地視其便宜一時詭隨詐合豈足怪乎正儀忠事平行在終後村上之世又尊氏直義相賊害及尊氏義詮懇懇乞和於行宮太平記園大曆可證也又問太平記載正平七年後村上帝在男山敵來圍焉潛出正儀等圖繼援其兵未發城已危急公卿嘲正儀曰正儀者正成之子也正行之弟也而不肖已甚人有言堯之子不肖乎堯舜之弟不肖乎舜者正儀之謂也果然則世人併稱三楠不亦妄乎答曰不然帝之在男山既舉兵士從乎軍役其留守者與有幾而使正儀調餘兵攘大敵豈四五日之所能辦乎

下

二。

公卿無兵略沒于圍城中怯懦多遽欲棄城而走故喋喋云爾此非正儀之罪也夫公卿每不罪已而罪人是行在之所以不復興也夫正成正行既知朝廷無遠圖吾事之不可孤行乎閭外一旦克敵非國家之長筭也故相繼早決死矣正儀亦有觀乎此及此時行在愈衰正儀知已亡則行在不復支也故以保內地護行宮爲已任不務攻伐進取而納撫降附贊成和議每不欲自我啟兵釁是正儀之本謀也正成正行相繼死難於是時朝廷恐懼修省遠念列聖之德近恤兆民之苦不罪人而罪已以修德政則正儀

之本謀。或可擴及於遠。其功業僅有所立矣。夫內外不相副。雖有良將。莫所施其勇謀。故正成。正行死。而朝廷不復振。及正儀策不行。而行在不可復爲也。其時勢爲然。正儀所謂冬日之日者。非當時諸將之所企及。併稱三楠。非妄也。

或問。太平記連記正儀與和田正武。多稱和田楠。然則正武勝乎。答曰。不然。國音連稱便。故云爾。得能氏者。河野氏長子之流也。土居氏者。其庶流也。連稱必稱土居得能之類也。且正武戰將也。每戰居前。正儀大將也。在後總督軍務。北人先呼和田而後楠。亦非行在或問。下。

無其由也。正武義勇可尚矣。正儀度量智謀。大將之器。非其所能及也。

或問。豫章記載。正平二十二年。細川賴之爲足利氏管領。以籌策降楠正儀。其說如何。答曰。南方紀傳載。賴之屢請南北講和。兩統迭立意者。此時正儀執奏其請。欲贊成其事。故北人夸大之。云云乎。是歲足利基氏死。公卿將士咸喜曰。基氏死矣。來歸者必多。正儀獨歎曰。朝廷修德政。雖多強敵。必降服。不然。強敵悉亡。復相繼起矣。已不自修。幸敵之亡。難矣哉。其意見可觀矣。其事見於賴之物語云。

或問。三法師物語載。正儀怨望行宮。違其勅。又約降於足利氏。其說若何。答曰。此時正儀形跡一礙于反人。其所記載。豈翅三法師物語乎。又花營三代記載。正儀乞降。故許之。云云。後愚昧記載。正儀與南方向背。其親族離畔。相攻擊。正儀不克出走。其與我約降。在去年矣。故執事欲援正儀。云云。是記者皆不悉其情勢。與其本志而已。夫後龜山其貴宜立。其德宜君。後村上之所屬意也。長慶好攻伐。厭和議。正儀欲奉後龜山。成其本謀也。彰彰乎明矣。及後村上崩。長慶自立。是其所以爲缺望也。及後村上之季年。與北方

行在或問。下。

四。

和矣。及長慶之立。勅四方舉兵。正儀驟諫之。長慶不從。正儀慮長慶昧乎攻伐。悉喪內地。廼擁兵而不應。勅。是其所以爲違勅也。長慶赫怒。勅和田橋本等。舉兵逐正儀。於是正儀知長慶之不可爲也。欲終奉後龜山。復講和保地也。廼就賴之謀。援據焉。是其所以爲約降也。是時知正儀之志。欲濟其事者。賴之一人。其事有觸當時忌諱。又非他人意見之所及也。故不表顯其事。默契頷意焉。是以當時記載皆如是。又問。吾子言。後村上之季年。南北講和。及長慶之立。破和議。何以言之。答曰。夫太平記訖乎後村上。正平

二十二年。後光嚴貞治六年。細川賴之爲足利氏管領條。先是三四年。莫記畿甸爭戰。其文尾以四海無爲爲結語。又題其書曰太平記。又按新葉集。公平十九年以後。後村上屢行幸于住吉。其事有類於夏后遊豫之度。以是觀之。是時南北講和弭兵必矣。諸書遺佚耳。按赤松則祐觀敵瀑布歌。叙曰應安之始。關東關西官軍同時蜂起。故赴警衛于京師云。又喜連川系圖載其秋新田義宗脇屋義治起兵與上杉憲將戰。敗亡。是公平二十三年。後村上帝崩。長慶立之時。以是觀之。長慶新立。倣後村上即位故事。勅

下

五〇

四方舉兵而官軍應勅舉兵可以知也是余之所以云云也。

又問。吾子言。心儀持講和保地之策。及于公平之季。愈益執本謀。以諫長慶之舉兵。竟至於擁兵得罪也。吾未知其果是。荅曰。吾子不見太平記載。公平十六年之事乎。其時大內弘世山名時氏石堂仁水等降附。行在頗振。而義詮懦弱。其宰貪殘。其諸將不服。又會北京空虛。於是細川清氏來奔。言其虛實。請攻北京。自今觀之。似可爲之時矣。然心儀建議。辯其不可。後果如心儀之言。及長慶之立。大內山名等既悉叛。

又問。吾子保正儀之北投。非叛降也。吾未信之。荅曰。余據太平記。吉野物語。觀正儀之為人。雖其強勇果

下

六〇

烈如不及。正成。正行。亦其慈愛惠和。深思遠計。與時消息。効忠于行在。不爲紕劣也。豈以國之榮悴。家之存亡。失其大節。覩然降於累世之仇讎。以忝其父兄者。若正儀及正平之季年。見行在之將墜。而實叛降於足利氏耶。至于弘和之始。國步愈蹙。人情益兇。是時正儀何與足利氏絕。而効忠于行宮。沒身不渝。其子孫世世殉節。與行宮遺裔相終始也。以是可觀。正儀執本謀。始末如一。未曾背行宮也。其見放逐而數年寓於敵地者。其奈罹時之不湫也。

又問。如吾子之言。正儀結納于後龜山。然及後龜山



即位其屢攻心儀何也。答曰。後龜山新立。如其軍國小大之事。悉出于長慶之手。故其徒來攻心儀也。其時帝亦不得受制乎長慶。其事非出乎帝之意也。於是賴之數出兵救心儀焉。其他將士咸遷延。不欲涉河。其後帝如吉野。長慶上皇退于紀伊。其地戰鬪不熄。而大和河內攝津等無事。是時雖心儀未復歸。隱蔽吉野。保寧內地。可以觀也。其後復歸。官至參議。非有功勞。而寵獎得如是乎。

又問。心儀之北投也。賴之爲心儀百方保護。其極至辭已職爭之。其故何也。答曰。是時爲其主忠計。而患行在或問心儀下。

七〇

海內塗炭者。有心儀賴之而已。賴之當足利氏隆際委任無貳。靡言不從。欲擁立兩統。平治海內。其於兩統無所偏倚也。心儀值行宮之陵夷。其策不見用。知其不可挽回也。欲維持世統。期至時乎後代。故循循然。爲行宮謀講和。迭立。無視一時屈伸也。同類相求。同明相照。其策并行不相悖。所以相依託也。不然。則心儀者。春秋三叛人之徒也。賴之自任以海內之重。豈爲一叛人。如是汲汲棲棲。致力勞師乎。及賴之屏于南海。心儀亦與足利氏絕。蓋以失其耦。而事之不可保也。

或問。心儀成了立乎一圍城中。竟建回天不世之功。心儀失措胡尾。何與。心儀成背馳乎。答曰。心儀成之時。北條高時恣暴昏亂。後醍醐帝增修德政。海內翕然想望帝德。洋溢也。其確乎守一小城。有恃乎此也。果群雄崛起。滅北條氏矣。及帝愆德。海內復歸武家。沛然不可禦也。及心儀之時。海內愈益親附武家。鄙陋公家。而朝廷無經世濟民之畧。心儀策不用。是所以致胡尾失措也。

或問。諸葛孔明知漢賊不兩立。以出師討賊爲已任。不逆料成敗利鈍也。如吾子之言。心儀至忠矣。心儀行在或問心儀下。

八〇

何不則孔明之事。敵愾攘地。興復爲已任。而畏縮沮撓乎。答曰。孔明者。天下之一人也。談何容易。心儀雖一時宿將。勇謀決勝。不及心儀成心儀行也。威風動衆。不及顯家義貞也。以勇謀威風。不及四公。安能影響乎孔明之出師討賊。若使心儀強倣於孔明之故事。必蹈姜維之覆轍者也。其持保境之策。甘憤憤之譏者。可謂知己知彼矣。亦是其善學孔明者。所謂魯人之學柳下惠。未有似乎此也。夫長慶當足利氏最盛之時。欲驅周餘之孑遺。殉乎攻伐。以取大業也。譬如多羊宿疾羸憊之人。氣息僅存。欲服峻劑速起也。藥力

一激不就。水者幾希。故善養者不過乎盡滋潤溫補之道。以終其天年也。正儀老成沈深。含垢忍訕。流離依違。如棄如失。以隱蔽行宮。保護內地。亦類也。故余以為正成恢復大運。其業不卒而死乎始。正行續父之業。其力不足而死乎中。正儀收合遺燼。維持流運而生乎終。雖有剛柔死生之異。竭忠于朝廷。可謂不相戾矣。嗚呼。真行宮于南國。支持正統五十餘年者。誰謂非楠氏三世之力乎。

或問元中之季。大內義弘謀講和。約迭立。既而北人反其約。南人屢起。竟以敗亡。先是使正儀能成講和。行在或問。下。九。

亦如此。然則正儀之策不亦左乎。答曰。夫事之成否。在時。逮正平之季。行在雖衰。內地未裂。四方服者存。斯時南北約迭立。而有違變。則退保內地。煽動四方。亦足以相持也。北人有所畏矣。至乎元中之終。內地削盡。四方糜滅。時已去矣。北人視之如贅疣。有何怖畏。而踐其約乎。尚且致南人蜂起。畿甸騷擾。若逮其時。北人安得反其約。是正儀之所以及時謀議諫爭也。其事不行。亦天矣夫。

或問。吾子好研究春秋。而保護正儀。辨明其真忠。然則正儀之進退。於春秋之義。有合乎。答曰。當時記載

潛習。正儀志業冤屈。故余欲表其微耳。如其義合乎春秋與否。非余之所知也。

按花營三代記。初賴之處。正儀于河內。和田湯淺等來攻焉。賴之使賴元與諸將救正儀。終克之。賴之。又使其族氏春圖河泉。後龜山帝如吉野。藤原隆俊與氏春戰敗死。長慶去天野。退于紀伊。賴之又使其族業秀等圖紀伊。數年不克。義滿更命山名義理。山名氏清等。無幾拔和泉。紀伊之數城。連報其捷。既而義滿罷賴之職。出之就國。以斯波義將代之。義理陷紀伊。氏清陷和泉云。又按明德記。義理領紀伊。氏清領

行在或問。下。十。

和泉。其他族人領數國。強橫汰侈已甚。義滿復賴之職。委任如初。山名滿幸得罪于義滿。勸叔父氏清叛。曰。今察京師舉措。其意在翦我家族也。去年命吾輩墜豫州家領。今又赦其族。甚間吾輩。可以知也。君盍先焉。吾族強大。一時無比。今圖國家。豈為非望乎。吾族同心舉兵。諸家在京者。誰能禦我。一戰克京師。四方誰不從。上政富桎皆不得意也。最先從我矣。今舉兵也。姑不旌圖國家。以修武州昔年之怨為名。亦可矣乎。請君熟圖之。武州者謂賴之也。武州常久臨終。使賴元言於義滿。曰。山名氏強梁。蔑上有年矣。老臣

每規使其戒懼焉。今既伏誅矣。老臣宿憂闕。未見有犯上者。老臣死無遺憾矣。如賴元豚大庸。恩非常路之器也。君善處之言未終而逝。今余以是觀之。蓋賴之使已。族人圖內地。使正儀謀講和者。欲以漸撫定南國也。義滿嫌其遲緩。更命山名氏。果有功賴之處。山名氏強吞噓內地。其後割據盤結。不可復制也。言諸義滿沮遏之。山名氏亦訴賴之於義滿。斯波義將土岐等。釀成賴之之罪。賴之罷職。義將代之。與山名氏相控。援其後。義滿復賴之職。委任如初。於是山名氏不得意焉。滿幸以修舊怨為言。賴之亦臨終云。行在或問下

爾乎。又按須波部氏及通法寺文書。傳漢合運曆弘和二年閏二月。正儀與山名氏清戰于平尾。見敗。其族死者六人。士卒死者百四十人。保舊要害云。蓋先是賴之處正儀于河內。委以內地。謀講和也。賴之罷職就國。義將代之。當路貶斥正儀。義將分領河內。伏氏清侵奪內地。於是正儀露本色。與義滿絕。與內地。打行宮與氏清戰。不克。保赤坂。千早等乎。併錄備後考。

按正儀左衛門尉國大河內守寺院左馬頭太平左兵衛督花營三代記參議觀心寺其在北地北朝授

中務大輔。通法寺渡邊氏文書

花營三代記。楠木下向河州十七箇所云云。所謂十七所者。河州北地。瓜破等乎。係于丹北郡。瓜破城見於花營三

代記按正儀卒年月未詳。蓋在元中年中矣。

按河州北山氏系圖。正儀之子有正勝。攝州寺內氏系圖。正儀之子有正秀。一有正勝。無正秀。一有正秀。無正勝。蓋同人改名乎。

花營三代記。康曆元年七月。義滿拜賀行列中。有楠刑部少輔正直。似為正儀之子。後不見。

行在或問下

古來相傳。正儀之子正元。狙偵義滿。欲刺之。事發。見殺。未。知所出。後崇光院記。永享元年。楠五郎左衛門尉光正。法名常泉。匿於南都。搜索見殺。或謂此乎。其後子孫相繼。奉行官遺裔。屢舉兵。到于文明年中云。諸家文書

行在或問下

横尾謙七 著

# 皇朝靖献遺言

明治六年（一八七三）大阪刻本



據明治六年（一八七三）  
大阪刻本影印

明治六年夏新鐫

皇朝靖  
獻遺言

横尾氏藏版

皇朝靖  
獻遺言

皇朝靖

皇朝靖公題辭

遺言

時

舊宮津公題辭

二

浮

以  
子

舊宮津公題辭

三

神  
子



皇朝靖獻遺言叙

騰采閣主寄此書之序。其書做  
體淺見。民原選所專收。此邦諸  
公行事。是篇撰者特見。嗚呼。主  
之所尚。不在才智。而在節義。當  
國家赤事。如無其驗者。一旦有  
急。其能為者。舍節義之士。其

皇朝靖獻遺言序

誰也。夫死生亦大矣。能冒鋒刃。  
蹈湯火。視死如歸者。非平時講  
習。燭理精義。焉能致之哉。自亡  
正。立立朝。則姦雄膽寒。婢阿秉  
枋。則國脉委。節義所關。至重  
如此。豈曰守一身云爾哉。向者  
淺見。民有見於此。輯靖獻遺言。

皇朝靖獻遺言序

以風厲節義。其益世漸久。心不

淺少也。但其所載。局於彼國之  
人。於我邦諸公。概而不收。有大  
歉久心者。今此編所載諸公。忠  
勇節烈。與日月爭光者。悉係皇  
朝人。則使讀者振起皇國靈勝。  
讀波中書。萬二。則其編輯之功

皇朝靖獻遺言序

雖倍前久可也。足臥見作者出  
苦心矣。近日瑣二兔園冊子。陸  
續上梓。槩皆詹言。徒喧啾久耳。  
至能激發人心者。則有此書耳。  
可謂鴈鳴朝陽。遂書以與之。  
明治六年五月渡邊世順撰于  
攝津僑居海后書



皇朝靖獻遺言例言

一此書摹倣彼靖獻遺言而其位置體裁勢可同者同之勢不可同者異之要使觀者易誦讀耳

一此書本以尊王為主而不擡頭闕字者全襲大日本史日本外史等舊轍非敢臆斷私意欠其尊崇略其敬禮也擡頭闕字云云詳見日本外史例言中

一諸公列序之上下非敢輕重優劣唯以年

皇朝靖獻遺言例言

代時日之古為上其新者為下

一彼靖獻遺言限以八名此亦限以八名其跡似照對比較彼此之人物苟照對比較焉至讀我邦人物之高絕固非照對比較特倣彼人負編入得其宜耳

一楠氏篇專取南水誌新田氏篇取日本外史其他每篇以常藩史為根據而其叙事發端不書原本之名號者於位置體裁不平易簡雅之故也讀者諒之

一傳文論贊雖天下公行之名文佳詞可刪

者刪之可存者存之以欲此書之切實而不繁冗非敢僭越加丹黃評其是非之謂也

謙七識

皇朝靖獻遺言例言

二

皇朝靖獻遺言

引用書目錄

大日本史

鵬齋文抄

日本外史

殘櫻記

日本書紀

本朝文粹

皇朝史略

讀史餘論

皇朝戰略

靖獻遺言

國史纂論

讀史纂略

國史略

神社考

皇朝靖獻遺言目錄

一

國史紀事本末

三忠傳

南北誌

讀史雜詠

大夢歌

奎堂遺稿

古道訓蒙頌

弊帚集

正氣歌

今日鈔

吉野拾遺

皇朝分類

山陽詩註

讀史贅議

三才圖繪

日本詩史

讀史偶論

下學邇言

神皇正統記

今世名家文抄

沙石集

日本政記

忠臣往來

書後題跋

新論

弘道館述義

北野天神記

新葉集

菅家文草

令義解

夜航詩話

關城史略

俗神道大意

皇朝靖獻遺言目錄

二

皇朝靖獻遺言引書目錄終

皇朝靖獻遺言

目錄

奏言

物部守屋

路上獻策

藤原兼足

謫所上言

和氣清磨呂

十三夜詩

菅原道真

諫言

平重盛

無題歌

楠正成

上表

新田義貞

皇朝靖獻遺言目錄

三

關城書

源親房

右共八卷

皇朝靖獻遺言目錄終

皇朝靖獻遺言卷之一

播磨山崎 橫尾謙 纂集

奏言

大連守屋

物部弓削守屋尾與子也。繼父爲大連敏達帝。朝佛法漸行于世。大臣蘇我馬子首崇信之。守屋心不喜。頗有所規諫。十四年人民多疫死。守屋奏言焉。此奏言大夫中臣勝海亦與焉

皇朝靖獻遺言卷一

塔宇燔佛像棄餘燼于難波堀江。是日無雲而雨。守屋被雨衣責馬子及其徒信佛者。遣佐伯御室達馬子所崇信三尼馬子啼泣出之。吏人奪其衲衣。縫於海石榴市馬子甚耻之。由是構怨。守屋嘗與穴穗部皇子相善。皇子使守屋率兵攻三輪逆守屋往斬之。馬子歎曰。天下之亂不久矣。守屋曰。非汝小子之所知也。用明帝二年帝不豫。詔欲歸佛令羣臣議之。勝海奏曰。背

國神而敬蕃神。臣等所未知也。此奏言守屋亦與焉

禁中廐戶皇子握馬子手。隕涕曰。三寶妙理人不之識。妄生異議。今大臣歸心福田。何喜如之。馬子叩頭曰。賴殿下聖德興隆。佛法臣死之日猶生之年。守屋大睥睨。押阪部毛屎密告守屋曰。今羣臣圖卿將要於路守屋乃退居於阿都別業。聚兵自備。勝海亦聚兵應之。既而勝海知事不成。適

皇朝靖獻遺言卷一

二

水派宮歸于彥人皇子舍人迹見赤檮伺其出宮而擊殺之。守屋使人謂馬子曰。竊聞羣卿謀我。我故退焉。而馬子益招集其黨。日夜警備。及帝崩。守屋欲舍諸皇子而立穴穗部皇子爲嗣。託獵淡路而與穴穗部皇子相謀。事泄。馬子遣兵殺穴穗部皇子。與宅部皇子而與伯瀨部竹田豐聰耳難波春日諸皇子及紀男麻呂巨勢比良夫膳賀施夫葛城烏那羅俱率師攻守屋。



遣大伴嚙阿部人平群神手阪本糟手春日臣抵澁川第守屋親率子弟及家兵築稻城拒戰兵勢甚壯守屋登樹兩射諸皇子軍恐怖三退豐聰耳及馬子整兵進攻迹見赤檣射墮守屋遂殺守屋守屋案或云守屋討佛不以術却自取亡滅且使天下後世懲其法盛行實不可當之勢也縱令有善謀奇計亦未如之何而已故守屋之意以為如術自強雖以術討之遂不能滅絕也若設無暇設術也而或者答之是不知守屋又

皇朝諸獻遺言卷一

三

不知時勢者也嗚呼其不以術而赤手討之是所以為守屋也

自先朝以逮陛下疫疫流行生民將絕此豈非

由蘇我臣首唱佛法歟請宜禁絕

讀史雜錄曰偉哉物部公識識開邪辟已在千載上預知百世齊如監付一炬鬼教

捕鳥部萬當馬子攻守屋將兵一百守難波宅聞守屋死乘夜潛逃抵茅渟有真香村與其妻訣遂匿山中朝廷議萬懷逆心當盡族誅會萬身被敝衣執弓劍而來有

司遣衛士數百圍之萬隱于叢篁以繩繫竹搖之令人謬已所在衛士疑惑萬連射倒數人衛士恐不敢近萬遁走衛士追射皆不能中有一人疾馳伏于河上射萬中膝萬拔其矢張弓發箭乃倒地號呼曰萬將為天皇之盾而効其勇何不問其故窘迫至此吁汝等來前願聞我罪追兵競馳射之萬連截飛矢殺三十餘人既而投弓劍于河以刀自刺其首而死萬有畜狗繞

皇朝諸獻遺言卷一

四

屍而吠遂啣其頭收置古冢卧其側不食而死

新論曰佛法之入中國朝議謂國家有祀

典不宜拜蕃神而逆臣馬子私奉之與皇

子廐戶等黨比與造伽藍韓之史其君之

惑于佛說以致亂亡者皆是吾邦未至如彼也而有酷肖焉者夫人臣行戕逆開關

以還所無可謂天地之大變矣而發之過去之報幾乎三綱淪而九法斁矣廐戶智

慧過絕人姑為太子以屬人望其志在異日即真檀乎天下而倚於馬子之勢馬子

與大連相軋欲除之而自逞亦倚太子以濟其姦而皆藉於佛就遂致誦咒施典禮

堂塔金膏血玉業之衰大端在此我邦君臣之義度越萬國而西竺之說壤之歸之於土灰沙塵而止焉而開其自是僧徒日衆爭鼓其說民志於是乎離渙矣大寶之制列神祇於大政之上隸僧尼於玄蕃可謂知國體然猶不免於分祭政為二者當時人情世態既非如往日之純一也而及聖武帝孝謙帝之朝則佛事益盛朝政廷議無非所以奉佛者遂置國分寺諸道與國府並立以布其法國郡使佛事與政一

皇朝靖獻遺言卷一

五

上之所好用以為政為之下者孰不爭趨之是以天下靡然唯蕃神是敬及西竺之說作而赫赫神州冒以佛名林道春神社考曰夫本朝絕是我天神武帝已來相續相承皇緒不離我而難立故設左道之漸廢而其異端非再者梵語也日神者大日也故名曰日本國或其本地佛而垂跡神也大權同聖故名曰權現結緣利物故曰菩薩時之混雜而大信伏不悟遂至令神社佛寺混雜而不知神祇如沙門同位而共居嗚呼神在而本書紀延喜式等誣天欺人舉吾民所瞻

仰者悉為胡神之分支未屬變神明之邦以為身毒之國駢中原之赤子以為西戎之徒屬內既自夷國體安在也至一向專念之說作雖名祠大社在祀典者不許瞻禮之以遏絕報本反始之心而專奉胡神民是以知有西戎而不知有中原知有僧尼而不知有君父及其叛亂則指仗義討賊者以為法敵乃至於使一時忠烈之士挽弓揮戈而反仇君父忠孝之廢民志之

皇朝靖獻遺言卷一

六

散可謂極矣又曰令云凡僧尼上觀玄象假說灾祥語及國家妖惑百姓并習讀兵書殺人奸盜及詐稱得聖道並附官司科罪別立道場聚衆教化妄說罪福官司知而不禁止者依律僧尼卜相吉凶及小道巫術療病者飲酒醉亂及與人鬪打者皆還俗將三寶物餉遺官人若合稱朋黨擾亂徒衆作音樂博戲者服用綾羅錦繡者僧房停婦女

尼房停男夫者阿黨朋扇浪舉無德者使俗人歷門教化者皆苦使有日數凡僧尼不得私畜園宅賤物及興販出息凡如是之類其所以設禁防以使保身體免罪戾者不一而足如能使僧尼謹守律令從佛家之法則樹下石上樂以沒齒亦可也但其不奉邦憲是以其害至此而已

又曰唐傳奕上書高祖言令僧尼匹配即十餘萬戶云云武宗廢佛寺其上都及東

皇朝清獻遺言卷一 七

都留二寺節鎮各留一寺毀寺四千六百餘區提提蘭若四萬餘區歸俗僧尼二十六萬五百人收良田數千萬頃奴婢十五萬人據之則唐國土地之大而其佛寺之多不及神州十分之一然時人尚以為夥則神州佛寺亦可謂盛也

下學邇言曰身毒法之行權臣假以張私門禮同列專威福從茲而三世輪廻之說入民捨生前之彝倫而求身後之冥福移

畏神天敬君父之心而乞哀於佛陀徒祈一身之往生神天之威靈輕君父之恩義薄加之汚神明以佛號日域之神明變為身毒胡鬼億兆敬天朝之誠轉為戀身毒之心而率土為身毒之民馬子大逆朝廷不討之玄昉道鏡亂宮壺不正典刑

北齊胡氏與僧曇猷通事詳北史唐時僧懷義幸於武氏縱橫犯法具見唐史元至正中元主寵西蕃僧廣取女子惟淫戲是樂至男女裸處君臣宜淫群僧出入禁中醜穢外聞竟至咸亡亦見元史僧徒縱淫漢土歷史所載往往有類此者又竺書云釋迦

皇朝清獻遺言卷一 八

訖睡故露下體使婦女觀之竺土之風不知羞醜態如此僧之無慙好淫亦有所由也延曆園城興福諸寺弄兵犯宮寧避之不敢罪之及武人專制以守護之威不能與之抗或萬乘自奴或披剃屍跡上皇必薙剃居法宮登假則火化皇子盡入緇流以剪爪脰絕不億之天胤終歲朝儀讀經修法祈禳薦福慶佛度僧飾刹創寺維日不足上則不問貪吏之聚斂培克權勢之隱欺侵漁唯佛是佞唯僧是供聚斂之賊



暗入緇徒之懷抱置四海困窮於度外恤下之仁安在也下則不怪姦民之逋租逃役富豪之占田併宅唯僧是施唯正之供陰虧子來之輸納視邦用盈縮如胡越之不相關奉上之義安在哉仁義墜廢上下不交而人心渙散風俗薄惡天神忠孝之教湮晦不可見若夫佛寺之耗民財亦天下之一鉅害也古昔佛寺之在畿外諸國者不過國分二寺在延喜時蓋亦未甚猥

皇朝靖獻遺言卷一

九

多每年度僧不過二三百人而識者尚謂天下之費十分而五今天下佛寺殆五十萬一說四十九萬六千餘一說四十六萬九千餘通計緇徒及其僮僕無慮數百萬人游手浮食坐窮飽煖衣糧之費不知其幾何三民之仰緇徒而衣食者其終歲所費亦不知其幾何堂塔門樓金碧輪煥填塞街市照耀湖山設令集天下蘭若於一處其土水之盛不知其幾倍徙於阿房未央之宮秦皇漢武營一

宮尚致天下騷然今其散在諸國者不勝枚舉則其所費誰能知其幾何也春秋一土木之興必書重民力也故孔子曰使民以時以此為道國之要漢文帝以百金中人十家之產不作露臺而致除租之美古者聖賢愛民財力如此而佛徒好土木興造一迦藍大者費萬金小則數千或數百天下伽藍之大者不下數萬小者無數則無慮為千萬家之產而浮屠在都會繁盛之地屢罹災改造為費亦不貲當靜處山林今則不然以天下有限之土地人民而供於浩漭無窮之費四海得不困窮乎狄仁傑曰功不使鬼止在役人物不速來終須地出不損百姓將何以求如來設教以慈悲為主豈欲勞人以存虛飾今樹下石上而乞丐者變為浚民膏之魁首罷弊天下至於如此之甚驕僧狡釋不持戒律不奉朝憲飲博爭訟貪貨賤淫婦女甚者擁

皇朝靖獻遺言卷一

十



甲兵依險阻梗命跋扈以病民庶蠹邦家

為日久矣爾後糾察邪徒專為緇徒之任

僧變為吏其循良者雖奉法守規不為民

害而勢之所在貪婪之徒挾糾察之權假

滅罪之名侵漁擅越其有死喪利人之患

難百計要求使民不以棺槨衣衾為重傾

產竭資餒僧供佛是謹若其施物不多巧

設詭計故困辱其人并錯其事至使不得

葬埋鄉里患苦彈指側目畏其兇焰不敢

皇朝靖獻遺言卷一

十一

忤違有國家者慎終追遠之禮無所施民

德何由歸厚也制產申義之政不可行孝

弟何由得教也古道訓蒙頌曰異端寂滅

後何稱之能仁若夫本地說欺皇以誣神

可惡僧徒言禮神受蛇身伊勢皇太神禁

僧近其宮○謾案沙石集云某僧化為牛

是皆過去之報云云以如此妄說恫喝世

人貪取其膏血以供已美食錦衣以充已

瑤臺瓊室嗚呼是天誅之所加有司之

罰者也而以樹下石上沒齒為名而悠悠

老死于牖下何其僥倖也余慨嘆之餘不

省彼集小說不足

辨以敷其妄也

右因類附錄于下方以便彼此相發

後皆倣之

皇朝靖獻遺言卷一

十二

皇朝靖獻遺言卷之一終

皇朝靖獻遺言卷之二

播磨山崎 橫尾謙 纂集

路上獻策

大織冠鎌足

藤原鎌足一名鎌子本姓中臣皇極帝三年春三月乙亥朔拜神祇伯固辭不就退居三島孝德帝潛龍之日與鎌足相親善會有足疾不朝鎌足往侍宿于宮帝素重鎌足容貌志氣難犯敬待特異命寵妃阿倍氏淨掃別殿設新蓐所須靡不具給鎌足深感知遇因所候舍人通翼戴之意帝大喜當此時大臣蘇我蝦夷父子以外戚擅權橫害皇族闕闕之迹稍彰鎌足慨然有匡濟之志竊察宗室諸王可輔以濟功者乃屬意於中大兄一日鎌足陪中大兄蹴鞠於法興寺中大兄鞋隨鞠而脫鎌足跪奉之中大兄亦跪受之自是情好日密俱布肺腑無所伏藏然恐為人所疑託學

周孔之道於南淵先生每相往來飯井華曰世稱

鎌足學周孔之道於南淵先生每相往來飯井華曰世稱國入鹿而巳非實學周孔之道也蓋託言以而人始言者亦必有其實而後可以託其名仕劉裕之圖桓玄託於遊獵蓋石錯實老而劉裕本好獵也鎌足之學周孔之道亦忠暴託其名云乎我觀其誅入鹿大義至謀秘計亦施得其宜縱令周孔處之不過如此而已蓋其平素所存得於周孔之過道故臨大事而所發如此其後佐天智帝興學校制律令以基王室之盛使天智帝物風化直軼漢唐比隆三代皆鎌足之力也其不盡如周孔之教者時運為然蓋夏之禮至殷而備殷之禮又至周而備焉制度之為固非一世之所能定也況在我邦草創未靖之時非可責備於一人也要之天下父安四方無虞天子垂拱兆民賴之是豈非周孔之密謀于路上中大兄從其計鎌足往說石川麻呂進其女於是石川麻呂赤心奉中大兄石川麻呂有異母弟曰日向大化五年誅石川磨呂於皇太子曰臣兄石川磨呂謀伺殿下遊海濱以為逆太子信之遂奏于帝帝遣大伴伯三國麻呂德積等勸問反狀石川磨呂曰我當詣關自陳伯等奏之帝乃遣兵圍其宅石川磨呂攜二子法師亦詣道茅澤而奔倭先是長子興志在山田營佛寺與志欲拒追兵石川磨呂於今來與志猶憂兵欲燒小墾田宮石川麻呂聞其謀曰汝愛死乎曰否石川麻呂乃諭興

志及山田寺僧徒曰夫為人臣子者豈構逆於君失孝於父耶我造此伽藍亦非為身謀唯祈天祐之永久也而今被日向之譖陷不側罪所以逃來于此者欲從容就死也平生忠誠不渝乃開佛殿戶誓曰願生生世世不怨君上遂自經而灰其餘從灰鏤足又薦佐伯子麻呂葛城稚犬者多云鏤足又薦佐伯子麻呂葛城稚犬養綱田冬十一月入鹿造兩第於甘藷岡呼蝦夷宅曰宮門已宅曰谷宮門稱其子曰王子宅外構柵設兵庫常使力人持兵守衛蝦夷又造宅於畝傍山東鑿池築城設庫儲箭每出入率兵士五十人自衛鹿

皇朝書藏遺言卷三

三

密謀廢立皇孫山背王素有成望入鹿深忌之乃遣巨勢德太古等將兵襲班鳩官縱火燬宮王得間逃出匿賄狗山中其臣為謀曰潛赴東國起兵滅蘇我氏王曰吾不欲以一身之故煩勞萬民遂不從既而王出山還入班鳩官入鹿又遣兵圍之四年夏六月三韓調貢中大兄竊謂石川麻呂曰三韓進調之日卿宜讀表吾欲入誅入鹿卿宜知其意石川麻呂許諾及期天皇御大極殿入鹿入侍入鹿為人多疑劍不去身鏤足教誹優調謗之入鹿笑而解劍乃就位中大兄戒衛門府悉鎖諸門

皇朝書藏遺言卷三

四

自執長鎗伏殿側鏤足持弓矢警衛使海大養勝麻呂授雙劍於子麻呂綱田曰急入斬子麻呂等懼甚鏤足叱而勵之石川麻呂讀表文將盡子麻呂等不肯進石川麻呂手戰聲顛汁流沾衣入鹿怪問石川麻呂曰天威咫尺不覺乃爾中大兄恐其失機徑入斫入鹿入鹿驚起子麻呂進斫其脚入鹿仆就御坐叩頭曰臣何罪天皇驚謂中大兄曰卿欲何為中大兄伏地奏曰入鹿剪滅天宗謀傾天位奈何不誅遂殺之其父蝦夷亦伏誅事平帝欲傳位於中大兄中大兄退問鏤足鏤足曰古人大兄殿下之兄也輕皇子殿下之舅也殿下先登大位非所以教長何不立舅以從民望中大兄從其言乃密奏之遂立輕皇子是為孝德帝齊藤馨讀史贊識曰中臣鏤天下之大亂立天下之大制功高萬世固無異議吾獨疑其立孝德帝之際形迹未免出於私也史曰皇極帝欲禪位於天智帝而天智帝問之鏤足鏤足對曰殿下之



皇朝靖獻遺言卷二

五

兄有古人不足而殿下越次承大統恐失  
恭遜之義不若讓皇叔輕皇子以答民望  
所謂皇叔輕皇子素與錄足相親善者也  
當此時天智帝之功足以繼天位而皇極  
帝之禪可謂則天下之望即使其立雖古  
人大兄之關關安敢沮之不止之立而古  
與已親善之孝德帝其心不可謂非私其  
心私則定天下之亂立天下之制皆為孝  
德帝非為天下而萬世之功不為過一  
之私於足乎錄足之功不為過一  
足之迹出於私而不避者其心有所大公  
而不立天智帝乃所以為天智帝所以為  
天下也治天下者無在無德為之本而不  
在法不為之制苟無德則德之德則周  
官之法孰能行之世皆知錄足之制冠服  
定位階華封更收土豪一新百度有何功  
天下而不知不立天智帝之功更大何也  
百度之一新法也求也而天智帝之不立德

皇朝靖獻遺言卷二

六

臣授大錦冠增封若干戶詔曰社稷獲安  
寔賴公力軍國機務惟公處分錄足懷至  
忠之誠居官司之上進退廢置無言不聽  
白雉五年授紫冠增封戶天智帝即位二  
年十月錄足疾病帝臨其第親問所患曰  
天道輔仁何言之虛積善餘慶猶是無徵  
若有所欲言便可以聞賴襄曰姦臣專國  
幾乎熄矣天智帝奮宗室之中運謀決機  
親覽大務於齋坐之下即登天位天下所  
望而退讓遷延歷於兩朝非有曠世之度  
何能如此而載定制度經緯天地以開萬  
世太錄足奏曰臣之不敏生則無益軍國  
死不欲擾百姓葬事願從儉素尋使大海  
人皇子就第賜大織冠授大臣位明日薨  
初葬錄足於多武峯肖像祀焉後世國家  
將有大變則其像破裂云錄足公像自裂  
余慨然書其後曰百雷激陰陽之消長而  
震焉萬波激崖谷之峻阻而響焉錄足公  
像裂蓋亦有所以激激足利氏勢焰益熾  
而睥睨天下日不唐如孤豚而饒饒良親王  
害忠士義貞或排光明院或幽後醍醐帝  
其罪狀不可勝言而當時知其暴者少矣  
是所以激而裂也特思其裂之響必大於  
萬波百雷之響也何以然矣大萬波百雷



有今古可有之事而咄咄發其響公之像有今  
古不可有之事而咄咄發其響是其大於  
萬波百壺不待言也嗚呼方今積陰重霧  
朗然相晴而赫赫天光再見焉蓋公之像  
欣然喜且笑焉而其事且  
笑之響亦當容容相發也

成大事者不可無毗輔大王宜與蘇我石川麻

呂結婚成好而後與之謀成功之路莫近於茲

大紗歌曰有臣鐵子侍謀帷幄補綴皇猷  
粲然超卓○緣起曰初鐵足與天智帝會

談和州倉橋山藤花下謀誅入鹿因號其  
地曰談峰鐵足嘗謂定慧曰談峰之為地

也東連伊勢山西對金剛山南界金峰山  
北隣大神山其靈勝不下唐之五臺我百

歲後卜兆域於此則後葉繁衍矣定慧歸  
自唐隱其言遂改葬于談峰且創伽藍名

皇朝靖獻遺言卷二

七

日妙樂寺云

皇朝靖獻遺言卷之二終

皇朝靖獻遺言卷之三

播磨山崎 橫尾謙 纂集

謫所上書

贈正二位和氣清磨呂

和氣清磨呂備前藤野郡人也其先出自鐸石別命鐸石別命曾孫弟彥王應神帝時以軍功賜吉備盤梨縣因家焉清磨呂舊姓盤梨別公後改野別真人叙從六位上為右兵衛少尉神護中授勳六等改賜

皇朝靖獻遺言卷之三

姓吉備藤野和氣真人進叙從五位下遷近衛將監賜封五十戶景雲三年又改賜姓輔治能真人為因幡負外介清磨呂為人抗直而其所持大義至忠富貴不能淫威武不能屈也帝素敬宇佐神如事生其所憑語無事不從及寵僧道鏡為法王大宰主神中臣習宜阿曾磨呂希旨矯奏小幡神教言令道鏡即皇位則天下太平削道鏡少為僧以禪行聞道鏡師事僧正義滿修如意輪法宿曜法有驗由是見寵遇

神護元年道鏡為大政大臣禪師令文武百官拜賀山階寺僧基真許咒縛童子敬說人陰事作昆沙門像置敷帳小珠於前解佛舍利道鏡欲眩取以為己瑞乃謂帝敬天下賜人爵一級迎佛舍利擇諸氏有容貌者二百人服金銀朱紫袈裟蓋列前後百官主典已上拜之道鏡常乘蓋與服食一擬供御政無巨細莫不取大於

皇朝靖獻遺言卷之三

是帝召清磨呂於御床下曰昨夜夢八幡神使來曰大神欲憑汝姊尼法均有所言汝宜代法均往臨發道鏡瞋目按劍謂清磨呂曰大神欲使我即位今所以請使者蓋為此也汝詣宇佐奉神教使我得所欲則授汝太政大臣委以國政如違吾言則處重刑路豐永謂清磨呂曰道鏡登天位吾何面目事之乎吾將與二三子從伯夷而遊清磨呂誓死而往詣神宮請教神憑語曰我國家開闢以來君臣之分定矣以臣為君未之有也天日嗣必立皇胤無道之人宜掃蕩清磨呂還奏如其言道鏡大怒解清磨呂本官出為因幡員外介示之任追咎與其姊法均矯神教欺罔天聽改

姓名別部穢磨呂流于大隅道鏡使人殺

清磨呂於道俄雷雨晦冥受命猶豫會使

來赦參議藤原百川慰其忠烈割備後封

二十戶與之水鏡曰帝廢皇太子百川請

固執前議帝起入內百川勸解曰不承聖

斷則臣不肯退立殿前四十餘日帝感其

誠惻乃許所請詔未既百川抵掌大歡呼

時人謂百川事君無貳竭心力致命自古無

比○帝不豫之日百川憂形於色醫藥祈

禱備盡心力帝益重之是歲薨年四十八

帝甚悼惜明年三月清磨呂自請所上書是歲

光仁帝踐阼竄道鏡於下野復清磨呂姓

名召還之明年復本位為播磨員外介遷

豐前守後進從三位未幾乞骸骨不許賜

功田二十町以傳子孫十八年薨年六十

七贈正三位嘉永四年三月十五日孝明

天皇賜謚曰護王大明神史論曰所貴乎

其不為利而不為威休之不操方僧道鏡

天下之安危吾觀於和氣清磨呂公之事  
有以知之神龜寶宇之際朝廷之士可謂無  
氣節矣一曰諸兄以華貴位極正一位矣而  
不聞一言匡救也吉備真備以儒學受寵  
兩朝位至大臣而朝廷之事如不聞知觀  
此二人之所為可以推其德矣夫以赫赫  
天朝祖宗之所為天下而欲傳之一比丘誰不  
知其不可而莫敢言者何哉曰懼禍也當  
此時有一人焉言之是捐其一身以存祖  
宗之天下也公是已故曰士之氣節閑係  
天下國家有天下國家者  
不可不養此以為倚賴也

臣聞人臣之禮盡忠無貳致命之道泥肝不避  
遺顯名於後代流功業於無窮斯則忠臣所以  
臨危致命義士所以忘身存節臣清磨呂再奉  
使宇佐大神宮請問國家大事大神之教不合  
西命竊惟信者國之重寶豈可顧身以寶乎又  
至尊至威君之與神誰敢乖正旨乎故復命之  
日敢陳真言大神與西方不和非唯今日事具  
先奏臣依神語奏作文詳略二道略本上西方  
詳本獻御所又嚮阿曾麻呂語臣曰大神不和  
者從前然矣若按前後奏狀涇渭自分神威由  
致今臣畏罪不言則恐非臣民之道故略而陳  
之去年奉敕昨夜夢有大神使來曰欲見法均

尼有所附奏獻慮以為此必天位之事差清麻  
呂代法均受教臣敬畏戰栗自顧任非已分何  
能堪之歸命佛神結心貞信荷重旨而履薄冰  
引蹇足以臨深淵既而祝曰臣是神之所召至  
尊以代耳目伏願立示靈異顯答聖旨大神憑  
祝韓鳥勝與曾咩誠臣吾言莫令聞西方臣祝  
曰國家大事臣難獨奏先獻憑語之狀即作奏  
文二道一藏神宮之前一附使獻之中有大事  
二條外有小事一條大事一屏逐汚濁之人二  
天之日繼如人握鏡正而莫倚小事宮雖同殿  
須異伏思非神明誰得言之如不從則恐違神  
旨又臣獄中聞民語大神憑曰吾今遷於此大  
隅當速立祠海中造島神等未得所依亦宜立  
祠今之所憑事理當然是以敢書腹心謹奏

大夢歌曰將傳奸情竊九五位神誨忠臣  
始發其誠○古道訓蒙頌曰八幡神託尊  
和氣忠○古史難詠曰堂堂和氣公  
實是萬夫雄天子感忠烈千載猶與崇德  
昔密簾日妖神蠱聖衷烈願九鼎重鑄命  
宇佐宮公時奉使幣誓死報祖宗神州天  
地開君臣已不同聖主與神孫繼繼傳無  
窮永懷忠烈願與斯神此是神所教

皇朝靖獻遺言卷之三

皇朝靖獻遺言卷之三

六

數英澤生風滿朝為失色九重回聖聽老  
孤膽已落九天日再中忠精實白日神意  
護至忠烈風神兩電天公驅雲身出萬  
死餘名聖百代中狂猾骨已朽猶竊事亦  
空衣冠拜見旒萬國咸朝宗依然舊天地  
於今仰鴻功○和氣氏所藏清麻呂傳曰  
初清麻呂之被竄也脚疾不能起立至是  
欲詣八幡宮與病就路遇豐前宇佐郡  
田村有野猪可二百夾路前驅十許里及  
拜官起坐復常神憑語賜神劍二口神封  
綿八萬屯乃頒官司以下國  
中百姓面見之莫不嘆異

皇朝靖獻遺言卷之三終



皇朝靖獻遺言卷之四

播磨山崎 橫尾謙 纂集

十三夜詩

贈正一位左大臣管原道真

管原道真字三小名阿呼參議是善第三子也貞觀中舉文章生授下野權掾十六年叙從五位下歷兵部少輔元慶初遷式部少輔兼文章博士詔講後漢書進叙從五位上七年兼加賀權守仁和中遷頭岐

皇朝靖獻遺言卷之四

守叙正五位下寬平三年入為藏人頭道

上狀曰臣謹檢近代之例任此職者或出自漢流或出生於國族未有凡夫儒士而能當此再為式部少輔兼左中辨又上表

仕者也四年叙從四位下兼左京大夫五年為

參議兼式部大輔左大辨七年兼近江守

拜中納言叙三位兼春宮權大夫昌泰二

年藤原時平為左大臣道真為右大臣上又

表曰臣地非貴種家是儒林偏因往年故擢之恩自至今日昇進之次人心不縱客

鬼職必加駐蹕伏願陛下高迎聖駕早罷臣官時同時平參決萬

下高迎聖駕早罷臣官

機道真諱練治體裁決如流綱紀振肅人想風采時平嫉寵任勝已深啣之源光藤

原定國資望素高而二人位在同道真下亦

居常快快乃以書贈之曰伏惟明年運當

變遷二月建卯將動千戈遣山衝禍難未

知為誰人引弩射市簿命者亦當中之天

數幽微難以推察人間云為足知亮惟聞

下從自翰林超昇槐位朝之寵榮道之光

華除吉備公外無復與此伏冀知其止足

察其榮分擅風情於烟霞蔽山智於丘壑

後生仰見時平因交結協力排陷譖毀日

不亦美乎

至時平密奏道真有異圖欲廢陛下立齊

世親王而身專國權親王道真女壻也帝

震怒下勅貶謫相責以欲行廢立道真憂

悶不能自白以和歌哀訴於法皇法皇欲

見帝申救之管根遏而不通日本詩史云

才子譽管根被管公薦引其在大宰府閉門後阿附左相而預管公

不出託文墨自遣天神記載開闢詩共詩是蕭蕭旅泊身時枕思豐天歷中民間建歸去日我知何處汝來春祠于北野祀道真之靈稱曰天滿天神文鈔曰德為帝王之師位極丞相之尊本邦詩賦之宗百代文粹之元寬平昌泰之

問文人君子不之其人而後世獨公  
者有所由然矣蓋天地之生神聖也非特  
聞文風名一世而已亦將為萬代之本鐸  
使斯文永不一世也足以生而之功雖因  
詛而戒乎身後之名與日月俱存焉○日  
本詩史曰道真之德業非特我邦人士飲  
戴之至退方異域聞其風者靡不景仰元  
蓬天錫明宋濂輩歌詩歷歷可徵公之文  
也豈徒尋常文士之詩哉宜乎明祀千歲  
威靈顯赫子孫繩  
規文獻世家也

去年今夜侍清涼秋思詩篇獨斷腸恩賜御衣  
今在此捧持每日拜餘香

津阪幸神夜航詩曰懷恍恍天為雷大  
震京城蓋當時因天吏造言也公左遷前

皇朝靖獻遺言卷四

三

年九月十三夜侍宴獻詩上親自解御衣  
賜焉及在配所適值其夜感而作去年今  
夜云如夢日世尊數存誠情見乎辭公之亦  
信贊公像求云松梅節操風月胸襟不慮  
不尤誰識其心其亦有見于此矣乎○北野  
緣起為十三夜事皆家文草註則云九月  
十五日嘗見躬恒集有九月十三夜侍宴  
之歌亦係延喜中然則當時玩是夜為常  
恐文草註或誤也○嚴垣彥明曰世傳  
管公速窺實非其罪公不勝憤慨及薨為  
雷霹靂皇宮余謂此所謂齊東野人之語  
不可信者也夫騷泰怨尤者小人之常情  
已公決不然矣凡事君者致命竭忠固其  
分也以寵辱易操庸人猶或不忍為而況  
賢者哉管公決不然矣○齊藤護口管公  
之熱不特當時之不幸王室萬世之不幸  
也夫自淡海閑院以外戚秉鈞繼之不幸

權漸盛天下皆知有藤氏而不不知有朝家  
宇多帝患之欲抑其權而不知抑士置之  
端授公亦慨然以天下自任輸忠竭誠不  
暇自恤故清行之規不背從右府之拜不  
肯辭見其讓藏人頭辭閑白之命公豈戀  
爵位者哉誠不得已也當此時公以一  
擊國家之盛衰而得已也與否在天不在人則  
說者之言固不暇顧也使醍醐帝終不疑  
公則抑藤氏振朝權以復近江寧樂之盛  
一反覆手之易耳唯藤氏時平管公之盛  
出於一門攝錄歸於一氏○安積信實史  
無規之者宜以盛滿自戒況三善清行以  
書諫之尤當疎然感動從之如轉圜也而  
管公不納遂貶死西裔夫以管公之德  
而執如此此可怪也予嘗反覆思之而得  
其說焉蓋管公之心即周公之心也周公

皇朝靖獻遺言卷四

四

輔相成王以治天下三叔媚疾之流言干  
國曰公將不利于天下子當是時成王幼頗  
疑之公宜避位以守寵利強滋之戒而顧  
與六師東征以誅三叔其言曰吾弗辟罔  
以告吾先王蓋周公之事君知有君而不  
知有身知有國而不知有家周自后稷以  
來積德累仁以至武王克商有四海而一  
旦失之兇豎之手豈武王托周公之意也  
哉故周公不避嫌疑不顧死生直行其志  
前致後建建綽綽如也管公亦有類于此自  
神武帝興造丕業以至清和帝凡五十  
六世禮樂征伐皆鈔于清和帝凡五十  
專權清和帝征伐皆鈔于清和帝凡五十  
政由是禮樂征伐皆鈔于清和帝凡五十  
以至千宇多帝征伐皆鈔于清和帝凡五十  
權而歸于千宇多帝征伐皆鈔于清和帝凡五十  
超遷以至台鼎又與延喜帝密欲委萬

機於管公其知人明待賢之優雖成陽聘  
伊尹於有莘高宗舉傳說於版築無以尚焉  
公感其知遇殺身且不辭尚矣置心於區區  
通塞之間哉且管公非不知成湯之可成  
也非不知其難之可畏也業已以身許國  
不復顧死生榮辱方將與天子同寅協恭  
除累世之積弊而措社稷於泰山之安此  
乃周公東征之心也但周公幸而成管公  
不幸而敗天也非人之所能為也然管公  
之歿天動風雷之變以開金縢之悔儼然  
廟食于百世又可以見管公之心與周公  
無二執矣後世名賢之士一言不合即引  
身而退天子留之輒抗疏論弁不肯奉命  
其勇退之義則善矣獨泰社稷何視管公  
之與國同休戚不大有徑庭乎彼清行者  
雖未知公之心然以下僚之身上書于三  
公直諫不諱亦可謂  
天下之奇士也哉

皇朝清獻公集卷四

三

三善清行字三輝配其姓以爲字上封事

條陳便宜十二肅祭祀禁奢侈抑兼并勵  
學生省舞妓慎刑獄均祿賜擇牧宰程課  
役嚴邊備汰僧徒修津泊其上表略曰我  
邦上古上仁下忠租稅薄風俗厚時漸澆  
漓賦歛年增戶口日熾欽明帝之世佛法  
初傳推古帝以後稍盛崇尚成風自公卿  
下至士庶競捨資產以營佛圖至不造寺  
塔者人莫齒焉降及天平多創大寺莊

嚴盡美遂使七道國建二佛寺名曰國分  
寺廢民田廢公稅桓武帝遷都者再土木  
繁興賦役大重房寢觀美宴樂飲滛府帑  
空竭徵求無限貞觀中應天門及大極殿  
並災修復累年費亦夥矣當今之時國家  
之經入非往昔十分之一也寬平中臣爲  
備中守管內有迹麻呂卿按風土記皇極  
帝時出勝兵二萬至天平中課丁纔有千  
九百餘臣到任時老丁二人正丁四人中

皇朝清獻公集卷四

六

男三人耳今訪諸役地官吏則無有一丁  
衰弊之速如此一卿可以知天下也其禁  
奢侈略曰先聖王之御世也崇節儉禁奢  
盈今百官嬪御及權貴子弟服食之奢賓  
客之費日以侈靡製一領衣破終身之產  
設一朝之饌盡數年之資若不禁之恐損  
聖化伏望隨人品列定衣食之制命檢非  
違使糾之然上帝敗之則下必效之若上  
守法則源澄而流自清其勵學生略曰治



國之道得賢為先得賢之方學校為本是以古者明王必設庠序以教德義習經藝伏考本邦之立大學也始於大寶年中至天平時令學生四百人習經史給越前山城河內之田一百八十餘町以充生徒食料又常陸丹後之稻一千八百四十束充學寮中雜用生徒口味今所闕多請依舊儀之慎刑獄略曰聖王之政刑法為大昔皋陶以大賢為理官帝舜誡之曰欽哉欽

皇朝靖獻遺言卷四

七

哉惟刑之恤然則疑獄之斷古今所難伏望依舊置判事六人皆擇明通法律者任之使之相共議然後奏聞其汰僧徒略曰諸寺得度一年或及二三百人半是邪濫之輩也又逃課役逋租調者私自落髮積年漸多天下三分之一是禿頭而形似沙門心如屠兒况又聚為群盜竊鑄貨錢伏望追捕彼僧悉令返度課還附本役欲時平逐諸司諸生受學於管門者清行以書諫其略曰近日京中小管門者清行以書諫

在諸司者可被左轉其文章生學士皆被放逐由是人人悲哭踴躍而立伏生儒變轉未必殿下之本意也但外紳累代善家其門人弟子半於諸司若遇禍患受業而巳豈有知其計乎方今紛亂之問擾攘之會宜立其陰德塞其怨門伏望示以仁厚時平乃止○論破對切痛快不遺餘力長之弊然其所論破對切痛快不遺餘力亦猶漢賈誼治安策也或云如波瀾萬狀不可正視又云以實用之才為實用之學余於封事亦云○又案華心水曰文章不足開世教雖工無益也此封事實關世教之文也蓋董子之策賢良買山之至言也宜十思上哀帝書諸葛亮之出師二表魏微之諫十思之原道論佛骨教歐陽修之未嘗不韓子之原道論佛骨教歐陽修之未嘗不

皇朝靖獻遺言卷四

八

欽慕也况於我邦開世教之封事乎○日本詩史云參議清行字耀博學洽聞器識高遠文名煥爛乎一時世對以紀發昭又與大藏善行並稱皆非篤論也藤左相賀宴詩今存者十九首清行七律在其中不但野雀雜群也如紫芝未變南山想丹露猶疑北關心直是錢劉堂與發昭善行豈得望其影塵乎延喜十四年上封事論列禁錮諸管及因星變勸管公致仕公左還後者而清行上疏論救其忠憤義烈前後儒臣未視其爵豈徒文辭超絕時輩哉特怪其子孫無聞于藝苑果無其人歟抑失其傳歟後來有三善為康古風一篇其中云逕遂滋益分蒸蒸泉石清兮磷磷勞心於虎節曝紅鱗於龍津驚哀髯於霜雪灑老淚於衣巾寓古可悲語亦清雅為康著朝野群載行于世



皇朝諸家遺言卷之四終

皇朝諸家遺言卷之四終  
九

皇朝靖獻遺言卷之五

播磨山崎 橫尾謙 纂集

諫言

內大臣小松重盛

平重盛大政大臣清盛長子資性忠謹武勇敏入接物溫厚中外屬意久安六年為藏人叙從五位下久壽二年任中務少輔保元元年重盛率禁軍從清盛出軍源為朝將兵守西門清盛部將伊藤忠清忠直

皇朝靖獻遺言卷五

先登為朝一發洞忠直胸及忠清鎧軍中震竦清盛懼曰我攻此門非承特命更嚮東門以避之將士皆言東門亦為朝所守不如由北門清盛乃引兵而退重盛奮曰奉敕出軍何問敵強弱獨麾輕騎直進清盛惶遽命左右遏之不得已而向春日表門既而源義朝縱火攻白河殿克之平治元年冬清盛如熊野至切部聞藤原信賴等反清盛進退失據計猶豫不決重盛曰

身為武臣聞天子為逆徒所逼安得不亟赴國難衆皆從之乃遣使熊野別當湛增等徵兵見兵僅可百騎適聞義朝子義平擁兵三千要於安部野清盛恐衆寡不敵欲先赴四國召聚兵士然後入京重盛曰事若蹇緩賊必矯詔討我悔之無及以寡繫衆將家之常速往戰死亦足以耀名後昆清盛意乃決遙禱熊野神遂赴京師行至鬼中山見一騎士來衆皆失色以為義

皇朝靖獻遺言卷五

平使至則六波羅使也言伊勢兵士三百餘迎清盛於安部野於是衆心始安重盛問京師消息對曰六波羅無他惟有播磨中將遁難來投信賴矯詔捕之勢不能匿出之重盛怒曰人困而歸我棄之不祥也後孰為我用者既而還京師迎乘輿幸六波羅與叔父教盛賴盛各將一千騎分道攻信賴重盛勵士卒曰年號平治地曰平安我為平氏以三者卜之賊平無疑乃分

兵為二隊留五百騎於大官街帥其半攻待賢門信賴大懼而退兵皆潰走重盛進至大庭掠樹下源義朝使子義平禦之義平率驍兵十六騎躬自搏戰注目重盛重盛且聞且卻至大官街杖弓以息部將平家貞贊曰平將軍再生矣重盛再率其半復入大庭一戰而退義平追躡重盛與二卒景安家泰脫身而走義平將及馬躡伏鎌田政家射中重盛甲堅不入又射馬墮

皇朝靖康遺言卷五

三

重盛墜堦整政家薄近重盛撞以弓遂巡問乃著堦整景安馳至搏倒政家義平來刺景安重盛怒欲自當之家泰進馬當義平亦為政家所殺重盛得間走六波羅義朝來攻重盛親突敵軍更兵交進賊大敗走義朝走關東信賴至仁和寺請哀於法皇法皇憐之手書請於帝使未及還六波羅遣兵士捕信賴及黨與藤原成親等信賴伏誅成親亦當死重盛請宥死自解其

縛是冬以功兼伊豫守明年叙從四位上累兼左馬內藏頭尋辭內藏頭為右兵衛督應保三年叙從三位長寬二年進正三位永萬元年為參議是秋帝崩諸寺僧侶會葬延曆興福二寺爭次構兵時有訛言上皇陰命僧徒討平氏清盛大驚聚兵自守重盛堅執以為妄乃造法住寺詞之會上皇將幸六波羅自開諭乘輿已在道重盛乃扈從而還清盛稱病不出上皇還宮

皇朝靖康遺言卷五

四

重盛諫清盛曰我家討逆撥亂其功亦多今有何咎責而猝至於此大人不宜形之詞色恐姦人乘機釀成讒說吾苟敬上恤下神將助我何懼之有清盛嘆稱其恢量上皇亦戒近侍勿輕為浮言仁安元年任權中納言兼春宮大夫二年叙從二位遷權大納言聽帶劍三年以病辭官嘉應元年叙正二位子資盛路過攝政基房不下車基房從者所車簾辱之重盛讓資盛曰官有高下等列尚可敬况攝政乎汝過十歲不知禮教取辱同宜基房

縛送其從者以謝重盛。重盛懼，慰勞還之。清盛聞而盛怒，心欲報復。重盛諫曰：「資盛切蒙失禮，攝政罪在從者，而不之問，反欲犯尊貴，豈非恃邪？夫攝錄臣所以叱輔皇政，撫育民庶，奈何恃勢而凌之？且以德勝人者，昌以力勝人者，凶。願大人詳思之。」清盛不納。陰使武士辱基，重盛懼，黜預其事者。逐資盛於伊勢。重盛嘗詣皇后宮，偶有巨蛇出座，重盛獨見之，遽驚惶，女侍以及后便以左右手壓其首尾，袖掩之，徐捕而出。呼人源仲綱應來，乃受而去。官內終無知者。明日，重盛遣仲綱馬賞其鎮靜。仲綱答書曰：「拜賜謹謝。抑明公昨日事，何似還城樂哉？」○方相模節行，事稠人中有竊言此公多福，至近衛大將儀貌心術亦邁人遠矣。澆季之世，未易得見，但恐不能享壽耳。果如承安元年復權，大納言治承元年其言。」

皇朝靖獻遺言卷五

五

轉左近衛大將，尋拜內大臣。是歲延曆寺僧徒有訟奉日吉神輿入京師，命源平諸將禦之。重盛以三千餘騎守陽明，待賢郁芳三門禦而卻之。先是，藤原成親結黨竊誅滅平氏事，泄被捕，清盛命武士速斬成親。重盛諫曰：「彼法皇寵臣也，自其祖顯李仕白河朝，傳家既久，爵位亦崇。今以私怨遽殺之，未見其可。唯當逐之都外，以儆其餘耳。」斯言實為國家非以與彼有姻也。昔

嵯峨朝，藤原仲成伏誅，厥後廢死刑者二十五代。至保元、中信西用事，多斬源平二族，發宇治左府墓，後二年信西墓亦為信賴所掘，豈非其報乎？今我家貴盛冠世，所慮唯子孫願大人思積善之慶，為子孫少忍之。清盛意稍解，重盛出戒武士曰：「大人一旦逞怒，後必悔之。縱有命，汝慎勿加。及由是成親得不死，重盛既還，清盛志怒不止，欲幽法皇於別宮。大召子弟臣僚，於是

皇朝靖獻遺言卷五

六

平氏親族戎服畢集，清盛第重盛後至，及中門，宗盛見其烏帽直衣，厄之曰：「有大事召公。」大人既甲，公尚緩服乎？曰：「是何言也？」近衛大將兵權所歸，而吾適忝此職，濫著戎衣，甚非攸宜。若或賊虜猖獗，王師失利，雖大臣之重，固宜被甲執兵。我未曉諸君之所為，何如其所斥為敵者誰也？且所謂大事者，朝家事而已，是私事，何得言大事？眾皆聳動，清盛心慙，不遑改服，俄起尚素。



絹而出恐甲露手頻正襟至縫裂故示開  
暇從容言曰來何晚拷治西光備得其情  
成親姦謀實由法皇皆猥屑小人近侍宮  
闈僥倖非望之所致也而法皇輕舉生事  
今當從法皇於他所除禍本也重盛垂泣  
諫之清盛曰餘命無幾惟慮子孫而已自  
今而後唯君之所計起而入內重盛責諸  
弟曰大人衰耄謀此不良諸君何不切諫  
而反為贊成乎又戒將士曰汝等慎守我

皇朝清獻遺言卷五

七

言勿敢妄動若欲從大人必先斬我既還  
第尚慮其為暴乃報急纂嚴將士皆謂此  
公未嘗輕易作事今忽有此召何不速赴  
難波經遠瀨尾兼廉平家貞及子貞能等  
爭集小松第乃令平盛國籍兵有見兵二  
萬餘於是使家貞貞能言清盛曰法皇聞  
大人謀震怒下詔重盛討之恐大人倉卒  
間至有非常事是以遣二人備防闕我以  
身固請幸勿驚怖清盛大惶惑曰為我語

內府吾前途已迫不復事事唯卿令之二  
人還報重盛謂家貞等曰我以權謀救父  
過而反傷其心是人子之道哉泫然淚下  
聽者皆悽惻既而勞兵士曰諸君不失期  
約信義可嘉唯嚮有所聞而召事適得解  
宜速罷歸後勿狃而為常法皇聞而垂淚  
曰重盛何人以德報怨朕願先斯人終命  
勁松彰於歲寒貞臣見於國危其此人之  
謂乎清盛跋扈日甚嘗造別館於西八條  
彈極土木其第多藝

皇朝清獻遺言卷五

八

遂因號蓬壺又營別莊于攝津福原亭榭  
風流以窮四時之觀天下政事一出其手  
放濫驕溢上下苦之自裁髮詭服執梅枝臂  
子三百人以為耳目小鳥翼著赤幘出入禁門不通姓名填滿  
街市伺察隱伏凡所見聞皆歸報之清盛  
聽信其言淫刑濫罰頗多一時為之震懾  
京師騎乘者皆望而避之○龜舞姬祇王  
後有名娼佛媛者自來西八條請舞淨海  
怒曰祇王在汝何為者佛請不已遂觀之  
美色絕倫乃逐祇王祇王泣留和歌一首  
而去淨海在群臣子弟面前手抱佛媛而  
入後閣佛媛謝曰妾欲售者舞也非願侍  
枕席召還祇王使妾歸家幸甚弗聽後又  
召祇王為佛媛舞祇王怒憤欲辭母登自  
曰違命則罪及母祇王乃入西邸唱歌起  
舞詞曰佛本凡夫凡夫終作佛佛媛感歎  
後潛出邸與祇王共創髮為尼結髮于嵯

嶽今祿王重盛居常憂懼一夜夢賴朝禱

神斬父首覺而悲泣瀨尾兼康來謁屏人

告其夢亦與重盛所夢符重盛益感愴會

子維盛來命飲酒貞能行酒重盛使貞能

賜維盛太刀維盛以為傳家寶刀小烏既

而視乃無文刀也維盛失色意疑貞能錯

繆重盛灑淚曰汝勿深恠此大臣葬時所

佩家君百歲後我將佩之今我有所思故

以與汝也維盛不能仰視欽泣而退重盛

皇朝靖獻遺言卷五

九

諸熊野社自祈死既而寢疾會醫至自宋

清盛勸令治疾辭曰命者天之所賦治療

何為我若藉彼得愈是示國無醫也況且

位大臣不可私見異域浮浪客縱我不起

寧忍辱國乎清盛不能強焉疾日篤終不

起薨年四十二世稱小松殿其室中四方

明燈籠妙選美女四十八人以供其坐中央聽

及日沒禮讀畢令擊鉦行歌身坐中央聽

或勢以禁之或禍福以長之重盛於父理

禍福之說耳今夫閭巷匹夫示之以當

之理必然之勢則皆悍然不敢顧苟見佛

則拜聞應報輪迴之說則懼蓋以生死禍

福有不可測者存焉重盛以為此道也足

以化吾父矣於是誦經供佛修浮屠之

道賀賀然唯恐父心之不能化獵者逐獸

不知山之為險漁者捕魚不知淵之為深

意有所急其何暇顧其險與深哉重盛一

心但知化父之道而不知浮屠之荒誕狂

皇朝靖獻遺言卷五

十

今視大人之舉動悲懼交至未聞官昇相國者

躬擐甲冑況於披髮後乎聞佛說四恩國恩最

重知之為人不知為禽獸夫吾家者雖桓武之

苗裔中古以來絕無顯達者平將軍之討將門

賞止受領及刑部卿造得長壽院始聽昇殿人

尚以為過獎大人起自小官位極人臣闇愚如

重盛以資陰叨居顯要一門采邑殆半天下寵

榮極矣今忽忘隆恩輕蔑皇威鬼神必怒覆亡

無日重盛深懼焉今拘一二首謀罪可罪而足

矣何至迫至尊哉且大人縱欲為之重盛不忍

背國恩部下有死士二百足以護法皇雖然以  
子抗父亦所不忍曩義朝害父雖以君命奈悖  
逆何重盛欲為孝子則為不忠欲為忠臣則為  
不孝進退維谷言若不聽請先斬重盛

史論曰平重盛兼文武之資抱將相之器  
平治之亂摧堅挫銳奮庸戎馬之間陳謨  
廟堂之上蓋祥麟威鳳希世而一見者也  
遭父不良恣心諫爭重盛在則淨海不涸  
肆其惡而君臣有所倚賴重盛沒則凶虐  
滔天宮闕震驚不待智者而後知之此一  
人之身而係天下之安危豈可效晉士燮  
畏慎析死哉誠不得已也父子天屬之親  
三諫而不聽則號泣而隨之重盛既以兵  
諫一之謂甚其可再乎故寧速死而不忍

皇朝靖獻遺言卷五

十一

坐視其覆亡其志亦可悲矣○讀史偶論  
論重盛略曰議者謂重盛以兵諫父是襲  
鬻拳故智也豈人子所宜為哉予謂重盛  
之事與鬻拳不同鬻拳諫君蓋不遇楚王  
一時之過也而擗然以白刃脅之無乃犯  
君臣之分哉重盛異于此清盛欲坐上皇  
是悖逆之甚者重盛雖諫止猶恐卒然舉  
兵向闕故聚師族戚之出于萬不得已其  
至誠惻怛有感動人者故清盛收手天子  
感泣以為至德固與鬻拳輕重相懸議者  
概論之亦已誤矣

皇朝靖獻遺言卷之六

播磨山崎 橫尾謙 纂集

無題歌

贈正三位左近衛中將楠正成

楠正成河內人左大臣楠諸兄之裔也山  
文集曰楠諸兄敏達帝六世之孫美奴王  
子也後為左僕射諸兄居并手故世號并  
手左大臣初左僕射之為葛城大君也侍  
帝傍會薦楠子帝取其果而與諸兄且作  
倭歌以祝之因賜姓世居金剛山西舍多  
楠氏楠氏之鼻祖也世居金剛山西舍多  
楠樹因以為氏父正康母某氏禱志貴山

皇朝靖獻遺言卷六

生正成三忠傳曰正成生而岐嶷好學善  
譚論年十二從父擊矢尾別當顯

幸直進斬敵十六卻矢尾兵數百騎斬首  
十七級及長撫民以仁厲士以義人皆樂  
為之用每戰樹功山神昆沙門也以故小  
世稱曰日本無雙

字曰多門元弘元年帝避北條高時兵幸

笠置寺津阪孝綽注曰帝怒北條高時敗  
還潛遁如南都廿七日遂幸笠置山下四

方少勤王者帝頗憂之適夢紫宸殿前有  
一大樹南枝最榮樹下設南面座百官班

列忽有二卅角來跪指座泣奏普天之下

無所容聖體唯此座可以坐也覺而自占

木傍南楠意將有楠氏者出俾朕再正南

面位也召寺僧快元問之對以正成帝謂

所夢殆是遣藤原藤房徵之正成即詣行

在帝使藤房傳命曰卿應命即至允足深

嘉今日之事一以煩卿卿其有何策以決

廟勝詳陳其所見正成對曰逆賊暴虐自

取禍譴天討所加莫不勝也但東夷之性

皇朝靖獻遺言卷六

勇而無謀若以力爭則武藏相摸之兵天

下無敵焉以謀屈之則易與也然成敗兵

家常事或遇小衄願勿煩聖慮苟有臣存

何患不濟辭歸城赤阪方可二町三面平

地在河內金剛山西守者僅五百人取民

儲以充兵食若行在失守將迎駕於此也

板築方畢而高時大佛貞直等十餘萬已

攻陷笠置京都六波羅鎮將北條仲時北  
條時益遣檢斷使糟谷宗秋隅

田通倫率諸國兵圍笠置城堅不拔高時  
遣大佛貞直足利高氏等將關東兵至進



攻不能克陶山義高小見山氏真率兵五十餘人以飛鳥路村民為導北從觀音谷  
繼藤葛以上會夜雨暗甚密隨巡夜卒後  
周觀諸營有可問者輒答曰巡夜更戒守  
者而過至行殿傍縱火詭噪外兵以為有  
內叛鼓噪相應聲震山谷官軍驚潰帝潛  
出園將幸赤阪至高間山貞直等追獲帝  
時九月廿八日也仲時等以兵擁車駕赴  
京都幽于六波羅親王公乘勢奄至城下  
御以下分拘于諸將家

皇朝靖獻遺言卷六

三

計正季等職之分兵為二鼓譟而進城兵  
連鋒突出合勢奮擊敵狼狽而走器械輦  
馬委棄載路尋復來攻圍數重正成豫索  
懸外牆俟其四面爭登而斷索敵隨牆顛  
因連投巨木石壓殺七百餘人敵更蒙楯  
競進鐵搭鉤陣殆壞城中乃以長柄杓沃  
沸湯敵皆傷爛自是退守營柵計持久以  
困之初正成築城倉卒儲糧不多至是謀  
於衆曰我數有利而賊勢不挫內乏資糧

外無救援欲率先天下以建功業者死固  
在不顧也雖然臨事而懼好謀而成亦智  
士之所尚焉我今陽死賊必引歸歸復聚  
衆出戰我逸彼勞制勝之道也衆皆然之  
即夜會風雨晦冥咫尺不辨正成為二大  
坑填以死屍積薪于上留一卒戒曰候我  
行遠放火燒城乃與衆三五分伴潛過敵  
營而行敵不之覺及火起爭入城見坑中  
焚屍以為正成信死引兵旋于關東正成

皇朝靖獻遺言卷六

四

乃匿于金剛山北條仲時時益遣湯淺定  
佛守赤阪二年車駕西狩隱岐三月七日  
帝發京師  
四月二日車駕至隱岐  
高時置兵防衛所在官軍皆解正成  
以兵五百出攻赤阪定佛命領邑民夜輸  
糧米正成謀知邀而奪之更苞戎具如米  
狀使卒三百陽為輸夫擔致城中別出兵  
為追擊之狀城中望見以為輸夫為敵所  
追乃開門納之既入披甲譟叫外兵應之  
折關並攻定佛遂降伏正成併其兵徇和

泉河內進屯渡邊橋京畿大擾仲時時益  
遣隅田通治高橋宗康將兵五千餘來攻  
正成分二千人為三伏天王寺側弱卒三  
百守橋皆羸馬繩轡及戰輒走誘敵窮追  
比過天王寺伏兵並起敵大敗退至橋人  
馬擁溺死者無數逾月仲時時益又遣宇  
都宮公綱以兵五百來攻和田孫三郎謂  
正成曰隅田高橋五千之兵我已破之乘  
此新勝以挫公綱何難之有請出兵逆擊

皇朝靖獻遺言卷六

五

正成曰兵在和不在多公綱阪東驍將從  
以紀清兩黨是役承敗衄之餘僑軍孤進  
志在必死使我能拒所亡亦多天下之事  
豈止今日宜愛士力以圖後舉也我輸彼  
一籌引退數日出奇誑之則阪東慄急之  
士氣索而去矣所謂見小敵怯見大敵勇  
不戰而屈人之兵者也棄陣而卻居數日  
遣卒三百及民兵數千大燃炬火星布山  
澤如此連夜滋多滋逼公綱勒兵嚴備意

其衆日盛也終潛引還正成復入天王寺

請僧徒觀上宮太子未來記其文曰當人

皇九十五代天下一亂而主不安此時東

魚來吞四海日没西天三百七十餘日西

鳥來食東魚其後海內歸一三年如獼猴

者掠天下三十餘年大山變歸一元正成

悅曰讖文所謂人皇九十五代即今上也

東魚吞四海相摸入道是也

高時為相摸  
守薙髮號宗

鑑世因稱相摸入道時俗謂佛官人多髡  
染者稱曰入道高時既為入道群下爭慕

皇朝靖獻遺言卷六

六

效之圓頂  
者盈府廷

西鳥食東魚當有起兵滅關東

之人日没西天三百七十餘日指上在隱

岐歸闕反正當在明年春

世俗傳道天王  
寺有旛戶王識

記闕而  
傳焉

因以金裝刀與僧益優厚士卒禁

止暴掠遐邇歸望兵勢彌張尋還金剛山

築千劍破據之使平野將監守赤阪明年

高時復大發兵遣二階堂貞藤圍兵部卿

護良親王於吉野大佛貞直攻千劍破阿

曾時治攻赤阪將監拒守旬餘有暗渠為

敵所泄時又久旱兵士困渴敵仍以火箭焚樓櫓將監力盡而降送六波羅斬之會貞藤陷吉野護良南走貞藤與時治兵悉集千劍破軍勢大賊城東西臨谷南北敵峰斗拔數十仞周可一里敵恃其衆蟻附急攻城中大發矢石拒之敵死傷無算令更十二人注之三日夜不絕書乃令軍中禁擅進安營環守城有泉五道雖旱不涸正成作大槽數百貯水每日得五斛許汨

皇朝靖獻遺言卷六

七

以黃土養其性又每雨引屋溜於槽水常得足而敵疑其外汲令名越越前守某兵三千守東溪正成伺知守者稍怠拂曉出兵擊走之獲其旗幕翌日張之城上呼曰此昨日名越殿所遺煩部下人願來取之越前守愧忿率五千兵拔營進薄城兵下巨木仍大發射死傷略盡敵服其機

史論正

成之用兵決機制勝勢如孫吳而忠勇壯烈殆與唐張巡相似也巡出雍邱守睢陽正成去赤阪據千劍破皆嬰孤墉變賊喉牙聲愈所謂以十百就盡之卒戰百萬日

激之師也以寡擊衆出奇無窮益成持久之計正成乃縛葉人數十被甲持兵夜置城外壯士五百潛蔽其下昧爽鼓譟誘敵伺敵來擊略發數箭遂巡入城時方霧昏敵衆不曉競赴葉人城上乃連下巨石殺傷八百餘人城

皇朝靖獻遺言卷六

八

兵奉護良親王之令截敵糧道敵中大困逃亡相繼仲時時益又遣宇都宮公綱助高直公綱以手兵千人疾攻不能拔會帝幸名和帝令忠顯登岸問途人豪族可倚者答以長高忠顯乃踵其家方宴忠顯直入傳詔長高水答長重進曰人之所重名而已矣今忝受帝者自托事無成否皆足以揚大名於天下諸將攻克六波羅敵皆解圍去車駕歸關正成乃率兵七千迎謁于兵庫帝親勞之曰大事速成一卿所效正成謝曰不賴陛下威靈臣曷



得出賊圍復有今日詔前驅入京師後高直等擁餘衆在南都謀犯京師正成副左近衛中將源定平討而降之建武元年討僧憲法于飯鉢山平之以功為檢非違使左衛門尉任攝津河內守護二年義貞東討足利尊氏正成與諸將留衛京師延元元年尊氏犯關正成以兵五千禦宇治尊氏兵攻大渡淀川受水津川其下曰大渡趨京之要津也官軍敗績帝幸延曆寺京師放火燒宮闕正成

皇朝靖獻遺言卷六 九

乃與諸將守行在與義貞結城宗廣名和長年等攻京師結城宗廣自與之白河率兵從鎮守府大將軍北畠顯家奉義貞親王赴難北至鎌倉尊氏既西兼程追蹙入援與義貞正成長年等擊賊將細川定禪于三井寺遇敵兵五萬于走之追入京師急攻尊氏出雲路正成辨楯數百枚遇敵馳突乃鐵勾相連蔽以發射退輒縱精騎乘之敵披靡而卻是日諸軍獲捷尊氏西走遇日暮正成謂義貞曰今日破賊殺獲無幾而不知尊氏所適以此少衆頓留京師恐士卒

貪財四出不收豈得無反襲之虞如前日事耶且敵乘勝機後恐難制莫若旋軍養力一舉驅之數千里外也義貞從之引還尊氏復入京師翌日正成遣僧數十人于戰場歷索死屍詐泣曰昨新田北畠楠氏等七將戰沒將為求骸收葬敵聞以為信乃取屍首似義貞正成者梟之有以善哭者見者正成發以為士人皆笑之至是號為僧令救僧俱哭泣甚悲人異而問之輒曰昨日北畠新田等諸公戰沒聞吾楠亦為亂兵所害冀索死骸之泣下不已慘愴動人於是

皇朝靖獻遺言卷六 十

敵以為信稍撒兵備於是正成與諸將潛軍夜發別遣卒持炬遵山西行綿綿相屬敵軍望視告尊氏曰官軍失將領今皆已去尊氏遣兵要諸道餘衆不復警備詰旦正成等進入京師放火掩擊敵軍驚敗尊氏竟西走遺棄器甲蔽路正成遂與諸將追至豐島河原與足利直義戰正成引兵出敵後直義不戰而退與尊氏航海遁夏尊氏直義引大兵水陸並東義貞拒之兵庫詔正成



往助正成奏曰賊收九州軍勢必昌熾以  
 我疲兵恐不能當宜召還義貞車駕移蹕  
 山門縱賊入京師而臣還河內招聚畿縣  
 兵塞河道絕糧運待其疲散然後前後齊  
 進一舉可斃也揣義貞之計亦復及此但  
 不戰而退涉于物議故不輒歸耳夫戰者  
 雖始之或負欲終之有利請加重思藤原  
 清忠以謂宜速遣正成決戰都外帝從其  
 言正成即以五百騎上道至櫻井驛以所

皇朝靖康遺言卷六

十一

賜寶刀與正行遣還河內正行時年十一  
河內誠之曰汝雖幼已過十歲猶能記吾  
言今日之役天下安危所決意吾不復見  
汝也汝聞吾已戰死矣則天下盡歸足利  
氏可知也慎勿計較禍福嚮利忘義以廢  
乃父之忠苟使我之族隸而有一人存者  
則率以守金剛山之舊址以身殉國有死  
無他汝所以報我莫大於此正行請從共  
死正成叱之起正行揮涕而去○三忠傳  
曰正成到櫻井驛召正行教之曰我竭力  
王室久矣然准后譏于內清忠問于外我  
死天下其尊氏乎汝畢志盡忠勿有二心  
因取家訓一卷于懷中授之曰此治國用  
兵之要語汝當風夜觀省以厲忠臣孝子  
之志也○賴襄題捕公別子圖曰海甸陰  
風草木腥史編時筆姓名馨一腔熱血存  
餘歷分與兒曹覽賊寢○藤田彪正氣歌

遺訓何慙慙日或伴櫻井驛遂進陣湊川以當尊氏陸  
 軍義貞陣和田崎以禦水軍義貞會正成  
曰賊皇張欲敗卒當之固難矣去年我軍  
關求以致與敵今又承勅西征未敢攻拔  
一城聞賊大軍將至遽然引還我竊恥焉  
是以不卸勝敗委命一戰耳正成慰之曰  
見機而進權時而退將之道也紛紛之論  
何介懷為公往歲摧破北條高時今年因  
蹙足利尊氏抑雖聖運所然亦皆公之武  
略也公之於軍旅其誰得間然義貞為之  
釋然尊氏先鋒細川定禪率舟師向紺邊義  
貞拔軍赴拒而尊氏全軍既登兵庫正成  
望之謂正李曰大軍隔絕敵滿前後吾道

皇朝靖康遺言卷六

十二

窮矣乃赴直義陣縱橫奮擊幾獲直義尊  
 氏遣六千餘人斷軍後正成回戰數次士  
 卒殲盡躬被十創退入民屋謂正李曰今  
 日送死九泉吾子欲何所託鬼正李笑曰  
 願七生人間以滅朝敵正成怡然與之交  
 刺死時年四十三帝追悼不已贈正三位  
 左近衛中將楠氏已後二百餘年權中納  
 言源光國聞其無墓表新建一隆碑乃脩  
 墓埋石棺中藏一圓鏡徑一尺二寸其背

刻曰楠正成靈塚上為二層石座設龜趺

碑巍然其上高九丈二尺八分大書曰

嗚呼忠臣楠子之墓

仁義不以力烈烈丹心如青天白日也

揚義旗敵王愾必取戰必勝神謀妙算

高出千古○賴襄調楠河川墳詩曰東海

大魚奮鬣尾蹴起黑波汗欄宸隱島風雲

重慘毒六十餘州總鬼虺誰將隻手排妖

氛身當百萬幸闕群揮戈擬回虞淵日執

雷同斷即墨雲關西自有男子在東向寧

為降將軍旋乾轉坤蒼龍遇酒掃鞏道近

鑾輅論功雖陽最有力謾解李郭安天步

出將入相位不班前振後虎事復艱獻策

帝閣不得達決志軍務豈生還且餘兒輩

繼微忠全家血肉藏王事非有南柯存舊

皇朝靖獻遺言卷六

十三

根偏安北關向何地構山遠迤海水碧吾  
來下馬兵庫驛想見談兒呼弟米戰此刀  
折矢盡臣事畢北向再拜天日陰七生人  
間滅此賊碧血痕化五百歲范范春燕長  
大麥君不見君臣相圖骨肉相吞九葉十  
三世何所存何如忠臣孝子萃一門萬世  
之下一片石留無

美廼他免仁貴未達於母不毛布多許許呂紀

民能當米耳斗身惡茂隱文波泥

比作加多能阿萬都微嘉度乃耶須架禮登以

廼流問久尼能民九赤里廼可味

明徵士朱之瑜曰忠孝著乎天下日月麗  
乎天地無日月晦蒙否塞人心廢忠孝

則亂賊相尋乾坤反覆余聞楠公諱正成

忠勇節烈國士無雙蒐其行事不可概見

大抵公之用兵審彊弱之勢於幾先決成

敗之幾於呼吸知人善任體士推誠是以

謀無不中而戰無不克誓心天地金石不

偷不為利回不為害怵故能興復王室還

於舊都諺曰前門拒狼後門進虎廟謨不

臧元兇接踵構殺國儲傾移鐘簋功垂成

而震主策雖善而弗庸自古未有元帥妬

前庸臣專斷而大將能立功於外者卒之

以身許國之死靡他觀其臨終訓子從容

就義託孤寄命言不及私自非精忠貫日

能如是整而暇乎父子兄弟世篤忠貞節

孝萃於一門盛矣哉至令王公大人以及

里巷之士交口而誦說之不衰其必有

過人者惜乎載筆者無所考信不能發揚

其盛美大德耳○賴襄曰其觀諸行在對

天子曰臣而未死賊不患不滅夫以一兵

皇朝靖獻遺言卷六

十四

衛尉而居然以天下之重自任豈非感激  
其值遇以一身許國哉故能以赤手障江河  
回天一日於既墜而使其壯也公聚北條氏精  
銳於一城之下而使之新田足利之屬持其  
空虛以為首而饒能與結城名和輩比肩其  
以公為首而饒能與結城名和輩比肩其  
失於舉措足倚新田氏為重公特充福禪  
氏叛朝廷方倚新田氏為重公特充福禪  
供其驅使亦以門地有公之策耶爾然京師  
大捷殆致掃珍者非自公之策耶爾然京師  
以其所任新田氏者非自公之策耶爾然京師  
犬羊狐鼠之賊蹂踐吾朝廷我然觀其臨  
死戒子又曰吾死天下悉歸足利氏夫知  
天下之不可為而死天下悉歸足利氏夫知  
其設心雖古大臣何以遠過故子孫能守  
其遺訓謹正統天子於彈丸黑子之地以  
防四海寇賊者及三朝五十餘年之久舉

皇朝清獻遺言卷六

十五

灰滅而後足利氏始得大成其志於天下  
蓋朝廷不能大任楠氏而楠氏所以自任  
莫以加焉世之論中興諸將尚視其資望  
大小而不深揆其實亦與當時之見等耳  
不有楠氏雖有三器將安託焉以繫四方  
望哉笠置夢兆於是益驗而南風不競俱  
傷共亡終古莫以恤其勞悲夫抑正閏雖  
殊卒歸於一能照鴻號於無窮使公之知  
亦可以與矣○貝原篤信曰天地之間唯  
有一氣別之則陽與陰而已矣人之生也  
雖俱稟二氣有受陽之多者有受陰之多  
者故其為性也有屬陽者有屬陰者凡屬  
陽者其氣必清明則易知屬陰者其氣必  
昏濁昏濁則難測自然之理也故聖  
人之作易也雖陰陽不可不兩立然以有  
清濁之別淑慝之分遂以陽為君子陰為  
小人○嘗推此理以試觀天下之人凡其為  
人也剛明正直疎通洒落如青天白日無  
毫末可疑者必君子也柔暗掩藏隱伏狡  
明之氣者也其為人也柔暗掩藏隱伏狡  
陰之人稟昏濁之氣者也其為人也柔暗  
陰之中求陽剛清明之君子也於是又嘗  
為武侯於唐得顏文忠公於宋得范文正  
司馬溫公與文丞相求之本邦則如楠公  
正成其人蓋公丞相求之本邦則如楠公  
之豪傑也吾邦歷代名士出乎其右者蓋  
罕見其比也忠義勇智技之異域之英俊  
恐無耻也如夫愛君愛世之心足以動天  
地感鬼神貫人心耀古今聞公之風者百  
世之下莫不感敬而仰慕非公之忠誠豈  
能如此乎可謂真大丈夫也彼兄弟之忠  
踐阼戰死而美志不遂良可痛惜可謂有  
子有弟也其履歷戰功載在傳記今不暇  
枚舉惜乎舉世唯知其為良將而不知其  
哲也今茲暮春余發自京師將歸于故里

皇朝清獻遺言卷六

十六

偶阻西風泊舟於攝津兵庫攝衣下船陸  
行到湊川北而見公之墓墓在平田之中  
榛莽蕪穢無從辨認悲風蕭蕭春草青  
唯有松梅二株悲風蕭蕭春草青碑上  
款良久低回不能去忽謂令無碑石如  
恐後世或不能為公之墓墓在平田之  
摧為薪亦未可知也於是託兵庫館人繪  
至氏欲建小石碑於其上願為營計而  
去焉余歸鄉自顧念公之偉烈洪名不  
區區之論揚而明矣若今欲稱述彼德  
勒之石碑非老于文學者則不能也且吾  
儕微賤而立石碑於他邦恐不能逃俗  
之罪終改悔而廢其事且送書於兵庫  
人令報彫刻感歎之餘不能默止私記  
其所懷云爾○高山正之嘗見室直清所  
論著至於論楠公以應召造笠置為度  
不足引諸葛亮三顧事之迂也夫元弘之  
憤然罵曰腐儒何論事之迂也夫元弘之  
時豈可與三國同年而論哉劉玄德之未  
下分裂豪傑並起當此時劉玄德之未  
履職席之人自稱曰王室之胄豈能辨其  
真偽哉亦猶今世奴僕輩號源平以自誇  
者也孔明之三顧而出於我公心猶以為  
雖累百顧猶未為緩焉如楠公則異於是  
赫赫天朝神聖相承皇統一姓傳之無窮  
以來神聖相承皇統一姓傳之無窮普天  
率土孰非皇民而楠公則廷臣之裔而  
內之民也雖皇無召命豈視國家之難  
效彼諸葛輩之為也讀書如是雖百萬  
何益乎取其書投之堂下  
正成在觀心寺時奏護良皇子曰矢尾別  
當顯幸有武譽者也彼若不屬王師則河



內寧諡其難矣乎正成與彼結私怨累年  
攻戰我若赴赤阪則鴻命縱雖連降而彼  
遂不屬王師其為人也智淺而直常欲得  
官位今繕令旨賜權僧正之號且有天下  
安全之後忠賞可隨其望之旨則彼必屬  
王軍護良然之即賜令旨顯幸大喜曰賜  
權僧正之號何面目如之哉然楠正成或  
曰存或曰亡若猶存勤王則吾不應命護  
良議之正成正成代護良之旨使人言曰

皇朝靖獻遺言卷六

十七

正成存亡不可知焉若不死則何不來於  
此乎縱雖不死至今不來於吉野則何忠  
之有於是顯幸悅既過十日正成出于赤  
阪顯幸遣使于護良曰正成出于赤阪知  
之否護良答曰不知也正成拔赤阪之後  
遣介於顯幸曰吾以眇小之身欲成一大  
事似不知其量也然重帝命棄生輕死而  
已而今以與足下有怨故護良皇子之疑  
我多端夫以私忌公者人之所不為也自

今以後可捨往日之私怨傳達正成丹心  
於護良則忘父祖之耻乞降於足下足下  
若不諾則私怨也朝敵征伐之節障也先  
可與足下戰耳顯幸謂我應護良之命事  
已達于洛今又與正成戰則吾無利且其  
所言尤有理良將之乞降亦非我身之榮  
乎乃應之曰護良之疑吾子也吾請計之  
與吾子同心盡忠矣遂率五百五十騎來  
于赤阪屬正成自此顯幸與正成屢談兵

皇朝靖獻遺言卷六

十八

法顯幸遂服請曰養足下族類一人以嗣  
吾采地正成即授和田正遠三男滿仁王  
丸時年十一而後顯幸屈正成  
藤原藤房一夕月明招楠正成述其衷曲  
曰天下遂有逐鹿者尊氏直義黠智特賴  
准后廉子廉子亦為彼傾心故尊氏頻昇  
進義貞其恨陛下乎尊氏直義其先問鼎  
乎義貞犄角之勢漸見其勝敗未可知焉  
政道之不良我屢諫犯顏而不見納義可



以去矣卿者武林之翹楚也若有變則宜戰死正成聞而慨然曰顧世事皆如公言然公在而格君之非則人皆倚賴之若避世則事已去矣我為武夫唯一死耳

足利直義謂正成曰佐佐木梶原之徒先登爭功是匹夫之勇不足用也正成曰佐佐木諸士姑置之且道賴朝鼓士氣使之不愛軀命先士卒而力戰非具將器者不能也直義悅因問賴朝用士之術何如曰賴朝以詐力奪天下者也吾儕王臣不宜談其謀略直義大愧

皇朝靖獻遺言卷六

十九

正成與直義接戰身被數創乃入民家將自殺尊氏遣使湏賀氏謂曰足下以寡敵衆忠義誰能比今當退兵河內不宜自盡也公笑曰大丈夫成功則名垂竹帛不成則血膏草野今軍敗兵疲死報天恩之秋也欲使一家人還鄉道路無恙是公之惠

也謙按楠公公明正大可與日月爭光可與山河競高而尊氏區區甘言誘之其

不知楠公之心亦愚之甚者

初正成謂防大兵者莫若傍山築城於是歷覽大和河內之諸山得千劍破峰以為五得相應之地因城焉五得相應云者一曰水多二曰山峻敵難得登三曰麓滑嶺峻若巖麓共峻則敵有利于鑿隍又城邊四町無別峰亦可也城邊有峰則敵兵放矢于城中拒守者之所嫌也此地無此患四曰城岸皆岩石則敵難登五曰山深地

皇朝靖獻遺言卷六

二十

僻利于鄉導窺敵營又有一得此城之高也不過二町甚高則害于軍兵之出入故正成以為五得相應之地也正成相城之廣狹周廻五尺之杖四百餘也東柴高築之四尺柴下去土三尺而掘之橫柱其長二間立二柱于三所有四間之間隙架矢棚于其間土底有二緯木柴間有緯木壁之高五尺矢棚又在其上二柱間之矢棚者或六寸或六寸五分或五寸六分也試

之立三尺五寸水偶人於岸上射之而隨其恰好而構矢棚其高低隨宜其上下又有緯木或四寸或二寸五分壁板之周廻其小則一尺八寸其大則二尺餘也有二緯木立小柱于其間周廻八寸以四寸五分之木為壁骨內外皆同實之以瑣石堅之以塊土乾之六日內外又塗土矢棚架于處處壁內多植樹木松柏繁茂中有屋宅倉庫壁外之樹木者皆芟除之米穀三萬餘石鹽五百餘石大豆三千餘石其餘膏油薨魚海草乾菜等不知其數又有一箱周廻三間深廣二間實之以稻穗又有一倉縱五間橫四間盛之以矢又蓄鐵三萬斤冶者六人鍛鑛或賣寶器以調之又掘土廿間埋之以炭凡三千餘駄也其兵二千餘騎選八百六十餘人而置於城中殘兵千餘及兵士之婦妻者遣之於賀名生與觀心寺楠正氏和田三郎恩地左衛

皇朝靖獻遺言卷六

二十一

門志貴右衛門澤邊五郎等亦在彼所為塞敵之通路知敵之謀計也又使平野將監居赤阪城兵士二百八十二人平野者矢尾顯幸甥也正成為養子之約置之於赤阪城曾與顯幸所爭之地皆卑之正成謂守城之法以水穀為第一故其築此城之時先求水之所在峰頭有水號五所秘泉大旱不涸正成塞其滴瀝而不漏之自朝暾之外至翌日曜靈之初出井中挾竹待水之滿汲之凡及十石一升之水者一人一日之用也洗米之濁水則使僕隸洗其足而不妄捨之有馬者飲之無馬者湛之於槽而為消火箭之備又為大槽三百以水實之又每檐戔筧納兩滴于槽中又穀米九合者一人一日之用也朝晝暮共二合也其三合者備不時之需也若或夜戰之時不食則兵士疲勞故以三合當之又鹽一合是一日之用也鹽豉二合者十

皇朝靖獻遺言卷六

二十二

人之用也其給糧于兵士必以三日之料  
嗜酒者雖欲造酒而以其糧少故不多造  
之其糧盡則又給之正成或召兵士同飯  
使飲清酒僅一盃耳濁酒則二盃也正成  
往從者之宅必著小燈其所雅言者戎經  
劍論之事耳或又授米於臣從僕隸或斗  
或升以是為酒費屢授米則或與孔方以  
充其用米多則為飽餐嗜酒之端故不多  
與之又城中每士一馬其餘皆遺之於處

皇朝清獻遺言卷六

二十三

處為害于糧盡也又或煮諸果為油或蒸  
嫩葉為食凡城之修造用物無一所闕  
世私曰嘗讀史觀東兵攻楠公於千早  
當時之猛將以百倍之衆圍彈丸之孤城  
攻則敗當則摧如枯葉之迎烈風遂終於  
自潰竊謂是不獨公籌略拔衆其山必高  
其谷必深其阪必奇峻斷不可梯而登  
也今茲西征過河內救所謂千早村而登  
其城虛觀焉山高不深阪不峻其麓無大  
石怪巖為之固可以梯而攀也取者何耶  
變也而守而能固攻而不可合此而他求  
試以兵法推之山高不過二百步者以  
出入進退也頂不滿五百弓者以少兵不  
可以守大城也谷不滿五百弓者以少兵不

孤岡獨立雖不深且峻無由梯而攀也然  
則公之擇於此其豈無所見哉且夫良將  
不以山為城而以勇智為城公之才超  
卓天下之山莫高於此也籌策深遠天下  
之谷莫深於此也心膽沈毅氣志堅確天  
下之峻阪堅城莫有加之也宜矣盡當時  
之猛將以百倍之衆攻則敗當則摧也予  
於是不能無感焉以公之才在千早則勝  
而在濠川則敗於北條氏則伸而於足利  
氏則屈豈不早之地宜於守而濠川則不  
便於戰耶抑獨運其智與或製其肘有所異  
而然也悲夫

皇朝清獻遺言卷六

二十四

正成以元弘中之勲天子封之河攝泉三  
州然而楠氏不狹寵利無伐功勲恭儉自  
居懷保人民惠恤困窮邦之賦稅免十之  
二以振荒亂之餘辟不辟之野毛不毛之  
壤新鑿溝洫而居民數貸之種穀以勸樹  
藝至于秋成乃使之唯收其所貸焉作之  
二年則稅三分之一迄於新田三年不徭  
役其民植木於山澤樹桑於邑里皆盡  
地利以利國民又穿池於山麓數處曰戲  
雖或早暵也天非敢災田疇也所以害稼  
播者人愚而棄雨也今所以弃焉者庶幾

以貯雨露也而舊池難渚者皆以為田當此時乎他邦之民襁負而至焉其戶日加焉云有司或有告上之益者楠氏乃曰吾苟主乎三州而牧養民人斯之以為任矣何為更求自益焉而今而後有益於下者可以告也有益於上者不可以告也又嘗有告措新法者也楠氏乃曰如斯之法將使人民安乎將使人民疾乎某以為奚若某以為何若必歷問群臣以參考衆議

皇朝靖獻遺言卷六

二十五

而後可措則措焉可止則止焉未有敢專斷焉者也當時令使臣曰政事必可先循舊制也新法雖則善也苟變舊移新則民必不安焉或以為患苦也如不得已而措新法則宜簡鍊其義而後措之也嘗新數一法曰貧乏者可以告訴焉而或有告訴之則檢其所以至貧焉若其奢侈非度而以至貧者大責之曰僭上無禮國之賊也而不毫救助焉若其事不細則流放之曰

以除民之蠹也或不圖而損於事或以父母兄弟親族故或以躬疾疴故而乃至貧者隨而與之錢穀各稱其分復誨之世營術使之以禦既往貧若夫工匠之屬或怠惰以貪者則懲戒之曰凡生於此世者未有無用於斯世也凡有用於斯世者必自得生產焉是則天地之所以與焉也爾怠惰乎汝產業而不供乎世之用乃以至貪是天地之所以不育也我何為扶助焉哉

皇朝靖獻遺言卷六

二十六

初河內平岡郡有獍馬者吏執盜來楠氏乃召隣民問其所以獍焉隣民皆曰斯夫有老母在焉能致孝養矣頃日母病請醫治之醫曰得米二石而能療治焉夫即諾之而服其藥乃覺病小瘳然斯夫太貧難乎償二石米醫頗償之其疾未瘳不復與之藥夫也憂之以謀諸親友其友乃貸一石米以遺之醫醫猶責之曰汝將乖約乎不具米二石則我未可復與藥也夫也惑



焉然而不忍母之病於是乎不得已潛行其近村攘馬一匹以鬻諸平野市而獲米三石償一石醫婦一石其友一石以為母之養也而後歷數月彼馬主見其馬於塗檢而訟之是以為吏所執也楠氏即召彼醫問之果如其言也而盜之母悲之其病將益殆矣楠氏乃謂其里正曰攘馬之罪固不可宥也然吾既免賦稅十二也則皆將足矣而斯夫之貧獨如是也里正對曰夫也固畝數少朝夕不給售魚鹽以食也而去歲疾足七八月故如此其貧也楠氏曰宜矣乃謂馬主曰汝既得馬將於汝乎足矣盜當授乎予焉然汝有數月無馬之損乎我當與米二石以償於汝也又與買馬者米二石曰反馬償而已而數醫曰夫醫不仁術乎若治貧民之疾雖無報禮也猶當投與其藥也以汝不仁之甚矣而教愚民盜也如汝者實國賊也乃令吏放

皇朝靖獻遺言卷六

二十七

皇朝靖獻遺言卷六

二十八

逐之三州外而屬攘馬者有司曰盜則可罰也當沒收彼之室而逐其郡邑孝則可賞也當移彼於新里而與之一夫田宅乃更賜米十石曰當益孝養焉而後謂平岡宰宇佐美五郎曰吾今聽攘馬之訟而知爾之怠政也蓋宰者以撫毓民為職民無飢色則所以為善政也故當使下吏日省其民而扶疾救急也今有孝民而不能振其不足有貧醫而不能懲其非道使良民窮厄而至于盜也則不汝之急乎政故乎民之有罪則正成之罪也今以汝怠乎政故使正成有罪也曩者我知汝之不急故使汝宰焉今而怠者斯爾生驕侈之心也五郎深耻之懼而數日不出焉於斯時也新措貧乏者可以告訴之法云右二事亦楠氏事蹟中之較著者因表出于茲以示後之處大事者正行叙上四位下為春宮帶刀檢非違使

左衛門尉兼河內守父正成戰沒湊川尊氏送元於其家正行見之不勝悲慟起詣佛龕拔正成所授刀將自殺母趨抱持之曰故判官之遺汝非以薦福亦非以殉死意教汝保合族黨舉兵除賊再致天下於天子也汝面奉遺言還以告我而言猶在耳漠然若弗記吾恐汝背國事也讀史雜錄曰正成之死正行悲哀欲自殺母抱止之正行終克合義豫以敵王愾此母訓誨之力也正行愧止自後與童輩遊戲常為搏戰馳

皇朝靖獻遺言卷六

二十九

逐之狀莫不以討賊復讎為事也後醍醐帝出花山院御內山正行與從弟和田正朝等來赴及帝崩入宿衛後村上帝踐祚之初屢出兵住吉側以挑敵軍正平二年足利尊氏遣將細川顯氏以兵三千來攻河內距金剛山七里而舍聞正行將攻矢尾城謀候其出遠徑至金剛山下斷後麤之正行探聽率兵七百佯向矢尾縱火所以在潛還蔽譽田林而陣顯氏望矢尾烟以

為敵果攻彼乃馳赴金剛山無復隊伍比過譽田正行兵叫呼突出顯氏大敗直奔保天王寺山名時氏以兵六千援顯氏屯于住吉正行計先破住吉則天王寺兵不煩攻可自退乃分兵二千餘為五隊放火民舍而進望敵軍塵揚以謂彼陣四處而兵倍於我不宜分勢復併五隊為一大戰破時氏于瓜生野餘衆隨潰至渡邊橋溺者無算時氏被創走明年正行進逼京畿

皇朝靖獻遺言卷六

三十

尊氏憂恐乃令高師直及弟師泰發兵八萬來攻正行與弟正時和田正朝等百四十餘人軟神水誓死詣行宮奏請曩者先臣正成展微力夷強賊以安宸憂無幾天下一復亂逆賊西襲終致命於湊川臣時年十一遺言遣還河內保合族黨復將除滅朝敵俾宇內再歸皇化也臣常恐以有待之身遽嬰不測之疾上而為不忠之臣下而為不孝之子然今師直師泰將來犯實

臣報效之秋也若非獲彼首則授臣兄弟  
首於彼雌雄之決在此一戰願得一拜龍  
顏而去言畢泣下帝親臨口勅曰以前兩  
次之戰每得克捷汝累世武功殊可嘉尚  
聞賊復盡兵來侵事勢固弗輕雖然知進  
而進欲不失時也知退而退欲保後也汝  
朕之爪牙慎當自惜正行頓首而出率眾  
詣後醍醐帝之陵恭謝曰戰如不利弗一  
生還叩鐔而起題同盟姓氏於如意輪堂

皇朝靖獻遺言卷六

三十一

壁書歌於其後其歌云阿豆山山美山山  
奈知曾斗半半流各截髮納于佛殿而後  
發帝使中納言藤原隆資援之師直入河  
內分兵六萬陣伊駒山南及飯盛山外山  
四條畷四處親將餘軍居後隆資率兵三  
千陽為向飯盛山以縻敵軍正行兵三千  
由四條畷而進飯盛山敵望之分兵遮擊  
正行以先鋒破之後軍與四條畷敵戰殺  
傷相半飯盛山伊駒山敵兵前後奄至後

軍見敗退走正行不顧以兵三百直前奮  
擊更大破師直兵聚兵三百餘人馬皆被  
數矢衆乃下馬據壘坐食食畢步進接戰  
益勵遂迫師直陣上山高元偽稱師直冒  
陣戰死其甲鏤連環即高氏紋也正行大  
喜擲首于空中手承者一再既而知其偽  
也乃投首于地蹴且罵曰汝上山高元耶  
汝亦無雙朝敵矣而勇則可賞乃親斷衣  
袖裹首置于壘上是日自卯至申戰凡三

皇朝靖獻遺言卷六

三十二

十餘合殺傷數百千人吾兵死略盡乃  
與餘兵五十餘人負猶佯走以誘師直敵  
覺之遣支兵三百人正行返戰斬五十餘  
級遂前復迫師直軍而正行時體中數箭  
兵皆重創不可用正行乃呼曰事畢矣莫  
為賊所獲與正時交刺而斃年二十三  
正行  
嘗朝吉野路遣高師直誘出官女辨內侍  
遣卒迎之內侍在輿中帝正行悉斬師直  
卒奉還以聞帝部即賜內侍正行鮮以歌  
日斗氏也余耳奈知利遠以加傳半須淡  
美能加利能知利遠以加傳半須淡  
○史論曰正行受遺能建義旗始終一



節以死報國可謂忠孝兩全矣○藤井減  
曰或曰張儀有言兵不如者勿與挑戰正  
行以其不如其者還挑戰功之所以不成也  
寧遲緩數年當待時而圖恢復也若之何  
徒犯兵家之戒以致傷勇之死乎恐是非  
繼廷尉之志者矣曰不然也蓋天下者勢  
而已勢之所趨不可挽矣當此時尊氏威  
猛日隆較之南朝不啻擲楚况君德不明  
人才不足海內歸心於南朝者十之一二  
耳正行蓋謂借使累年沒諸事非可濟且  
身多病不幸卧病雖無益不如第從父  
之遺命早死於軍門先見之明勇敢之義  
可謂至矣且夫君子明道不計功至於其  
成敗天也當為之事在前豈可豫憂其不  
成遂輟以族後日我廷尉已如先帝之事  
不可濟也斷然授命於湊川便是以身先  
之也正行此舉曰非繼廷尉之志者是非  
知正行者也○讀史贊論正行其略曰

皇朝靖獻遺言卷六

三十三

嗚呼正成沒義貞死而足利氏之威始偏  
天下皇駕安於南山一手掌之地而將士  
無有能護者譬若無柱之屋坐見其傾覆  
而已於此時正行以少壯之身擁千百之  
兵再破北軍而一振南朝就衰之氣所以  
基數十年偏安之業者豈非其力哉○朱  
老師贊其略曰是父是子雖青年養志芳  
名至今詩云人生自古無死留取丹心照  
汗青其然其然

楠正儀正成子正行弟也任左衛門尉兼  
河內守遷左馬頭兄正行正時戰沒正儀  
留居河內高師泰築壘石川攻正儀畠山  
國清尋代之正儀始終固守正平五年國

清從足利直義歸順正儀因出兵為之聲  
援七年足利義詮送款帝親御軍宣言幸  
京師實欲襲義詮行次住吉伊勢國司右  
衛門督源顯能將伊賀伊勢兵三千自丹  
波路進正儀與和田正忠率兵五千夜渡  
桂川味爽與細川顯氏戰破之斬其從子  
八郎細川賴春踵至正儀兵以楯為梯登  
屋亂射敵兵沮靡正儀縱騎突擊斬賴春  
義詮走近江車駕駐蹕男山義詮以大眾

皇朝靖獻遺言卷六

三十四

來迫正儀正忠率兵三千拒之荒阪山稍  
得利然眾寡不敵退陣男山敵兵合圍勸  
王兵不至眾議令正儀正忠還河內募兵  
正忠還家暴病卒正儀逗撓不以時赴援  
王師終敗績義詮復陷京師既而正儀發  
兵與吉良滿貞石塔賴房等攻攝津擊守  
護代某走之明年與和田正武從中納言  
藤原隆俊會山名時氏攻義詮於京師義  
詮陣神樂岡出兵蔽林間正儀等欲知其



衆寡使兵五百下馬徒步以誘之徐近敵陣佐佐木信詮出戰正儀擊卻之義詮不戰而遁十四年畠山國清大舉西上足利義詮紡國清等諸將犯天野行宮正儀與和田正武入奏曰是戰臣等為官軍保必勝也夫所貴乎兵者三焉曰天時也地利也人和也今歲大將軍在西利東討不利西討道誓出兵向西國清華髮是逆天時也官軍所守前大河後深山元弘已來賊

皇朝清獻遺言卷六

三十五

來攻數四每不利而退是我得地利也道誓外藉軍興內實專功邀賞倫輩嫉之是失人和也失此三者雖百萬兵不足畏也但行宮地勢不便請暫移蹕觀心寺臣等據千劍破日夜拒擊於龍山石川又令湯淺山本恩地贄河諸族從紀伊守護代鹽冶某守龍門山縱土兵擾敵令其不得休息敵必倦而引還臣等乘機追擊破之必矣帝深然之移御觀心寺正儀乃築龍泉

龍門平石矢尾等砦分兵守之自以兵三百據赤阪城國清等陣津津山分攻諸砦陷之進攻赤阪正儀退保金剛山誘之義詮尋引還果如正儀所料正儀又出兵渡邊攻取水速城又攻佐佐木秀詮及弟氏詮於攝津破之殺獲二百七十餘人溺水者甚多追斬秀詮氏詮錄俘虜悉給衣藥放還是歲細川清氏降奏請發諸軍復京師後拜參議元中中卒

皇朝清獻遺言卷六

三十六

正儀北降或載於簡策或傳於口碑而未審其真妄故北降之事今不載乎此矣

長良承芳著論曰世所傳如太平記增鏡後愚昧記梅松論花營三代記櫻雲記之類皆阿世曲筆往往構事誣人大日本史所據諸書皆出於北人之手故以為正儀實叛與大友少貳等諸叛臣同傳可嘆夫唯南朝紀傳一書信而有徵又曰正儀之於足利氏讐敵之巨魁也方其初謁宜嚴修歸降之禮以白日行事何為故向昏夜使元執謁耶是尤可疑也再按紀傳曰建德元年春賴朝之發兵河內正儀據城禦之建德元年即北朝應安三年則此舉也記並書正儀北降係應安三年則此舉也

皇朝靖獻遺言卷六

三十七

正儀臣足利氏之後乃一年餘矣賴之討不知何故事互牴牾無所適從可見正儀之降非其實也彰彰乎明矣時人書之叛者為賴之詔也後人議其不義者徒信妄傳也其如夜謁之謀密索其形貌年齒克肖正儀者使優孟為孫叔敖以瞞一時之人耳又曰世或傳正成伴死于湊川之役逃而歸河內勢在觀心寺年耄而死或更姓名櫓淵政隱于羽之山脇見有其墓云世降俗滿好言人之過正成而不免於妄人之誣猶有如之者況於正儀乎余深慨正儀之不幸為之切齒腐心久矣於是具辨論其事欲以伸雪沈寃但是賴之毒計業已為百世口實則吾亦極知區區筆舌難及人之耳目而徒為世俗嗤笑矣○謙按正儀北降必無焉何以知之矣曰或云求忠臣之士必於孝子之門補氏闔族無不孝又無不忠也而正儀獨不忠而降萬萬無其理也且見其百折不撓萬辛不辭之迹亦非北降者可知也余故北降說斷然不取也○中井積德曰阿王欲報父讐抵赤阪獨與一幢彷徨城下有族人奪宗躬無所容將投邱壑自北流也其人以歸告于正儀正儀哀之寘于左右正儀素仁惠推心善視阿王亦勤敏服勞居數歲正儀益器之嘗授以邑阿王辭以七未有軍功浮屠氏之法為死者祈福以紀數於是宇野六郎死之七年遭其忌也阿王感念將欲以此夜刺正儀適正儀以賜鎧鎧阿王感激無地待坐抵夜得間既起身而平日恩義弗可棄也加以晝日之遇弗忍也正儀又從容背坐無復防閑勉彊自厲竟不能也出而哭之勸衆愕共視之阿王具告之實曰吾唯有死而已矣袖

皇朝靖獻遺言卷六

三十八

乃自刺為所奪乃髡髮為僧入山中以正寬為其號以終身云嗚乎阿王之志可哀夫楠氏之子亦可尚也推仁惠于羈旅之僮能使冠讐消其戕害之心非誠字足動物者弗能焉宜乎忠義三世而不隕其家聲也和田正遠稱彌五郎楠正成弟也元弘初從正成起兵軍功居多延元中直武者所後偕正成戰死湊川正家補藏人任左近將監延元元年代正成將兵赴常陸攻佐竹義篤於金砂山斬其族人義冬那阿氏米降兵勢頗振又城瓜連地據之敵兵來攻擊後藤基明斬之後落髮曰西阿四條之役與正行戰沒大塚惟正稱掃部助從正成戰湊川後方正行之戰四條也惟正身被數創馬亦僵獲逸馬騎之逃數里聞闔族殲焉返馬冒陣奮戰死有池田四郎者與惟正同從軍及敗四郎及子二人中流矢死橋本正員稱八郎宇佐美正安為河內守神宮寺正師任兵衛尉稱太郎兵衛皆正

成族也俱從正成死

和田正武與正儀據赤阪敵來圍數匝乃

乘夜提銳兵二百斫敵營不克斂兵而退

即夜與正儀走入金剛山徃徃有戰功

知其終

橋本正茂稱九郎與源定平陣天王寺大

敗北兵又攻松原野田等陣營陷之

後薨

橋本正高據土丸城令子姪分守近要山

《皇朝靖獻遺言卷六

三十九

名義理及清氏等來圍土丸防戰無利姪

某死之遂棄城遁明年復與清氏戰于高

名邊不克死之族三人及上神下神磯部

櫻井等諸氏悉戰沒

正勝出師討足利氏不利乃歸千劍破義

滿益發兵圍千劍破正勝力盡謂其徒曰

徒死無益乞降亦我所羞也乃引兵走去

後事軼而不傳

正元奮戰斬數人而被執義滿壯之謂曰

若能改志事吾則長保富貴正元泣然流

涕曰王室顛敗不能扶之吾輩死有餘罪

遂不屈而被斬

謂真正成之孫如二子實

當不可為之時而猶下藥於必死之病求

和正朝稱新兵衛正平三年高直師等

來攻正朝與弟賢秀從正行詣吉野行宮

廷辭與同士百四十餘人俱誓死而進遂

為忠實所殺正朝弟稱紀六亦與其子二

《皇朝靖獻遺言卷六

四十

人俱戰死

和田正興落髮稱賢秀正平中從正行與

細川顯氏戰于住吉賢秀手及數十人敵

敗走又追斬山名兼義四條之役賢秀善

使難刀遇者皆死賢秀混敵兵欲狙擊師

直其間相距數步正行部下湯淺某降在

師直軍中識賢秀從後斫路之斬其首賢

秀眼光如炬死猶瞪視不瞑從此某俯仰

惟視賢秀張眼嗔已狀七日死

和田正忠稱五郎正平七年帝御住吉正  
忠與楠正儀為先鋒攻京師破細川顯氏  
義詮走近江正忠從正儀還河內圖集兵  
返援會病暴卒

光正常欲報足利氏變容為僧改名常泉  
永享元年聞足利義教詣南都將覬間刺  
之事覺為筒井某被捕義教速行刑光正  
臨刑神色揚揚如平生

大抵雖附其著者以見忠義之盛右十

皇朝靖獻遺言卷六

四十一

三名皆係楠氏族類而其輕命趨義之迹  
猶與明方孝孺宗黨八百四十七人頗相  
類矣實千古未曾有之事也故不論其忠  
義之盛與不盛而一一載乎此矣

皇朝靖獻遺言卷之六終



皇朝靖獻遺言卷之七

播磨山崎 橫尾謙 纂集

上書

左近衛中將新田義貞

新田義貞稱小太郎上野新田郡人源義家十世孫也方北條高時之遷後醍醐天皇於隱岐也楠氏起兵于金剛山高時遣關東將士攻義貞亦在遣中焉已而城固不拔東兵多逃亡義貞召其家罕舟田義

皇朝靖獻遺言卷七

一

昌語之曰源平相制並護王家自古之為然吾雖無似忝列源氏胄裔特以時勢為北條氏所驅使遂敵官軍豈其本志也吾視高時近狀亡滅非遠高時好關狗常以為樂遂命天下獻鰲犬諸州輿之爭進及四五千飼以吾欲魚鳥著以綿繡倍稅充費民人大苦歸我國舉義兵上以除宸憂下興家聲而非有所受命不可安得大塔宮令旨則吾事成矣大塔宮者帝第三子護良也義貞通意於護良護良素知新田氏名族大喜

即為令與之權用詔辭羅山文集曰護良子也早為天台座主稟性剛毅有扶皇綱覆武家之大志專嗜武事勅天皇以東征

天皇移玉座于隱岐之後護良出南都入紀州經歷諸色保吉野城後義貞受令旨起義兵而後勤王之師四方蜂起北條氏滅亡皇運乍開護良之勲勞可謂多矣義貞感喜出意外翌日稱病東歸與子義顯弟脇屋義助謀討高時高時未之覺也以金剛山久不拔官軍並起益調發兵食新田素多豪戶因課六十萬錢限以五日縱吏卒催迫義貞曰奴輩亡狀敢蹈籍我

皇朝靖獻遺言卷七

二

地遣兵捕其吏梟首里門高時聞而大怒下令擊新田氏新田氏會議或曰赴越後依其宗族或曰距利根川義助進而言曰二者皆非計也坐待強敵情見形屈則我兵內潰一敗塗地使人曰新田氏戕使者而誅死死一也寧死於王事今雖匹馬單兵出徇於國中衆附則進攻鎌倉不則戰死孰與坐取誅殺乎衆以為然乃起兵讀贊議曰義貞斬北條氏之使而鎌倉將發兵擊義貞衆咸持拒計紛紜不義助進

皇朝靖獻遺言卷七

三

云云衆從其言遂得濟功夫義貞初圖千  
劍破既有勤王之志就護良親王承綸旨  
而歸則其義也宜其豫謀素定萬不容  
已何於新使之日轉疑且惑其計不能  
使之日新其使而欲其主之不忍難矣則  
一然懼其不勉大府之使征討將至方且  
之豈其勤王之志難定而衆心未可測故  
因新使之事以試之邪為義助者亦不定  
其議於兄弟密述之頃而發之衆議紛紛  
之際不幸義貞從衆議不圖進取則未可  
知其成敗之何如也而衆議遂從義助者  
豈非幸乎吾反覆考之而知其由焉蓋此  
事也義助與義貞未斬使之日計義已定  
然發之勢勢未迫之先人皆見之計義已  
體雖亂成權自若而其心危疑不安或將  
竊通於敵而圖變於蕭牆亦未可知故今

皇朝靖獻遺言卷七

四

詔書進陣于笠縣野比日暮利根河側塵  
起有兵至可二千騎衆謂敵來矣漸近則  
越後宗族來援也義貞驚喜曰諸君來何  
速何以知吾舉義大井田經隆伏鞍而對  
曰今日羽黑俊賢來徇國中是以馳至在  
遠境者明日當至明日越後全兵及甲斐  
信濃諸源以五千騎至乃令兵進入武藏  
近國將士不期而會者一日二萬人軍于  
入間河北高時聞義貞起事不以為意也  
發兵十一萬以族貞國貞將將之前後來  
擊貞國抵河南望見新田氏軍甚盛乃不  
敢進而義貞已亂流而至大戰于武藏野  
兩軍皆東國驍兵素習騎戰地亦平曠射  
戰罷即相馳突凡三十餘合乃交退且日  
又戰于久米河每戰鏖倉兵死傷輒倍高  
時使弟恭家以生兵數萬來援夜抵其軍  
義貞不察侵晨又戰不利而退泰家益輕  
新田氏曰敵中必有斬致義貞者皆釋甲

飲酒相摸入三浦義勝心素嚮義貞率兵六千來屬之義貞禮而詢計焉義勝曰方今天下分崩勝敗互變而天命所歸終有在焉公幸并僕兵可以一戰義貞曰以疲兵當新勝之衆若何曰戰勝而將驕卒懈者敗泰家之謂也敗兆已備不足畏耳詰朝之事僕請為公先焉旦日卷旗徐進敵相指語曰嚮聞三浦氏應徵而至是也俄而義貞等翼而進三面掩擊泰家軍大敗

皇朝清獻遺言卷七

五

貞將一軍與小山千葉氏戰于鶴水亦大敗皆走入鎌倉八州豪傑響應爭歸義貞義貞進至關戸兵凡十二萬騎分為三軍三道攻鎌倉大館宗氏江田行義自極樂寺堀口貞滿大嶋守之自兒囊阪義貞義助自率諸將自假粧阪縱火五十餘所而進鎌倉震駭而北條氏見兵猶十餘萬分距三道義貞貞滿進入山内而宗氏戰死其兵皆卻義貞以選兵二萬乘夜赴之則

敵大兵據海岸樹柵兵艦列其南以備傍射義貞下馬免胄向海拜曰天子為逆臣所遷越在西海臣義貞不忍坐視提兵討賊伏願海神眷臣忠義退潮以開道因釋所佩金裝刀投之海中比曉潮大退兵艦皆漂去賴襄十二郎之一曰左將忠貞天地知曾沈實劍感焉義貞大喜麾衆而進諸軍從之直入府中乘風縱火烟焰漲天義貞鏖戰高時舉族遂伏

誅按高時飲宴有天狗數十頭歌舞曰天王寺公見妖靈星分識者以為北條氏

皇朝清獻遺言卷七

六

以之兆果如其言矣○長井定宗嘗論北條氏略曰當時天下大政不出皇朝及關府北條氏以陪臣恣其權勢上下之分既亂綱常顛倒蓋自時政以降世世私行恩惠使民懷已遂弁髦其主跋扈天子既而積惡貫盈高時伏誅族滅家亡曾子曰出於爾者必反于爾天道果不非也又曰北條氏世世姦謀不遠故舉若夫放四帝分皇統以爲二流又別攝家而爲五家以奪其權其罪最大矣其視主將猶不偶泥塑意已自有主從之名則無上下之分乎何使其屢易位乎易曰積不善之家必有余殃是以後醍醐帝一怒高時伏誅遂已而帝命尊氏東伐時行尊氏遂據鎌倉自稱將軍奪新田氏邑在關東者以分予將士抗



疏罪狀義貞義貞乃上表陳其誣妄尊氏反跡遂暴於天下十一月乃下詔討尊氏徵兵六萬陞授節刀於義貞以總諸將義貞至於矢矧河河東皆足利氏兵義貞召顯寬視津還報曰津有三處然前岸峻絕敵攢鏃守之不若誘敵使渡而蹙之水也義貞從之賊分兵左右渡戰且卻終縱萬騎自中渡犯義貞義貞乃以中堅迫擊破之賊退陣驚敗又進擊破之足利直義以

皇朝靖獻遺言卷七

七

二萬騎來援義貞望之曰敗卒在後必先走餘衆不能支也戰而逮夜遣續騎循間道薄射其後隊後隊擾走諸營遂大潰走返鎌倉尊氏大窘欲削髮出降未果也義貞引降附數萬至伊豆府遲山道軍者數日賊軍復振凡數十萬人直義出距箱根十二月十二日義貞令義助奉皇子向竹下而自攻箱根既而朝廷以近畿皆叛四窺京師急召義貞義貞乃還京師自以萬

人守大渡尊氏將數十萬人抵大渡義貞豫撤橋板截折不殊樹柵水中令兵呼于岬曰丹後之兵我已殲之矣公盍亦來決死賊兵怒造筏以渡遇柵而止我軍亂射賊紛擾筏壞而溺者數百人又令呼于橋曰舟筏毋益請由此來賊千餘人爭進折斷皆溺尊氏遂休戰不進已而賊兵二萬來攻山崎義貞聞山崎軍破賊兵指關則馳援義助將與俱奉帝於叡山賊將細川

皇朝靖獻遺言卷七

八

定禪將兵六萬尾之新田氏族在東國者遂來會於義貞顯家欲休馬而後戰續史論頭家其略曰頭家建武初任鎮守府將軍經略奧羽及尊氏叛舉兵討之復京師再拔鎌倉朝廷將以為一方倚賴而無義敗衄以死吾謂當此時諸道分裂畿甸之地且皆應賊獨與羽距千有餘里宜王化之不決而首應徵發一再大舉遠赴國難雖由結城宗廣諸子前導之力抑亦不可謂非頭家經略撫治教練有素之功也氏明曰我馬遠來休則足重不可輒用不若今夜直襲圍城寺出其不意義貞然之即夜出兵唐崎黎明與諸將將騎六萬圍



園城寺賊自門中叢鎗拒之亘忠景奪其

十六鎗烟時能舉足踰門扇倒之後烟時能以殘

兵二十七人據鷹巢城賊各潛路時能曰

願勿襲我營賊呼曰烟將軍賊高經將三

千騎來擊時能鮮甲鐵馬躍出曰烟將軍

在此高經動時能乘之高經潰走而時能

甲隙皆創飛鏃沒病三日死○時能有

愛狗號獅子能解人語知指揮不啻黃耳

時能欲夜襲敵陣則先使此犬窺其營守

固則走出高吹一聲守急則歸城中向時

能振尾告之是故我軍入而縱火走定禪

知敵虛實如神

斬首七十餘級顯家乃退義貞亦欲收兵

舟田經政扣馬說曰兵利在乘勢賊兵一

敗魄褫氣沮我因躡之乘勝連進可以獲

其渠魁也義貞曰然即率三萬騎追之遇

嶮逼擊遇夷遙射賊不得反戰伏尸狼藉

餘衆走歸京師合於尊氏軍義貞進上華

皇朝靖獻遺言卷七

九

軍每勝以至日暮所遣三千騎在賊軍中

揚旗並起賊軍大驚擾亂自相擊刺遂大

潰奔我軍乘勝追之短兵急接尊氏迫蹙

欲自及者三義貞自桂河還陣京師尊氏

親與顯家戰于四條義貞義助建旗五十

旒橫擊之馳出其背義貞獨變服入賊中

索尊氏不獲分兵追之日暮乃退還軍阪

下誘尊氏還京師而間日襲擊之尊氏大

敗走攝津義貞率諸將追擊又大敗之尊

皇朝靖獻遺言卷七

十

氏狼狽航海諸軍爭舟而溺者數千人委

棄鎧仗海濱二月乘輿還關義貞振旅而

還已而足利氏保聚西土遂舉九國兵而

來尊氏兵艦蔽海而至而直義來自須磨

旌旗弥天義貞令正成拒直義令義助氏

明拒尊氏而自居其後賊先鋒七百艘過

而東將自西宮上新田氏軍三萬欲先往

拒之循岸而馳騎者如走舟者如追而兵

庫無人矣賊後隊六千艘盡上兵庫與其

陸軍合以躡義貞義貞背生田林而陣迎戰終不利走義貞自殿數反擊馬墮而徒上丘待救敵環射之義貞揮二刀截十六箭小山田高家望見還救授其馬而留死

初義貞屯軍西國嚴禁兵士妨農建傍路傍令曰刈麥者罪會高家絕糧潛出刈翠麥軍監某欲斬之義貞乃遣人檢其陣反命曰營中蕭然唯有兵器耳義貞曰軍士乏食是即余過也况高家忠勇何忍罪之乃解衣服償田主給高家以資糧高家深感其恩遂以義貞因得脫尊氏入京師使死而報之

高師重等來攻義貞義貞助以諸將拒東阪

皇朝靖獻遺言卷七

十一

使公卿僧徒守西阪賊乃先攻西阪僧徒力不支告急於義貞義貞與紀清兩黨赴援擠賊于若殺數千人賊又攻東阪義助擊卻之賊終大走尊氏狹光嚴帝據東寺為城出兵京師義貞行破賊軍終抵東寺執弓注矢呼尊氏語之曰天下擾亂久矣雖曰皇夢之爭抑由公與義貞而已與其為一身苦萬民寧各以單騎決鬪決雌雄請送一箭箭軼門樓入尊氏帳中尊氏不

出義貞至五條賊四合義貞額中流矢流血被面乃令其騎皆西其馬首欲決死諸將來救之擁義貞潰圍歸山門我軍多逃凶尊氏佯乞降請帝歸闕密使人致款帝信而聽之藤原實世使人來告義貞營曰尊氏納款車駕赴其營公知之乎義貞時延見將士得報不信曰是使者誤信耳美濃守堀口貞滿曰今旦氏明行義無故赴中堂吾固恠之請往詢焉馳至行在則乘

皇朝靖獻遺言卷七

十一

輿方駕矣貞滿揖進攀其轅泣其詞曰臣說未信否今乃信矣不審義貞有何罪而陛下乃回其聖眷以庇反賊耶當元弘初義貞奉辭伐罪強元兇於旬日已除宸憂雖古忠信恐不能過自尊氏反已來又舉族勤王為陛下數冒萬死宗族死義者八十餘人而賊勢滋熾王師失利者豈盡戰之罪哉蓋天未眷聖德焉耳今日西駕之轅竟不可還乎則召義貞以下族屬見在者五十餘人賜帝憮然項焉義貞與義助義顯率三千人入列階下色溫而禮恭上前義貞兄弟慰諭之其慰諭曰當尊氏反卿宗族以鎮平四海天運本會兵疲勢

覺是以推講和議以待時焉耳本宜謀及而慮於漏泄欲臨期相告顧貞滿未之察也然由其言亦有所省朕聞越前地方多歸順者又有前所遣將士卿宜赴彼經略北陸以圖恢復以朕還京師恐卿得賊名今特以太子相附卿視之猶朕軍國之事無小大當由卿處分朕已為卿將士皆泣忍耻卿亦為朕努力言畢垂淚將士皆泣莫仰視於是遂令義貞奉皇太子赴越前義貞即夜造日吉祠納寶刀禱曰神鑒吾忠義使吾行無恙得發兵滅賊即不得然猶使子孫有再起者明日奉東宮及皇子尊良北行舉族從之義貞以七千騎至鹽津土居得能氏遇賊兵自殺義貞終至敦賀河島維賴氣比氏治迎入金崎遣義顯義助於越後至杣山而敵以三萬騎圍金崎義貞出擊走之義貞以河島維賴為鄉導潛入杣山城杣山兵僅五百人甲馬不備逗撓二旬金崎兵食馬盡無可食者城兵力竭不能戰外城既陷長濱顯寬等率五十人出割死尸相共食之力拒前門義顯謂皇子尊良曰臣將種不可不死即

皇朝靖獻遺言卷七

十三

拔刀自樹左脇劃至其右奉刀於皇子而伏皇子亦自刎而死藤原行房里見時義武田與一氣比氏治等皆殉死義貞在杣山常欲一戰雪耻間招聚義故尊氏聞義貞未死也遣足利高經舉北陸兵來擊義貞遣畑時能糾加賀兵攻拔大聖寺城遣義助及細谷秀國入越前築三砦與高經相持義貞欲必拔足羽而後西是時顯家敗死其弟顯信與德壽等據男山帝手書諭義貞援男山時大井田氏經等發越後兵破普門富堅二氏進至越前義貞并其兵將攻高經而詔書適至義貞感奮曰自有源平氏未聞得天子親書詔者也因欲直赴援用兒島高德策帝西狩之時高德士仁人有殺身以成仁見義不為無勇也盡要奪駕以舉義廢奮從之伏舟阪山而待久之不至遣人候之曰駕向山陰道乃問道至杉阪則已過矣衆乃散去高德恨不能去乃變服尾駕而行數日欲一見帝有所言而不得問於是夜入帝館白櫻樹而書之曰天步艱難之日潛候欲奪龍高德圖贊曰天步艱難之日潛候欲奪龍

皇朝靖獻遺言卷七

十四



碑白庭樹書小詩 自以兵三千備高經以

獨自有帝心知 二萬附義助至敦賀聞男山陷引還於是

合兵專攻高經高經誘平泉僧兵修藤島

七寨守之義貞以諸軍攻足羽至燈明寺

前分兵為七隊以當七寨藤島兵擾動衆

乘勢攀陴而登僧徒力戰過晡官軍幾卻

義貞怒易馬變甲引騎五十間道赴救高

經出步卒三百救藤島義貞遇之於途敵

隱植亂射我兵不持排植僅以身遮蔽義

貞耳從兵中野宗昌目義貞曰千鈞之弩

不為懸鼠發機義貞曰棄衆獨免非吾意

也策馬而進馬被五矢顛于淖中義貞欲

起有飛矢中額度不可免終自刎而死年

三十八

嚮者當天下大亂乘輿播遷楠正成等豪傑並

起相共勤王而足利尊氏首鼠兩端觀望勝敗

自非賊軍失利益不肯降也功微賞多遂冀非

望害臣之忠義欲詭言陷之臣以五月八日起

皇朝靖獻遺言卷七

十五

兵上野彼以其七日佐攻六波羅而曰臣聞京

師復乃肯起兵以欺罔天聽其罪一也臣以五

月廿二日率諸軍誅高時而彼之兒子率從士

百餘人以六月二日入鎌倉而曰臣賴其兒子

以成功其罪二也彼在輦下擅誅親王之卒其

罪三也征夷之任在兵部親王而彼輒掠其號

共罪四也矯稱官領務張威福其罪五也中興

之業雖因天運抑兵部卿之謀策居多而彼百

方譏講遂抵流謫其罪六也陛下心期兵部卿

之自艾而彼修私仇辱之牢桎

去如遺老賊曾寒膽一身繫安危皇室終偏安

沈寃仲無時志士堪慟天長失中興機○奎堂

土窟然詩曰帝子吞冤渚土窟校後鶴骨參寥

髮幽燈影青微吐烟天地長不見日月諫父元

同扶蘇賢受罪似下和則憤氣填胸難自遣

嘆聲時與梵唄發河物小臣逞逆威手抽白及

從後突直擄帝子騎其上欲刺早被利齒訕利

齒訕刀鋒飲再刺洞胸五刀皆血而日如生終

遺跡無尺碼野草埋路高於人其中絕存一小

穴土人傳言此即是我來拜跪如親謁憶起含

紫苔如血地不覺失聲成嗚咽土窟怨兮長不消

皇朝靖獻遺言卷七

十六



八罪者天地所不容措而不論百敗將隨而至  
後噬臍無及願陛下照鑒之速下明詔以誅伐  
尊氏兄弟

史論曰新田義貞以源氏之曾役于北條氏  
疾風掃一掃然改圖欲安王室義旗所嚮若  
攻城野戰互有勝敗而竟不免敗歟何其難  
難也蓋由政刑日紊人心思亂尊氏乘之  
逞其詐力禁門不守乘與再幸徽山尊氏  
納款請還駕帝亦心知隨其姦計而勢不  
能回與督之機方決于此而帝面諭義貞  
獎其忠義詔以皇太子賴有以此舉耳義貞  
臣復之志不少懈馳誓天地以爲心貨鬼  
神之無疑不幸勢去時不利智勇俱困繼  
之以死其子姪皆能枕戈嘗膽屢興勤王

皇朝靖獻遺言卷七

十七

之師而卒歸於摧殘流亡豈非天哉至其  
義氣貞烈則雖屈於當時而能伸於後世  
觀其與足利氏爭權兩家曲直赫赫在人  
耳目雖愚夫愚婦亦能知新田氏之爲忠  
臣寧爲此而不爲彼亦足使人辨邪正決  
取舍而知嚮義矣其所關係豈鮮少哉  
筱塚伊賀提鉄挺而出呼曰吾新田公親  
兵筱塚也盍殺我以得賞賊皆披靡乃徐  
行而去賊不敢追躡至今治浦見賊空艦  
獨有舟人筱塚游而達之跳入船自名曰  
送吾於隱岐手拔錨樹桅登船屋軒睡舟  
人畏怖送至隱岐以終身

義興闕於海濱斬三騎馳貫賊陣左韞斷  
委地乃挾刀于脇俯結之賊群至擊其項  
及背義興不爲動結畢應賊賊驚走義興  
路由矢口渡江戶亮寬教舟人鑿舟腹而  
納之載至中流拔柁汨去伏兵夾河起舟  
將沒井伊直秀手掀義興義興瞋眼曰悔  
陷豎子計割腹死

村上義光從護良親王逃入吉野已而賊  
將二階堂貞藤等大兵來攻護良親王親

皇朝靖獻遺言卷七

十八

戰不支義光偽稱護良親王死賊軍力戰  
能克吉野執行岩菊丸率兵屬賊軍素諸  
地形請夜急攻外城已陷護良親王戰數  
甲前七矢頻腕中兩及流血淋漓退入幕  
中命酒與將士訣左馬頭村上義光酣戰  
被箭十六處求跪曰事急矣請假臣鎧裝  
代大王死死大王乘間出走王不許曰死  
同死何忍相棄義光奮激起自解王鎧著  
之登譙樓遙望王去遠乃大呼敵軍曰先  
帝第三皇子子護良自及汝等行爲大兵  
死視以爲式乃割腹抽腸以授于隆留戰  
于義隆從王拒後賊追及王義隆留戰死  
王終得免走高野山○藤田彪正氣歌曰  
吉野酣戰日又代帝子屯○讀史雜詠曰  
山河氣鬱盤一門鍾忠烈崎嶇從我王  
夜隅臣節維父與茲子捍衛同戰血我王

苟得脫何顧身屠裂精誠皎如霜終逐天日沒

菊池武光討一色直氏于筑前大克之大

友氏時少貳賴尚等皆降武光義詮遣兵

助氏時賴尚擊武光武光方討畠山國久

于日向氏時據高崎絕其歸途武光不顧

進攻國久走之乃還氏時不敢要擊賴尚

以兵六萬來攻武光發八千人奉將軍懷

良夾筑後河而陣筑後河九國第一大武河也一名千歲川

光以銃兵先涉賴尚卻保大原武光夜遣

皇朝靖獻遺言卷七

十九

予武政等潛兵因河水亂軍聲以襲之因

大戰懷良被創北畠顯信等死之武光身

先士卒馬傷曾裂斬一敵將奪其馬與曾

復進大破後遂病卒賴襄下筑後河詩云文政之元十一月吾

下筑水僦舟筏水流如箭萬雷吼過之使人堅毛髮居民何記正平際行客長思已

亥歲當時國賊擅張七道望風助射狼

勤王諸將前後沒西陸僅存臣武光遺詔

彼何人誓剪滅之報天子河亂軍聲代仇

敵刀戰相摩八千師馬傷曾破氣益奮斬

軍終挫折歸來河水笑洗刀血逆奔湍噴

標葉木屑向北風殉國劍傳自乃父嘗卻

明使壯本朝豈與恭歡同語大夫要貴

還遙望肥嶺南雲千載姦党骨亦朽獨

有苦節傳芳芳聊吊鬼雄歌長句猶覺河

聲激餘怒○讀史雜咏曰菊家十五龍超

脫推十郎八千勳精銳主帥是懷良前軍

少不報見之鬚髯張大呼進陷陣殲動

穹蒼河流壯軍聲白日添劍芒滿身都是

膽跳盪誰相當一爐炎爐氣吐為萬大光

皇朝靖獻遺言卷七

二十

英爽五百歲於今凜秋霜酌酒亦自酌

不知引數鴈何當強人意萬古扶綱常

名和長高計奉帝于船上山令長重等五

人援甲走迎帝跪御舟傍帝欣然長重被

薦于甲背負帝登山藉木葉進食長高欲

移倉粟于山募村民能運一擔者賞錢五

百一日致五千餘石乃盡燒其宅率百五

十騎以護行在因樹植柵列扉為垣氏高

遣布旗數百煤印近國諸豪章識張之山

上明日清高以兵三千自山前後來攻望

見旗章不敢進我兵蔽林而射射殺一將

敵八百騎乃來降清高在山後未之知也

更兵急攻會日且入大雷雨長重長生乘

而疾擊擠賊于谷壓千餘人清高單舸逃

去帝授長高左衛門尉兼伯耆守賜名長  
年帝避賊於叡山之日從義貞扞禦路人  
指名和長年曰正成忠顯等既死獨有此  
人及戰大敗長年退至大宮巷自閉後門  
與二百人力戰死長年圖贊曰潛龍飛出  
畫行在安危忠義滿山旌旗○讀史雜詠  
曰巨川失舟楫何以得利涉肤有一長年  
實是巨川楫勿卒受願托頓見風雲合揭  
竿斜義旅俄頃奏奇捷三木與一草元勳  
誰得及前無斯人殆同蕪木  
急諸公雖或勞寧仰中興業

右五名本傳中或載焉或不載焉而其

皇朝靖獻遺言卷七

二十一

本傳中載焉者今又載于此者聊詳其  
終始耳

皇朝靖獻遺言卷之七終

皇朝靖獻遺言卷之八

播磨山崎 橫尾謙 纂集

關城書

准三宮源親房

源親房具平親王之後權大納言師重之子也家稱北畠或中院永仁延慶間累進叙從四位下歷右近衛中將左少辨任參議元應元年為中納言叙正二位兼淳和獎學兩院別當元亨三年陞大納言為世

皇朝靖獻遺言卷八

良親王傳元德二年世良薨親房悼甚因剃髮號宗玄親房歷事五朝素有時望其罷官退居僉謂朝家為悴元弘三年車駕還自隱岐親房復出仕因授從一位準大臣冬親房子顯家為陸奧守奉義良親王出鎮陸奥出羽親房輔之後還京師及足利尊氏討北條時行或告其懷異志帝始疑尊氏將誅之親房與中納言藤原公明諫曰尊氏功大而罪未著不可遽加顯誅

也請姑察其動靜帝從之欲遣使詰問使

未發而尊氏遂反延元元年尊氏犯京師

親房從駕延曆寺既而帝納尊氏降還京

師公卿將士不欲屬尊氏往往走諸國親

房乃走伊勢三年顯家戰死安部野結城

宗廣奏請重遣親王鎮陸奥詔以親房子

顯信為陸奥介鎮守府大將軍奉義良親

王往鎮親房又為之輔宗廣等從焉海上

遇大風與親王及顯信相失親房船漂至

皇朝靖獻遺言卷八

二

常陸東條浦乃據阿波崎神宮寺二城敵

兵來攻二城尋陷親房奔依小田治久于

小田城令宮內大輔伊達行朝據伊佐城

遣近衛少將藤原實寬于下總守駒城招

緝東北諸國親王及顯信還至伊勢會帝

崩親王即位是為後村上帝時帝猶幼冲

不能親政事親房遙奏令權大納言藤原

實世權中納言藤原隆資總括機務帝從

之四年冬高師冬率兵來圍駒城分兵攻



小田城興國元年夏師冬陷駒城擒藤原實寬既而官軍復起攻復駒城乘勝拔敵數城師冬火營而逃是歲顯信至陸奥鎮所明年親房迎陸良親王于小田城奉之夏高師冬再率大兵來攻小田城築寨寶篋山上相逼親房出兵擊而敗之請援于陸奥結城親朝親朝宗廣子也宗廣死親朝竊通謀於足利尊氏以故不時遣援相持數月治久亦叛降于師冬親房乃退保

皇朝靖獻遺言卷八

三

關城源顯時奔下妻保大寶城關城民部少輔宗祐之所守也師冬引兵屯于兩城間親房顯時出擊敗之敵更築長圍為持久之計親房數請援於親朝手書懇到曉諭百端親朝不果城中益困明年春又贈書親朝又辭以兵寡親房遣僧宣宗往命顯信來救且諭親朝發其子弟從之親朝不聽四年夏敵將結城直朝率其徒先衆進攻親房出兵擊之斬直朝餘衆散去高

師冬更令士卒運草填濠又募礦夫鑿地俄而土崩夫皆壓死敵又樹重柵於城下城兵出爭之悉拔其柵敵不敢近既而親朝遂叛降足利氏親房棄城走歸吉野七年帝御男山遣兵討走足利義詮乃使親房及子顯能先入京師總決諸事九年薨于賀名生

皇朝靖獻遺言卷八

四

代終于興國初揭皇於已微以明神器之有歸其明微扶正誠有合于春秋遺旨云○讀史偶論曰親房偕其子顯信奉義良親王往鎮與羽上遇風舟楫四散與親王相失漂至常陸依小田治久招輯東北兵士高師冬率大衆來攻親房擊敗之役治久以城降于賊親房走保關城當此時關東八州皆歸足利氏其屬王室者不過數城而或潛通于賊或觀望伺時變獨親房擁區區之衆內有兵困糧竭之憂外無此蟬蟻子之援相持九月敗兵日益盛因貽書於結城親朝乞援親朝已貳于尊氏終不赴救乃棄城歸吉野親朝已貳于捍禦強屈不赴救乃棄城歸吉野親朝已貳于葛亮之風豈虛詞哉予讀其所著神皇正統記有深感焉昔班彪作王命論以諷隗囂使知漢祚之復興習鑿齒作漢晉春秋以規桓溫使知神器之不可觀其用心亦

忠矣親房此書債叛賊受王室揭皇紗於  
既微明神器之有歸使亂臣賊子知正紗  
決不可奈天威決不可犯其維持萬世綱  
常非班彪盤齒齒所繫先賢以為得春秋  
遺意若親房者謂之文  
武之良相孰為不然耶

去復與賊相持小田城守拒良苦所仰惟在貴  
境之兵飛檄連乞前得報書聽出兵相救并至  
仲冬而治久畏懦遂叛附于賊移動之後又巨  
三月前後九月未見一人相援也形勢益蹙卒  
伍益減窘可知矣方今阪東官軍所保下妻真  
壁中郡西明寺伊佐關六城耳而關城宗祐竭

皇朝靖獻遺言卷八

五

力防禦守備粗全而賊圍已久漕驛路絕不得  
白晝出行兵罷糧之賣馬鬣甲以過旦夕炊骨  
易子之患復將至也下妻則主將幼冲其下爭  
權顯時朝臣奉陸良親王撫馭士卒雖略安敢  
然浮言不已亂遂將內發真壁則法超雖躬勵  
志節而舉族離貳或潛通于賊法超真壁城中  
將之名而其姓  
缺蓋常陸平氏  
之族真壁氏也中郡顯時朝臣僅分差部下守  
之兵已單弱加之儲蓄日匱不可恃焉西明寺  
地勢隔絕消息不通以上五城危如燕巢幕唯

皇朝靖獻遺言卷八

六

伊佐以行朝朝臣忠義不撓可以保堅守然本  
城下妻失守恐孤城勢難支也足下向以兵寡  
難出征為辭故累書云足下若不能親至則觀  
兵于國界亦足以張聲援也而猶不見聽軍情  
爭得不困沮耶夫戰危事變在呼吸援之不時  
及則兵雖多何為哉况賊屯兵于府踰年力竭  
糧乏更過旬月城兵悉為肆中枯魚矣當此時  
注以江海水亦何所益也往者贈一位在鎮之  
日聞賊發投袂而起見兵無幾疾驅赴難踐千  
里而建大功及再入援也則人懷危疑道值梗  
塞敗于國府危于靈山遂乃轉鬪抵畿內如其  
倉卒喪命天實使然非戰之罪也忠孝之道即  
無憾矣由此觀之兵之發不發在志之至不至  
足下儻能奮然分部兵以見赴則伊達以西郡  
縣豈無響應者耶今日時勢急如星火某所願  
瞬息之頃不喪所持以餘命報先皇也大義著  
心死而後休鳥之將死其鳴也哀人之將死也  
其言也善恐再信難續敢盡言之夫我國者天

祖經始之地日神紡領之州聖聖相承所歷九十五代誓及無窮不容違越凡圖不軌者不旋踵而殄滅尊氏何為者罪惡貫盈未之前聞而盜據中原已七年矣何幸也在昔逆臣如平將門六年而滅安陪貞任十二年而夷則彼之顛擠天將待而發也自古大姦宄徒所以能保首領於歲月之間誠以其智勇有過衆也非有偉度遠略可以庇其子孫而家奴師直憑藉虎威陵轢世家將種跡其宄虐浮乎前日高時之事

皇朝靖獻遺言卷八

七

也所謂世家本皆王臣保元平治以來降隸源平之家承久之後又降屬陪臣北條氏觀爾家譜豈不心愧方今遭逢聖運再興不啻本領如舊親承綸言錫朝爵際會如此乃貪利愛死同逆屈節可謂文武之道掃地矣復何面目見祖先於地下哉足下曩祖秀鄉朝臣夙著勲于國後世子孫屹為名流如平清盛源賴朝論門閥豈遽出其右邪及其奉王命指麾將帥反顧首服事之雖勢不得已豈其所樂是以上野介

朝臣忠慨中發推誠上下使人至今不能忘也親光朝臣相續死節足下父子為其嫡流當繼前志以耀後昆而更懷依違觀望之計乃祖之神其將怒且罰也近者所在小人羣集浮議或曰宜堅守城壁歛鋒養力察天下形勢若尊氏得勝及時降附門戶可保或曰設使關東諸城失守據與州之儉足以延歲月窺賊之失利徐起而圖其後大功可成也或曰興廢之際有命存焉宜熟得失須時而動也如贈一位忠節雖

皇朝靖獻遺言卷八

八

大勲業不遂覆轍在近可以鑒焉想足下亦豈惑此說乎雖僕親故亦或持此議以危予所為而況於其他踈遠人士乎是固不足介意然有害于大義不得不辨也予家出自皇族世遭昇平所習朝儀典章至於邊遠兵革之事素所不諳宜乎其處置乖方不足服人也顧身為前朝遺老奉今上于間關受顧命于彌留方據孤城以控八州恐一旦隕命四方解體賊又乘時侵寇與州忠義惡得不潰叛且三位中將出鎮三



年未能建功資性淺劣傍無輔翼而衆情反仄  
危疑之甚如抱薪而寢于火上也親房死後可  
與濟事者誰今日足下有異圖則已矣欲全忠  
貞豈無遠慮昊天爰臨鬼神有靈惟為天下言  
非敢愛餘命也

史論曰親房學植德望冠冕一時開城之  
圍急昨陽而親朝觀望之罪浮於賀蘭進  
明親房恢復之志百折不回獨以招討為  
已任今讀其移書聲容悅若相接苟有人  
心者孰不奮發而激勵乎其子頭家頭信  
皆能死節忠義萃一門成矣哉○讀史贊  
議曰源義朝之殺父也雖出于君命而水  
常無救之之道苟欲救之請損已賞而贖

皇朝靖獻遺言卷八

九

其罪則聽請捐已命而代其死則聽義朝  
計不出此而忍殺之其罪亦甚矣嗟是北  
島親房之論也○親房為南朝元老輔佐正  
統天子於一隅者數十年稱維持名教  
宜其議論之正如此○讀史贊曰本外史補  
其開卷叙北島氏且其叙論云以本外史垂  
紳之臣居帷幄節制之任與新田補氏方  
駕並馳者唯北島氏為然至其功亦不出  
補氏新田氏之德望實今古屈指之人也  
夫親房公學殖德望實今古屈指之人也  
且其勤勞王事不待言至其子孫亦此  
為南朝藩屏而世稱北島氏之勲迹寥寥  
無聞矣雖外史之書補氏記中附錄而  
其子孫最略焉諒常恨之而今見外史  
所云云謙所恨者渙然冰釋矣嗚呼公險  
阻艱難中以疾瘵而其一節竭其所事  
愈戰愈攻而終始一門者其所事不  
家聲所謂忠孝萃于一門者其所事不

補敘其事而無遺又論其功而不置也謙  
此書中起北島氏篇其亦固非無謂也○  
詠史曰櫻井款兒期死人越山流箭勿頭  
人南風不競悲天數空向筆端詠賦臣  
源顯家大納言親房長子元應嘉曆間叙  
從五位上累進兼侍從左近衛少將元弘  
元年任參議為左近衛中將時年十四是  
帝與中宮及永福門院幸權大納言藤原  
公宗北山莊觀花帝親吹笙顯家舞陵王  
容貌閑雅俯仰中節觀者嗟賞舞畢  
將退帝召還更舞一曲賜物賞之建武  
元年以功叙從二位二年兼鎮守府將軍

皇朝靖獻遺言卷八

十

氏于鎌倉顯家集兵國內不能時發乃率  
見兵轉戰而前延元元年抵鎌倉尊氏既  
已西上時東北諸將新田義興千葉貞胤  
來屬兵凡五萬尾尊氏晝夜兼行至近江  
使大館幸氏攻拔佐佐木氏賴觀音寺城  
斬五百餘人帝遣船七百隻迎顯家泛湖  
至延曆寺與義貞攻園城寺克之遂與諸  
將分道攻尊氏顯家以二萬人自栗田口  
放火而進尊氏望之曰北島殿來吾不可



不親當也率數十萬人禦之戰數合衆寡不敵顯家兵善戰尊氏不能破竝解而慙義貞因縱兵突擊尊氏敗走又出兵豐島河原再攻尊氏顯家先登諸將繼進大敗之尊氏西走乃與義貞振旅旋京師兼右衛門督檢非違使別當時尊氏黨與蜂起於是顯家奉義良親王復如陸奥詔併管常陸下野二國後為鎮守府大將軍尋拜權中納言進攻相馬胤顯于法華堂相馬

皇朝靖獻遺言卷八

十一

光胤于小高城斬之三年春陸奥將士多應尊氏攻顯家顯家戰不利與結城宗廣奉義良親王保靈山城敵又來圍先是帝御吉野官軍復振新田義貞遺書顯家勸發兵上道顯家未發會帝遣修理亮江戶忠重救顯家曰朕向還軫京師而足利直義負約處置失方殊乖朕意今移蹕吉野促諸國義徒以圖恢復卿須率官軍速赴京師庶賴卿力平定天下特以朕意諭宗

廣等令輸忠節顯家乃以敕示宗廣等衆咸感激士氣益奮因移檄徵兵宗廣之族及伊達信夫南部下山族等六千餘應之顯家乃發靈山至白川關管內兵士來赴幾十萬進至下野駐宇都宮數日休兵馬而發足利義詮兵扼利根川會驟雨水漲衆不能涉顯家部下齋藤實永及弟豐後次郎亂流而進餘衆隨涉水為之泛溢西岸敵欲防之中流溺死者無算大潰而走

皇朝靖獻遺言卷八

十二

顯家入武藏府駐五日宇都宮公綱來屬顯家遣兵攻芳賀禪可降之與北條時行新田義興攻鎌倉走義詮敵將斯波家長退據杉本城乃遣兵攻拔之斬家長三年率兵赴京師士卒侵掠恣暴所過焚蕩比至尾張藤原昌能堀口貞滿引兵來會兵勢彌張沿道敵軍桃井直常土岐賴遠等往往起蹕後衆至八萬餘顯家駐陣青野原與賴遠等戰却之會尊氏遣高師泰拒

黑地河賴遠等又至顯家前後受敵取道伊勢將赴吉野師恭追到雲津河擊卻之休兵柰良集諸將問計結城宗廣曰不破黑地徑詣行宮帝若有問無辭塞責我兵雖疲足復京師萬一挫衄暴屍於王城之下亦可洩憤已從之未發尊氏遣桃井直常邀之顯家兵疲不能戰潰走顯家逃河內收散卒據男山軍聲復振尊氏遣高師直攻之顯家據險深塹士皆力戰敵軍不

皇朝靖獻遺言卷八

十三

利師直慮河內攝津官軍與顯家掎角留重兵圍城身陣天王寺絕援路顯家出城與戰大敗從二十餘騎將突圍奔吉野手自接戰敵兵合圍竟沒于陣時年二十一

羅山文集曰顯家以功任鎮守府將軍再赴其國既而西軍侵洛乘輿南轅顯家復董大軍以發途先攻鎌倉追擊義詮路中所每戰有利鳴呼黑地河之陣官馬難進安部野之露戰骨不乾天命不遂可憐可哀

源忠顯內大臣有房孫權中納言有忠子也家稱六條或千里又禪林寺弱冠喜騎

射以博賭酒色為事有忠絕不為子仕為左近衛少將後醍醐帝幸笠置忠顯扈之及笠置陷被虜帝御六波羅南方北條仲時北條時益特放忠顯及中納言藤原藤房給事左右既而從帝適隱岐明年官軍所在竝起隱岐守護佐佐木清高日夜巡警行在以防非常然衛士多竊欲異戴者富士名義綱奉旨往出雲招集兵士為鹽冶高貞所拘帝遲之數日不至乃與忠

皇朝靖獻遺言卷八

十四

顯謀託以三位局產期在近移就外舍乘昏而出道斥輿步行獨忠顯從焉扣路傍民家問千波湊主人熟視帝對曰湊去此五十町許路多岐易迷請為鄉導負帝到湊求舟御之舟人亦以為非常人曰今日得奉此役是生涯之榮敢請所在忠顯密謂之曰是即天下之主急欲屈出雲伯耆之間指形便之地赴之事成賞以邑土舟人喜解纜疾馳佐佐木清高發舸追及人

皆驚愕不知所為帝謂舟人曰勿怖第垂釣舟人乃匿帝及忠顯船底覆以蘆魚使柁工水手列立其上盪櫓而身坐釣賊上御船偏索舟人徐問曰公等何索賊曰主上逃去必在海中舟人詔曰今夜子刻有船出湊一人烏帽一人冠簪纓之客也今行可五六里乃遙指曰船猶在彼追兵轉柁去須臾敵舸百餘艘又追至駛如飛會風止御船不得進帝投佛舍利于海默禱

皇朝靖獻遺言卷八

十五

俄而風起敵舸西御船東漂蕩數日經出雲到伯耆大坂湊忠顯登岸問路人曰此地亦有武人邪人答以名和長年忠顯遣使造其家宣旨委託長年即起兵奉帝幸船上山軍勢大振忠顯以功為藏人頭左近衛中將赤松則村攻北條仲時北條時益于六波羅不利忠顯奉命將兵往援之路收降兵幾得三萬人但馬守護太田守延奉恒良親王舉兵至丹波筱村適與忠

顯會忠顯因奉恒良親王進陣西山峯堂時僧良忠陣于男山赤松則村陣于山崎忠顯恃衆自欲專功孤軍進入京師令軍士綴帛鎧袖書風字以為號與六波羅兵戰不利守延死之忠顯引軍還峯堂議欲退軍兒島高德苦諫止之忠顯怯懼即夜奉恒良親王奔男山時足利尊氏自內野赤松則村自東寺入京師忠顯亦自竹田入戰大克進圍六波羅忠顯令曰緩攻曠

皇朝靖獻遺言卷八

十六

日千劔破兵捨彼來救則腹背受敵宜先其不來急攻而拔之軍士連車數百兩撤屋材山積車上推至城門下火之以燔門樓北條仲時時益遂挾光嚴院東奔忠顯得神鏡于北山莊奉安禁中車駕歸關忠顯率從兵五百前驅以備非常以功賜三大國及邑數十所為食邑為彈正大弼叙從三位并參議足利尊氏之犯關忠顯與結城親光名和長年等拒之大戰于勢多

延元元年削髮舉與近衛少將藤原雅忠

拒足利尊氏于西阪戰敗而死忠頭圖贊曰中興尊

將之榮三水一草之名雖乏韜略賊竟克致身殉國○弘治三年七月頭能亮頭

能為人忠勇常以恢復為任其志見吟咏生二子長子頭能亮次子頭俊為木造城

主因稱木造氏當此時頭家頭信子孫皆微而頭能之後獨頭于伊勢世襲國司管

轄南伊勢五郡伊賀名張郡大和宇多郡紀伊熊野及志摩以藩并南朝云

皇朝靖獻遺言卷

十七

皇朝靖獻遺言卷之八終



讀皇圖靖獻遺言

雲階魑魅走海壑毒地  
橫狂浪吞地盡天柱慄欲  
傾一語支傾覆詔之熱  
血痕嘔出臟之脂塗抹  
大乾坤日月為之明經

皇朝靖獻遺言跋

常為之張神州正大氣  
光燄萬丈長此氣久不  
淪三熒汗青讀之亂  
臣死讀之賊子遂凜乎  
挾風霜一龍勝麟經

讀岐日柳政想草



書皇朝靖獻遺言後

當王政維新之今日不可不以事務之功報洪恩之萬分而謙迂拙陋愚無一事務所長苟無所長則無由建功也既而謂以文字上之一事報其萬分如何一日讀淺見氏所著靖獻遺言勃然感起曰夫可報之一事在于此矣因倣其體裁就新古諸書刪增折衷以得八篇名曰皇朝靖獻遺言嗚呼淺見氏編集卒業經八年之久

皇朝靖獻遺言跋

云謙僅數月而脫稿其輕卒疎漏可大笑也雖然謙特以所揭遺言為千古之標準又為自家之目的焉其他疎漏而輕卒者豈敢區區關係於後之讀此遺言者有察于此則謙一事之功亦稍見焉或評靖獻遺言曰其忠奮義烈與日月爭光與山岳競高謙於此皇朝靖獻遺言亦云時明治五年春正月上浣橫尾謙七謹書

明治六年第一月

御免許

同

第九月

刻成

纂輯

飾磨縣貫屬士族  
横尾謙七藏板

大阪心斎橋通安堂寺町

田中太右衛門

發兌三書林

同塩町三丁目

三水平兵衛

同堺筋通長堀橋南詰

真部武助

中根淑 著

慶安小史

明治九年（一八七六）東京府刻本



據明治九年（一八七六）  
東京府刻本影印

明治九年一月上木

中根淑著

# 慶安小史

中根氏藏

序

距今九年前余遷於駿河  
幽居無事乃欲輯錄古今  
書籍以修駿河國誌先作  
其國人山田長政由井正  
雪堀部金丸等傳既而俗  
累牽纏東西轉移竟不之  
果也去歲冬余臥病終日  
閒暇因出舊稿閱之雨痕  
漫漶鼠嚼縱橫殘壞居半  
就中由井正雪傳得稍完  
於是尋思推讀寫為一卷  
且改之題名曰慶安小史  
抑余之為是書其意在於

脩駿河國誌而已而今獨  
傳之非其素志也雖然天  
下之事不成於其所期而  
成於其所不期者固多豈  
獨是書也哉嗚呼豈獨是  
書也哉

明治九年一月 中根淑撰并書

慶安小史

中根淑 著

豐臣秀吉已定天下。以其鄉尾張中村里為湯沐邑。復其租稅。又移其宗族故人于大坂。村人有古岡治右衛門者。亦移家焉。治右衛門有弟曰兼房。兄弟同居。染屋以爲業。兼房善擊劍。傍開門教弟子。一日遊京師。會禁中有鬪雞之儀。兼房往見之。觀者雜沓。衛士提呵止之。誤擊兼房。兼房怒。奪棍奮鬪。立殺數人。踰牆遁。裾絛而倒墜。衛士攢鎗刺殺之。石田三成之亂。治右衛門出妻獨如澤山。為造旗幕。及三成敗。為京兵所逮。既被宥。流寓諸國。遂至駿河家。于由井驛。娶驛長女為妻。生男。稱富士。時慶長十年十月也。富士幼喪母。獨與父居。居數年。其父託富士於邑中寺僧。讀書學字。九歲能講詩。衆奇之。元和元年。大坂亂。二世將軍率兵西上。路過由井。上人縱觀。私議其成敗。或曰。大坂天下第一名城。且以太兵守之。不必援也。富士哂曰。諸君不能治其田畝。而人之軍旅之憂可笑也。衆怒詰之。富士曰。吾請為諸君論之。古人曰。將之無才。奈城與士。秀賴愉惰。非將人之器。則城雖堅。士雖勇。不足恃也。當今之時。分遣其將士於

慶安

四方。制敵於百里之外。或可以僥倖萬一矣。計不出於此。坐俟大兵至。不可謂有謀。且以將軍父子之雄。舉天下之兵。加之區區。一城。其易如摧朽。破卵而已。既而大坂隔衆益奇之。先是有高松半平者。通曉兵學。仕豐臣氏。大坂滅後。客遊四方。遂至由井。寄寓僧舍。富士事之甚恭。或乞問。問古今英雄之事蹟。一日問半平曰。豐大閣之祖為誰。曰。大閣父筑阿弥。實為尾張農夫也。何系之有。富士慨然曰。大閣匹夫。而能為閭閻。我豈不能為將軍乎。半平笑曰。諺云。求如挺。得如鐵。苟常思之。不失為佳士矣。自是富士常以

慶安小史

興家為念。月無幾。治右衛門病沒。臨終。乞寺僧以富士為僧。富士惡之。佯為哂。為僧侶所厭。姑夫關原清兵衛哀而養之。富士日携竹竿釣于山澤。而陰木刀試刺擊。騁騎野馬。馳驅山谷。如此數年。一日富士謂清兵衛曰。吾非啞人也。吾父嘗欲以我為僧。吾心甚賤之。故姑裝病。以絕僧徒耳。太夫不得志。則已。得志則舉大名。安能鬱鬱被緇衣。以終身乎。聞豐臣秀吉起於布衣。戡定天下。位極人臣。我甚慕之。我亦欲歷遊四方。按山河形勝。以成我之所志。叔父幸見許。清兵衛不得已而聽之。於是富士自改正雪。稱民



部助以由井為姓。乃理行李辭而出。誓曰：不穿錦袍，不復還也。自是正雪遊畿甸之間，察山川之形勢，每聞有澤劍操槍之士，輒往較其技，是以技益進焉。嘗如加賀經山中，逢夫路，投獵大家老嫗曰：甚矣上人之好客遊也。正雪曰：何謂也？老嫗曰：昨有一士過吾家，亦君之徒耳。正雪欲見其人，次早辭去，每行踪其所之，至越前鯖江，會日暮入路傍廢祠而息。夜已四更，有一士挈人首而至，置之堂上，復出。正雪獨語曰：無乃老嫗所語之士乎？竊取其首而匿之。其人還索首，不見焉。搜祠中，忽見正雪在，叱曰：若胡為者也？正雪安小史

雪曰：吾駿河人，由井氏部助也。而子為誰？對曰：吾北條氏遺臣，金井政國也。正雪出所匿之首，且問其故。答曰：余日謂國事殺人，故欲葬其首以修冥福也。乃埋之祠傍。政國言於正雪曰：余是好會，欲與試劍法。何如？正雪曰：固所願也。乃焚柴取明木刀相擊。政國感正雪之技倆也，執弟子之禮。期後會而去。正雪西如肥前，過天草海濱，遇一老翁坐磯垂釣。翁顧謂正雪曰：子得非客士曰然？曰：子周流天下，見真英雄乎？曰：否。吾見武夫多矣，然未曾有過我者也。翁哂曰：子之所言，匹夫之勇耳。老夫之所問，將人之器也。夫將

人者，上察天時，下明地理，而行之以人和，其發兵也，運籌於方寸之中，決勝於千里之外，而又自幻法者，以佐之，所謂幻法，孫臏孔明之所秘而不言，而行軍莫先於是也。正雪謂其非常人也，跪而請教。翁熟視正雪曰：子必生事于天下，而能成其志者矣。吾故小西行，長遭臣賊之意也。君家滅後，隱此地數年，以待時至。子真可傳吾道者。乃投竿化為一大魚，乘焉而逝。洋洋自在。正雪見之驚服，因就其舍，師事之。居半歲，盡得其術，乃辭而東。如紀伊，主劍客關口隼人講兵法。弟子大進，國主德川賴宣聞其名，召而見之，教

## 慶安小史

之試騎射。正雪跨馬扶弓，馳驅如飛，連發皆中。賴宣大賞其能，欲祿之。三浦長門諫曰：正雪通曉兵法，勇智無比，然臣竊聞彼常修幻法，驚人耳目，夫幻法，洋人之所傳，而國家之所大禁也。今舉此以教士臣，他日必生大害矣。不若陽賞之，而陰遠之也。賴宣從之。正雪怏怏而去，如美濃，過青野原，遇僧與俱。往僧折路傍大樹，踞而息焉。正雪見之大驚，強問其名。僧曰：吾別木氏。吾父嘗仕豐臣秀賴，後為酒井讚州所捕而死。於是，吾潛入江戶，欲為父復讎。為松平信綱所摘發，不得志而奔。削髮潛行四方，以終年而已。正雪

謂其可寄大事也。密告其意。因問曰。方今以武顯于江戶者為誰。別木屈指以柳生但馬北條安房。楠不傳以下數人對。正雪首肯而去。別木後更姓加藤。餘市右衛門。正雪遂入越後。會山賊數人。要路。正雪揮刀縱橫擊之。賊魁服其勇。請改憲事之。正雪問其姓名。對曰。僕為熊谷三郎兵衛。實武田氏遺臣也。僕黨有壺內左島有竹作右衛門者。皆慧巧可用。僕而見赦。請與二人生死事之。正雪聽之。約後期而去。遂北入陸奥。旋至江戶。依楠不傳。委質學兵。不傳者自稱楠正成之後裔。講兵教子弟。正雪曲意媚事之。為其

慶安小史

五

所信任。不傳有女。許以其門人和田丰水為婿。而未婚也。門下有鵜野某。掩其女。正雪陰知之。一日與鵜野語。附其耳曰。子知近日之舉乎。鵜野曰。否。正雪曰。子掩主公女。主公憤怒。將殺子以解主水。鵜野大懼。正雪乃授計。因大激之。鵜野見主水曰。正雪阿事主公。主公偏愛之。欲以易君。然慮君之必報怨也。將以計除君。期在近。不敢不告。主水聞之。且驚且怒。欲及其未發先之。一夕不傳外還。正雪從而後。主水要之路。隔與刺殺不傳。將逃。正雪至。即拔刀斬主水。不傳女聞其父死也。大慟。遂削髮為尼。時寬永九年十月

也。不傳無嗣。宗族以正雪之復仇也。使之承其家。正雪為人。反殺雄辯。為眾所畏服。嘗讀平語。著評論若干卷。是以人咸稱其才學。諸侯聞其名。爭聘之。而德川賴宣臣士。來學者最多矣。當是時。正雪密招黨故。關原清兵衛。自駿河往。金井政國。加藤市右衛門。熊谷三郎兵衛。壺內左島。有竹作右衛門。鷲坂甚兵衛等。稍々來集。正雪皆薦之於諸侯。又多蓄工人。為諸侯製甲。曹弓矢。初大坂之役。長曾我部威親被虜。與其子皆處斬。仍有一兒。其母抱之而逃。出羽依其父。九橋田流兒已長。冒九橋稱忠彌。為人白皙長身。力

慶安小史

六

兼數人。善揮十字槍。其友芝田三郎兵衛。嘗至江戶。學兵術。業成。乃召九橋于出羽。共開門教弟子。時有奧村八右衛門者。善射。與芝田九橋友善。一日謂忠弥曰。頃日楠正雪以武顯于天下。蓋一往嘗試之。忠弥曰。諾。乃往見之。正雪豫作偶人。機括靈動。使奧村射之。再發皆中。正雪與忠弥執槍對較。格鬪稍久。忠弥又正雪槍而擲之。正雪直薄忠弥。搏而伏之。已而置酒饗二人。正雪意忠弥之膽氣可用也。咸稱譽其技。以誂之。由是二人情交日密。獨奧村不屑正雪之為人。也不復訪也。忠弥常慨其家滅。欲乘時興之。正

雪密知之。偽造其父盛親歌箋。問忠彌曰。子之家系。出乎誰。忠彌以實告。正雪曰。吾向西遊於土佐。得乃父真蹟。藏之久矣。因出。與之。忠彌感激泣下。深德正雪。於是正雪又諷忠彌。以誘芝田。世傳德川信康之自盡也。其刀青江村正所鑄。是以國家以村正刀為不祥。士人皆不之佩也。芝田欲見正雪之志。乃齎村正刀。示之曰。及利價廉。君盍買之。正雪視其刀。大悅。固請之。於是芝田始覺其有反心。而亦深結托之。吉田初右衛門者。小字曰菊丸。其父明石則遠事豐臣氏。太坂陷後。菊丸赴江戶。固有膂力。忠彌使人誘

## 慶安小史

致之。以為己黨。吉田又薦其友僧廓然。廓然本姓別所氏。嘗出路見牛車。任重牛不進。廓然輒推車行數町。衆服其膂力。至是皆為同盟。正雪益集黨人。密稱奉德川額宣密旨。於是天下不逞之徒。漸來屬焉。既而三浦長門至。自紀伊。聞正雪出入其邸也。曰。此速禍也。即命藩士絕之。因逐關口車人等數人。正雪感奧村之武技也。使忠彌屢請之。忠彌勸奧村。其訪正雪。奧村辭強而後可。正雪與奧村圍碁幾輸。忠彌手為擊鼓狀。謠曰。言執言牽。于鞍之前。正雪悟。竟得贏之矣。奧村故發怒。遂與二人絕。當是時。松平信綱為

若年寄。將朝。觀一士立渾上。而望城中。使問其名。對曰。九橋忠彌。信綱乃留輿召見之。曰。吾耳子之名。日久而今得始面。他日有聞。幸見過我門。忠彌拜辭。明日往謝之。及語之。正雪。正雪蹙眉曰。止。傳不云乎。誠於中。而於外聞。豈非見人甚明。而子數往見之。後必不利也。忠彌曰。諾。已正雪大會黨人。謂之曰。我欲誘諸侯之兵。以擊大軍。久矣。而幸慶未曾日月如流。老將至。乃今之時。欲洗心改慮。以保天年。何如。衆默然。忠彌等進曰。君何為出此言也。願自君作是圖以來。已多歷年所。是以恐人心之叛去。以此試吾輩矣。雖

## 慶安小史

然。吾輩已委命於君。豈敢有貳心。且聞問者同盟之士。日滋加。以是橫行天下。庶可以逞志矣。何必誘諸侯之為。正雪笑曰。吾姑試卿等焉。爾因謂衆曰。吾欲煩諸君赴京阪。三都並起。相應以制天下。獨至其方略未決耳。請問諸君成算之所向。皆曰。兵家孤旅。莫若行火城市。因以襲之。佐原重兵。衛永山。兵左衛門。進曰。吾少時學火工。行火莫善於地雷火。請先作數百罇。盛以火硝。密伏之於街衢。火線聯之。一時轟發。乘其勢。以取牙城。必莫不集矣。正雪曰。善。乃令有田某以計為火藥庫吏。以為由應。慶安四年四月二十

日三世將軍薨。正雪等聞之曰。機不可失也。以二十  
五夕。以火會道。雖山。部番諸士。以丸槁。芝田。為江  
戶。其計曰。外內齊發。火各著。紀伊家徽。辨。詭迎。  
東敵。法親王。北走。日光山。阻山扼水。以待天下動靜。  
以加藤熊谷為京師渠帥。曰。先襲二條城。奉天子於  
以敵山。請征東詔。以徇畿甸諸侯。以吉田金井為大  
坂渠帥。曰。急拔木城。據之。以扼關西諸侯。乃謂諸士  
曰。諸君勉之。吾則至駿河。舉府中城。取久能山。為諸  
君斷東西諸侯之救援。計已定。各散去。於是加藤熊  
谷。吉田金井等。與其部下。稍々發。江戶。潛匿京師大

### 慶安小史

阪之間。正雪贈黃金五千兩於忠彌。分與其部下。忠  
彌慮人衆金不足也。詰所善弓人藤四郎。紹之曰。項  
日子應薩摩侯徵。而用度不支。願因君之惠。得以給  
之。藤四郎許諾。忠彌即納券借金。以七月十三日為  
限。已而其母微聞其謀。謂正雪。芝田曰。公等常愛教  
兒。如兄如弟。如聞近日兒竊抱不良之心。妾一叩公  
等之開諭兒。以道諸善。妾本出羽人。嘗適長曾我部  
盛親生二子。大坂陷時。良人與長子皆被刑。時兒尚  
幼。妾懷之。踰險履淵。歸故鄉。為人漸濯。質縫。經宮艱  
苦。心期一目兒之成人。以報良人於地下。爾來賴公

等之推轂。開門授業。為士人所景仰。妾復何憾。而今  
又聞其謀。非分如妾亦何不幸。公等哀妾之意。幸見  
加藤。以濟交下。二人大慙。懼問數日。忠彌又與二  
人議事。其妻問忠彌曰。君之所謀何事。忠彌叱曰。非  
婦人之所知也。妻泣然曰。妾知君之謀久矣。始而氣  
悸。魄稀。懼事露。則併戮。雖然。婦人之常情。孰不欲其  
夫之富且貴。是以翻思回慮。拜神禱佛。欲以成君之  
志。猶何疑乎。乃出紫袍於衣篋中。進之曰。此妾竊裁  
縫。所以供君不時之需也。一坐聞之。皆感歎。加藤熊  
谷已入京師。日望江戶之報。而不至也。一夕二人相

### 慶安小史

携遊於島原妓館。酒酣。熊谷歎曰。天下豈有如此樂  
哉。是亦公方之餘慶也已。加藤曰。非也。由有財耳。既  
歸舍。熊谷曰。近日東信久不至。吾甚危之。請吾限往。  
友七日。自往問之。熊谷固健步。故加藤許之。正雪忠  
彌遣僕八藏。致命於京師大坂之諸士。八藏先抵大  
阪。當是時。大坂案客甚嚴。吉田金井等。避浴於有  
馬溫泉。八藏就謀事。旋至京師。時熊谷已去十數日  
矣。加藤問八藏曰。子來自奚道。曰。東海道。曰。子途遇  
熊谷耶。曰。不加藤擊膝曰。彼嚮與我言於酒間。今果  
是也。因具語之。八藏且曰。子速歸。語民部君。熊谷已



奔。不急發。大事去矣。七月十八日。正雪。忠彌得八藏之報。大驚。急復會道。雖山。正雪曰。事已至此。不如早發。乃以二十六日為期。正雪歸。遽裝行李。將起駿河。臨發。謂忠彌曰。謀以密為貴。予往子必慎之。遂與關原清兵衛安見吉兵衛以下十一人。發江戶。二十三日。達府中。為稱紀伊藩人。館于客舍。而舍其黨人於前後六七里之間。約曰。以二十六日會府中。正雪素與足洗村豪氏半右衛門親善。乃引以為其黨。使之陰輸糧於久能。忠彌嘗與田代某相識。田代者。固富家。忠彌就而借金。田代曰。請遲五六日。忠彌恐其後

## 慶安小史

事也。密以實告曰。事成必倍賞之。田代詭荅曰。公若得志。必以我為上大夫。至如用度。只君之命。敢不遽給。忠彌大懌而去。田代即詣真村。八郎右衛門。具語其狀。真村駭曰。奴輩敢圖不軌乎。知而不告。罪莫大焉。遂俱訴于松平信綱。曰。有賊。將謀大事。敢告。信綱聞之曰。賊中有九攜忠彌者耶。對曰。是首賊也。信綱具聞二人之言。急朝大城。會宗室及諸大臣計議。命諸侯守諸門。德川賴宣亦至。門者過之曰。有賊。正雪忠彌者。潛覲。覲非望。而事連貴家。不能奉命。賴宣竟不能入。信綱先遣人。檢火藥庫。有一吏。前五日已奔。

## 慶安小史

乃大掘其近傍。得地雷火四。即投之水。又使町奉行石谷右近將監率吏卒。以捕忠彌。忠彌之逃家也。適弓人藤四郎來賣金。曰。何為違限。忠彌百方欺之。而藤四郎弗聽也。忠彌不得已。以實告之。因要為同盟。藤四郎大怖。直訴之於町奉行。時吏卒將發。即以藤四郎為先導。而忠彌未之知也。呼妻命酒。戰曰。他日得志。玉之簪也。象之掃也。唯卿之所欲。已就寢。中夜吏卒圍其家。呼曰。火。忠彌驚起。推戶見之。吏又呼曰。有命。捕賊。忠彌應聲。蹴倒一人。即取刀拒戰。立殺傷十四人。吏卒辟易。不敢進。忠彌知不可免。負壁將自殺。吏卒皆至。搏而縛之。僕八藏斬一人。將逃。遂被獲。而忠彌母及妻子。亦皆被捕。吏搜索室中。得賊名簿。天已明。芝田在家聞之。自往質信否。路遇佐原永山。二人曰。忠彌被逮。然聞其妻早已火名簿。君安之。芝田搖首曰。否。否。曩夕之變。而既已播斯說。不可信也。廟堂有人。將使我輩坐而就擒而已。乃變服西奔。是日。正雪妾及加藤妻等。亦皆被捕。先是信綱馳使告急于府中。二十五日。平明。乃達府中。震駭。城番大久保玄蕃加番秋田安房。急發士卒守城門。塞諸街口。柳原越中將部下守久能山。而町奉行落合重兵衛。

率吏卒百餘人以逮正雪。是日黎明，正雪寢起，遙望東山，謂諸士曰：「忠彌敗，吾事不濟矣。公等好自為計。」皆曰：「急召部下之士，戮力攻城，奪其器仗，以掾久能。」山賊可以逞焉。正雪曰：「母也。吾之作是圖也，欲東西齊發，相響應，以經略天下。而今如此，縱使我藉諸君之力，以得此土，安能爭衡於天下乎？不若速自裁。」以傳武名于後世也。皆曰：「善。」或問正雪曰：「丸橋為東都渠帥，遂敗公事，公知其將敗而使之乎？抑不知而使之？」正雪曰：「彼實長曾我部盛親之子，故心常仇幕府。」戶渠帥固其任也。雖然，吾之規非望，十有

慶安小史

十三

八千於茲，未曾有一洩其謀者也。今者如此，豈非命邪？吾固鄙人子，而乘運謀亂，為天下英雄之魁，今而死，無復遺憾也。乃梳髮更衣，召舍主，取黃金六百兩，與之曰：「今日吾命盡矣。敢煩女家，吾死之後，以此告于官，官必賜女。是我之所以聊報女也。更取金三千，託之曰：『吾師為楠不傳，吾嘗以計奪其家，其女削髮為尼，住鎌倉，為我遺之。』且語尼曰：『正雪害師父圖君上，今已伏誅矣。乃閉戶釘之，願謂諸士曰：『吾事畢矣，遂割腹而死。』年四十七，廓然自後到其首。當是時，吏卒圍其舍數重，破戶而入，諸士皆自殺。廓然將

死，吏卒迫至，即田刀縱橫當之，立斬數人。傷於頭與股，乃顛倒亂擊，誤斫柱，及入深而不拔，忽奪吏槍殺二人，終自貫而死。獨僕和田助被捕，鞠之曰：「足洗村有半石衛門者，陰舍我黨，與六十許人，又持糧，又能於是官遣吏執之。賊黨皆已遁走。半石衛門逃僧寺，欲削髮乞食。吏追及焉，縛之。後與和田助皆見斬。先是，信綱遣中山勘解由於京師，及大坂，以收賊。二十九日至大坂，從吏等赴有馬前，數日，吉田金井得正雪手書，曰：『以七月二十六日，江戸府中並舉事。』公等得報，則速發焉。於是二人日族其報，而至二十九日。

慶安小史

十四

未至也。金井心恠之，欲聞旅人之說，早起如山崎。吉田在舍，召其所親狎變童，擊鼓佐酒，酒酣，吏卒猝至。吉田無暇於取刀，祇把魚刀拒之，殺傷數人。吏卒披靡，吉田急挾童上樓，弃櫓。吏卒仰視，不能上也。吉田呼曰：「吾欲戰，則戰，欲逃，則逃，獨懼累此兒，故不敢也。」乃令童縛已以獻焉。金井遂聞之，欲走合正雪，既又聞正雪之死，旋歸大坂。一夕沐浴更衣，至天王寺門前，割肚而死。中山已獲吉田，轉至京師，使人窺加藤不在，是日加藤遊於島原妓院。中山又遣人潛誘妓，大勸酒，加藤沉醉而卧。夜五鼓，吏卒突入，前後捉之。

如藤堀起亦手持仆數人挾柱架格闘而房中狹隘不無聲卒被虜中山乃檻送二賊於江戸信綱引忠彌于曉謂之曰前年倉卒相見於道上得面乎忠彌伏地曰賀公無恙信綱曰聞若受紀伊大納言之託信乎對曰我屬皆羈旅之士而陰謀大事常恐人心之不誠是以陽稱奉大納密告以收人心而大納言皆不與知也問實人不答拷之亦不答於是召吉田加藤而鞠問之不言則痛掠之吉田張目罵曰以計天下為賊凡以宰天下者非賊而何也加藤見其妻子見捷謂之曰爾等不幸為我之妻子第慶安小史

當以死耳已而聞其悲痛之聲歎曰為慈愛計友誼以之田以下數人對當是時官吏追捕甚急一役田彌五七等十一人自殺于麻生道上而三部所遣之賊合三百餘人忠彌等罪已定以八月二十七日日刑于鈴森忠彌以下男女老少三十四人縛於十字架以次縣植觀者如市有一上脫笠一監吏前跪曰僕為芝田三郎兵衛實民部忠彌之黨日者忠彌被囚僕西奔欲以合正雪中道聞其死復歸江戸復自幼與忠彌友愛殊厚今聞彼將見刑僕不忍獨生願因君之惠使得一面彼共語其情而後歸戮

於司政死且不朽監吏危疑不決目付富田重兵衛良其意聽之芝田大悅至忠彌前而語謂許已向忠彌以書許其赦芝田請借就刑富田曰爾不遺友誼自首以請共誅可謂士矣我當減女罪數等以聽自裁芝田拜謝自誓而死其金乳黨所全盡獨熊谷竟不知其死之由是松平信綱得試中時傳德川賴宣之書至是街市革命記其第徵印章而訂之非信綱乃知賴宣之無罪便之速朝以賀賊平於是人心始安正雪之伏誅也梟其首於府中有二屍乞焉而葬之結廬於其傍以修冥福初陸奧白石農夫有女慶安小史

二人長者年十六幼者年十三一日農夫與幼女松田誤汚士衣士大怒拔刀斬農夫女逃走歸告之適其母病聞之驚而絕二女大哭葬父母畢負笈至江戸見正雪請學劍以復讎正雪聽之居五歲業稍成於是正雪使門下勇士三人送二女扶以復其仇二女已報讎即別髮為尼是報其德云

小史氏曰由井正雪成長於村閭之間壯歲為公侯師何其威也雖然為人傑點害師友圖非望宜乎不能令其終余聞正雪與熊澤蕃山遇于岡山即正雪出蕃山戒侯莫近之他日正雪謁侯亦勸莫用蕃山

甚矣英雄之相忌也。蓋蕃山雖非純儒哉。以經濟自任。屢見功績。而正雪則無雙。姦賊身死而臭名永存。竟使蕃山獨獲知言之名。可惜哉。

慶安小史

十七

慶安小史 大尾



明治九年二月廿四日  
板權免許

東京下谷仲徒士町四丁目  
三十二番地

中根叔藏版

赤松渡 撰

先朝私記

明治九年（一八七六）高松奎章堂刻本

據明治九年（一八七六）  
高松奎章堂刻本影印

明治九年十一月新刊

赤松渡著

# 先朝私記

書肆

奎章堂藏

序

溫策敦厚、詩教也。重語一  
規、子歲不易、字於吾友、志和  
士方驗之士、可與、字曰藩、寸

先朝私記

長子策、最妙詩、其為秀  
潤、清綺、語穠、味美、詩之資  
性、然性之資、詩外、中、若人  
實、如詩也、只在、富、德、誠、為



顯室及諸慶人等外友位事  
敦厚和柔以處人人大  
稱之頃已解職復事文籍  
著不史名曰先朝私記

先朝私記

二

序予余之閱之以上平  
水之為寓勸懲之之海  
內豈小補云爾乎前歲寄  
東游詞全傳無臨別有

請還之曰進輔邦宗世美  
書英雄生文定何如今見  
此者感其之能履年云而  
從年暇之不深也乃叙

先朝私記

三

明作而子十月浪來傳  
東濱森澤恒撰

居池諸子也

先朝私記

讚岐

赤松 渡 軒  
久保 直躬 校

孝明天皇諱統仁、仁孝天皇第四子也。嫡母新朔平門院藤原祺子、關白政通女。親母新待賢門院藤原雅子、贈左大臣實光女。天保二年六月十四日降誕。稱撫宮。十一年三月十四日立爲皇太子。○弘化四年九月二十三日即位。時年十六。關白太政大臣政通、左大臣齋信、右大臣尙忠、內大臣忠熙並如故。○

先朝私記

三月謚先帝曰仁孝天皇。○四日葬仁孝天皇于泉涌寺。○四月二日關東大雷、三日大風雨、雹重可七錢。○五月四條火延燒民舍八百戶。○江戶大水。○閏五月十日和宮生、仁孝天皇遺腹之皇女。母新典待局。中納言實久女。○二十五日亞墨利加華盛頓船長皮爲兒帶領大艦二隻、吏卒千餘人、至相州浦賀、上書乞互市。幕府命掃部頭井伊直亮、肥後守松平容敬、大和守松平齋典、下總守松平忠國、及加賀守大久保忠愍、丹後守米倉昌壽、彈正忠保、科忠丞

先朝私記

安藝守酒井忠嗣、兵部少輔稻葉正巳等發兵各守備海岸。○六月十六日、刀根河大水。○二十一日、新清和門院崩、壽六十八。後桃園天皇女、光格天皇中宮也。○七月五日大風雨、刀根河決、流溺數千人。○八月二日、幕府以中務大輔本多忠民爲寺社奉行。○十一月二日夜、大阪大火、延燒四千九百餘戶。○遠江守伊達宗城中務大輔有馬慶賴叙從四位、任侍從。大膳大夫伊達宗德亦叙從四位。○四年三月十四日、尊准后藤原氏爲皇太后。號新朔平門院。○二十四日夜、信州地大震、累日不歇、遍地決裂、所在發火、而沸騰濁水、人畜死傷不知幾萬。時會善光寺開扉、四方男女蜩集成群、其死傷者名里驗認而上吏籍二千八百人。此時犀川之上流、山坡崩、拆壅填溪谷、終涵畜而成巨浸、方可四五里。丹波島下方乾涸、不見消瀉。松平伊賀守、真田信濃守發役徒五千入疏濬。濬治云。○九月廿三日、天皇行即位禮。○十月十三日、新朔平門院崩。○十二月大膳大夫松平慶親任少將、兵部大輔松平慶憲、左兵衛督松平信

和式部大輔松平定成並任侍從叙從四位起前守  
丹羽長國亦叙從四位○嘉永元年二月改元○幕  
府以大和守久世廣周爲西城老中○四月關白太  
政大臣政通上表辭職不允○左衛門尉酒井忠發  
叙從四位任侍從○十日幕府世子右大將家祥之  
夫人薨○十月幕府以西城老中和泉守松平兼至  
爲老中大阪城代伊賀守松平忠優亦爲老中○十  
一月二十一日行大嘗會○十二月七日左大臣尙  
忠女夙子叙從三位○十五日從三位藤原夙子兼

## 先朝私記

## 三

輦車入內十六日爲女御時年十六○美濃守松平  
齊清進從四位少將老中伊賀守松平忠優進從四  
位侍從○二年二月老中大和守久世廣周叙從四  
位任侍從○三月十八日大將軍家慶田獵下總小  
金原扈從十四萬餘人○四月三日幕府以攝津守  
本田資功爲寺社奉行○十八日大將軍家慶觀角  
抵於江戶吹上第○閏四月老中以下諸有司臨昌  
平饗召諸儒員發海防時務之兩策各令對問以洋  
夷幢幢跳梁邊徼海氛不熄也○五月八日旁令天

下具陳海防策略筒井紀伊守江川太郎左衛門等  
上策者衆○英吉利闖入相州浦賀又抄畧豆州下  
田大島之地方○鎮西大水與羽寒凍禾稼不登時  
氣失序或雷電或飛霜○七月幕府命左衛門尉五  
島盛成松前爲吉崇廣新營鑿城池備不虞以二家  
封疆懸隔於大洋中緩急難應援也○八月八日江  
戶大雷雨海道諸州大水函關絕行三日時府下米  
價踊貴海山兩道群盜白日劫掠行旅驛舍騷然○  
九月幕府大申防海之令○越中守松平定猷叙從

## 先朝私記

## 四

四位任侍從左京大夫小笠原忠徵亦進從四位侍  
從○三年二月五日江戶半藏門外失火多燒候伯  
之邸第○二月二十七日生母藤原雅子准三宮號  
曰新待賢門院○三月二十三日大將軍家慶臨昌  
平饗夷船七八隻出沒房州邊海○八月八日江  
戶大雷○紀伊守內藤信親進從四位○幕府以寺  
社奉行采女正土屋寅直爲大阪城代叙從四位○  
十二月尾張參議慶惣水戶參議慶篤並任中納言  
攝津守松平義比左京太夫丹羽長富並進從四位

侍從、相模守松平慶德、越中守津輕順義亦進從四位侍從、大膳大夫奧平昌服、采女正戶田氏正並進從四位、○江戸増防火隊名新組、先是以淺草馬喰町所在屢火也、○琉球使入貢幕府、○四年三月十五日、勅贈正一位于故民部卿兼造宮大夫和氣清鷹、追諡護王大明神、遣神祇少副十部良祥於南都、披讀詔命、藏位記東大寺、其文曰、贈正三位民部卿和氣朝臣清鷹爲人義烈、仕朝忠誠、忘身直言、全皇緒之功、詳于國史、追思其舊勲、今宜崇護王大明神、

先朝私記

五

授正一位、令作宣命位記、左中辨藤原朝臣恭光傳宣、權中納言源朝臣建通宣、○十月、德川慶福進從三位中將、○十二月、所司代若狹守酒井忠義罷職、爲溜間格、更修理大夫、以寺社奉行淡路守脇阪安宅爲所司代、進從四位侍從、以西城老中久世大和守爲老中、越前守松平慶永進正四位中將、美濃守南部利剛進從四位侍從、○五年五月二十二日、寅牌、江戸西城火、○六月、加賀之豪商錢屋五平、私互市鄂羅斯、沒其產、誅五平及二子家宰、金澤家

人連坐賜死者十餘人、○今夏近畿南海大旱、○老中伊勢守阿部正弘以功勞秩加萬石、○七月二十日、大風雨、刀根河決、二十一日、二十二日、畿甸大水、毀損三條五條諸橋、○八月十三日、三備美作大水、二十二日、阿波紀伊大水、○九月二十二日、皇子祐宮生母權典侍局藤原慶子、大納言忠能女、○十一月、江戸城中紅葉山火、○十二月、筑前守松平慶寧進正四位中將、薩摩守松平齋彬、阿波守松平齋裕並進從四位中將、肥後守松平容保進從四位少將、

先朝私記

六

土佐守松平豐信、下野守松平慶賢並進從四位侍從、○今年、大阪道頭壕戲場災、○六年二月、關東地震、函根山崩、壓死三十餘人、小田原城亦頽圯、○十七日、江戸西城成、○五月七日、女御藤原氏准后宣下、○六月三日、亞墨利加合衆國大統領斐謨美辣達、其船長波理、領大艦四隻、吏卒三百人入浦賀、呈書幕府、掃部頭井伊直弼卒、兵士千二百人、松平誠丸典則卒、兵士七百人、鎮岸港、肥後守松平容保、軍艦百三十五隻、下總守松平忠國、軍艦七十五隻、亦



衛海灣既而使者回棧咬啮吧期明年七月來得答書十二日飛帆而去此時府下洶洶吏民疑懼騷擾大甚○七月三日幕府命水戸前中納言齋昭商畧外國事宜齋昭錄海防愚存舉不可和之十策示阿部伊勢守大會列藩視墨夷書簡各令陳意見於是肥前守松平齋正越中守細川齋護大膳大夫松平慶親薩摩守松平齋彬越前守松平慶永等以下交章疏通好之不可請責渠無禮斷然拒絕而恢復我邦固有之義氣一洗當今偷惰之弊習○七月十九

先朝私記

七

日鄂羅斯國主令其重臣子也利羅德領大艦四隻卒六百五十人入長崎港呈書幕府冀貿易互市美濃守松平齋溥肥前守松平齋正各將兵士衛長崎街港丹後守大村純熙壹岐守松浦璫左衛門尉五島盛成主殿頭松平忠精越中守細川齋護以下各警邊海○二十日征夷大將軍從一位左大臣兼左近衛大將德川家慶薨贈正一位太政大臣世子右大將源家祥繼立改名家定○是月長星見西北隅狀如爐烟直上○九月西城老中紀伊守內藤信親

爲老中○十一月阿部伊勢守等建議築三大砲臺於品川海中○十二月五日鄂羅斯使臣布怙廷復入長崎請回答往復論辯數次幕府終不允○七年正月八日鄂羅斯使臣布怙廷受復書而回棧○二十一日出羽守松平定安雅樂頭酒井忠顯飛彈守立花鑑寬並進從四位侍從○幕府命長崎滞在之蘭夷獻蒸氣船十隻約明年夏獻六隻○先是造五兩金民間以爲不便期明年十月令交上又更鑄一銖銀○安政元年正月幕府遣讚岐守松平賴胤入

先朝私記

八

朝謝襲職○十一日合衆國使臣波理衛廉士領軍艦六隻入浦賀請回答伊澤美作守井戸對馬守同四鎮諸將守備海灣大學頭林煌民部少輔鵜殿長銳等膺幕府命接待外使○二月朔外使等以浦賀潮迅而難旋泊請移駐本牧橫濱因命加賀越前以下十四藩嚴備沿海而設假館于橫濱饗請外使○讚岐守松平賴胤進正四位陸奧守松平慶邦進從四位中將內藏頭松平慶政進從四位少將○三月六日禁內失火延燒都下二百四十餘街公卿第宅

先朝私記

九

寺院市廛焚蕩略盡、天皇潛幸加茂、尋駐蹕聖護院、幕府命井伊掃部頭、酒井若挾守、松平時之助等、鎮護輦下、○二十五日、林大學頭等、與外使復會橫濱、終約兩國和好、明日波理獻火輪車、浮浪艇、電理機、日影像、耕農具等之土物、無幾回棹下田、幕府命了僊寺、館外使、且就玉泉寺之傍、與外客墳墓地、○四月十一日、天皇移鑾輿於神泉苑、公卿以下騎馬扈從、○五月七日、石州及防州雨雹、○六月十五日、畿甸地震、○七月二十三日、英吉利使臣入長崎港、援墨使准下之例、請修條約、長崎奉行水野筑後守、目付永井岩之亟等、會議而聽、調理薪水舟楫、且駐泊長崎箱館兩港、○八月、淡路守脇坂安宅、奉勅新製大砲、天皇御行宮前庭、獻覽之、窮問其運送使用之方、○十一月五日、南海地大震、旬日不已、土州特甚、地陷成海、死亡無算、○十二月三日、佛郎西使船二隻、送三河漂民三名、始入浦賀港、○十四日、改元安政、○下總守松平忠國、進從四位少將、右京大夫、佐竹義睦、犬和守松平直候、右近將監松平武聰、並進

先朝私記

十

從四位侍從、大隅守津輕承祐、叙從四位、○相州大山焚、○二年正月、修造皇宮、○六月二日、老中阿部伊勢守加封萬石、○石州魑魍殘傷禾稼、○十二月二日夜、關東地大震、江戶大甚、死者十餘萬、毀傷者不詳其幾十萬、每車捆載數人之骸屍、輸郊野、晨夜不已、風物蕭索、殆如清野、○十一月、皇宮成、○二十三日、天皇回鑾、○十二月、加賀參議齋泰、進中納言、○三年四月二十五日、水戶家人結城寅壽賜死、太田丹波守削邑休致、十河祐元處斬、其黨藤田主膳、近藤儀太夫、小山田小四郎、大森彌三、左衛門、削邑屏居、其餘十數人、或解任奪俸、或降調、先是結城太田、爲國老、有罪、褫職禁錮、因陰誘人、森金八郎、根本新八郎等、唱和流言、而離間中納言父子、再請連枝輔導、圖已專國權故也、○初鑄二分判金、○浚治京師鴨川、○七月、合衆國使臣巴留理士、齎其國主書翰、來、援慶長中、葡萄牙上謁之例、請面謁大將軍、而告重大之事故、○八月、阿部伊勢守等、定議、將准下外使館舍之請、因命老中堀田備中守、若年寄本多

越中守大目附跡部甲斐守土岐丹波守勘定奉行松平河內守川路左衛門尉水野筑後守目付岩瀬修理大久保右近將監勘定吟味役塚越藤助中村爲彌商略擬定外國事宜○二十四日遣岩瀬修理于豆州下田監視墨館營作之事務○二十五日三遠以東猛風暴雨海潮逆上牆屋蕩壞江戶深川本所瀨江之地殊甚芝口四谷所在火起死亡十餘萬人○九月晦日執政連署遣書所司代脇坂淡路守外使館舍之處置邪教禁遏等具託傳奏奉之○十

先朝私記

十一

一月遣吏大阪相沿海要區監炮臺築作之事○十月阿波守松平齋裕叙正四位相摸守松平慶德彈正大弼上杉齋憲兵部大輔松平慶憲並任少將○今年諸州豐穰○四年二月二十九日左大臣忠熙取薩摩守松平齋彬女爲養女而嫁大將軍德川家定○三月荷蘭國上蒸氣船於幕府号觀光丸遣讚岐塩飽島民五十八名就彼講舟楫運用之方○四月出羽守松平定安任少將○大坂川口始置兩鎮命松平讚岐守松平出羽守遣番頭足輕頭以下

一員之將領駐劄之○鑄鍊錢于松前以布蝦夷名箱館通寶不許內地交換○七月朔阿讚備暴風洪水○十二日老中從四位侍從伊勢守安部正弘卒以備中守堀田正篤爲首相所司代脇坂淡路守爲老中寺社奉行中務大輔本多忠民爲所司代尋進從四位侍從○八月二十五日山陽西海地大震○合衆國大統領皮兒設其領事官頓遷土齋書來請議定貿易條款於是備中守堀田正篤傳幕府命大會列藩群臣諭告外使許入城有覲禮之旨趣列藩

先朝私記

十二

多不義諾者水戸前中納言齋昭深憂之遣使京師上言曰洋夷覬覦神州久蓄狡謀今託貿易和好將釀國家無量之禍幕府諸官無斷無識徒怖彼恐嚇務順適其意一時偷安應接過寬遂受驕傲無禮之言覲然不自愧令犬羊之屬逞無饜之欲神州未曾有之大辱也伏願具論其來由嚴勅幕府宜峻絕外交○十月和泉守松平兼全伊賀守松平忠優復爲老中○先是備前守牧野忠雅免職○十七日佛郎西船長至大島登岸○十月二十二日墨使謁見大



將軍進書翰此日諸藩群臣悉登江戶城各列其班  
○十二月四日墨使具錄款條上請貿易開港等堀  
田備中守取捨審定將允下之以不可專斷遣大學  
頭林燈津田半三郎正路於京師奏聞外使應接之  
顛末及萬國締交時勢不得已之狀情請權宜行事且  
祈請開港勅准詔命○掃部頭井伊直弼三河守松  
平慶倫並任中將右京大夫佐竹義就進從四位侍  
從飛彈守松平利昭信濃守真田幸教並叙從四位  
○五年正月備中守堀田正篤入京請開市准許○

先朝私記

十三

大坂道頭壕火○二月十日夜江戶大火延燒十二  
萬四千五百四十餘戶○十四日又火○大藩諸侯  
遣使京師論奏洋夷誦詐和交有鉅患者衆○堀田  
備中守淹留數月屢求開市勅准不聽陰誘牀鷹司  
殿下通贈賄於公卿群司強要天裁天皇聰明玄淵  
深洞鑑其僭妄徧詔諸王百官詢謨審議尊融法親  
王左大臣忠熙右大臣輔熙內大臣實萬大納言聰  
長大納言忠能以下非藏人北面衛士等八十餘人  
皆陳非其長策大皇躬絕供御齋戒七日默禱石清

水廟召堀田備中守於小御所有詔不聽開市○四  
月老中等相議以掃部頭井伊直弼爲大老○二十  
五日大招內外列藩於幕府大老老中陪侍而諭勅  
詔令具陳意見○五月幕府報書合衆國緩條約調  
印之期○六月四日東本願寺火延燒七條五條○  
六日江戶大雷雨震五十三所海道諸州大水○幾  
旬比陸鎮西霖潦不止多傷禾苗○十日勅大納言  
公純祈伊勢大廟○十六日墨船入神奈川港鄂船  
亦陸續而到時有英佛諸蕃軍艦數百雙盤桓于南

先朝私記

十四

洋中觀望我盟約之成否欲決和戰于一舉之巷說  
物情忷忷幕府倉惶不待勅旨欲條款調印於是中  
納言尾張慶恕中納言水戶慶篤中納言田安慶賴  
中將一橋慶喜越前守松平慶永等一齊造幕府執  
謁大將軍因病不得謁招大老以下諸有司詰問曰  
未獲勅准而訂盟修好則是大將軍廢詔命僭君上  
之罪不可免且不省東照大猷二公以來列世之成  
憲墜地乎井伊掃部頭等唯唯敬服無幾遣井上信  
濃守岩瀬肥後守于神奈川會議墨夷載書締交於



是堀田備中守等連署奏夷勢倔強列藩章疏無聞覆奏其和盟實出於不得已也○天皇逆鱗召左大臣忠熈右大臣輔熙以下定議及二十九日有勅令三家大老之中一人入京○二十一日所司代本多美濃守忠民免職以若狹守酒井忠義爲所司代○松平出羽守松平讃岐守撤大坂鎮營屯京師郊外橋本塚原捍衛輦轂藤堂和泉守護伊勢大廟無應援京師諸口松平越中守亦屯京師郊外又命松平相摸守松平内藏頭松平土佐守松平大膳大夫立

先朝私記

十五

花飛彈守鎮守大阪諸口及攝津和泉各港同大阪城代土屋采女正協議掌事○堀田備中守正篤松平伊豆守忠優並就職太田道醇資始下總守間部詮勝和泉守松平兼全等復爲老中○二十五日紀伊中將慶福爲大將軍家定之義嗣入江戶城留住尋移西城任參議更名家茂初大將軍家定多病而無子堀田備中守在京日天皇遣議奏官喻告宜撰立有望之人至此執政等私議建儲越前中將等以紀伊中將尙幼屬意一橋中將與井伊掃部頭劇論

苦爭于城中終不得克云○七月洋夷闖入品川砲台○關白藤原政通罷職左大臣藤原尙忠代之○八月七日左大臣忠熈等奉聖旨下特勅於幕府會同大老群臣及親藩外鎮而審定覆奏洋夷之處置其翌八日征夷大將軍正二位内大臣右近衛大將源家定薨年三十八贈正一位○此月中旬彗星昏見西方不知長幾十度其狀曲頭闊尾光鋸燦爛逐夜南且東至九月上旬特大且明至中旬漸漸縮小終沒南方此時海内大疫暴瀉而死者幾萬人

先朝私記

十六

呼爲虎狼痢○九月尾張中將德川茂德進從三位宰相○下總守間部詮勝再入京師嚴監視禁省出入沙汰驛舍留寓專敷張恩威以抑折正議志士命若狹守酒井忠義豐後守内藤正繩設關四郊晨夜巡邏嚴糾督察遊客行旅僧徒巫祝○十二月朔日參議源家茂任征夷大將軍進内大臣○正二位大納言忠房正二位大納言齋敬傳奏官廣橋光成萬里小路正房等以勅使准后使東下○逮攝水戶家人鶴飼吉右衛門等數人及親王攝家清華之家宰

諸大夫數十人街儒市民百餘人送江戶禁囚于松平飛彈守榊原式部大輔小笠原右近將監阿部伊豫守加藤出羽守等之各邸○左京大夫丹羽長國遠江守伊達宗德並進侍從○二十七日太閤政通辭准三宮及隨身兵伏優詔准三宮如故前左大臣忠熙前右大臣輔熙前內大臣實萬並奏請致仕○六年正月九日雅樂頭酒井忠顯彈正大弼宮原義周奉幕命使於京師謝大將軍襲職也○時內外牧伯懷尊王攘夷之志者以觸忤權門勢家或致仕自

先朝私記

十七

晦或見迫而代襲○三月二十三日壽萬宮生母衛門內侍局藤原紀子前中納言康親女○四月太閤政通落飾号拙山○五月前左大臣忠熙前右大臣輔熙內大臣實萬並落飾蓋以乖違幕府之意旨也○六月十二日與英吉利締條約於是諸蕃絡繹麤至神奈川海畔○先是水戶士民愾幕政之不平騷擾多年至是相起南上百千成群欲嘯訴幕府中納言慶篤遣吏平制止之衆民不得已會集長岡不敢歸鄉里○七月十日與魯西亞締條約○二十五日

關東大風雨多漂蕩田宅○二十七日有人刃殺鄂人於神奈川榎場去幕府大索之不獲○老中太田道醇資始辭職○八月二十六日與佛蘭西締條約○二十七日左兵衛督松平信和隼人正成瀨正肥傳幕府使水戶邸云前中納言齋昭雖爲國家建白以策畧不用憤之直奏所見於天朝讒誣幕府政體而懇祈綸旨惑亂人心及有幕嗣議令家人竊赴京師周旋商量假令齋昭不知之其平素用心不正之所致也終釀公武確執國家大事今且以特旨恩赦

先朝私記

十八

蟄居水戶○水戶家人備前守中山信篤安島帶刀芳根伊豫之助鴛飼吉右衛門同幸吉鮎澤伊太夫鷹司家人小林民部權少輔近衛家婢村岡街儒池內大學等或斬流或禁錮○九月朔日尾張參議茂德進中納言○令軍艦奉行筑後守水野忠德兼掌外國事務○美濃守本多忠民使日光山告將軍之代襲○十月七日山科出雲守若松木工權頭伊丹藏人山口勘解由有栖川宮家人飯田左馬高橋兵部權大輔鷹司家人三國大學一條家人入江雅樂

頭三條家人丹羽豐前守森寺因幡守其子若狹守  
富田織部久我家人春日讚岐守小普請大沼又三  
郎松平越前守家人飯泉春堂其子喜內橋本左內  
京師浪人賴三樹三郎字喜田一齋其子松庵蒲市正其餘  
市民男婦併壯餘人或斬流或監禁○十七日江戶城  
火○二十七日幕吏藤田忠藏岩木常助水戶家人  
大竹儀兵衛高松家人長谷川宗右衛門其子速水  
長門浪人吉田虎次郎薩摩家人日下部善之進阿  
部十次郎家人勝野森之助其子保三郎宇和島家

先朝私記

十九

人吉見長左衛門岡野土佐守家人寬兼三古賀謹  
一郎家人藤森恭助其他水戶士民男婦若干或斬  
流或禁錮其餘致仕退職者多○十一月幕府側用  
人水野出羽守忠寬叙從四位○十二月尊融法親  
王辭寺務退隱稱獅子王院時年三十六○紀伊參  
議茂承進中納言陸奥守松平慶邦叙正四位大膳  
大夫松平慶親叙從四位肥前守松平齋正任中將  
中務太輔有馬慶賴任少將○萬延元年正月以若  
年寄對馬守安藤信行爲老中○十九日遣淡路守

村垣範正豐前守新見正興等於亞墨利駕合衆國  
○二月三日水戶家人高橋多一郎關鉄之助等七  
人亡命去國至十八日去者接踵監吏不能遏○三  
月三日大雪寒甚先是水戶士民四十餘人竊扮商  
賈入江戶其徒赴京師者八人餘分二隊此日昧爽  
會合愛宕山皆野服襪襪埋伏郭內二所辰牌大老  
井伊掃部頭將赴城中會覘其過外櫻田松平大隅  
守卽前發銃爲號一群十七人大關和七郎森五六  
郎森山繁之助黑澤忠三郎杉山彌一郎佐野竹之

先朝私記

二十

助齋藤監物廣岡千代次郎山口辰之助蓮田市五  
郎鯉淵要人廣木松之助稻田金藏增子清三郎關  
新藏海渡先之助岡部三十郎併薩摩家人有村次  
左衛門爲十八人突起揮刀縱橫鏖戰殺傷數十人  
徑狙擊其肩輿旣而其徒九人自訴越中守細川齋  
護中務太輔脇阪安宅郎由是脇坂中務太輔鞠問  
一次併囚之細川氏於是紀伊守內藤信親傳幕命  
小田原桑名會津庄內四藩戒嚴備變又使郡山佐  
倉二家同爲之警此日井伊掃部頭上言幕府途遭



賊匪犯駕督衆逐捕擊殺一人餘悉逃亡臣亦蒙創還邸保畜云幕府遣酒井右京亮藥師寺筑前守于井伊氏與魚糖慰問創痕明日與朝鮮人參井伊家宰岡本半助相馬隼人連署而表家人之意旨請得大關以下欲詰問其緣故○七日又遣酒井右京亮于井伊氏與魚糖問患狀且云曩昔之變家人輩痛恨可想也然而罪犯之徒將從重拷治置法有日勿必勞心矣汝元勲華胄曩任重寄精誠奉上憂勤職事將軍所深依賴焉豈懷私憾遺公義哉但家人輩

先朝私記

二十一

不察大旨之所嚮或相煽動以招禍亂不可測也今且爲國家忍詬慰喻鎮撫以待後命○八日逮繫大關以下於松平桐松本多主膳正稻葉伊豫守堀丹波守田村繁次郎等之各邸○十日命內藤若狹守大久保喜右衛門豐田藤之進太田運八郎等各卒其與力同心巡邏府內檢索浮浪姦細○十八日改元萬延宣中務省遵故事而布告天下○二十一日松平伯耆守久貝因幡守池田播磨守山口丹波守駒井山城守案驗大關以下至此七次遂欲以井伊

直弼生存處犯駕科大關以下抗言刺殺大老罵詈不屈因又不窮訊○閏三月朔日大和守久世廣周復爲老中斑松平和泉守次○六日松平和泉守移病辭本城監工久世大和守代之使內藤紀伊守爲副○十七日安藤對馬守信行叙從四位○晦日大老從四位上中將掃部頭井伊直弼卒○四月三日與合衆國締條約○八日和泉守松平乘全移病罷老中○此月葡萄芽至神奈川請條約○六月老中安藤對馬守信行任侍從本多美濃守忠民爲老中

先朝私記

二十二

○神奈川互市後鄂英諸夷恣意遊涉或携兒女遊觀四郊或乞遵騎馳騁府下鄉勇土民等憤恨之遂白日挺刃傷殘其遵騎所司逮捕不能獲嘗有一土兵殺畧外人而亡夜深抵島津氏邸詐稱與平氏使閨人開門其徒數十人陸續闖入終潛匿邸內○春夏之交霖潦不歇粃麥朽腐下民困飢米價貴甚及八九月一斛米價至二百錢餘○七月十一日暴風雨阿波讚岐漂蕩瀕海之田廬○三河及近江大水琵琶湖暴漲○水戶前中納言齋昭在國疾日革中納



言慶篤乞暇馳還侍養焉。○八月越中守細川慶順進少將、掃部頭并伊直憲超進從四位少將時以爲異數。○二十六日從三位水戶前中納言德川齋昭薨年六十一。○十月九日橫濱火。○十一月親子內親王降嫁大將軍德川家茂。○二年正月十五日老中對馬守安藤信行將赴城中外國奉行織部正堀利賢家人三島三平、豐原邦之助、細谷忠齋、吉野敬助、淺野儀助、相馬千之助、內田萬之助等昧伏坂下門外揮刀直迫其肩頸、扈從家人縱橫防戰殺傷數人。先朝私記

二十三

人信行亦蒙微創云。○三月十日與葡萄芽締條約。○四月九日橫濱火。○島津和泉久光將赴江戶至播州姬路時田中河內介、平野次郎、飯居勘平、大谷雄作、青山賴母、橋本輕藏、原陸太鶴、田陶司、酒井傳次郎、荒卷三郎、中垣槍太郎、安積五郎、小河彌右衛門、田邊傳一郎、貝賀宮門、夏川惇平、廣瀨友之進、矢野勘三郎、喜入攝津川上式部、關山糺、小林將監、川上彦助、有馬新七、橋口莊助、田川謙助、山田十兵衛、柴山愛次郎、弟子丸龜助、西田直五郎、伊牟田尙平、

先朝私記

二十四

森山新五左衛門、山本四郎、加屋榮太、竹下能男、轟武兵衛、野澤勘四郎、村松省三、森玉彦、宇野賢藏、堀謙之助等要和泉訴曰、癸丑年以來幕府謬國體、親外夷、將開互市于浪華堺兵庫之三港、如此則往往變被髮左衽之俗、將奉夷狄之正朔、因先懷在京之幕吏、解縉紳之幽閉、奉鳳輦于函根、勅七道諸藩、欲亂幕府之罪、君其爲天下盡力焉。十一日和泉率其數十人而至城州伏見。○先是伏見奉行肥後守林忠文聞有此舉也、馳使京師告所司代若狹守酒井忠義、忠義愕然、即集在京之幕吏告之曰、島津和泉率草莽無賴之徒、將襲京師、宜作防禦之策、且因傳奏廣橋光成、坊城俊克等奏曰、假令草莽之徒有唱暴戾之說、莫惱宸襟、臣等指揮諸警衛之兵、不日可誅伐之。時京師物情恟恟。○十六日島津和泉入京、師在京之幕吏馳羽檄于江戶、老中相謀則託大將軍婚姻之慶賀、解尾張中納言一橋刑部卿、松平春嶽、松平容堂等之禁錮、又遣使京師、解青蓮院法親王、鷹司前關白、近衛左大臣、鷹司右大臣等之幽閉、

○五月勅島津和泉曰、方今勤王誰有如汝者、朕之有汝、猶後醍醐天皇有備後三郎、因賜名稱三郎。○二十八日夜、水戶家人有賀半次、木村新八郎、古川主馬助、小堀定吉、山崎信之助、中山定助、石井金次郎等、襲江戶高輪東禪寺外國之假館、郡山藩衛之、憤勵防戰、殺傷相當。○五月二十一日、遣正三位左衛門督重德于江戶、島津三郎從焉。○先是大膳大夫松平齋親發江戶、歸長門、途過京師、勅衛京師。○六月十二日、以左大臣藤原忠興爲關白、獅子王院

先朝私記

二十五

法親王再住青蓮院、贈故內大臣實萬右大臣、故水戶中納言齋昭、大納言。○七月十五日夜、有星流西南、不知其數幾千萬。○幽閉少將千種有文、少將岩倉具親、中務太輔富小路敬直等。○二十日夜、有人梟首九條家人島田左兵衛權大尉于四條磧、蓋同彦根藩長野主膳、讒勤王之縉紳、故草莽有志士、斬戮之也。○彗星見西北、至八月中浣不見。○老中大和守久世廣周、紀伊守內藤信忠、對馬守安藤信行等罷。○八月二十二日、左衛門督重德發江戶、先是島津

三郎發江戶、過武州生麥村時、英人馳馬侵其先驅、即命先驅之士斬之。○閏八月六日、大原重德歸京師、天皇賞其功、賜直衣、島津三郎亦賜寶刀。○二十日、島津三郎發京師歸薩摩。○土佐守松平豐範至京師、於是勅豐範同心薩長二藩、而盡力國家事務。○九月朔、繼殺文吉者於三條磧。○二十四日、梟首町奉行屬吏渡邊金三郎、森孫六、大河原十藏于栗田口、文吉以下、金三郎等亦島田左兵衛權大尉之徒也。○以戶田越前守忠恕家人間瀬和七郎叙

先朝私記

二十六

從五位、稱戶田大和守、爲御陵奉行。○十月十二日、遣中納言實養、少將公知于江戶、土佐守松平豐範亦從焉。○修理大夫島津茂久獻米一萬石。○十二月、大將軍家茂奏削掃部頭井伊直憲封十萬石、刑其家人長野主膳。○削紀伊守內藤信忠下總守間部詮實、若狹守酒井忠義等、封各一萬石、禁錮焉。大和守久世廣周對馬守安藤信行、備中守堀田正睦入道見山伯耆守松平宗秀、和泉守松平聚全、中務太輔脇坂楫水、左京大夫水野忠寬等、或禁錮、或削

封○二十三日少將肥後守松平容保爲守護職至京師○三年正月四日有人斬池内大學于大阪梟其首難波橋○五日一橋中納言德川慶喜入京小笠原圖書頭岡部駿河守戸澤勘七郎等從焉○十一日熊本家人轟武兵衛秋家人久阪玄瑞寺島忠三郎至關白左大臣忠熙第請聞攘夷之期○二十四日左大臣忠熙辭關白右大臣輔熙代之○二月勅青蓮院法親王還俗稱中川宮○阿波守松平齋祿獻馬十匹○二十二日草莽之士斬足利尊氏義先朝私記

二十七

詮義滿三將軍木像之首梟于三條磧肥後守松平容保之邏卒捕縛其黨三輪田綱一郎長澤誠平大場匡平長尾幾三郎山田綱夫諸岡節齋宮和田雄太郎建部建一郎青柳健之助斬高松起之助仙石佐太雄○肥後守松平容保募草莽之士号新徴組三月四日大將軍德川家茂至京師入二條城扈從三千餘人是日遣中納言光愛伊勢祭主大中臣教忠奉幣于大廟○七日大將軍家茂参内獻御劍一口鞍馬一匹及黄金其餘諸物品○十一日天皇

幸下上鴨廟○少將松平春嶽不告而歸國○布告天下以五月十日爲攘夷之期命諸侯伯警衛京師○四月十一日天皇幸男山廟此日將賜大將軍攘夷之節刀託病不扈從因代大將軍欲賜中納言一橋慶喜亦以病辭之○以尾張中納言慶恕爲將軍輔佐職以少將鍋島閑叟爲文武總裁職以待從酒井忠績爲大老格○二十一日大將軍家茂發京師入浪華城○二十三日大將軍巡覽攝州海岸○二十九日大將軍歸京師○一橋中納言慶喜奉鎖港先朝私記

二十八

之詔歸江戶幕府有司相議乃以書喻各國外夷曰邦内人心不好外交因奉天皇之詔將鎖港云云外夷等大憤怒之諸有司恐之百方慰喻出金再請和云中納言慶喜奏曰臣奉鎖港之聖詔東歸江戶大小有司等不肯奉詔且臣亦不察關東情實與宇内形勢事終至此進退維谷不堪恐慌敢待罪闕下伏願免臣職朝議沸騰人人罵幕吏之因循大將軍請東歸而誅拒詔之姦吏遂攘夷之成功不許○老中小笠原圖書頭疑大將軍家茂東歸之遲卒兵士數



百人駕火艦至浪華欲奪大將軍而歸江戶五月七日至伏見聞京師物情囂然逃歸浪華大將軍奏禱其官爵○九日大將軍發京師歸浪華十三日駕火艦歸江戶○十日墨夷之船一隻過長門國馬關長州士卒砲擊之是爲攘夷之先鋒○十九日夜少將姊小路公知退朝過朔平門有賊三人刃之從者金輪勇狼狽而逃去此夜少將遂卒年二十五天皇憐其忠誠贈參議中將其臣吉村右京亦有黃金之賜云○二十三日夷船又過馬關復擊之六月朔外夷

先朝私記

二十九

終大舉來襲長州之兵大敗績夷虜乘勝上陸而焚火民屋此日至五日大戰云○十六日遣監察使正親町少將公董于長州○遣小栗長門守于江戶蓋促攘夷之斷也○英夷卒軍艦八隻至薩州鹿兒島曰去年八月殺我士官于武州生麥村宜出償金三萬島津氏答曰彼無禮故我殺之豈可出償金乎二十八日曉英夷來迫此日風雨晦冥各所砲臺砲丸亂發終日苦戰夷燒我集成館我亦碎彼艦船將二人死之○朝廷賜書薩長二藩賞其戰功而幕府未

先朝私記

三十

有攘夷令諸藩有志之士至京師請天皇之親征者絡繹不絕○十九日大將軍獻米十五萬苞○二十六日夜東山高臺寺災○七月五日天皇覽會津米澤鳥取各藩軍粧練于大内肥後守松平容保有軍袍鞍馬之賜○十四日天皇大會縉紳諸侯議攘夷親征先是中山侍從忠光藤本津之助松本諡三郎吉村寅太郎池藤太吉吉田十藏那須貞吉酒井傳次郎尾崎次郎安藤嘉助安積五郎牧岡鳩平小川佐吉伴林六郎伊藤三彌穴戶彌四郎森下儀之助其子幾馬前田繁馬澁谷伊豫作尾崎儔五郎荒卷半三郎中垣槍太郎鶴田陶司保母建田所騰三郎楠見清馬岡見富次郎乾十郎大澤逸平竹林八郎等稱攘夷親征姦吏征伐之先鋒至和州五條襲殺代官鈴木源内及屬吏長谷川泰次以下五人奪彈藥糧食○十八日曉禁内發炮一聲中川宮及二條右大臣近衛左大臣德大寺内大臣等入朝自餘縉紳不許入朝守護職松平容保所司代稻葉長門守令在京諸藩之兵入衛皇宮毛利讚岐守吉川監物



益田右衛門介卒、萩藩兵將入禁內、九門晝閉、不許入衛、毛利讚岐守等直至關白忠熙、及中納言實養、第問事故、皆無知其由、此時吉川監物從中納言實美、至關白忠熙第、招集國事關係諸縉紳、而欲議事、近衛左大臣、二條右大臣、德大寺內大臣等、在禁內、下令議奏國事、關係諸員曰、左祖萩藩、信其異說、殊至攘夷親征之事、則矯飾聖詔、欲強施行之、蔑上之罪、不可容於天地焉、因先幽中納言實養于其第、禁他人出入、以中納言晃愛、大納言忠能、大納言實愛、宰

## 先朝私記

三十一

相中將公誠爲議奏、以大納言實德、中納言重胤、左大辨長順爲准議奏、○勅柳原中納言、召關白忠熙、命萩藩免界門之警衛、此夜毛利讚岐守等、誘三條中納言實美、三條西中納言奉知、東園中將基敬、東久世少將通禧、四條侍從隆壽、錦小路右馬頭賴德、士生修理大夫基修、澤主水正宜嘉、之七卿、至妙法院宮、既而奉之、發京師歸長州、○十九日、勅三條中納言實養入朝、既已不在、朝議以犯禁之罪、解七卿之官爵、○中山侍從忠光等、在和州五條、聞京師之

變相謀曰、京師形勢、變遷如此、然則不日應有幕府之征討焉、束手而就死乎、二十六日曉、中山忠光卒、死士三百人、圍和州高取城、城主植村駿河守擊退之、既而命和歌山津彥根之各藩、討之、未能奏功、更命金澤藩、協力各藩、討之、藤本津之助、松本謙三郎、吉村寅太郎、那須真吾、穴戶彌四郎、前田繁馬、林兵四郎、楠目靜馬等、死之、自餘就縛者多、而池內藏太、枚岡鳩平、大澤逸平等、從中山忠光赴長州云、學習院學士、平野次郎、奉命赴和州、將鎮撫、途聞京師之

## 先朝私記

三十二

變、欲強訴七卿之復職、萩藩之無辜、直至長州、誘澤宜嘉、募三島三平、川股才一郎、田中軍太郎、本多素行、吉村右京、長曾我部太七郎、木村愛之助、太田六右衛門、黑田與一郎、三牧藤藏、南八郎、戶原卯橘、白石廉作、小田村信一、伊藤三郎、下瀬猛彦、大川藤藏、肥田左衛門、久留新三郎、長野勝助、西村清太郎、和田小傳次、井關秀太郎、大村辰之助、多田彌太郎等、十月十一日、襲但州生野、命姬路龍野豐岡出石宮津、柏原園部峰山、田邊之各藩、征討之、南八郎等募

土民四百餘人據森塩村妙見山各藩合兵圍之土民亦倒戈而討之十月十四日南八郎久留新三郎肥田左衛門和田小傳次西村清太郎伊藤三郎白石廉作戸原卯橘下瀬猛彦井關秀三郎小田村信一長野勝助屠腹而死自餘或死或就縛而澤宜嘉不知所之○此日下令諸藩曰凡攘夷之期宜受幕府之指揮不許輕舉暴發慷慨之士聞之不堪忿怒絡繹赴長州○先是九月十三日幕府以備前守牧野忠恭再爲老中以中川宮任彈正尹稱尹宮鷹司

先朝私記

三十三

前右大臣輔熙辭關白二條右大臣齋敬代之○二十四日大阪火○二十五日一橋中納言慶喜至京師館本願寺○十二月十三日與獨逸締條約○二十四日島津修理大夫駕火船過長州下關長州之兵認爲外夷炮擊之幸而得逸○元治元年正月十五日大將軍奉勅至京師入二條城以大將軍家茂任右大臣天使就二條城拜之以松平春嶽任大藏大輔島津三郎賞積年勤勞且盡力德川氏叙從四位任少將兼大隅守列諸侯○二十一日大將軍入

朝○廿七日又入朝○天皇賞修神武天皇陵之功以大將軍叙從一位肥後守松平容保辭守護職同日爲陸軍總裁以中將松平慶永爲守護職以大和守松平直克爲總裁職以町奉行永井主水正爲大目附○兩三條家人河野能登守丹羽出羽守以兩卿歎奏之書發長州將至京師縛之伏水下獄○二十八日斬去年和州暴舉之徒安積五郎等十九人于京師獄中○二月改元元治○四月八日以陸軍總裁肥後守松平容保再爲守護職水戸中納言紀

先朝私記

世四

伊中納言並叙正三位松平大藏大輔叙正四位任宰相并伊掃部頭任中將松平越中守任少將尾張前大納言叙正二位松平阿波守松平陸奥守松平相摸守松平閑叟松平美濃守並任宰相南部美濃守有馬中務大輔並任中將藤堂大學頭松平下野守佐竹右京大夫並任中將松平容堂叙從四位任中將中川修理大夫叙從四位松平淡路守任少將○五月七日大將軍發京師入浪華城十七日駕火船歸江戶一橋中納言越前宰相尙在京師○草莽

之士宮部鼎藏等潛匿京師，命守護職所司代西奉行等之屬吏及新撰組捕之。○水戶家人林忠次郎、江幡貞七郎、斬一橋家人平岡團四郎、岡田新太郎、子三條一橋中納言旅館之門外，而林江幡等屠腹其傍而死。○萩藩去年八月已來數雖訴三條實養等及宰相父子之冤，而未有報。本藩及草莽之士，將欲清君側之奸，而歎奏天朝，乃以國老福原越後元佃爲將。六月十九日，發防州三田尻港，二十一日達浪華。二十三日，溯淀江上天王山陣寶寺，而福原越

## 先朝私記

世五

後，別卒兵士入伏，見京橋之藩邸，一橋中納言得山崎橋本伏水等之報，入朝奏之。朝議紛紛，物情恟恟。二十七日，天王山之總督森鬼太郎以鎮天龍寺屯集藩士之暴舉爲名，卒兵士三百餘人，軍粧赴天龍寺，肥後守松平容保越中守松平定敬、長門守稻葉正邦等發兵衛禁內，且飛羽檄報近畿諸藩。○七月，水戶家人武田耕雲齋田丸稻右衛門等作亂，據筑波山。○二日，一橋中納言奉勅遣大目附永井主水正戶川鋒三郎于伏水萩藩邸，曰：其藩雖有歎奏之

事故，焉用軍粧入畿乎？先速逐嵯峨山崎之兵，而後宜奏上事故。福原越後答曰：聞在京之藩士集天龍寺，而既有歎奏之議也，憂有僥倖之舉，遣森鬼太郎等而豫鎮撫之也。如軍粧赴之，則去年以來盪藩士民，決心攘夷，去太平虛飾之弊，平常務用戰鬪便利之具故也。而國司信濃曾根竹兵衛、內藤清兵衛重留作十郎等亦至天龍寺。○十一日，有人殺松代藩佐久間修理于三條木屋街。○十四日，萩藩益田右衛門介亦至山崎。○有栖川宮及一條大炊御門久

## 先朝私記

世六

我中山、庭田日野等諸縉紳連書建白，請宥七卿及毛利宰相父子之罪，救萬民塗炭之苦。而如尹官反松平容保，則不肯之，却怨惡討萩藩亂入之徒。十八日，終決討伐之議，下令伏水嵯峨山崎屯集之萩藩曰：其藩士等託言歎奏，携兵器于輦轂之下，遣永井主水正戶川鋒三郎，雖說諭之，不肯奉命，加之國司信濃、益田右衛門介等欲強奏朝廷，何無禮之甚乎？因發兵欲討伐各所屯集兵，汝等體之。十九日夜三更，福原越後、平中村九郎兵衛、熊谷勇記、吉田岩雄



福原民之助、佐分利德三郎、穴戶久之進、出羽孫四郎、粟屋又助、桂勝三郎、上田熊之丞、粟屋三助、岡村熊七、村岡伊助等、以下五百餘人、發伏水至深州、大垣藩隊長小原仁兵衛、戶田金之丞等、與鯖江藩兵、挾討之、福原越後蒙創而一軍敗績、此時國司信濃桂小五郎等、亦發天龍寺、攻中立賣門、一橋及鹿兒島、福岡等之兵、能禦不得入門、去追蛤門、擊破會津之兵、時鹿兒島藩隊長仁禮源之丞、松形清左衛門、橫擊大敗之、而萩藩那須俊平、伊東甲之助等、攻堺

先朝私記

世七

町門、鹿兒島會津桑名等之兵、擊退之、此日越中守加藤明軌、讚岐守松平賴聰、隱岐守松平勝成、加賀守大久保忠禮、信濃守眞田幸教、主膳正本田正康、隼人正成、瀨正肥、中納言一橋慶喜、肥後守松平容保、及彦根淀等各藩之兵、亦各衛大內、萩藩之兵終敗績四散、猶恐潛匿放火于市街寺院、探索之。○二十日、斬兩三條家人河村能登守、丹羽出羽守、福岡脫藩平野次郎、及和但暴舉之黨三十七人、于獄中。○先是松平參河守、松平讃岐守、藤堂和泉守、松平

相摸守、松平內藏頭、松平土佐守、松平修理大夫、松平遠江守、小笠原幸松丸、松平能登守、小出伊勢守、柳生但馬守等之兵、衛淀江之兩岸、及浪華之各所、二十日、長州之敗兵、發伏水至浪華、高松尾崎津山之兵、各有斬獲云。○二十六日、幕府命仙臺盛岡秋田各藩、同幕府兵、討筑波山賊、若年寄田沼玄蕃頭監軍、此日始發江戶。○三十日、命尾張前大納言、松平阿波守、松平讃岐守、松平美濃守、松平三河守、松平相摸守、細川越中守、有馬中務太輔、松平備前守、

先朝私記

世八

松平出羽守、松平隱岐守、立花飛彈守、松平肥前守、龜井隱岐守、板倉周防守、小笠原大膳大夫、松平安藝守、松平修理大夫、阿部主計頭、脇坂淡路守等、討防長兩國。○十月三日、幕府奏褫松平大炊頭官爵、五日賜死、以黨武田耕雲齋等也。十六日、水戶中納言、亦誅其家人大久保甚五左衛門等十餘人、穴戶家人菊池庄介等二十人。○十一月、武田耕雲齋等、脫筑波山、至京師、欲請懷夷之詔。二十一日、至信州、其徒八百餘人、諏訪松本高崎等兵、要擊之于和用



嶺殺傷相當賊徒轉路去赴越後金澤兵守福崎港賊徒不得通出降之○十二月毛利大膳父子斬益田右衛門介國司信濃福原越後三謀臣獻首級於尾張前大納言以表伏罪之意二十八日令海陸諸軍各解兵歸藩慶應元年正月四日總督尾張前大納言徹陣是日發廣島○二月幕府命彦根小濱兩藩斬武田耕雲齋等八十餘人于越前敦賀○防長兩國餘燼將再然大將軍將親征之○五月十四日與瑞西締條約○十六日大將軍發江戶閏月二十

先朝私記

世九

二日至京師入二條城二十四日發京師二十五日入浪華城○八月二十九日幕府令大阪市民免上浚河金○九月十五日大將軍發大阪翌日入京師二十三日發京師即日入浪華城○十月朔日大將軍奏請讓征夷職于一橋中納言慶喜二日大將軍又發大阪入京師○四日勅許三港外國互市○十一月七日幕府令防長征討之諸藩部署其所屬松平安藝守松平近江守井伊掃部頭及兵部少輔榊原式部太輔松平三河守松平兵部太輔松平越前

守由藝州而以松平備前守脇坂淡路守爲應援阿部主計頭松平右近將監龜井隱岐守由石州而以松平出羽守松平因幡守爲應援松平隱岐守伊達遠江守松平式部太輔松平阿波守松平讃岐守由上關而以奧平大膳大夫松平壹岐守爲應援細川越中守立花飛驒守小笠原左京大夫及近江守及幸松丸由下關而以中川修理大夫松平主殿頭爲應援松平修理大夫有馬中務太輔由萩城○幕府監察戸川鋒三郎永井主水正等在廣島召毛利大

先朝私記

四十

膳家人穴戸備後介詰問大膳父子罪狀抗辯不屈○二年五月令毛利大膳削封十萬石終身禁錮而傳家于少子興丸且戮去年暴舉之徒逐他藩流寓之士不奉命因令諸軍期六月五日攻防長兩國六月三日征長總督紀伊中納言駕火船發大阪五日至廣島○七日幕府及松山兵攻防州大島長州兵敗走十五日彦根高田兵與長兵戰湯見及玖波敗績十六日幕府松山兵敗走十九日紀伊中納言兵攻小野村擊走長兵二十五日復擊走之○七月三

日長兵攻内裏、熊本久留米小倉等之兵、擊退之。○先是拘留安戸備後介于廣島、六月二十七日老中松平伯耆守專斷歸備後介于長州、紀伊中納言聞之大怒、上書幕府辭總督、慰諭不允。○十三日長兵攻石州濱田、福山兵敗走、十八日長兵又襲濱田城、城主松平右近將監自火城而逃、二十六日長兵襲小倉城、城主小笠原左京大夫亦不能支、火城而逃。○八月二十日大將軍從一位德川家茂薨、一橋中納言德川慶喜嗣之。○以大將軍薨、令防長征討諸藩、各解兵。○十二月五日、以一橋中納言德川慶喜叙正二位、任權大納言、爲征夷大將軍、飛鳥井中納言野宮中納言就二條城拜之。○二十五日天皇崩、在位二十一年、改元者六、曰嘉永、安政、萬延、文久、元治、慶應、皇太子立、是爲今上天皇。

先朝私記

四十一

先朝私記畢

明治九年六月七日版権免許  
同 十一月刻成

著者

愛媛縣士族

赤松 渡

愛媛縣下讚岐國第四大區一小區  
高松中新町二百十一番邸

同 平民

出版人

田 爲助

同縣下同國第四大區壹小區  
高松九龜甲三拾七番邸

八戸宣民 著 鈴木吉十郎 編

# 遠野史談

明治三十六年（一九〇三） 岩手縣鉛排本



據明治三十六年（一九〇三）  
岩手縣鉛排本影印

正三位伯爵南部利恭題字  
正五位勳四等北條元利題字

田口小作序  
八戸宜民遺稿

鈴木吉十郎纂

# 遠野史談

明治三十五年十二月

遠野秀盛舍印刷

心

而

信

明治壬寅十月

伯爵南部利恭

研精

覃思

明治三十五年九月題  
五位勳等北條元利



## 遠野史談序

頃者鈴木子貞携故八戸宜民君所著遠野史談請予序之、披而覽之、上卷記阿曾沼氏南部氏之興廢、及其制度風俗、下卷錄志士偉人之紀傳、前後三四百年間之事蹟瞭然如指諸掌、其用意可謂深切周到矣、夫先輩大家、記吾鄉之事者甚少、如宇夫方廣隆之阿曾沼興廢記、齋藤竹堂之南部五世傳、下村奚疑之八戸家系傳記、僅寥寥數卷耳、且其所係或止於南北朝、或不過戰國時代、未有及維新前後之事者也、又未有祿志士偉人之紀傳者也、如此編、自中古而近古、而近世事蹟之顯著者、羅而不漏、綜而舉之彰遺賢於無聞、補逸事於將滅、令世之講史者、頗有所考據發明、小子後生、讀此編者、亦必有興起萍

## 遠野史談

勵、欲以接踵前人焉、則其發揚感化之功、亦豈鮮少哉、予夙慨吾鄉史乘之不備、欲有所纂修、而未能焉、如此編、先得吾心者、吾烏不喜而序之也、

明治壬寅臘月

運甃野史田口小作撰

凡 例

- 一 篇中間有義難通者、蓋傳寫之誤、今且依舊、不敢改訂、
- 一 西風館大學爲宇夫氏祖、佐々木政詮之後、今稱岩城氏、四戸長作之後、今稱高室氏、淺井信威之後、今稱中館氏、皆本傳所不言、今補之、
- 一 久子永豐墓碑銘、霞村詩鈔、信成堂記、東甫碑銘、佐郷章藏墓碑銘、淺井信威墓碑銘、新里重陸碑銘、枋洞溝碑銘、皆可與本傳參照者、故雖非著者所集、取以爲附錄

明治壬寅十月

鈴木吉十郎 識

遠野史談

阿曾沼氏畧系

一親綱 藤原秀郷裔食陸奥阿曾沼郡父曰廣綱親綱其第二子建保中移州之閉伊郡遠野邑

二公綱  
三公卿  
四氏綱  
五朝綱 任下  
六朝兼 野守  
七弘綱 任安  
房守

八秀氏  
九光綱 任三  
十守親 任左  
十一親卿 馬頭  
十二親廣 稱孫  
十三廣鄉 稱孫  
十四廣長 稱孫三郎慶長六年亡  
廣吉

遠野史談

南部氏畧系

一實長 清和源氏南部光行三男居甲斐波木井鄉  
二實繼  
三長繼  
四師行 曆應元年戰死于阿部野贈正五位  
五政長  
六政政 信政  
政持 新田氏祖  
信助 中館氏祖  
七信光

八政光 明德四年春移陸奥糠部郡八戸邑  
九長經 政慶七戸氏祖  
十光經  
十一長安 光清 田中氏祖  
十二守清 信治 澤里氏祖  
十三政經 奉勅討綱崎氏始稱八戸氏

野遠史談

十四信長  
十五治義  
十六義繼  
十七勝義  
十八政榮  
十九直榮  
二十直政  
廿一清心尼 直政  
廿二直榮 寬永四年移陸奥閉伊郡遠野邑

廿三義長 義也 附馬牛八戸氏祖  
廿四義論  
廿五利哉  
廿六信有  
廿七信彦  
廿八義顏  
廿九怡顏  
三十義堯 復南部氏

女子

卅一義茂  
卅二濟賢 富治  
卅三義敦  
卅四行義 正五位  
卅五義信 男爵  
義仁  
女子  
義秀  
女子

遠野史談

目次

第一篇

阿曾沼氏

南部氏

制度及風俗

第二篇

西風館大學

阿曾沼玄淨

大槌孫八郎

松崎大學

新田長政

中館吉久

廣田太郎左衛門

及川恒次

宇夫方廣續

久子永豐

田口孝完

江田重成

工藤將芳

佐々木政詮

佐郷谷恕伯

和田元庵

四戸長作

米内眞豊

四戸政之

高橋重中

米内多藏

遠野史談

淺井信威

僧無盡

僧某

僧日信

附錄

久子永豐墓碑銘

霞村詩鈔

信成堂記

東甫碑銘

佐郷章藏碑銘

淺井信威碑銘

新里重陸碑銘

枋洞溝碑銘



# 遠野史談卷之上

八戸宜民 著

## 第一篇

阿曾沼廣綱藤原秀鄉之裔也、文治中、右大將源賴朝討藤原泰衡、廣綱從軍有功、賴朝加封以遠野十二鄉、廣綱乃使次子廣親居之、子孫相繼至朝綱、朝綱朝京師、以其子朝兼幼、委事執政白懸某、稱左衛門尉白懸專橫極其暴刻、士民愁怨、會國司源顯家、以南部師行等爲巡檢使、巡察國中、師行來橫田城、朝兼乃陳白懸專橫狀、請除之、師行告國司誅之、初廣綱城護摩堂山、曰橫田城、以居廣親、至廣鄉、更城鍋倉山

## 遠野史談

遷焉、當此時、織田信長爲政近畿、威名振天下、諸侯望風朝聘、相繼、廣鄉亦遣間使贈白鷹、信長與書謝之、已而信長薨、其臣羽柴秀吉代爲政、廣鄉以謂匹夫豈久握天下之權者乎、因不通使、聘秀吉怒、將收其封、因蒲生氏救援、僅得附庸於南部氏、廣鄉慙憤、屢失禮於南部氏而沒、子廣長嗣、亦不禮南部氏、廣長族有鱗澤廣勝者、與廣長有隙、而常欲得其封之半、密通南部信直、其臣淺沼刑部固諫之、廣勝怒奪其祿、邑民數爭境界、獄訟不已、蓋廣勝嫉之也、廣長繫廣勝獄、且禱其祿、廣勝恨之、謂信直曰、廣長暴戾、濫虐臣民、采邑祖先之所傳也、迨臣之身、失寸地、亦臣之耻也、願論廣長致之、信直遣櫻庭光康、謂廣長曰、聞邊民屢爭鬭事、聞幕府、必得重譴、不如割封之半、以與廣勝、廣長怒曰、我聞廣勝密結南部氏、安知非矯

非爲理、以訟之乎、廣勝失禮於我者數矣、我常寬容之、而謂割封與之何哉、光康不能詰而還、路伏起、僅脫身至三戸、言之信直、信直亦怒曰、是易我也、我當請幕府誅豎子也、

會上杉景勝叛、德川家康令近憐諸侯赴攻、廣長亦屬南部利直從役、利直信直子也、廣長乃命先鋒廣勝、廣勝辭以疾、利直以封內賊起、先歸、廣勝恐誅、迎之花卷、說以舉遠野歸其有、利直大悅、啗以厚賞、廣勝還誘留守上野丹波平清水駿河、二人贊之、乃大會將士、謂曰、南部氏積怒於我、諸君之所共知也、今時公不在、將見討滅、我衆寡不敵、不如降焉、以全妻子也、衆皆應之、於是三人相謀、將弑廣長妻兒、送其元三戸、監致之上野氏、熊谷安左衛門世田米氏臣、嘗從夫人來者也、適臥疾在葺、聞之、蹶起、提刀踰垣、抵綾織、上野氏僕出拒、遂爲其所擊殺、已

## 遠野史談

而廣長還抵人首、聞封內有變、顧執政松崎監物光興寺親負曰、我嚮不誅廣勝、而委後事於丹波駿河、以至此、是吾命窮之時也、我當自盡、汝等斬吾頭、送南部氏、以圖後榮、二人流涕諫曰、徒死何益、不知赴氣仙爲後圖、廣長從之、悉散去從士、獨與松崎等數人、適倚世田米氏、廣長自世田米起兵返攻、廣勝逆擊之原田、我軍設伏伴北、廣勝追擊、陷伏、大敗、脫身走落澤中、爲追兵所獲、後廣長屢伐遠野、不獲志、終事伊達氏、利直已滅阿曾沼氏、報之幕府、且謝擅伐之罪、幕府乃加賜遠野利直、利直已得遠野、追賞廣勝功、加祿其子忠右衛門、爲二千石、丹波駿河等加祿各有差、養族女妻忠右、賜名二人、丹波稱右近、駿河稱平右衛門、偕爲遠野城、代知其政、

忠右衛門有侍女曰阿鍋、有殊色、忠右絕愛之、其妻妬之、憤恨而死、及娶南部氏、寵阿鍋如故、而不顧南部氏、南部氏絕婚歸父家、利直怒曰、豎子忘恩背義、敢蔑吾女、將召罪之、忠右恐誅奔江戸、利直命右近等搜捕、賜之自盡、併殺其子千代松、千代松阿鍋所生、阿鍋悲慟、投水而死、

平右衛門爲騎將、直江戸藩邸、北十左衛門者其女婿也、嘗有怨南部氏、將往大坂、屬豐臣氏、過藩邸、誘平右、平右亦心陰懷缺望、即許之、然以資乏未發也、已而期滿還三戸、利直聞其與十左通謀、召詰之、竟首服、即收祿賜死、平右死後、右近獨擅政、右近有四女、皆先父死、而右近亦疽發頸而死、  
二人已死、利直乃以毛馬內某<sup>稱三左</sup>、槻館某<sup>稱左</sup>爲城代、庶民不服其政、輒犯法殺人、放火奪財、二人不能禁、利直患之、以

### 遠野史談

三

此地邊境遠於治所、非城代所得制也、乃移其族八戸直榮鎮撫之、實寬永四年二月也、

#### 南部氏

南部直榮、其先曰實長、南部光行第三子也、世居甲斐波木井、其曾孫師行、建武中、從源顯家勤王、戰死於阿部野、其後政長、信政、信光三世相繼、以至政光、朝廷所賜、刀鎧詔勅、今現傳家、及南北講和、徙居八戸、經十四世而至直榮云、

直榮之自八戸徙遠野也、藩主利直、特許以檀斷死罪、而其家宰岡前宮內、施爲得宜、暴民斂手、終以無事、

藩主利直從將軍秀忠、朝京師、叙四品、使直榮獻物謝焉、直榮詣紫宸殿上階、主殿司問曰、汝誰氏使、直榮對曰、臣南部利直之使也、曰南部氏系出於何、對曰、姓源、武田氏之庶流也、曰然

則猶上一階而可、畢事而還、利直稱其敏、

藩主重直從將軍家光、朝京師、直榮復從焉、大駕至大堰川、鹵簿纒達岸、而水溢橋落、渡將絕焉、重直命直榮試其淺深、直榮與從士工藤某<sup>稱四郎</sup>、騎渡、重直觀其還、促從臣渡、從駕諸藩皆效之、於是直榮名聞遠近、

岡前宮內有恨小笠原某<sup>稱三</sup>、矯命殺之、直榮誅宮內、初直榮之在京師也、山尾某失禮、爲小笠原所斬辱、山尾告之宮內、當時家宰例兼輕卒長、山尾蓋宮內之部下也、宮內愠曰、彼何者敢辱我部下、吾必爲汝報此怨、汝慎勿形諸辭色、已而直榮從重直還盛岡、即日悉還從行士於遠野、宮內稱疾、故後一日而返、乃謂小笠原曰、主公有命、賜汝死、如其罪汝自知焉、汝速自殺、小笠原乃抵家、宰松崎大學舍請罪、大學曰、吾不知也、無故

### 遠野史談

四

賜死、甚可怪矣、我問之宮內、宮內不知、則請主公、子勿死以待後命、宮內恐事露、即率從士數十人、圍小笠原舍、吶喊趣死、小笠原已去、匿馬場某宅、宮內探知之、遣是川某<sup>稱孫右</sup>、說殺之、宮內已矯殺小笠原、恐誅奔東禪寺、入庫自衛、因宮內之薦得祿仕者、及川某等七八人往、跡焉、直榮聞之大怒、遣監察長崎某<sup>稱藤</sup>、誅宮內、工藤與四郎者在遣中、謂長崎曰、在軍中者、不獨宮內一人、誅之甚難、僕請先入說之、君等在寺中備不虞、乃脫佩刀入焉、謂宮內曰、君盡速歸待公命、君勳無比、今長崎氏來迎者、或宥死亦未可知也、又謂及川等曰、諸君皆新賜祿者、何怨主公之有、而事至此者、無乃黨岡前氏、欲共死生乎、皆曰、豈敢黨岡前氏哉、但臣等賜祿雖謂君恩、抑岡前氏之藉、故從焉耳、當歸死有司、各出庫還、橫田於是長崎入傳命宮內、檻致

橫田、賜死沒祿、乃令及川等曰、汝等不失義於宮內、可嘉尙也、今後國家有難、亦宜如此、赦而不問、皆感泣思死事、

宮內之園小笠原也、木村某<sup>稱藤大郎</sup>宅、在其近隣、誤爲失火出見、

內田某<sup>稱左平治</sup>者來斬之、宮內從士亂斫內田、內田墜溝中、呼曰

奉命放殺也、於是衆漸止、及川某<sup>稱善右衛門</sup>往內田氏謝其過、且

曰、傷肩者我也、子死願告我、我亦可屠腹從於泉下、人稱之、

宮內義父曰、備前、備前有一兒、曰安助、潛置岡前村、後直榮聞

之、舉爲代官、管左比內宮守二村事、安助請改氏岡、後曰岡野、

及宮內伏誅、欲與祿百石爲其後、安助辭曰、臣不願也、岡前氏

祿本三百五十石也、宮內有罪沒祿、祖先遺憾可想矣、從公命

恐非祖意、臣故不願也、後又欲與二百石、復辭不受、

南部氏之族有新田氏、世祿二千石、傳至政廣、政廣二子政榮

遠野史談

五

義實、政榮出繼宗家、義實死而無嗣、有三女皆幼、直榮欲待其長而求佳婿、佞托家事其妻、而支族臣隸、各樹黨相爭、雖屢禁之不止、直榮慮遂危家、削其千五百石、諸老皆諫曰、新田氏之於公家、猶公家之於宗藩、曩國岩公<sup>直</sup>之沒而無嗣、藩主不沒祿、使清心尼公<sup>直</sup>主信直姪<sup>直姪</sup>承後、以待其女長、主公竟來繼、且自新田氏入紹公家者已三世矣、其親昵固非他家比也、主公願熟慮之、直榮曰、否、新田之於我家、與我家之於宗藩不同矣、夫吾祖日圓公<sup>實</sup>事鎌倉氏、開封於波木井、旗峰公<sup>師</sup>以來、世輸忠於南朝、采邑則其所賜也、非宗藩所領、然常不失嫡庶義、相敬相親、救難分患、聖山公<sup>政</sup>時有小田原之役、適國內叛者四起、藩主乃托內政於公而往、遂爲盛岡附庸、以及圓岩公、至尼公時、始列爲臣、是宗藩所以不能收我采邑也、如新田則不

然、其祖政持嘗賜邑於南朝矣、然及其裔孫親光從建英公<sup>政</sup>徒八戶、則我家分地給之、豈與我家於宗藩、可同日而語哉、今

新移遠野、邑民未服、時變不測、而族隸相爭、女主不能制、是其所以有此令也、諸老悅服、後五年、妻福田出羽<sup>後稱小十郎</sup>、以長女、

以存其祀、出羽政廣姪也、

舊制邑主遇家士、一以新故爲別、又不問祿之多寡、與職之高卑、是以憤怨辭祿而去者間有之、直榮欲改之、然謙讓不暇而

沒、義長嗣立、首破此格、曰是先人之遺志也、如不服焉者、須致

祿而去也、衆謹奉命、其他大釐革弊政、政蹟粲然、有可觀云、義

長沈毅好學、不以貴加人、人畏而愛之、監察有新直舍者、輒退

左右與語、人々自戒、不敢爲非、嘗侍世子行信觀舞樂、終日危

座、無怠容、重信曰、吾家寶也、

遠野史談

六

義長請藩主重信、檢采邑田、割剩田二千石、與庶弟義也、以爲支家是爲吾家始祖、亦直榮之遺志也、義長沒、其子義論甫七歲、嗣立、爲人溫醇和易、人有望於後來、無何患痘而沒、於是藩主重信使山田利載繼其後、利載利仲子、而重信從姪也、正德二年、沒無嗣、重信又令南部信有承其後、信有與信子、於重信爲庶孫、享保二十年沒、子信彥嗣、信彥多病不堪劇務、讓家於支族八戶義書子義顏而老、子孫相繼以至濟賢、當是時、王室中興、悉撤藩爲縣、以江刺、閉伊、氣仙、鹿角等四郡、爲江刺縣、以橫田爲其治所、後廢之、併岩手縣、而置西南閉伊郡治焉、鄉人相議、建一祠於城趾、以祭師行以下五世勤王事者、曰鍋

倉社、車駕嘗東巡、賞忠孝旌節義、至盛岡召濟賢孫行義、賜祀資若干金、

### 制度

元祿以前、戰國之餘習猶存、士死無子、有之不稱其器、或悉沒祿、或減其半、雖微者有才器、則與祿擢用、

士民犯罪者、有司召之、多不應命、於是乎有放殺焉、俗曰波奈志字知

有掩捕焉、俗曰遠志命劍客途上逢犯者、即拔刀斬之、名曰放殺、命捕手就犯者家、逮捕而致之、名曰掩捕、其應命來者、拷掠極酷、叫聲徹外、

士至老耄、不許致仕、蓋慮其子犯法沒祿、爲親憂也、子不論嫡庶、不許私加冠、蓋以取爲近侍也、故或有被刺猶屬仕藉者、或有及壯不加冠者、

## 遠野史談

七

### 風俗

遠野爲形便地、近鄉賈人來通有無、便商賈者月六回、名曰市日、無賴之徒混入爭鬪、死傷不絕、而俗尊信神佛、及自懸專橫、賈人不至、邑里蕭條、南部師行誅白懸、而繕屋監暴、課稅外商、以修堂祠、蓋皆從民望也、

士人家屋唯蔽風雨而已、垂簾代戶、不施牀、敷以菅、莖不緣、而專講武技、捆履秣馬、出野耕耨、以習勞務、堪風雨寒暑、

婦女出外、額紅巾、尙鞋、帶幅二寸、黑笠、戴頭、紫鞞、穿足、其夫死有父母若子女者、不斷髮、蓋恐其失禮、父母視凶子女也、遇百日、則粧飾如舊、以待其成立、觀貧家孀婦、或再歸他家、則指彈誹之、元祿以後、此風漸變、夫死即斷髮、投棺未一年、施髻涅齒、復醮他家、至於覲無愧色、

教育不行、少讀書講道者、不過托兒童於僧侶、僅知文字、南部義長好學、祿津輕人江田義宗、稱勸助教授子弟、閭里聞絃誦聲云、

## 遠野史談

八

## 遠野史談卷之上終



# 遠野史談卷之下

八戸宜民 著

## 第二篇

孔子曰、十室之邑、必有忠信如丘者、夫遠野雖壤地褊小、忠信才德士、亦豈爲乏哉、余叙阿曾沼南部二氏事、可得傳於後者二十五人、忠君殉國者有之、修學育才者有之、膽略超衆者、盡力利民者亦有之、各以類分之、以附于後、

### 西風館大學

西風館大學、父曰孫四郎、居西風館、嘗爲仇人所襲、與二子俱死、大學時二歲、其母懷之、奔山田倚父家、大學年已長、有復歸之志、往寓上野氏、上野丹波黨、鱗澤廣勝、而圖阿曾沼氏、丹波

## 遠野史談

九

監致廣長夫人母子、使大學弒之、大學流涕曰、我寓貴家者、豈爲保生哉、唯冀因推薦事公耳、雖未得見、心已許矣、則君臣也、又君夫人、我所不忍、君若怒之、万死亦不辭也、丹波曰、子純臣也、今聞子言、悔吾過矣、雖然、爲此謀者不獨我、我莫復如之何、子必目我爲賊、請斬吾頭、大學曰、洵如貴命、寸裂猶有恨、然殺君賊猶衆、故不敢、唯願君說賊、使過迎公、若不能然、則速殺我、各爭死不止、大學曰、君果悔之、則與君夫人及公子於我、我致之世田米氏、丹波許諾、即衷甲奉夫人赴氣仙、大學已致夫人、世田米氏、還橫田潛市中、以察動靜、已而廣長自最上還、將入遠野、廣勝等設伏待之、大學乃抵人首、見廣長曰、臣西風館孫四郎第三子大學也、丹波與廣勝等謀不良、向將弒君夫人、臣纔乞而得免、今路有伏、行危矣、恐主公未悉事情、故來告焉、廣

長曰、汝純忠可嘉、尙然初我不知汝、及今見汝、可謂我與汝俱不幸矣、將自殺、大學等諫止之、從復赴氣仙、不知所終、

### 阿曾沼玄淨

阿曾沼玄淨、廣長族也、有氣概、鱗澤廣勝之謀反、大會將士於城中、說以禍福、將士皆黨之、獨玄淨瞋目視廣勝等、叱曰、咄、見利忘義、豈人臣之所爲乎、吾死不與汝輩投袂起、還其邑、附馬牛、據館以待賊、賊又贈書誘降之、玄淨大怒、寸裂其書、截使者耳鼻而放之、賊怒來攻、玄淨力戰數十合、刀折矢竭、遂爲賊所縱殺、其臣大野某、稱源左衛門收其遺骨、赴高野山修冥福云、

### 大槌孫八郎

大槌孫八郎、亦阿曾沼氏族也、世領大槌家富士衆、鱗澤廣勝之圖難、特貽書勸黨已、孫八郎大怒、立斬使者、傳檄將士、戮力

## 遠野史談

十

討賊、而莫有應者、因欲與廣長偕存亡、以待其還、已而聞遠野軍與北閉伊軍、海陸來攻、以謂孤軍難支、徒死無益、不若潛匿待時也、即乘夜奔唐丹、匿所知民家、無幾而歿、

### 松崎大學

松崎大學、初稱比卷澤市兵衛、窪田人、來八戸事南部直榮、爲家宰、從移遠野藩、主某嘗臨直榮邸、執政石井伊賀從焉、酒酣拔刀睥睨、一座皆怖、匿、大學適直在邸內、聞之、即入、謂伊賀曰、君欲何爲、速投刀焉、伊賀范然、進奪其刀、與送之其家、人稱其膽勇、

### 新田長政

新田長政、南部氏之族也、邑主義論、嘗遣長政于藩邸、代賀藩主行信嗣立、行信設舞樂祝之、使使臣陪觀焉、長政素善監察

某某私告之長政、且曰、子等當列堂下也、長政慨然答曰、僕代義論來者、即義論也、堂下之觀、死不與焉、行信聞之大怒、若不肯將處法焉、語之其父重信、重信曰、不可、汝何過之甚、夫長政雖陪臣、而有祿五百石、堂下之觀、豈不愧焉乎、宜於堂上行信從之、

#### 中館吉久

稱忠右衛門 有才幹、嘗爲家宰、例擇民爲僕、檢其強弱、別爲三等、獨租各有差、是以歲計日減、吉久患之、新課金於民、名曰僕金、取僕時定法給之、以易舊制、義長之爲嫡子、吉久管其金、數年之後、大增殖、至繕兵製器、八幡祠初在宮代、直榮命吉久相地近郊遷之、吉久以驚岡山麓、士女雜沓、不害稼穡、遂遷焉、其處事約此類也、

### 遠野史談

#### 廣田太郎左衛門

廣田太郎左衛門、最上人、忠實有才幹、直榮祿之、太郎左衛門盛岡邸、時早秋矣、一朝大霜、即稱有公事、驅馬適郡山、就一米店問米價、悉數購之、是歲米價漸騰貴、竟至無沽者、而南部氏獨得不乏者、實太郎左之力也、

#### 及川恒次

及川恒次稱源次郎、系出於源三位賴政、賴政孫成綱、爲但馬目代、食及川莊、因氏焉、成綱十三世孫光政、嘉吉中黨結城氏朝戰死、光政孫光村、仕陸奥葛西氏、居磐井郡東山、傳至恒吉、始屬南部氏、移閉伊郡小友村、傳至恒吉孫恒次、小友村西南曰外山、接江刺氣仙二郡、實爲山間別境、地久荒蕪、未有居民也、恒次慨然有開墾之志、而憂無資金、因謀發金坑獲其利以

資業、遂相地採掘、行之數年、所得果多、名取澤鑛山是也、於是始從事開墾、起工於寬文之初、至十一年竣、得田畝百町、民戶三十、遠野邑主南部直榮賞其功、賜新田二十石、恒次之子恒宗、稱利左衛門、享保中、移遠野、因邑主賜宅地也、恒宗四世孫恒固、稱五右衛門、亦用力開墾、以致家產豐富、因屢獻金邑主、至數千貫、邑主嘉之、賜祿五十餘石、併前所食二十石、而七十餘石、傳之子孫云、

#### 宇夫方廣續

宇夫方廣續稱長右衛門、遠野邑有猿石川、板橋架焉、架橋中央必用砥柱、而每河水漲溢、往々漂去、因渡船以通人行者年已久矣、廣續憂之、百方考察、遂造一橋、中央不用砥柱、捐資起工、數月而成、自此無復漂去之患、一鄉便之、廣續曾孫曰廣隆、

### 遠野史談

三

稱平太夫、又宗右衛門、幼時從處士江田勘助學、善詩文和歌、

旁嗜武技、兵法砲術弓馬刀槍皆極其蘊奧矣、著書頗多有神道、數掃十卷、伊達四代記三卷、遠野故事記七卷、遠野舊事記一卷、阿曾沼與廢記二卷、八戶家傳記二十五卷、

#### 久子永豐

久子永豐字景叔、號翠峰、通稱小五郎、江戶人、幼從父母往於窪田、及長婦事幕府、蓋父命也、而受業榊原龍樹龜田颯齊門、永豐爲人、儼磊落、如無檢束、而用力學問事業、淬勵不已、文、化中、致仕漫遊諸州、經仙臺來遠野、下帷授徒、爾後鄉學之振起、實其力也、永豐又觀稅政病民、如已推擠溝壑、非救援之則不已、當是時、英艦出沒於東海、而諸藩大約侈靡疲弊、永豐慨然、欲上書當路切論、以強內制外、遂不得志、故放浪於山嶺水

涯以自遺常勵子弟曰人之在於世除老幼疾病則不過三四十  
年碌々徒過豈不自愧乎苟有益於世則當奮踊爲之雖死不  
顧也鄉人尊之曰翠峰先生

田口孝完

田口孝完字某號梅雪通稱實後改主一郎本性小笠原氏出  
繼田口氏田口氏之祖曰藤好稱彌右衛門延寶中以儒學仕  
南部大膳太夫重信頗見親近有四子曰藤賢藤貞藤舊藤行  
藤舊稱新六又太郎左衛門仕山田利哉利哉之父曰利仲於  
重信爲甥利哉出繼遠野南部氏藤舊從往遠野子孫自此臣  
隸遠野邑主孝完自幼好學師事久子小五郎長而仕邑主南  
部濟賢果進顯職爲用人兼町奉行而常以設鄉養育人才爲  
已任與江田重威及季弟工藤將芳謀勸邑主建之名曰信成

遠野史談

主

堂孝完以原職兼教授暇勉從事自此一鄉之子弟彬彬嚮學  
矣孝完才氣不如重威學藝不如將芳而宿德令望冠冕一時  
者以其慎重簡默剛正自持利害不動其心也明治二年二月  
歿年六十

江田重威

江田重威字子固號霞村通稱大之進後改泉系出於江田行  
義重威幼受句讀於唯是某某日是麟兒也後執費久子小五  
郎以謂培塿非松柏地南遊入安積良齊塾苦學三年業成歸  
鄉開塾授徒爲信成堂教授登參政侍讀嗣子義敦後爲江刺  
縣史生兼修道館教頭又爲宣教師巡教管内諄々不倦聽者  
皆感嘆焉晚年罹病不食者二旬雖形體頗衰志氣未嘗少挫  
時年七十力病聞賀宴自執筆書詩歌各一首先沒蓋三日矣

重威慷慨尙氣節談及忠孝事潸然淚下藩主嘗治兵茨島事  
畢重威飲一酒樓鄰房有五六客大誹行軍無法重威大怒即  
入叱曰咄痴漢何知是武田氏遺法也何處不稱法請聞之客  
不能答露刃威嚇重威亦拔刀與俱闖街上石中額氣絕蘇而  
復起以此座見沒祿後以其半給其子謹平重威之在良齊門  
與當時名士吉田松陰安積五郎等交居常說勤王所作詩文  
亦皆寓其意一夕隱几眠同寮戲設位炷香如奠死者滿堂哄  
然愕覺賦詩解嘲良齊聞之知其偉器臨歸送之以詩曰東南  
欲盡南部山山高水長蛟龍蟠千年神氣久鬱積民俗敦樸古  
風存江生莫乃鐘其秀翻巾僊鶴翔天門軀幹俊偉胸磊落舉  
杯長嘯睨乾坤自言祖先非寒族堂々南朝烈士孫世平雄武  
無所用寶刀空藏舊血痕便欲學文樹赤幟遡洄遙尋洙泗源

遠野史談

主

願子歸去振木鐸長使斯道行雄藩及尊攘說起勤王諸氏頻  
寄書促起至有老兄不來此事難開緒願來助一臂語清川八  
郎等之舉兵自來勸之適有足疾不果以爲終生遺憾重威最  
長於詩音調風格一效元遺山及老菱笠逐風月狀宛如漁翁  
云

工藤將芳

工藤將芳字季蘭幼字子々松後稱謹之助又謹造號春亭本  
性小笠原氏出繼工藤氏爲人寬厚易直自幼好學師事久子  
小五郎長而仕遠野邑主南部濟賢自近侍歷任目付用人眷  
遇頗厚嘗與仲兄田口孝完及江田重威謀勸邑主建鄉塾信  
成堂是也將芳以原職兼教授功勞居多曾遊江戶就安積良  
齊受業後抵京師入岡田月洲之門而其所交遊長州人小倉

乾作、小國嵩陽、本藩人、江緒通高等、皆有於時者也、將芳多才藝、善詩文、巧書畫、雖身居劇職、有暇則弄翰墨、風流自遺、將芳無男、養孝完二子、鼎爲嗣、鼎有氣概、曾遊于江戶、師鹽谷宕陰、又入聖堂爲經義、係其所交、佐賀人福島九成、關義臣等才俊之士、頗多、業成歸鄉、爲信成堂教官、人稱其能繼箕裘云、

#### 佐々木政詮

佐々木政詮、號東甫、世爲市長、資性忠實、廉謹、常語人曰、人不可不學、然學焉而不入室、則不如初不學、故其所學、悉極精矣、嘗受天文學於戶石某、爲起一樓於屋後、有暇則登此、研究積年、遂遊京師、詣陰陽寮、益極其蘊奧、又潛心於地理學、陸奧壺村、有古碑、題曰日本中央、人莫解其意、政詮獨以謂是或併算夷地、歟、因考度數、自作縮圖、檢之、則果中央矣、政詮爲市長十

### 遠野史談

五

年、嘗輯錄其所管之時事、及所見聞之利病、爲一冊子、以便後人、邑主優賞、許著士服、蓋特典也、

#### 佐郷谷恕伯

佐郷谷恕伯、又稱恕助、系出於佐々木四郎高綱、高綱之後、有仕佐竹侯者、自此世居秋田、傳至源四郎綱勝、綱勝有故、脫藩遊歷四方、寬永中來盛岡、因臣遠野邑主南部直榮、綱勝卒、子綱三嗣、有六子、長曰甚五、右衛門承家、三曰文左衛門、分祿別成家、其子道仲始業醫、子孫世襲、傳至恕伯、恕伯幼跌宕不羈、長而慧敏、慨然有繼箕裘之志、以謂欲修醫學、則不可先修理學、欲修理學、則不可先修蘭學也、當時外國語之行于本邦者、惟有蘭學焉耳、英佛獨魯等語學、未全開也、於是負笈遊長崎、就某氏修蘭學、尋還大坂、學醫緒方弘庵、其在他方七年、自天

保辛丑、至弘化丁未、業成歸國、居盛岡、名聲噴々、當此時、醫家多守漢法、而少知洋法者、如種痘術、亦無講之者、獨恕伯唱道西泰醫方、最用力種痘法、所濟救甚多、

#### 和田元庵

和田元庵、家世業醫、至祖父元弘、漸著、父元庸、遊京師、學吉益氏、特精傷寒論、其所著有精義外傳、及三世醫談、元庵夙承緒、又親炙吉益氏、父祖之意、與已所新得、斟酌施治、病者立瘥、名聲噪閭里、

#### 四戸長作

四戸長作、栃內村人、自幼好稼穡、墾田數頃、力耕自給、後來橫田村、構矮屋於荒野、以庸春爲業、有暇則徘徊市中、拾撫木屑塵芥、布之猿石河岸、盛以砂礫、蓋欲築堤防水、以得沃土也、而

### 遠野史談

六

河水暴溢、驟壞之、長作悵悵久之、謂邑主、禁河壩爲漁獵、駢植樹木、舊築九年、堤始成、墾田十餘町、籍上邑主、邑主嘉之、悉與其所墾田、擅爲家士、長作爲人豪放嗜酒、酒酣露体大笑、然儉朴律身、及爲士人、猶處舊蘆而晏如也、

#### 米內眞豐

米內眞豐、爲橫田村戶長、嘗聞會家堂前地肥沃、得引水則爲良田矣、然其地勢稍高、不便灌溉、時際維新、後工業大進、乃墾某山址、以引來內川、經營數年、怨詭紛起、皆最眞豐奮贊其議者、僅村上某、遊田某等七人、然眞豐不少屈撓、捐資頃產、竟能成之、此溝長二千四百間、溉田三十餘町、雖大旱不涸、一鄉便之、

#### 四戸政之



四戶政之稱三平、後改弓馬、本性鶴野氏、幼慄悍、而性最好馬、四戶仁喜太夫、以善御仕邑主南部氏、一日見政之、奇其爲人、遂養爲己子、政之自此就義父學、其業大進、未弱冠、已極其蘊奧矣、既而遊江戶、又抵京師、所到摺紳列侯、爭聘覽其技、山階官亦嘗召見、賜書及物褒之、明治二年、俄國皇子亞勒亞斯來朝、朝廷饗之延遼館、特命政之、御馬供覽、其在江戶、騎登芝愛宕山、又嘗過陸奧伊達郡、騎登丸山、政之爲人、隆準廣額、快活有俠氣、諸般武技、無不兼修、而御馬最精妙、雖囑蹠不可近者、御之則縱橫徐疾、無不如意、政之舊藩時、擢列本藩仕籍、人以爲異數矣、維新後、復官兵部省、又以其術見採用云、

高橋重中

高橋重中稱千助、夙好兵學、初學福田諸領、諸領小幡流之師

### 遠野史談

七

也、後遊江戶、學市川熊男、熊男長沼流之師也、居數年、業成歸鄉、以其所得授徒、邑主南部濟賢嘉之、增祿若干石、

米內多藏

米內多藏、是川某次子、出繼米內氏、幼好武、受槍術於祖父祐平、祐平傳寶藏院流、善用十字槍者也、多藏又師事青木俊助、已而遊東京、入勝某門、其技大進、業成還鄉授徒、鄉人知講此技者、實多藏之力也、

淺井信威

淺井重威字畏鄉、稱猪太郎、信慈之子也、性敏慧、好學、幼遊江、緒岡二氏門、嶄然露頭角、維新之初、入慶應義塾、修洋學、嘗曰、我國四邊皆海、一旦有緩急、何以應敵、鑄砲造艦、洵方今之急務也、乃赴橫須賀、入造船局、奮就其業、嘗應局試、漢洋二學、應

答如流、試者大驚、舉爲第一、明治六年、某月罹病、沒於東京客舍、人皆惜之、

僧無盡

僧無盡、京師人、或曰附馬牛村人也、嘗航之明爲僧、歸師事妙應、業成徧歷諸國、抵附馬牛村、創一寺、曰東禪寺、高野山釋迦院住僧、一夕夢高祖空海語、已曰、吾在世時、手寫般若理趣經、不果而沒、今無盡者在東禪寺、汝速使彼繼成焉、於是住僧遣人招請無盡、夢適合、乃許之、後村上希嘗聞其名、賜以大師號、後南部守行爲國司、討大槌賊、中流矢歿、遺命葬東禪寺、無盡爲導師云、

僧某

僧某者、鹿角郡人、花輪內膳之季子也、來遠野住西來寺、幼時

### 遠野史談

六

與彥六郎親善、彥六郎者藩主利直幸內膳女所生也、其生與某同甲子、後藩主重直卒、無嗣、彥六郎入承其後、是爲重信、重信已繼南部氏、憶舊誼、召見某、欲致之盛岡、某辭曰、臣不閑禮節、不願也、欲與祿、又辭曰、是招賊也、臣不願也、友村民酌濁醪起居適意、則臣之至樂也、乃辭歸、稱病不復出、

僧日信

僧日信、初稱武次郎、杉岡政常次子、出冒新田氏、性穎異、幼時每與群兒嬉戲、自執軍麾指揮、宛如老兵法者、稍長、受學於澤里哲齊、兼通武技、然有酒癖、醉輒罵人、故獲罪見禁錮、一日慨然曰、大丈夫何爵々宅於此哉、吾誓成一業、以償前過矣、負笈出鄉、賣卜以充路資、數年之間、足跡遍海內、卒登身延山、巡覽果日、心竊欽羨不能去、決意爲僧、留學數年、著安國論注解、既

而自謂、吾鄉未聞有此宗、吾歸弘之、則足以償前過矣、而事不果行、心怏々不樂、又去西遊、至京師、住征光寺、爲大僧正、特受山階宮眷顧、及尊攘說起、奉其密旨、探奧州諸藩動靜、於是篋輿紫衣還鄉、鄉人皆驚、方此時、幕府忌唱勤王說者、發吏卒逮捕、日信亦見囚繫盛岡獄數年、遇赦而歸、乃嘆曰、殘軀何爲吟詠自適、以終其身、

遠野史談

九

遠野史談卷之下 終

# 遠野史談附錄

鈴木吉十郎 編

翠峰先生墓碑銘

勝村師軒撰

予與君交二十五年而其相會一堂三四十日或至五六十日者不過十二度蓋以君在南部吾居仙臺也然其講習之次談必及心事相託以後事故得詳其出處履歷君久子氏姓源諱永豐字景舛又汪然號翠峰及五葉山人通稱小五郎生於江戶二載有故從其父母之羽長於窪田年甫十五以父命獨販江戶仕幕府爲御先手寄騎俸二百三十苞屬麾下鳥銃隊司井上氏受學於榊原龍樹龜田鴨竺二先生文化中辭仕籍經總常而至奧居仙臺府及志田遠田本吉氣仙後遊蹤多在瀕

## 遠野史談

海諸方君爲人倜儻不群天真爛熳有時耽翹鬢酣歌醉舞外如無檢束不可羈以繩墨而內實刻苦精緻其授徒循々規誨以氣節相勵居恒語人日時屬清平宜有爲之日人生除老幼不過三四十十年豈可碌々徒過乎苟有益於家國天下則當奮迅踴躍而爲之雖死不顧也故所至有稅政不便於民則猶出己必禁遏之然後爲快而比年英舶出沒於東洋沿海諸藩大率乏國用內自疲弊四民不聊生君知其弊所由也欲上書論辦蘇息邦民以強內而制外其意將以死從事而關廟算非一介生所可議遂罷君既已不得志益汗漫自肆往々發其志於辭賦弘化丁未初夏自平田歸遠野罹病不起享年五十七實四月二十二日也妻藤田氏無子受業生某等買地葬遠野衛白泉山前遺稿數種蔚然滿篋而書畫銃劍皆其餘技不復

悉記初閉伊及濱海少俗讀書知大義者二十年以來行義文章可觀者多亦可以見君誘導之力也係以銘二曰

君抱器材 爵不得伸 韜輝含彩 畢生沈淪  
一片丹心 憂國憫民 最憤外夷 講學薰陶  
多士彬彬 志雖不展 流風長存

嘉永紀元九月

霞村詩鈔

斷杯歌有感作

重威汝忘醢醢殺汝父邪重威汝忘醢醢危汝身邪父兮身兮已如此造次忘之非人子人而不子天理亡豈得能仰日月光不幸吾夙丁偏罰一母猶在多白髮我酒爲病其所憂况又三年作遠遊吾推其心腸欲斷如絲念慮發慨歎嗚呼不肖不能

## 遠野史談

顯父名嗚呼不敏不能安田情素行不慎背父母三千罪魁杯在手聖疏儀狄其意深今而後知酒可禁酒之害甚於仇敵酒之毒甚於鬼蜮戰々競々薄冰深淵一息猶存誰不慎旃作斷杯歌々且悲嘗膽臥薪有此篇

余偶隱几而眠同寮戲設位炷香如奠余者一堂哄笑余愕覺乃賦一篇以解嘲實四月念二日也

寧才鬼勿爲頑仙陶潛此語萬口傳我性水強曾不信一事無成過卅年一朝憤發讀聖籍五里霧中又生烟濺洛源遠迷方向氣倦芒々隱几眠同寮盡是燕趙士安知戲謔含諷意生乘高軒屬蠟鞭死應冥廳判詐譌空餘双刀在腰間欲死不死無容地不如能讀生前書莫臨大節謬大義

信成堂記

工藤將芳撰

國家養育人才之方無他在文武二道也已文以養其內武以脩其外內外培養使斯民歸於忠誠節義之風而已矣昔者南北之際吾公家先世殉身王室雖至兩朝構和猶守節不屈其忠誠節有確乎不可拔者及豐臣氏宰天下也讓諸侯之不至者促其朝覲時吾南部疆場有軍守難其人以故吾聖山弘公齊居守之任以其意聞諸豐臣氏為宗家附庸迄今已二百有餘年矣然其臣庶大率南朝勤王之裔而忠誠節義之風累世不沒以至今日此乃先世遺俗流風之美者也有其美如斯而不教且養安知終不至淪胥以亡也今公蓋有見於斯始有建學之議二三輔臣亦以為盛德獎忠其事議既成夫吾遠野之為鄉也在昔阿曾沼氏之所治而城雖據山頗為宏壯今仍其舊城下有廢區負山抱水幽靜爽塏當諸臣第宅之中央最

### 遠野史談

三

便於為建學之地先是構一樹為刀槍演習之所其側刺棘蕪穢乃芟荆棘除蕪穢新建學舍經營雖朴素講堂子舍畧備焉嚮之刀槍演習之樹亦加脩治其制雖不如大國之壯闊悉備而封內之子弟足群集肄業矣乙卯之秋始興土木迄丙辰夏六月告竣於是公令臣等撰其號乃孔夫子信以成之之語名之曰信成堂意謂方今天下承平日久風俗日趨澆季信義敦朴之風殆掃地焉願先世忠誠節義之美將來果為如何也耶夫學者磨礱文武之德而施諸事業也其所講習切偲者亦惟在於信以成之而已矣且績先烈而垂統緒使後世子孫為可繼者吾公今日之任也學之正效之誠而使其忠誠節義之風再興於今日者在臣等及子弟之責矣方今雖承平無事然近歲有夷蠻侵擾之虞各州濱海常苦防禦之方彼之航海而

來也倨傲侮慢動輒凌我是其意亦未可側也無事則已苟有事須仗義歔歔踴躍先登有死不顧生使忠誠節義之風再顯於今世乃人皆將曰嗚呼南朝節義之風累世不沒今猶在於南部公如斯豈不更美矣哉然則上繼先烈下垂統緒可謂不負今日建學養育人材之本意也芳等雖不才尙晨夕竭力殫慮遵奉德意詎可自謂資性謏劣學識鹵莽非吾輩所及而止乎哉故謹為之記與同志之士相率而勉之

安政三年丙辰六月

東甫翁之碑銘

工藤廣友 撰

遠野之為鄉也東北帶海南與仙臺接壤海陸商旅所輻湊在吾南部為一都衆吾友諱政詮稱甚右衛門佐々木氏東甫其號家住坊間世為市長政詮資性篤實忠愛而有志於經世

### 遠野史談

四

其為市長也庶直以約已恭遜以接衆拳拳奉事所管多端自辨有餘實為不失其職矣恒有言人不可不學也苟志於學而不入室則不如初無學焉其為人可知也偶有游客戶石某者精天文從學焉為構一樓於屋後有暇則登之研究年積而業寢進後遊子京師謁陰陽寮益極其蘊又潛心於地理學私以為昔田村將軍東征至奧之七戶壺村建一巨石書日本中央之四字云其意未可知也恐以夷地并皇國合美之者也歟因考度數自作縮圖合以觀之則殆適於中央矣將軍之神美埋沒千載者因政詮之啓發而庶幾乎窺其一斑矣又善書倣鷗陽詢則及插花飯山之技然而以其所好不煩心志苟非心有所主者則不能也政詮為市長數十年嘗輯錄所管之時事并所見聞之利弊宜為故事例常者為一冊子以便於後人焉



以故優賞許著士服蓋特典也文政丙戌十一月五日病歿享年五十七葬金光山善明寺先塋釋謚雄山道務法圓居士男政甚嗣襲職次政忠亦爲石街市長以余詳政詮之平生也被托墓銘余雖謝劣友誼何敢辭銘曰

吉人爲善 日亦不足 寒霄夏月 乾々以巖  
奉上接衆 忠直以篤 雖終市閭 偉行足祿

安政丙辰仲冬

佐鄉君之墓碑銘

二等議官正五位岩村俊通 撰  
侍從長正三位東久世通禎 題額

君姓佐鄉諱綱文稱章藏故盛岡藩世臣也考諱綱重妣川原木氏君爲其長子以天資薄弱辭仕居江戸戊辰變藩國騷擾

遠野史談

五

事將不測君慨然奮曰今豈儉安之日耶單身入京助藩長臣竭力畫策一藩乃安已已秋置開拓使于北海道予承乏判官擢君爲少主典蟻夷之民漁獵爲生其海產鱈鮭昆布之屬利實爲鉅廣先是豪商占據其地以網一歲之利官抑專權則爲區畫君管其事數年細民因以得便而征入倍前日進大主典又賞其功賜金若干壬申冬就役江刺郡居數旬頑民嘯集毀官舍掠富戶君在其間百方撫脩事漸平定而物議喧然或有歸咎於君者後罷官不復仕予之在札幌也久罹癘毒君自函館來時天寒擁火爐且談且飲君乘辭起舞歌呼震屋使吾意氣奔放忘疾於風餐雪雪之中既而予到東京君亦尋來過予而飲顏色不揚如有不平於中者予悲其志而惜其才之不得大展也未幾予西趁佐嘉縣而君以是年沒實明治七季四月

十五日也享年四十七娶篠崎氏生二男二女長曰匡太郎年甫十五則餘子可知也銘曰

建府蟻夷 名曰札幌 吾子經營 抽棘刈莽  
其產維何 有魚有獸 熊虎鮭鱈 山殖海富  
君董其事 櫛垢嚙枯 豪強裁抑 貧民醒蘇  
江刺之氓 蜂屯蜩沸 非君之罪 中道而蹶  
專西之寺 駒籠之原 刻文碁石 以示後人  
明治八年六月  
淺井生墓銘

書籍館々長 岡 千仞 撰

清 國 沈文榮 篆額

淺井生名信威字畏鄉陸中閑伊郡人世事遠野邑主年甫十

遠野史談

六

五來仙臺執贄余門余試其所學略涉經史大義居年余弟徒無出其右者私以爲有望子後來矣戊辰奧羽連盟抗官軍生屢見邑主論其非遂不行慨然曰既不能以大義自振將修一藝成名天下游東京入福澤氏門修洋學刻苦數年親其要領既而曰所取於彼大艦巨砲爾世爲洋學者唯學其舌何益國家赴橫須賀入造船局日混役卒熾炭鍛鐵鋸巨材運大石手足輝赫自晨至昏不少憚勞會局選生徒試者百餘名生亦與焉漢洋二學應答如響試者大驚舉爲第一是夏余趣橫須賀觀造船塲生指諸器械說運用法甚悉且曰我國四陲皆海而無舟舶中用者使彼乘我隙何以敵之余回舉魯帝彼得故事勳之留宿盡歡而歸是秋生罹脚疾寓余家施治尋瘳歸橫須賀一日郵書報病轉劇余驚使首藤生與疾就治下谷病院

翌日往視呼吸切迫口渴不能言猶曰余刻苦修造船各科略就端緒而死期已逼此生不足惜唯慈父慈母縮衣食資兒游學一朝聞兒死哀慟可如何言淚共咽余勵之曰士死學猶兵死戰何於邑之爲生首肯收淚執手爲永訣哽咽而出翌日猪飼生報差劇遣姪易直往視竟以是夜瞑翌日卒弟姪臨哭買槨葬之三緣山金地院實明治六年十一月四日享年二十有六生敏藝好學能耐刻苦余嘗與弟徒講格物入門生參之洋書縷分節解瞭如照燭聞者悚服其盡力造船學將有大所爲焉也而不及一試溘然而逝嗟亦命也翌春二月生父信慈來自鄉里建墓石泣請余曰亡兒生從先生而學死就先生而殮而今得先生銘辭勒之墓石生者死者皆無憾矣余不覺潛然作之銘曰

### 遠野史談

七

四陲皆海 最急造船 使君達志 巨舶巍然  
垂天奮翼 搏傳地垠 以濟不通 何有輪扁

若人不壽 彼邈者天

明治十二年己卯十月

新里重陸碑銘

從三位勳二等伯爵柳原前光篆額  
從四位 秋月種樹 撰

新里氏世居陸中西閉伊郡新里邨以農爲業稱豪富本性菅原氏至重行有仕進之志寬政三年讓家弟庄吉仕遠野南部氏移住于橫田村以舊邑稱新里氏重行無子養庄吉之次子庄三郎爲嗣諱重陸時甫八歲母菊池氏幼敏捷從瑞應院僧玄哲讀書事父母能養其志及重行歿襲稱庄右衛門治家勤

儉貨產益饒主家歲計程々告乏君職在會計數獻金以救其急或散穀以賑窮人以功加秩祿至六十一石娶村上氏生三男二女長子重常承家次東庵出繼小笠原氏次直志仕八戶氏長女嫁岩城氏季女別成一家君寬政十年戊午五月十七日生万延元年致仕號雲怡慶應元年乙丑二月二十七日歿年六十八銘曰

積財不易 散財爲難 散而無益 不知守錢  
嗚呼斯老 胸次平寬 能積能散 身常辛酸  
上解君愛 可釋衆患 積善之慶 亦可以觀

明治二十年七月

枋洞溝碑銘

八戶宜民 撰

枋洞之溝成溉田三十餘町蓋戶長米內眞豐之力也弘化中

### 遠野史談

八

有四戶長作者自督役夫墾神明裏田眞豐時往觀焉一日長作謂眞豐曰此地墾塲收獲之利不苦伊勢堂前然彼地勢高敵不便灌溉獨此爲恨耳後二十餘年眞豐戶長橫田村會明治中興置鑛山局於釜石因憶長作言私乞技師測量告以水之可引於是請之縣廳則差技手土屋某測量已畢囑工事於牛島某々不卒事而去初助眞豐起此役者七人曰村上伊兵衛日遊田誠一耶日東義衛日金澤宇助日菊池松平日柳田喜一日畑山弓太於是眞豐會衆謂曰我與諸君擲資此溝不知幾許今而廢之甚可憾也吾欲完之諸君以爲如何皆曰善乃又委及川万藏万藏阻勉督作竟能成之實明治十二年某月也此溝出來內川北流合某溝終入湍瀨川築隄鑿山其長二千四百間河水常滿雖大旱不涸民賴便之眞豐爲頑產之

半万藏今猶掌修補事云眞豐嘗語人曰今吾起此志者四戶氏也而成此志者小笠原氏也次郎兵衛觀吾憂苦狀曰此誠美舉也願不顧群言努力成之夫成大業者始不免非毀君不聞四郎兵衛事乎昔四郎兵衛之引水板澤也則有兄詛求死者十年之後毀譽相半已而毀聲絕跡今乃祀爲神吾銳意不撓者藉此言也今茲甲午高室雅平來請余文欲傳之不朽余固悅其成者也乃不辭而記之銘曰

此溝未成 怨譏誼傳 蠢爾下民 古來皆然  
惟勤惟勉 百難不遷 破產募資 其費三千  
爰始告竣 滔々灌田 一郡歡呼 樵牧稱賢  
乃文乃書 金石維鐫 利澤攸旣 其憶万年

遠野史談

九

遠野史談附錄終

枚數	目次	誤	正
六、裏六行	江田重威		
七、裏三行	奧信		
十、裏八行	白懸		
三、裏七行	范然		
五、裏八行	婦伯		
六、裏八行	怒伯		
六、裏九行	最眞		
七、裏九行	頤產		
附錄五、裏三行	蝦重		
	夷威		
	蝦信		
	夷威		
	尤眞		
	怒伯		
	歸然		
	白懸		
	與信		
	江田重威		

明治卅五年十二月卅日印刷

明治三十六年一月三日發行

岩手縣士族

編纂者兼  
發行者

鈴木吉十郎

陸中國上閉伊郡遠野町六百十一番戶

岩手縣平民

印刷者 內田兼吉

陸中國上閉伊郡遠野町二百六十四番戶

印刷所 秀盛舍

陸中國上閉伊郡遠野町二百六十四番戶





菊池純 著

# 西京傳新記

明治十年（一八七七）京都刻本

據明治十年（一八七七）  
京都刻本影印

# 西京傳新記 初篇

以治平年之末月一日發兌  
三溪居士書

## 西京傳新記序

今之西京非古之西京也。古之西京非今之西京也。寫古之西京者。非古之人不能也。記今之西京者。亦非今之人則不能也。以古之人寫今之西京。以今之人記今之西京。吾知其扞格不通也。然則以今之人。京人讀此編。其必歎曰盛哉。古之西京。人物戶口之衆且夥哉。又歎曰。福哉。古之西京。歌舞飲食。賞心樂事。富且庶哉。又復歎曰。幸哉。古之西京。右文有澤。雖布衣韋帶之士。其鼓筆舞文。以記其盛事。一至此哉。

## 西京傳新記

### 初編

#### 序

此余所以奮筆記斯編也。嗚呼。逝水年華。駒隙不童。昨日之新奇。為今日之陳腐。今日之俎豆。則為明日之芻狗。然則其題曰傳新記者。則一時之傳新。而非萬世之傳新也。唯以今之人。記今之西京。使今之西京人讀之。其果為新奇邪。為陳腐耶。俎豆邪。芻狗邪。雖我不知其何如也。

明治七年甲戌七月廿一日。三溪老人。識于西京西洞院。脩竹芭蕉涼處。



純著 西京傳新記初編

三溪居士 著

小費

昔者胎皇之戡定區宇也。治教休明。風俗敦厚。首聘百濟博士王仁。王仁獻論語十卷。千字文一卷。於是令皇子就學經典。我邦奎運鬱興。典章文物。繁乎可觀者。蓋基于此云。自是厥後。有若鷦皇之賢。有若推郎子之仁。遂至推讓三年。令天位空。其高風清節。視諸三讓之泰伯。延陵之季子。有過無不及也。豈王仁薰陶涵育之功。致其然邪。抑胎皇治教休明之澤。令之然而已。嗚呼學校不可以不設。業已如斯。是以維新以還。朝廷大振文教。徵天下才俊豪傑。雄偉奇特之士。允海外萬國。以一技一能。顯于當世者。爭應召募者。日盛一日。於是有文部之省。有兵學之寮。建之病院。以治其癆瘵。設之學校。以講洋籍。以論府縣。弗分都鄙。雖以遐陬僻壤。十室之邑。三戶之村。皆有學校之設。以教導其子弟。竟至於邑。無不學之民。里無沒字之子。駸々乎日進文明之域。豈不亦盛哉。要之皆論語十卷所胚胎。嗚呼胎皇之德高矣。王仁之澤深矣。

西京傳新記 初編

西京傳新記 初編

小費之設焉。西京之府。先為之唱矣。是以教化之洽。生徒之夥。在諸縣之右。大凡西京之地南北九里。東西六里。人口凡五十萬。區為上下。上京三十三區。與下京三十三區。合為六十六區。每區置一校。校有教師。其教句讀者。曰句讀師。其教習字者。曰筆道師。其教算數者。曰算術師。其師分科教之一為珠算。一為筆算。珠算專用牙籌。筆算則用石盤。皆隨生員所好教導之。而區有正副二長。以管轄區內事務。又有戶長。以佐其勞。邏卒以巡察其非常。鐘鼓以報其更漏。其備盜防亂。濟窮賑貧。不可謂不具也。是以其權常在區長。其命教師。雖取給于民費。仰裁于政府。要皆區長所請求。故區長之與教師。同心戮力。各務其業。而後生徒振矣。學政舉矣。今之關係事務者。不可以不察也。

每區小費。各設等級。以試生員進步。三月而小試之。曰小檢查。春秋而大試之。曰大檢查。曰句讀。曰習字。曰算數。分級各五。初級則試以皇朝年號。及五十韻。皆諸記之。四級則試以市郡制法。職員令。學庸等之書。皆朗誦之。自三級以至一級。則試以語孟小學及翻譯西籍。皇漢諸史略。亦皆講讀之。其生員六年而

今所揭  
等級及  
課業書  
目皆委  
曹泰舉  
所見記  
之爾

初上費十有三而下費以為常例。小檢查則中費講官及吏員莅而試之。至大檢查則知參事親臨而試之。凡生員應試者。署其等級書名。及某區某費某教師某籍族。與其姓名支千年齒。于官小片楮。或十葉或二十葉。紙線以貫穿其上頭。及期而出之。講官講官次第呼其姓名以試之。其不誤讀一字者。為上試。誤二三字者。為中試。其遺忘失誤。至於五六字者。七八字者。為下試。為落第。每區生員男女合併。自三四百。以至六七百人。云。此皆平素小檢查所目擊。若犬至春秋大檢查。則聚各區學童于小費。試百日勤惰。

西京傳新記

初編

三

于片刻其教師苦心與生徒勉強。固非一小檢查所得比擬也。

東方未明。明星有爛。區長戶長與三教師。

句讀習宿字算數宿

齋戒。集某區某費之門外。揭菊章二綵燈。又見白沙堆積如垤者。門之兩楹。蓋邦俗敬禮貴官之所致。

費之正面。少高。迎賓之處。名曰玄關。玄關設幕與屏。

幕皆玄章。屏皆泥金。燭光映射。俾夜為晝。繞而過廊。

廊盡而堂。堂大可容千餘人。其中央高一級。處名曰

床間。挂一雙古墨蹟。筆致老蒼。龍躍鳳翥。亦人間所

罕購。下置古銅瓶。挿奇花異艸。香氣襲人。而其設席

之處。教陳華玉之几。文貝之案。其堂上東嚮。踞于倚

子者。為某參事。其西嚮。議事者。為某大屬。其援筆閱簿書者。為某史生。其聚首而整頓書籍者。為某教師。某區長。有剪燭者。有捧茶盃者。有添爐火者。有偶語者。有坐睡者。蘭燈煌煌。如入不夜城。華燭燦乎。似展蜀江之錦。既而學童蠅集。填咽堂之内外。擊鼓其鐘。東方已白矣。教師區長皆凜倚子。坐定而檢查肇矣。圖書在其左。筆研在其右。先呼生徒名姓。生徒唯唯而起。一揖而進。官吏問曰。五十韻何如。兒應聲曰。阿伊字江於。加幾久計古。又問曰。阿字橫行何如。兒應聲曰。阿加佐多奈波滿彌良。和吏又問曰。歷代年號何如。兒又應曰。大化。白雉。白鳳。朱雀。白鳳。朱雀。大化。大長。大寶。慶雲。和銅。靈龜。養老。下至元治。慶應。明治之今。不啻流水下坂。毫無窘束之態。不遺一字。不謬一句。吏微笑曰。善矣。真寧馨兒哉。其成立可以想見也。教師得色拭汗曰。唯唯。兒齡僅六年二箇月耳。兒欣然揖而退。又呼一兒。應唯而來。吏先披大學試其一章。兒朗誦曰。小人間居為不善。無所不至。讀未十數字。遺忘百出。愈讀愈誤。吏睨曰。止。止。何其遺忘誤讀之甚哉。教師泚頰俯首曰。洵如尊命也。此兒平生毫

西京傳新記

初編

四

不奉教師，薰陶其稱疾病事故，而不上黷者。月不下十餘日。非弄紙蠟，則喚狗兒人百，而學之。已十之人，十而學之。已一之。宜矣。其漸漸退步，以致其誤謬。願尊官教諭，以開覺路。吏顧問之於區長，曰：洵如教師所道也。問之於戶長，曰：然。問之於群兒，曰：然。兒面變心悸，不能出一語。少為朗誦前章，末句曰：十目所視，十指所指，其嚴乎。衆皆為之絕倒矣。

檢查皆分課試之。有檢習字者，有檢算數者。甲兒退而乙兒進。東童去而西童來。其狀貌都雅，衣裳端正。一睹知為貴族者。某公子近來上黷也。其靚粧炫服。

## 西京傳新記

## 初編

## 五

粉面而皓齒，能開於進退者。某小姐頃學字也。短小而黎面者，長大而癡呆者，黠者，狡者，驚者，駭者，黠者，多口者，沈重者，輕巧者，千狀萬態，不可方物。俾觀者心目眩轉，想像與童男童女，入海求藥之徐方士也。又俾人俯仰應接，想見諸孫振振之郭汾陽也。又俾人疑布袋和尚，聚群兒相游嬉也。日將晡，而檢查正畢矣。繼以燭參事，乃設臚而賜物於群兒，以勵其勤惰。群兒整肅，一揖而進，再揖而退，折旋中規，進退中矩。亦可以見其師父薰陶有素也。

近日官少更革小黷，課業表，交以單語編，及諸國郡

## 西京傳新記

## 初編

## 六

名是以雖奇字僻畫，目未嘗慣熟者。黃口小兒皆能記之。亦可以徵開化一端也。嘗聞之於友人曰：頃有一兒，其下小黷，喜說獨樂，絕不事溫習。其父呵之曰：勿盡溫讀單語編，以質其遺忘。兒掉頭曰：爺爺勿必深尤，不知爺亦記彼單語編否。夫獨樂者，於字為獨樂，見今不傷害他人權利，以樂其獨耳。又何足深尤哉。其父默然，不能復答云。嗚呼！小兒狡黠，敢弄黃口，以輕侮長者，亦闕黨速成之童耳。非其求益者，不問而可知也。唯當今知識日開，雖以五尺童，識字讀書業已如此。孔曰：後生可畏。昌黎曰：生乎吾後，其聞道也亦先乎吾。吾從而師之，亦可以為吾輩韋弦也。巡回六十四黷，而說諭開化之旨者，名曰巡講師。其人皆出於中黷吏員。其所講說，不囿其書某編，混淆經史，辨折和漢，乍而雅，乍而俗，乍而罵，乍而笑，以滑稽之辯，而行堂堂之論。蓋非腹畜萬卷，躬閱歷世故者，則所不能要之俾府下愚夫愚婦，弄舊就新，駸駸平日起開明，以利其幸福安全，是求為耳。講之日，一費一月，以一日為常例。講師率以十前十時蒞黷，聽講者蟻集蜂屯，無席可容。長幼有序，男女異席。其漸髮長鬚，頗帶洋臭者，則近鄰歐學舍生員，而其身穿



等身外套。腰束淺青條帶。九寒暄應酬。一以英語者。非故西籍之糟粕者。則洋人之唾餘。不然則假開化以文其陋也。其束髮種種。如鉤斯曲。如喙斯尖。厘削其額髮者。不問而知其為固陋田舍漢。有白首而猶顯者。有二毛。而如蠅者。蒙髮者如河伯。頰頰者似金童。西家愛髮。則與東家新人並坐。南隣老嫗。則與北舍少婦相比肩。笑語紛沓。頭上累頭。肩外接肩。若和尚說法而演史。講小說。若五百羅漢。聚于祇園精舍。受世尊。齊度。既而樓鼓報十時。講師上席。咳一咳。揖一揖。俯流眄一坐。氣象軒昂。如眼中無人。乃引茶盃。

西京傳新記

初編

七

爽之一二口。乃徐徐為說起。文明開化。乃由初吶吶。故低語音。以取威重。滿堂屏息。促席側耳。寢聽寢聽。使人津津入蔗境也。當是之時。講師舌益滑。氣益揚。音吐朗然。乃說起曰。方今文明。知識日開。電機可以通五方之信。于瞬間。不須倩天狗而累急脚也。漁船可以赴于龍宮城。不須賴浦島而聘音姬也。街燭可以照十方世界。不須仗阿彌陀而假毫光也。昔之所無者。今盡有之。昔之所乏者。今用有餘。以日開之知識。進月盛之開化。然而墨守故套。動曰。斷髮則夷狄之俗耳。脫刀則高賈之風耳。吾不忍學之也。守株刻。

眩。不識弄舊圖新。何其頑愚固陋。一至于此哉。吾請試舉開不開之說。令諸子聽之。春日遲遲。更鼓未及十二時。請安坐而聽聽之。夫諸子亦不見彼新聞帝乎。頃下京有一沙彌。蓄髮為俗。食肉娶妻。自號曰念佛度世。是亦非開化之僧邪。又聞鴨東有一歌妓。嫁而為商之婦。鬻釵絕絃。一從事蠶織。是亦非開化之歌妓邪。又城西有一士族。賣劍典甲。大開茗園。利市百倍。以潤其屋。是亦非開化之士邪。凡如此者。所在輩出。不一而足。凡王化所波及。雖以翔走飛潛之類。皆知開化可喜。故鷺化為鳩。雀化為蛤。山薯化為鰻魚。佐用姬化為石。清姬化為大蛇。田鼠化為鴉。而其尤化而左開者。結髻化為斷髮。長刀化為脫刀。清衣化為洋服。大名化為商人。雄妓化為老婆。若聞客歲顏見世。名曰顏見世。高島屋。市川右四條北澤。演七變化。戲化為名妓。化為雷公。化為舟師。化為狐狸。化為獵夫。抑俳優優一匹夫而已。尚且變化無極。如斯。況正士大夫。而不知開化為何事。其弗如于鷹。于鳩。于山薯。于佐用姬。于清姬。于田鼠者遠矣。言言逼理。語語砭骨。聽者困頓。有坐睡者。有欠伸者。有與生麻者。耳語曰。講師絮談。何其不收舌之晚耶。講師神。

西京傳新記

初編

八



愆古乾漸了。講曰。舍密先生已待久矣。先軍正老矣。請繼以後勁。一揖而退焉。聽者起而旋矣。

既而旋者。喫煙者。乞茶者。窃脫而歸家者。潮湧波驚。

少焉坐定焉。舍密講師上席。詞辨明爽。舌鋒極銳。辨

玉石。論水火。微入毫忽。細析絲黍。聽者驚嘆相語曰。

新奇新奇。吾輩從前所不夢見。亦是開化。除澤而已。

最後硝壺噴煙。盆中生燐。奇幻百出。如觀善暎技。人

矚目。未嘗不驚其奇技也。既而更鼓正報十二時。

講師急收局。曰今日之技。皆其門牆。未足盡闡奧也。

請異日傾倒其所蓄。使諸子觀之耳。舉坐嗟稱不已。

西京傳新記 初編 九

一姬與一婦。窃相語曰。前席則類於落語家。後坐則

似善暎師。何其小變之似新京極乎。新京極。所謂落語家也。

然。而不要看錢者。獨何歟。婦應聲曰。不須必

怪。每戶一年。已納五十錢之稅。此所以其不利看錢

也夫。

### 女紅場

女工之不可不講。其所繇來者久矣。前有應神天

皇。遣阿知使主于吳。求縫工女。後有雄略天皇。遣

身狹青檜隈博德於吳。又求縫工。吳主獻工人。漢織

吳織。縫衣兄媛弟媛。乃以兄媛奉大三輪神。以弟媛

為漢衣縫部。自是厥後。以論王公卿士。以至農商工

賈。其用力於蠶織。史不勝書。故雖以后妃夫人之貴。

躬親蠶事。不敢委之於他人。其織紵組紃。學女事。以

共衣服。載記舉之于內。則是刈。是澣。為絲。為紵。周詩

載之于國風。景山與京。降觀于桑。是衛國所以致富

強也。載玄載黃。我朱孔陽。是豳風所以力紡績也。降

至於叔世。雖庶人販夫之妻。不織而衣。不耕而食。不

解紡績。織紵可務。吹竹彈絲。以代針黹。酣歌恒舞。以

為眠食。因習之久。常無一人革斯弊者。識者竊憾焉。

方今維新。百廢畢舉。首設女紅之場于府下。令知蠶

織。不可以不務。以明治六年癸酉之三月。開場于城

東祇園街。令歌童舞女。佐酒獻笑之暇。盡從其師。學

女工。於是家養漢織。戶畜吳織。久而不懈。內則之治。

葛覃之風。可坐而致也。兄媛弟媛何足道也哉。

西京之地。各區皆有女工之場。而予獨推祇園街為

唱首矣。祇園之地。原屬花柳之淵藪。是以歌妓舞童。

游手徒食之者。十居七八。府廳設工場于此地。蓋

有深慮而然也。場在祇園街中央。延袤各十餘間。而

門在其中間。門內有局。區而為二。西為會社。區戶二

長居之。以勾當局。東為教場。壁上揭場規。壁後有

樓可階而上。樓上可以設二十餘筵。皆屬教場。捐上匾曰「萬春樓」。諸婦羅列。各從事縫織。玻璃障明。而映景映壁。幟影飄風。而媚香襲衣。樓上挂華燈數十枚。玲瓏輝映。眩轉心目。其華麗宏壯。固非尋常華古可名狀也。教師五名。各掌一局。有教裁縫者。有管紡績者。有督刺繡者。有課蠶織者。妓女率曲眉而便體。粉面而黑齒。有似西施者。有類玉環者。素面者則如錦娥。而豔艷者。則欺紅拂。小蠻倦繡。而殘絨唾窓。藕小眉重。而海棠欲睡。金機穿柳。而玉梭橫霞。得非織女後身邪。藕絲織錦。而彩雲滿室。得非中將姬再生邪。

西京傳新記

初編

十一

其經亂緯絕。少帶怨氣者。彷彿于斷機之人。而其色態迥邁之。其倨傲自負。纖自若。不顧者。似類于蘊幸子之嫂。而其才色。固非同日之比也。其長一身有半。非尋常衣裳者。一睹而知。為其先生寢衣也。少女好服間色。雖紅紫不得。不為褻服。戀戀之綈袍。則范叔之衣。而斑斕之衣。則老萊之服。剪刀裁紅。而金針縫翠。火斗熨黃。而春葱摘白。百般縫織。悉聚一席。既而了童來迎。一妓辭而去。蓋情郎聘之也。又有女奴來促。一妓辭而歸。其少有娑色者。隨迎隨辭。其留於後者。皆黎面。無鹽。推髻。並光。而雖有才操貞淑。如閨雅

葛覃其人。嘗無一人聘之者。豈非以愛其色。而不顧其才邪。今夫士之懷才學。而不售者。亦如斯爾。其朝技一人。善技一人。以應烏公之聘。如溫與石者。皆有才色之徒。而獨昌黎如其人者。抱回天之才。沈淪下僚。文益工。而命愈窮。以為乞丐哀蹄之語。豈謂非命邪。然妓輩不售。其不平之色。無幾微見于言面。士而不用於時。為乞丐之語。安得不愧一歌妓乎哉。靈雨其濛時。暗時明。點滴有聲。蕭寂殊甚。智恩院古門前。其陋巷有一指大。年約若冠左右。為人滿洒清秀。眉目如畫。非落魄業平。則延若浪華之松若。素關左

西京傳新記

初編

十二

士族某氏。庚子。維新以還。淪落於民間。以與西京士人某。有葭莩之緣。近來客寓于本地。以其善臨池。嘗為小費筆道師。居無幾何。以病免職。家居無聊。貪窶逼脅。為人傭書。以為活。沈疴伏枕。數月不瘳。神骨清羸。鬢髮長。宛然如元源氏。病癘。其風貌色態。愈病愈惡。雖人間閨秀。操如冰雪。貞如金石者。其一目之。安得不秋波一轉。通怨懣邪。而況於墻花路柳之歌妓輩邪。而況於風情水性之閨黛釵裙。毫無守操者邪。先是客歲首秋。生與友人。避暑于四條涼棚。樓上有客。盛陳妓樂。抑笑花歌。乍有一歌妓。迺酒倚風。

俯鑑於流。金釵脫髮。鮮然墜水。生時在涼棚。濯足水中。有物流而觸足。拾而視之。則金釵一枚也。飾以珊瑚。而不知其為何人之物也。乍樓上有人。嬌聲呼曰。檀郎所拾得之小釵。即是賤妾誤所遺落。幸得還賜。為惠亦大也。生自樓下。熟視其人。則挑面而柳腰。年可十八九。信絕世佳人也。生首肯曰。諾哉。第樓上與樓下。道阻且右。何不枉蓮步而累一。邪。妓應聲曰。遡游從之。宛在水中央。生直口吟一首。近製曰。鳬川也。似銀河樣。隔斷人間。織女星。此日當陰曆七月七日。俗謂女牛渡天河相會見云。故將此語戲之焉耳。

## 西京傳新記

## 初編

十三

既而白雨俄至。黑雲蔽天。生與友人。倉皇收酒具。妓亦失所在。兩益劇。遂分路歸其家。明日妓令女奴贈紅書。什以酒饌。為通慇懃。且謝不敏。求還玉釵。生亦報以香囊粧具。遂返。完玉釵云。嗚呼。一枝玉釵。以結赤繩之良緣。半日納涼。以全百年之偕老。鳬川以為銀河。涼棚以比鵲橋。何其才子佳人相遇于河上。與天上女牛相似類之甚哉。自是厥後。生與妓綢繆。卒歲竊喜以為天假之緣。生此日病少瘳。起四顧枕上。藥爐火盡。而湯鼎烟消。蛛絲封窓。而塵煤堆案。日將晡。兩益細。境益幽。陋巷乍送。梵然履聲。漸近而漸急。

## 西京傳新記

## 初編

十四

闌戶而入焉。嬌聲自語曰。吁。勞矣。生臥唯呵曰。誰也。奢暮叩人之門戶者。唯呵一再。絕無應之者。少為煩香薰坐。紅裙拂席。現出一個佳人。于屏風外來。正是梨花帶雨。而海棠泣露。揚柳恨風。而小桃含媚。生停睇凝眸。熟視之。則其面。歌妓某是也。生疑團未釋。以萬狐狸所致。橫觀直睇。以益怪焉。乃一喝曰。何物妖狐。敢魅汝公。僕雖驚矣。豈為狐狸所惑者哉。何不改陳手弄新術。不然速去。勿復來焉。妓進帖坐于枕上。取煙具于衣帶間。纖手拈鐵筋。撥起爐灰。壓獲一星火。吹烟一口。麝煙迸朱唇。煙中熟視生曰。郎君目妾以狐狸。此妾所不甘。而受也。何則。妾之於郎君。綢繆經年。膠漆不離。得一衣則寄郎。獲一食則貽郎。一技之花。以一枝。二技之半片之幣。不敢妄費之者。以郎君淪落衣食或不給也。妾不負。而郎反負妾。不唯不通半面。併無消息。意者有解語花勝于妾者。一技瓶掉。無乃供於現。然則其所謂魅人者。則郎君所致。謂之野狐乎。謂之老狸乎。諺曰。娼妓無信。雞子無角。卒而有焉。亦可以見月于卅夕。今卅夕見月。妓乎雖賤矣。未必無孚信也。且泣且怨。言言破膚。句句銘骨。生俯首以手。潤點久之。既而曰。僕過矣。僕



過矣。唯卿所恨者。有未心服者。僕沈疴三旬。伏枕以至今日。何暇竊折解語花柳。以供翫弄之為哉。卿願少平其妬氣。令僕畢其說。妓怒少解。因微笑曰。妾非敢尤郎君。唯愛慕之情。不能自遏。過慮越想。以至出怨言。郎君襟懷。容ハ不レ當レ庶其寬假。而宥之。因拔其所携被包。出鮮衣一襲。示之曰。此是賤妾歌舞之眼。裁縫于女紅之場。又採紙袋于其囊中。出紙幣三圓。曰。此一圓則兩月戶稅所負債。此三方。則薪米之資。可以支半月也。此一圓一方。則郎君宜求可適口之物。以保其病。疴也。擇當一一介。餉不差善矣陳焉子分。

西京傳新記

初編

十五

肉之更出。堵幣一方。急倩人需酒饌于近街。先添炭于爐中。火活鼎沸。既而酒肴亦至焉。妓與生隔火爐對酌。故呈媚曰。久渴殊甚矣。何不快傾一盞。以消遣連日之鬱悶耶。因自傾一盞。擬之於生。生掉頭曰。勿。沈疴未瘳。酒亦禁之。有亦禁之。凡一切食品。皆醫師所嚴禁。妓首肯曰。非然。雖妾亦未何之。如而已。妓獨酌已酣。眉暈潮紅。而眼波流秋。起取壁上三絃。不別須臾撥。故低其調。凡彈一曲。唱歌曰。吾戀波細谷川。迺圓木橋。渡仁危之渡。彌波思布御方仁逢里哉。世奴。譯曰。渡則傾危不渡愁。有如獨木架溪流。嬌心

一片爭消得。故見蕭郎難自由。又謠曰。吾戀波澄吉浦。迺夕景色。唯阿遠阿遠登磨都波加里。待波字比毛濃都良比毛迺。譯曰。妾比澄江天欲暮。無邊松樹綠成堆。人間最是傷神事。待盡情郎竟不來。聲清音爽。雖木石田舍翁。亦不解風情者。令魂消肉動。不覺擊節呼妙也。生默不語。妓曰。何其鬱鬱則然邪。不如試歌謠其心。情令妾聽之。生嗟嘆曰。妾尋卿之死願。業已二裝葛矣。凡自衣食薪水之事。以至坐卧朝夕之費。唯卿是維。依焉。而未有消滴報之鴻恩。天大無物可狀。感荷何已。妓笑曰。妾之於郎君。不當比翼連理。而郎君薄情。出此外真語。以妾為路人。內子原是一蓮托生。何庸勞衷情哉。生曰。感謝感謝。卿之愛僕。為日已久。僕亦春秋已富。幸而青雲時至。沈疴全痊。得赴東京。則雖不至勅任之榮。亦將及奏任以上。百圓月給。可唾手而取也。如然卿亦夫人耳。后妃耳。西陣錦繡。可以纏其衣。如薩摩締結。可以粧其體也。飽八新之割烹。而食生龜之饅饅。八新。生龜。皆西炊玉。京有新名。則京家。薪桂。願婢使僕何哉。不就。卿其姑忍之。以竣時至。謠曰。果報卧而待之。不其然哉。妓曰。如然真可賀也。妾昨日詣女紅場。聞區長之語。曰。在昔有素戔雄尊者。

西京傳新記

初編

十六

西京傳新記



娶一美姬。蓋八坂神社是也。抑素尊者魁傑驍勇。有八握鬘。而其所娶美姬。今忘其名。蓋有類五穀者也。生曰。和邪。曰否。麻邪。曰否。殺邪。曰否。麥邪。曰否。妾既已記之。曰何也。曰稻是也。夫其虬鬘分八握。面目猗猗。可怖之素尊。而惡稻。如斯。鄙語曰。好色在志。慮之外。不似所見也。況以郎君面首。魅世之美姬。豈妾為之妻者。焉得不生髮角而起妬心乎。我生擁妓曰。請試稻田。一穗妓笑曰。郎君沈疴未瘳。既禁其酒。又禁其肉。而今又如斯。妾恐招醫人之嘆。生曰。美麗如卿。焉得不破其禁而啖一粒哉。妓微笑不應。爾後不知復話說何事也。時小費更鼓。擊擊微耳。蓋報六時也。

西京傳新記

初編

十七

居士記至此一解。掩卷歎曰。為才人難矣。為佳人亦不易。而其尤可愛者。數奇之才子。薄命之佳人是也。今以薄命之佳人。嫁數奇之才人。琴瑟和諧。綢繆卒歲。雖時出怨尤語。要相思戀之切。出不得已。未足深尤也。昔人有句曰。生嫁才人非薄命。世間多是富兒妻。唯此十四字。亦當移以資二人也。

八坂神會

西京神會。一年四時。無月無之。而其大者。曰御靈。曰

稻荷。曰今宮。曰某。曰某。不一而足。而今特以八坂神會。天長節為首唱矣。八坂神會。尤為曠古盛典。成親俊寬圖平氏。歎衆祇園會雜沓。誅鋤之。平語已載之。既而平晉源興。降逮於室町氏之時。雖時有盛衰。未嘗廢其祀。至於織田氏。戡定逆亂。畢復舊典。於是八坂神會。頗極其壯麗云。

八坂神會。原以六月七日行之。近用太陽曆。越以七月七日為本日。此日迎神興。以其十四日送之。六月三十日。及七月十八日。洗神興于鴨東。謂之御興。洗凡此前後十數日間。已論鴨水西東。酒肆茶坊。妓院娼戶。結夥醵錢。剪紅刻翠。競演雜劇。以引游客。笙鼓紛喧。使人不覺至。舞蹈也。

西京傳新記

初編

十八

先期十日。四條坊。及左右。巷上。設山棚。山車。陸船。諸具。山車謂之鉾。山棚謂之山。鉾者則車上設樓閣。金碧瑩煌。包以錦綺。若危塔。若穹閣。若屋樓。海市湧出于空中。上卓百尺長竿。所謂百尺竿頭。進一步者。而卓眉尖刀者。其名尤顯焉。人皆呼曰眉尖刀。鉾。樓上載鼓篳一部。終夜合奏。一市如狂。及夜則球燈聯絡。引而上之於車上。星光萬點。燁煌如晝。謂之不夜城邪。曰未足比也。謂之廣寒宮邪。曰未足狀也。鉦鼓聲

耳而火氣照天。人客排擠相肉薄而行。蘓季子所謂連袖為幕。揮汗為雨者。蓋非虛託也。山者則上設金彩人勝。及絹花綉山。棚之四隅。圍以吳綾蜀錦。其規模宏麗。雖不及山車之大。亦足以驚人目也。鉅者則大車以載。二人巾而開扇而立車上。壯丁十人執綽而在車下。扇揚而車進。挽者唯扇是視。以為進取不唯一拳。使五指。是亦奇也。山者唯俾數人舁而運之為耳。有客見問曰。昔者有力技山氣蓋世者。今使數人舁十仞之山。移之於市街之間。豈不亦奇哉。予答之曰。孔曰。仁者好山。孟曰。挾太山。孔孟尚能為好

西京傳新記

初編

十九

山挾山之說如斯。況方今商賈之法日盛。華族好山以開店于橫濱。士族挾山以設肆于神戶。農亦山耳。商亦山耳。甲亦山耳。乙亦山耳。官員挾山以貪月給。娼妓換山以騙游客。舞妓而不好山。則不能博纏頭浪儒而不忘山。則不能牟潤筆。其以詩擅聲名者。似白樂天山。其揮毫而獲金者。類郭巨山。其礪爪如鐵。刈金如草者。非蘆刈山。則木賊刈山。戟手而橫行者。何其似橋。辨慶山。邪好跋涉名山者。何其似行者山。邪。佞佛者如觀音山。敬神者為岩戶山。事親而孝者。非孟宗山。邪。愛梅而為友者。則天神山也。然此數者。皆

山之最小者。丘垤培塿不啻也。至其高且大者。有丘視雁宕。而垤視天台者。有寓于富岳。而較于白山者。其舁山。拔山。好山。挾山。移山。亦何足深奇哉。客驚歎久之曰。何其當今仁者之多。一至此邪。祭之日。洒掃室堂及庭。戶挑紙灯于軒。大抵題御神燈三字。體皆八分。或篆。或隸。唯其所裁。然一坊一樣。萬燈如雪。使人想見上元題燈之景。況也。軒皆施帷幕。席皆布華纒。圍以泥金書畫屏風。皆人間所稀購。其墨躍而華舞。如龍斯騰。如鳳斯翔。一擒一縱。一張一弛。意到筆從之者。非山陽賴氏真蹟。則海屋賈名

西京傳新記

初編

二十

氏內筆。其六扇屏風。縱橫飛動。書其得意長古者。星巖梁翁之筆。而其磊落奇異。題飲中八仙之歌者。則池大雅之書。其著色博彩。精工緻密。花卉翎毛。皆如生者。則圓應舉刻意之圖。而其峰巒競秀。萬壑爭流。雲煙迷離。蒼翠如滴者。則非竹田画史。則對山老人。不論南北。不須宗派。左視右顧。如赴一大展觀會。使人應接之不暇。亦一壯觀哉。而每戶清楚。有鬪碁者。有羅列煎茶具者。有置酒高會。酣歌而起舞者。既而天明日外。更鼓將十時。人客輻湊。肉薄于市街之間。而山車也。山棚也。前後接踵。鼓笛如沸。區長戶長。皆

儀服而為之導。亦可以窺昇平世界一斑也。

方神輿過市。環甲戴胃。執弓矢警衛道路者。名曰都留迷曾。蓋雖以維新以降。四海無虞。豈容無保護神輿以備不虞邪。都留迷曾者何哉。昔者士之落托不能自活者。賣弓弦以為業。我邦吟弦曰都留迷曾者何也。蓋求買之之謂也。或曰都留迷曾。迷曾者何也。蓋欲賣之謂也。迷曾之與迷勢。未知其孰是。吾將就識者質之。

#### 四條橋

西京有四條橋。猶東京有兩國。西京有鴨河。猶東京

西京傳新記 初編

廿一

有隅田川。川之東西。酒樓妓院。鱗次櫛比。不啻也是。以衣香扇影。往來如織。有磨轉擊。項背相望。其東則東山綿亘。疊翠走碧。如波濤起伏。朝宗于海。其巍巍然如垂紳端笏。王者位于廊廟者。則為叡岳。與叡岳相對壘。而門望威名。未嘗以屈下者。則為宮嶺。其他為音羽。為如意。曰某。曰某。撥慶重沓。筆不勝書。所謂三十六峰者是也。其樓閣重層。碧瓦如鱗。壁壁如雪。隱見于翠松紅樹間者。則為丸山。其最高最聳。如危塔刺天者。則為長樂閣。當長樂閣之南位。金碧輝煌。為凌雲之勢者。為八坂塔。與八坂塔相比肩而飛閣

西京傳新記 初編

廿二

雲棟與夕陽斷霞。相映帶者。為清水閣。而其下深林茂樹。翳蒼森鬱者。為知恩。為建仁。為高臺。為東福。為南禪。黑谷之諸寺。名院巨剎。弗暇盡舉。而八坂神社。在其中央。聲名尤著。顯云。眺矚久之。紫翠縹緲。煙嵐如染。彩旗飄風。而湘簾映水。家畜西施。戶養玉環。易牙調肉。庖丁解牛。纖小可以佐納涼之酒。紅拂可以伴月下之飲。于春。于夏。于秋。于冬。于雨。于雪。于花。于月。紅裙之酒。文字之飲。無時不宜。無日不佳。予嘗有句曰。真箇京華安樂園。卜居自恨十年遲。蓋記其實也。而今歲甲戌四月一日。四條鐵橋建築竣工。新行開搞儀。其宏壯偉麗。固非庸常筆舌可名狀也。是以今夏納涼之盛。比年不見其匹云。

吾嘗讀杜攀川阿房宮賦曰。長橋卧波。未雲何龍。唯此八字。可以評今日四條鐵橋也。橋架鴨河之西東。如虹蜺飲于水。如蒼龍騰于空。欄柱橋梁。一以精鐵築之。飾以青綠漆。嵌以鐵牡丹。堅實精工。一取法于洋制。橋上燈玻璃。擊水。橋下水聲。鏗鏘叩玉。赤日沒西。而清風送涼。於是兩岸樓臺。萬客倚欄。水中涼棚。千人爭酒。銀燭競光。球燈鬬彩。如觀不知火。于紫海。如賞戰螢于宇治。如衆星聚于銀河。而照碧落。有



鬪酒者有令殺者有聘歌妓者有獨酌自樂者有與衆偕樂者有起舞者有酣歌者左顧右盼不暇悉記既而如意峰上乍見火光成大火形波撒十丈焰光照山觀者譁呼以為壯觀峰面舊有巨坑數百一縱一橫自然成大火形土人例以七月既望積薪于坑中至期點火以脩冥福遠而眺之華勢怒張其初華一盡及九十餘間云傳云倣僧空海筆意或曰鹿苑氏時以其字形久而失真令相國寺僧景三再描其形以至今日其他遠近山腹一時點火有似船者有似華表者而獨東山大字尤膾炙人口亦關左諸州所不夢見峰面火燭而東山吐月金波浮秋而風簾漾涼水面涼棚棚外設棚橋畔連榻榻邊列榻縱橫高下無復立錐地而生對酌剪燭鬪酒雙拳交五十指出奇伸縮如意叫稱佐勢叫曰五五三三二為四為相合相合一拳連捷蓋鬪器拳也甲對乙曰僕豁拳頗至奧妙卿固非僕敵手百戰百勝多多益辦也乙笑曰母大言母大言勝敗兵家之常套焉得以一敗挫衄屈其鋒銳邪顧運用如何耳如座屋拳則兄亦非僕之對請嘗試之遂決其贏輸呼聲捷急腕屈拳飛乙七擒七縱每戰皆捷矣因撫掌曰汝不聞乎

工藝各有流砥在焉要當踈大成而定其評焉耳二人沈酣興趣愈王乙促甲曰聞兄今夕有鴨東之約僕亦當從遊以賈一醉而已何其因循乃然邪甲謝曰沈醉已忘之矣遂相共命一輛人乘車同乘而去車夫連呼警路人曰請恕請恕一酒人與一惡客相携避暑于水棚惡客曰願得爽善哉名糖羹和餅如蜜者二梳高卧于清風之下亦足以消三伏之熱乎酒人笑曰何其淡泊而無慾哉如僕則異之傾三合南蠻南蠻嘗一盤鯉魚膾陶然一醉睡于水樓上亦足以避連日之暑熱乎惡客曰何其襟懷洒脫一至此哉可謂不負酒人之名也一人在旁默聽久之揖進席曰小人竊聞二公所道各隨其性所好未易猝優劣也唯小人性本嗜糖羹故百梳善哉可一口而喫盡也近又酷視杜康故一斗南蠻可立而盡也雖然嗜甘而惡烈無乃阿其所好邪黨於餅而損酒不可謂無過不及也方今亦有類之者有溺于西洋者有固守皇學者有奉支那學者而其溺于西洋者服亦西洋食亦西洋造屋必西洋出言必西洋娶妻必西洋嫁女必西洋一則西洋二則西洋唯西洋是為賴亦猶嗜甘而忌辛抱豚而忌



臭安得謂開化之民哉。觀夫泥於漢而拘於皇者。亦皆如此。其奉皇者。開口則稱皇風。出言則原于方策。奴視本居。而僕使篤胤。尸祝旧事記。而遵奉古事記。九目之所觸。耳之所屬。起居飲食。唯知有皇國。不省若英。若佛。若歐。若蘭。若俄。林立於兩間。而星羅于宇宙者。幾千萬。亦猶坐井而窺天。安得謂開化之民哉。其泥於漢者。動曰。六經。六經。不知經之所以為經者。為何事。動曰。漢文。漢文。不知善漢文而駕軼于韓歐。無益于日用。則不如學伊呂波。而熟讀單語篇之為勝也。安得謂開化之民哉。故以謂二公所道者。皆一

## 西京傳新記

## 初編

生

家所好惡。而非天下之通論也。公等願破固陋之見。如小人所為。酒亦可以飲之。餅亦可以喫之。不分皇漢。不論華夷。採長而補短。破固陋而廣智見。可與稱開化之民。文明之治。而無愧也。既而善哉亦至焉。南蠻亦至焉。鯉魚膾亦至焉。其人左手傾南蠻。右手喫善哉。喫彼飲此。摩其額曰。開化開化。亦不負為開化人也。

鴨河之水。沙淺流細。委蛇曲折。可揭厲而渡也。是以不能泛涼舫而撐畫舫。而況於大艦巨航乎。近歲維巨舟于水涯。狀如瀛船。彩輪映波。而紅旆招風。玻璃

之窓。絢爛之璫。可坐以挹東山之翠。可臥以聽鴨河之月。其命酒呼膾。招羹召穀。一辨之其母肆。架板于舳舻。以便青衣來往。亦奇構也。一妓一舞女。與兩少年。賞月于船樓上。少年舉白屬妓曰。月白風涼。奈今良夜何。何不各言其所欲。以永今夕乎。妓應聲曰。願獲西瓜如冰者。盛于白銀之盤。與姊妹納涼飽啖之。舞女呈媚曰。願獲一年四時。觀新劇以娛其耳目。少年乃拋圓金。急令西瓜。紅冰堆于盤。而甘味溢于口。妓與舞女。健啖馬食。鼓舌曰。瓜其旨。維其時。少年微笑曰。快甚。快甚。如新劇。則明朝當赴之耳。聞。四條南

## 西京傳新記

## 初編

生

部。頃日演兒雷也新劇。觀客輻湊。丘山不啻也。舞女踊躍曰。真可悅也。妓沈思曰。更有可悅者。少年曰。何也。曰。難言也。曰。雖然。請試語之。曰。不能也。往復一再。寢答曰。妾願獲。貲明日觀劇之資。今日之西瓜既飽矣。亦當求百十南瓜。以供三餐也。少年絕倒曰。好笑哉。好笑哉。

納涼之候已逝矣。沙磧水縮。而風霜砭骨。就橋下平曠處。設最小矮屋。葦壁茅簷。可以容數人。店頭揭方橫帘燈。曰紅葉羹。價錢幾。曰牡丹鍋。價若干錢。蓋都人指鹿肉。謂之紅葉。名野猪。謂之牡丹。曰某曰某。皆

揭價以表之。月黑風寒。霜威襲膚。夜將二更。饒客蟻集。金酒呼肉。一爐一鍋。箕踞而取。既而酒熱羹沸。香氣撲鼻。使人垂涎三尺。食指為之動。饒客酒酣。左手舉盞。右手下筋。隨興隨飲。雜以葱根。葱脆肉腴。立盡七八斤。更賈餘興。又命酒與肉。其操刀而屠牛者。則類于舞陽矣。而其分肉甚均者。則似陳孺子。食而舍肉者。得非穎谷封人邪。豚肩不掩豆者。得非晏平仲邪。當是時。雖以齊宣之仁。安得以牛易羊哉。雖以佞佛之梁武。安得以麵代三牲哉。肉雖多。不使勝酒氣。惟酒無量。不及亂。使無位無官一匹夫。坐而飲大牢。

西京傳新記

初編

九七

之盛饌者。豈不<sub>二</sub>太平至治之餘澤乎。一丁左袒鼓刀屠牛。游又<sub>二</sub>恢恢毫無窘束之色。而刀如<sub>二</sub>發矟。一客嗟稱久之曰。汝能解牛。手熟而刀慣。殆使庖丁走而遁也。唯至其腸胃之際。如有求不獲者何哉。丁顧曰。將欲獲熊膽為耳。客笑曰。牛豈有熊膽耶。蓋熊膽在於猿鳥耳。一客在旁揶揄曰。猿豈有熊膽耶。蓋熊膽在於羊為耳。一客聞而大笑曰。羊安得有熊膽耶。蓋熊膽在於犬為耳。於是異論紛紜。如亂絲。如葛藤。甲是乙非。未知其孰適從也。最後有一措大。排衆而入。寢謂之曰。諸君之說皆非也。僕聞之熊膽在於貓。衆客

相見噴飯。未能出一語。主翁在幃簿之下。匍匐而出。見生再拜曰。僕有<sub>二</sub>畜貓二頭在。明日亦當一屠驗之而已。微先生而教之。僕將失熊膽所在也。生頗有得色。投酒錢而去。既而客皆沈醉相携而退。翁謂家人曰。癡奴曉舌。敢妨主活。蓋熊膽在於老熊為耳。

新京極

新京極者。本曰誓願寺及道場。客歲大闢其衢路。移其市店。較舊頗加其宏塹。坊之左右。酒肆肉店。演史說經。傀儡雜劇。走索吞刀之場。至夫糴米之鋪。揚弓之肆。寫真之鏡。巾機衣履。煙筒披袋。掃眉塗澤之具。賣之粥之者。綉時綺錯。向背相接。凡自三條街至四條街。南北七八町間。殆乎無立錫之地矣。予數西京繁華開熱之地。必先屈指于此境。今零碎記述之。為田翁村婆目米。嘗夢見西京光景者。一讀瞭然。各其易知云爾。

西京傳新記

初編

九八

當新京極之北。樓臺華潔。一摸倣洋製。中築假山。設池沼。池皆席大。區為六七所。隔池又步一亭。湘簾蒲席。繞以玻璃障。尤宜庚夏納涼之候。俯而觀之。水中朱魚錦鱗。浮沈潛躍。試投菓糕。凡水中鱗介。爭出銜之。乍有三朱魚。鼓鬣露腮。馳逐追隨。交爭一菓。未知

原鹿歸誰手也。既而赤鯉一口奪之而逃。小鮒千頭追躡逼之。赤鯉陷于重圍中。殆將所獲。終弃糝潰圍而遁。自罵曰。吁何勞德之甚哉。吾為一香餌。奔走角逐。流汗淋漓。遂為小鮒所獲。此得非所謂勞而無功者邪。此得非所謂鯉魚勞甚。而鮒專其利者邪。有戲於藻者。有唼萍者。有顧影自喜者。有驚人語深藏者。千頭自有千樣趣。百尾自有百色態。如蜀江濯錦。而武陵涵桃花。彼邊簇赤。此邊漾黑。東池浮霞。而西沼流楓。使觀者心醉目眩。不暇應接也。

## 西京傳新記

## 初編

先

日傾西。水風送涼。龜欠伸擡頭。四顧曰。吁。意快甚矣。快甚矣。午睡一晌。曠景將三時。勢宜赴四條。而一浴納涼。聘熟妓佐晚酌。今誤束縛于尺池寸沼中。豈謂非命耶。雖然。曳尾于泥中。暖甲于石上。與浮藻居焉。與綠荷戲焉。與富而有憂。孰若貧而無累。與飽而取禍。孰若飢而令終。因呼赤鯉誠之曰。汝徒長大。不能登龍門而化龍。甘竊活于勺水中。與庸常鱗介爭餌于朝夕。何不自顧而重之耶。且汝大言曰。三十六鱗。三十六鱗。不知六六金鱗。今果何所用哉。抑僕之於汝。交誼之至臻。洵非一日。是以敢獻逆耳之言。以質

其疑云耳。言未畢。赤鯉再捧誓首曰。足下不以僕之不敏。數辱訓誨。鴻恩海岳。無物可方。敢謝敢謝。雖然。僕亦有說。僕原龍宮貫拔。嘗仕龍王。辱其知遇。今有故。寄留于本地。豈敢求不義之富貴。而遺故君之恩之為哉。若有用僕者。僕亦當踏東海之波。而食西山之蕨耳。寧爛死於沙泥。搖尾而乞憐者。非僕之志也。玄龜急掩耳曰。陳腐陳腐。何其似昌黎口吻哉。何其似昌黎口吻哉。

## 西京傳新記

## 初編

三

道之豐富。嗚呼。豈為無以哉。三寸玉板。晶瑩如鏡。五尺身材。摹寫逼真。眉暈顰窩。全然如生。袖紋衣績。宛然欲動。彼則島原名妓。此則新地歌妓。有豐艷而富麗者。有清瘦而妍秀者。有立而舞者。有坐而笑者。有插花者。有按歌者。有開筵而起舞者。有偶坐而款語者。千狀萬態。不暇盡舉。其佻佻優照肖。名士狀貌。英佛諸尊真影。以至夫名區勝場。堂塔樓閣。園圃池沼。風雨雪霜之景。莫不模寫曲盡。何其精妙奇工。一至於此邪。吾聞昔者有照魔鏡。善照人之肺腑。寫人之微惡。不泄絲毫。若使斯鏡如

照寬鏡。不獨寫面目鬚眉。併寫其賢愚邪正。豈不可懼之甚邪。而今無其鏡。以塵塵玻璃。寫人之面目妍媸而止。幸哉。

歌妓三四名。與舞女五六輩。靚粧炫服。競奢鬪新。蓋賽營廟也。歸塗相偕。佇立于寫真鏡鋪頭。春語夏曰。延若之兒雷也。肖則肖矣。獨奈口大而眼細。何。若令眼口允當。則可以稱逼真也。秋耳語於冬曰。正朝之朝顏與鹿之助之阿蘇次郎。美則洵美。艷則洵艷。唯惜美有餘而味甚乏。評最高而藝未精。若加以瑤寬之色態。兼高島屋市川右之伎倆。無乃鬼神弄鐵棒。

西京傳新記

初編

此

邪。品題一一。皆中其肯綮。毫不失介。鈞因呼主婦。問其價。曰彼三錢耳。是五錢耳。即簡其尤適意者求之。尚歟。未退。霜與露。竊品甲評乙。問主婦曰。洋服而于思。面目醜穉。可畏懼者。得非米國毛唐人耶。曰某縉紳公寫真耳。曰鬚頭而鷹眼。鬚髮磔磔者。非張飛之弟。則樊噲之兄邪。曰某舊知事某公肖像耳。短小而奴面者誰乎。曰某大儒也。長身而眈目者誰乎。曰某老公也。燕頤而虎頭者。類於班超。長頭而烏喙者。似於勾踐。重瞳者如項王。而隆準者則沛公。隨問隨答。妓大笑曰。何其官員醜漢之多哉。然有牙角者。之

於羽翼多財者。盡於色。天之賦物。予一而不予二。是以妾之所。以日拌管廐。而月詣于金毘羅者。蓋欲熊魚兩得。了一生而已。曰而得何如。妓笑曰。是無他。貴官員之月給。嫁俳優之家。亦足以娛樂一生耶。

一書生來求寫真牌。主翁應接。指點曰。此是名妓之肖照。此是舞女之寫真。此是某知參軍。此是某長官。因一一問其價。舞女貴於官長。俳優貴於舞女。名妓貴於俳優。生怪問曰。同一寫真牌而已。今官貴者賤。而身賤者却貴。何其價之不均耶。主翁點頭曰。君請勿疑。蓋以售與不售耳。今寫真之尤售者。以名妓為最。而非優次之。歌妓舞女又次之。而公卿官員次之。故售者貴。而不售者賤耳。又何足深怪耶。生歎曰。善矣。因語主翁曰。昔者八代目三升市川團之漫于浪。

西京傳新記

初編

此

華也。三都画工。摸其真影。鬻之於市。以獲大利矣。又聞宋賢司馬光之薨也。京師民畫其像。印鬻之。畫工有致富者。一則一代之名優。一則不世出之大賢。其高下懸隔。雖不足取類。其画而鬻之。鬻而為富者。則一也。今官員寫真。尤廉而尤不售者。豈其名聲有不及八代目邪。抑不及司馬君實之德之才邪。自問而自答。言言逼人。主翁不解。何謂。困極曰。南無。南無。鄰



婆獨語曰。東家亦復有說經耶。

高閣突起。上卓一旗竿。製皆一摸倣西洋。閣下聯榻。賣茶。旁植奇花異草。與幽石相鼎峙。與簾帷相映帶。閣中設數十玻璃鏡。名曰唐人鏡。摸倣西洋諸洲名區勝壤。山川城郭。以至夫鳥獸草木。目未嘗慣熟之物。置之其鏡中。照而視之。神彩生動。摸倣逼真。使人如置身其間。而親視其景。亦奇構也。日將午。觀客蟻集。各就一鏡而視焉。其樓閣重疊。有三層者。有四層五層六七層者。堅實精工。飾以白瑩。粧以金碧。人烟稠密。不知其幾百萬。不知車幾百輛。馬幾萬匹。男女老幼。往來道路者。又不知其幾百萬人。其規模宏壯。氣象雄豪者。一睹而知為龍動府也。其長橋俯水。城郭聳天。山遠雲晴。萬人蟻集。立而觀望。氣越上于空中者。則佛都之真景也。其他名山大瀑。堂塔宮室之瑰麗奇傑。種種摸倣。色色圖畫。凡金地越所在者。一臨瞭然。不遺絲毫。而問其價。則登一錢耳。可謂天下之壯觀。而天下之至廉者。

一村婆。拉一呆兒。立仰觀招牌。蓋獵夫生擒老狼之圖也。落月傾西。而老木刺天。深林遶谷之景况。寫出如見。使觀者不覺寒毛之生也。場師當戶。揚言曰。此

## 西京傳新記

初編

九三

狼丹陽山中所宰獲。性暴而頑。喜咬人。諸公何不一

見而廣其聞見也。決非尋常賈物之比也。喋喋辨說。

喧喧招人。村婆就問之曰。看錢何如。曰。六十文耳。婆

驚且笑曰。消魂消魂。何其價之貴而藝也哉。婆之故

鄉所謂丹波山中。射狼衆多。不唯犬豕。如然婆亦將

歸于鄉里。車載射狼幾頭。設場於此地。以博看錢。

看場之西鄰。則為揚弓之場。場之正面挂的於中央。

的大三四寸。維以糾組。組皆純紅的之外面。兼以方

屏。屏皆馬皮。故中即為鼓音。凡箭之中的。則戛然發

聲。箭逸而中屏。則擊乎而鳴焉。是以戛然。戛然。戛然。

## 西京傳新記

初編

九四

然。中者則戛然。逸者則擊然。終日終夜。戛戛之聲不

姑絕。亦可以想見其繁華一斑也。場之主人。大抵以

破瓜左右名姬。粧皆時樣。品皆嬌艷。其百發百中。射

術之精妙。不唯穿楊之養由。貫虱之紀昌。玉手雖無

貫革之力。猿臂自有沒羽之妙。其日來試射者。僧侶

也。士流也。若商若農。皆借弓與箭以試之。箭多盛箱。

弓皆不過二尺餘。皆出價假之。都下年少。名欲箭之

中的。其實則求中名姬之意。而百發一中。尚且不易

獲。嗚呼。養由之射。似難而實易矣。中美人之意。則似

易而實難也。昔人名美姬曰花箭。蓋其一中之者。不

至傷其身者幾希矣。世之年少輩寧求羽箭之中的，毋使花箭中其躬。

揚弓之肆，挂木牌數十枚于左右壁間，以標揭射者。工手曰百中某，曰二百中某。至其尤奇者，中穿揚貫風之絕技，千發千中，不虛一矢，吁亦可謂奇藝也。此知藝之精者，秋之奕，僚之丸，師曠之治音，庖丁之解牛，雖其所作為各異，及其成功，未必不歸一塗也。而其至精者何邪？曰神完也，守固也。昌黎曰：外慕徒業者，皆不造其堂者，吾取以為斯道銓衡。

西京傳新記

初編

九五

某丈曰：鶴澤某丈，下署員運中四字，蓋員猶曰鹿額云。而場之外面，揭本日所演之題，曰伊賀越曰忠臣歲曰千兩機，曰菅原傳授，曰昔八丈，曰逆播松，曰壯四孝，戶口極小，其當戶處置小匣，以內看錢。見客必呼嗟來，場中央蓋高處，挂一張翠簾，簾綠，以天鵲絨繞以天幕，幕亦漆太夫名姓，蓋鹿額客所寄贈。大抵以午後一時開場，客輻湊至，太夫皆羅列于簾內，致光隱見，媚香漏簾，正是春雲韜月，而揚柳隔花，客皆悵悵，不啻隔靴搔痒也。簾內有人，擊柝數聲，咳一咳，報告曰：東西東西，愛顧大人，奴席雖過高，

口語一啓，即今所演題目。妹背山某段，太夫某某，三絃某，啓畢而簾正徹矣。太夫數名皆向歌案而坐，烏

西京傳新記

初編

九六

紫皆描金，金碧如畫。絃鳴撥響，太夫一揮引茶盃，而一喫徐徐按曲，乍而美姬艷妾，乍而忠僕義奴，乍而老賊，乍而少年，同一口舌，而或濁，或清，或笑，或泣，使聽者一喜一悲，不覺呼妙也。而其人皆粉面皓齒，其藝之妙，聲之清，至令愚婦愚夫感動，其被以太夫之踊，其誰曰過褒乎？中有一客，語帶西音，大息久之曰：經曰必正名乎？又曰名與器不可假人，今女而稱太夫，何其名分之不正哉！一客朝之曰：子之持論，正則正，雖然要知其一，而未知其二者，夫子亦不見秦政之封松為大夫耶？不見衛懿之愛鶴，而棄大夫之軒耶？松之與鶴，均是草木耳，禽獸耳，而公然稱大夫，公然棄大夫之車，女妓雖賤乎，亦橫目之人而已，視諸松之與鶴之擅其名爵，而弗辭者，孰得孰失？吾未知其孰是也。且夫不見鳥原太夫乎？娼妓而稱太夫，不僭則濫矣。不見天神記演劇乎？有梅王松王櫻丸，蓋王者則統一之名號，然而以六位舍人自稱王，何其名稱之濫，一至此乎？而世絕無怪之者，何尤於區區一妓女哉？口角生火，舌鋒甚銳，坐者大驚，相共大聲

曰東西東西。

片身踏去一條繩。雙脚渡來三尺冰。我亦人間苦行路。畏途曾上幾殘嶒。是予三十年前在東京所賦。蓋兩國雜詠三十首之一也。今新京極看場中。尤危險而尤驚人者為繩技。其為技也。樹我于地上。東西各一。相距百餘步。又施一條索其上。離地三四間。維其兩端於我。以便步趨。仰而觀之。如蛛絲橫。樹梢衝風。觸之掀翻動搖。使人目眩轉。冷汗浹背也。而技人年歷十餘歲。額髮蒙面。輕裝短袴。踏險如夷。如猿猴登木。如鼉龍還技。時放一脚以觀。暇整一往一來。毫無窘步之色。左手執傘。右手把繩。其所賴以托脚者。唯一條索而已。當是時。繁絃急鼓。如飛龍跳板屋。如夜雨敲芭蕉。觀客蟻集。頭外疊頭。目上橫目。相排擠而觀焉。乍而一聲翻身。倒懸索之中央。足指不離索者。歷二三分。故墜不墜。傘飛蓬飄。而身尚依然在空中。觀者喝采。不覺呼妙。一奴鳴折。絕叫而佐其勢。每呈一技。唱其曲名。曰東山大字。曰唐碕狐松。曰過磨。曰禪。曰某。曰某。曲訖。更呈曲。看錢山積。觀客益集。日將晡。更呈懸尾奇藝。所謂踏劍鉞是也。其為技穿獨足高張。踏刀劍鋒銳。一步失脚。即躬貫刀尖。亦人間

西京傳新記

初編

七七

有數之絕技。而技人從容如驅步周道。未嘗錯一步。宜哉博其看錢。日獲大利也。雖然。不獨技人能然。凡方今農工商賈。乃至公卿大夫士。皆走索耳。踏劍耳。其夫脚錯步。或折手足。或膏鋒鏑。以至損軀損命者。歲不知幾百人也。較諸技人未嘗錯一步。踏險如夷。以保全其終身。孰險孰夷。孰難孰安。樂未必待余喋喋而知也。抑予亦嘗閱歷人間畏途者。觸于蛟螭之飢吻。而登于劍鉞之山岳。其不至於失脚而損命者。豈天之所祐。蓋亦僥倖耳。嗚呼。一條之索。三尺之冰。俯仰上下。無物不危。何獨怪技人之技邪。

西京傳新記

初編

七八

鼓吹鼎沸。如蜩如螻。鬧熱雜沓。使人耳聾。而魂飛之間。有一割烹樓。曰九万。因區其樓曰圓滿。其樓角揭圖旁添万字之狀。以為招牌。蓋尤之為言。圖也。故以是表之。云圓滿之樓。雖不甚佳。現模宏闊。咄咄稱之。雖以萬客輻湊。未嘗少撓。所謂多多益辦者。是以比隣酒樓。雖絕無客之時。此樓雜沓。酒氣撲鼻。羹香襲人。蓋以物多而價廉也。以咄咄而辦。益盤也。大凡西京酒肆肉舖。客之令教呼酒。皆咄咄辦之。而其尤便捷者。獨此樓為然。是以村婆諸博覽會。捋腹而令飯。咄咄而飯至焉。老農赴于開龜。喉渴而呼酒。咄咄而

至焉。小姐與阿姐見花而還。試促饅餚。咄嗟而饅飯至焉。膳亦咄嗟。羹亦咄嗟。無物不咄嗟。是以不獨都人喜之。尤適東京人士之氣象。此九万之所以獨擅其名。而博大利也。

一奴擊柝。佇立大造。相報曰。新京。搗櫻坊某新亭。今夕六時開演史會。講師則浪華新人。速津齋冬梅。而其所講書名。前席則義士銘銘傳。中席則大岡政談。後席則柳日誌中眼目。櫻田戰鬪是也。大家一齊。願相提携。幸惠然而來。一坊一報。連聲擊柝。相報啓而去。

西京傳新記

初編

卷一

插鴉歸林。山鐘報暮。家家點燭。接樓鎖門。當是時。演史開場。喚呼招客。一奴當戶。坐收看錢。名曰木戶番。群客蠅集。先投看錢。木戶番換以木牌。牌長三寸強。牌面署何番何百何弔之字。其場徽而客散之時。守履履者。照牌弔。而出履若履。不錯絲毫。客之來就席者。先出錢呼茵與火爐。命茶瓶與煙盒。席之大者可坐五六百人。若千人。席之正面設高坐。坐上置机一脚。又燭兩枝。机右置火爐。壺壺各一。爐上安茶瓶。爐下具茶桶。其坐講師之處。展檀若茵。講坐相間。施一張天幕。大署講師名姓。及最負達中等字。字形怒張。

大抵用寧窠飛白二體。有字白而幕紅者。有幕紫而字紅者。皆庇顧豪客所贈貽。又壁間糊帖一大白楮數葉。太署金千匹。若二千匹之字。又豪客大家之頭。揭以旌其榮而已。

既而更鼓報六時。講師上席。外套褶袴。先剪左右燭心。迎客而肅揖。引糊箋而敲机。托者三過。手注瓶茶于極。更一更。恭披紫袂。攤其講卷。點檢一過。檢畢而咳且啞者一再。因肅群衆曰。小人原是浪華貪生。誤荷諸公庇顧。近日初得至于京華。幸亦甚也。榮亦至也。諸公不以燥濕不時。辱蒙惠顧。幅幅湊湊。無席可容。不獨小人至幸。亦主翁之大幸耳。小人雖迂拙乎。焉得不掉三寸齒舌。而呈一奇話耶。乃今夕所辨說雖事屬陳套。亦平素所慣熟。所謂前講者。則義士銘銘傳。而其中席則大岡仁政錄中。淡婆姑屋喜八之斷獄。至於後講。則櫻田雪中之鬪爭。延而及武田耕雲齋。筑波山鏖戰之寶錄。講說將及夜半十二時。更漏尚淺。諸君未集。請說義人之巨魁。赤垣玄藏酒壺小傳。以排長夜之悶。豈不愉快哉。衆皆欣然。不覺膝之前。講師再剪燭心。乃說起曰。赤穗義人四十六士中。其稱出類絕群者。載于傳記。存于口碑者。指不勝屈。

西京傳新記

初編

卷一



而傑尤推赤垣玄藏為第一矣。玄藏有兄曰玄之進。秋元但馬守之老某氏二子也。父沒而兄玄之進繼為玄藏幼養于赤穗士人赤垣氏。因冒其姓為內匠頭近習。為人豪宕。不脩邊幅。及淺野氏亡。而報讐之事興。首與其盟。縱酒自晦。報讐之前一日。曾訪其家兄。兄遇宿直不在此。日臘月十四日。雨雪霏霏。玄藏被酒。醉步踉蹌。手提一酒壺。且飲且語。嫂頗厭苦其醉謔無度。初謝病不面。強而見之。玄藏大悅。坐上見兄衣挂于桁架。再拜謂之曰。弟失故主。既已一年矣。落魄慕食。無身可托。因擇榻于西園一炭家。遠行

西京傳新記

初編

四

在近。今亦將與兄別。再會難可期。請與兄為別。乃自酌其所携之酒。一杯醉兄衣。一極自飲。一酬一獻。陶然大醉。遂齊其酒壺而去。事聞于兄。兄怪之。乞暇而歸。歸則玄藏既去矣。兄聞玄藏語言非常。益怪之。既夜。終夜不交睫。明朝大雪。門外乍聞行人呼噪相走而過。未幾。何家奴徒跳喘而來。且報曰。令弟玄藏君。與赤穗同盟之諸士。昨夜所吉良氏邸。以報君仇。今現欲赴泉岳寺。以獻首級于主墓前也。兄大驚。走而見之。大石以下義人。凡四十六士。均服整整。有荷槍者。有肩大捷者。有挾弓矢者。有裹蒼者。有擁陣鼓

者。而玄藏散髮。白布束頭。衷甲玄服。提槍而在其前隊。渾身朱殷鮮血如染。其昨夜健闘之狀。可以想見。其兄喜悲交集。握手而語。始知昨日遠行之言。預作今朝永訣之兆。而非虛言也。其兄還家。閱昨日所弄酒壺。殘酒餘瀝尚在其中。遠近傳聞。求乞其餘滴者。輻湊作市。不啻求神酒也。後玄藏沒。而壺尚傳兄家。秋元侯以其義人平澤所存。鑒請藏其秘府。珍襲以傳其子孫云。群客傾聽。有感涕垂泣者。講師一揖。捲卷而喫茶。行將講大岡政談。聽者漸入蔗境。乍城鐘連杆報遺火。客皆大驚。走而出戶外。相語曰。火光遠

西京傳新記

初編

四

遠想當西郊野外之火。請勿慮。請勿慮。於是散者又集。講師上席矣。

西京傳新記初編終

# 西京傳新記

西京傳新記  
卷之二  
序

## 傳新記二編序

題曰西京傳新記。蓋取其新說異聞記之焉耳。初輯脫稿未及紋梓。而有寫錄而傳之者。人所寫錄傳之百人。百人所寫錄。遞之千人。未及三數月。而亡論都鄙。弗分遐邇。不唯置郵傳命。何其駿足迅駛。一至於此耶。故不知者。誤認以曰電信機。蓋以傳新記之與電信機音相似故焉耳。嗟呼。區區游戲小著。固非可以塵大方清鑒者。唯以少投時好。擊情實。不期其售而售耳。然經緯錯綜。如蛛織網。如電機曳線。百步一柱。萬柱相接。不假重譯。而瞬間可以通越裳之信。不用指南。而咄嗟可以達四方之言者。未必無寓意也。但彼則鐵線以驅使電氣。此則寸管以馳騁才力。其瞬間千里。至遞新於海外。擅場于一時。則非吾輩寒陋措大所得企及也。

明治七年甲戌十月下澣。三谿居士。識于平安西洞院小牕明處。

西京傳新記

二編序

首

西京傳新記二編

三谿居士 著

平安之地。山水明媚。無地不可遊焉。花舞柳歌。無日不可醉焉。筆研精良。宜于文雅之士。古器珍翫。宜于風騷之客。井水清冽。可以煎茗品泉。室堂華潔。可以置酒會友。加之名匠碩儒。盡萃一都。時而賦詩論文。時而聞鳥觀花。時而展觀古書畫。時而陳列古器物。往來徵逐。日盛一日。要之皆休明至治。深仁厚澤之所涵育。為之民者。安得不記其一半。而鳴耕作熙熙之美乎哉。而其尤不可無記者有三焉。一曰北林角觥。二曰四條演劇。三曰島原花街。此三者則關都盛衰所關係。其事雖小。亦可以鑒省治忽。所由也。昔者宋民李格非著洛陽名園記。謂洛陽之盛衰。天下治亂之候也。予之著斯編。亦竊寓其意云。

北林角觥

角觥。一曰相撲。又曰角力。其所繇來者久矣。史稱垂仁帝時。大和國當麻邑有力人。曰當麻蹶速。力絕人。自伐其勇。以為舉世無能敵己者。帝聞之。求其對。或薦野見宿禰。乃召二人。命角其力。野見蹶速。折其肋骨。而斃之。遂被擢用。平語又載。惟喬惟

西京傳新記 二編

西京傳新記 二編

仁。二王爭位。久而不決。乃令力士紀名虎伴善男。角力。以定其位。既而名虎負矣。惟喬終即位之事。從是厥後。奕葉相繼。歲時貢諸國力士。以行相撲。節會。降自鎌倉氏。以至近代。至其戰爭攻取。兵連弗解。則試此技。以定勝負。如甲越二氏。關川中島是也。其非尋常將戲技。觀之可見也。元和偃武。江海奠安。民不知兵革者。殆三百年。於是人皆目以為太平翫具。設場各地。以試其技。觀者輻湊。堵牆不啻。而力士東西各分夥。其軀幹魁傑。絕類逸群。力能扛鼎者。名曰大關。次曰關脇。次曰小結。小結以下。皆曰前頭。其他力人。聲名不甚顯。不上角觥等級表者。又不知其幾百人。判之贏輸者。曰行司。管轄之事務者。曰勸進元。其精於技。熟於藝。老而有威望者。曰頭取。故力士角觥。贏輸未判。眾議鼎沸。行司不能折之者。先質之於頭取。頭取乃與眾人胥議。而後地平天成。贏輸初定矣。是以頭取威名。獨擅其場。號曰四本柱。蓋角觥之場。高築土豚。布以白沙。四隅樹柱。頭取各坐其柱下。故名焉。抑角觥小數耳。而其一輸一贏。行司不能折之者。必質之於頭取。頭取不私折之。詢之於羣眾。至論公議平。而後贏輸決矣。烏乎。角觥一力士所為耳。尚且

不妄束縛其權利率如此。况天下則一大角觥場也。政廳官府則土豚也。聽訟吏員則行司也。匹夫匹婦冤結不伸者。上土豚決其贏輸。行司而誤其贏輸。群衆環視。安得不抱不平而生風波邪。亦當質之天下頭取。一歸之公平而止也。今也治教休明。獄訟廉平。絕無虞芮爭田。藤薛競長之事。有遜讓之風。無劫奪之弊也。是以行司不須累團扇。頭取不待論輸贏。疆弱定而雌雄決矣。烏乎。豈獨角觥而已哉。

丘明之書。首揭其凡例。令讀者一瞻瞭然。知其所原也。角觥亦不可不凡例以表其方言也。凡力士角觥。

西京傳新記

二編

三

相持不下。不知勝負所歸者。行司先止其鬪。養其勢氣。令其再起格鬪者。名曰水入。其紛紜鬪亂。久而勝負未決者。行司亦分而止之。名曰引分。其觀客蟬集。崇朝其雨。不得已放場者。名曰入挂。其午後擊拆連聲。姑息肩者。曰中入。中入之後。力士陸續相偕上土豚。曲踊三百。俯仰屈伸。齊拍手而揖者。曰土俵入土俵。入之儀。極而壯觀。極而偉麗。令觀者不覺喝采舞踏也。此數者皆嗜好角觥者所熟知。不必待予之多言也。大抵角觥。以晴天十日爲期限。一日雨。則延一日。是以雖期以十日。有及半月者。一月者。云。

先期十數日。四方庇顧之財主。或貽金帛。或贈樽酒。以寵賞之。又楮間糊貼白紙。大署曰。金幾十圓。魚幾百荷。某主人呈某力士。其贈遺尤多者。人皆健羨。以爲奇榮矣。又植大小旗幟于街上。濃藍淺碧。或紅或白。以表章力士姓名。皆庇顧財主所寄贈。遠而眺之。如鵬翼搏風。如游龍交戲。鳳翥鸞翔。都人士女經過此間者。徘徊顧望。躊躇久之。亦可以爲一時壯觀也。星月皎潔。銀漢橫西。夜將五更。櫓上撾鼓。繁音急節。聲徹四外。於是四方觀客。蓐食而起。或攜行廚。或提瓢酒。排擠肉薄。爭而赴其場。場在八坂祠北焉。所謂北林是也。當維新時。力士有功。故官賜其場。以爲永世角觥處。延袤百餘間。前設二門。一爲胥吏出入之處。謂之御用木戶。一以通觀客。謂之鼠木戶。戶極小。纔容一人。蓋防其濫入也。戶外壯漢數名。設場以權看錢。換以木牌。以爲左券。木戶之上。連署三府力士名姓。榜而揭之。觀客蟬集。未及入戶。而喝采聲動地。人皆狂顛。爭求其場。場之中央。築以土豚。團圓如滿月中布白沙。土豚六六。以象三十六禽。四隅樹柱。以表春夏秋冬。柱下置桶水。東西各如一。名曰力水。上施天幕。葦以白板。頭取四名分坐。其柱下。場之四方。

西京傳新記

二編

四



架以棧棚。華輿可以坐賓主。搔盤可以佐壯觀。其人  
大抵非銅臭富翁。則縉紳巨公。歌妓呈笑。而狎客結  
襪俯瞰棚下。皆畫地占場。宛然如井字者。謂之場。場  
廣僅二筵。而坐十數人。不令八家各私百畝。是以頭  
上接頭。背後交背。蟻族蠱屯。無復立錐之地。既而一  
奴曼聲絕叫曰。東兮虎嶺。西兮龍淵。東虎西龍。各上  
場。距躍三百。以試其膂力。其人率銅面而鐵額。東者  
則如巨無霸。西者則類防風氏。如龍之蟠。如虎之蹲。  
東西對峙。窺其罅隙。行司中立。察其呼吸。一聲喚呼。  
直引團扇。於是虎嘯龍吟。電擊雷轟。共工頭觸。而不  
西京傳新記 二編 五

周欲崩。鵠蚌相持。而雌雄未決。當是時。萬人屏息。兩  
拳握汗。雙肩聳峰。有庇西者。有援東者。行司手把團  
扇。左顧右視。旋一旋連。呼曰。殘兮殘兮。正是劉項逐  
鹿。未知歸誰手。晉楚爭霸。孰其混一之者。

棚下有一僮父。扼腕而觀焉。頭上有喫煙者。興正酣。  
歡呼打烟管。星火迸墜。止其頂上。僮父不省。忍熱切  
齒曰。母輸。母輸。旁人誡之曰。星火在頂。盍拂而除之。  
僮父掉頭曰。舍舍。勝負未決。何在於星火耶。

一壯丁。瞋目戟手。張空拳。臨之。乍握。旁人手腕。極力  
拗之。旁人不知其何謂。號哭叫痛。其人弗悟。罵曰。請

少忍之。東方已危矣。此手豈可解邪。

既而東虎一喝。徑擠西龍。西龍却退。足脚殆將及土  
豚。一轉振腰。攫東虎踏之於土豚外。行司一閃。團扇  
正揚。而勝負既決矣。於是萬人喝采。呼聲震地。爭拋  
衣裳。以為纏頭。有起舞欲狂者。有擊節叫快者。罵者  
笑者。立者。坐者。箕踞者。耦語者。千人自有千樣趣。萬  
口自有萬般評。纏頭雨下。堆積作邱。

一人歡呼。脫外套。拋之。既而拋衣裳。既而拋佩具。席  
亦拋之。瓢亦拋之。盤亦拋之。益亦拋之。卒顧其左右。  
無物可拋。乃脫禪拋之。或見嘲之曰。子既已舉身拋

西京傳新記 二編 六

與之。其所剩者。一莖陽物耳。一囊辜丸耳。子何不拋  
此二物。以為纏頭。其人沈吟久之曰。二物固不足惜  
也。唯恐今夕角觝。以速卿卿之不平焉。

一歌妓靚粧。拉一舞姬。直踵鼠木戶。將入戶內。守者  
曰。卿等有禁。不許入戶。敢辭敢辭。妓怪且問曰。鴨水

之東。衣食於歌舞者。不降數百家。然而獨峻拒妾輩。  
不許一步出入。敢問何也。守者稽首曰。卿等皆山貓。

非尋常歌妓之比也。山貓而入鼠戶。鼠輩逃竄。吾不  
知其死處也。妓語塞。遂踈巡去矣。

紅妓與翠娥。倍兩豪客。觀角觝于棧棚上。一妓頗有

名曰山貓。地方有二種。歌妓  
名曰山貓。地方有二種。歌妓

俠氣柳眉側翠。挑臉潮紅。扼纖手語客曰。妾聞昔者有力士稻川者。曾與其敵手鐵岳角勝負。稻原有恩人。偶其子與某妓昵焉。欲聘而納之。無金可償。詢之於稻。稻許諾之。周旋甚力。鐵亦有財主希令鐵克稻。鐵本富於財。資於力。因欲啗金於稻。以博一勝。竊謂之於稻。稻曲而順之。蓋欲獲金為恩家贖妓也。既而自謂。今日角觝輸則為人所謗。苟贏乎。則金不可獲也。利害炎於中。憂心有忡。時正臘月。雪意砭骨。而鼓音徹耳。曦景將晡。而鬪期已逼矣。當是時。觀客雲集。相排擠而入。鼠戶殆欲破。蓋此日勝負。以稻與鐵為

西京傳新記

二編

七

結局壯觀矣。然而稻意甚不樂。鬱鬱家居。叉手擁火爐而坐焉。其妻從容謂稻曰。妾頃候良人顏色。似重有憂者。無乃感寒疾耶。無乃病頭痛邪。妾聞本日結局勝負。萬人所注目。可謂實一世之壯觀也。哉。而髻亂鬢鬆。何不快梳髮新結之邪。稻心緒紛紜。不啻亂絲。寢食之曰。唯當依舊整理之耳。因向鏡而踞焉。其妻早已窺察其意。所苦手執巾櫛。立其背後。紅淚一滴滴。稻之面上。稻怪之。顧問之曰。卿何由涕泣也。曰。否否。蓋梳水餘滴。今之然耳。夫妻黯然相見。不復交一語。稻遂起。蒞場。妻度事正急。起整其衣裳。獨語曰。

今日角觝。即良人命脈所關係。妾雖無似。豈可坐而觀之哉。輒走鬻躬狹斜。易以黃金若干圓。因俾人輸之稻。稻尚未知其然也。此時稻與鐵相角觝。勝負未決。動則在其下風。人人危之。既而有報道者曰。黃金二百寄附諸稻川。蓋某財主所贈遺也。稻聞之。奮力百倍。不唯大旱於甘雨。一喝奮身攫鐵。投之於土。俵外頭顱一顛。倒沒沙中者尺餘。萬人歡呼。感其膂力。聲名隱然。動一世云。夫角觝小數耳。而其贏輸強弱。一係金之有無。豈可不慨歎哉。妾亦因有感焉。頃聽人讀新聞紙。側聞日本征臺灣。與支那分爭其地。我

西京傳新記

二編

八

直而彼曲。直者壯。而曲者老。以直征曲。其獲全勝。何足疑哉。獨所憾者。則國用不給。民力疲困。加之維新以降。王化未洽。海內是以有弄兵乎潢池者。有企不軌乎邊疆者。雖幸由朝廷威力立誅夷之。餘燼再燃。未可測也。然則今日急務。宜當培養其國本。以振興皇威也。夫稻川則力士也。無金則不得。不讓勝於他人也。天下而國用不給。又安得不踐稻川之轍邪。雖然。稻川家有良妻。賣身以救其夫急厄。不至一蹶貽笑。可不謂幸哉。今我皇國八十五箇國。人民三千五百萬人中。曾無一人賣身典衣。

以供軍須。何其不及一力士之妻。能知其義務哉。妾竊有慨于此。酒亦禁之。肉亦斷之。甘諸亦不啖。南瓜亦不茹。一枝之花。半星之銀。敢不妄費之。絲累黍積。亦將納之於政府。以供萬分國用。諸公醉飽。不慮於此。投衣裳拋佩具。一擲萬錢。以爲力士之纏頭。何其無心腸。一至於此耶。言言刺骨。句句銘肝。二客肅然。正襟避席曰。僕輩庸愚。眼孔如豆。失娘子將軍於目睫。以爲尋常一輩之紅粧。幸毋罪不恭。以見指示方畧。僕輩盡力薦之於有司。有司推轂舉之于朝廷。朝廷方今求賢如渴。其必任娘子以水軍總督。

## 西京傳新記

## 二編

## 九

娘子而爲之帥。水軍十萬。旌旗蔽海。氣船一蹴直赴臺灣。繕甲峙糧。以爲根據。夷滅醜類。如探物於囊。而禁暴弭亂。內以鞏固國體。外以和親於各國。果如此。則衡行六大洲。以雄視萬國。則神后之畧何足道乎哉。僕不才。雖不及武內之勇。亦將執殳爲娘前驅。娘子幸允之。妓頗有得色。客恭奉一卮。預祝其戰勝。妓舉白飲焉。離妓在側。冷笑曰。阿娘既已曰禁酒。又曰斷肉。古尚未乾。今亦如斯。敢問何耶。妓曰。母多言。勢不得不然也。既而一力士相角力而勝矣。蓋客平素所庇顧。客并舞踊躍。脫其外套。將拋與之。妓曰。

止焉。何不留以供軍須。客曰。毋多言。勢不得不然也。妓微笑曰。呆甚矣。何其似賤妾口吻也。

東西力士送上場。或贏或輸。或引分。或預。既已了百餘番。曠景將午。牌木拆連。擊報中入中入之後。再鳴拆以報土俵入。既而力士各分隊羅列。水慢映日。錦綺飄風。一手左之。則千手隨之。一人右臂。則萬人共之。如舞如踊。一伸一縮。不誤分寸。相俱拍手而止焉。未幾。奚奴呼名。力士東西臨場。相對而踞焉。行司執團扇。呼曰。片今雷電片今立繩。少焉東方蹶起挑鬪。西方曰。竣焉。西方一喝促之。東方曰。竣焉。既而機合。

## 西京傳新記

## 二編

## 十

神會東西一時並起。齊鬪。拳飛臂交。一喚一呼。一虛一實。雙額相摩。四腕交爭。如掣電。譬雲。如雙蝶弄花。紛紜混沌。相奮鬪者一晌。而神疲氣憊。流汗淋漓。未知勝負。歸孰手也。行司跳而入其中間。解腕止鬪。令虎羅再養其力。復起角觝。愈爭愈不決。於是乎雷電與立繩遂爲引分。而今日之角觝畢矣。西京觀客相踴躍曰。雷電雖江都小結。不能勝一立繩。立繩之榮多也。坐有東京人。啞然大笑曰。立繩雖勇。固非雷電之匹。不至其一蹶委頭于土豚沙中者幸矣。二客鬪論久而不決。鄰棚會有浪華人。不忍坐而聞之。揅喙。



其間止之曰。僕側聽二君之所論諍。一是一非。未知其孰優。又猶雷電於立繩。僕請權為行司。為二君判其贏輸。可乎。二客大悅。論諍益力。華客傾聽。急呵止之曰。引分哉。引分哉。西客揚揚。自負曰。東人古鋒雖銳利。卒不能勝吾輩。吾榮多也。何獨立繩而已哉。

角觥放場。日將晡時。西京豪客。抵顧立繩者。設宴某樓上。延立繩觴之曰。今日關取之伎倆。可謂絕類逸群。何不快傾一盞。以慰終日之勞邪。因自舉一大觥屬之。觥大如盆。要當盛一升許。立繩欣然立飲之。客大託曰。能復飲乎否。曰。僕死且不退。厄酒安足辭。歌

西京傳新記 二編

十一

妓數名。執瓶注之。蘸甲淋漓。其踞而飲之。舉坐嗟稱曰。關取意氣狀兒。何其似樊舞陽邪。相俱開便面。扇之。自左。自右。自前。自後。皆嗟稱弗措。喚呼曰。關取關取。世人稱大。宴正酣。財主再屬觥曰。以時不若無海錯供下物。不腆黃白。以壽關取足下。因舉黃白三百。錦段十卷附之。立繩拜而受之。財主戲問曰。關取既已博大利。其快豈何如哉。立繩應聲曰。受之者固快。未如與之者更快也。滿坐擊節。以為名言。

日之夕。角觥放場。士女絡繹。笑語如湧。有評虎者。有品龍者。或褒熊。或貶罷。笑語紛喧。相俱分路而歸。路

上黠黑。燈點火。乍有一奴星馳而來。呼曰。勝負付。勝負付。蓋印刷力士名號。及本日贏輸於片楮。以報賣之也。都人士庶喜角觥者。爭而求之。是以一夕一晌之間。往往有獲大利者云。予因謂一部歷史則英雄勝負付耳。舉世人。人宜當爭求。而其能售者。屢屢不過一二種者何耶。蓋史傳所記者。則既往之勝負。譜耳。非今之勝負譜也。宜矣其求而見之者。少邪。若夫當今有人。敘述目前天下之勝敗。印而鬻之。則家求戶購。不啻左思賦三都。其紙賈之貴。固非區區勝負譜可較也。而方今無人。吁。豈尤不可惜哉。

西京傳新記 二編

十二

四條劇場

四條橋之東。有兩部劇場。南北挾巷相對。南者都万太夫。布袋谷梅之丞。為之榦事。北者以早雲長太夫。龜谷久米之丞。為之首長。場之正面。揭一木匾。題榦事姓名。及實傳演劇四大字。屋上構小棚格。施幕。四隅揭兩條竿。竿頭團團。結以條截。楮片。遠而望之。則如白旄之子。又。蓋望標也。每旦開場。必亂搥小鼓于棚格。音節繁細。如急雨。如飛霰。婉轉曲折。相聞而達於四郊。其放場。又復如斯。每夕劇丁當戶者。至其放場時。蒙假面。戴布帽。兩手執楮。而舞踏于戶內。蓋



祝其吉利多福也。大抵一年四時。無時不開場。開則呈新演奇。歲十一月爲最盛。名曰顏見世。蓋劇部以子月爲一月。豈有受用姬周正朔者然邪。今之十一月則非子月。尚於十一月行之。蓋失其舊也。

昔者永祿中有女子。曰出雲阿國。頗有姿色。尤善歌舞。聲名隆隆。傾動大都。當時名卿巨公。爭延而觀之。又有名古屋三左衛門。江州之人也。亦善歌舞。與阿國齊名。乃胥議。創開劇部。號曰歌舞妓。歌舞妓之名。蓋肇於此矣。初設場於祇園南林。後移于五條之橋南。時豐太閤在伏水城。其入朝於京師。多取路於此。西京傳新記 二編 十三

以觀劇士女。往往擾其鹵簿。遂移于四條磧。既而業中絕。承應中有村山又兵衛者。請官再開場於舊地。至寬文中。遂移于今地云。

劇場比鄰。多設茶店。以待都鄙觀客。可以辨酒肉。可以供使令。比屋連軒。簾幕飄風。櫺屐盈戶。酒氣薰香。薰染耳目。亦可以窺大都一半也。演劇之場。延袤數十間。舞臺三間。當其中央。左右各架看棚。棚下施一條天幕。揭上優姓名。蓋愛顧豪客所贈遺。看棚下。又設一棚。左右各如一。上者曰鶴棚。下者曰龜棚。皆上客所臨觀。價極貴。而地位尤高。東京所謂高土間者。西京謂之龜棚。

其價少廉。而地位尤低者。謂之場。東京謂場亦有高下之別。其接近舞臺。凡俳優聲音色態。如手取而膝接者。謂之鶴場。其少遠而價差廉者。謂之龜場。其數客疎金雜居於一場。而觀之者。謂之割。其與舞臺相對。場尤遠而價甚廉者。謂之引舟。一謂之聳棚。蓋俳優言語狀貌。以可見而不可聞。故名焉。當舞臺之右。看棚之下。通一條板道。以接舞臺者。名曰花道。花道盡處。下一小幙。以便俳優出入。舞臺之左腋羅列大小鼓鐘。以爲絲竹合奏處。其看場。價極廉。而地位尤賤。以供藏獲廩養之觀者。名曰藝裏。抑看棚之於藝裏。其高下懸絕。固非同日之比也。然至於品評藝之巧拙可否。確不可易。則藝裏未必讓看棚者何也。曰具眼耳。具眼之可畏。不唯秦銅照物。美惡妍醜。弗得逃其明。故滿場俳優尤畏。憚具眼之客云。

西京傳新記 二編 十四

俳優所打扮食息之處。名曰樂屋。樂屋分爲二層。其一則當時名優聲價尤高者居焉。其一則賤小劇子。爲奴僮。爲捕吏。爲狗馬足脚者居之。如上優則各房區別。坐錦茵。擁寶爐。使令有人。送迎有奴。衣服飲食。頗等於王公云。古昔名優。所謂衣錦乞丐之句。詢非虛託也。然乞丐而衣錦。雖或似僭奢。我以吾力。競奢

闔靡未可深尤也。世有錦衣而大冠。公然蠹國財者。有尸位而素餐。坐而糜稟米者。吾竊目之。以為衣錦之盜。遠矣不及衣錦而乞丐邪。

先開場旬有餘日。先揭一大招牌。及劇子名姓于屋上。曰某扮某烈士。曰某學某忠臣。某為某奴。某為某妾。一條署。色色標陳。使人一瞶瞭然不問而知。為某演劇也。大抵招牌。皆畫劇中所演之腰領。丹青絢爛。五色奪目。有屠腹而殉國者。有殺吾兒而代君兒者。有少年與佳人相攜。葬魚腹者。有殺人而梟金帛者。衣冠而折訟者。非青砥則大岡。大岡。越前。獄公。平。野。乘。傳。之。碑。

西京傳新記

二編

十五

存緋甲而錦袍者。非義經則豐公。藍縷而乞食者。富貴而歸鄉者。泣而惜別者。笑而合歡者。樓臺也。宮閣也。神林鬼冢之狀也。描寫點染。筆筆逼真。過其前者。儉父佇立。驚其奇觀。小奴凝睇。知其新劇。歌妓亦停展舞女亦滯步。小姐大娘。老嫗少婢。悉聚而悉佇焉。狸奴亦往觀焉。飯匕亦往觀焉。櫛木亦往焉。播盆亦往焉。比肩聯袂。填咽于通衢之間。至俾路人弗能往來。有一人連呼曰。油。油。油。人皆踐巡。開路而通矣。每歲孟春例開新劇。既而場老春深。更呈新劇。別揭招牌。若其標榜題號。非皆原傳授則鏡山。否則忠臣。

藏。若仙臺菽。凡此類演劇。概曰時代狂言。傳衍錯綜。能鑿入之情實。時代演之於午前。午後別出新劇。以一洗觀者耳目。名曰世話狂言。其所演多係於贈芍採蘭之事。所謂阿淙久松。若阿半長衛是也。蓋時代則以濃厚競勝。世話則以澹泊取喜。一濃一淡。正側迭用。要令老少婦女不厭倦耳。作者用心。可謂良苦而細心者也。

凡戲場編綺語者。名曰狂言作者。嶺琴佐橋。奈河諸子是也。其下筆翻案古今。混淆雅俗。行以新意。令大小俳優得竭其技倆。實三寸不律之所致。作者而一

西京傳新記

二編

十六

失其措置。則全劇瓦解矣。嗚呼。方今有司。舉用人材。如作者甄別俳優。委任得其宜。則士氣欲不振得乎。夫一場演劇而不振。或可以償其責也。天下之戲劇而不振。誰乎任其責者。我日望之。嚙彼小星。三五在東。智恩之華鯨。一吼報曉。啞啞之鷄。喔喔之鷄。雀之啾啾。犬之唁唁。以與夫啓戶汲井。鑽燧掃塵之聲。遠而聞之。則殷殷鞦韆。不唯南山遙雷。而中有一種極繁極忙。趺然戛然。體物不可狀者。曰是何聲邪。蓋彼都士女。赴劇場之履音耳。此聲也。亡論宮媛室女。歌妓舞姬。僧道暨流市井。腐養一皆

蓐食蚤興。自西自東。自南自北。無遠弗屆。咸取路于四條橋。絡繹續紛。如螻蟻集腐菓。如蒼蠅戀魚肉。觀客麇集。東方已白。先演三番叟戲。既而次第呈技。第一回曰發端。第二回曰二目。第三回曰三目。目則段之謂也。舞臺正面。下一大帷幕。幕上更設橫幅小幕。名曰天幕。皆四方受顧所寄贈。幕皆木綿製之。染以大優字號。紅紫爛斑。五色如錦。幕之開闔。必以木柝。折鳴而始之。折鳴而終之。俳優演劇之時。或至於殺傷擊刺。紅作周旋尤急劇處。一奴在其後。手執一雙方木。大如柝者。敲板以形足音。謂之附拍子木。此亦

## 西京傳新記

## 二編

## 十七

非習慣其技者。則不能為也。午牌前後。觀客益湊。每一戲訖而幕闔。賣糕者。賣瓜李者。賣演劇名紙者。如呼如訴。未幾幕中折響。戛戛送聲。大幕正開。舞臺正面現出一場演武館來。女監岩藤實川延若靚粧在上頭。中老尾上侍之。中村慶女其他宮媛羅列其左右。代試擊刺法。邪許之聲。與木刀之響。拍拍丁丁。有勝而自負者。有負而赧愧者。顛者。蹶者。挫者。羅袖飄風。紅裙捲塵。絲竹合奏。音節極急。拍木鼓板。戛戛聒耳。岩藤為入。軌拗而多情忌。居常城尾上忠實。動主張正議。欲托事折辱之。尾上原富商之子。曾入於後房。寵

幸其夫人。無幾拔為中老。岩藤知其不解武技。令彊試一刀。尾上報羞謝其不敏。岩藤不聽。尾上有新婢曰阿初。團市川右慧婉而矯捷。頗善武技。此日坐人後。觀諸姬鬪技。又見岩藤謬辱其主。怒氣中騰。欲一擊而窘之。排眾挺進。自啓曰。賤婢不肖。願得代主人見教。一刀。榮亦甚也。岩藤道。宵先令諸姬試之。阿初欣然上場。綰條束其袂。一縱一橫。作十字形。相俱執木刀。蹶起當之。阿初矯捷。不唯飛鳥。闔未二三合。擊而踣之。代以一姬。又仆之。更僕轉換。都當十餘姬。神色自如。餘勇可買也。岩藤見諸姬屢所挫。因起身親當之。初大悅。一揖而輅之。呼聲刀響。如啄木穿樹。如燕燕下上。一虛一實。一闔一開。未知勝負。孰孰。阿初一躍。投其鐔隙。直擊岩藤左臂。臂麻而刀脫。阿初揮刀乘之。尾上旁觀。呵止之曰。賤婢無禮。敢抗女監。何不顧其身之甚哉。阿初俯伏而謝罪。岩藤忍痛而起。怒益甚也。遂令阿初待罪於私室。因目接尾上曰。卿市人之子。未及識武家家法。請為卿教之。抑後房有中老。尚如閨外有用。其為任不可謂細小。然則雖以閨黛釵裙。平素宜當講究。一刀一槍。以備緩急也。如聞卿元籍家翁多財。黃緣權家。納卿于後房。

## 西京傳新記

## 二編

## 十八



不時出身。以博中老。豈不奇榮邪。令卿果常人。宜自抑損。而顧其身迹也。然而怙恩叨寵。動輒轢其長官。何其不知愧。一至於此邪。而迹其所由。則其家翁多財之所致。是以熟視卿之面目。鼻亦矜金。口亦矜金。眉亦矜金。目亦矜金。凡四體百骸。無適不矜金。夫多蓄積金帛。而不能散者。名謂守錢奴。又謂之銅臭兒。卿所謂守錢奴之子耳。因顧左右諸姬曰。卿等亦當熟視尾上面目。以為烟誠也。鼻頭挂金。落落擺風。詬罵百端。極其調謔。因把其隻履。亂打其面。尾上面熱心噴。當是時。滿場觀客。屏息凝眸。握拳切齒。未嘗不惡若藤而憫尾上也。萬口一聲。喝采動地。

西京傳新記

二編

十九

有一僮父。第四交下。淚睫一指。叫曰。請忍之。僕當代尾上君。雪此愧耳。有一士族。其語南音。其音濁。撫刀攔嫉視曰。僕不許。僕不許。何其若藤之亡狀。一至於此邪。僕竊以謂此戲場耳。狂言耳。故抑憤制怒。忍而觀之。彼若藤者。罵詈嘲謔。愈出愈暴。僕將一擊斷頭。為尾上女報此怨也。僕決不許也。僕決不許也。一妓佐酒在其旁。纖手扯住之曰。請恕。請恕。此是狂言耳。非實有此事也。擅即其哂而舍之。士人益噴。一喝曰。汝亦無底若藤乎。然則不獨不許若藤。併亦不許汝

也。因欲舉履撲之。觀客大駭。相呼曰。又復釀成一場履擊演劇來也。

一舞妓泣飲。不能仰見。主婦哂慰藉之曰。卿昨夜喜不寐。坐以達天明。其嗜演劇甚於色食。而及其觀之。歡歎流涕。不能自禁。果知如此。不若固辭而不見之。勝也。妓指睫曰。否否。是有說也。妾今見若藤執拗。罵詈尾上。何其似妾家老婆邪。老婆之罵妾。不唯若藤罵尾上。罵於起居。罵於食息。故屈一發。亦能罵之。妾故付度尾上意中。不能自已。此所以其流涕歔歔。不能仰見也。主婦掉頭曰。否。蓋有甚於此者也。抑妾之

西京傳新記

二編

二十

嫁良人家。有老姑。不獨諍罵於妾。亦諍使妾。妾能千辛萬難。忍於不能忍。以致有今日之歡樂。諺曰。苦則樂之種子。卿其少忍之。以俟後來樂事。妓驚曰。姑之於卿。亦有甚於若藤者。卿之諍使家人。亦知甚於老姑也。主婦噤口。不復出一語。既而中老尾上為若藤所亂打。鬢髮釵碎。尚能忍痛。不敢出一語。若藤冷笑。大託曰。快甚。快甚。諸姬騁貽。不知所措。而其媚若藤者。皆大笑而嘲之。尾上憤怨盈胸。手執其隻履。再拜曰。妾庸愚。已被女監譴責。萬死固所不辭。然而幸得所原。令喚罪於私室。為惠亦



甚也。起且歸其室。一步一淚。龍鍾殊甚。行未十餘步。拆鳴機轉。舞臺變爲尾上私房。尾上下婢阿初。聰慧而機敏。此日恠主人退食殊鉅。出候之其廊。尾上顏色憔悴。似重有憂者。既歸而就其茵。尚默而不語。阿初百方慰藉其勞苦。吹火添炭。手供盃茶。且曰。主公賢勞。軼掌公事其疲困。可以想像也。妾試按摩其肩背。庶足以醫終日之勞耶。尾上曰。善矣。阿初遂跪其背後。奮拳撲其肩頭。從容語之曰。主公亦能好演劇耶。尾上微笑曰。好亦甚也。曰。然則妾亦所嗜好。妾昨日代主君。賽眼病地藏尊。與病地藏。在四條橋東。劇場之南。近日四

西京傳新記

二編

九一

條南部演忠臣藏。因竊得寓目。蓋第三回判官手刃師直之處。妾見師直無狀。嘲罵判官。心熱膽怒。雖事屬戲劇。未曾不惡其爲人也。宜矣判官一刀奮擊。捐軀而不顧也。雖然。忍於可忍。則人人所能。能忍不能忍。以成功名者。此之謂大忍耳。獨判官志慮短淺。不忍小忿。以致亡國。遂速後人譏笑。後之爲判官者。豈可不誠而懼之邪。一句一言。暗寓警誡之意。尾上首肯曰。然詢如汝所言也。沉吟久之。且謂之曰。今有一事。可托汝。汝其聽之乎。否。曰。注公有命。妾生死以之而已。尾上喜且謝曰。汝忠實至誠。真不負平生也。因

作家書。內諸函。慇懃屬之曰。我有急事。宜當齎之以遞我家也。阿初色然辭謝曰。今者夜半。主公何不俟明朝致之邪。尾上艱然不懌曰。汝既已云死生以之言。尚在耳。舌尚未乾。而反覆如此。何其食言甚哉。且有緊要急事在焉。何俟明日邪。阿初俛首謝罪。尾上意解。乃附書函。密封而遣之。阿初狐疑不出。尾上叱而促之曰。何其因仍乃然邪。初唯唯而去。當是時。舞臺一轉。正面下一大緇帷。夜街闇黑。下奴秉燭爲導。行未七八步。蹶而斷其履絢。初手自裂紙。撚作緒線。令奴繫其履絢。納而步。步未一二間。絢亦斷。又補而行。

西京傳新記

二編

九二

又復斷。初獨語曰。主公有急。令妾致家書。而絢斷路黑。以至移更漏。亦恐負主公之命。以速其譴怒。急補履絢而走。乍有一漢。布巾包其面。橫擠阿初。掠其書函而逸。阿初追躡。引而止之。又有一士人。塞其前路。家奴倉皇一蹶而仆。於是燭滅夜黑。不辨咫尺。阿初與二漢。三人三處相俱爭一函。闇中摸索。手將合而乍離。面與面相接。而不見其人。遂三人拾一函。紐解而函啓。中有隻履與一牘。阿初捉而睨之。此時木鳴而帷徹矣。鴉鳴雞唱。而東方已白。現出一大侯邸門前來。白堊映日。而女牆如雪。朱門罩霞。而橫雲抹錦。

阿初忙劇披書讀之。喫驚一喚。握履與牘。飲泣曰。此是主公遺牘。二漢欲梳之。左右薄之。三人鼎峙。相睨而立。觀客喝采叫呼曰。千金哉。千金哉。

當是時。日將下春。觀客蟻集。丘山不啻。有呼酒者。有命殺者。有喫煙者。有促茶焚煮者。有旋遍而走廁者。其出懷鏡背入而勻面者。非宮川坊歌妓。則先斗巷舞女。其泥客而呈媚者。三樹街之老狸邪。曰二條新地之妖物也。其鬪奢競靡。務取威重者。山麓之貓兒邪。曰富永坊之性獸也。凡其他醜魅罔兩。畢來畢集。令人坐于腥風魔界也。笑語紛沓。如湧如羹。蚤已舞

西京傳新記

二編

廿三

臺點燭。而幕中木響。既而拆急幕開。唯見舞臺一面。櫻花老于雨。而落英散雪。棗棠映池。而黃雲涵金。有樓翼然。遠而愈邃。有亭洒然。清而愈雅。鳴蛙哈哈且歌且語。春雲聚散。或霽或陰。有圮橋。有柴門。有隈。有五。有假山。有石燈。燭光釵影。與吹竹彈絲之聲。近在目睫間。蓋後宮夜宴未散也。岩藤盛粧。手雨傘。挾短刀。步到圮橋。佇立傾耳曰。池中鳴鼃。一時歇聲。安知非荊曹伏匿。圖不良邪。語未訖。有兩手排籬而露半身者。岩藤停眸。熟視其人。即雨衣而笄笠。女子而男粧。因誰呵曰。誰乎來者。其人敬跪。褪雨衣一揖曰。尾

上之下婢耳。曰得非初邪。曰然。曰內苑深邃。候家彌禁。不許奴婢入焉。賤婢亡狀。敢犯大禁。罪固非輕也。且汝至於此。其果有何事故。然邪。曰賤婢有緊要至願。在曰何也。曰主人尾上。宿病頓發。氣絲殆將絕。命妾曰。願得見女監。以一言幸見。枉玉趾。身死而骨不朽也。岩藤心動。佯荅曰。我有痼疾。今暴作。不能舉足一步也。敢辭焉。敢辭焉。阿初冷笑。前膝曰。其所謂痼疾之良藥。妾藏之久矣。以待君不時之需。因取隻履于懷中。展左手出之。其前。岩藤愕眙。大罵曰。咄賤婢不遜。敢為主家圖不良。吾將寸斷而甘心之。言未畢

西京傳新記

二編

廿四

阿初拔刀薄之。岩藤事急。乃扞以傘。因隔傘刺之。刃短不中。當是時。雨纖狼藉。帋破骨碎。尚能持不辜。四匝櫻花樹。而奮鬪于圮橋上。二人氣喘心疲。挫而復起。起而復鬪。於是乎。岩藤與阿初。髻亂簪墜。上下馳逐。勝負未。知何如。而木聲箏聲絲聲肉聲。與夫胡弓之音。叱咤之聲。鏘鏘拍拍。剝然啄然。與銀燭華燈相映帶。觀者魂驚。聞者耳狂。無棚無塲。無割無擊。棚萬口一聲。喝采動地。而岩藤袖裂裳破。躬被數創。流血淋漓。左顛右倒。扶刃而起。左手拌阿初髮。右手揮刀。橫刺其胸。初轉身避之。刃不及膚者。厓一絲髮耳。觀

者寒心。喝采又作。呼曰實市二兄。技藝如神。既而阿初闔甚苦。猶能奮當之。卒刺其左腋。岩藤絕叫而悶。馬阿初大呼曰。爲主報讐。汝其記之否。當是時。後房姬侍覺其有變。相偕秉燭臨之。廉問得其實。君公嘉賞。舉而襲尾上之職。是曰二代尾上。諸優羅排相啓曰。今日演劇已結其局矣。萬人雜沓。相排擠出戶。戶丁一口呼曰。高評兮。高評兮。

演劇放場矣。有兩賈兒上某酒樓飲焉。酒酣及俳優品題。至岩藤履擊之事。一人慨然歎曰。當今之時。高下異地。冠履易位。不獨岩藤隻履也。士農登庸。在華

西京傳新記

二編

光五

族之上。是亦非隻履打頭耶。屠者上與平民齒焉。是亦非隻履之打頭邪。庶養而凌家長。賤婢而泣內子。沙彌而壓長老。小鼈而欺大月。凡上下四方。無都鄙無遐邇。目之所屬。耳之所聞。無適不打頭之隻履。何獨性乎岩藤之隻履邪。一人曰。兄之言亦不可謂無理也。僕少小喜讀神史。粗解其大意。請舉其履屨有裨益于世者語之。昔者有太閤秀吉。嘗爲織田氏之奴隸。常擊鞋以從之。然而至其雲蒸龍變。時至而得志。其平素擊鞋握屨之手。亦可以戡定禍亂。振作皇威也。留侯張良。亡國一書生耳。嘗捧履干圯上老

人。然至其鷹揚龍據。駕風雲。撻雷霆。則捧履之手。亦可以斃重瞳。而佐隆準也。大織冠名臣也。其誅入鹿。固皇基。豈非獻靴之手耶。宋劉裕豪傑也。其席卷區宇。駕御羣雄。豈非織履之手耶。抑豐公也。留侯也。鎌足也。劉裕也。皆擊鞋捧履獻靴。織履者。而能決大事。佐大業者。要之忍不易忍之愧。而堪不可堪之事。堅忍克己之所作爲。今尾上不忍小忿。以至自及。皆閨黨狹中令之然耳。後之抱有爲之才者。寧學豐公之鞋。毋倣岩藤之履。醉語冗長。燭淚作堆。一人欠伸。促歸曰。至理名言。可謂吾輩藥石也。唯更漏已深。人力車待戶外久矣。客沈醉一喝曰。忍焉。何不思良之履邪。

西京傳新記

二編

光六

島原花街

當京城之坤位。里而近者曰朱雀。蓋古昔王朝盛時。朱雀門之所在云。今勅爲肝陌。中有一郭。名曰島原。紅樓翠閣。擲比不啻家畜西施。戶養玉環。所謂溫柔之鄉是也。何由名島原。此地原係寬永中開拓。當時海內騷擾。土寇蠶起于肥之島原。據天草之墟。而京師恬靜。花街始開矣。故名焉云。幅員宏濶。東西設門。南北疏巷。街之中央。種櫻數百株。以供遊客觀



翫娼妓分爲二等。其上等者曰太夫。亞太夫者曰天神。神轉進何曰太夫。蓋原秦政封松之故事也。故稱之曰松之位。何曰天神。蓋妓價一夕而當二十五錢。則今不啻公神會。每月以二十五日爲永制。管公尊號。諡曰天滿天神。故校以此名云。又曰管公在時。酷愛梅華。故又稱天神曰梅之位。蓋比較諸松之位者邪。抑十八公之與管三品。今皆下爲娼妓之名號。何其稱謂之紊亂。一至於此邪。居士於初編。具論女太夫僭稱。而今又有此稱。方今乘國均者。宜別撰佳名而改其僭稱也。佳名之尤不可不改者爲島原。何則。被溫

西京傳新記

二編

六七

桑花柳之淵藪。以西陸邊邑于戈擾亂之地名。何其不倫之甚耶。予不自揆。竊換以桃源之字。蓋桃源與島原以音相近。而字面甚雅馴也。抑此地雖無挑花萬樹之觀。洞口可以通魚郎。桑麻雞犬。自爲別天地。是亦人間小桃源耳。唯古桃源之地。有畊作熙熙之風。不知帝德安在也。今之桃源則有租稅。有戶稅。有地稅。有人稅。所謂租吏催錢。夜叩門者是也。此亦時勢不得不然而然者。未可慕彼而歎此也。

洞門春深。出口之柳摩風。千條萬縷。送迎朝暮之客。紅樓月落。解語之花泣露。錦衾綉被。空結雲雨之夢。

明星爛爛。則銀燭照綺筵也。輕雷隱隱。則人車送豪客也。粉面皓齒。獻笑其前。曲肩優體。呈媚其後。財主拍掌。麾之以肱。則歌妓舞女。畢來既升。金夫傾囊。擲之以花。妓家呼羅什并仲居引舟之。間者名之曰仲居。勾當拋席之事者。如崩其角而誓首。烏乎無錢。則雖陶朱猗頓之富翁。入朝之曰窮鬼。苟有金。則雖簞瓢之回也。世推之稱福神。洵哉。蕪李子之嫂之。以位貴金多。而俯伏之邪。洵哉。以佐州之士。爲媚藥之上品邪。然則舉世年少亡家破產。典賣傳家之市宅。僦居于九尺二間之陋屋。親子三口。雇糊口于人力車。要之

西京傳新記

二編

七八

雖其宅心制行之亡狀。令之然。抑亦翠蛾一笑之所釀成。豈可不懼而戒也哉。若夫至於風流才人。樂而不淫。哀而不傷。則劉玄之天台。廣平之梅花。又何足深尤邪。世之老實主翁。目未嘗知島原之方向。足未嘗踐祗園之新地。畢生局促。守父母已許之無鹽。不知復西施在人間。是亦固陋之翁耳。不開之民耳。夫蓮花雖淨乎。不入汚泥。則不能知泥中之趣也。牛兔雖美乎。不食則不足解其味。唯能一沉迷於花柳之淵藪。翻然覺悟者。初可與語此中趣也。初可與稱粹人無愧也。



島原之郭。僻在于南郊。其折花攀柳者。非擲萬錢。則不易求。若祇園新地。則反之。品佳而價廉。且其地近在於目睫間。此所以鳴東日盛。而島原月衰也。然不失古名妓之品位格例者。全在此而不在彼也。島原妓院。亡慮數十家。而其尤彰者。曰隅屋。曰藤屋。曰某。曰某。大抵客之聘娼妓者。皆就大樓招之。名曰妓令人抱衾與褥。肅肅宵征。其大夫之於天神。雖寔命不同。毫無怨尤之色。頗有國風小星之趣。亦后妃德化之所覃被。詢非偶然也。誰謂二南之治。不可見於今日乎哉。

西京傳新記

二編

九

春宵一刻。千金不啻。花影上欄。而珠簾逗月。紫藤樓上。銀燭如星。翠娥按歌。而紅粧彈絃。長袖呈舞。而沈麝散風。既而太夫臨席。金蓮步緩。媚香薰入。綾羅衣裳。鳳舞龍躍。璫珥櫛重。而嵌以珊瑚。七寶釵長。而飾以珠玉。當是非辨才天女之來降。則歌舞菩薩之化身。回首而一笑。則小町衣通。皆吾邦名妓欲徒跣而走。捧心而一顰。則西施孟嬌。殆如無色。諺所謂。立則芍藥。坐則牡丹。行步姿容。則百合花者是也。於之乎坐客皆醉。獻酬如織。載號載嗽。亂我極盤。屢舞僊僊。有放飯者。有流飲者。有咤食者。有噉羹者。有反魚肉者。不

知漏刻已傾。而殘燭見蹊也。既而清衣誘客。導而赴廁。反而至洞房。極盤悉收。而銀燭無影。轉瞬之間。闌熱樓臺。一變為冷淡世界。半點燈檠。欲滅乍明。六曲屏風。斜圍枕上。宜爐香絕。而茶鐺奏笙。譬猶演劇。柝鳴機轉。而別開局面也。大妓既已貼坐錦蒲團上。銀管喫烟。而朱唇噴雲。眼波流秋。而嬌姿動人。客脫外套。而坐焉。離妓乃進寢衣。整頓客之衣裳及佩具。置其枕上。問安而去。妓吮不語。如內有隱憂者。客性且問曰。卿何其鬱鬱不樂如此耶。得非宿病再燃耶。得非頭痛偶作耶。何其不一笑回首以慰我懷抱耶。

西京傳新記

二編

三

妓尚默而不語。於邑久之。微笑曰。妾沉吟不及發一言者。蓋郎君面目。似類妾良人。而不誤分寸之故爾。客本千金子弟。頗有大王之癖。好色愛魂飛肉動。而故顰其眉曰。如聞卿亦有良人在。定知風流才人。而配其才色雙絕。如卿等者。定是積善餘慶。豈不可羨。那僕今歲十九年三月耳。未定其佳偶。願得聘一佳人。以慰父母惟憂之心。雖未能稱孝子。庶幾有由以。免不孝之名者耶。妓低聲曰。如然。郎君無聊。不惟中饋無人。其輾轉反側之情。可以想見也。抑世名媛室女。獲佳婿如郎君。有心腸如郎君。滿酒後爽如郎君。

則思戀慕切。不能自禁。豈何如哉。郎君所以羨妾者。妾亦推以爲羨。郎君也。今郎君不以妾之不敏。一見如舊。妾安得不吐露其衷情。以布腹心邪。妾本鎮西士族之女。嘗嫁同藩某。未及作婚。而良人勤王。已戰沒于關左。未幾父亦戰沒。兄亦戰沒。闔族勤王。以殉國事。尋而廢藩之議起。祿亦奉還。遂扶母上西京。爲商邪。未解算數也。爲農邪。未服耒耜。既而阿母罹篤疾。去歲八月。溘焉沒矣。弟亦多病。今年八月。又沉綿不起。至八月妾是以鬻身于章臺。以供藥餌之願。養今以郎君尊貌。酷肖良人。俯仰今昔。中心如噎。是以

西京傳新記 二編

北一

及之。願郎君憐賤妾之薄命。幸得充箕掃之用。不獨妾之幸福。亦泉下父母之悅可知也。且泣且語。客亦動容。感歎久之。曰。僕驚才。無知人之鑑。而貞淑清操。如卿等者。以爲尋常花柳之比。殆且失和璞於目睫。僕亦將告父母。卜吉以聘卿也。卿其幸毋辭焉。妓欣然指淚曰。果令其言如暇日。自今以往。郎則妾之良人。而妾則郎之內子。連理之枝。比翼之鳥。如鴛鴦。如琴瑟。食亦俱餐。寢亦同衾。觀劇必俱焉。賽佛必俱焉。貧富也。艱難也。生死同之。亡論蝦夷。松前。朝鮮。琉球。如英。如米。如佛。如澳。如支那。天竺。亦所不辭。郎年百

歲。妾九十九歲。來世必爲並蒂之蓮。爲兩頭之蛇。綢繆繆。遂化爲石。豈不亦愉快哉。客沉迷如醉。乃語之曰。昔者男女約。靡他之誓盟者。有斷髮。斬指之事。今則不須此般陳手段也。卿其何以爲約信邪。妓秋波一轉。泥郎曰。不須多言。乃如斯耳。瓊臂早已在郎之角枕下。偶鄰樓有人。朗吟春閨祕戲歌曰。爐香冷。漏聲殘。樓樓絲管夜正闌。角枕架。錦衾爛。屏掩溫柔夢不寒。屏裏鴛鴦私語細。訴盡十年幾辛酸。無端也。結巫雲夢。觸枕金釵響珊珊。歡去香衾春如水。雨二三點攔攔干。

西京傳新記 二編

北二

如斷如連。餘音嫋嫋。令人魂消肉動也。時夜且半。東寺鐘聲蚤。已來于枕上。屈指數之。則報十二時也。客割愛將去。乃探囊出一封堵幣。予妓曰。此是些子寸衷。聊以表定情之儀云爾。至其家具。納采之資。則千金亦能辦之。萬金亦辦之。幸毋以勞思念。不日將告二親。詢故舊。以卜吉日耳。卿其屈指逢之。妓狂喜出於望外。竊以謂是三年福德之會也。乃竊摹嚮之堵幣一封。大四五寸。高一二寸。度的十圓鈔三四百圓耳。以此供其思欲。求甘藷良田。而建南氏會社。娼妓此食斗諸南氏斗大珊瑚珠。足以飾金釵。等身綾羅。可以供體。

嘗聞昔者有仙人腰纏千兩箱乘蒸氣船遊于龍宮

城人皆艷羨以爲人生至樂矣意者妾所昵財主者

無乃其人乎乃臨別謹奉寶梳一枚金釵一枝貽客

曰此是賤妾婚嫁時君夫人所貽梳則玳瑁而釵則

純金皆千金之物妾常十襲珮服未嘗須臾離其躬

今願附之郎君以表無貳庶其諒之客大悅謝而袖

之遂上車而別妓佇立以送既而歸其房就燈下折

嚮之一封熟視之則非楮幣東寫真牌二百葉而封

之也妓吐舌大託曰果如其所見妾亦將覺其然故

嚮所貽者則馮爪之抹子耳鍍金之釵兒耳蓋燈市

西京傳新記

二編

世三

十錢所購求客已欺吾吾亦騙客以瓦礫報瓦礫於

妾乎何損焉因引枕就寢東方既白而鳴鴉報曉連

呼曰阿房阿房

爲妓難爲客亦不易大凡娼妓所施設有呈媚而欺

客者有挾色而固寵者有訴薄命而取憐者有吐露

衷情不令割愛者詭譎百端不一而足能洞見客情

施以其術故百發百中箭無虛發客之誤陷其術中

者大以覆其家國小以危其軀命鄙語所謂傾城涕

淚能漏其倉屋蓋非虛構也唯能俊爽才人愛色而

弗溺色喜情而不迷情一點不挫折於香囊脂粉之

氣者始可與語溫柔鄉裏之趣也

有客無聊獨卧空房茶冷酒醒而妓未來也鐘鳴漏

盡而妓未來也欠伸百回而妓未來也乃對枕語之

曰角枕歸乎寢無妓青衣倉皇走而報之妓即來矣

少焉又曰角枕歸乎擲無酒青衣走而辨之酒立來

矣又歎曰角枕歸乎盤無散青衣走而奉之散亦咄

嗟至矣客尚有憂色又歎曰角枕歸乎歸無車青衣

俄命之車乃立至矣妓艷然不憚曰妾不敏幸辱眷

顧琴瑟和諧以樂今夕酒云則酒散云則散車云則

車起云則起坐云則坐唯其所命然而尚且有猶豫

西京傳新記

二編

世四

色何邪客笑曰吾所憂者非口腹耳目之慾也才色

雙絕卿具之吹竹彈絲卿善之錦衣玉食卿擅之獨

所不瞻者則手管耳妓院方言有策略者謂之手管妓而有手管雖

顏色甚不揚泣而欺之罵而怒之笑而媚之疎而親

之翻弄少年於股掌掠奪千金於枕席皆手管之所

致卿其思之妓大感悟自是一意覃思于手管遂博

大利擅盛名云抑又聞之凡娼妓無手管以騙人者

呼曰沒手沒手者則娼妓所深愧故娼妓專尊奉

祝千手觀音云

富貴不能淫貧賤不能移威武不能屈能具此三者



在於男士。則謂之大丈夫。在於娼妓。則謂之意氣地。  
又謂之張。史稱日本史曾我祐成曾遊大磯妓院。與  
妓阿虎眺馬情好日密。和田義盛亦欲聘之。不聽。義  
盛怒。威以禍福。搖之。阿虎益拒之。且曰。祐成寒士也。  
義盛大家也。今弃寒士。而就大家。狗鼠亦且不食其  
餘。妾不忍爲此不義人也。義盛不能強之。乃延而觴  
之。阿虎竟宴。不侑一卮。亦不交一語云。烏乎。如阿虎  
者。能令富貴威武不能淫。且屈者。所謂意氣地是也。  
今之娼妓者。有立意氣地者乎。無有也。有解張者乎。  
無有也。唯其所能者。賣色而騙客耳。焚金而營私耳。

西京傳新記

二編

卅五

何其風習之日汚而月下也哉。雖然此言也。講禮於  
淫肆耳。念佛於屠家耳。以是律之風情水性之娼妓。  
恐非通論也。唯士而無氣節。士而不踐然諾。帖耳搖  
尾干祿於權貴。依熱於勢家。不知自恥者。一聞阿虎  
立張之與意氣地。不少屈於富貴之風。豈得不愧而  
死耶。昔之娼妓者。人而虎耳。今之娼妓者。人而狗耳。  
呼曰阿虎。吾知其命名之不虛也。

割烹樓

西京之府下。以割烹彰者。基時鼎列。不遑盡舉。而其  
尤翹翹者。曰生龜。曰比良木家。曰皆春亭。曰月波樓。

曰清輝樓。曰菊中。曰井筒。其品少下。價尤廉者。曰圓  
萬。曰藤屋。曰若蛭子。其他屠戶肉店。如柳斯比。如鱈  
斯次。大率廈屋渠渠。可以饗萬客。園庭瀟灑。可以賞  
風月。況有酒如澗。有肉如林。雪中供筍。孟宗之孝可  
坐而致也。盤上膾鯉。王祥未必卧冰也。二月中旬。早  
進三寸之灰。唐宮之豪奢。咄嗟而辦之。萬錢可以地  
八珍之饌。郇國之廚。一舉而設之。物其旨維其嘉。不  
唯南詠白華之詩。而長于彼者。則短于此。工於西者。  
則拙於東。未見其能併衆美而具之。一手者也。今試  
一一品藻之。以爲世之醉侯飲伯之指南車。以令不  
迷其方嚮云。蓋比良木之與皆春。饌非不精也。酒非  
不烈也。然其居在城市之間。乏山水臨觀之奇也。月  
波清輝之諸樓。俯鴨河之潺湲。而仰數岳之突兀。空  
于避暑。空于賞月。于雨于雪。頗具四時之觀。獨至其  
酒饌。則未能甚精也。况生龜之豐圓。萬之廩。可以飽  
饒客。不足饗佳賓。可以醉郵翁。不足娛都人。此所以  
其長短工拙。不能兼而有之也。獨絕類逸羣。宜于風  
流好事之客者。今得其二焉。一爲竹葉。一爲瓢亭。竹  
葉之亭。在鴨西先斗坊。仰可以觀東山。俯可以臨鳧  
川。湘簾半捲。繞以丁字之欄。涼棚架水。斜通雁齒之

西京傳新記

二編

卅六



橋銅瓶<sup>上</sup>挿<sup>二</sup>花卉<sup>一</sup>。奇香<sup>二</sup>嚴人<sup>一</sup>。沙壁挂<sup>書畫幅</sup>。古色可掬。匾額柱題。皆當今名家之筆。此皆亭上<sup>平</sup>目擊。若夫至於割烹之新鮮。與鹽梅之<sup>三</sup>旨甘。亦非尋常易牙之<sup>平</sup>得調理也。

食必精而膾必細。無量之酒。不令飲者及亂。多多之肉。不令食者停筋。今之易牙。視諸古之易牙。不唯獲我口平嗜。併有深得尼山鄉黨之旨也。凡酒樓掌割烹之事者。名曰板塲。板塲則切之謂。板塲用心。一椀之羹。不苟調。半爨之肉。不苟宰。以衆口爲己口。不至阿其所好。要歸其公平而已矣。世之饒客。不察良工苦心。有在飲食醉飽。與庸常羹膾。十把一束。同其品流。以爲噲伍者。我重爲板塲悲之也。

西京傳新記

二編

卅七

竹葉之亭。四面皆花柳之淵叢。比屋連軒。客之遊者。必聘歌妓舞女。以佐其歡。是以絲肉之聲。無家無之。獨此亭絕不許邀娼妓。又嚴禁絲肉。此取以其異。尋常酒樓。而獨擅其場數。大凡百工諸商。博名于當世者。做人之取。不做。而後可以擅其場也。若夫不能然。事事拾唾餘。甘就人之履舄者。則非吾取知也。

歌亭在鴨東南禪精舍之門前其地幽邃喬松離立蒼翠蔽天風來觸之則稊稊作聲如波濤如細雨而

其下茅屋參差向背相接。厓離城市。一牛吼而有此幽邃境。一可樂也。且其池亭雖無宏壯輪奐之美。有池盎然。可以濯纓也。有亭雅潔。可以會友也。有牕軒濶。可以眺臨田野也。二可樂也。苔石無塵。脩竹掩門。蒼蘼深鎖。清香薰坐。小室茶寮。雅而不華。庭不甚廣。苔老樹密。竹一二叢。松七八株。與石燈竹籬。嘉卉幽草。點綴其間。尤得位置之宜。三可樂也。亭廣者可以容七八席。小者亦不降三四筵。翠壁紗牕。盡窮結構之妙。盆石瓶花。亦非尋常之物。四可樂也。而其饗賓。不別供奇饌。湯煎雞子耳。糖燉紫栗耳。客餘興未盡。

西京傳新記

二編

卅八

有<sub>ニ</sub>好<sub>ニ</sub>而命<sub>ハ</sub>。轂<sub>ハ</sub>若<sub>クハ</sub>膾<sub>ハ</sub>。若<sub>クハ</sub>羹<sub>ハ</sub>。唯<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>欲<sub>ハ</sub>。要<sub>ハ</sub>以<sub>テ</sub>不<sub>レ</sub>失<sub>ハ</sub>其<sub>レ</sub>本<sub>レ</sub>色<sub>ハ</sub>。  
為<sub>ニ</sub>尚<sub>ニ</sub>焉<sub>ハ</sub>。故<sub>ニ</sub>湯煎<sub>ニ</sub>雞子<sub>ハ</sub>之<sub>レ</sub>名<sub>ハ</sub>。獨<sub>レ</sub>傳<sub>ハ</sub>播<sub>ハ</sub>遠<sub>ハ</sub>邇<sub>ハ</sub>云<sub>ハ</sub>。  
三<sub>サシ</sub>楸<sub>ギ</sub>巷<sub>ハ</sub>某<sub>ニ</sub>酒樓<sub>ハ</sub>。置<sub>ニ</sub>酒高會<sub>ハ</sub>。翠<sub>ハ</sub>娥<sub>ハ</sub>彈<sub>ハ</sub>絃<sub>ハ</sub>。而<sub>レ</sub>紅粧<sub>ハ</sub>呈<sub>ハ</sub>舞<sub>ハ</sub>。銀<sub>ハ</sub>  
釵<sub>ハ</sub>映<sub>ハ</sub>燭<sub>ハ</sub>。而<sub>レ</sub>長袖<sub>ハ</sub>飄<sub>ハ</sub>風<sub>ハ</sub>。歌<sub>ハ</sub>曰<sub>ハ</sub>。

春花妍。春花妍。來看東山三月天。  
月有清光花有影。醒人狂歌醉人顛。  
二串黎祁軟而白。滿酌何論雙店客。  
鳬川春好夏尤宜。就中尤好是披時。  
白紵紅裙聯袂去。晚涼如水上冰肌。  
與吟。與吟。與吟。與吟。與吟。

又歌曰。

眞葛之原商賈起。月氣吹露蟲聲死。華頂松蘿早  
知秋。夕陽半山曠錦綺。日暮山雲晴又陰。寒雨蕭  
蕭欲作霖。暮鐘聲。涇長樂寺。人與黃葉共情深。想  
見藤六關豪舉。瓊樓玉樹迷。野處園嶠有客擁紅  
粧。蒲團暖處相對語。與咿與咿。與咿與咿。與咿邪  
兮。

舞妓舞訖而顰拜。舉坐一口。嗟稱曰。妙兮。妙兮。蓋此  
宴送某先生赴東京也。一席則試畫。一席則揮書。一  
席則敲詩。一席則案歌。華箋龍躍。而霜縑鳳翻。雲煙  
生於筆。而山岳現於紙。迂遠先生。氣吞一世。舉白屬

西京傳新記 二編

廿九

固陋處士曰。方今文明日開。雖以五尺童子。皆知讀  
橫文。講洋書。而子獨墨守支那學。攻與世痛痒不相  
關之經藝。以不知與時推移。何其固陋乃然邪。假令  
未能讀西籍。宜當窺譯文。以少廣其知見也。言未畢。  
固陋處士。扼腕一喝曰。咄。饒舌。敢弄汝公。我以吾口。  
讀五書。其於橫文。讀與不讀。唯其所欲。安知非費閑  
心恤他人頭痛邪。抑今之洋學書生者。皆沒字鈍漢。  
動曰。西洋。西洋。費有用之財。而購高價之書。入塾三  
年。其所獲不償所失之一半。甚則併吾國名地名。官  
名。姓名。不唯不能讀。亦不能記臆之如此。而舍不問。

吾恐未至十年。閩國人民。悉為沒字之人。雖歷代  
天皇尊號。至不能讀一丁必矣。夫明於彼。而暗於此。  
尚或可恕之也。今之學洋者。不唯不明於彼。併而暗  
於我。彼我兩不得。而無益于國。不如始不學之勝也。  
子不知慮於此。唯西洋之為學。驅而誘人於不學之  
域。此吾尤不解。面熟眼張。舌戰紛紜。相連結不解。  
未幾經濟子與風流生。又割據一隅。風流生大白引  
滿。大言曰。經濟子。經濟子。汝以經世有用之學。而自  
委任。不知其所謂有用者。果何事哉。子平素一飲。動  
傾數升。喜罵人壓人。一意反覆。萬言不啻。豈可謂有

西京傳新記 二編

四十

用邪。漏傾燭殘。羹冷酒盡。客醒而我益醉。人困而我  
愈酣。至於鷄叫天白。乞溺者相喚呼。尚能嗷嗷焉不  
息。豈可謂有用邪。抑所謂經濟有用者。酒亦不多飲。  
飯亦不多喫。朝起而暮寢。多納而少出。子則反之。悉  
失養財之方。是所以子家道日縮。不給也。經濟子啞  
然大哂。勃然作色曰。汝詬我罵我。以為無用之甚者。  
似矣。雖然。天下尤無用者。莫甚於書畫。莫大於骨董。  
汝好耽古書畫。愛古器物。夫晉帖唐碑。非不奇也。湯  
盤周鼎。非不古也。然至其救飢。則弗及稻與粱也。至  
其禦寒。則弗及布與帛也。然而一幅之書畫。非拋萬

錢則不可獲也。一拳之佐石，非費千金，則不易購。昔者有一釵之價七十萬錢者，識者擯斥，以為妖物。今之所謂古書畫者，無乃物之妖邪，無乃喪志之具邪？而汝此之耽溺，至以生命易之，謂之無用邪？謂之白癡邪？謂之喪心發狂邪？詬罵調笑，生面下芥，而風流生若聞而不聽，不唯馬耳風，冷笑曰：子知其一，而未知其二者。僕請試辯之。使子知其圖與秘策而已，抑僕之好風流，非信好風流，蓋假以粧點其面目之策而已。既其書畫古器，非信愛觀之，蓋假以騙生硬書生，統粹子弟之術而已。俾僕信愛風流，喜書畫，觀古器物，子毋三口其何由得糊口於今日邪？其何由得日傾一壺酒邪？經濟子大驚，再拜避席曰：僕亦將執東帛以事先生。

## 西京傳新記

## 二編

## 四一

既而空客沈吟，各作送別詩。有擬唐者，有學宋者，有倣明清者，或競清新，或闢纖巧，或神韻，或冲澹，或雄健，或流麗，百篇自有百色之趣。千首自有千樣之態。滿室傳觀，迭相稱譽。中有一措大，苦吟百回，竟不得一詩。歎曰：僕小小攻經藝，至韻語唾弃而不顧，何則？以其無用當世耳。僕嚮聞經濟子與風流生論用之有無，經濟子以書畫古器為無用之第一，然較之與

世痛痒不相關之浮文空詩，未必可繫為無用也。獨其尤無用者，則詩賦是也。今之所謂詩人者，拾古人之唾餘，詆古人之糟粕，其自稱曰錦心綉口，其實則藍縷耳，弊袍耳。以藍縷之心腸，詆唾餘之糟粕，非乞丐則癩狗耳。學乞丐贏狗所為，公然曰大家，曰名家。曰先生，曰大人。今乞丐贏狗聞之，其必自誇詡曰：彼業已為我輩所行，自號曰大家，曰先生，我亦稱先生，彌大家，誰有復尤之者耶？醉語調謔，言言砭骨，舉坐蕭然，無敢出一語者。妓慰喻曰：先生醉矣，先生醉矣，人力車候于門外，既過二時間矣。措大尚啾啾不起。妓促之，扶持上車。車夫電馳，挾輶而去。未及大達，道九軌，呼曰：侯焉。吾將嘔吐車夫停車。措大直從車上一嘔，酒臭不可堪。車夫擁鼻而立。乍有白黑雙狗，走就車下，盡舐其吐物。措大熟視久之，曰：誰居舐吾唾餘者？何其狗兒似大家先生耶？

## 西京傳新記

## 二編

## 四二

居士草此卷，稿已脫矣。飽酌一醉，自慰其勞。陶然枕肱睡焉。夢有輾轉然來者，見之則人力車也。又有長大特立，頭纏鐵線者，察之則電信機也。有白衣旭章杖竿來者，接之則國旗也。其他色色器物，種種鳥獸，盡集其枕上。相俱自訴曰：聞先生頃著西京傳新記，

何不記人力車。何不記電信機。何不記天長節。何不記博覽會。何不記都踊ミヤコウチ。何不記長樂閣。何不記修學寺。不記可記。而記不可記。吾輩惑滋甚也。居士ガク首肯。輒援筆先記天長節。記未及其半。乍有剝啄叩門者。蹶起邀之。則吾友文石堂主人也。蓋來促傳新記二編也。乃急投ス魯魚而附之。如其三輯四輯。亦當不日而脫稿而已。

西京傳新記二編畢

西京傳新記 二編

四三止

明治七年甲戌十一月廿七日

官許開板

三谿居士著

發兌書林

西京 柳馬場通御池下町

文石堂 北邨四郎兵衛

同 錦小路通西洞院東入町

暖錦堂 齋藤新四郎



# 西京傳新記

明治十年八月廿五日  
東京地誌堂主人月堂藏版

## 西京傳新記三編序

人皆喧傳。以為新奇。予獨擯斥。以為陳腐。人皆嗟稱。以為精工。予獨詬罵。以為粗拙。人皆推獎。以為才俊。予獨唾棄。以為庸愚。人皆艷羨。以為善美。予獨嗤笑。以為醜耻。人之所推。予擯之。人之所好。予惡之。人之所尚。予賤之。人之所憎。予愛之。人之所珍。予棄之。予則風馬牛耳。雲煙過眼耳。九其所作為。好惡愛憎。喜笑怒罵。娛樂憂悲愉快。與世相背。與人相悖者何邪。昔人曰。人心不同。如其面。蓋其不期異。而自異而已。予著此編。亦復如此。舉世擯斥。以為陳腐。予竊珍覲。以為新奇。舉世詬病。以為粗惡。予竊嗟稱。以為精工。舉世唾罵。以為庸愚。予竊自負。以為才俊。舉世嗤笑。以為醜耻。予竊誇調。以為善美。故舉世詬之。舉世嘲之。舉世惡之。舉世擯之。舉世賤之。舉世卑之。呼為馬。呼為牛。呼為猴。呼為鹿。為狗鼠。為螻蟻。為虱。為蚤。為蛆。亦所弗辭。為魃。亦所弗辭。為土芥。為塵滓。唯其所詬罵。此吾所以為馬耳。風也。所以為過眼雲煙也。雖然。人各有心。茫茫坤輿。億萬人中。目吾以為蟬邪。吾且欣然。餐風飲露。高唼于老柳古槐之陰。以避螳斧。蛛網之厄也。呼吾以為胡蝶邪。吾且栩栩然。遊無

西京傳新記

三編

非月堂藏版

何有之鄉。廣莫之野。以從彼蒙莊也。嗚呼莊邪。蝶邪。  
蟬邪。虺邪。蛆邪。蚤邪。虱邪。將螻蟻邪。狗鼠邪。抑鹿邪。  
猴邪。牛邪。馬邪。雖吾弗能自知也。是爲傳新記三編  
序。

明治八年乙亥四月。三溪居士。識于西京御池巷。紫  
藤花下小書樓上。

西京傳新記

三編

半月堂藏板

西京傳新記三編

三溪居士 著

大博覽會

所以闕廣人智。翼贊文明者。靡大於博覽會也。故世界萬國。無國無之。其一設之也。遠近輻湊。觀者蟻集。唯懼不得一觀。知識不廣。是以維新以還。設博覽會于大內。使人縱觀之。聚五大洲物品于一堂。覽千百。年古器于目前。越裳之白狼。可檻致以供村婆之觀。肅慎之楷矢。可什襲以悅好事之士。此是彥火火出見尊。從龍宮所齎歸滿沾名玉。此是鹽土翁所寄贈。

西京傳新記

三編

半月堂藏版

無目籠。彼則八郎巨鐵。此則定家色紙。源三位弓箭。則與忠度歌稿同席。韓慶感狀。則與楠公檄文交膝。小督玉筯。則鏗爾時。彈想夫憐曲。蟬丸琵琶。則夜深或發流泉啄木音。三尾舍鉦與景清眉尖刀相對。截靖。則不問而知為平八鎗。青葉笛。則一睹而知為無官大夫遺物。其刀室不漆。古色可掬者。得非青砥佩刀邪。其媚香薰人。錦囊韜光者。定是政尼。粧鏡寶刀。有截鬚膝圓。鎧甲有無指薄金。燭臺盃。則義景之頭顱。而朱柄魔。則謙信之軍器。鐺曰燒口。織田右府所愛。說與名平蛛。留松永久秀手澤。其他西陣錦繡。

東京紫帛。南都烏玉。北越絳繖。為陶器。為筆研。為農耕蠶織之具。色色排列。種種堆積。使觀者心目眩轉。應接之弗暇也。

五雲春深。鳳闕卓霞。九重煙暖。紫宸隔花。百尺竿頭。彩旌飄風。一片大牌。題曰博覽會。時正三月。百花爭發。好風扇物。都人士女。遠近競觀。衣香扇影。紛紛如蝶。綺羅紅粧。絡繹似蟻。求觀者。皆買紙券於禁門入焉。村媼五六輩。與里婦七八名。勸童牧兒。九一隊十餘人。有負打包者。有肩行李者。皆曳竹杖。穿茅鞋。相提携來。而里正阿兄為之鄉導。乍觀大略。並陳村媼。

西京傳新記

三編

半月堂藏版

瞠若疾呼曰。嗚邪。消魂。何其似菅原傳授。演劇時。平公牛車邪。阿兄微笑曰。毋大駭。恐速旁人指笑。此是八葉車耳。既而入左腋門。經過紫宸殿前。少年一一指說曰。彼則左近權。此則右近權。蓋保元之戰。平重盛與惡源太義平。大戰于大庭。三匝櫻橘樹是也。賴政射怪鳥亦此處也。菅公雷震亦此處。喋喋辨說。步步指點。遂相笑謔。至清涼殿下。清涼殿前。白沙如雪。漢吳二竹。左右作叢。而其中中央。安金蚩吻一尾。冒以鐵網。日光映射。金彩襲人。榜題金蚩吻三大字。一士族顧其妻兒。指示曰。此尾陽名。

護屋天守閣上之物、慶長中加藤清正所寄附、迄維新偃戈、建縣廢藩、輸之於東京、厠博覽會、聲名益喧、未幾航海赴澳國、又列其會場、西人激賞、以為奇製、今歲亦復西上、參斯會、都鄙喧傳、爭先觀之、是以銀鈿陶器、以至佳器、新茗、或模造其形狀、或被其名、新報以播之、繪畫以鬻之、詩人以詠歌之、歌人以諷誦之、何其一出吻之名之盛且大邪、抑世之蚩吻、不之其類、然而此物獨擅其場者、豈以黃金鑄造之邪、將由製之者非常人也、嗚呼、古今物之可傳者存乎人、而不關於物、苟其人賢乎、雖物或不貴、亦可以傳不

西京傳新記 三編

三 半月堂藏版

朽也、衆皆首肯曰、洵然、洵然、其他環視、評蚩吻者、不知幾十人、喋喋嗟稱、如群雀嘶鳴、如蒼蠅集肉、一人嘆稱久之曰、此物全身皆黃金所鑄造、偉麗壯觀、固不待道也、唯方今文明、盡化無用、以為有用、故雖敗鼓皮折脚鐺、莫不供其用、若舟諸造幣寮、鑄為圓金、普頒布天下、則其功德之大、何唯一尾蚩吻、徒怡人目而已哉、言未畢、有啞然笑于背者、其人顧而視之、則白頭老措大耳、措大一揖撫掌曰、足下持論、正則正、理則理、雖然、在文化文政之昔日、則或見採用、在文明之今日、則不免為陳言迂議也、且方今廟堂有

久、百廢畢舉、雖銖銖剝剝、苟益於國家、豈有遺而不顧之者邪、然而舍不問者、意者自有深意在焉、固非淺人所所誹議也、足下姑舍其所見、令僕盡其所蓄、不獨裨益其學殖、幾足資博物一端邪、當是之時、觀客蟬集、環立而聽之、措大頗有得色、乃指金蚩吻、語衆人曰、僕原寒鄉一書生、學殖淺陋、豈敢費無用辨、誇詡其博洽之為哉、唯頃在三條逆旅、偶兩日無聊、獲博覽新報一紙、讀之、中有蚩吻行詩一篇、篇末題曰、奚水山人、命意新警、句句驚人、定是當今一名家、僕晚酌一醉、畧譜記之、請為諸君誦之、衆皆傾耳聽之、乃

西京傳新記 三編

三 半月堂藏版

朗吟曰、

誰拋黃金十萬鈞、鑄造八尺一雙鱗、其鱗維何魚中虬、面目猙獰鬚鬣尾、嘆憶昔元和之首慶長尾、七道豪傑悉基峙、紅波漂血草木腥、短狹射影饒鰐死、人中有虬氣食牛、結髮執贄老獼猴、負嵎一吼百獸懼、功成登封後火烈、阿虬軍須累萬貫、不供宴安與珍玩、鑄為魚虬而魚金鱗也似金毛燦、安諸尾陽之天主閣、最高層、百雉金湯帶霞凌、雲太峻、噌旭日初且勢欲躍、依稀海市蜃樓天半升、爾來星霜二三百、行旅仰瞻手加額、降至明治維



新秋。廢藩建縣形勢革。負虎能識答明時。鮮高居  
卑亦一奇。西游來參著明會。博覽會。西洋名曰著明會。清涼殿  
前逞雄婆。嗟呼阿虎人而虎。人虎迹。英空黃土。不  
似魚中虎長存。驚花海裏好拚舞。

衆皆感歎相語曰。憾不獲新報讀之。措大撫掌曰。諸  
君方今第一等閑化人。而獨於讀新報不及。僕輩不  
閑化人。僕恒憾之。抑新報之裨益于人智。不唯神丹  
良藥。一紙百文。亦可以啓蒙開茅。而況身靜坐一室。  
足不出門戶。九海外萬國。殊方絕域之奇貨異物。以  
至夫上下古今歷世累葉之名畫古帖。鎧甲刀劍之

西京傳新記

三編

半月堂藏版

類。一瞶瞭然。悉鍾目睫。豈不廣亦甚哉。一僮父挺進  
謂之曰。僕今而知新聞紙可貴。博覽會不可不赴也。  
當清涼殿之右側。啓會場門。挂一雙柱聯。題曰萃萬  
國之珍異。極宇宙之大觀。填以紺泥。筆致遒勁。有鳳  
翥龍躍之勢。觀客雜沓。至此脫屣就履。正面揭會場  
注意十餘則。令觀者一瞶瞭然。知其方嚮也。面場右旋。  
長廊曲折。左右設欄。陳列色色古器。皆糊貼細小片  
楮。詳記其來由。曰某古研。則某高士所弄。某書幅。  
則某寺院之珍襲。某寶冠。某玉笛。則某天皇某。

法王之御物。香爐煙消。麒麟欲躍。書架描金。群鶴下

汀。萃玉之几。文具之匣。赤甲白羽。女弓。金戈。在東房。  
靜之舞衣。佛之水干。琴瑟笙箏。在西房。玳瑁之櫺。珊  
瑚之鈿。香囊指環。在南廊之前。蜀之錦。吳之綾。繡帶  
緋袴。在北廊之下。雜貨有煙管摺扇。弄具有泥孩陶  
犬。其他為盆卉。為怪石。九覆載之間。亡論飲食衣服  
日用器械。莫物不備。流覽一晌。如啟龕法場。歷觀靈  
器寶物。觀客蠡屯。不能進一步。其壯觀可想也。

既而白頭措大。與鄉導年少其他觀客。後先追隨。度  
廊匝堂。各品評其物產。相偕至內侍所。則祥雲繞閣。  
異香薰人。中央高處陳列。至尊御物。洒金之机。彫

西京傳新記

三編

半月堂藏版

玉之架。為寶爐。為玉冠。金珠滿前。異彩奪目。中有鞞  
琫容刀。安描金架上。盛以紅錦囊。下糊貼片楮。題曰  
鬼丸。群客瞻拌。一睹知曠世寶器。鄉導年少亦在其  
後。注目久之。因引白頭措大之袂。試叩其來由。措大  
辭謝曰。此非一朝可盡。請卜異日。少年強請求之。措  
大搔首。頗有窘色。且答之曰。僕雖少讀書。寡聞固陋。  
豈敢足吐露其所畜積。以塵大方清聽也耶。唯僕嘗  
年喜讀太平記。畧諸記其劍卷。無已請為諸君語之。  
少年大怡。衆亦憇憇弗舍。措大首肯。漸將語其來由。  
乍有客相報曰。女紅場來矣。女紅場來矣。衆皆歡呼。

相提携而走。

遠近四民。日來觀於會場者。肩摩轆擊不常。而其綺麗嬋妍。尤驚人目者。為鴨東女紅場生員。其來觀預卜某月某日。若兩日。延卜其明日。要待其晴而來觀焉耳。大率一區生員。多者三四百人。少者不降二百人。皆靚粧炫服。具一部鼓吹。路上陸續相俱。絃歌而來。凡每區女紅場。作為若懸警家屋存四柱者一基。名曰無底家臺。柱外設欄。粧以燕子棟棠牡丹芍藥之楮木綃花。屋上安糊紙泥金。鳳皇龍虎之屬。楣上揭文本匾額。大署篆隸若飛白二大字。字形靈活。皆填以金粉靛青。與錦帷綉幕相映帶。道路觀者。有湧出一團彩霞之趣。生徒皆均服同粧。或紅或紫。繡帶耀目。而羅袖飄風。皆在家臺欄內。三絃雙鼓。與吹竹彈絲之聲。喧闐嘔啞。令人魂飛魄動也。此皆途上所目擊。其奇麗壯觀。可以想見其一斑也。

四月中旬。天晴日朗。好風如扇。物禁苑中御花園之北。茶坊酒店。聯軒比榻。華燈展。而茶煙颺風。觀客絡繹。來往如織。日將下。春人語紛紛。相報告曰。為原太夫來矣。為原太夫來矣。語未畢。現出一大紫旂于新綠樹梢來。蓋下京鳴原女紅場標旂也。區戶二長。

西京傳新記

三編

七

半月堂藏版

皆洋服而前導。次則了童兩行。凡二十餘名。執綳牽

花車。車上安簾。揷剪綵百花。次則歌妓一隊。紫衣紅裙。各持涼繖來。次則為太夫。其在上頭者。為養花樓名妓薄雲。而雛窓。而芳野。而寄木。而漆衣。為若竹。為末廣。為若鶴。為松扇。最後名妓。則為初賴樓初紫。皆才色雙絕。以清女之才。具小町之色者。花傘蔽日。而金蓮步遲。鬢髮如雲。而媚香襲人。十二金釧。重而欲墜。七寶瓔珞。斜而愈光。觀者心醉。魂飛魄奪。竊目為神仙天女來降。一客觀而許之曰。薄雲雛窓。美則美矣。艷則艷矣。雖然。非辨天音姬。不可接近。有金則所

西京傳新記

三編

八

半月堂藏版

艷奴隸。亦可以同一夕歡也。又其艷羨之為哉。一人曰。雖以西施之美。楊妃之艷。其實則皮肉以包藏其骸骨為耳。故昔人有皮裏白骨人所迷之句。抑人之在世間。不唯輕塵朝露。湮然一逝。骨朽皮破。誰有復顧而悅之者邪。喋喋辯論。各申其所見。不知日之蚤暮。旁有一茶肆。就樹下設榻。有老翁憇焉。沈吟思詩。乃援筆寫其所見云。

釵光髻影錦成堆。滿地紅雲芍藥開。風裏媚香春一脈。無人不道。麗人來。

傘掩斜陽髻影散。綺羅幾隊簇蛾眉。潘妃未慣金

蓮步。朵朵紅裙移履遲。

丰彩依稀洛水神。凌波羅襪送芳塵。白頭一瞰現先動。何況青年薄倖人。

趙瘦揚肥各作家。吳綾蜀錦闌豪華。雖然窮極專房寵。終是人間薄命花。

書至第五首。店婢相促曰。旃旌已下矣。閉場在近。老翁倉皇。急收紙筆。投茶錢而去。

各區女紅場生徒。會場來觀之日。呈舞曲于禁苑者。前後接踵殆乎無虛日。而獨異其撰者。為先斗町先斗町歌舞二妓。相團結分隊。設店禁苑。以供麥湯於

西京傳新記

三編

半月堂藏版

觀場者。不徒博一錢。其粧一摸。做妓院青衣。悉着緋袴。衣店中央安一大卓。被以錦氈。安以花瓶。雜挿芍藥。燕子杜鵑諸花。紅白交枝。芳芬襲人。又旁置妓女按舞之人。勝以粧點其景况。士女游憩。流連忘歸。亦一世之壯觀也。

既飲。駝峯熊掌之盛饌者。欲食布茶清齋之淡味。常賞牡丹海棠之名花者。却覺綠陰芳草可愛。夫御所博覽會。則駝峰熊掌之盛饌也。牡丹海棠之名花也。仙洞舊園。則猶如布茶清齋也。如綠陰芳草也。既飲其盛饌。又觀其名花。安可不喫其布茶。賞綠陰也哉。

抑仙洞舊園。在大內巽位。延袤數百間。竹樹幽邃。池沼如鑑。春而堆櫻雲于樹上。夏而發螢火于池邊。秋

之紅葉。冬之素雪。四時景無不畢備。可謂神仙之靈境。人間之樂地也。循池北行。右有亭榭曰醒花亭。閑

國風社於此。聽好國歌者。隨意參其席。亭右有邱。卽悠然臺。旧趾左邱右池。行數十步。有一橋。曰檜橋。

渡橋則見基礎。蓋橋毀故趾。又渡一長橋。原設雁齒橋之處。渡橋而西行。路左有老藤樹。是為藤橋故趾。

又有一邱。新樹蒨鬱。細草如氈。名曰三笠山。次則蘇鐵山。故趾。凡此間茶店酒舖。東西相對。青帘颺風。茗

西京傳新記

三編

半月堂藏版

煙出竹。徘徊顧望。令人有聯袂散步于平遠。負郭之野。舒暢其胸懷之樂也。山下列置鳥獸。以畜孔雀。鷺雉。錦鷄。山雀。繡眼兒。諸鳥。又設棚架。以羅列百色盆栽。折而西向。得一池沼。藍水渟畜。藻荇蔽水。榜曰阿古迷淵。有石梁架焉。渡梁而左旋。則別設一場。以陳列珍禽奇獸。異魚怪鱗。獨脚小蛙。如美百足蜈蚣。陰乾。章魚。疑是和尚。腊怒面。平蟹。定知勇士。魂魄。鵝鵝。顯骨。大於佐公。須首。駝肉。鞍隆。於郭素。駝背脊。其他程程。如醉而鸚鵡。魚似言。九翔走飛。潛受生于兩間者。靡不網羅。嗚呼。可謂能極宇宙之大觀者矣。



器械博覽場在大宮御所內別令一區陳列西洋奇巧之諸器械運以蒸氣以示其功用自在弗可不講究也石炭烟黑如十丈玄龍飛騰于空中沸湯氣盛似一簇白雲湧起于平地旁設一輪鐵車加韋條以轉旋之又設噴水筒以騰上池水其飛激奮躍九距平地二丈五尺而一時間運輸二十五百斛云又設一小車於竈上車皆施韋條以運轉之上施鐵轂長十餘間貫以小車五六輪皆運以韋條大車轉則小車從之下設一小鋸方圓曲折唯其所欲有鑿孔之器有運轆轤之具有製米粉之機有截銅鐵之物其運轉作用一皆蒸氣所致其截斷銅鐵如崑刀切玉蓋此場蒸氣之力具十二馬力云

西京傳新記 三編

十一月 半月堂藏版

與器械場僅隔一牆設影戲場正面張布幕左右列榻觀客蟻集皆就榻焉既而四面鎖戶障絕不容光線遂俾晝為夜須臾幕中有人啓一啓曰此回所博者官一莞者西洋第一流影戲而其第一回則為花輪轉旋之狀語未畢暗中乍現出一團輪影來轉旋倏忽令人眼轉心眩不能注視也或現虎文馬或顯一巨白象某則演都夜景某則佛國港澳雜以滑稽諧謔之狀又令人捧腹絕倒不能自禁也中有影

出烈母呵責小兒之狀其母加鞭撻於兒臂蓋人智多在頭腦故西人尤保護之不令精神耗損與邦人呵責小兒專毆擊其頭顱者自相背馳以事雖小亦不可不注意也

說教

明治維新百廢畢舉矣官置教部令神官僧侶說喻文明所由於民庶名曰說教於是亡論神祠佛宇日講其說月設其會北野也八坂也為華頂山為東西本願寺為伏水稻荷祠為紫野大德寺其他小祠子院無暇悉舉各寺大率門外建一大榜署曰說教

西京傳新記 三編

十一月 半月堂藏版

下細署每月某日及某刻云云十餘字以揭示起講時刻迨期于農工干商賈蟻簇蠶屯悉集講堂肩磨肘接肉薄而坐焉既而鼓樂合奏洋洋乎起于堂右令人肅然起敬神之意樂闋而有一祝人烏帽直衣從容上壇蓋某神官演說三則教義也教師手執筆平視群衆一揖再咳寢說喻之曰當今之時思欲一身幸福闔家安全者莫善正直也諺曰正直頭顱則百神所止宿側聞頃日振州神戶有曰正直屋正兵者為人方正而質直苟非其道雖一錢尺帛之微不欲取於人以自封殖是以九日本支那天竺八百萬



神會于出雲大社者皆取道于神戶八幡宮騎于馬  
春日明神騎于鹿辨才天騎于鯨大黑天騎于鼠比  
沙門天騎于虎摩利支天騎于野豬稻荷明神騎于  
白狐日吉山王騎于獼猴爭求宿于正直屋日輻湊  
其家於是逆旅商法日隆月盛未幾何遂為陶朱富  
云主人一日從容問大黑天曰賤奴幸為百神所庇  
顧以致家道豐富為惠亦甚也唯別有至願在焉公  
幸許可之乎否大黑微笑曰其所謂至願者敢問何  
也曰公平素持打出小捉物一揮則出千金再揮則  
出萬金願日日一揮令奴博大利大黑哑然大笑曰  
西京傳新記 三編 十三 半月堂藏版

以捷原非出金之捷蓋擊碎癩僧人頭腦之捷而已  
今汝以正直為本以不欺為主是吾輩所以爭求宿  
也嗚呼神戶埠頭以逆旅為活者不暇口數而獨八  
百萬人庇顧正直屋者豈非以其方正不欺人邪今  
之敬神者一以正直為本毫不挾詐術於其間則其  
家道豐饒何唯一一正直屋而止哉予又聞之某區某  
巷有一貧兒常販賣敗措殘紙以為活焉近日官命  
戶畜羊蓋欲製其毛以織羅紗也貧兒固辭曰願得  
以豚易之官怪問其故曰賤奴鬻敗措以為活者故  
敬措如神明俗呼措紙曰加美加美稱紙者亡

論鼻紙塵紙卷紙美濃紙西洞院紙東京所謂淺草紙者紙中粗惡  
為最雖以疫神窮鬼未嘗不崇敬也而羊獨食紙  
為糧是賤奴窮所不喜故曰願得以豚易之官亦不  
敢議之又嘗有鬻風者九谷風朔風薰風金風颯風  
飄風少女風鯉魚風二十四番花信風之類一畜而  
藏之一日叫賣乎市曰風兮風兮請療價而賣之哉  
有一人喚呼曰賣風翁翁曰諾哉不知其所購求果  
何風乎曰今者暑月安得買一豚涼睡以消熱避暑  
敢問價幾何許曰風亦多種類細大巨小一二有定  
價乃拋五六錢購涼睡一襲最後有一大布囊中畜  
西京傳新記 三編 十四 半月堂藏版

清風數百觔珍襲藏之客試問其價曰千金而已曰  
嚮所購得者貴者不過十錢賤者七八錢耳而以風  
獨高價者敢問何也曰母深怪此是神風為耳抑以  
風海外萬國所絕無獨我東方所專有凡上下二千  
年間無時無之曾弘安中一襲之覆滅元冠于紫海  
是皆世人所熟知今所弄藏者則其萬分之一耳然  
上以振興皇威下以維持國體皆職是之由也故  
千金尚覺其價廉以僕觀之雖以百萬元決非高價  
也客吐舌而去蓋前之正直屋者以正直為百神所  
愛顧中之拾殘措者凡名神者雖窮鬼不苟侮後之

賣風者能珍襲神風非千金則不欲賣其言雖戲謔皆敬神之意所發見諺所謂鯢魚有頭敬之必效焉諸人以為何如說訖一揖曰拙老則小講義耳未至習熟其要妙之意趣諸人果欲聞知其虛與自有大講義在焉請代語之乃寧裳下壇滿堂激稱呼聲動地笙鼓合奏復如其初

少為大講義上於壇敝眉而白首衣冠古雅年約耳順手執泥金筵威而不猛溫而能恭一睹知其學德高明弗易企及也當是時人人跪坐傾耳肅聽其說大講義從容正襟乃說起曰如敬神說則前講既已

西京傳新記

三編

十五

半月堂藏版

辨之毫無遺憾也如老拙則特辨解其大體云爾諸說喻人不可以無學又不可以不教之要欲令諸人識其方嚮而已抑人之所以開達知識進步文明者唯在學之與教故曰雖有嘉肴弗食不知其旨雖有至道弗學不知其善又曰時過而學則勤苦而難成獨學而無友則固陋而寡聞故古昔教人法布在方策六年教之數典方名九年學書計十有三年學射御二十而始學禮魯論閱卷基於學而中庸發端則有博學之文進學解成於昌黎手而勸學之文出於紫陽之筆迨至叔世弗識道之可講弗察業之可學

醉生夢死與草木相俱枯落無聞者豈可勝數哉明治偃戈明良贊興首建學校設教部令知人之所以為人天恩海岳無物可比誰謂非諸千年黃河邪然則當今之時師而弗教弟子弟子而弗學師父弗開可開之知識弗進可進之開化毫無進步効者不獨負當今時勢亦天地罪人而已孔曰得罪於天無所禱信哉言也

西京傳新記

三編

十六

半月堂藏版

是以我邦古昔名將良弼策畧戰功雄視一世者皆謙虛屈己必就師而學焉鶴皇之聘王仁鐵足之學南淵我家之禮江帥時秋之慕義光以數者史不勝書而予特服義家謙冲虛懷求益弗已也史稱義家嘗過關白賴通第談陸奧軍事大江匡房隔坐聞之曰好男子惜不知兵法也後者告之義家義家感悟遂師匡房學兵厥後義家攻金澤柵見雁行亂識其有伏擊殲之乃謂衆曰兵書有之伏兵在野飛雁亂行我若不學則今日將墮賊計中矣嗚呼賢哉八幡公俾常人有此事不唯不用其言安保不怒其無禮邪義家量如江海能包容細流是以深者益深而廣者愈廣以為我邦兵家鼻祖者要皆謙虛求益之所致後之志學者豈可不鑒而識乎且夫先民有言詢芻蕘故雖以尼山之聖曰三人行

必有我師。袁弘師襄。老聃之徒。遂為師友。其他孺子之歌。婦人之哭。凡耳目所接。萬象皆師。靡適非學也。請試舉我邦近事。謙虛屈已。以成其業者二人。證之焉。夫其所謂二人者。一為圓山應舉。一為觀世次郎。抑應舉之與觀世氏。其藝業超逸。舉世所推稱。然而原其所由。皆躬荒野人所指摘。遂發憤踏勵。為一代宗工。豈可謂偶然哉。應舉氏嘗為人作卧猪圖。經營慘澹。意匠甚苦。偶有賣薪媼。至自小原。因問曰。汝鄉里近于山。得無見卧猪邪。曰。是常事耳。未足深怪也。曰。然則欲一觀以寫其真。汝宜當報知之乎。否。曰。諾。

## 西京傳新記 三編

十七

半月堂藏版

哉。居三數日。里媼報曰。昨夜有野猪。卧于屋後竹中。請速來觀焉。應舉大悅。咄嗟赴之。至則野猪未去。尚睡卧如故。乃摸寫其真形而還。未幾圖成。自以謂神似逼真。雖古名畫。恐無愧色也。乃附之僖父。僖父熟視。不唯不一言及。鳴謝似色。甚不喜者。應舉心不能平。強問其實。僖父惶懼。謝其不敏。應復一再。初首其實曰。公今所畫。布彩結構。莫不畢具。唯至卧猪似與否。不得不獻疑也。曰。何也。曰。此畫死猪耳。應舉艱然不懌曰。此屬生耳。何謂死猪乎。曰。不然。僕在鄉里。屢目擊卧猪。猪頭有毛。名曰怒毛。雖以酣睡熟寐。頭毛

碌碌森然如針鋸。今觀斯圖。頭毛萎然。絕無怒張態。僕是以知其画死猪也。應舉不服。令人見竹中卧猪。死已三日。盖病猪而已。即更寫生猪予之。其人嗟賞曰。此真活畫耳。拜舞謝恩而去。從是應舉画名。隱然擅其場云。若夫至觀世次郎。虛懷折節。學木賊剪法于僖父。以為樂部宗工。固膾炙人口。不庸贅我曹口語也。抑八幡公於江帥。應舉觀世氏於僖父。凡衆藝百工。無物不有師。既已如斯。而況今之志學者。豈可弗擇良師益友。以琢磨其業邪。以今日我邦所在。所以有學校之設也。引證古今。辨折雅俗。口角生風。舌

## 西京傳新記 三編

十八

半月堂藏版

尖飛霜。能令愚夫愚婦。感涕心折。不覺呼妙也。時日將下春。講師下壇。群客悉散。

人力車 附馬車

甚矣哉。時好之興風習。與時推移。月更年革也。故士流命屯。不得不降而挽車也。貧兒運甕。立致素封。歌妓削眉。為官長新婦。支那學措大。革面為橫文宗工。華族上高壇。學說教師。口角和尚還俗。以畜艷妻。清齋烹煎。雖澹泊不及牛炙豚羹之腴膩。半則頭顱雖古風。不如斷髮。隨帽之開化。一日後。於時好則不免為一日田舍翁。十日負於開化。則不失為十日固陋。



于是以昨日新奇則為今日陳腐今日時樣則為明日  
日易狗故昔人嘗有句云花事急於人事急三朝不  
見綠成陰豈以其人智日閱時好月華邪將其氣運  
不得不然而然也獨其尤變而尤簡便者則為今日  
人力車我邦上世其駕何物弗容得知也中世以降  
人皆用輿馬而如牛車則非授錄大臣弗許漫駕為  
蓋其國制然而已唯士庶人專用復輿復輿亦非一  
曰長棒曰切棒曰四手曰宿駕籠長棒則非士大夫  
及官醫亦弗許駕為獨至於切棒四手宿駕籠亡論  
農工商賈皆得質而駕之而四手尤為輕便故賞花

西京傳新記 三編

十九

半月堂藏版

于風吹可片刻而到也觀楓于梅尾可半日而遊也  
問春於喜原尋秋於祇街避暑于紇林觀月于三樹  
凡名區勝壤不累一王趾一金蓮可遊數里外者絕  
無出其右者是以都下壯丁藉以糊口舉火者亡慮  
數十百人東馳西走無冬無夏于雨于雪殆無虛日  
嗚呼亦可謂盛也既而物換星移今者則有人力車  
者價半古之復輿而便則倍之何則彼昇以雙肩此  
挽以兩臂彼馳以四脚此走以兩足其勞逸煩簡固  
非復輿所得比較也宜其復輿日替而人車月盛也  
或曰輿替而車興未足深怪也嘗聞古昔神仙皆駕

風雲跨蛟龍不啻鞭鬼神御雷霆費長房駕杖蒙寶  
駕龜列子駕風黃帝駕龍有乘劍者有騎虎者有駕  
鶴而遊揚列者凡如斯者不遑悉舉爾後不知其駕  
何物而遊何地也有一官客偶屬休暇以日風日和  
暢乃戴禮帽穿長被逍遙于市街間步過一店頭店  
揭一竿紅旗題曰西洋國都假聲車官客一笑停步  
讀之絕叫曰奇甚矣新甚矣車夫磬折曰官家有人  
車請廉價而駕為耳曰若價唯其所求今招旗題曰  
國都假聲云云果令車學西洋國名邪豈不新奇中  
之一新奇開化中之一開化邪丁額手曰招牌明確

西京傳新記 三編

二十

半月堂藏版

豈敢欺罔官家之為邪曰價幾何曰一國一錢耳五  
國則五錢遂及西洋各國皆可類推而知也曰吁  
矣卒駕而過三條橋車軋橋板忽然發聲曰龍動龍  
動龍動龍動客抵掌曰奇矣是無乃學英都假聲邪  
折而經繩手鐵輪轉輾與砂礫相軋又作聲曰希臘  
希臘希臘希臘客益大笑既而渡泥淖車乍作變調  
連聲相呼號曰哇哇哇哇哇又一轉度四條  
鐵橋上車亦放聲曰土留古土留古客大悅更增價  
令星馳丁曰諾哉電馳直往未十餘步誤踐牛糞足  
滑而顛為車乍獨語曰古論備屋古論備屋客大笑



曰新新奇奇。洵如招牌所道。乃探囊予力錢而去。

又有一書生。醉步踉蹌。過某市街。熱視一書肆招牌。直詣其肆頭。曰僕醉矣。僕醉矣。何不粧一輛人力車。載以送吾塾。小厮駭折迎接曰。小家則書坊耳。如人力車。則距奴家厓五家。請就詢之。生掉頭曰。汝肆頭。暖幕招牌。標曰五車樓。假令未及具車五輛。豈可無一車以畜之邪。請亟辨之。小厮搔首摩手曰。奴家舊來書坊。故亡論漢洋弗領古今。儒書佛經。英佛翻譯之諸書。民權之論。說教之話。無書不備。故如書籍。則不獨五車。車載斗量不啻也。唯至人力車。則不載一

## 西京傳新記

## 三編

三

半月堂藏版

輛隻輪。顧去問之。第五家。即當咄嗟供之耳。生首肯曰。汝言亦不可謂無理也。蓋車店距汝家厓五家。故名焉。以五車名号邪。唯其車店。方位何如。曰。陳側弟五家耳。生頷曰。唯唯。蓋車之與東。於字畫。則一人損益耳。即支詣車店。急還命車。且問其主翁曰。汝輩平素業挽車。是以車夫皆揭人力車招牌。今汝獨除人力。特揭車字者何邪。曰。今日車夫空匱。不復留一人。絕無人力。可以引車。厓具幾輛小車。故特揭車字。以表不詭耳。生曰。亦有一理。醉步益困。去過一坊。坊角揭一小牌。厓見署車屋町數字。大悅曰。此坊一區。皆

業人車者必矣。走叩一店曰。有車乎否。曰無有也。又

叩一店曰。有車乎否。曰無有也。東索西求。遍問一坊。遂不得一車。生大困。乃詣其區長。議之曰。子之所管轄。名爲以車坊。而今絕無一人鬻車者。無乃有名而無實邪。區長頗有口辨。直答之曰。足下見規。僕以名實不相稱之訓。誠慚汗。無辭可以疏。冷。雖然。其有名而無實者。不獨賤僕一坊。凡西京府下。巷号坊字。名之與實。不相稱者。不唯口數也。請舉其一。二證之。抑子亦不聞坊名曰柳馬場者邪。而未見植一柳樹也。此之謂名之與實相稱邪。曰弗稱也。不見曰富小

## 西京傳新記

## 三編

三

半月堂藏版

路者邪。一坊未必富人。也。此之謂名之與實相稱邪。曰弗稱也。名曰錦巷。其果似錦繡邪。曰非也。名曰衣棚。其果布陳衣裳邪。曰非也。然則九府下。所掌管坊名。地名。邑名。里名。名之與實。弗相稱者。不暇口數。名曰黑谷。谷未必悉黑也。名曰白川。川未必悉白也。寧弗唯此。名爲曰士。名爲曰農。名爲曰工。名爲曰商。名爲曰開化。名爲曰文明。至名之與實。稱邪否之說。僕不才未知其何如也。生大笑曰。母多言。母多言。人車之夥。涉寺坊地方。後三條。至四條。爲最盛矣。率一車載一二人。輪皆朱髹。箱皆金碧。畫以古英雄豪

傑、及綠林白波巨魁首領、其錦衣鎧甲、手持一面古鏡、跨一大蝦蟆者、非兒雷也、則天竺德兵、其顏如渥丹、美鬚而魁傑者、則為關雲長、黑甲而髡首、背負刀鋸七種者、一睹而知為武藏坊、高展而直、無步而吹笛者、不問而知為牛若丸、請雨者則小町、而招日者平相國、或泥金描草花、或螺鈿畫鳳凰、蔽以油幕、可以防風雨、可以障寒暑、中設紅絨蒲團、可踞而睡、可倚而憩、車夫皆壯漢、其挾輶走者、則彷彿於穎考叔、而其車聲轉轉、不以開昧廢禮者、似類蘧伯玉、有女同車、顏如舜華者、則其歌妓赴其豪客盛宴也、其過閭或

西京傳新記

三編

半月堂藏版

者、某公子學魏文侯也、小姐大娘、同乘而東馳首、吾知其踐觀劇約也、乳母擁嬰兒、輾轉為南走者、吾知其至某小蠻種痘也、村翁亦車、里婦亦車、權奴亦車、三婢亦車、亡論農工商賈、巫祝僧尼、無人弗駕、無物弗馳、嗚呼、從軒轅氏初車而還、未嘗見今日盛且夥也、當今之時、顏路請車、尼山不以不可徒行辭之也、當今之時、令聖者上車、不得不內顧而親指也、然則勝郎雖雙乎弗勞花婦、可以抵箱荷祠也、小栗雖類乎弗累照姬、可以赴草津溫泉也、嗚呼、開化世界、普天率土、靡適弗車、乘人車之利用大也哉、

一夕雨凄月黑、有啾啾為悲泣于破屋下者、曰昔者文政天保之間、江海奠安、絕無兵革之虞、解語之花、無地無之、多情之柳、無日弗折、是以吾儕奔忙、殆無虛日、探花于嵐峽、避暑于鴨沂、三樹之月、圓山之雪、一年三百六十朝、東馳西走、唯吾儕是之由、府下壯丁、藉以舉火者、不唯幾千人、日博萬錢、月射千金、以育其妻子、以供其衣食、可謂天下樂事極矣、寧圖未滿五六十、年而風俗一變、人悉斷髮、而服悉洋製、為夜可以支寒暑、編傘可以防風雨、絕無一人顧吾儕者、奔擲於破屋荒店之下、沈埋於蟲絲塵煤之中、追

西京傳新記

三編

半月堂藏版

索往事、恍為如隔世、今者則一星之銀、博不獲半碗之粥、暖不獲我生不展、值斯百憂、抑天亦有私而然邪、言未訖、有笑于隅者、曰咄、籃輿子、何其啾啾為得婦女之言邪、方今文明、風化日開、茂寸異能之士、若布于天下、雖窮鄉小民、懷一技一能者、皆無弗庸、是以吾儕幸遭逢明時、長轅大車、炫耀于廣衢之間、要之皆文明世界、德澤所涵濡、豈不亦人生至幸哉、子亦少降志、改慮、學僕輩所為、美衣食、好妻妾、可咄嗟而辦也、然而局量偏見、徒守區區小節、以為牛衣之泣、是僕尤所弗解、兄其願熟計之、悲嘆之聲、與笑罵

之言。一泣一笑，呼號紛喧，徹于三戶，而聞于兩隣。戶長驚怪，竊謂非東家失火，則西家鬪爭，急遽秉燭，巡行閭巷，則戶外人車，與屋裏燒輿，偶為人言，以愬其胸臆為耳。戶長誰何曰：何物鬼妖，中夜論譁，以驚人睡耳。於是人車與廢輿，閉息不復交一語。四鄰圍窺，唯聞簷滴丁丁，與候蟲唧唧耳。

喇叭色高，喝道警人四蹄生風，而雙輪滾塵，一御者執策箕，意氣揚揚，旁若無人，中載一大官，妻妻然轉輓然，如輕如軒，未一瞬間，星馳電走，不見其隻影，何其迅駛快捷，與瀛車相比較，不多遜邪？既而曉景旦

## 西京傳新記 三編

五

半月堂藏版

午牌，御人醉飽，回車而還，欣然語其妻，曰：吾一駕而策馬，則日獲千緡，月利萬錢，以窮耳目之娛，以充口腹之慾，視諸彼人力車丁，手足胼胝，流汗如雨，而問其所獲，不過衣食數口，妻兒其所為，為天地懸隔，奚翅富兒之與乞丐而已哉？吾頃日赴新京，極講談亭，開講師說演義三國志，諸葛孔明羽扇綸巾，駕四輪車進退三軍，號令明白，秋毫無犯，是以曹操揭臂而敗走，仲達徒跣而奔竄，遂定三分鼎峙鴻業，豈又不一個氣量人邪？雖然，吾亦人也，彼亦人也，假令雖以孔明勇智，非有三面六臂，同是具一雙翠丸耳，其

## 西京傳新記 三編

五

半月堂藏版

肝不同者，彼之車四輪，而我則雙輪，彼執羽扇，而吾則執策，其縱橫馳騁，來往于通衢間，士女老幼，為之辟易，未嘗不開路而讓也，然而朝喫百斤肉，夕傾一斗酒，飲食醉飽，日又一日，以過了一生，豈不開化中，開化人邪？醉吹百回，自鳴其得意，荆婦不應曉，視曰：久矣，自負自護，何其冗語萬言，一至此邪？如斯者，則賤妾所不欲聞焉，抑良人自稱曰：才子，曰：氣量人，而一年四時，無時不空費，是以釜中生塵，而米櫃拙如蛛，不能令妻子免飢渴，而良人恬然，此之弗恤，朝醉於宮川坊之花，夕眠于先斗巷之柳，于鰾飯于魚膾，于淡肉于蕪羹，不獨荒于色，又荒于食，而自曰：才子，稱豪傑，妾不知其何謂也，妾昨日見良人御某長官，而馳騁，意氣揚揚，甚有得色，而某長官身以勅葵之重，而小心寅畏，未曾見驕誇色，何其賢不肖，相懸之甚哉？賢哉言也，何其自今而還，妾願得請求三行，有伴離簡，易牛以馬，則素望足矣，詎罵百端，頗極醜詆，御人勃然面熱舌急，一喝曰：出頑婦，敢凌轢乃公，如其離簡，汝不求乃公，乃公反將予汝，乃直磨硯，授筆作書，掘之其面，夫妻反目，眉怒口張，遂釀成一大鬭爭，米，御人蹶起，徑拌其婦髮，空拳亂打，簪折髻亂，婦



不少屈急走厨下取雷盆枝之御人咆哮即揮插木擊之盆碎而木折涕泣之聲與詈罵之言喧喧囂囂未知其黑白何如也於是對門三家與東西比鄰三婆兩妻併小婢老奴一時救解三頭交錯而六臂爭鬪一方擁御者一方慰家婦七顛八倒九起十蹶老婆脫義牙而匍匐拾之伍頭失假髻而狼狽索之既而群客交集慰彼救此風波未平御人大罵曰山神盡速去也婦應之曰出示奴以狀何其反覆之甚邪抑妾之嫁爾家也三歲食食夙興夜寐靡有朝矣當時目妾以活辨天愛妾昵妾掌中明珠不啻也何料

西京傳新記 三編

主

半月堂藏版

青春易老綠葉成陰言既遂矣至于暴矣今又罵妾以山神其俗名其前婦曰山神蓋夫辨天之與山神其面目雖異以可怖也夫辨天之與山神美惡姣醜固非同日之比也而其呼辨天者古尚未乾言尚在耳未三數年呼以山神朝以無鹽何其反覆愛憎如以速哉果令妾山神乎家爺則窮鬼耳山神而配窮鬼勢所必至又何足深怪哉御人益怒戟手罵詈曰汝不聞乎孔明之婦醜則醜矣雖然其智巧才藝之美有不易測知者何不觀木牛流馬以窺其一斑也今汝則反之屍之重則如攔夜之牛口之輕則如風中之葉同一牛而彼驅使木牛以供其使

令此策暗牛以煩其心力此予所以不及孔明也既而西婦東媼喧呼救之於是夫妻反目之爭遂屬團圓因集其罵詈紛諍之語搏作一九試餒之赤與黑二狗徘徊嗅而溺之不復顧而去鄰婆一莞撫掌曰夫婦鬪諍雖猶也禽獸亦將不食其餘也

天長節

天長節奉祝

今上皇帝嶽降之佳辰也每歲以十一月第三日舉之此日也無都鄙無遠邇普天之下率土之濱亡論翔走飛潛凡有血氣者靡弗歡欽鼓舞奉祝聖壽

西京傳新記 三編

主

半月堂藏版

於無疆恭賀實祚於悠久也是以比屋連軒昧爽而興除塗灑地張幕點燭官吏禮服祝之於府商賈齋戒捧之於社往來絡繹一市如狂與祇園神會同一景况或肆上安瓶花或鋪頭展華釐或列金彩偶人或陳綃花措木或耽樂飲酒或粲粲衣服或設酒饌于塗要行人飲啗之或矢絲竹于堂令士女縱聽之吾嘗讀國史往往有賜酺于天下之事今之天長節亦古大酺之遺風邪嗚呼上有南薰解溫之歌而下有擊壤鼓腹之民方今海內上下奠安不獨耕鑿熙熙能獲其所併有立豕頌則之慶為之民者安得



弗欲欣鼓舞，持其賜也哉。

從天長節前一日，市中每戶建幟于門外，幟皆白布，畫以旭章風時觸之，飛揚掀翻，如飄白雲，而簇丹霞，偶有一醉漢，左顛右倒，足將蹶乍止，醉步踉蹌，佇立于十字街上，驚怪久之，曰：我聞昔者唐堯時，十日並出，草木枯焦，下民大苦，乃俾后羿射落其九，今者則不啻十日，不知其幾千萬日，何其日輪繁殖衆多，陪從於古，一至於此耶？果令日輪如斯衆多耶？不假魯陽之戈，清盛之扇，而一年四時常如白日，令吾邦如不夜城，不必須衛燈也，不必假蘭燭也，車胤不聚。

西京傳新記

三編

三九

半月堂藏版

螢火可以讀書也，孫康不映雪，可以臨字也，一家儉約，豈不亦大邪？一年利益，何曰鮮小邪？吾亦聞之，豐公秀吉之生也，其母夢日輪入懷，既而有娠，今此各家旗章日輪入各家婦女子之胎，則從今以降，吾邦生幾豐公，未可知也，其他以日名爲者，武將有朝日將軍，僧徒有日蓮上人，趙盾趙衰，則如冬夏二日之異趣，日日新而又日新，似湯盤銘久而弗磨，日沒西天，三百日，則非上宮太子識文郎，斯日何喪，則非庶民惡禁王之暴邪，北條時行，有三日前代之目，明智光秀稱三日天下，其比于日，喻于日，稱日愛日者，

上下古今，指弗暇，樓今旗章所揭之日，旭日邪，夕日邪，抑日耀日邪，何其日輪之夥涉邪，自語自西，卒一蹶而踣矣，市人走而扶之，曰：卿醉矣，卿醉矣，何不疾還家就寢，醉漢叱曰：咄，毋復道，汝不聞乎，孝子愛日，今而空此日，則百日說法，無乃一放屁耶。

鴨東八坂新地，亦爲花柳淵藪，故是日尤爲熱鬧，頃年閱歌舞練場，其初音甚，以爲歌妓舞女溫習所，場外榜曰：大機關生人勝，行人一瞞，預知其壯觀，觀者輻湊，肉薄而入，戶口有人，絕弗要者，錢唯許其縱觀，場之正面，扼一大布幔，布幔之內，設鼓吹一部，宮商

西京傳新記

三編

三一

半月堂藏版

聞作絲竹合奏，嘈嘈切切，令人魂飛心躍，少爲一奴儀服，服皆洋製，用黑羅紗，盡現出於幔外，敬跪再拜，高聲叩啓，曰：諸公不以道途遼遠，惠然賜來車，不獨奴輩幸福，亦闔區幸福，因聊呈戲技，以奉祝，今上聖誕云耳，請少時停躅，辱賜一觀，爲幸亦甚也，啓訖而折鳴，折鳴而慢微矣，場之中央，高下設壇，壯漢數名，皆被緋纏而跌坐，蓋擬不倒翁也，既而絃鳴歌作，謠曰：無聊薄欲遣閑愁，先卸尊樽架頭，手巾約額，轉還轉，轉去起來不暫休，於是壇上扮於不倒翁者，相俱作轉輾狀，奇負異態，令觀者不勝捧腹也。

蓋榜面大署大機關數語。洞喝以引觀客。亦博整價之一術。可以見其工夫新警。更出於人意表也。

上京三十區。柳馬巷一帶地方。亦西京繁華之要衝。是以每歲天長節。人人鬪新。家家競奇。予今揭其新趣妙案。尤膾炙人口者。以諭世上才人。鬪新競奇者。大稀一竿。題曰百覽會。蓋擬今春博覽會也。而其所排列。非折脚鼎鑪。則禿髮髻帶。凡敗盞漏瓶。厨谷庖具之類。人弃而弗顧者。收拾不遺。採以羅列席上。以出奇趣。呈新案。令人拊脾抵掌不覺呼妙也。高堂深邃。率當容數百人。堂之中央。左右設欄。以禁觀客欄入。欄內陳色色物品。屏風耀金。緋氈展錦。一題曰新古貨幣。就而視之。則其擬圓金者。薄以糠收一大蘿。葛根帶黃金色者也。其比碎銀者。用剥皮銀杏仁也。其擬方金者。方切糟收越瓜。稱奈良漬者也。此品則中鳴某新案。二題曰上京二十七番組。組猶曰養蠶部伍所製生絲。遠而見之。宛然不減真絲。蓋束結髮緒線十餘把。盛諸一大玻璃壺也。此物則道江氏創意。其他蠶盆上。加為以白銅盞一枚。鐵釘以作文字形。擬於時器者。名曰弗斗計。包畏魚脯一片於紫絹者。名曰計都留登邊留之類。旁午錯陳。不暇悉舉。亦一

西京傳新記

三編

手

半月堂藏版

時奇構。要之弗過。怡悅都人士之心目。以博一莞而已。

一商賈興二農夫。觀訖出門外。就茶肆小憩。為農大盛。評論陳列物品。嗟賞不措。以為人生一樂事。商賈首肯。相俱語其所見。既而曰。下奴今日。以商事到某區內。亦設擬博覽會。令四方衆庶縱觀之。下奴亦得窺閱一見之。中有人間未曾有之奇品。今猶記弗遺。請為公等語之。以資博物一端。農夫欣然。慙患曰。今日何幸福。觀未見之物。聞未聞之事。以開達其知識。不唯十年雪。請語其所見物品。令奴輩與聞之。商賈乃探其懷中。點檢簿。所牛錄。且讀且語曰。下奴所目擊奇品異物。不暇悉舉。而其尤奇者。一曰假虎威狐裘。

西京傳新記

三編

手

半月堂藏版

此裘原非羊裘鶴裘之比。好阿片推要當路人。而自度威力不迫。常假白額。以擾服百獸。白額不知其既。然令其縱威福。吁亦可哂哉。衣此裘者。非阿諛迎合小人。則求寵規利之佞臣。是以清肅高潔之士。皆唾弃弗欲披服。遂為無用長物。今陳列博覽會物品中。以試世之奔競為風。浮靡媚人者。下記清風堂主人所藏七字。豈不曠世一奇品邪。不

知清風堂者為何人。定是高蹈之名士。惜不見其人。農夫抵掌絕叫曰。奇甚矣。奇甚矣。如此奇物。而不得一寓目。豈不遺憾哉。其他物品。意者皆人間未曾有之物。請更語其次者。商賈曰。諾哉。乃披襟簿。復讀起。

二曰面白狸腹鼓

此鼓非明皇催花羯鼓。又非狐忠信初音鼓。白面老狸之腹鼓也。此狸也。好陪豪客富翁之夜宴。滑稽諧謔。能解人願。財主一投半星銀。一枝花。起舞再持逢逢搥鼓曰。面白狸腹鼓。常好衣食於狹斜。

西京傳新記

三編

三

半月堂藏版

間。維新而還。一掃絕跡。今不知潛匿何巢穴。蓋奇歎也。以下不錄其所藏事。主人姓名後皆倣之。

三曰有難山貓

貓亦多種類也。獨此貓。絕不嗜鼠子。其所嗜好者。唯金錢花一枝耳。人與之以其片花。隻葉。又并舞點頭。曰。有難山貓。蓋邦俗謝人厚意。則謂有難。嗚呼面白狸之。與假虎威狐。併此山貓。皆異種而同類。所謂狐狸而同穴者。聞西京圓山。有山貓者。嬌柔而能媚人。尤善歌舞。然與此山貓。名同而實異。亦貓中別品而已。京俗呼美姬。能去一日。則品然與此貓自異。

四曰私慾鳥

眼如鸛鷀。爪如鐵鉤。好攫取黃白人。啗以大利。欣然飛鳴曰。金可愛也。金可愛也。常栖宿于銅山金穴中。毛羽頗帶銅臭。

五曰塵誕出現真琴

邦俗訓。誠曰真言。又呼琴曰糊塗。此琴原塵安中所製造。大率娼妓能彈。塵琴。訓相同。巧騙遊客。然遇後爽年少。可喜者。并塵琴而奏真琴者。千百人中。偶獲一二。嗚呼。何其世上塵琴多。而真琴之少也。然非了解塵琴聲調者。安得辨解真琴節奏哉。

西京傳新記

三編

三

半月堂藏版

六曰酣睡貉

貉之為性。晝伏夜興。能睡于白日。此貉沈靜寡默。喜怒不形。色毀譽得喪。時到其耳。不唯馬耳風。豈其氣象襟懷。能有容人之量。而然耶。亦毛物不易測知者。或曰假虎威之狐。與面白狸。有難山貓。皆同穴之狐狸而已。蓋或然也哉。

七曰可愛鳥

昔人曰。愛人及屋鳥。此鳥也。姿色絕艷。善善歌舞。故名曰可愛鳥。夜半洞房枕席間。時聞其聲。如謂可愛可愛者。然自非知此中趣者。亦不能聽此聲。



也。唐人詩云：玉顏不及寒鴉色，蓋非虛構也。

八曰北限雀

羽族中尤貪賤者，曰北限雀。邦訓北之與着相近，似焉。蓋其嘗披服裳衣，冬月屢穿一領，不能多畜，故有此号。

九曰心有竹

竹之為物，直節而虛心，故人皆推稱以為君子。宜乎子猷與可之徒，翫而愛之也。獨此竹推誠接物，傾竭中心，所畜積不少，包藏名曰心有竹，益服命名之不屈也。

西京傳新記 三編

三

半月堂藏版

十曰不鹽梅

記曰：作和羹，汝是鹽梅，雖以易牙庖丁割烹調理，無此則不能和五味也。獨此梅不暗香疎影，無可喜，係失調和之美，抑家人坐弗解食性也。

十一曰減僧菜

減僧菜，西京人無老幼貴賤，無皆不口之。甲與乙應酬間，甲謝以不敏，乙報之以減僧菜。一則減僧，二則減僧，減僧則猶謂過令不敢當也。此菜則關左以東，所未曾聞見，故東人初來西京，聞見以為奇菜。朝夕聞之又口之，竟至不知減僧為減僧也。

十二曰數數蛇

突如來，忽然出人，俄接之，雖以貴胄，未嘗不倉皇疾呼，走且僵也。就而熟視之，則尋常小蛇，無足懼者也。故世俗呼事發倉卒者，曰數數蛇。鄙語曰：由斷大敵，予於小蛇，亦言焉。

農夫傾耳，益驚其異，聞嘆稱不措，仍詰問其次。店主偶供椀茶，左右睇眄，嗅且誠曰：焦臭殊甚，非片措誤投爐火，則烟管星火，逆墜於衣帶，既而絕叫曰：遺火！農夫錯愕，無所為計，遽然問之曰：遺火在何所？曰：領之下，袖之間耳。急起振衣，星火橫迸，投商賈襟間。商賈倉皇，連呼曰：熱甚，熱甚，於是榻傾椀飛，茶瓶倒覆，而爐火噴灰，灰似雪片飛散，亂人化白頭，立狼狽。農夫與商賈相偕連呼曰：有遺火，有遺火，何不來救之乎？店主救援，事終定焉。蓋農翁聞商賈話，說博覽會，無延三尺，不覺津津入蒸境，烟管傾欹，爐火墜於衣，以致此騷擾。商賈蒼黃，懷慄簿起。

浴舖

斗柄方回，歲將更始，一月一日，夜深漏闌，戶外有人鼓吹，喧耳，雜以喇叭三絃，喚呼曰：龜湯熟矣，龜湯熟矣。蓋浴舖報新湯也。又有年少一隊，噪而過者，相呼



唱曰：嗚呼與伊與伊，欲得佳妻，忙更忙，好卸初  
運浴初湯。嗚呼與伊與伊，蓋市店年少，拍板其  
物於財主也。既而東方漸白，群客來浴，爭祝歲首吉  
兆。湯舖在上京松竹坂，戶外揭一小紙燈，題曰：龜湯。  
湯舖極清潔，男女異門，男右女左，中設壘斷，以綱浴。  
錢帽上糊貼一大白楮，以標揭浴規與湯價。男女皆  
入槽而浴，為槽口設板扇，開闔如意。槽外設兩槽，一  
畜水，一畜湯。浴者皆就槽外清湯洗澡，一過，更就水  
槽盥嗽。槽旁有井，通筧送水。湯熱則呼水，湯冷則命  
焚。唯其所欲，各戶皆設壁櫃，一二題以番号。浴者內  
西京傳新記 三編 半月堂藏版

夜其中，鎖鑰以備盜偷。春首則盛設楮木蒔花及毬  
燈，以粧點其景物。每戶率皆如此。

有一老翁，性忌不祥。春首沐浴，必赴龜湯。湯冷則叫  
呼曰：竹。竹與楚訓相近。湯熱則又呼曰：梅。梅與湯訓相近。遇其

浴客輻湊，弗能入湯槽，則獨語曰：松。松與湯訓相近。自  
相慶曰：湯補既名龜湯，而問主人名，則曰：鶴助。今又

見松竹梅三者，町名亦曰松竹。何其今年祥慶之饒  
邪，不覺一笑。亦自祝曰：笑門福來。笑門福來。

日既夜矣，浴客蠅集，黎燈玲瓏，俾夜為晝。湯氣如煙，  
燭光為之昏。一少年入浴，氣和體溫，乃謠曰：流水雖

然淺，流清燕子花，來往窺編笠。唯見燕燕斜，匪欲認  
郎面。語情癡也。邪聲清詞新，染塵欲動，一僧父在隅，  
微咍曰：魂乎來，返返魂杳，名畫有靈，毋相忘。要聞一  
般可憐語，空對畫圖，又斷腸。音調重濁，頗帶與音，蓋  
權奴奏秘曲也。乍有度一曲者，如叫如泣，殷發于頭  
腦。歌曰：其言不解才三君，妾與君昵一日云。想嘗賤  
妾在宮日，禱請管公語慇懃，欲識妾情深切處。一生  
不食梅子實，蓋某才人試新內曲也。唱瀨田唐橋銅  
擬寶珠者，一聽知某店丁戲擬某俚謠也。其他有微  
吟萬吉原三谷港者，有高歌兼兩夜入津八百名者，  
西京傳新記 三編 半月堂藏版

有低唱春雨濕鶯羽者，加為以東北高砂謠曲。吼者  
如考銅鑼號者，如鳴破鐘，其至不能索一歌。口吟一  
曲者，諷詠雲邪山邪，吳邪越詩句，以厭倒諸曲。其至  
最無口藝者，唯曰：南無南無。蓋以其湯溫不堪快，身  
不知其然，偶費之也。笑語紛有，有呼水者，有叫熱者，  
有唱冷命焚者，有笑踞摩垢者，有向槽盥嗽者，有鑑  
面自容者，千狀萬態，不暇畢舉。而中有一生，出浴拭  
背，面壁而立，讀各家報帖。曰：某月某日，某寺院說教  
而某亭某夜，某講談開業。大博覽會肇某月，某祠沙  
持卜某日，一點檢種種細讀，讀至角觥姓名表，曰

大關則某甲而關腸則某乙行司則木村某而勸進元則和歌浦某不唯流水下立板既而見一奇字百方弗得讀口噤舌結漸汗浹背旁人怪且問曰兄入學小蠻既已三年矣西籍漢書莫字弗讀然而今讀區區角觝人姓名尚且弗能讀苦學三年安得無類画餅邪生益窘寢答之曰僕當還而閱單語編而已男女不共湑浴古今禮制弗得不然也是以別設湯槽以浴女人其製一形男湯曦景且午牌小姐大嬢或抱嬰孩或携小童或負或提爭集湯場一美姫年約破瓜從一下婢鬆履鏗鏘忽忙入戶揖主媼曰闔家安全迎斯青春敢賀敢賀妾亦客臘辱庇蔭嫁某良家今春賀年兼歸寧父母幸仍舊見眷顧不獨妾幸福亦父母慶幸主媼欣迎答之曰免須曾字奈京通言猶妾頃聞大姫嫁嫁心喜魂躍宜速支賀其慶事而因循至今日者妾客冬微恙病卧不起至春宿病少瘳不圖得接大姫音容以達其素懷姫揖謝曰阿保羅志異西京通言猶妾事故多端不少知其病病果知之乎亦當拌趨看獲之焉耳媼曰免須曾字奈喋喋今疏喧喧謝罪乃解衣試浴正是蓮花洗粉而玉層益清楊柳沐雨而鬢髮愈綠非華清賜

西京傳新記

三編

五九

半月堂藏版

浴則洛神或凌波下婢手摩其肩背宿粉殘脂一洗如拭婢因謾言曰肌層如白雪之白星而不緇美髮似綠雲之綠愈梳愈滑眉如遠山唇如丹華西施孟嬌未足比其美也小町衣通恐將赤跣而支也諺曰沽辨天降自天上又曰倒觀白玉簪如吾大嬢幾是也如賤婢則反之面黑則類團炭口潤則似巨鐘鼻則獅子而肩則鷄鶩無鹽之醜孟光之陋賤婢兼有之自悲前生罪案未盡極此醜陋願每其浴湯得拭一點垢庶幾有改其面目者邪美姫冷笑曰母復多言妾今初知不及小町衣通諸姫也婢曰敢問何也

西京傳新記 三編 四十 半月堂藏版

曰小町衣通豈有若汝醜惡婢哉

姑之嘲新婦新婦之罵姑不唯永炭不相容非肇于今日抑自推昔而然也掩而察之則新婦不遜未必如姑氏所言而姑氏暴悍未必類新婦所愬要以水鬪水之論亦可以供一噱也而漏其不平必於浴室西鄰老媼與東家牙婆相俱聲言垢喋喋叙寒暄啗啗話陰晴東婆歎息語西媼曰當今之時稱薄命不幸者莫大於鰥寡孤獨然而鰥寡孤獨猶得時而願養其骨節如賤妾則一年三百六十朝假令鳥鳥不鳴蹄未嘗一日遑暇何則妾家往歲迎新入而其入

慵懶。每朝晏起。非過十時。不出其閨房。監嗽一晌。而朝食。食訖。乃報午鼓。是以井臼操作。妾盡辦之。而無片言以慰其勞。夫慰與不慰。在妾固不關損益。未足深尤也。唯有一言者。願尊嫜熟聽。而憫察之。抑紡織針事。則閨黛急務。宜當勉從事之也。然而踈慵。不喜針線。自曰。一日取針。則十日卧病。弄不可解之綴索。語不可言之風情。不獨背官家。設女紅場之旨。其傷害風俗。洵非細小也。且夫客歲三月。舉男。今年四月。亦將生兒。年年生子。皆令老妾代鞠育勞。如斯過三數年。妾恐不堪奔命。極死之不暇也。而豚兒庸愚。惑溺慵婦。以長臭毛。鄙語曰。相似類者則夫婦。豈不其然乎。妾從朝至夕。誦經念佛。不曠一日。而其勞悴如此。何其彌陀如來。令妾至此極耶。如尊嫜則異之。兒賢而婦貞。閨幃緝睦。可以想見也。且摩且語。膚乾湯冷。乍一嚏曰。果知新婦非毀老妾也。諺曰。人竊詬罵已過失。心噴嚏矣。故以此言戲之耳。

老姑出浴而歸其家。新婦抱兒代赴浴鋪。遇近鄰寡婦。示米浴。相俱叙其疏情。一浴摩摺其背垢。談及其家事。新婦喋喋。詬罵其舅姑。曰。妾于婦業已經三喪。葛矣。無不泣之日。無不歎之時。而嘗苦茹辛。隱忍以

西京傳新記 三編

半月堂藏版

至於今日者。蓋以舉一兒故耳。妾而無此一塊肉。宜速詣三行離書。大歸其鄉里為耳。何則。舅頑而姑悍。驅役妾。不唯犬豕。髮亦命之。浴亦役之。水亦汲之。新示束之。以糾糾葛屨。涉三冬之霜雪。服澣濯惡衣。過九夏之炎熱。夜則摩肩按腰。不得交睫而安卧。晝則紡織裁縫。不能息肩而暇食。夫人窮呼父母。父也生妾。母也育妾。何其令妾遇此百凶。兄弟閨牆。外禦其侮。而兄弟不顧。嘻其咄。妾進退維谷。亦將欲投身于桂川。踐阿半之輶。世無長衛門。未可以葬骨於魚腹也。歎歎流涕。聞者不知其所由。目以為孤所憑。寡婦人過失。則影亦隨之。

西京傳新記 三編

半月堂藏版

西京傳新記 三編



# 西京傳新記 第四篇

明治十年二月五日  
榮地紙表半月堂藏版

## 西京傳新記四編序

綠陰靜晝。長夏無事。門無剥啄聲。樹有綿蠻語。會傳新記四編。允稿。坐有某舊友。瀏覽一過。語予曰。在昔當文政天保之間。西有中島棕隱。著鴨東雜詠。東有寺門靜軒。撰江戶繁昌記。一以有韻語。一用散體文。東西都會。人情風俗。醇醪淑慝。至九百賞心樂事。喜笑怒罵之狀。悉為島門二子三寸不律。所採收網羅。雖有繼而擬者。要之弗獲不拾其唾餘。而予今著此等書。無乃連續貂狗之謗邪。予掉頭曰。否不然也。何則。棕隱著鴨東雜詠。止于鴨東一帶地方。非遍記西京者也。且記以韻語。加注脚其下。雖以鴨子之才之筆。或為聲律所束縛。或為押韻所箝制。弗及展騁者。往往有焉。靜軒撰繁昌記。唯囿於東京府下。至於西京。則僅僅一小冊子而已。予今著此編。以散體之文。記眼前之事。弗為聲律所束縛。弗為押韻所箝制。縱橫馳騁。意到筆從。凡其所記述。亡論鴨水西東。記風俗記人情。記神祠佛龕。記城郭山川。行肅毅於陽春。包針砭於錦綉。俾讀者啞然而笑。肅然而誠。怡然而娛。油然而感。是此編所以為創意。予也雖疲駑。豈敢拾棕隱唾餘。而就靜軒履舄之為哉。某首肯曰。果

西京傳新記

四編

半月堂藏版



如其言。則於嶋門二子外。別出機軸者。亦可以稱一部奇構書也。呢呢晤談。更漏正傾。使童子煮菟道新茗。乃相俱喫一椀。叙其所辨論。寘之於卷端。明治八年乙亥五月。三溪居士職於平安御池菴薰風綠樹深處。

西京傳新記

四編

二四

半月堂藏版

療病院運砂 什醫家

西京繁華世界、鬧靡競奢、以驚萬人耳目者、祇園神會、四條納涼、新地都舞、御所博覽會之類、不暇口數、而其尤膾炙人口者、則為搬土役、蓋亡論神龜佛宇、營構小費之建築、病院之創造、都下老少、靚粧以介其隊、彩旌以表其區、絃歌也、山車也、鼓舞之作興之、托搬土木、以助其勞、亦庶民子來之遺風焉耳、

今茲明治八年四月、建營療病院于上京第十二區

西京傳新記 四編

半月堂藏版

御車道九軒街、其五日以至第十六日、凡十日間、都人群集、爭運轉土砂、以助其役、於是各區競新、每戶鬪靡、飄錦穿袴、男子而女粧者有焉、女子而擬男兒者有焉、舞踏歌呼、一口相唱曰、善哉、善哉、理也、卒登、理也、卒登、善哉、善哉、

鼓笛一部、紅塵如煙、塙御門以內、觀者如堵、塙下京某區內男女、赴于療病院運土也、紫旆白字、染出下京某區數字、揭之竿頭、次男女一群、皆均服靚粧、舞踏而來、每區皆昇一坐家臺、具形似家屋者、以殿其後、中設三絃、雙鼓、銅鑼、橫笛之類、家臺之上、安金

彩四神狀、白虎、青龍、朱雀、玄武、五彩映日、金碧燦目、乍見黃豹

一群、人立而來、變視之、則少年着虎文衣、戴紙虎頭、

以粧點其景况也、又見蝙蝠傘大丈餘、張翼而卓立

車上、既而地毯儀、既而火輪船、獅子戲於牡丹、而石

橋映紅雲、龍宮隔浪、而朱欄尊霞、皆大一丈餘、畫翠

描紅、以製造之、其奇麗偉觀、非庸常筆舌可名狀也、

或打扮、即征鬼鳴之狀、或摸擬狐王嫁女之故事、

其他猿蟹之報仇、狸兔之野語、日日呈奇、朝朝異觀、

難以諧譚滑稽、使觀者抵掌絕叫、不覺呼妙也、

運砂之第二日、療病院教師、永克氏、典司藥局教師

西京傳新記 四編

半月堂藏版

其來觀、相俱嗟稱曰、壯哉觀也、如斯繁華富庶、不讓歐洲學校病院、建築落成祝賀之時、而今來于日本京都、不獨見此盛舉、唯斯一事、可以卜病院異日之盛業也、外人嗟稱、既已有如斯者、宜矣、都人誇調、以為絕世壯觀也邪、

輸砂土之前數日、某區戶二長、大會其區內老少于小費、以議當日盛舉、問各家意見、一人前膝曰、方今運際文明、其服飾彩棚、一摸倣西洋、以供萬人壯觀、豈不亦愉快邪、一人曰、此拾前人唾餘耳、何則、大都各區競新呈奇、以欲求一時聲價者、不暇口數、故製

服必西洋，作屋必西洋，言語亦西洋，飲食亦西洋，莫適不西洋。而今又擬以西洋，無乃拾前人唾餘邪？曰：然則何如可乎？曰：務要不墮前人牙後耳。曰：何謂不墮前人牙後邪？曰：不如用萬匹白縐絹，製造十丈富岳也。抑日本有富岳，雖西洋諸洲，凡橫目之民，誰有不仰其高崇者邪？然則不如製富岳使萬衆措耳目也。一人駁之曰：富岳工夫，新則新矣，唯恐費用不貲，以致區內困弊。曰：如然，以楮製造之，塗以粉白，抹以青綠，則宛然富士峰，而費亦不過十分之一。於此群議一決，將令工製富岳，最後有一人，淵默聽衆議。

## 西京傳新記 四編

半月堂藏版

少焉前席一揖曰：以僕見之，諸君之說，皆有不可從者。何則？費萬匹白縐絹，造十丈富岳，不獨費用不貲，要不得不謂無用也。均是無用，假令楮紙製之，亦非拋數十金，則不能作為之，以有用之貨幣，費無用之兒戲。此僕之所不肯。諸君慮不出於此，競一時豪舉，安得不貽笑於大方邪？衆皆同聲服其議論，相附和曰：兄言當矣。兄言當矣。果如兄說，區內無事，無戶別募金之累，亦非吾輩一人幸福，併一區內之幸福焉耳。於是製造富岳之議，一時屏息，絕無猷異議者。衆皆欲辭而散，乍有一少年，艷然掉頭曰：諸君之

言，皆守錢奴之見耳。今官家為都下五十萬生齒，建療病院，令俞謝越人，以治廢疾沈痼，久而不起者，其深仁厚澤，為之下者，豈可不感欣扞舞而圖其報効邪？然而靳惜區區錢財，以負官家愛民之盛意，此僕尤所不解也。諸君弗聽，則僕請自辯之。舉坐踴躍，富岳之議再燃，遂從事運土之役，以極都下第一之盛事云。抑愛財省費，則銅臭翁之常事。今此少年奮身不顧，以致挽回頽波，豈可不謂特立獨行，不牽世之趨舍者耶？宜乎少年之鼻梁，與富岳聲名，爭其高下，而相馳逐也邪。

## 西京傳新記 四編

半月堂藏版

醫之為言意也，意度病之所由之謂也。醫而不察病之所原，雖日服神丹，月投靈藥，吾見其徒勞而無効為耳。故曰醫者意也。以意忖度之之謂也。夫京師則刀圭之淵藪也，而其尤彰于時者，先後輩出，有主張潔法者，有尸祝西洋者，有眼科，有針科，有產科，有小兒科，而至其技拙而業不行者，則聳肩而獻諛，俛首而呈媚，舉止巧慧，喜出入猗頓之門，邸宅之販賣，婚嫁之媒份，莫不與而周旋，能舞寸舌，以當小利者，往往而有焉。人目之以曰數醫，又曰幫間醫。此二者皆識者所嗤而不齒，嗚呼男兒七尺，執刀圭以馳逐于

當世者，寧為真醫，不用於時，勿為數醫出入倚傾之門。

自嘗草緒鞭以降，以岐黃之技，行于當世者，皆駕獲輿，著靡衣，朝朝乎市街間，近時一變，醫人皆乘人力車，華茵映日，而油幕障風，一奴挾輶，電馳而詣某市家，且候其患者，市人頗豪富，頃日小姐，罹憂疾，沈綿彌月，醫理百方，絕不見其効，正是海棠經雨，香肌益瘦，楊柳厭風，細腰日衰，氣絲奄奄，朝不待夕也，父母憂惶，不知計所措，乃延醫其別室，慙乞一診，醫熟視其面目與容軀，沈思久之，曰：是為想思病，不速治，則二豎將入膏肓，父母悲駭，再拜求治，醫曰：是易治耳，僕有傳家秘方，不輒許人識，名曰宜男湯，加以生薑一莖，服之一夕，無藥有悅，必矣，乃呼藥籠，致之其膝下，醫人從容閱之，乃圭配劑，先調合五帖，因付之其下婢，且囑之曰：宜候深夜無人，令服之也，家人慶奉一如其言，果三日而想思之病瘳矣。

既而大醫還車，詣一士族家，家人款接，徑延之於病室，患者率五十餘歲，面目強健，絕無病羸之體，醫人一診，大驚曰：是固陋痢耳，固陋與虎狼音相通，尤為劇症，非庸常醫生可治也，敢謝，敢謝，因欲辭去，闔家懇請求治。

西京傳新記 四編

五 半月堂藏版

醫復坐曰：如然，僕有一奇方在焉，請嘗試之耳，唯至其治與否，則雖僕不可預期也，家人問曰：大醫妙方何如？曰：開化湯是也，加為以數行橫文，烈火湯煎，幾而服用之，未出十日，病可立瘳也，即調一二帖，付之去矣，服未二三日，而嘔吐如瀉，固陋之病亦卒痊矣。

大醫半日，巡訪其患者，回車歸家，乞治者輻湊其門，中有一壯漢，再拜曰：下奴少小，不欲從事筆硯，是以九一切圖書尺牘，雖一字一丁，展對終日，如雲煙障眼，如黑霧蔽面，不唯不能讀之，又不能解之，因就一眼醫，求診視之，醫生沈思，不知其何病症，敢請大醫垂憐，見治之，大醫低面熟視曰：是為文盲，吾曹非所醫治也，唯有一策可治，曰：何也？曰：從今宜當至小兒，日服五十韻及單語編，久而弗懈，則可以發其蒙也，其人大悅，即赴小醫，讀書習字，未半歲而稍稍覺文字可讀，三年而兩眼明瞭，無復文盲之病矣。

又有一商賈，狀貌憔悴，囊且貧矣，嘗來請曰：奴貧病逼骨，命在旦夕，願得假回生之力，以驅除窮鬼，大醫曰：此又易治焉耳，用黃金湯一時間，其快復奚足疑哉，然此劑非可輒得者，願朝夕營求，愈積愈厚，則窮鬼可得除也，商賈拜服，從是一意勸其業，後獲黃金

西京傳新記 四編

六 半月堂藏版



湯服之。未幾貧病快復。遂為富翁云。

而醫生相勢。浴於某店湯。高履鏗鏘。踏月而歸。一生朗吟曰。名貴都下響如雷。自詫扁倉是再來。醫手爭如拱手巧。匙頭難及古頭才。聲肩直趨推門召。獻笑頻通室女媒。素問傷寒論未解。大車輕輓辟人回。一生嗟稱曰。意匠新巧。格律謹嚴。而不拾前人唾餘。不知此作。何幸大家所結撰。生微笑曰。此僕在鄉里所戲作。蓋嘲庸醫之詩耳。唯當今漢醫全廢。而洋醫日盛。夫洋醫之術。精則精。然不過療一身癆瘵也。吾所謂治術者。則異於此。不獨醫一人身體。俾將醫天下

西京傳新記

四編

七

半月堂藏版

民獲也。雖然能當此任者。世自有其人在。固非僕輩所企及也。無已則施絕奇之術。治非常之疾。幾幾可以不愧為岐軒之徒也。僕嘗聞之。昔者有華岡隨軒者。能治難症奇病。嘗有患雙生羣丸者。就而發視之。不能辨其真偽。隨軒乃會其父兄曰。羣丸則生命所關係。治療誤方。即死矣。予今察此疾。治亦死耳。不治亦有死耳。均是死乎。孰若施治而死之勝邪。父兄頓首曰。死生命而已。冀賴回生之一匙。以保百年之命脉。死之日猶生之年也。隨軒曰善矣。可以治也。乃延患者。實諸一室。固釘其戶。以塞出入口。夜正參半。隨

軒躍而入其室。拔利匕首。擬之患者。叱曰。咄。癡奴為天人。所唾弃。盡速死。我刀下以免苦惱邪。患者震怖。五色無主。涕泣以請免一死。隨軒執視其狀。自曰。可矣。乃弃刀。檢羣丸。真者縮小。而病者如舊。遂一刀割去其疾。布藥其瘡。將息一晌。神氣初定。嚮之羣丸畏縮。不復見者。再現疾全復其舊矣。嗚呼。如華岡氏者。可謂雄偉而非常者也。華岳氏而在焉。僕將執杖履從其後也。

西京傳新記

四編

八

半月堂藏版

某病家。料當不下十時。歸來焉耳。諸君請姑待之。衆皆欠伸。日將十二時。車聲鞦韆。停其門外。塾子迎拜。羅列其玄關。曰。先生歸矣。先生一一診察其病客。令生徒調藥餌。其為疫鬼所祟者。則投以鍾楮散。其為窮鬼所困者。則授以福神丹。其為花柳所惑者。卑以悟迷散。每人診視。各家配劑。不復遺一人。最後有拉一兒乞治者。曰。脉兒無慧。今茲十歲。未辨菽麥。願先生哀憐。幸下一匙。以治其癆瘵。大醫掉頭曰。此雖神丹仙方。絕不見其効者。雖然。請求百方。已至此極。安有弃而不救之理哉。其人拜謝曰。如然則用何良藥。

當以治之。大醫微笑曰：不必累搜索，蓋一封讀書丸而足矣。

文明開化不開兒何不煎橫文試服之果令其言虛誕公等亦當斬髮纏帽各自披是俚俗所歌謠非可塵大方清聰雖然當開化之時墨守故習不能與世推移勢不得不煎一帖橫文湯服之也歌謠雖鄙俗亦足以翼贊開明之治邪。

#### 八阪新地 附歌舞練場

八阪新地。一曰祇園新地。以其在八阪祠外故改名焉。抑鴨東花柳之境。指不暇屈。而特以此地為倡首。

#### 西京傳新記

#### 四編

九

半月堂藏版

經緯縱橫。分為六街。曰末吉街。曰元吉街。曰富永街。曰宮川街。曰繩手。而八坂新地。當其要衝。妓樓酒舖。向背挾道。紅裙翠衣。絡繹如織。而每戶戶外。揭一小行燈。正面題曰席貸。側面署家名及其姓名。大率皆揭婦女名字。若大樓巨院。則當孔道之表。至於小院支樓。往往住于窄巷屋後。皆彫欄鎖花。而湘簾護抑。媚香撲鼻。可令達尊。南面壁坐。彈之膝。柔肌露雪。可令條仙人失脚。而顛墜于下界。老實爺爺。不得不回頭而傾一盃。石部金吉。不得不破入德之門限。而解綱領之束縛。織畱財主。脫金庫鎖鑰。時戲揚州之花。

此勢所必至。雖尼山世尊之大智識。恐不能免此迷也。故僧一休曾有詩曰。巫山雲雨夢中神。君子猶迷

况小人。嗚呼。如一休者。可謂開化中之真開化。高衲中之真高衲。毫不染汚人間塵滓氣者邪。夫賢賢易色。則孔之所以為名言也。色。食性也。則孟之所以為粹人也。故釋尊雖聖。亦不生於樹股也。老子雖賢。亦受生於母胎。故覺則凡夫為佛。迷則佛亦凡夫耳。能解脫迷悟二塗。上成等正覺區域者。始可與語慾界妙趣也。嗚呼。人間萬事。靡物非色。柳則綠。而花是紅。富永坊某妓樓。六曲屏風圍春。一雙角枕同夢。一貫

#### 西京傳新記

#### 四編

十

半月堂藏版

客擁一紅粧。吸吸語往。密密詰來。客大息曰。人生浮沈。不唯飛鳥川。昨日深淵。則為今日淺灘。前年陶朱。則後年窮鬼。意者如卿。亦久沈於汚泥。浸淫於煙花者。何不少話說。說其出處履歷。以慰藉此長夜邪。妓於邑久之曰。妾之出處浮沈。非一朝而可盡也。不如先說郎所踐履。使妾聞之。客咤曰。予與卿相昵。洵非一日。今約以偕老。未嘗明其心事。意以予為無心腸者。無乃包藏其身上邪。卿而不白其心事。待予以路人。不料風情水性。一至於此。妓慰諭之曰。否否。何其出言之婉。而且冷耶。然則妾先試語其所經歷。唯事頗

元請安卧而聽之。妾元上京三十區柳馬場街虎石坊商家之女。名曰阿半。嘗與近隣姊妹賽五瀨。祖廟塗宿于石部。時帶屋長衛私焉。既而有娠。憚人之指目。懊惱彌日。會長衛亦坐事。行將所捕縛。乃與長衛胥議。且沈身於挂川。而長衛溺死。妾幸為漁人所扶掖。以得不葬。腹長衛既沒。無身可托。乃改名曰深雪。養某氏家。嘗赴宇治。時屬夏首。一夕泛舟觀螢。見宮城阿蘇次郎。喜其風白瀟灑非常人。心竊慕之。欲就說心事。良緣未至。參商一別。鬱鬱平歲。既而聞情。即在關左。單身千里。由海道下。道而失明。改名朝西京傳新記 四編 上 半月堂藏版

顏。滯留濱拾駢。會情郎宮城氏。改姓名曰駒沢次郎。左衛門。而妾失明。不辨黑白。不知情郎近在目睫。情郎反知妾之深雪。而憚其同僚。不能白其意中。令妾彈箏歌謠。朝撞小詞。不告其名。居而別焉。妾後覺之。欲追而從之。卒不及也。聞者無不悲其薄命也。厥後再歸於堀川。改名阿春。教歌曲於女兒為活。又為傳兵衛所昵。未幾傳兵誤殺人。為所逮捕。乃繫身於五條遊里。更改名曰阿古屋。遇與平氏士人景清相親狎。雨則供傘。寒則奉茗。落花有情。流水何無心。遂約永好。時鐵倉氏寘館于堀川。使扶父莊司重忠掌管

訟獄。重忠為人詳雅而仁恕。識獄廣平。號稱循吏。大索平氏餘黨。是以景清逃匿。不知其所在。以妾與景清相親狎之故。捕而延之堀川。重忠問以景清所在。妾皆答不知。重忠亦不强之也。既而景清伏誅。無躬可托。更賣身於此地。又鬻歌曲。以保餘生。嗚呼何其人生浮沈。無有定極。一至於此邪。因潸然淚下。客笑曰。卿名阿半。而深雪。而朝顏。而阿春。而阿古屋。數改其名。數異其趣。雖事涉虛誕。亦近世之事。唯阿古屋之於景清。五百年外之人耳。而卿自攝其人。不知卿今年齒何如。曰十九年三月耳。客益大笑。深尤其

西京傳新記 四編 上 半月堂藏版

虛妄。妓怙然不少屈。徑答之曰。妾其阿古屋再生耳。客亦益絕倒矣。

一歌妓。雖姿色不甚揚。能以術數騙萬客。凡接客。弗論醜美生熟。弗問貴賤貧富。一約以偕老。每約必出誓書。以表其丹衷。以誓於鬼神。偶有一年少。嘗詣友人家。談及花柳情事。少年探其懷。出誓書一通。誇詡其友曰。彼妓能為僕委身。約以偕老。雖以百業平。未如之何耳。貞淑如彼。此亦妓中所不夢見也。其友怪之。亦探懷出一書曰。此彼妓許僕以偕老者。少年大驚。因聚其友五六輩。試問之。皆出其所贈之誓書。必



年益怒，五人胥議，詰妓家，讓之曰：「卿贈吾輩，以靡他之誓書，何其情之浮薄，而出言之容易邪？苟有說則聞之，無說則吾輩五人亦將解體，卿身以甘心之。」左右逼之，妓不少動，帖然安坐，覆援長管烟具，喫烟一過，朱唇噴雲，雲中睨視年少，曰：「公等多口，唯可厭，請靜坐而熟聽之，抑妾之於諸公，豈親於彼而疎於此者哉？獨所憾者，雖妾非有三面六臂，夫一人之身而接萬人之客，終身應酬之，不暇也，故作數百通誓書，以分付諸公耳。」五人皆怒，為妓所賣，怒氣上騰，欲生魚肉之，妓神色自如，寢顧之曰：「公等毋深嘆，五人中必有真誓書在焉。」五人相見，皆欽然吐舌而去。如呼如答，如斷如聯，如鴻雁嘶鳴，下秋旻，如柔橈高低，迴於空江，餘音漸續，自水煙蒼霧之外來者，是非輓夫引野航，下上高瀨，川者邪？此聲也。霜曉雨夕，常喚覺雲雨枕上夢，令才子佳人不禁割愛分袂之情。其懊惱褻切，又有邁於晨鐘朝鶉者也。雖然，俾木強野人聞之，非蟬噪則蛙鳴，亦足以聒耳聽而已。嗚呼！歌者在於彼，而感者存於人，是以潯陽琵琶能令白傅哽咽，楚帳悲歌卒致重衡於邑，歌曲之感人，已如此，而況於其哀鳴悲啼，出於自然者邪？

西京傳新記

四編

三

半月堂藏版

梅雨僅晴，月黑風冷，螢火在草，且明且滅，四無人影，流水如咽，夜將參半，鴨河堤上某橋畔，有一大柳樹，樹下乍見一少年，風手滿袖，眉目如畫，其面類玻璃，其肩似延若，自帶以下，不及高島屋半寸，龍鍾乎若雨中之竹，腰挾數鞘一刃，聯步艱難，拉一美姬，美姬年可二八，均服靚粧，手提蛇睛傘，殷款涼涼，足欲進暫止，蓋少年與歌妓思慕褻切，為不得遂情志，且相逃走，一死以葬於魚腹也。既而陰雲韜月，夜風送鐘，屈指則某山寺報後夜也，少年潛然攬淚曰：「今所聞者，則夜半鐘，無乃促吾儕死期邪？」與其踈巡連人之西京傳新記，四編，十四，半月堂藏版。訛笑，何不自引決，以約來世？女曰：「諾哉，未來必一蓮托生，願毋相讓。」少年首肯大息曰：「宜當冷半席，令卿坐焉耳。」會隔岸紅樓，絲肉杳渺，按一闌薄命行曰：「長堤花盡雨痕綠，裂帛新鶯聲似浴，夜川影暗水聲喧，垂楊一灣橋一曲，薄命人似薄命花，十五淪落小狹斜，此身不憊葬魚腹，他生唯願嫁郎家。」少年側耳聽，一聽久之，曰：「卿亦不聞彼樓上唱歌邪？此身不憊葬魚腹，他生唯願嫁郎家，何其與吾儕身今相似之甚邪？」乃相俱唱，語者三次，携手將投身於河涿，下見壯漢一隊，喧呼而來，有提掇者，有手篝



燈者有手巾約頭者有偏袒戟手者近而熟視之蓋其妓院令家僮追蹙美姬所赴也少年倉黃失措以身翼蔽之欲喚呼求救舌縮聲沒不能復發一言也耳邊下有呼覺者曰得無為覓夢所繫邪何其呻吟之甚也客驚覺則一場假寐之幻夢而身與某妓醉卧于宮川町某樓上也妓問曰夢中何所見定是吉兆好夢客冷汗浹背因悉語夢中所見妓色不懌曰即既已有愛姬如此雖有行露之憂豈無桑中之樂而不令妾知之以至今日妾竊恨焉抑媚妓騙客古今同一未足深怪客之騙媚妓妾今而得見之妾

西京傳新記 四編 半月堂藏版

恨焉翠眉正嗔而紅淚沾腮客大困因慰藉之曰此幻夢耳非信有此事也妓妬氣益甚詰責不已客改容曰如然則僕請首其實蓋夢中所伴美姬則卿而已抑僕之於卿綢繆三歲膠漆不曾是以畫想宵夢莫日不思也卿若有情蓋相偕赴鴨河以快同死耶妓失色惶懼曰若情死則官家嚴禁何其開化世界而得此固陋言邪言訖將逃走客撫掌曰果如僕所料僕故假夢以試卿耳妓獨語曰吐亦為郎所騙矣徹夜啜泣笑泣相接枕上早聞鴻雁連呼之聲客傾耳曰東方白矣是莫輓夫引野航邪客割愛欲去妓

微笑耳語曰疇昔之哭泣亦一場覓夢哉祇園街之有一力屋雖五尺童亦能知之矣今修其宇曰万亭高樓邃閣清雅而滿洒竹樹繞檐石古而苔老可以飲可以歌舞踏酣醉唯其所欲近拾氏所謂遊於花者祇園祠外宜當伴紅粧者是也時正三月當歌蝶舞花影上簾朧月在天滿堂銀燭萬點繁星幾場綠肉嘔亞微曉其沈醉踉蹌手帕包眼與歌童舞女為冥藏戲者彷彿于由良人而其樓上美姬逃酒納風者則逼肖于阿輕且失方今報讐則國家大禁其有挾不平不充於意者宜當懇之於有司以

西京傳新記 四編 半月堂藏版

請其處分爾事見福沢氏學問初六輯令淺野氏遇今日開化時不以私怨害吉良氏其為一華族移居于東京其富貴尊榮非勅奏美官則府縣令公以令其終何足道乎況阿輕弔身不復須復輿可以駕人力車也勘平鳥銃不害定九不復須猛硝雙丸也荷燭可以燭闇夜不假樂市兵小田原提燈也定九郎亦省九郎稱小野定斬髮洋服亦可以參邏卒貞決不帶二尺八寸長刀也一力屋才女外套褶袴可以為某區內戶長也小波力彌之婚媾不及旁東道跋涉一片寫真像可隔千里以藝視各家相貌也然則令近松氏遇今

日文明世界其將揮何華舌以贊成開化未可知也  
嗚呼文明之餘澤深矣

語曰長袖善舞多錢能賁抑鳴東六街歌童舞女紆  
錦拖綉靡袖不長故善舞也妓院娼樓靡家不富故  
能賁也此所以鳴東日熾而月盛也然近歲設教坊  
于其初音巷以為諸妓歌舞溫習處名曰歌舞練場  
其藝業各有分課于絲于竹于歌曲于舞蹈皆簡出  
藝妓中精於絲熟於竹生長於歌吹海中教人不倦  
者數人以為之教師譬猶老革宿將多更戎陣者為  
之主帥師令嚴肅旗幟改觀教師一莅場群妓正襟

西京傳新記

四編

十七

半月堂藏版

一從其約束宜矣其藝業日月進步與夫佛媛靜姬  
二祇千壽諸名妓相軒輊弗多遜也或曰教師教舞  
於諸妓足之所踏手能隨之手之所舞足亦隨之凡  
左右前後正側向背一以眸子為準眸子而不到  
舞蹈雖工乎屈伸雖妙乎其傀儡演劇又何異邪或  
曰是所謂道也進于技者昔者孫子操女兵令之曰  
右視右手左視左手前視其胸後視其背今見舞師  
所教悉與孫子所令相符焉而孫子号令不行于女  
兵至斬王嫫姬今舞師以一釵裙能訓練數百人歌  
妓不罰一人操縱如意顧運用之妙有優於孫將軍

而然邪若使孫子觀今日衆妓舞蹈有法進退得宜  
悉從其約束之狀其嗟稱驚歎之不暇也必矣嗚呼  
區區舞蹈不可無紀律如此而況於行大師征邑國邪  
歌舞之場幅員二十餘方巷外揭一大榜題曰歌  
舞練場溫習會每月某日至某日擊鼓于後一時門內設會計局推  
看錢賣左券然非知音者不許突如縱觀之也蓋以  
匪尋常觀場之比也觀客麇集各買左券至其場口  
場口有人一查延之其舞場場當容千餘人正面畫  
為數十區條理齊整如棋枰如井字一區厪容二三  
人左右有棚高下得宜又區而別之棚外設欄以支

西京傳新記

四編

十八

半月堂藏版

客顛墜猩纔展維而羊布布綠附而眺之如春田綠  
麥雜黃菜亦奇觀也舞臺正面下一大布幕々画水  
墨喬松偃蹇屈曲萬葉蔽之華勢飛動蓋都下名面  
所繪画既而觀客蟻集肩摩肘接嬰復置瓦爐安陶  
瓶之地未幾何絲竹合奏嘈々聒耳大幕正揚矣舞  
臺正面羅列歌妓十餘名皆靚粧炫服錦綺繁目色  
藝共優其在壇上而絃歌者曰村尾登茂曰小嵩來  
吉曰中村淺由曰武隈仲鶴曰三上常松其在壇下  
而鼓吹者曰山本菊治曰鷺見小種曰桂幾久治曰  
武隈阿鶴聲清調婉如黃鸝嚶花如神龍吟月絃色

鼓聲、肉聲、笙聲、宮商並奏，羽角交合，令觀者魂飛肉動，不覺連聲呼妙妙也。蓋奏雜鶴三番，更歌曲也。前歌訖而後舞，續之。呈新標奇，演其地軍記院曲者，為絕助。為君松，為小貓，大絃如裂帛，小絃如撒珠，女而男喉，少而老舌，下而學美姬，下而擬惡漢，下而老賊，下而良臣，同一三寸齒舌，而或泣或笑，或怒或罵，可謂奇幻百出，人間歌曲能事畢矣。曲訖而幕下矣，群客喝采，曰：嗚呼，可惜哉！何其曲之易終也。日將下春，舞臺一時點燭，燭光如星，下現出番妹數名來，皆白衫，藝妓皆著黑衣，衣裳盡襪，漆百花，手笛者，為拍本。  
西京傳新記 四編 十九 半月堂藏版

里鶴，扶小鼓者，為佐佐木登良治，擁太鼓者，為辻梅松，而三宅美代鶴，為之仕手。蓋散樂原有正有副，正謂之仕手，副謂之股，皆追次上場。最後美代鶴，錦衣繡帶，長袖而濶袴，花鈿映燭，而鬢髮如雲，金蓮步遲，而羅襪足滑，膝首蛾眉，鮮笑眇目，徐徐焉來，蓋演熊野散樂也。既而笛鳴鼓響，丁丁擊鼓，與歌謠嘔啞聲相和，廣美代鶴，開泥金画簾，徐起舞，歌曰：上郡春色雖堪惜，其奈吾妻花落何。聲調婉轉，使聞者不覺心醉，未嘗不歎其絕技也。其演龍田者，曰：白木梅由，其舞八鳥者，曰：駒宮歌菊，其奏邯鄲者，曰：井上葩留，歌

曲也。散樂也，更番呈舞，各色奏曲，更漏正闌，有客見歎曰：昔者李桓子受女樂於齊，遂至不見朝者三數日，若令李子觀今日歌舞溫習之會，其嚴朝者，吾知其墮々三數日不已也。嗚呼，歌舞之怡人，蓋有甚於食色者也。  
吾嘗戲作鴨東名妓月旦評，以百花比擬之，曰：其善吹笛者，為山本菊治，菊治色藝雙絕，亦教坊中出藍如幽蘭在空谷，清芬襲人也。其善胡弓及琴箏者，為上田淀吉，淀吉溫雅而絕艷，雖宮嬪室女，有過無不及也。如秋棠泣露，蓋國色也。其工於舞者，為駒宮歌菊，才色絕倫，凜然有丈夫氣象，吾竊目之以比雪中梅花，其美而嬌貴者，為山口千代，為鈴木小玉，二人才色，非半開牡丹，則盆栽小櫻，世特推千代，不及小玉者，豈美人亦有韋不韋然邪？其聲名籍籍，傾動鴨東者，為北村床鶴，吾亦評之，以擬嵐峽櫻花，其他岡本秀松之院曲，井上葩留之散樂，皆老練圓熟，可謂空前而絕後者也。吾故品藻之，以比牡丹紅葉云。此數者皆余所目擊而親見，其美姬艷妾，未及親見者，不暇悉記之，吾將撰黨史，以補其逸也。

圓山



島樓隱。鴨東雜詠詩云。自將鐘磬換笙歌。精舍隨緣  
迂綺羅。且曰圓山教院。古昔皆屬延曆寺。中世爭亂。  
別立宗門。厥後昇平二百年。竟化成繁華行樂之域。  
都人每僦其樓院。作行酒斟觴之遊者。晨夕不絕。住  
僧又蓄妻孥。理酒肉。以譙客為事業。香火經函。蔑然  
如不聞知者。嗚呼。樓隱之時。距今既已五十餘年。而  
其繁華行樂之美如此。而況明治維新。駸駸向化。其  
殷實富盛。亦非昔日之比可知也。圓山之地。負岡面  
市。層層疊石。以為磴道。樓主人曰正阿弥。曰左阿弥。  
曰端之寮。曰某。曰某。而樓上架樓。樓下臨園。竹樹幽  
西京傳新記 四編 半月堂藏版

下。城郭山川皆一暉可辨也。故吾竊目之。以為平安  
第一絕勝矣。  
上天同雲。朔風送雪。鵝毛翻空。圓山正阿弥樓上。三  
詩客招聘歌妓舞女。以閨賞雪之宴。客眺矚叫快者  
一再。曰銀世界。曰銀世界。瓊殿玉樓。上下林立。奇景  
如此。豈可不一詩以屬其景况也邪。乃聞韻命題。聚  
首圍檠。苦吟久之。甲詩先成。乙觀評之曰。兄詩佳則  
佳矣。獨奈孤平何。丙又評乙詩曰。命意新警。措詞工  
穩。佳則佳矣。獨惜起句。出以踏落。夫踏落之與孤平。

雖心不及深尤。亦不免為一詩病。伏願細心工手。別  
購佳句。不獨免孤平病。併脫踏落之窠臼。詩客笑矣。  
興趣正酣。語未訖。一妓艷然躍起而去。卒不復來也。  
客深怪之。問之其主母。主母笑不答。強而詰之。乃首  
其實曰。公等已狀其詭弄妓女。自有限量在。而今設  
隱語。嘲其陋醜。何其惡譴之甚邪。抑公等今日所聘  
之妓。軀幹短小。而公等嘲之。以曰孤平。又嘗之以曰  
踏落。故彼妓報愧。不能自禁。以致逃遁耳。客初愕然。  
深悔其失言。陳謝曰。非敢然。蓋偶然也已。蓋邦人呼  
矮身短軀者。名曰小標。嘲身賤小妓曰踏張。抑孤平

與小標音相近似。而踏落與踏張。語意亦類之。故妓  
女謬聽。以為嘲笑已。故艷然以致逃遁耳。嗚呼。妓女  
之愚。詩客之拙。可以為無雙一笑柄也。  
東山第一樓上。騷流數十名。各擁寶爐。坐華茵。外套  
披羅絨。而頭衣纏彩絨。方今上下。好纏細絨。以文彩。名曰纏絨。  
熱羹噴煙。而壺酒釀春。青衣搬盤。散紅粧佐酒。耳無  
絲竹之音。坐有苦吟之聲。蓋某大人與其宗近。設撥  
散會。以開和歌也。有向隅而沈思者。有抱膝而苦吟  
者。有搦筆而起草者。有磨墨者。有展紙者。有喫煙者。  
有舉觴者。有數起而旋者。此旋非須臾。蓋構思。不成。託旋以消悶也。既而



帝間各詠一首，爭呈之。宗匠座下，宗匠諷詠，嗟稱曰：首首秀逸，句句深麗，雖以人九亦人，恐不能出諸君之右。況於小町邪？況於紫子邪？況於定家、家隆邪？獨所憾者，少有盜襲古歌者。此吾社所深誠，雖然不獨吾輩犯此禁，雖古人亦所不免。此弊俗名曰「歌偷」，抑所謂歌偷者，以古歌為己歌，重改其面目，公然誇詡其儕輩是也。言未訖，坐有一客揚言曰：宗匠明眼，不唯一玻璃鏡，能照其真實，辨妍媸，僕輩庸愚，無辭可以陳。唯數以歌偷，恐所未心服。世有呼詩人者，有曰：俳諧者深者，而見其平素所吐，大抵皆盜竊剽襲。

西京傳新記

四編

廿三

半月堂藏版

未曾見出一家手眼者。然而倨傲尊大，自稱大家，較諸夫歌偷者，其罪未必易輕重也。不知當今司法，將以何等法處之邪？敢問宗匠，洞開大活眼，試識斷此獄。宗匠沈思拍手曰：不必深究，曰：發徒刑哉。曰：發徒刑哉。孟邦俗，放下百事，不復顧念，曰：發都咎，都咎與徒刑音相近，故以是戲之為耳。

圓山酒樓旗亭，一年四時，無日無客。昨日聞倭歌，今日角圍棋，明日品剪茶，曰：展觀，曰：歌舞，或插花，或扣戰，曰：御花講，曰：日丸講，曰：某，曰：某，不暇口數而指屈，客皆命酒散，聘歌妓，嘔啞雜音，令人耳聾心狂，嗟呼。

可謂熱鬧世界，別補足一大熱鬧也。一日骨董家數十輩，相俛設展觀會某樓上。此日風日晴美，觀客如雲。凡古今名儒之書、文士之畫，滿幅雲烟，淋漓如滴，各帖龍蛇，墨舞筆躍，亡論湯盤周鼎，唐帖晉碑，銅雀之瓦研，渭濱之陶器，以至夫唐宋明清名家之古書畫，網羅而陳列之。銅瓶插花，而奇芳襲衣，古鼎奠茗，而清香滿坐。各評其所見，以資清娛，亦人世之一樂事乎哉？坐有一賈客，數息久之，曰：僕今日觀陳列古畫幅，實者十居八九，而不知者，喧傳弗措。實上描贗，偶求其正真者，僅僅不存一，而世人眼孔如豆，玳瑁

西京傳新記

四編

廿四

半月堂藏版

混玉薰箱同器，何其世上贗作之饒邪？而方今商賈不獨欺人眼，雖偷盜亦有販賣書畫者也。頃讀滋賀縣新聞紙，有一奇偷，於衣服金帛，未曾少掠奪，獨於古今書畫幅，貪戀如命，剽掠以換萬錢云。抑偷金帛，攘衣物，則偷盜之家常也，而此盜獨掠奪書畫，而不顧金帛，豈可以尋常綠林見之邪？雖然偷盜攘書畫，官處之以法律，至骨董家輩，實買書畫則舍而弗問，一任其所欲，後之文人詞客，竊風竊月，竊花竊雪者，其將以何典刑處之邪？一人在旁，啞然大笑曰：汝不聞乎，大盜攘國，而人不知其為盜賊，何問區々章賊

邪。

三層樓閣突兀聳天。隱見於翠松紅樹間。遠而眺之。如蛟宮貝闕。屹立于雲中者。長樂之高閣是也。閣在東山吉水岡。地勢高峻。俯可以眺臨京城。十萬烟也。閣下設鑛泉。以供都人澡浴。締構雅潔。一摸倣洋製。湯氣籠寬。而玻璃半濕。白雲繞攏。而攔杆映霞。蓮花浴波。則歌妓濯脂粉也。海棠沐雨。則舞女洗雲鬟也。豐艷者如牡丹。清瘦者類梅花。布巾磨垢。浮石剔穢。有溫極叫快者。有苦襲呼水者。有微嗟者。有笑語者。波湧瀾翻。澎湃輕輅。如風雨驟至。其盛大繁華。可以想見也。一少年浴後快爽。意甚適也。乃與一歌妓兩青衣。上三層閣上。眺臨久之。四望空濶。秋晴如拭。遠而嵐峽龜嶺。綿亘起伏。若波濤奔馬者。近而挂水鵝河。蛇行斗折。相馳逐而南走者。凡從城郭宮室園囿。陂池之景勝。以至夫橋梁堂塔。妓院酒樓之壯觀。蟻簇蜂屯。山城提封。五十萬口人烟。悉在於襟帶下。而朝鼓夜絃。雞犬鳴吠之聲。紛紜交錯。殷殷如雷。諺曰。不觀京城之富盛。不足以語大都之壯觀。信矣。青衣在旁進望遠鏡。以資其觀眺。少年一眺。指其直西曰。如卓立紅白繪蠟燭于一大燭臺者何邪。曰六角堂

西京傳新記

四編

廿五

半月堂藏版

測量標也。烟颺者何邪。曰新京極某店。製親玉饅頭也。螻蟻屯集于路上者何邪。曰行人聚觀四條劇場招牌也。竿頭一片飄紅雲者何邪。曰勸業場旌旗也。一鳥翻飛攫物而戾天者何邪。曰鳶鷂掠奪油剪豆屑也。俯而橫于水者虹邪。曰四條鐵橋也。累累如貫珠。真立刺天者。火雲為峰邪。曰東寺浮圖閣也。隨問隨答。少焉少年低聲。傾鏡熟視曰。小樓臨水。青簾障日者。非先斗町某貸席邪。樓上美姬。與一雅客。交膝對酌。熟視彼妓。原與予約。階老者。彼妓曾笑曰。既約為夫婦。雖以風流瀟灑。業平之皎決不見。二夫言猶在耳。舌猶未乾。今已如斯。何其風情水性。毫無廢耻。一至此邪。怒氣中騰。声色正厲。語未訖。樓上酒酣。妓與客。款語狎昵。眼波涼秋。而繡帶半脫。漸將入蕉境。少年凝矚。鼻息甚忙。青衣旁觀。不知其何事。怪且問曰。無乃鳶鷂掠豆腐邪。少年事正急。叱曰。勿多言。今觀鵲鴿偷我豆。鳩安得不逐之邪。僧慈鎮嘗賦國歌曰。吾戀和拾仁。時雨濃深。兼天真。葛原仁風佐和玖奈理。今其所謂真葛原者。在長樂知恩之間。而大雅堂屹立其中央。柴門筠籬。與梅花梧竹相映帶。一睹而知高士衡泌矣。而池貸成之事。

西京傳新記

四編

廿六

半月堂藏版

先輩往往作其傳。然文辭多係于漢套。是以婦孺幼孩鮮能記之者。予常憾焉。欲著一書以弘世。頃根據山陽外史百合傳。附以貸成逸事。題曰葛原情史。未迨敘梓。登已傳播江湖。今而弗能無舌駟之悔。然事屬既往。讀者不必深尤也。今揭其一半。以供秋夜談柄云。

時維莫之秋矣。菊花半老。而楓葉曬錦。寒雨蕭條。無聊殊甚矣。一日八坂祠外一小巷。歌妓數名。所謂山相共聚于某小樓。有弄絃者。有讀稗史者。有談情者。有語薄命者。喋々惜々。不可名狀。偶有一少年。溫雅

西京傳新記

四編

廿七

半月堂藏版

俊爽。毫無強解事之風。平素好讀漢洋譯書。此日少年亦至其家。輕履鏗鐙。啓戶而入焉。一妓青眼。欣然接之曰。評人必獲其影。今日何幸見斯輩者。請緩語一晌。幸見話新事。不獨賤妾慶幸。亦諸姬幸福。諸妓同聲一口。相附和曰。阿兄久濶。何不相俱語。心事以永一日邪。今日幸屬女紅場休暇。請更留。請更留。少年微哂曰。如然。僕亦幸得一閑。與諸姬半日語。其心事亦不為不可也。因向火爐而坐。妓皆呼謂山貓者。曰。小鬚。曰。小小。曰。阿斑。曰。長尾。色藝雙絕。皆破爪左右名姬。小小微笑。手煎新茗。拱之曰。聞兄近日有愛

姬在。真可艷羨也。願得與聞其名居。曰。毋戲言。僕頃日商事蠅冗。無寸陰以及風流。何暇訪花柳之為邪。小鬚早已認其懷中小冊子。謂之曰。兄所懷冊子。則係何書冊。非院本小說。則風流情史。安得快讀一過。令妾聞之邪。曰。此決非院本情史之比。蓋某先生新著。所謂葛原情史。而記大雅堂實事者。僕幸得騰寫其一本以藏之。今所懷者則是也。今者薄暮。請願點燈火。為諸姬細讀令聞之耳。妓皆欣然。應之曰。固所願也。乃聚首於燈下。聽之。少年從容先讀起其第一回曰。

西京傳新記

四編

廿八

半月堂藏版

葛原情史卷之一

第壹回

祇園神祠戲蝶挑名花  
葛原章舍佳人憐才子

諺曰。佳人多薄命。而才子率不遇。世人不解。動見其薄命不遇。聚散離合無常。歎歎流涕大息曰。日月高明。無有私照。而厚於彼。而薄於此。不獨月下老人之少恩。豈彼蒼亦有比黨。而然邪。抑天之賦於物。高明正大。一以公平行之。其無偏私。固不待通也。然則天之所以令佳人才子能薄命不遇者。即所以成就佳人才子。而寵靈之也。又何足深悲。



其薄命不遇也邪。

讀未數行，小小沈吟久之，曰：果如其說，則妾輩雖非佳人，皆薄命之人。則天所寵靈，豈可喜而不可悲者？非邪？語未訖，阿瑛扶喙曰：阿娘以妾輩薄命，為天之所寵靈，此妾之所不解。蓋如他鄉，則姑置之。今就目前鴨東之地方見之，九翠袖紅衣，倚門獻笑者，不暇口數，其所落籍娼塚者，非無賴惡漢，則薄倖年少，未見其能配俊爽瀟灑粹人，而金階老者也。蓋雖其性行良否，令之然，其薄命數奇，亦有可悲者也。然而謂諸天所寵靈，妾惑滋甚也。因潸然淚下，長尾慰籍之。

西京傳新記

四編

廿九 半月堂藏版

日阿妹說極佳矣，要之待異日論之，未為晚也。妾所企望者，欲細讀其後解令諸姬聽聞之耳。諸妓皆慙慙不已，少年再讀起其後回曰：

話說昔者正德中，祇園祠外，有一姝麗，曰百合，年甫破瓜，都雅便妍，不加塗澤，楚楚動人，亦善國歌，兼妙于心畫，凡鳥啼蟲吟，以至四時景物，觸物感類，咄嗟援筆，咳唾成珠，是以不論士庶貴賤，都下年少自喜者，裙屐靚粧，顧影求中其意者，無服應酬，雖千金子弟，咸以禍福，啗以大利，皆攢折而弗顧也。於是百合名動都下，人皆欣羨，以為清女紫

姬役生，先是有德山生，原江戶士人之子，為人瀟灑而清秀，有故沫寓于京師，驚歌謠以為法，而慕

貧益甚。一日，鶉衣編笠，乞錢于市，有丐兒數名，皆牛頭馬面，如惡鬼羅刹，要生于塗，相偕罵曰：咄，賊奴無狀，敢踏藉吾黨，未稅半文錢，公然乞于市。此吾儕決所不宥，同儕以為何如？丐兒同聲應之曰：洵如魁首所道，群丐一時，猝生於地，揮拳交打，蹂躪踏藉，頗極奇虐。生百方陳謝，乞哀弗聽，髻亂衣裂，殆將見格殺。百合一瞋，心竊憫之，乃予錢于丐兒，解而去之。生如脫虎口，而婦慈母，深謝其再造。

西京傳新記

四編

三十

半月堂藏版

百合答拜，熟視生狀貌，雖落魄殊甚，言語舉止，詳雅而溫厚，不問而知非田舍兒也。百合遂與之昵，爾後情好綢繆，膠漆不啻。半齋之肉，必推食之一，領之服，必解衣之。生尋推解，恩三數年於此，既而百合有娠，舉一女，居無幾，會德山氏嗣絕，族人胥議迎繼其家，生乃欲與百合俱東下。百合固辭曰：妾與郎君，綢繆十年，具嘗艱苦，今枯木回春，死灰再燃，雖妾非不悅其錦旋也，然而所以不肯奉命者，自有說焉。何則？郎君喬遷，携不可知之花柳，不唯速物議，妾恐污穢其家聲，施及祖先，生固要



之曰雖然客上流寓幸得不委溝壑者皆卿力是由焉今富貴而棄糟糠人將嗤吾面也百合尚固辭不肯生亦不強奪其志乃欲携所生女亦辭謝曰妾自今別於郎君矢不見二夫幸有一女兒在焉見之猶見郎君可以少慰永夜之悶也今併附之於郎君孤燈單獨形影相吊隱憂滿腔無物可消遣生遇斯憂寧如無生乎夫妻惜別相向泣焉女時八齡於邑謂父曰阿爺何不挈兒與阿母遠赴于吾妻相俱親睦以樂今日邪阿爺而獨赴于吾妻其奈兒與阿母何百合嗚咽抱兒攬淚曰惟女寧馨何其出言至理至當如斯之切耶夫妻子母三人抱持涕泣悲咽腸斷魂消

西京傳新記

四編

三

半月堂藏版

正是哀猿叫雲而寡婦愁腸為之寸斷夜鶻唳林而孤客殘夢難成易驚蟋蟀在床下嚶嚶如訴愁木葉叩窓紙簌簌似送雨一穗影青秋燈欲滅下明下暗半輪魄黑缺月欲落且吞且吐風砧響枕踈鐘度水

凡耳目所接無見非憂無聞非哀既而鷄鳴報曙宿鴉出林門外乍聞驛馬嘶僮僕具行李生旅裝將辭別女兒忙捲其袖淚眼熱思久之曰阿爺何

其啓行之速邪生顧撫其背曰佳兒佳兒自今歟後能奉養阿母母辱汝所生兒曰唯阿爺保重庶無疾病乎此時百合在戶外佇立瞻望送夫行訣別惆悵五內欲裂一聲泣飲轉輾而倒矣起再目送夫影馬語人聲既已為曉煙所隔遂失其所在云

讀至斯一解諸妓哽咽不能仰見有問曰何其此段似蕩葉別兒之狀邪然彼則母奔兒而別此則夫舍妻兒而去其離情別思之切同一意趣而此有甚於彼者也諺曰生別哀於死別豈不其然乎於是少年

西京傳新記

四編

三

半月堂藏版

請茶喫烟更讀起其後解曰却說百合從是益自脩潔一意撫字其女女稍長又有寸情名曰阿町後配池無名是為玉蘭玉蘭習其夫所為琴酒自娛其高風逸致如梁伯鸞於孟光不知富貴利達復為何物聲名籍籍兒童走卒尚靡弗知大雅先生也舉世傳誦以為藝苑一佳話欲詳太雅玉蘭事跡請細讀下回而分解之讀記少年請茗諸妓慙歎至有流涕者相語曰何其意匠落想似教訓亭情史邪少年首肯曰然唯教訓亭著作則架空馮虛之話說耳此著則多據實事結

撰此所以其往往泣人也。諸妓益入蕙境。不知更漏將盡。尚勸讀其後回。少年更取第二回讀之曰。

## 第二回

萍水相逢弟兄語  
琴瑟和諧夫妻樂風月

先是阿町生長。且十餘歲。百合一日。從容語之曰。汝父士人也。汝宜愛惜其身。毋自輕視也。百合常欲得一佳婿而配之。無一適意者。時有池生者。同住葛原。賣書畫為活。生名秋平。池野氏。後脩其字。單稱池氏。九霞山樵。三岳道人皆其号也。初貸成之父。以年老無子。日蹇蹉峨。瞿曇佛。禱請護一子。其七日久。經過廣汎池上。聞兒啼于林叢中。就而熟視之。則弃兒也。

西京傳新記 四編

三十三

半月堂藏版

妓皆傾耳。津津且入佳境。女奴敲扉來報曰。熟客來在某樓。請速來過焉。小鬟小八相共應曰。唯唯。乃起理粧。少年忙懷卷。將辭謝去。諸妓目送相約曰。明夕有閑。請復袖卷來。少年首肯曰。諾哉。唯近日事故蠅集。恐不能守息壤也。曰。雖然。讀不了其結局。猶演史家約明夕。令聽者遺憾不禁也。敢請窈闢撥忙。以來過焉。少年曰。諾哉。久晤長望。好周旋。好周旋。妓拜謝曰。免須曾字。奈蓋西京俚言。猶如謂吾不然也。

## 八坂神祠

百尺華表。突兀聳雲。而店簾幕。東西飄風。拜殿樓門。石狗銅燈之類。以至夫繪馬之堂。神樂之殿。碁峙星列。無暇悉舉。而本祠在其中央。丹廊縵迴。簷牙高啄。覺搖殖庭。不唯鳥革翬飛。宜矣威靈赫々。以廟食于百世邪。舊史稱。聖武天皇。天平中。吉備真人所崇祀。原在播磨廣峯。其後真觀中。僧圓如。初遷此地。大創建堂宇。今所謂八坂祠是也。神祠之區。幅幘既廣。酒樓茶肆。向背相接。有調馬之場。有學射之埽。吹箭之店。寫真之屋。莫適不可游。是以都人士女。携酒拉妓。遊嬉於此境者。四時輻湊。殆無虛日。嗚呼。可謂盛也。抑平安神祠佛龕。香火之盛。北有菅廟。南有東寺。相持不降。獨八坂祠。常上下二京之要衝。以控鴨東六街之花柳。其擅場於當世。勢所必至。莫足怪者也。吾故指數當今神祠顯于時者。必推此祠。以為冠冕。調馬之場。東西二十餘間。前築土豚。後倚林叢。伯樂數人。維馬於槽。以待騎客。馬皆肥壯。有驕。有皇。有驪。有黃。斑駁而如魚鱗者。則驛。而赤身而黑鬣者。則駟。有振鬣而嘶風者。有摩痒而不勝快者。有啮草者。有跑地者。躍者。蹀者。蹠者。戲者。凡二十有餘匹。皆東奧

西京傳新記 四編

三十四

半月堂藏版

龍種其馳騁縱橫唯意所欲亦可以駕生月而軼磨墨也

一少年頗有馬癖日來調馬周旋馳驅無不如意者觀者嗟稱以為名手矣一日失御馬怒而奔逸勝而越埒橫入林中少年失色或呼曰何不速下曰此如騎虎非中可下也觀者大笑

又有一書生時來試御與儕輩爭馳驅生馬委頓策之不動衆指笑曰何其子之馬相後之甚也生指汗曰非敢後也馬不進也

既而馬之少壯肥大宜於駕御者盡售而不遺一隻

西京傳新記

四編

三十五

半月堂藏版

最後有一老馬皮毛骨立不飽芻菽者三月人皆擯棄無復顧之者或問伯樂曰凡馬之俊而壯者皆易售而此馬獨不能然者豈以其疲駑不可用邪將病羸由不勝駕御也伯樂大息曰既非疲駑又非病羸其所以獨不售者蓋老衰然也抑此馬際明治維新之會曾從參謀某君屢更與羽戰爭馳騁於矢丸間者其先登殿戰攻城畧地之功唯此一馬職是之由今某君身登顯要靡衣玉食以極富盛然而至於馬皮毛骨立不飽芻菽往往為販夫賈豎所驅使而馬也無口語可以愬不平泯默以至今日豈可不

深慨哉語未訖白馬與驢馬相踉蹌遂漸羈絆而逸直衝突賣錫店店翁顛仆為馬所踏藉衆皆駭奔客亦倉黃不知其所之

繪馬之堂幅幘十餘間長榜短匾亡慮數十百枚皆丹青駁落支干歲月奉納願主之數字悉為風雨所蠹蝕僅讀得其偏旁者不問而知為百年外之物其紐摺端正條記第徒名姓數千人上挂長短木刀者其擊斂家所奉納白羽貫鏐者則養由之再生而画馬如生者則金岡之後身其他探幽之虎元信之龍忠信提碁局閑羽擁麾月刀賴義肇嚴而飛泉空湧

西京傳新記

四編

三十六

半月堂藏版

為朝試射而軍艦沒海皆名匠大家所繪画俯仰徘徊令人不遑應接也堂下列數十木榻以供賽客小憩焉店媪賣芳茗若香湯尤宜盛夏納涼之候客之避暑者皆借榻就睡綠樹清風不復覺夏日可畏也歌妓七八名典舞女五六輩相挈賽于八坂神祠飄紅曳翠綠履鏗鏘過繪馬堂前偶有兩賈客就榻而憩焉一客指曰予亦不見彼歌妓中一美姬邪此所謂方今知名熟妓依田笑松者非邪抑笑松之誠意深情新報以傳播之舉世艷稱以為美談矣不知子亦讀彼新報乎否曰僕嘗獲錦繪新報者讀之粗記



其顛末。雖然親視其面目。則以今日為初矣。因有一話。說焉。僕近日觀四條道場演劇。題曰兩都會錦畫新聞。蓋演所謂笑松本事也。難以東京新報孝女小傳。經緯錯綜。別出奇趣。能令愚夫愚婦。犁然中心。爽然自失。亞然絕倒。憫然於邑。亦可以為勸懲。捷徑。開化。階梯也。客原有劇癖。因具問演劇之狀。乃欽然取策。手舞口語。咳一咳曰。本舞臺正面。折鳴幕開。現出八坂祠外隨身門來。丹楹碧磴。頗極宏壯。磴下有茶肆。肆外設一輛人力車。下有青年一商夫。自西而來。又有一賈人。自南而至。相共會合於茶店。就榻而憩。

西京傳新記

四編

三七

半月堂藏版

焉。賈人一莞。揖少年曰。孫兵君。室家康寧。萬福多祥。敢賀。敢賀。小奴宜當數數拜趨。奉問其起居。因循久濶。以至今日者。蓋以主事靡盬。不遑啓處也。孫兵荅之曰。僕亦近日多故。東馳西奔。大負平生。敢謝。敢謝。今日幸得一閑。訪問舊故。卒賽此神祠。併遭逢於故人。僕喜可知也。款晤頃刻。從容改容。故低聲曰。僕今有至願在焉。識卿能有信有義。救人艱難。雖水火不避。故吐露其心肝。以求周燃眉之急。卿幸見聽之乎。否。賈人搔首。沈吟久之曰。小奴蒙君家知遇。洵非一日。貧苦艱難。固所不辭。諺曰。膝腳亦可以謀議。請試

語其所思欲。令奴聞之耳。孫兵大悅。因再拜曰。此非他事。願得借金百圓。賈人大驚。且謂之曰。百圓則大金也。非奴輩所能辦也。雖然。輒輸窮厄。今而不救。坐以見上枯魚市。恐有噬臍之悔矣。幸有替券金百圓。請以此周一時之急。君其安之。乃付以一百圓。孫兵再拜。謝其厚誼。遂相共提携。攀磴而去矣。下有一歌妓。瀟灑便妍。衣裳鬢髻。無物不時樣。所謂鴨東一種出色藝妓。依田突松是也。輕履鏗然。欲蹇齊登磴。遇見老人倚杖而下。下未三四級。失脚而踣。突松倉皇扶而起之。問其名居。老人俯伏深謝其厚意。且曰。貴

西京傳新記

四編

三八

半月堂藏版

孀妙齡。其品位才色。雖宮嬪室女。恐無愧色也。而其厚情至臻。有心腸如此。願得聞其名姓。以報今日恩誼。不知貴孀果何許人也。曰。賤妾是鴨東某街歌妓焉耳。牆花路柳。唯其所折取。庸詎足稱姓名邪。老人感涕。且揩淚曰。僕則五條地方。某街商賈高抬孫右衛門者。近日微恙。行步甚苦。勉病詣本祠。不圖藉貴孀庇蔭。以致無恙。鴻恩海深。無物可喻。義宜當差遣。覓輩。以陳謝其厚志。而將兒不肖。流連島原花柳。大耗損金銀。語未半。更交他語。付之於一笑曰。閑口則說憂苦。正是老爺之本色。請韋怒之行步蹣跚。將分



手去。笑松呼止之。曰：「日夕有風，寒威殊甚，加焉以行。」步艱難，妾恐顛仆，以致尊軀毀傷。幸有小車在，願獲見駕，亦有以勝後行者邪？」因命輓夫扶而乘車，笑松目送，呼曰：「輓夫鄭重，請保護而達之。」車聲輾輞，折鳴而幕閉矣。語畢而呼茶。客喜躍曰：「新奇妙構，如面觀演劇，願話說其後。」因慙息不已。乃再語之曰：「第二句，絃鳴折響，大幕正開矣。」舞臺當中，畫出四條橋夜景來。兩岸樓臺燈火如豆，沙磧平廣，水行其間，暗雲四合。仰不見星斗，夜將參半。德兵單身懷嚮一百金，踉蹌取路於磧中，下有斬髮之賊，尾而窺其蹕隊，直探其懷中，掠金而逃。孫兵追而止之，互批於闇中，欲奪還金，誤獲賊之神符囊。東西背馳，與賊相失。舞臺一轉，變為島原妓院景況。

西京傳新記

四編

三九

半月堂藏版

紗窗鎖春，涼院畫靜。金鳥吐烟，花影上簾。大奴花香太夫，錦衣綉帶，身親下階，窈窕柴門，以邀過客。客則非他人，孫兵之父孫衛門也。大夫一莞，延而潛之於短牆下。未幾，孫兵睡起，與大夫相語曰：「追想往事，駒隙忽忽，與卿綢繆，既已經三裘葛矣。今二親在堂，亦且暮之人，二親而物故，逐妻放子，公然迎卿，以為內人，易如反掌必矣。」閑話一晌，離妓來報曰：「蘭湯正熟，

何不快来試一澡也。」孫兵欽然，起赴浴室。太夫乃起，孫衛門於牆下，延諸其卧內，取綉被自被之，圍以屏風。太夫竊逃在別室，以胸其舉動，而孫兵不之知也。出浴入房，屏風深圍，稠衾護夢，自以謂是太夫假寐，而以消長晝也。就而戲搖之，手褪其綉被，寧國中有一老翁，蹶起呼曰：「阿兒健在。」孫兵錯愕，熟視其人，則其父孫衛門也。孫兵報愧，無地縫可以匿，俛首以謝其罪。孫衛門從容正襟曰：「汝亦非橫目之人邪？苟人邪，何不鑿耳孔，熟聽我言邪？抑汝沈迷花柳，散金如土，是以家財蕩盡，加以山積之負債，老母憂慮，食亦不下，喉水亦不入口，氣息奄奄，命在旦夕，寧不唯此，汝妻憂而卧褥累旬，沈綿不起，汝兒病而踴泣以請，神明老父不忍坐視之，懇請太夫，強令割愛，太夫能分辦理，非泣而聽之，竊延老父于卧內，以至於此。汝自今宜改圖勵志，以克豐其家。老父死之日，猶生之年，敢請速還家，以安其父母妻子。合掌涕泣，声淚並降，孫兵亦膜拜請罪，遂與太夫割愛而別矣。舞臺一轉，又為松原菅廟景況。

西京傳新記

四編

四〇

半月堂藏版

萬籟一寂，寒月在天，四無人影。夜將參半，乍有一少女，單行了立，自東而來，遂至菅廟階下，拜跪默禱，誓

額久之。偶有一老賊。面目猙獰。狀自甚異。月下熟視。少女默禱祠前。就問其故。少女顧答之曰。兒是五條某街商家之子。潛悲家君之流連酒色。久而不還。每夕深更。禱諸營廟。求改其性行者。一七日于此。且家君頃借金於某賈人。夜過四條。為偷盜所掠奪。家君追跟。與賊挑於闇夜。欲奪還金貨。反獲賊之神符。農披而視之。中有脩帶一封。細署其人生日支干名姓。寧國賊則賤兒叔父某也。兒故禱神求賊之就捕縛。以金貨還於家君也。賊聞之大驚。欲直明其身分。而懼人之耳目。徘徊顧望。五內欲裂。因撫其背曰。佳

西京傳新記

四編

四

半月堂藏版

兒佳兒。吾嘉汝孝義。故與以黃金百圓。宜速歸以贈乃父。兒固辭不受。百方不聽。賊大困。潛投金於少女袖中。倉皇滅跡。卒不知所之。既而女兒覺金之在袖中。欲追而返之。會邏卒巡行于市街。即廣問女兒姓名及所以獲金。盡獲其實。送請其家。此夜孫兵深悔悟。既往。歸家謝罪於家翁。未幾女兒獲金而還。闔家大喜。老母與其婦聞之。病立瘳。以致室家康寧。後孫衛父子貽物。島原太夫與新地笑拾。以謝其厚誼云。此皆新聞紙中之實事。而東西湊合。能寓勸懲之意。要之皆小費之教。女紅之誘。日月磨粹。淪浹民心。雖

以歌妓女兒。其孝文慈仁。有如此者。亦右文開化之餘澤也哉。二客談笑。胥議曰。其所謂歌妓者。則嚮所目擊之人。迹住咫尺之地。何不招彼相共傾一杯。以分其餘瀝邪。食日善矣。遂相提携而去。後是笑拾之名。殷然動京師。爾後益磨礪其操行。久而弗懈。亦當與梔子百合諸人。相比肩不多遜也。

八坂神會。不一而足。而除夕神事。稱最盛矣。每歲除夜。士女傾都。爭就廟下神燈。以取新火。每人手一條引火繩。以作歲旦之餅。正是。不須鑽燧。改火。青煙乍散。入九街家矣。人語鼎沸。語未全收。鐘鼓喧闐。已

西京傳新記

四編

四

半月堂藏版

報道新湯。熟來。鴨鳴雞唱。東山又抹一線絳霞矣。東索繞檐。家家迎新禧矣。

予之著此編。友人鈴木百年翁。見惠題詩六章。首首新警。可誦也。其一日。池翁巧放華端花。粧點昇平輿。誦囉。休道西京今寂寞。記中無處不繁華。其二日。文似夏雲奇更奇。紅情綠意記無遺。西京十萬家新事。都屬先生筆一枝。其三曰。靜軒棕櫚隱已登仙。都會繁華無可傳。幸有池翁奇絕筆。探入情事入新篇。其四曰。晁祖昔時揚武名。先生今日以文鳴。文名不愧武名盛。華陣常教敵陣驚。其五曰。此老才名到處聞。綺

言麗語吐紛紛。洛陽近日紙尤貴。為刺新編絕妙文。  
其六曰。何用文章襲古人。一家機軸見精神。莫言今  
日傳新耳。傳到千秋筆更新。百年粗浹書史。兼好文  
藝。今以六法鳴詩出其緒餘。而連篇累章。皆可誦也。  
故錄以當跋語。

西京傳新記四編畢

西京傳新記

四編

聖

半月堂藏版

明治十年二月十七日

出版權

御願

同	同
年三月九日	年六月上旬
版權免許	刻成發兌

年六月上旬刺成發兌

一冊 定價 金卅五錢

著述人

京都府平民

菊池純

上京第三十卷區下丸屋町  
四百二十八番地

四百二十八番地

出版人

京都府平民

肉藤半七

丹波國栗田郡弟壹區龜岡  
荒塚西町 百七十八番地

百七十八番地

東京

同

浪華

同

同

同

西京

同

同

同

同

水野慶次郎

村上勘兵衛出店

柳原喜兵衛

中島德兵衛

辻本信太郎

吉岡平助

村上勘兵衛

杉本甚助

北村四郎兵衛

辻本九兵衛

田中治兵衛





江邨綬（江村北海） 著

日本詩史

明和八年（一七七七）刻本

據明和八年  
刻本  
影印  
(二七七二)

北海先生著

# 日本詩史

平安書肆

載文堂  
文錦堂  
風扇堂  
玉樹堂  
發行

## 日本詩史序

北海先生著日本詩史而成。將上之梓。則命予序之。予受而卒業。自中古而今世。數百千載之邈焉。自王公而士庶。暨縉流紅粉之雜焉。殘篇賸語。膾炙人口。而其名堙晦。無聞者。廣蒐博采。人傳其略。旁及噉名俗子。好事估客。苟其詩可觀者。並錄而無遺。蓋不以人廢才也。可謂詞家苦心。藝苑盛舉哉。然而斯史也。逮于近世。則詳乎布韋。而略乎冠冕者。獨何也。先生博聞廣識。潛心于此者數年。豈其有遺漏哉。然則予之平日慨然於懷者。無乃其有徵乎。蓋吾邦先王之奉神道。以設其教。亦迨乎聘舶相通也。則禮樂政刑。無一而不資諸漢唐。以爲損益者。而其明經文章之選。亦惟無一而非金馬玉堂之則也。故公卿大夫。翕然皆用心於詩賦論頌。而若和歌。則其緒餘也耳。延喜中。敕編古今和歌集。而賞其選者。未必闕閱之胃也。則可知以和歌名其家者。蓋當時縉紳名族之所未必屑也已。嗟夫。自皇綱解紐。學政不振。文事頽



敗殆幾泯沒。於是乎和歌者流始擅莛柄。誇張相尚。卒乃世之所稱歌仙者。推尊之甚比之神聖。視其遺什。猶典謨。古言或難曉。則附以神祕之訣。齋戒傳授。禮最崇重。輒曰和歌之教之道。而王公之學之禮。而穆穆宮禁。奉以爲盛典。吾儕小人。豈敢置一辭。雖然三代聖人之道。有何等祕訣。而

吾邦中古。亦未聞有此儀也。降此而曲藝末技之師。亦皆藉此機以干進。則種種銜飾。靡所不屈。而王公大人。或爲之甘心。至乃涓吉誓神。恭執弟子

詩史序

二

禮。傳祕探密。惟日不給。尚何暇屬辭苦心之業之爲。宜乎近世廊廟之上。文學寥寥。亡聞于世者。而惟衡門之寒。衲衣之陋。獨擅美于艸萊之下者。其可勝嘆乎。抑雖世變之使然乎。亦未必無任其責者也。予嘗持斯說。將以微諷之。而青雲之與泥塗。其相隔天壤不啻也。將質諸先覺。則自喪吾景山先生。而離群獨學。日就孤陋。故抑憤蓄疑。隱忍者久之。幸矣斯史之作也。予多年之所懷。今而足以徵者。不亦喜乎。北海先生。奕世名儒。學識瞻博。可

以大有爲者。而作此區區文士之舉。蓋其意之所在。豈徒哉。以故詩論所及。諸子百家。無所不有。而非寓褒於貶。則視戒於寵。皮裡陽秋。不可測焉。不知先生托之以言其志者。如予所懷。亦在其中乎。庶幾王公大人一閱斯史。或有所憤發。而小用心於文學乎。天廡之種。穀食之養。一日千里。豈敢凡骨駑材之所企及哉。時方昇平。地是土中。王室肅雝。公卿委蛇。有寧處之遑。而無鞅掌之勞。餘力學文。何求無成。況乃乘文明之運。而鳴泰平之美。豈翅鴻業潤飾。皇猷黼黻。可謂 吾日出處之國光。赫赫乎足以輝萬邦哉。艸莽微臣如 順。亦得被其末光者。其喜豈有窮已哉。然則詩史之作也。其關係亦大矣哉。因不自揣。敢書鄙見。以爲之序。并質諸先生云爾。

明和庚寅冬十月

平安 醫員法眼武川幸順撰



日本詩史序

余蚤歲從北海先生學而得讀異邦之書。設異邦之詩。論異邦之世也。先生之言曰。晉杜征南既建策平吳。又潛心訓詁春秋傳。其業可謂勤矣。而猶為不足。刊其成業於碑。為後世之名。其志可謂深矣。夫名不可以己者也。而狗名為利罔。君子弗論也。余因竊謂。狗名為利罔。異邦人士滔滔皆是。蓋異邦自古者。聖明之主。莫不以舉能求賢為先務。而周時取士。教官掌之。漢以後設選舉法。至後世科目益廣。乃童子有科目。耆老有禮徵。是以巖穴下。能屈王侯之尊。則終南為仕進捷途。亦何足怪哉。唐時以詩試士。一時躁競。唯詩是務。後人稱詩盛於唐。抑亦時政所使焉。吾邦自穹壤剖判。亘萬世一帝系統。政教槩不與異邦同。况復昇平日久。海內仰無為之化。封建之制。上下分定。士民安業。靡有覬覦之心。靡有躁競之習。即有務為名高者。要是不為科第。則材學可稱。詩篇可傳者有焉。而後輩往往忽近。不必傳者不少。豈可不惜哉。吾先生嘗有感於此。近撰日本詩史。并考其世與其人以論其詩。嗚呼。先生之業可謂勤矣。先生之志可謂深矣。宜刊而傳之。則後世其有

所徵焉。傳曰。頌其詩讀其書。不知其人可乎。是以論其世也是尚友也。先生斯舉其得之哉。

明和庚寅仲冬。

柚木太玄謹撰

詩史

序

詩史

序

一

日本詩史凡例

一是編論詩以及人非傳人以及詩即巨儒宿學苟無篇章存在者亦不論載焉此所以名以詩史之義

一是編本為十卷起稿丙戌之秋戊子業就乃命男棕秉校焉但余罷仕八年於茲囊橐既竭剞劂殊艱因擬割愛先梓其半部今茲庚寅二月棕秉羅疾沒鍾情之極閉戶謝客長夏無事難銷日乃修舊業且以遺憂會弟君錦自關東還乃使其重校以附剞劂初為十卷尚未足稱詞壇陽秋況刪其半直是荊園芻狗即第傳晒抑亦婆心後輩云

詩史凡例

一五卷中初卷商榷中古近古朝廷文學簪纓辭藻始自白鳳時訖于慶長末二卷者初卷緒餘其所論載為武弁為醫為隱為釋氏為閨閣年代同上但閨閣不可多得則近時亦附焉第三卷論述元和以後京師藝文兼及他州第四卷東都兼及他州第五卷第三第四兩卷緒餘論及諸州

一是編之作全在揄揚元和以後藝文而名以詩

史則不得不原其始也是以溯洄古昔者不必廣蒐蓋古昔詩可徵于今者莫先乎懷風藻懷風藻作者六十余人詩凡百二十首經國集雖殘缺今存者二百餘首麗藻集凡百首無題詩集七百七十首其餘中古近古諸集諸選尚多若人人而評之篇篇而論之叢爾一書非所能辨故斷不言及今初卷所錄以林學士所撰一人一首為標準畧陳瑜瑕以成卷者要之省筆減簡不能不然

詩史凡例

一懷風藻所載朝紳始自大納言中臣朝臣大島訖于中宮少輔葛井連廣成人必具官銜者於義當然是編本擬亦提其例至刪為五卷都除官稱單錄姓名亦唯省筆減簡不能不然

一是編初卷所論列並是朝紳絕無韋布士由古選所收然也蓋一時藝文特在青雲上而草莽士無染指者歟不然則懷風凌雲經國無題等諸選率朝紳所纂輯是以採擇不及民間歟是編第三卷以下所論載靡匪布素元和以後朝野文武靡然嚮學青雲上定不乏佳撰而余意竊謂以草莽士叨評論尊貴著撰不敬之甚以



故全不論次

一是編刪為五卷闕畧固所不論而就其中言之蓋亦非無差等京師詳于東都東都詳于諸州此非有所私厚薄余住京師者數十年於京師文學頗得要領東都隔遠此色既難况乎他州余近覽本朝詩纂私欽敬其盛舉但其中錄次京師近時作者大為憤憤其薰蕕雜陳亡論耳若載余伯氏已錄伯氏姓名又別舉伯氏舊名舊表號此以伯氏一人為二人餘可準知噫以宗藩之勢何求不得加之文學之職賓客之盛兼順其美贊成其業無所不至而猶且如此况余一人心力管蠡海內其謬誤奚啻千萬

詩史凡例

三

一是編所論次近時作者必蓋棺論定而后敢論若夫聲名顯著當今下帷延徒亡論余知與不知並不舉瑜瑕蓋譽之似黨毀之似奪不能不避嫌疑但不以講說為業湮晦遠名或羽翼未成者不拘此例

一我邦多復姓操觚之士或以為不雅馴於是往往減為單姓不翅代北九十九姓其義得失姑置之是編多完錄姓氏要使後人易檢索而亦

不盡然者有說也余已載諸授業編因不復贅地名亦然遠江州稱袁州美濃州稱襄陽金澤為金陵廣島為廣陵之類於義有害是以一槩不書

詩史凡例

四

一古曰作詩之難論詩更難論之難論而得中正之難夫詩體裁隨時好尚從人必欲使天下作者歸己所好一非一是矯枉過正其極變溫柔敦厚之教開傾危爭競之端悲夫孟子曰物之不齊物之情也五色各色其色未嘗失為其明夫玄之與黃孰是取焉孰非捨焉余不好為詭言異說以建門戶是編所論中古即以中古近時即以近時京師即以京師東都即以東都人人各逐其體評論冀無寸木岑樓之差

一是編所論載詩大率近體絕不及古詩者中古朝紳詠言近體間有可錄至古詩殊失其旨元和以後作者輩出近體詩實欲追步中土作者但五言古詩未得其面目護園諸子文集其首必多載樂府擬古諸篇然以余論之尚有可議者其詳載諸授業編云

明和庚寅冬十月北海江郎綬題于賜杖堂



日本詩史卷之一

平安 江邨綬君錫著

第 清 絢君錦

男 棕糸孔均 同校

按史。應神天皇十五年。百濟國博士阿直幾來朝。獻周易論語孝經等書。上悅。使阿直幾授經諸皇子。我邦經學。蓋肇於此云。後阿直幾薦王仁。上乃詔百濟王徵王仁。王仁至。與阿直幾同侍講諸皇子。上崩。仁德天皇即位。遷都浪速。王仁獻海花頌。

詩史

卷之一

一

所謂三十一言和歌者也。或曰異域之人。何以作和歌。所獻或是詩章。當時史臣譯通其義耳。或曰王仁歸化既久。熟我邦語言。學作和歌。未知孰是也。要之距今千有四百年。載藉罕傳。其詳不可得而知也。自仁德升遐。歷世三十。經年四百五十。天智天皇登極。而後鸞鳳揚音。圭璧散彩。藝文始足。商確云。史稱詩賦之興。自大津王始。紀淋望亦曰。皇子大津始作詩賦。而其實大友皇子為始。河島王大津王次之。大友詩五言四句。道德承天訓。鹽梅寄真宰。羞無監撫術。安能臨四海。典重渾朴。為詞壇鼻祖。而無愧

者也。大友。天智太子。與太叔龍戰於關原。天命不遂。安能臨四海之語為識。河島王有五言八句詩。大津王無作。七言才皆不及大友。

葛野王。大友長子。遊龍門山。詩命駕遊山水。長忌冠冕情。風骨蒼老。不減皇考。詳詩意。壬申亂後。潛晦形迹。縱情泉石歟。葛野王生河邊。王河邊王生淡海。三船世有寸名。

至尊。睿藻見於古選者。文武天皇為始。詠月五言八句。見懷風藻。又詠雪。曰林邊凝柳絮。梁上似歌塵。齊梁佳句。

詩史

卷之一

二

平城天皇有詠櫻花詩。

嵯峨天皇天資好文。睿才神敏。宸藻最稱富贍。其七言近體中。警聯殊多。但未免駢麗合掌。亦時風甬耳。如曰家鄉杳杳多歸志。客路悠悠少故人。雲氣濕衣知近嶽。泉聲驚枕覺隣溪。冲澹清曠。

弘仁御寓日。平城讓皇在西內。淳和以皇太弟在東宮。三宮融睦。孝友天至。花晨月夕。讌樂相接。宸章洎復。幾靡虛日。不直右文。美德實是曠代盛事也。但平城淳和二帝。睿藻傳者不多。

宇多天皇有翫殘菊七絕。醍醐天皇有讀管氏三

代集七律。二帝御製止此而已。

邨上天皇亦稱好文。所傳官鬻曉曉七絕。自以為警絕。史稱上親製詩題名詞臣同賦。以為娛樂。而餘不概見。惜夫。

永延帝披書見注夏七律。雖語重累。而足見睿思正大。

長曆永承延久三帝御製。散見諸書者。皆隻句斷章。無有完者。延久帝聰明善辭。大有為之君。而在位僅五年而崩。宸章亦淪亡。殊可慨嘆。是時上距天智即位四百三十餘年。帝崩後。文教漸不振。止方尚

譜史

卷之一

三

和歌陵夷。迄乎保元平治。朝廷多故。經學文藝。併不復講者。幾乎百年。尚幸有嘉應帝內宴御製一首。見著聞集。當時應制作者十餘人。其詩無傳。嘉應帝崩後。歷十七帝百七十年。康永帝即位。元年春。宴以山家春興命題。御製詩曰。桃花流水洞中天。不記煙霞多少年。滿目風光塵土外。等閒逢著是神仙。意境閒雅。語亦圓暢。當時應制詞臣二十二人。詩今存者僅九首。其中如僧貞乘曰。微風時送幽香至。似報前山花已開。藤國俊曰。遊絲百尺飄天上。不及山翁心緒閑。雖韻格不高。頗見巧致。是時南北戰爭。四

郊多壘。而帝能以文雅帥臣僚。不尔偉乎。自康永至天正。又二百年。其間無睿藻見史冊者。至文祿改元之後。有天子賜源通勝御製詩。蓋否極而泰。元和文明之運。已兆于此者歟。

皇子諸王之詩。大友大津葛野之外。大石王山前王。仲雄王。大上王。境部王。大伴王等。今藻見古選者。不過數首。獨長屋王。則有數十首。要之。魯衛之政。若論其才俊。無出魚明親王。次則具平輔仁耳。兼明。醍醐皇子。二品中務卿。世稱前中書王。是也。自幼好學。才識絕倫。帝愛重之。故立為太子。而執政。尊其賢

譜史

卷之一

四

明。帝不得已。以承平帝為東宮。魚明為右大臣。賜姓源氏。復為執政。所忌。不能久居台司。退隱嵯峨。佐菟裘賦。以見其志。賦中有曰。扶桑豈無影乎。浮雲掩而乍昏。叢蘭豈不芳乎。秋風吹而先敗。抑鬱之懷。可想也。嘗詠禁中竹。迸筍纔抽。鳴鳳管。蟠根猶點卧龍文。稱為警拔。又詠養生方。三言。憶龜山。雜言。真情暢達。其餘詩賦。見古選者。注述可吟哦。具平親王。邨上皇子。二品中務卿。世稱後中書王。題橘郎中遺稿七律。悲惋悽惻。一時傳稱。其結句曰。未會茫茫天道理。滿朝朱紫彼何人。蓋亦為藤原氏

數也。又遙山暮烟七律。精詣被賞一時。

輔仁親王。延久帝子。詠賣炭婦七律。用意懇惻。語  
亦平整。以親王尊貴。注情於此。豈不賢乎。保平以降。  
帝子徽音。寡乎無聞。唯有貞常貞敦兩親王遺篇而  
已。貞常親王。貞和帝曾孫。落葉七絕。見康富日記。  
枯梢寂寂帶夕陽。滿砌飄塵擁薜蒼。莫道晚風吹葉  
盡。老紅却恐曉來霜。雖語差晦。用意自工。貞敦親王。  
貞常曾孫。江山春意七絕。江山雨過翠微平。樵唱漁  
歌弄春晴。風動水南酒旗影。杏邨既聽賣花聲。興象  
宛然。意致亦婉。

詩史

卷之一

五

公卿朝紳。著稱詞林。世不乏其人。而蘭玉競芳。鳳毛  
紹美者。藤原氏菅原氏大江氏次則紀氏橘氏源氏  
三善氏小野氏巨勢氏滋野氏等。不過十數家。

藤原氏以淡海文忠公史為首。公盛德大業。位極人  
臣。宅睽餘暇。留意翰墨。辭藻亦冠絕一時。元日朝會  
詩五言十二句。見懷風藻。華瞻而典。則公生四子。並  
有才學。長子左大臣武智繼位。台鼎其詩失傳。次子  
參議房前。七夕內宴詩。瓊筵振雅藻。金閣啓良遊。鳳  
駕飛雲路。龍車度漢流。駿駉平王楊盧駱。其次參議  
宇合。史稱宇合有文武才。嘗為聘唐使。風采可想。四

子兵部卿萬里。少長替裾。而不忘邳壑。常曰。當今上  
有聖主。下有賢臣。我曹何為放浪琴酒。自稱聖代。狂  
士懷風藻。載暮春讌會詩曰。城市元非好。山園賞有  
餘。記其實也。

武智房前二公子孫。南北分宗。世官宰輔。琳聊蕃衍。  
衣冠滿朝。而篇章傳世者。武智曾孫三成。有漁家雜  
言。房前曾孫左大臣冬嗣。有奉和聖製宿舊宮七律。  
左京大夫衛有奉和聖製春日感懷應制七絕。參議  
道雄有詠雪七絕。玄孫彈正少忠令緒。有早春遊望  
七律。其餘無多。

詩史

卷之一

六

中納言葛野亦房前曾孫。有辭主。延曆中為聘唐使。  
惜著作無傳。葛野子刑部卿常嗣。博學強識。少知名。  
承和中為聘唐使。父子妙選。世以為榮。常嗣詩見古  
選。秋日登叡山五言近體中曰。仙梵窓中曙。疎鐘枕  
上清。清迥不凡。

左大臣時平。有秋日會城南水石亭壽藏大師七言  
詩。水石亭公別業。藏大師。大外記大藏善行。公少受  
業善行。因有斯舉。公以陷管公獲罪。名教其人固不  
足道。而崇師也。重業也。輒近未得其比。當時右文好  
尚可想。史稱此會。一時名士畢集。藤氏勢焰固當爾。



而亦善行之榮幸也。詩今存者二十餘首。紀叡昭三善清行亦在其中。而清行七律得驪珠。其餘鱗甲無足把翫者。

參議菅根有才子譽。嘗被菅公薦引。後阿附左相而傾菅公。其人固卑。惜秋翫殘菊七律。殊不雅馴。此寬平中內宴應制詩。同時作者二十餘人。今存十三首。而藤原氏七人。大納言定國亦有作詩。皆不足錄。

藤原氏權勢至太政大臣道長窮極滿盛。所謂男公女后富逾帝室者。其侈麗豪華震耀一時。而其人好詩善書亦可嘉尚。公嘗創法成寺。世稱御堂公。又營

詩史

卷之一

七

別業於宇治。高閣層軒。擅流峙之勝。公數遊。有詩云。別業嘗傳宇治名。暮雲路僻隔華京。柴門月靜眠霜色。茅店風寒宿浪聲。排戶遙看漁艇去。捲簾斜望雁橋橫。勝遊此地人難老。秋興將移潘令情。意境蕭散絕無權貴相。公姪內大臣伊周。由納言隆家。竝好文詞。而淫兇無取。詩亦不韻。

大納言公任。世稱其多才。大江匡衡嘗評一時詩人。以公任敵齊信。余索其遺篇。寥寥罕傳。若夫題山川晴景七律。釋拙不成章。匡衡之言溢美耳。

參議有國。重陽陪宴。七言長篇。用事錯綜。足見才思。

但章法句法未透。難入選耳。有國參議真夏之後。其高祖創建大剎於洛南。日野自以為大功德。繇是稱日野氏。其父輔道對策高第。至有國家聲益振。子孫世名于儒林。

五品為時題玉井別莊七律。玉井佳名世所稱。松楸半按碧岩稜。山雲繞屋應褰幔。澗月臨窓欲代燈。梅吐寒花朝見雪。水收幽響夜知冰。池邊何物相尋到。雁作來賓鶴作朋。雖乏聲格。首尾勻稱。足稱合作。為時女紫式部以著源語稱于世。

木工頭輔尹賦醉時心勝醒時心。鄙俚可嘆。而大江

詩史

卷之一

八

匡衡數稱其才。時論之不足憑。古今同憤憤。大納言仲實賦德配天地。右京大夫公章迴文體。及正時賦日月光華。長賴賦海水不揚波。公明敦隆俱賦走腳體。憲光尹經俱賦班萬玉。皆試場詩。殊無佳者。正時以下六人未詳官銜。

三品實經賀新成大極殿。右大辨有信。三月盡中納言實光咏傀儡。左大辨宗光尚齒會詩。少納言敦光夏夜吟。四品實範遍覽寺作。五品季綱東光寺作。茂明勸學院作。知房秋日即事。竝七言律。見古選。其中不無半聯隻句佳者。而瑕類相半。全佳者絕無。但知



房郊扉暮掩茶烟細。岫幌晴寒桂月幽。意近閒澹。全章亦不甚拙。

左衛門尉周光。冬日山家。即事。雖有小疵。自是胸臆中語。故平澹中反覺有味。史稱周光官仕不達。有北門嘆。雖居輦轂。常睠山林。余閱無題詩集。載周光詩多至百首。大抵山居題詠。則史言誠是。

左大辨顯業。三月遊長樂寺。七律。寺以五臺形勝。地時當三月。艷陽天。山樓鐘盡。孤雲外。林戶花飛。落日。前。字句工麗。金石鏗鏘。但起結不諧。殊可惜也。余覽

前古選集。騷人文士。留題長樂寺者甚多。藤原氏則

詩史 卷之一

敦宗李綱。實魚。竝有七律。據其詩。殿堂之美。林泉之勝。巍然一大刹。今則不然。桑滄之變。物外亦然。

東宮學士明衡。花下吟。雖造語不合。意義自全。明衡

宇合之裔。編本朝文粹。有功於苑苑。不助其子刑部

卿敦基。夙有詩名。風生林樾時。疑雨浪洗石。稜夏見

花。一時傳稱。

少納言通憲。文章博士實魚子。保元帝乳母夫。以

博學多通。辨給而有才略。少時不遇。嘗作詩曰。願身

深識榮枯理。在世偏慵遊宦心。遂薙髮更名信西。

保元帝即位。登庸掌機密。恃才果用。志在革弊政。而

苛刺少恩。終以此敗。無題詩集多載其詩。其子俊憲亦有詞才。官至參議。

大政大臣忠通。相國忠實長子。相國懸車。代為宰輔。後相國溺愛少子。左大臣賴長謀廢公。移政柄。而公

奉胤依依恭順。無虧惟孝之德足頌。而加有好文之美。豈不偉乎。無題詩集載公詩九十首。間有諧合者。

左相公異母弟。少時穎敏。好學能詩。性使相國教以義方。當為棟梁偉材。而趨庭失訓。闕牆畜姦。保元禍

亂。實階于此。如其著作。今猶傳世。

元久中內宴。題水鄉春望。應制作者。今可徵者十九

詩史 卷之一

人。大政大臣良經。左大將藤原氏十五人。中納言資實。中納言親經。式部大輔宗親。左大辨盛

經。東宮學士賴範。文章博士宗業。大內記行長等。大率無足錄者。

建保內宴。作者見古選者。藤原氏九人。詩殊無可覽者。蓋保平以降。朝綱解紐。文學衰廢。於是和歌特盛。

內宴詠言。和歌為主。詩存餘羊耳。其不精工。不亦宜乎。

中納言基俊。中納言定家。並稱和歌巨匠。有詩傳世。

固非其所長。

左大臣兼良有避亂江州水口驛遇而作憶得三生石上緣一菴風雨夜無眠今日更下山前路老樹雲深哭杜鵑按史公才學該通和漢著作殊多四書童子訓其一也當時天步艱難公雖位宰輔南北播越憂虞度日而講明聖經操觚無廢此足以有紀也文明十五年足利相公第燕會詩傳者十九首大臣政家左大臣實遠內大臣實淳內大臣通秀左近衛大將冬良以下藤原氏十人文明上距建保三百六十年其詩較諸建保反有可觀蓋此時雖朝廷文致益廢替五山禪林詩學盛興朝紳或因其數過

藤原

實遠

卷之一

十一

內大臣實隆稱道遠院發仕後詩云三十年来朝市塵扁舟歸去五湖春平生慚愧無功業合對白鷗終此身每誡子弟曰吾少年不努力老來悲傷無及汝曹宜勿倣尤因課子弟謄寫六經及史記漢書等世知公為和歌巨擘而不知有文學故揭而出之右所錄外藤原氏見諸集者猶有數十人以繁刪之云其餘一聯一句古今傳稱而全章闕亡者五品篤詠砧擣虜曉愁聞月冷裁將秋寄塞雲深右馬頭李方三月盡林間縱有殘花在留到明朝不是春右少

辨雅梓晴景松江日落漁舟去蘿洞雲開隱逕深左中辨維成江上作客帆有月風千里仙洞無人鷗一雙大納言齊信詠秋月夜閒聞按曲金風吹落玉簫聲等不可枚舉齊信名價重於一時而其詩不多見使人嘆惋

菅原氏本姓土師聖武天皇天平元年賜侍讀土師古人姓菅原古人子清公夙有文名延曆中為聘唐使有汴州上源驛值雪詩云雲霞未辨舊梅柳忽逢春不分邊瑤屑飛霰旅客巾歷官至左中辨清公子是善自幼聰敏其名顯著官至參議

詩史

卷之一

十一

菅原善主菅原清岡諸家系譜不載二人官職失攷蕭林子以為清岡家次第以善主為清岡臣春公子未知孰是竝有詠塵應制五言排律中良舟中良機藤原關雄皆有此題詠必一時作較其優劣二管最超絕矣二管詩精工整密力量相等難為兄弟今並錄全首以質具眼者善主云太臆籠群物惟塵最細微遇霖時聚斂風吹乍霽霏洛浦生神轡都城深客夜朝隨行蓋起暮逐去軒歸動息常無定徘徊何處非冀持老聃旨長守世間機清岡云微塵浮大道靄靄隱垂楊色暗龍媒埒形飛鳳輦場徘徊寧有定動息固無常逐舞生羅襪驚歌繞畫梁因風流細

影伴雪散輕光無由逢漢主空以轉康莊。

右大臣道真是善子自古儒臣官至台司者吉備公之後有公而已公之德業非特東方人士欽戴之至於遐方異域聞其風者靡不景仰元薩天錫明宋瀛輩歌詩歷歷可徵也但世之口碑往往失實羅山林子辨駁之更作公傳文集十三卷儼然具存穆如之美可得而見也又如重陽侍宴同賦菊散一叢金應制云微臣採得籬中滿豈若一經遺在家其雅尚豈徒尋常文士之傳哉宜乎廟祀千載威靈顯赫子孫繩繩文獻世家也。

壽史

卷之一

十三

文章博士淳茂右相次子文才秀發無愧箕裘賦月影滿秋池云碧浪金波三五初秋風計會似空虛自疑荷葉凝霜早人道蘆花過雨餘听白還迷松上鶴潭澄可數藻中魚瑤池便是尋常驛以夜清明玉不如蓋其少時作稍見工密惜起句還漏。

大學頭文時右相孫大學頭高規子世所稱官三品是也辭才富逸名價與大江朝綱相拮抗題山中仙室云桃李不言春幾暮烟霞無跡昔誰棲優柔平暢元白遺響又天曆中應制賦宮鸞曉囀云西樓月落花間曲中殿燈殘竹裡音帝嘆嗟以為不可及兄

左少辨雅規弟大學助庶幾子大學頭輔昭右衛門尉惟熙從子右中辨資忠皆有詩名可謂一門蘭玉追蹤謝家矣。

寬和二年十一月皇子始讀孝經禮畢帝詔詞臣獻詩侍讀輔正侍讀宣義並有應制作輔正右相曾孫宣義文時孫可見菅氏世能其業。

朝野羣載載菅才子沈春引一首菅才子失其名或曰永久中人詩無足觀者。

大學頭是經文章博士在良大學頭時登皆民部少輔定義子為右相七世孫塙篁相和寸名並著較其

壽史

卷之一

十四

力量亦相伯仲矣就中是綱長樂寺頭聯樓閣高低隨地勢杯泉奇絕任天然景象湊合氣骨兼完。

文章博士為長大學頭在高並有水鄉春望七絕俱非佳境。

文章博士在躬刑部少輔忠貞大學允永賴五品斯宗五品義明皆稱善詩而遺篇寥寡難論造詣。

大江氏出於平城天皇至參議音人始以藝業顯著世稱江相公是也音人遺篇散亡江談抄僅載花落一絕尤非佳作而談抄反以為得意詩何耶音人子式部大輔千古千古子中納言維時相紹能業而



維時最知名世稱江納言二人詞藻亦復散逸無足錄者

參議朝綱音人孫天曆中聲名藉甚世稱後相公以別音人其詠王昭君七律領聯云邊風吹斷秋心緒隴水流添夜淚行寓巧思於平易頸聯云胡角一聲霜後夢漢宮萬里月前腸寄悲壯於幽渺誠為佳聯惜乎起句率易已失冠冕之體結句卑陋又絕玉振之響世傳朝綱夢與唐白樂天論詩爾後才思益進蓋當時言詩者莫不稱祝元白猶近時輕俊之徒開口輒稱王元美李于鱗也朝綱名重藝苑所以附會詩史

詩史

卷之一

十五

此說也

文章博士以言千古曾孫夙有聲譽嘗賦晴後山川源為憲擊節嘆賞今誦之有大不協者又暮烟七律不及具平親王惟閒中日月長一律似勝他作而領聯牽強不成句江談鈔曰橘在列不如源順順不如慶保胤胤不如江以言豈其然乎談鈔江帥門人所編錄故當云爾噫虛名溢美何代不有

式部大輔匡衡維時孫博學強記文辭宏富世推大手筆以侍讀兩朝歷任清要加之累世儒業高自矜伐作五言古詩一百韻詳述遭遇他章亦多稱官閥

文集三卷行于世其作類失粗豪且不免俗習雖饒篇什無疵瑕者無幾

時棟政時二人譜第不詳職位無考詩各一首見朝野羣載

掃部頭佐國朝綱曾孫性愛花卉野史云佐國死後化蝶亦可證有花癖也無題詩集多收其詩大抵憐芳惜香之作其中云六十餘春看不足他生亦作愛花人溫藉脫落余最嘉之又有觀宋國商人獻鸚鵡四韻云巧語能言同辨士綠衣紅嘴異衆禽可憐船上經遠海誰識羈中憶鄧林著實明暢語有次第當詩史

卷之一

十六

詩史

時詠物無出此右者惜起結不稱耳余論大江氏朝綱上襄佐國雁行其他往往名浮其實

中納言匡房匡衡曾孫博涉群籍學通古今最留意國家典章以八葉儒家三朝侍讀名重朝野嘗為太宰帥世稱江帥其在宰府請營公廟作二百韻詩盛傳一時其他大篇巨什經見諸書而造語淺率卑近無足採者但所著江次第至今行于世要之才敏綜覈而自運非其所長也子式部大輔隆無詩才出藍不辜早世

紀氏武內之後武內十三世孫大納言紀麻呂有春



日應制詩。麻呂子式部大輔古麻呂有詠雪詩。俱載懷風藻。麻呂父子之詩。按武平大津葛野二王而爲公卿。先鞭諸氏詠言。皆費其餘勇。

太宰大貳男人遊芳野。越前守末茂觀魚。民部少輔末守送別。三詩古朴。體格未具。不可加以三尺也。

御依也。肅繼也。紀氏系譜不收。官職無考。御依有應制賦落花七言歌行。蓋弘仁帝幸河陽離宮。有落

花御製。從幸詞臣應制奉和。而諸詩散逸。今存者。除御依外。有坂田永河長篇一首已永河之詩。綵綆可

觀。御依不及遠甚。虎繼省試賦荊璞五言排律中聯

詩史

卷之一

十一

云。潛光深谷裏。韞彩古巖邊。價逐千金重。形將滿月圓。冰霜還謝潔。金石豈齊堅。精工純至。可稱佳絕。

式部丞長江麻呂玄孫有紅梅詩。

中納言叢昭字寬寬。平延喜之際。名聲藉甚。至時人與菅右相並稱。余閱其遺篇。殊不及所聞。諸選所收

貧女吟。直兒童語耳。特山家禪詠八首。稍有滿酒致其子參議叔光。亦有詩名。延喜中藤左相水石亭賀

宴。發昭父子並列其席。林光之後。紀氏無顯者。至康永中有紀行親者。山家春興云。不識黃鸝。樓樹底。一

聲啼破滿山霞。稍有幽况。惜霞字未免俗。

紀在昌岸竹枝低。應鳥宿。潭荷葉動是魚遊。紀齊名仙曰風生空。簾雪野。爐火暖。未揚煙。二聯見朗詠集。拉逸首尾。齊名有重名。江帥嘗評當時詩人曰。齊名之詩。如雪朝上瑤臺。彈玉箏。惜遺稿不傳。瑤臺雪色。髮可鬢髻。

橘氏至常重。始見藝林。而世次官銜。迄無所攷。經國集載秋虹一律。

橘在列。詩名高世。亦關系譜。源順嘗師事焉。在列後爲僧。更名尊敬。以源順爲輯遺稿。名敬公集。今存者

小作數篇已。

詩史

卷之一

十一

宮內少輔正通。或曰。在列子有俊才而官不達。居恒悒悒。有浮海之嘆。後挈家奔高麗。爲彼國大臣。其贈藤在衡云。吏部侍郎職侍中。著緋初出紫微宮。銀魚腰底辭春浪。綾鶴衣間舞曉風。花月一燈交昔密。雲泥萬里眼今窮。省躬還耻相知久。君是當年竹馬童。其欽表在衡之超遷。悽惻自己之坎壈者。淋漓乎楮墨間。其棄組投筮。理或有之。

東宮學士直幹。才思拔群。而遺藻泯闕。殊可惜也。其斷篇隻聯。散見諸書者。皆可稱賞。贈隣家云。春烟遠讓簾前色。曉浪澄分枕上聲。嶺山寺云。觸石春雲生。

枕上含峯曉月出窓中。又遊石山寺。云蒼波踏遠雲千里。白霧山深鳥一聲。僧齋然在宋國。雲為霞鳥為蟲。以為己作。示人。彼中人口。若作雲鳥乃佳。

左大辯廣相。幼而能詩。九歲召見。屬春暮。應詔云。荒邨桃李猶可愛。何況瓊林華苑春。又題項羽云。燈暗數行虞氏淚。夜深四面楚歌聲。皆非全篇。又作神護寺鐘序。管是善銘。藤敏行書。世以為三絕。

源氏宗統非一。右大臣常大納言弘參議明。皆弘仁帝子。賜源姓者。經國集載其詩。且錄年紀。常十六弘十五。明十三。其夙慧可知。而三首之外。無復隻字。

詩史

卷之一

十九

經國集殘缺。十亡其七。無由考索耳。

大納言湛。弘仁帝孫。有詩見經國集。

能登守順。弘仁帝玄孫。學說和漢。所著和名鈔行。

于世詩篇傳者不多。而詠白七言律。當時稱之。起句。

云。銀河澄朗素秋天。又見林園玉露圓。誠佳。三四云。

毛寶龜。歸寒浪底。王弘使立晚花前。已非佳境。五云。

蘆洲月色隨潮滿。大有精彩。而對以蔥嶺雲。膚與雲。

連癡重殊甚。不惟一聯偏枯。全章為廢。可惜。

左近衛中將英明。系屬寬平帝。管右相。外孫也。嘆。

二毛五言古風。自叙履歷。讀之潸然。語亦平拙。

大納言俊賢。越前守則忠。皆延喜帝之後。篇什僅存。俊賢博洽。有重望。著西宮記。行于世。

大納言經信。才藝多方。庶議廷論。亦卓越一時。詩雖無警拔。音響頗平。

伊賀守為憲。近體數首。散見諸書。其才不及經信。

孝道也。道濟也。時紹也。未詳其譜系。官階詩則並傳。

就中時綱最多。世賦宮中薔薇云。薔薇一種當階。紫。

不啻色。濃氣亦薰。紅萼風輕。搖錦傘。翠條露重。媚羅。

裙。飽看新艷。嬌宮月。殊勝陳根託澗雲。石竹金錢雖。

信美。嘗論優劣。更非羣。薔薇間見白樂天詩。末句亦。

詩史

卷之一

二十

用樂天石竹金錢何瑣細之義。

平氏延曆以前已有之。文華秀隱集載。平五月詩。五。

月。孫有相。亦有詩名。若夫保平之間。宗族滋蔓。貂蟬。

滿朝者。則皆桓武之裔也。而以文雅稱者。無幾。後。

有參議經高。勘解由次官棟基等。詩皆不足採擇。

小野氏。和仁中參議岑守。以文章司命。自居。所選凌。

雲集。多載已作。今閱之。合作絕無。

小野永見。有田家詩。小野年永有新燕詩。永見為征。

夷副帥。開府陸奧。擢旌杖節。而養戀桑麻。其意可嘉。

詩亦不拙。年永不詳履歷。

參議。博學能文。名聲震世。至今閭閻兒女。莫不知其名。經國集載其詩數首。如隴頭秋月明。六韻。骨氣韻格。直逼盛唐。而造語間失疎鹵。可惜。

春卿。滋陰。官職並無考。春卿省試照膽鏡長律。上半頗能鋪陳。下半猥劣殊甚。然題已險艱。雖近時作家。恐難遽措辭。滋陰殘菊應制。金葩留北闕。王蕊少東籬。親切題意。以下所錄詩人。系諸官職多不可考者。姑記其姓名。以附重攷。不復一一識別。大伴氏。出自道臣命。大納言旅人。春日應制。四韻。見懷風藻。典實渾體。旅人子中納言家持上。已遊宴詩。見萬葉集。家持領節鉞於奧羽。文武並稱。

詩史 卷之一 二十一

大伴池主有上已詩。見萬葉集。大伴氏上有觀渤海貢使入朝。七言律。見凌雲集。渤海朝貢始末。具見舊史。後遼太祖滅渤海。改為東丹國。以長子倍為東丹王。其地瀕北海。明時名哈密者。

都氏。本桑原氏。相傳後漢靈帝之後。宮造伏枕吟。用賦體。語多悽惻。廣田詠水中影。五言律。雖頗工。語不雅馴。三腹赤更姓都氏。其子文章博士良香。詩名最著。如氣霽風梳新柳。冰消波洗舊苔。三千世界眼中盡。十二因緣心裡空等。膾炙于世。皆非全章。集若干卷。今存文三卷。後來都在中擣衣篇。稍可諷詠。

三善氏。或曰。百濟國王之後也。參議清行。字耀。博學洽聞。器識高遠。文名烜赫。乎一時。世對以紀幾昭。又與大藏善行並稱。皆非篤論也。藤左相賀宴詩。今存者十九首。清行七律在其中。不但野鶴雞群也。如紫芝未變南山想。丹露猶凝北闕心。直是錢劉堂奧。發昭善行豈得望其塵乎。延喜十四年。上封事論列十二條。又因星變。勸管公致仕。公左遷。後禁錮諸營及門生故事。人知其寬。無敢言者。而清行上疏論救。其忠憤義烈。前後儒臣。未覩其儔。豈徒文辭超絕時輩哉。特怪其子孫無聞于藝苑。果無其人歟。抑失其傳歟。後來有三善為康古風一篇。其中云。逕逢茲兮。慕慕。泉石清兮。磷磷。勞丹心於帝館。曝紅鱗於龍津。驚衰髻於霜雪。灑老淚於衣巾。寓旨可悲。語亦淳雅。為康著朝野群載。行于世。

詩史 卷之一 二十二

惟良氏。亦百濟王之後。弘仁中有惟山人春道者。山寺作云。紗燈點點千岑夕。月磬寥寥五夜心。又惟良高尚。宮中殘菊云。莫問孤叢留野外。唯知一種在宮闈。韻入香氣。寧因火學。錦文章不用機。安倍氏首名。詩見懷風藻。廣庭詩見凌雲集。古人詩見秀麗集。皆不足採。唯文繼晚秋。朝煙有色看深淺。



々鳥無心聞。汎來可謂以澹調駕巧思矣。

大神高市。大神安麻呂。中臣大島。中臣人足詩。並見懷風藻。高市在持統朝。以忠諫骨鯁見稱。大島詩。兼落山逾靜有味。

坂上今繼信濃道中云。奇石千重峻。畏途九折分。人送邊地雪。馬躡半天雲。崖冷花難發。溪深景易曛。鄉關何處在。客思日紛紛。整齊縝密。可謂合作。而當時無稱何也。坂上今雄送渤海使云。大海元難涉。孤舟未易迴。不如關塞雁。春去復秋來。婉而有致。

中科善雄。有月三更靜。無人四壁幽。大是佳境。

詩史

卷之一

二十一

良岑安世。桓武皇子賜姓者。著作甚富。而大率碌碌。

慶滋保胤也。賀陽豐年也。朝野庶取也。當時甚有聲譽。而遺詩皆不滿人意。菅野真道撰續日本紀。文士可想而詩殊不諧。

善為政。遊東光寺。中原康富。寒山多治比清貞。哀柳錦部彥公。題僧院。勇山文雄。宴遊高邱茅越。神泉苑應制。上毛野頴人。田家田口連音。秋日等。古選所載。稍足可觀。其他林婆娑。懷古。淡海福良。田家。王孝廉。侍宴。宮部邨繼。過古關。三原春上。梵釋寺。朝原道永。

揚春師。巧諸勝。大枝永野。並詠雪。笠仲守。冬日。高邨田使梅花。和氣廣世。落梅花。布瑠高庭。小池。常光守。歲除。治文雄。建除體等。雖入古選。皆不足錄。

南洲永河。南洲弘貞。賦梁。淨野夏嗣。詠屏。石川廣主。詠鬼。大枝直臣。詠燕。路永名。賦三數。清原真友。字訓。詩。伴成益。東平樹。鳥高名。寶雞祠。春澄善繩。挑燈杖。大枝磯。麻呂。豐桐等。皆弘仁中制。頗惜時無良工。陶冶未盡。是以荊璞纔剖。而砥砭盈箱。鐘鼓畢陳。而簫韶遠響。諸臣詠物。往往拙累。唯夏嗣永河二詩。能協顯義。語亦清爽。

詩史

卷之一

二十四

古昔詩人見諸書者。右所錄外。有巨勢多益。美勢淨麻呂。調老人。荊助仁。吉知音。刀利康嗣。田邊百枝。石川石足。道公首名。山田三方。息長臣足。黃文連。備越智廣江。春日藏老。背名行文。調古麻呂。刀利宣令。田中淨足。守部大隅。丹輝廣成。高向諸足。麻田陽春。葛井廣成。高階積善。文室尚相。大和宗雄。島田惟上。島田惟宗。伊與部馬養。采女比良夫。下毛野蟲。麻呂。百濟和麻呂。箭集蟲。麻呂。伊伎古麻呂。石上乙麻呂等。以繁不錄。

日本詩史卷之一



日本詩史卷之二

平安 江邨綬君錫著

第 清 絢君錦

男 悰 秉孔均 同校

考諸漢土古者文武不甚相岐。列國卿太夫入理庶政。出帥三軍。秦漢以還。文武始岐。所謂隨陸無武。絳灌無文。迄唐中葉。千斛弓一丁字。更相詬訾。於是橫槊賦詩。捷鞍草檄。世稱無幾。況我東土。瓊矛探海。寶劍鎮邦。其建極也。素有不同。是以韜鈴詠言。無見古

詩史

卷之二

選。後來戰爭之世。反得數人云。

武藏守細川賴之。海南偶作云。人生五十愧無功。花木春過夏已空。滿室蒼蠅掃不去。獨尋禪室挹清風。賴之行事。見太平記。足利義詮既薨。義滿嗣立。賴之執政。內輔幼主。外御猛將。上下倚賴。遠近偃服。功豈不偉然哉。後近臣忌其剛正。譏之義滿。義滿漸信焉。於是辭職。退隱于海南。此詩必其時作也。

大膳大夫武田晴信。後更名信玄。初年頗參禪。好詩。其將某諫曰。主將參禪。好詩。猶足利僧還俗。文弱不足有為也。是時足利學校廢。而為寺僧徒多。事詩偈。

故云爾。信玄諸作。載在甲陽軍鑑。今不復錄。信玄弟左馬頭信繁。嘗著家訓。其中云。貪他一杯酒。失却滿船魚。斯知信繁亦讀書作詩。惜世無傳。信繁孝友。其人可稱。而信玄忌之。所以國祚不長也。

彈正大弼上杉輝虎。後更名謙信。天正二年。征能登州。圍遊佐彈正於七尾城。會九月十三夜。海月清朗。軍中置酒讌會。謙信因賦詩云。露下軍營秋氣清。數行過雁月三更。越山并同能列景。遮莫家鄉念遠征。將士解作詩。及和歌者。各有詠言。極歡而罷。余謂世之談兵者。必稱信玄謙信。二公誠敵手也。但信玄智計絕人。其御軍也。紀律森嚴。所謂量敵而後進。慮勝而後會。要之其為人。也精細。雖由此讀書善詩。不異矣。謙信嗜鳴咤咤。性如烈火。而讀書作詩。且軍中作此雅會。可謂真英雄。真風流也。

詩史

卷之二

二

大將軍足利義昭。避亂江州。舟中詩云。落魄江湖暗結愁。孤舟一夜思悠悠。天翁亦愴吾生否。月白蘆花淺水秋。詩誠懷婉。公初為僧。為南都一乘院主。宜其能詩。噫。足利氏之盛位亞。帝王富有海內。而季世瑣尾。扁舟江湖。去住無地。豈不憫乎哉。

少將豐臣勝俊。豐臣氏時。受封若狹。後退隱京畿。更

名長嘯。以和歌稱。所著有舉白集。其中載詩數首。兵部大輔。細川藤孝。號幽齋。後更名玄旨。為今肥後候祖。世知其武略及善和歌。而春齋林子所選一人。一首載幽齋鞍馬山看花絕句。則知實于文藝注意者。

中納言伊達政宗。今仙臺候祖。世稱其勇武。而一人一首又載其詩。余因謂賴之以下諸人。生長于干戈擾冗時。南戰北爭。羽檄旁午。何曾得有寧日。不知何暇讀書學詩。此尤不易。元和清平以來。諸藩無事。何為不成。而或優游恬嬉。宴安度日。不啻文學不講武備。亦將併廢者何也。

詩史

卷之二

二

隱者之詩罕傳。蓋非無隱者。無隱者而能詩者也。本朝遜史首載維喬親王親王。文德帝長子。以藤原氏故。不得立為皇太子。居水無瀨宮。後遷居於京北小野山中。吟詩詠和歌。以為娛樂。亦唯遣其悒悒。爾其詩今無傳者。唯聞琴詩。戴朗詠集。而非完篇也。延喜中有稱嵯峨隱君子者。失其姓名。或曰源姓清名。博學有文。菅右相。橘參議。與相友善。遇有疑事。即二公就而質問。其人可想也。或曰弘仁帝子。或曰延喜帝子。併其詩失傳。惜夫。

懷風藻載民黑人詩。稱曰隱士。亦失其氏族。或曰野見氏。其云泉石行行異。風煙處處同。欲知山中樂。林下有清風。清迥冲遠大。是隱者本色。

遜史載藤原萬里。高光。周光。為時。橘正通。惟良。春道等。余既前錄。且右數人。雖耽思烟霞。而纏身紳紱。或有所激。而遐棄爵祿者。非真隱者也。故不收录於此。云。

余考古籍。醫之以詩。稱者絕無。以今思之。似不可解。如他邦姑置之。今京城中。業講說者。無慮數十人。執謁其門。靡匪醫家子弟。除之無復生。徒而醫生為學。

詩史

卷之二

四

亦唯不過習句讀。學作詩。以潤飾自家術業。故雖間有才敏子弟。未至小成。既已髣髴其學。蓋儒術文藝。不可立身糊口。而方伎。往往與家殖財也。是以近時為醫者。無不作詩。而善詩者。至罕矣。余謂古昔為醫。非如近時。衆且濫也。宜其不槩見也。近足利氏時。獨有阪士佛伊勢紀行詩云。

阪士佛。名慧勇。號健叟。京師人。數世官醫。給仕足利相公。明德中。除民部卿法印。世稱上池院是也。相公嘗戲之曰。卿祖名九佛。父名十佛。卿宜名十一佛。遂以十一佛呼之。後修十一為士。蓋俳優遇也。士佛善。

和歌及聯歌有勢列紀行以國字錄之其中有詩其一曰渡口無舟憇樹陰漁村煙暗日沈沈寒潮歸去前程遠又有松濤驚客心優柔平暢頗足誦詠

僧詩見古選者釋智藏為始智藏奉天智帝勅赴

唐國蓋高宗武德年間矣其詩傳者數首並無可采

劉禹錫有贈日本僧智藏詩偶同名耳與此不同

僧辨正姓秦氏亦西遊唐國玄宗春遇甚篤數召談

論時對圓基云然則或與盛唐諸子締交被其潤色

者而今閱其詩絕無佳者可謂空手自玉山還

僧蓮禪詩名于當時無題詩集載其詩數十首鄙野

詩史

卷之二

五

殊甚

僧玄惠不詳氏族或曰其初業儒中為僧後復還俗

以著秋平記故世稱博文若其詩延元中內宴應制

一首之外絕不覩他篇其餘古昔中世縉流詩偈見

諸選者不數若空海最稱傑出而率讚佛喻法之言

非詩家本色故不收錄

五山禪林之詩固不易論也蓋古昔文學盛于弘仁

天曆陵夷于延久寬治泯沒于保元平治於是世所

謂五山禪林之文學代興亦氣運盛衰之大限也此

條氏霸于關東也其族崇尚禪學創大利於錄倉今

建長寺之屬是也流風所煽延覃上國京師五山相

尋營構足利氏盛時竭海內膏血窮極土木之工宏

廓輪奐之美所不必論其僧徒大率玉牒之籍朱門

之胃錦衣玉食入則重衲出則高輿聲名崇重儀衛

森嚴名是沙門而富貴過公侯禁宴公會優游花月

把弄翰墨一篇一章紙價為貴於是凡海內談詩者

唯五山是仰是其所以顯赫乎一時震盪乎四方也

元和以來文運日隆近時學者昂昂乎蔑視前古卯

角之童尚能詆排五山之詩即其徒亦或倒戈內攻

要非篤論也余謂五山之詩佳篇不數中世稱叢林

詩史

卷之二

六

傑出者往往航海西遊自宋季世至明中葉相尋不

絕參學之暇從事藝苑師承各異體裁亦歧其詩今

存者數百千百夷考其中不能不玉石相混也若夫

辭艱意滯涉議論雜詆譏者與藉詩以說禪演法者

皆余所不采也其他平整流暢清雅縝工者亦多則

不可驟而擯之

五山作者其名可徵于今者不下百人而絕海義堂

其選也次則太白仲芳惟忠諫岩惟肖鄭隱西胤王

皖瑞岩瑞溪九鼎九淵東沼南江心田村菴之徒不

堪枚舉



絕海義堂世多並稱。以為敵手。余嘗讀蕉堅藁。又讀空華集。審二禪壁壘。論學殖。則義堂似勝絕海。如詩才。則義堂非絕海敵也。絕海詩非但古昔中世無敵手也。雖近時諸名家。恐棄甲宵遁。何則。古昔朝紳詠言。非無佳句。警聳然。疵病雜陳。全篇佳者甚稀。偶有佳作。亦唯我邦之詩耳。較之於華人之詩。殊隔逕。雖近時諸名家。以余觀之。亦唯我邦之詩。往往難免俗習。如絕海則不然也。今錄集中佳句若干。五言。流水寒山路。深雲古寺鐘。夜宿中峰寺。朝尋三泖船。青山回首處。白鳥去帆前。山暮秋聲早。樓虛水氣深。鳥

詩史

卷之二

七

下金繩。雪童燒石室。香風物皇畿。內江山霸國。餘千峰。收宿雨。萬象弄春暉。漁簖殘近渚。僧磬微寒蕪。寒烟人未爨。野樹鳥相呼。寒雨黃沙暮。淒風白草秋。孤館啼猿樹。四郊戎馬塵。七言。古殿重尋芳草合。諸陵何在斷雲孤。父老何心悲往事。英雄有怨滿平湖。一徑松花山雨後。數聲溪鳥石堂前。絕域林泉淹杖屨。大江風雨起魚龍。百萬已收燕北馬。頻繁休督海南兵。久雨南山荒紫豆。清秋北渚落紅蓮。溪嶺祭魚青簍裡。杉雞引子白雲中。霜後年年收芋栗。春前日日斲參苓。聽經龍去雲歸洞。觀瀑僧回雪滿瓶。瑤草似

雲鋪滿地。琪花如雪照幽厓。綠蘿牕外三竿日。黃鳥聲中一覺眠。忠臣甘受屬鏐劍。諸將愁看姑蔑旗。等有工絕者。有秀朗者。優柔靜遠。瑰奇瞻麗。靡所不有。義堂視絕海。骨力有加。而才藻不及。且多禪語。又涉議論。溫雅流麗者。集中無幾。如絕句。則有佳者。懷舊作云。紛紛世事亂如麻。舊恨新愁只自嗟。春夢醒來人不見。暮簷雨洒紫荊花。送人歸京。曰。輦下招提西又東。因君歸去思重重。孤雲海國三年夢。落月長安幾夜鐘。

詩史

卷之二

一八

二僧之外。太白春水曰。春水綠深數尺強。烟波渺渺接天光。落花漲盡江南雨。一夜閑鷗夢也香。仲芳題范蠡曰。五湖烟水綠涵天。月照蘆花秋滿船。吳越興亡雙鬢雪。功名不敢至鷗邊。南江送僧遊廬山。曰。廬山何處不勝情。蓮社人空芳草生。君去能聽虎溪水。潺湲尚有晉時聲。大愚題水竹佳處曰。野水侵門脩竹清。君居想合似佳名。山泉半濕斜陽雨。翡翠時來衣折啼。村菴雪夜留客。曰。茅屋休辭一夕替。君家歸路恐相迷。園林雪白。黃昏後。難認梅花籬。落西。正宗神泉苑應制。曰。上林風物草連空。尚有龍池記古宮。何日宸遊留玉輦。神泉純浸五雲紅。金師法晚唐。深



造巧妙

宗山同山。竝有水邊楊柳詩。宗山曰。漁橋不似官橋。暮不繫金絨。只繫船。同山曰。條不成。乾烟雨裏。半如鴨綠。半鵝黃。二詩體裁頗肖。並工縵矣。

曹學佺明詩選。載日本僧天祥詩十一首。機先詩五首。二僧被賞乎中土。而湮晦乎我邦。甚可嘆惜。天祥憶西湖曰。杭城一別已多年。夢裡湖山尚宛然。三竺樓臺暗似畫。六橋楊柳晚如煙。青雲窪下梅邊暮。白髮僧談石上緣。午睡醒來倍惆悵。堪看身世老南滇。又榆城聽角曰。十年遊子在天涯。一夜秋風又憶家。

詩史

卷之二

九

恨殺黃榆城上角。曉來吹入小梅花。聲格清亮。唐人典刑。其他我邦詠言。為華人所稱者甚衆。春齋林子。一人一首。論載詳悉。今不復贅。

朝鮮徐剛中所著東人詩話。以清磬月高。知遠寺長林雲盡。辨遙山。為日本僧梵岭詩。余未考梵岭何人。余按古昔宮娥閨媛。揮彤管於國字。抽藻思於和歌。揚芳。一時播美。千載者。比比有焉。如詩意無幾。而孝謙帝為始。帝以坤德位九五。中書之言。言之長也。帝酷崇釋氏。所傳帝詩。亦唯讚佛偈耳。然曰。惠日照千界。慈雲覆萬生。實俊語也。按史。先是吉備

公為聘唐使。遂留學于唐國。經二十年。至是歸朝。帝師之。學詩學書云云。然則宸藻豈止於此耶。今無所考耳。

大伴氏不詳其人。文華秀麗集載其秋日述懷七律一首。雖非佳作。亦不甚拙。

內親王有智子。弘仁帝第三女。幽貞之質。錦繡之才。古今罕儔。年十七。為賀茂齋院。帝幸幸齋院。與群臣賦春日山莊詩。各探勸韻。公主亦與焉。公主得塘光行蒼。即賦曰。寂寂幽莊深樹裏。仙輿一降一池塘。棲林孤鳥識春澤。隱澗寒花見日光。泉聲近報初

詩史

卷之二

十

雷響。山色高晴。暮雨行。從此更知恩顧厚。生涯何以答宮蒼。又嘗賦巫山高。其結句曰。別有曉猿斷寒聲。古木間。殊初唐遺響。其餘傳者數首。公主薨年四十一。遺令薄葬。且辭護葬使。其賢明。不特藻繪之美。惟氏蓋弘仁時宮女。經國集載擣衣篇一首。長短成章。其中云。芙蓉杆。錦石砧。出自華陰與鳳林。擣齊紈。擣楚練。等數語。最為婉約。此知弘仁右文教化。為至也。諸皇子無不能詩。而皇女有如有智公主。外廷諸臣。才華紛競。而內庭又有如惟氏。使千歲下嘆。稱不已。

尼和氏不詳氏族。或曰和氣清磨已姊也。經國集載古風一篇。其中云。棲隱多歸趣。從來重練耶。駕言尋此處。處處幾經過等語。足證心地清淨。

十市采女。和江侍郎七言四句。截其半。載朗詠集曰。寒閨獨夜無夫婿。不妨蕭郎在馬蹄。世以采獲鄙焉。或曰和歌之設。教也。亦本諸性情之正。固非誨淫具也。中古風教陵夷。人人假之為花鳥使。紅箋往復。半是芍藥贈言。前史所錄和歌選集。所載歷歷可證。有視面目。而當時慣以為常。采女特以詩代和歌耳。如懲其淫風。宜有仕咎者。何必尤一女子。采女之後。悠

詩史

卷之二

十一

悠幾百年。閨閣之詩。寥乎無聞。元和文明之後。又得數人。因附錄千左云。

墨華院宮默堂。蓋皇女。歸釋者云。八居題咏。附載其冬日書懷曰。寒林蕭索帶風霜。幽竹牕前已夕陽。翫月秋宵猶恨短。尋花春日尚思長。榮枯過眼百年事。憂喜傷心一夢場。靜對爐香禪坐久。細煙裊裊繞孤床。理趣超凡。不啻脫紅粉之習。兼遠烟火之氣。

京師女子名留者。年十三。送人詩云。蜀魄声声更斷腸。離筵今日淚成行。江山迢迢幾千里。不若愁人別恨長。又有春山尋花七律。亦頗成章。二詩見本朝千

家詩。不錄女子氏族。今不可考。千家詩。元祿中。京師書林編輯。距今已八十年。

讚川九龜。士人井上氏女名通。從東都還。九龜道中。以國字紀行。名歸家日記。其中載詩十二首。天龍河作云。天龍河上天龍遊。龍去河留二水流。二水中分為大小。小斯厲揭。大斯舟。

筑後柳川。立花氏女。題山居云。應是武陵洞。溪流送落花。杳然聞犬吠。何路向仙家。江樓賞月云。江天明月照登樓。十里金波浸檻流。黃雀仙人誰得見。玉簫吹落桂花秋。有詩集名。中山詩稿。

詩史

卷之二

十二

伊勢山田祠官某婦。荒木田氏。好讀書。善和歌連歌。近學作詩。間有佳篇。婉順不失閨閣本色。題畫云。楊柳青邊澗水流。春風倚棹木蘭舟。人家隔在峯巒裏。想像長伴麋鹿遊。又浪華客中作云。江湖一望綠連天。日出烟波帆影懸。歸雁幾聲春夢破。故園消息落花邊。

日本詩史卷之二終

日本詩史卷之三

平安 江邨綬君錫著

第 清 絢君錦 同校  
男 倅集孔均

古曰文學盛衰有關乎世道汚隆信哉徵之我邦夫誰曰不然神武天皇東征綏其士女帝功於是為盛然時屬草昧遐荒猶阻王化應神天皇登極而後三韓舊額蝦夷獻琛巍巍桓桓莫以尚焉於是我邦始有六經云仁德天皇為皇子時受經於百濟

詩史

卷之三

博士講明唐虞之治即位後施為靡不由焉是以海內又安衆庶仰之如日月戴之如父母仁慈恭儉之化入民心者至深且固歷千百世無有貳貳胡厥盛哉自時厥後列聖相承文教日闡餘波及翰墨者汪洋于弘仁天曆間可謂帝業與文學偕盛也延久已降朝綱解紐文事日廢一壞于保元再壞于承久廢爛于元弘建武之後迄乎足利氏失其鹿邦國分裂戰爭無已生民塗炭到此而極藝苑事業無復子遺矣既而天厭喪亂織田氏豐臣氏迭興中州稍削平然竝無學無術馬上得之欲馬上治之是以天人不

與或業壞垂成或祚止一世要之撥亂反正天必有待而奎壁叢彩於久暗之後固非偶然也若夫

神祖聖文神武上邇戴帝室下煦育億兆干戈攘援中遘訪耆老以彙纂治道廣募遺書以潤色鴻業又命惺窩先生講析經史之義於是羅山先生應聘東都夫然後猛將勇士稍知嚮學而邦國類官尋與士業日廣至今百六十年玉燭繼光金甌無虧風化之美昇倫之正亘古所無而近時文華之鬱無讓漢土今論列其一二未遑縷舉云

詩史

卷之三

惺窩名肅字欽夫姓藤原氏其出處言行並見本朝儒宗傳今不復贅焉初為僧名椿首座是時五山詩學尚盛其中有以才鋒稱者而遇惺窩則折北不支以故名重釋氏雖歸儒後不畜妻妾不御酒肉人或詰之則曰我歸儒也崇其道耳不我知者謂為食色吾德不足服人不能不避嫌耳先是京師有唱程朱說者而猶未普四方惺窩一出麾之海內靡然宗之執弟子禮者無慮數百人而羅山治所堀正意松永昌三最有重名惺窩已以斯文自任人憚其端嚴而亦能風雅不廢文字之業嘗花時遊大原訪豐臣長嘯席上賦云君是護花花護君有花此地久留君入



門先問花無恙。莫道先花更後君。一時遊戲之言。體格亡論已。然意致曲折。足証溫藉。

活所名方字道圓。姓那波氏。後更姓祐生。名觚。播州人。年十八遊京師。始謁惺窩。惺窩覽其咏杜鵑詩。數稱焉。由是名價頓發。遂從惺窩。聞濂洛心法。即得其旨歸。元和元年。大駕駐京。召見名儒。活所雖年少。亦在其列。後筮仕。肥後。肥後國除。更事紀藩。又以方正端嚴。繼惺窩為京師諸儒冠冕。其弟子號入室者最多。而我先太父為首。正保戊子卒于京師。有活所遺稿十卷。詩凡五百首。其中有雅馴者。遊東求堂云。

詩史

卷之三

三

寂實將軍廟。無邊草木肥。苔深過客少。松卧古人非。流水幾時盡。行雲何處歸。長嗟山路暮。幽鳥傍吾飛。長子木菴克紹其業。為一時儒宗。

木菴名守之。字元成。嗣職為紀藩文學。後以老病致仕。在家教授。自惺窩至木菴。文學相承。木菴最以毅直稱。而其詩多圓暢者。遊金閣寺云。相國遺踪在。荒蹊松竹幽。青山千古色。金閣幾人遊。山影浮寒水。林聲報素秋。遙憐應永日。臨眺令吾愁。又禪林寺看花云。過眼山花片片飛。如雲如雪映斜暉。共憑百尺樓臺上。自使遊人忘暮歸。遺稿若干卷。名老圃堂集。我

義祖全菴先生。以同學故。唱和殊多。至今余家藏本菴詩數紙。筆力遒勁。字字飛動。木菴一子名元真。俗稱采女。多病不業。先木菴死。有二孫。余髫年從先考過其家。是時木菴配某氏。猶無恙。令二孫出見先考。曰。吾家業詩書。世有顯名。吾見不幸短折。今以二孫累先生。於是二孫受業先考。亡何祖母氏卒。二孫後遂並為醫。那波氏世住播州。家資鉅萬。迄活所事紀藩。歲祿五百石。家道益饒。是以極力典書。至數萬卷。余友師魯與活所別家而同宗。才名夙著。至今緊苦讀書。其志不小。所謂廢於彼而興於此者歟。

詩史

卷之三

四

堀敬夫名正意。號杏菴。惺窩門人。初仕張藩。安藝侯素聞其名。厚禮請之。張藩張藩命應其聘。於是更仕安藝侯。子孫嗣職。世為藝州文學。其詩見扶桑千家詩。暨扶桑名勝詩集。

松永昌三名。遐年惺窩門人。聲名籍甚於一時矣。承保中。執以布衣召講春秋經。因名其居曰春秋館。館在西洞院。是時板倉侯為京尹。好學。素重昌三。聞春秋館狹小。為卜宅地於堀川。名曰講習堂。昌三子長昌易。次永三。昌三卒。昌易居春秋館。嗣絕。永三居講習堂。子孫能守其緒業。云。昌三著述。余不多觀。名



勝詩集載市原山題咏八首并小序

三宅山羊號寄齋。活所同時人。或曰亦惺窩弟子。講說為業。其子子燕名道乙。始仕備前。名勝詩集載三宅可三備前八景詩。疑是其人。若子孫也。

惺窩門人。有菅原玄同。字得菴。有鶴飼信之。字子直。羅山門人。有人見友元。永田道慶。活所門人。奧田舒雲。昌三。門人。野間三竹等。當時並有聲譽。爾時詩論未透。雅音罕振。今閱諸人遺稿。雖各有低昂。大較魯衛之政。

詩史

卷之三

五

山崎闇齋。專講性理。如詩章。非其本色。要之其所以不朽在彼。而不在此也。名賢詩集載闇齋詩百首。可謂儻父。不知好惡也。中村惕齋。藤井蘭齋。米川操軒。亦有詩見千家詩。

寬文中稱詩豪者。無過於石川丈山。僧元政。丈山出處在世之口碑。已武且文。隱操亦卓然。年九十卒。可謂偉人也。至今京師東北。一乘寺邑。有詩仙堂。暨其遺留琴硯等。依然尚存。當時嘯咏其中。誓不入城市。諸名士每經過。談論唱和。以為娛樂。所著有覆醬集。韓人權氏者。為之序。稱曰日東李杜。余覽其集。句多拙累。往往不免俗習。權氏溢美。不俟辯論。然當時諸

儒詠言。率出于性理之緒餘。多溫柔旨。而丈山獨夢寐山林。襟懷瀟灑。如牕間殘月影。枕上遠鐘聲。風柳起鶯懶。山花留馬蹄。半壁殘燈影。孤牀落葉聲等。意象間雅。殊可諷詠。

詩史

卷之三

六

僧元政。修持法華。戒律堅固。而雅尚風雅。所著有山文集。嘗結茅於京南深草里。香火到今不斷。其詩雖韻格不高。意義平實。元政本江州士族。鄉有老母。後迎養菴側。孝敬純至。客中絕句曰。逐月乘風出竹扉。故山有母淚沾衣。松間一路明如畫。遙識倚門望我歸。記其實也。先是明人陳元贊。避亂投化。後以山人應張藩聘。時時來遊京師。會晤元政。心機契合。締方外盟。有元元唱和集。元政詩中有云。人無世事交常淡。客慣方言譚每諧。亦記其實也。或曰元政得袁中郎集。悅之。以為帳秘。余謂中郎詩祖述白香山。欲矯七子套。棄去陳腐。而其弊失諸率易淺俗。元政贈元贊曰。公本大唐賓。七十六老人。吾少公卅六。十調况非倫。不知何夙世。合如車雙輪等。正是公安委流。或說恐然。明人避亂投化者。元贊之外。有朱之瑜。又有林榮何倩。顧卿僧獨立輩。元贊字義都。號既白山人。崇禎進

士下第者云。朱之瑜字楚璵。號舜水。嘗為魯王賓客。明亡。附商舶來長崎。無人知為文儒。窮困備至。獨有筑後安藤省菴。執謁為弟子。省菴世事柳川侯。歲祿二百石。於是分其半供舜水。以助薪水。常藩聞之。瑜名聘召。賜祿五百石。眷遇甚篤。年八十餘而終。私為曰。文恭林何顧三人。不詳其巔末。大高李明芝山稿中。稱三人明儒。推獎特至。意三人止于長崎。而不入京。歟。或後再西歸者歟。又芝山稿中。說元寶子瑜之事。與他說異矣。其言曰。陳杭州敗夫朱南京漆工。茲非知學者。余未知其孰是也。若詩則元寶為勝。元寶詩間有佳者。其氣韻蕭索者。亦唯邦亡家破。孤身航海。理固然矣。何林顧三人詩。見芝山吟稿。暨名勝詩集者。鄙俚窳甚。僧獨立名善書詩。亡論耳。之瑜詩余未見焉。或曰之瑜文集三十卷。

省菴之於之瑜。好學勇義。求諸古人。不可多得。省菴名守約。少時遊京。後學昌三名善屬文。詩亦多傳。問有佳句。

高李明。本姓大高坂氏。自修為高字。清助。號芝山。土佐州人。其履歷詳于男義明所撰高氏家譜。少時遊學兩都之間。博覽而有志。家研理義。又好著述。有

詩史

卷之三

七

所作。則必致之長崎。請正於林何顧三人。三人極口褒賞。其答李明書曰。我輩來貴國。視數家文章。雖各有所長。然或未諳章法句法。唯足下所作。盡合規矩。又曰。足下文章。意深語簡。韓柳歐蘇無過。又曰。足下詩格調兼高。宜貴貴國紙。孟浪諛言。固不足論。而全明信之。安自夸毗。遂欠精細工夫。芝山會稿十二卷。篇章不為不多。而可採者無幾。余酷愛李明慷慨有氣節。因深惜為三人所誤也。

延寶中。吉田元俊纂扶桑名勝詩集。元和以來作者不下百人。涇渭混淆。其中雖有短長。舉而論之。無足採錄者。平岩仙桂。熊谷立閑。山本洞雲。咏題殊多。余未詳其人。唯有餘元徵。西岡八咏。體裁頗整。元澄名澄。號東菴。有竹雨齋詩集。

宇都宮由的名。三近。號遁菴。周防人。昌三門人。講學於京師。有遜菴詩集。弟子恕方者輯錄其序云。先生著述罹災。今所存特晚年作云云。余閱其集。詩猶餘首。七絕最多。至七百首。其中云海色茫茫。山色長孤舟風雨轉。淒涼天涯一夜愁。人夢半在京城半故鄉。悽愴婉約。可稱佳作。其他則蕪陋淺俗。可笑者不鮮。十刪其九。則可不朽矣。又五言。好花三月錦。啼鳥

詩史

卷之三

八

幾絃琴。千竿遶畏日。一榻納微涼。亦佳。

松原一清。字孫七。號霍峰。安藝人。仕本藩職為行人。幼好讀書。九歲作詩。長而益勤。詩集二卷。名出思稿。語多胃臆。不喜踏襲。其宿西條驛。云。西風驅暑送新涼。不厭前程雲水長。行李更無官事累。悉收秋色滿詩囊。意度悠遠。足可誦咏。

貝原益軒。名篤信。字子誠。筑前人。後隱居京師。元和以來。稱饒著述者。東涯徂徠之外。蓋無如益軒者。其所撰不為名高。勤益後人。乃至家範鄉訓樹藝製造。疊疊懇懇。余少年時不解事。意輕其學術。今而思之。

詩史 卷之三

九

殊為懺悔。其詩亦朴實矣。益軒之姪損軒。名好古。志尚如同舅氏。著述數種。詩亦頗占地步。又有貝原存齋。余未詳其人。千字詩載其三月盡作。云。今年花事今宵盡。衰老難期來歲春。風光別我何恨。留與後人千萬春。可謂知道之言。

村上冬嶺。名友佐。字漫甫。活所門人。與余先太父同學。相友善。余少年時。聞先考數稱其人。蓋好學天性。其推獎先達。揄揚後學。不啻如自其口出。一以為已任。當時諸儒。會讀二十一史。會月數次。又結詩社。並輪會主。必有酒食。臨期會主或有他故。冬嶺必代為

主。以故社會綿綿二十有餘年。後進所作。時有佳句。

則擊節嘆稱。吟誦數回。一時藝苑賴之吐氣。其自運亦矯矯乎一時矣。今讀冬嶺詩。精深工整。超出前輩。元和以後七言律。到此始得其體。梅花云。名園桃李競嬋娟。獨自清寒倚竹邊。東閣題詩人動興。西湖載酒鶴迎船。點苔欲效霏霏雪。傍柳偏含淡淡煙。何處金鉈明月下。曉風咽斷更悽然。秋夜宴伏見某樓云。秋入水鄉鳴荻葦。壯遊不用賦悲哉。豐城劍氣衝星起。北海樽酒乘月開。萬頃鷗沙吞楚澤。千帆賈舶溯蓬萊。此翁矍鑠人爭說。物色行看到釣臺。又小集席

詩史

卷之三

十

上作云。青樽歲晚思難禁。共見頭顱霜色深。恍慨堪收燈下淚。低垂姑任世間心。愁邊一笑比雙璧。老後令陰重寸金。薄宦身閒亦天幸。清時莫作獨醒吟。又田家絕句云。羈思官情兩不知。春耕夏耨鬢成絲。門前垂柳長拂地。不為別離折一枝。

伊藤仁齋。首行程朱。創一家學。其說是非。余有別論。東涯盡簪錄曰。先人教授生徒。四十餘年。諸州之人無國不至。唯飛驒佐渡壹岐三州人不及門。執謁之士以千數。要之亦豪傑之士也。際其為人。宜不屑聲律也。而詩間有有旨趣者。殊可嘉稱。



東涯仁齋長子。名長胤。字元藏。其如經義文章姑舍。是詩亦一時鉅匠。近人動輒曰。東涯詩冗而無法。率而無格。噫。談何容易。東涯篇章家饒。余閱其集。有潤麗者。有素朴者。有精嚴工整者。有平易淺近者。體段難齊。余雖生後時。猶及識東涯。其人溫厚謙抑。口訥。訥似于不能言者。與今時學者自託龍門。倨傲養名。懶惰失禮者不同也。人有乞詩。則無論貴賤長少。黽勉應之。大名之下。乞者日衆。所謂卷軸之積。如束筍者是。以其所作。有歷鍛鍊。有出率意。畢竟無害為大家。東涯兄弟五人。其季即今蘭岫是也。

詩史

卷之三

十一

北村可昌。字伊平。號篤所。江州人。仁齋門人。在京師教授生徒。負笈者四方雲集。朝紳為之弟子者亦衆。元祿中。上皇聞其篤學老而不倦。特宣賜古硯。享保三年卒。壽七十二。碑銘及書。並成貴介手。名賢詩集載其詩四十余首。和州道中作云。飛雪寒風天漠漠。長途短晷意怱怱。聞雲本是無情物。底事營營西復東。余近閱熙朝文苑。有可昌謝賜硯表。其大意深欽慶為其傳家之寶云。然可昌一男一女。男不肖且廢疾。可昌沒後。不知賜硯流落何處。

小川成章。字伯達。號立所。仁齋門人。按東涯蓋簪錄

曰。先人教授生徒。殆以千數。小川成章。北村可昌相從最久。衆推為上足。又曰。小川吉亨。京師人。壯歲不事家產。晚年卜居北野。稼圃為樂。閑暇手自謄寫異書。有二子曰成章。成村。共從先人受學。成章長而有學行。後仕常藩云云。據此。則成章亦一時翹楚。其詩見名賢詩集。及千家詩。

詩史

卷之三

十二

松下見操。字子節。京師人。受學先太父。篤志博綜。尤好著述。余家藏其詩若干。氣骨沈雄。翹翹一時。書法亦蒼勁。而潤美。其咏鷹云。齊野玄霜楚澤冰。十分猛氣正騰騰。目中今已無凡鳥。天外常思制大鵬。利爪幾經紅血戰。奇毛深入白雲層。誰言一飽即颺去。左指右呼憐爾能。又題秀野亭五律十五首。甚有曲致。語繁不錄。

緒方維文。字宗哲。亦受業先太父。學成仕土佐侯。男某不業。家遂絕矣。熙朝文苑載其詩。而詩非所長也。又曰。千家詩載緒方元真詩。余不詳其人。疑是宗哲族也。其有馬道中作云。木綿花發稻青青。處處水田龍骨鳴。百里長堤日將午。藍輿且傍樹陰行。

大町敷素。名質。稱正淳。京師人。受學先太父。詩見熙朝文苑。當時梁曉巖和徐文長詠雪七言八十韻。失



新而精巧。膾炙遠近。敦素有和作。儼其體。余少年時一再覩之。今不復記。可惜。

笠原雲溪。名龍鱗。稱玄菴。京師人。詩名顯著。一時到今。遐陬僻境之士。尚嘖嘖稱焉。蓋自惺窩先生講學於京師。百有餘年于茲。其間雖有以詩賦文章稱者。風俗未漓。學必本經史。以翰墨為緒餘。而雲溪獨以詩行。是時仁齋門人中。島正佐者。專業講說。而所講不出四書。終始循環。一日數席。諸生徒輻湊其門。雲溪居止。接近正佐。乃以詩授人。生徒以為便。於是雲溪詩名。傳播四方。亦京師學風一變之機會也。雲

詩史

卷之三

十一

溪沒。門人竹溪者。鈔其遺稿。排而行之。名桐葉編。其詩嫵媚足自喜。而氣骨纖弱。如律詩全篇佳者。無幾絕句。則間有堪錄者。五言雷驅殘雲去。雨隨返照收。逐涼多少客。立盡柳塘頭。七言。舊屋寒深古。敝裘朔風徹。曉未全休。家童預識雪將至。行汲前溪一曲流。又曰。雲溪詩瑕類最多。梅花七律。有疎影上牕月。亦香句。足稱佳句。而對太不協。又失鶴七律。當時喧傳以為絕唱。其領聯曰。孤巢影動猶疑在。蕙帳眠驚誤欲呼。誠佳矣。頸聯殊不協焉。雲溪又有絕句曰。接蘭介子劍。南越終軍纓。清世成何事。壯心誤此生。人傳

雲溪卓犖。無好武術。其或然也。右桐葉編卷末。附載竹溪詩數十首。跋亦竹溪作。而無序。以朝紳和歌一首代之。竹溪余未詳其人。以先師遺稿。為翫弄具。且為售已名。奇貨輕薄。亦甚。

柳川順剛。字用中。號震澤。又號雪溪。京師人。千家詩載元日七律一首。其中云。乾坤於我知難助。邱壑何心負鵬冠。頗錚錚矣。

柳川滄洲。名三省。字魯甫。本姓向井氏。出繼順剛後。冒姓柳川。從木下順菴學。學成不仕。授徒講學。或曰。元和以來。從事翰墨者。雖師承去取不一。大抵於唐

詩史

卷之三

十四

祖杜少陵。韓昌黎。于宋宗蘇黃二陳。陸務觀等。至雲溪始右唐。左宋。而猶未及初盛中晚之目。滄洲出而後始以盛唐為正鵠。余謂是之時。物徂徠唱古文辭於關東。稱揚明李于鱗。王元美。輕俊子弟靡然爭從。然京師未有為其說者。而今誦滄洲詩。駁駁乎明人聲。以蓋氣運所鼓。作者亦莫知其然而然也。滄洲送人之美濃曰。西風萬里動。關河搖落何堪送。王珣遲暮誰憐平子賦。清時猶唱伯鸞歌。路連山嶽愁雲合。天入江湖旅鴈多。聞道濃陽秋水濶。莫將蓑笠老煙波。又咏曉鶯七絕曰。香霧冥冥夜色深。黃鶯啼處月

初沈。無端喚起梅花夢。能使春心滿上林。又五絕關山月。曰。青海孤雲盡。天山片月寒。高樓人不寐。半夜望長安。滄洲教授有方。其門人多成材。其宦顯者。石川伯卿。上柳公通。及長野方義。渡邊士乾。大橋叔輔之徒。滄洲卒後。皆能守舊學。文會無渝。伯卿方義已沒。公通士乾叔輔。今無恙云。

石川伯卿。名正恒。號麟洲。京師人。滄洲門人。學成仕小倉侯。為人謹恪。而藻思亦蔚然矣。嘗著辯道解蔽駁祖徠說。嗣子今嗣職。為小倉文學。

長野方義。字之宜。性余於友人。辭上。睹其詩數首。今

詩史

卷之三

十五

偶記一首。秋閨怨云。搖落寒砧。秋晚催黃花。戍客幾時回。傷心。寢是南歸雁。萬里飛從君處來。

松岡玄達。名成章。號恕菴。又稱怡顏齋。京師人。博學強記。無不該通。家研確本草家學。諸國生徒上其席者。每以百數。少時頗事操觚。後以講學。遂廢吟哦。故所傳詩篇至罕。余家藏其少作數紙。亦自平實。

堀景山。名正超。字君燕。南湖之後弟。與南湖同為杏菴玄孫。蓋杏菴之後分為二家。並為藝藩文學。景山篤學精通。而和厚遜人。循循獎掖。後學是以從遊之士多嚮彬雅。其詩結構整齊。亦一時作家。某年卒于

京師。藝侯親製碑文。賜之嗣子云。

堀南湖。名正修。字身之。別號習齋。其學廣搜博採。強記絕人。策精易理。嘗演蘇氏易說。著書數萬言。與景山同為藝藩文學。而其在京師時。准三宮豫樂藤公。數召對清問。禮遇甚優。其卒也。藤公賜親製碑銘。南湖夙好吟哦。暇日多遊五山諸刹。與僧徒相唱酬。當是之時。海內方宗唐及明詩。而南湖獨祖宋。寢尚子瞻。故譽之者曰。一時無二毀之者曰。詩無所解。要之南湖才識出群。如曰。一運年年蘚。四時日日花。梅每枝枝好。雪教樹樹妍。曲渚舟橫草。深山鐘度花。雖非大雅中正之音乎。天造奇逸。自有妙處。且古曰。寧為雞口。莫為牛後。如其言。則南湖亦藝苑夜郎王矣哉。長子名某。長於余數歲。少時有才子稱。已沒。今嗣職者。為南湖之孫。

詩史

卷之三

十六

僧百拙。卓錫泉溪。為寶藏寺開士。能詩善書。與南湖詩盟法契。往來唱和。余嘗論元和以後。釋門之詩。以百拙對萬菴。人無信者。蓋其無信者。以詩體玄黃。相判也。如其資才。二僧介兩大抵相稱。無有輕重。但其志尚相反。軌轍異途耳。蓋萬菴欲莫以禪害詩。百拙欲莫以詩害禪。故萬菴詩詩必詩人之語。百拙詩詩

必道人之語。是以萬菴詩高華雄麗。百拙詩深艱枯勁。並是假相有意。非其本相也。有時出于其無意者。萬菴未必無道人之語。百拙間有詩人之語。百拙嘗作春雨書懷七絕七首。其一曰。梅花落盡李花開。禊事將來細雨來。半幅疎簾人寂莫。前村野水洗蒼苔。又湖上採蓮歌曰。西湖十里玻璃綠。隔岸仄聞採蓮曲。蕙帶茜裙風自香。荷花如錦人如玉。荷柄斷時須斷腸。藕絲纖纖知難續。畫橈歸去歌聲遠。夕陽波上湖山綠。

僧西巖。住持南禪。天授菴。博覽宏識。禪餘好詩。其名重于叢林。亦能與一時文士往來唱酬。溫粹近人。而僧規亦肅。世人欽其學德。

卷之三

十七

享保中。坊間所刻八居題詠集中。有伊藤祐之服部寬齋。梅園正珉。五井純禎。今西春芳。和作祐之字順卿。號莘野。稱齋宮。寬齋稱藤九郎。失其名字。正珉字某。號文石。純禎字惠迪。號蘭洲。春芳字陽甫。號白野。稱正立。又有橘洲先生。桃溪先生。余不詳其人。其詩雖不能無少妍強。要亦娉奴耳。

入江兼通。字子徹。號若水。攝州富田邑人。釀酒為業。家累千金。為人不羈。少時好遊狹邪。資產蕩盡。於是

憤激讀書學詩。後著山人服。携詩囊遊放諸州。到處聞有聞人。則必以詩為贊。造詣會晤。是以江山人詩名顯著四方。最後結廬京師西山。稱操谷山人。日與天龍寺僧徒往來唱和。其詩輯為二卷。名西山樵唱。序者四人。徂徠。服子遷。富春叟。韓人申維翰。並論其詩為晚唐。以余觀之。其詩頗肖宋陸放翁。但剪裁欠工。容易下筆。故動失諸龐率。可惜已。然詩詩自肺腑出。句句流動。較諸近時諸人。藉口盛唐。勦竊嘉靖七子糟粕。釘鉗陳腐者。反有可觀。五言題水竹園曰。幽居宜懶性。水竹伴閑吟。洗硯釣魚瀨。題詩棲鳳林。清流聲漱玉。明月影篩金。唯見七賢侶。過橋日訪尋。又春日訪詩仙堂曰。草堂依嶽麓。花竹足風烟。梁引雙雙燕。壁描六六仙。書殘多蝕字。琴古自無絃。欲吊徵君墓。捫蘿陟翠巔。七言西山卜居曰。城西十里避塵緣。卜築溪邊第數椽。門外誰曾栽翠柳。竹間本自引清泉。群峯競秀連崖寺。一水中分入野田。日日行吟詩是業。烟霞痼疾未全痊。

卷之三

十八

瀨尾維賢。字俊夫。號用拙齋。京師書林。少時從仁齋學。後與若水歡。遂以詩稱。其詩追步若水。而更淺率矣。諺江山人云。一路斷橋外。孤村杳靄中。柳垂前夜



雨。花落暮春風。白屋經年漏。青山與音同。浮生須痛飲。淺水月朦朧。先是林義端字九成者。頗事翰墨。其詩見千家詩。及八居題詠附錄。亦京師書林稱文會堂者。

鳥山碩夫。名輔賢。號芝軒。亦攝人。或云伏見人。余少年時。已聞江若水詩名。以為攝之巨擘。未知有碩夫也。迄為邸職。以吏事數往來浪華。一日訪葛子琴。見架上有芝軒吟稿。迺知碩夫之遺稿。携歸逆旅。讀之一宵。始歎其作家。其才大率與若水頡頏。細論之。步驟不及若水。而韻度勝之。咀嚙覺有餘味。上已七絕

詩史

卷之三

十九

云不向江邊泛羽觴。雨中閉戶興偏長。松煤細研桃花露。臨得蘭亭字幾行。又歸田詩云。請得農耕鬢蒼華。桑田數畝即生涯。荷鋤未減初年力。擬向東菑更藝麻。

鳥山輔門字某。碩夫子也。名賢詩集載少時作數言。淀河舟中云。舟行三五里。帆影受風斜。綠漲鴨頭浪。白分燕尾沙。山光籠野色。蓼葉雜蘆花。落日孤城外。炊煙和暮霞。體裁明媚。可稱合作。如論其才局。似勝乃氣。持怪爾後寥乎。無聞苗而不秀歟。韞積而不出歟。今浪華有鳥山雛岳者。蓋別家云。

大井守靜字篤甫。號蟻亭。亦攝人。家世業賈。篤甫少志學。博綜群籍。家好藏書。凡奇書珍篇。必捐重貲。與之殆致數千卷。後來京師講說。所著有蟻亭據言詩集。手所選定。名覆窠。頗不襲時風。自為一家。送春絕句云。煙林布綠。葛原東。遲日芳菲不負公。春去春神呼不返。鳥紗巾上落花風。蕭散有趣。但集中數用奇字僻語。如柳巷畫簾。渾不似杏村夕酌。醉如泥。又有以護花時對共惜春。殊遠風雅。蓋渾不似樂器名。醉如泥。杯名護花時。共惜春。並禽名。

詩史

卷之三

二十

富春叟。或曰桐江山人。享保中。住攝之池田邑。爾時海內方嚮物氏之學。而徂徠及門人。褒稱春叟。詩筒往復。歲時不斷。是以富山人詩名震乎京攝之間。邑中子弟。爭從春叟遊。好事之後。每歲首。輯春叟及社中詩。為小冊子。名吳江水韻。刊行四方。邑人檜垣宗澤者。嘗受學。義兄青郊先生。以故年年寄示。其詩似學陳去非者。或曰春叟。奧州人。嘗以儒業仕。柳澤侯但徠集中。稱田省吾者。

森億字昌齡。弱齡。翔藝苑。大篇巨什。信手揮成。世人往往以才子稱之。是時京師有郭西翁者。以相術稱。昌齡善病。乃從西翁相。翁曰。君實奇才。惜乎無壽。



昌齡自是樂意遊湯。探紙亦廢不數年。果死。余謂昌齡檢束修業。尚或保無他。即不幸短折。名聲益馨。余今錄之。以戒少年才者云。

安田超。字文達。本姓烏井。小名醫安田。立睦。撫而為子。年甫十歲。受學義兄青郊先生。才敏研學。為人白哲。眉目如畫。以詩挑諸文士。詞鋒穎甚。後以奔走于刀圭。故學業遂廢。才亦落矣。

僧惠實。號雪鼎。又號玉幹。住圓德寺。寺在宣風坊。隸于本願寺。與余相識。寧熟。雪鼎天資清雅。好學。能詩。兼學繪事。多蓄古今載籍。又愛古畫古法帖及文房

詩史

卷之三

三十一

古銅器。竭資曲之。又性好山水。聞有流峙之奇。雖險遠靡弗造焉。嘗以本願寺主命。如土佐州。檢校寺務。迄歸齋。一木箱甚重。封緘亦密。人疑以為寶貨。後開箱。則海濱沙石耳。又嘗赴美濃。遊養老瀑布。傍多紫青石。意謂作硯則佳。駄數片而歸。頗費錢。窮賤而石質過堅。不適硯材。乃置之庭際。愛翫竟日。其雅尚大率此類也。惜壽不得五十。詩亦清雅。類其人云。

宇士新。名鼎。京師人。家世為子錢家。以貴貨寵於眾。諸侯士新耿介。不喜高賈業。與弟士朗辟族別處。不畜妻妾。日夜閉戶勤學。先是物祖徠唱古文辭於東

都。士新說其說而多病。不能東遊。乃遣弟士朗從學焉。京師講徠之學。自士新始。後來意見漸異。事事反戈徠徠。士新著作頗饒。其文集名明霞遺稿。其詩紀律精詳。一字不苟。下遂能以此建旗鼓於一方。蓋亦詞壇雄。加之緊苦力學。志節凜凜。聞其風者。庶可小興起。惜乎資性褊窄。規模甚隘。其詩亦得之苦思力索。是以規度合而變化不足。聲調句而神氣離。弟士朗名鑒。為人和厚。為眾所愛慕。先士新而沒。詩集行於世。護園錄稿載送北子彙侍醫膳所詩。頗合作矣。

詩史

卷之三

三十二

陶山冕。字廷美。稱尚善。土佐州人。東涯門人。其學兼該。擅官小說。又通夏音。為醫為儒。並以不遇終。遺文亦散亡。詩素非本色。

岡千里。名白駒。播磨人。初在攝之西宮邑。以醫為業。一旦投刀圭。而來于京師。專以儒行。是時京師已有悅傳奇小說者。千里熟唱其說。都下羣然傳之。其名噪于一時。千里於是不復作詩。人或知詩。則辭以不能。於是人人謂千里文而不詩。其實非也。余覽千里在播攝時作。亦自當行。所以云爾者。有說也。千里急于名。又好勝人。是時東都有服子遷。赤石有梁景鸞。

南紀有祗伯玉詩名聞于海內千里自量難與此敦子並驅而世方勤復古業左國史漢人人誦之託其訓詁亦足不朽故廢詩專意作諸觴以縛羅其名既而恐後人以文士觀目則傳註詩書論孟以崇其名然已急於名又好勝人故其所論說引證不精且以臆見勇斷疑義或勦襲他人說以為其著作雖取快於一時難免識者指摘余為千里深惜之云

條士明名亮後更姓武名欽繇字聖謨稱梅龍道人與余相識最舊初執謁東涯又從遊士新後以玉門賓客給仕于妙法院為人俊爽而有氣節博覽強志又能談論彌日徹夜不倦性多病數至危篤然未嘗廢業明和丙戌年遂卒其詩尚縱橫累篇疊章硯硤滿紙要其才長于技閱而著述非當行也

樋口卜齋與余親厚仕令河越侯為京邸留守方正廉謹近時罕儔明和乙酉年病卒其在邸職三十五年對人唯曰未學雖有著作未嘗與人言題楊太真曰當時君寵起三千驚破霓裳花落天縹緲仙山何處是人間空自見金鈿殊有婉致卜齋少時學詩鈴木堯弼堯弼字俊良嘗仕某藩後辭祿放浪京畿卜齋為余誦其詩若干首頗有巧思而世絕不知由是

詩史

卷之三

三十三

思之遺珠棄壁何啻千百哉

僧翠巖住三秀院院在天龍寺中西南之隅嵐山近俯軒窗最為勝境翠巖以詩以書其餘雅尚韻事都下膏梁子弟嘖嘖稱之余嘗一過其房翠巖出生平詩稿示余小楷端正纖帙華整明和戊子某月日厨下遺火房舍悉燬爾時倉皇庫藏不閉圖書諸器玩都歸劫灰翠巖尋歸寂室是觀之詩文存亡亦自有數不必深罪長吉故人也

服伯和名天游號嘯翁又稱蘇門居士京師人家業纖造伯和以多病故不服其業以講說授徒其為學

詩史

卷之三

三十四

也專務博洽兼窺佛典性好論駁撰著頗多年垂半百以疾之故福急日甚遂以此役焉門人永俊平携其遺稿就余請檢校其詩雖及精細工夫氣格並合五言登愛宕山云平安西六鎮石磴幾千盤峰插層霄起雨分衆壑看鶴歸華表古僧住白雲寒時有仙輶度依稀聽玉鑾七言宿山寺云微吟曳杖此相尋纔到上方落照深倚檻寒雲歸洞口遠階暗水咽苔陰山房寧有人間夢溪月偏開物外心只為社中容酒客淵明一夜在東林

日本詩史卷之三終

日本詩史卷之四

平安 江郎綬君錫著

弟清 絢君錦  
男 悰 泉孔均 同校

關東古稱用武之地。猛將勇士。史不絕書。而文雅之士。不少概見。迄于神祖營建東都。置弘文院。設學士。職。文教與武德並隆。終成人文淵藪。羅山林先生。際會風雲。首唱斯文。於東土。芝蘭奕葉。長為海內儒宗。無俟曹邱生也。

詩史

卷之四

一

木下錦里。名貞幹。字直夫。又稱順庵。京師人。昌三門人。學成出仕。加賀侯。為其文學。憲廟聞其名。徵為侍講。於是從學之士日盛。才俊多出。其門卒私謚靖菴。名賢詩集載靖菴詩三十餘首。其中題楠子墓云。一心存北關。三世護南朝。又咏百日紅云。老樹千年綠。名花百日紅。二聯可謂巧警也。嗣子寅亮。名汝弼。號菊潭。寅亮子寅道。寅考詩並見熙朝文苑。室滄浪。名直清。字師禮。一字汝玉。別號鳩巢。東都人。幼而穎悟。西學京師。師事木靖菴。舉推為木門高第。初仕賀藩。文廟時。徵擢為東都學職。嘗著大學新

詩史

卷之四

二

疏。義人錄。駁臺雜話等書。莫非提起經義。維持名教者也。余嘗謂。經儒不習文藝。文士或遺經業。能兼二者。唯東涯滄浪二儒而已。其訓詁異同。不必論也。滄浪詩。五言古體。學陶而未得其自然。七言古風。五言近體。師法少陵。尚闢垣牆。七言近體。祖襲盛唐諸家。而往往出。明人選。蹊。若夫五言排律。學力與才氣相駕。豪健騰踔。寂為當行。今摘七言。雄拔者數聯。關中豪傑推王猛。江左風流起謝安。天上雙懸新日月。人間相看舊衣冠。天連滄海長雲絕。月滿大江灝氣浮。輦下衣冠尊五品。日邊花萼共三春。蘭省春傳紅葉賦。鳳池波動紫霞袍。薦賦何人逢狗監。承才幾處出龍媒。新井白石。名君美。字在中。東都人。亦木門高第也。文廟潛邸時。眷注已渥。繼統之後。遂以遷喬。賜爵五品。號筑後守。白石才無經濟。數參大議。其者撰。往往國家典刑云。若夫詩章。則有白石詩草。白石餘稿。余按白石天受敏妙。獨步藝苑。所謂錦心繡腸。咳唾成珠。嚙語諧韻者。索諸異邦。古詩人中。未可多得者。而今人貴耳賤目。不甚信余言。兩芳洲所著。摘牒茶話曰。韓人索白石詩草者。陸續不已。可見異邦人猶且



王之白石嘗和清人魏惟度八居七律八首以溪西雞齊啼為韻者請滄浪嗣響遂傳播京師京師文士微而和者數十人坊間梓而行焉白石覽之前作有與諸人和詩相類者因再作八首語無牽強押韻益穩又冬日過某家主人請詩白石求題主人書容奇二字示之白石解其意輒作七律一首蓋容奇者雪之訓讀主人書之以試白石白石已解其意故句句徵我邦雪一座服其敏警詩云曾下瓊鉞初試雪紛紛五節舞容閑一痕明月茅渚里幾片落花滋智山提劍膳臣尋虎跡捲簾清氏對龍顏盆梅剪畫能留

詩史

卷之四

三

客濟得隆冬無限難此一時遊戲雖不足論全豹亦可窺其天受之一斑或問余曰子極稱白石詩至白石蔑以加乎曰非也如天受誠蔑以加矣若夫揣摩鍛鍊尚有可論者要之天受之富吐言成章往往不遑思繹是以疵瑕亦復不鮮白石送人之長安絕句云紅亭綠酒畫橋西柳色青青送馬蹄君到長安花自老春山一路杜鵑啼四句中二句全用唐詩夫剽竊詩律所戒而鍊丹成金猶可言也以鉛刀代鑊錐將之何謂草色青青送馬蹄本臨歧妙語草色送馬蹄言春草承馬蹄以柳代草蹄字無著落殊為減價

此其一耳餘可準知

祇園伯玉名正卿後更名瑜號南海仕紀藩任職文學伯玉髫年受業木門有夙慧之稱一日宴集人或唱曰飛魚躍活潑潑令坐客為對伯玉以童子席末應聲曰光風霽月常惺惺眾歎其穎敏元祿壬申伯玉年十七會春分日自試其才自午至子賦行五言律詩一百首人或疑其宿構是歲秋分大會賓客午漏初下進請諸賓各命詩題對坐談笑信筆揮霍夜未半百首完成通計前後凡二百首梁繪爛漫而無一句雷同者滿座驚愕歎服焉於是其名播揚

詩史

卷之四

四

遠邇伯玉初在木門與松楨卿同甲子衆稱木門二妙後來伯玉名價益重世匹之梁蛟岩余按傳雲集載伯玉詩三十首詞采富麗蓋少時作晚歲漸刷鉛華而神氣融和殊可傳者而伯玉墓木已拱遺稿未出余未審何故近時學風輕薄僅學作詩則已災梓所謂黃鐘毀棄瓦釜雷鳴亦憤憤爾伯玉嗣子師援余嘗一再應酬詩也書也並似乃翁雨森芳洲名東字伯陽京師人其幼時習句讀之師為靖恭門人以故芳洲年十七八遂東就謁靖恭靖恭甚稱其才是時對馬侯將聘一書記聞木門多才



髦就而求焉。靖恭因薦芳洲，遂為對馬學職。余按徃，徃嘗唱復古傲睨一時人士，特於芳洲稱揚嘖嘖，殆不可解。何則？芳洲說經崇信程朱，至老無變，而徃徃勤排程朱。芳洲文宗韓歐，徃徃必曰東漢以上。芳洲不好明詩，摘牕茶話曰：吾案上所置詩集，以陶淵明為首。李杜為第二，韓白東坡為三。與徃徃論詩，誠冰炭矣。余久疑之，近得其說，已有別論。摘牕茶話又曰：京師風俗，各土地神祠祭之日，遠親故舊互相延請。吾少年時，揚言曰：殊覺其煩也。柳滄洲在坐，正色曰：一年一次團欒叙闊，人情於是乎萃矣。何謂煩乎？吾

詩史

卷之四

五

為之南顧。余謂滄洲誠長者之言，而芳洲稱之且自戒失言，亦長者矣哉。近時學風輕薄，藝苑絕無此等人，可歎耳。芳洲長于文，而不長于詩，晚年常對人曰：吾無詩才，生平所作無慮數百千首，而可取人者不過數十首也。長子乾登沒，孫連以謹嚴稱，亦已沒。次子贊治，出繼松浦氏，其子小字文平，弱齡來遊京攝，數過余家，殊見才穎。今亦為學職云。

松浦禎卿，名儀號霞沼，傳雲集曰：禎卿播州人。年甫十三，對馬侯見以為奇才，請靖恭授業，學成為對州書記。摘牕茶話曰：禎卿十四歲時置詩草於案上，南

草壽取而覽之，吟誦不已。既而聞其自作，大驚曰：吾謂抄寫唐詩對馬侯聞之，乃使其受業本門，併考二書，殊有可疑。十三四童子，何以自播州踰海遠抵對州？被侯之眷稱，或從父兄在東都出入朱郎者，然而草壽長崎人，則亦胡以就其案上覽詩草？此必有其說，要之風慧可知也。惜乎傳雲集載其詩僅四首，餘絕無覩。禎卿沒而無子，以芳洲次子為嗣云。

留健甫，名順泰，對州人。本姓阿比留氏，後更姓西山。為本藩學職，亦本門弟子。勤苦讀書，才思敏贍。元祿戊辰年二十九病將死，悉焚詩稿曰：吾輩詩文何用遺？為靖恭哀惜，為製碑銘云：其詩如竹外無家群鳥下，松陰有寺一僧還。殊佳。摘牕茶話曰：對州平田茂

詩史

卷之四

六

在朝鮮有詩曰：江風送人語，隔岸有歸舟。金泰敬者終身吟賞，平田茂他無所考，因附載于此。

南部思聰，名景衡，號南山，長崎人。本姓小野氏，少孤為南部草壽所子畜，因冒其姓。草壽不詳名字，草壽蓋其稱號。後來京師講說，自稱陸沈先生。天和中為富山侯文學，元祿戊辰年卒。思聰嗣職，思聰初在長崎學詩於閩人黃公溥，抗人謝叔且。後從義又在越中，遂遊學東都，受業本門。傳雲集曰：子聰為人溫恭

篤謹精通經史。文才富贍。身既多病。自選詩文若干首。名曰喚起漫草。正德壬辰卒。于越中年五十五。又摘牒茶話曰。韓人吳南老。嘗覽子聰懷環翠園詩。確歸塞北長。為客梅發。江南時憶人。句極口稱贊。云云。按環翠園在越之富山。即子聰所居。子聰在東都懷之作七律十首。其中佳句實多。牒容西嶺多看雪。圍學東陵半種瓜。生前不負十千酒。死後何須八百桑。細雨紅桃應委徑。輕烟綠竹定過牆。啣花鳥近書牕語。煮茗泉環竹塢過。欲見春山常洗竹。因憐夜雨亦栽蕉。思聰三子。長即國華。

詩史

卷之四

七

南部國華。名景春。稱權裁。思聰長子。聰慧絕倫。年甫十三。從父赴東都。遊東轎山。作五言古風一百韻。為世所稱。年十八。喪父。哀毀過禮。奉母至孝。友愛二弟。行已以道。其為學博通經史。又慨然有大志。山何喪母氏。次弟亦山。國華不堪悲感。遂以享保丁酉四月二十一日病卒。年僅二十三。季弟亦矢。南氏絕祀。傳雲集載國華除夜呈白石排律一百韻。氣象軒昂。珠璣璀璨。又妙見山寄題七律八首。亦復雋拔。使其天假之以年。紀與蛻岩南海。馳逐于藝苑。未知鹿死誰手也。天之忌才。其將謂何。且德者未必有才。而才子

往往無行。國華有絕世才。而孝悌恭謹。可謂全人。二弟雖童髦。亦已稱難弟。乃翁又篤恭著稱。不啻著撰。何以死喪相尋。遂至祀絕。古曰天與善人。竟

原希翊。田信威。二人。竝靖恭門人。靖恭薦諸紀藩。希翊本姓下山。有故冒外父姓柳原氏。名玄輔。號望洲。在紀藩著大明律譯解。信威名文。其先朝鮮人。壬辰亂。年尚幼。我邦兵士岡田某者得之。遂冒姓岡田。信威則其孫云。傳雲集載二人詩數首。

詩史

卷之四

八

年二十餘。始學於木門。刻苦讀書。行義甚脩。家貧。并日而食。晏如也。然則其人最可稱。九月十三夜對月排律。亦自不俗。

深見子新。名玄岱。號天鵲。長崎人。以文學善書稱。初以醫術食糈於薩國。文廟初聞其有文錄用。其詳見傳雲集。余謂天鵲以文學榮達。今閱其詩。無甚佳者。何也。天鵲二子。松年龜齡。並有材學云。

三宅用晦。名緝明。號嶺瀾。京師人。以文章聞。常藩聘置其史局。文廟時取補東都學職。傳雲集所載寄京師人詩中聯曰。三更燈火汲心市。十里絃歌岸上

樓杜父魚肥打可舉。牛王廟古葉將秋。以其能偶易入世耳。膾炙一時。余謂三四為攝之安治川作則佳矣。鴨水涓涓曾不容刁波心二字。殊為無謂。第六句。從事對偶。粘景不切。牛廟六月。羅穀相摩。香風撲鼻。何曾有此淒涼。觀瀾又有咏倭刀詩。亦見停雲集。我邦人咏我邦刀。題曰咏刀可也。詎用曰倭。宋明多此等詩。微而作之。則曰擬咏日本刀。猶可也。觀瀾有重名。而有此破綻何也。或曰。觀瀾亦木門之人。服部寬齋前卷已錄其人。今閱停雲集。寬齋名保庸。字紹卿。東都人。強記力學。且以孝友聞。文廟在藩

詩史

卷之四

九

之日。徵為侍讀。云云。停雲集載其詩三首。頗清暢矣。寬齋弟維恭。名愿。號摘洲。同伯氏錄用。停雲集載九月十三夜作首尾句稱可錄。

土肥允仲。名元成。號霞洲。東都人。生而聰悟。及其能言。授書即成誦。六歲作詩。文廟潛邸之日。召見。試講論語中庸。論辯甚明。且命書其所賦詩。書法亦可觀。于時元祿癸未秋八月。允仲年十一。云。停雲集記允仲事如茲。所謂神童不啻也。余覽停雲集。所載詩亦當行。其中贈京師故人小絕曰。一別音書斷。相思秦地秋。欲將雙淚。寄墨水不西流。寧存古意。

真子明。都孟明。二人始末。併其詩見停雲集。子明名璋。殊有才思。云。所載詩一首。頗佳。

田伯鄰。姓益田。名助。號宦樓。東都賈人。世業賣藥。伯鄰少志學。師事白石。遂以詩聞。又以喜客。其名益著。余閱其詩。無甚佳者。要緣諸名士不托耳。梁景鸞有贈宦樓書。及宦樓集跋。取子遷。有宦樓傳。今併考之。其人則實可傳者。京攝雅多大賈。而無一人可比擬。近時攝有木世肅。或曰可當宦樓。余悉世肅為人。不同宦樓。宦樓以豪。世肅以雅。宦樓用率。世肅勤博。宦樓一飲數斗。世肅勺飲不勸。宦樓唯好作詩。世肅稍

詩史

卷之四

十

多岐矣。宦樓喜客。無客不樂。寧重文學之士。客必得文士。不得則雜賓。俗客隨至而歡。世肅亦喜客。無客亦樂。非不重文學之士。而兼喜諸好事之徒。

僧法霖。號蘭谷。本小野氏。東都賈人。性恬世利。唯詩之耽。有兒尚幼。出妻獨處。後遂為僧。停雲集多載其詩。結構精密。佳篇不數。一聯隻句。殊多響亮。今錄其數聯。舟中夢破湖天白。馬上望迷驛樹青。一水人遙。梅耐折。三更夢斷。月相親。鸞鳳長想。高人嘯。鸚鵡徒憐。屬士狂。花裡書牕三月雨。松間禪榻五更風。只今天下劍無氣。依舊世間錢有神。



僧若霖。字挑溪。相州人。數往來京攝。東涯盡簪錄曰。霖善詩。兼能書畫。海內文儒之家。參謁殆遍。云云。今覽其詩。實出於法霖之下。如題某池亭詩。後聯曰。釣罷孤舟蘋渚繫。魚稀隻鷺蓼汀眠。前句已係魚事。亦唯一意。餘可以推矣。

梁景鸞。名邦美。號蛻岩。絳州人。少遊學東都。天才巧妙。前無古人。後無繼者。少時負才不閑小節。故筮仕數跌。屢遇困阨。家徒四壁。而意氣不少撓。嘗以不能買書為題。其末句曰。惠車鄴架滿天地。誰信空拳猶突圍。不知者以為妄且傲。而其咏雪詩序中亦曰。余

詩史

卷之四

十一

頻年窮甚。書簾中除四子外。有詩韻一冊。徐文長集半部。夫空拳突圍。果非虛語也。余謂爾時東都雖人才如林。除白石南海外。諸子長鎗大戟。恐難敵景鸞空拳。景鸞後仕。加納侯。加納侯。今松本侯即是也。止何亦辭去。東後為赤石儒學。赤石有海嶽之勝。加之鄰於攝。近於京師。其業漸以廣。被遂有終焉意。於是湖海之氣日銷。溫潤之德月進。余弱齡在赤石。始謁其人。既已睹睹然矣。而薰然和煦。毫不修邊幅。且天性愛才。循循誘獎。不以所長加人。長子小字萬虎。才氣似乎乃翁。以疾廢焉。次子即今嗣職者。余按蛻岩

詩體屢變。為唐為宋。元為初明。為七子。為徐文長。為袁中郎。為鍾譚。贈余弟詩。有我初御風翔。晚而履平地之句。而亦唯畢竟為一蛻翁之詩云。余謂凡作者患在才者。不勤敲推。勤者未必有才也。蛻岩有天才。而極力鍛鍊。何以知其然也。蛻岩與余兄弟交稱忘年。贈答殊多。是皆蛻岩赤石稅駕之後。考其年紀。蓋六十以後矣。厥後蛻岩集出。就而閱之。則往往改二三字。而改者更有理致。乃知八十老翁孜孜兀兀。潛思字句。宜其能造詣精微。今讀其集。譬猶上崑崙之邱。步步是玉。入梅檀之林。技技是香。詩至於此。宜無遺論。而猶有未盡善者。何也。蛻岩用才太過耳。張茂先謂陸士衡曰。人常恨才少。而子更患其多。余於蛻翁復云。

詩史

卷之四

十二

桂山彩岩。名義樹。字君華。東都秘書監云。余在赤石。梁景鸞數稱彩岩詩律精工。因知其作家。後來信州湖玄岱亦盛稱彩岩。乃益知其作家。於是歷閱諸選。玉壺詩稿。載八島懷古七律二首。崑玉集。載擬金陵懷古七律一首。熙朝文苑。載贈人七絕二首。通諸選所載僅五首。其他無見。京攝年少。往往不知桂山。為何人。蓋數十年來。東都藝文播傳于京攝者。特護



園諸子。其他雖鸞鳳吐音。寥乎無聞。亦可見一時風氣之偏。而彩岩重厚。不迫名者。亦可徵耳。

物徂徠。以傑出才。駕宏博學。不能守舊業。遂以復古創立門戶。其初一二。雖俊從。而鼓吹之終能。海內翕然風靡雲集。我邦藝文為之一新。而才俊亦多出其門。至今講說之後。藉口徂徠坐臯比。而驕生徒者。比比不數。若夫經義文章。余有別論。但徂徠嘗著唐後詩絕句解。海內由是宗嘉靖七子喜之者。以徂徠為執苑之功人。非之者。或以為長輕薄。要亦未之深考耳。余謂明詩之行于近時。氣運使之也。請詳論之。夫詩漢

詩史

卷之四

十三

土聲音也。我邦人不學詩。則已。苟學之也。不能不承順漢土也。而詩體每隨氣運遞遷。所謂三百篇。漢魏六朝。唐宋元明。自今觀之。秩然相別。而當時作者。則不知其然。而然者。氣運使之者。非耶。我邦與漢土相距萬里。劃以大海。是以氣運每衰于彼。而後盛于此者。亦勢所不免。其後于彼。大抵二百年。胡知其然。懷風凌雲二集。所收五言四韻。世以為律詩。非也。其詩對偶雖備。聲律未諧。是古詩漸變為近體。齊梁陳隋漸多其作。我邦承其氣運者。替其年代。文武天皇大寶元年。為唐中宗嗣聖十四年。上距梁武帝天監元

詩史

卷之四

十四

年。凡二百年。弘仁天長。鬚鬢初唐。天曆應和。崇尚元白。並黜勉乎百年之後。五山詩學之盛。當明中世。在彼則李何王李。唱復古於前後。在此則南宋北元。專傳播於一時。其距宋元之際。亦二百年矣。我元祿。距明嘉靖。亦復二百年。則七子詩。當行於我邦。氣運已符。故有先于徂徠已稱揚七子者。姑所備忘錄曰。李滄溟著唐詩選。甚契余意。學詩者舍之何適。又曰。謝茂秦洞庭湖。徐子與吳明卿岳陽樓作。氣象雄壯。與絕景相敵。殆可追步。少陵浩然二氏。永田善齋贈徐雜錄。亦論及七子。而爾時氣運未熟。故唱之而無和者。迄徂徠時。其機已熟。白石滄浪。晚岩南海。大抵與徂徠同時。並非賈護園之餘勇。者。而其詩雖曰宗唐。亦唯明詩聲格。故云氣運使之也。繇是論之。則其或繼今者。雖數百年可知也。或謂余曰。子之論。既往似矣。其繼今者何如。曰。余聞明詩四變。李何一變。王李二變。袁三變。鍾譚四變。逾變而逾卑卑焉。軍後有陳卧子出。著明詩選。吹王李餘燼。而氣運既替。不能復振。清人議論不一。櫟下書影。訶斥王李為小兒語。歸愚別載。紹述卧子。少別機軸。又有專宗晚唐。雖參趨異途。以余觀之。清人篇詠。大抵諸家相似。其續替

雅柔頗似于元季明初作家。較諸近時所謂明詩者。無剽竊雷同之病。而其氣格則稍淡弱矣。當今京攝才髦所作。往往出于此途。亦氣運所鼓。不得不然而遐州遠境。至今猶尸祝七子者。氣運推移。有本末有遲速。猶我邦之於漢土也。或曰。鬱微但徠。則明詩之行可以漸也。但徠才大氣豪。言多過激。故其行也驟。而其弊亦速。余按但徠詩有二體。初年作。瘦勁雄深。後來影響李王。動作高華之言。要之詩非其所長也。但徠門下。稱多才俊。其顯者。春臺南郭之外。猶數十人。可謂盛也。然細考之。則其中大有軒輊。蓋大名之

詩史

卷之四

十五

下易成名耳。況赫赫東都。非他邦比。或攀龍附鳳。歛託禁臠。或曳裾授簡。長沾侯鯖。假虎威者。附驥尾者。青雲非難致也。加之邦國士人。各從其君。往來結交。同盟遍滿諸藩。褒同伐異。鼓盪扇揚。靡不屆。是其所以顯赫一時也。退察其私。則羊質而虎文。名過其實者。亦不鮮。歟之洵之後世。自有公論耳。

滕東壁。名煥圖。先子諸子。執謁但徠。所著有東野遺稿。其詩在護園諸子中。雖華藻不競。而渾朴可稱。縣次公。名孝孺。號周南。周防人。師事但徠。初次公。又良齋。為長藩文學。次公嗣其職。長門泮宮。曰明倫館。

次公司。其館事至今。長門多才學之士云。余謂近時文士得行志。莫若次公。其著作有周南文集。

太宰德夫。名純。號春臺。信州人。初同東壁。後學中野。為謙。揭謙名繼善。字完翁。長崎人。嘗任關宿侯云。後東壁從遊但徠。數書招德夫。遂歸于物門。其學業行事。詳見于服子遷所撰墓碑。松君修所錄行狀。唯斯偏心。往往為人訶斥。而以余論之。則春臺雖偏窄。自信甚確。是以議論透徹。多痛快語。自有過人者。其人以名教自任。而詩亦可觀。嘗著文論詩論。余初讀之。殊歎其持論平正。後讀春臺文集。與二論抵牾者。有所謂當局者惑。歟不然。則初年作耳。纂輯其集者。不刪何也。其詳余有別論。

詩史

卷之四

十六

服子遷。名元。喬號南郭。所著南郭文集。自初編至四編。並行于世。蓋但徠沒後。物門之學。分而為二。經義推春臺。詩文推南郭。余按我邦詩。元和以前。唯有僧絕海。元和以後。漸有其人。而白石蛻岩南海。其選也。今以南郭較夫三子。南郭天授不及白石。工警不及蛻岩。富麗不及南海。而竟難為三子之下者。何哉。操觚年少。悟入此關。始可與言詩耳。蓋白石天授超凡。辭藻絕塵。誠不可及。若就其全集論之。清雅秀婉。絢

彩溢自而悲壯沈鬱。渾雄蒼老者。集中無幾。南海唯是一味綺麗。後動超脫。卻屑屑乎纖巧矣。蛻宕天縱之才。奇正互用。變幻百出。神工鬼警。孤高獨立于古今之間。惜乎用才太過。如前論者。蓋用才太過。有傷風雅。譬之士庶陪侯家。燕席有時笑。謔歌唱。亦無害也。太過則有類俳優。南郭能守地步。不求勝於一句一章。而全功於一卷一集。今閱其集。初編瑕類頗多。二編十存二三。三編四編寂粹然矣。乃知此老剪裁老益精。到因謂作者無才則已有小才。而欲大用之。醜態畢露。寧可戒也。大才大用。誠為快絕。而僅欲快

詩史

卷之四

十七

絕。易侵三尺。十分之才。每用六七分。正是詩家極至工夫。南郭能解此義。百尺竿頭。不肯進步。反是難至地位。南郭次子名恭。字愿卿。幼稱才穎。年僅十九而沒。有遺稿名鍾情集。其中聞莊子譙登芙蓉。以寄詩中聯曰。不啻登臨堪小魯。更知呼吸近逼人。人間長仰三峯雪。海上回看九點煙。可謂翩翩有逸氣。又送客絕句曰。秋風颯颯雨紛紛。正馬孤舟兩岸分。萬里江山如黛色。相望能不數離群。亦佳。南郭晚年撫西仲英為子。亦已沒矣。其著作余未覽之。平子知名玄中。號金華。嘗有詩贈服子遷曰。白髮如

絲。混弟兄。中原二子奈虛名。子扣之不自量。誠亡論耳。世人亦多與子遷並稱。可謂子扣之章。子扣詩有太佳者。有太不佳者。太佳者。體格雄華。金石鏗鏘。太不佳者。淺陋支離。剽竊陳腐。如出二手。亦唯負才不能精思耳。

高子式名維馨。號蘭亭。年十七喪明。專志詩詞。生平所作殆萬首。貴介公子爭延講詩。名聲藉甚于一時。其詩勇裁整密。音韻清暢。雖不及白石蛻宕南郭等大家名家。在小家數則可稱上首者。

島錦江名鳳卿。字歸德。東都秘書監。越雲夢名正珪。

詩史

卷之四

十八

字君瑞。並名重于物門。護園錄稿載其詩錦江吳宮詞遊獵歌。並合調矣。

管麟嶼本姓山田。名弘嗣。字大佐。幼有神童之稱。年十三。德廟召見。尋為博士。童時遊京師。參謁諸儒。爾時余尚幼。侍先人膝下一見之。今不甚記。錄稿載其詩二首。

石叔潭名之清。東都侍衛臣。云亦物門之人。

土伯暉名昌英。守秀緯。名煥明。二人亦有重名。並業醫。伯暉仕小倉侯。秀緯仕大垣侯。錄稿所載秀緯牕對芙蓉含雪色。搥當滄海抱潮聲。萬家榆柳傳新火。



千里鶯花背舊程。太佳。吳宮怨。小絕亦佳。

芙蓉萬菴。魯京大潮。二僧殊與物門諸子相歡。詩名高于一世。我邦釋門詩。元和以前。推絕海義堂。元和以後。推萬菴大潮。余讀江陵集。又讀松浦集。二僧工力大抵相當。而如才華。則萬菴似進一籌。

源京國名義治。號華岳。物門諸子數稱其人。謂當作家。而諸選所載。余未覩其佳者。若夫拔美仲名。價不高。而錄稿所選。卧閣青山遠。彈琴白日長。山對柴門靜。海連曠野平。故園春欲盡。絕域草初肥。殘夜傳刁斗。頻年卧鐵衣。風裁同卓魯。治行擬龔黃。又湖海論。

詩史

卷之四

十九

交漆淨侯。蓬蒿卧病。易蹉跎。卻是諸合。

莊子謙。姓村田。名允益。豐後臼杵人。仕本藩。祇役東都。受業南郭。負才好奇。嘗登富嶽。作芙蓉記。凡民庶上。嶽者必齋戒。喫素。而後敢上。且相戒不許語山中事。疏子謙作記。始偏造化之秘。以何子謙暴卒。俗輩以為得罪。嶽神。余殊愛子謙秋懷二聯。曰。青山入夢松蘿月。秋雨關心水竹居。却恨西都題柱過。且思南畝帶經鋤。深婉情至。恨不見他篇。

石子游。姓石。名。初名正。字仲綠。後更名藝。字子游。自稱筑波山人。尾張人。遷住東都。亦南郭門人。放蕩。

好酒。不能為家。而以詩才雄豪。稱于一時。嘗遊京師。作詩曰。散衣劍入西京。自比能文陸士衡。誰見篇章焚筆硯。豈將詩賦讓簪纓。一時羊酪無人問。千里萼羹動客情。洛下書生誇博物。寥寥未聞茂先名。其狂誕大率類此。玉壺詩稿錄子游詩。殊多佳。往神氣軒翥。筆端活動。若濟以精細。則可為詞壇旌門惜乎其人輕躁。下筆亦復踈率耳。

護園錄稿所載五絕。松子錦。春意臘雪二三尺。門前不可掃。纔被春風吹。江上盡青草。又古別離。送君黃河湄。黃河幾千里。我思長於河。思人終不已。七絕。平

詩史

卷之四

三十

子彬。登長興山云。長興山色秀清秋。日抱摩尼寶塔浮。湘水如環歸大海。連天帆影不曾流。僧了玄。春日遊墨水云。風花處處送江春。古渡蕭條芳草新。為是王孫肯遊地。縱無白鳥亦愁人。江子園。秋宮怨云。琪樹西風白鴈過。夜寒如水渺天河。自將紈扇憐秋色。不問昭陽月影多。並是警絕。自可不朽。其餘作者。當重考補遺。因不具錄云。

日本詩史卷之四終



日本詩史卷之五

平安 江邨綾君錫著

弟 清 絢君錦

男 棕兼孔均 同校

品藻之難也。銜賣者其声遠播而其實未副焉。韜晦者其文足徵而其名每湮焉。生其土而商榷其土藝文。猶且稱難得其要領。何況他邦人士所謂隔靴搔癢不啻也。余讀淺寄臣所輯崑玉集。木實聞所著王壺詩稿。張藩藝文管見一斑。但二集撰次無倫。且不詳作者鄉貫。張人與他邦人混渚不可分別。則余所論列訛謬固當居多耳。

余少年時就友人案上閱防邱詩選。收錄張藩諸家詩。今茫不記募諸書肆。往往不知其名。殊為悵悵。扶桑千家詩載清水春流詩。亦未詳其人。

木公達名實聞。余於張藩人士無所通識。今據崑玉王壺二集。蠡測之。公達在張藩或是南面詞壇。傲睨諸子者。詳其詩體。公達必謂吾能探開天之正源。駕嘉萬之逸格。然之以廣博之學。出之以縱橫之才。意之所欲。筆必從之。噫。如此則南郭蜩岩其猶病諸公。

達無天受之妙。而強欲籠蓋萬象。是以其詩磊砢而魚光澤。蒼蒼而無倫理。

井鼎臣本姓千村氏。号夢澤。王壺詩稿載其詩六十餘首。大抵與公達伯仲。如曰憑驢彈鋏泣宋王至秋悲。直是蒙求標題。且驢彈鋏歌非泣也。此等之詩宜無錄。若夫崑玉集所載。喜今井生過訪五律。歲杪書懷一律。頗為勻稱。要之急于名而不遑自擇耳。

千村力之名。諸成号我湖。又号笠澤。井鼎臣長子也。崑玉集所載。當少時作。然其天授才敏。大逾乃翁。五言生白憐吾室。草玄避世人。雀羅將設處。鳳字孰題。

詩史 卷之五

門溝水通籬後。炊烟橫竹邊。未值西帰日。空為東武吟。客心驚短髮。官况戀扁舟。本識地難縮。逾增鄉國愁。七言西風拂檻秋如水。中夜懷人月在霄。病來空憑鳥皮几。夢裡重鳴白玉珂。世上虛名任呼馬。塵中浪跡總亡羊。頻年風雨徒搔首。何地鶯花更解顏。等下字有法。語亦清麗。其餘絕句。殊有佳者。

井出識明。名知亮。号鳳山。力之次弟。其曰醉後振衣花亂落。庭陰倚杖石崔嵬。移步山先生。杖屨倚樓海色映衣襟。病來耽句瘦逾甚。醉後癡狂意却寬。才調雁行伯氏。崑玉集載李弟居卿幼時詩。鼎臣有此三。

子。自足烜赫藝苑。

木君恕。名貞完。字蓬萊。尾張人。嘗客遊京師。後赴東都。講說為業。其詩較之公達。鼎臣。頗占地步。而雋句警聯。亦復不多。若夫崑王集所載。中秋無月云。金莖雲黑。光猶動。紫陌燈明。夜未深。聲華可挹。但金莖漢武所設。我邦無此。或曰。唐明詩中。多用金莖。用之何害。殊不知唐玄宗。明世宗。酷好神仙。詩人假借。以詠時事者。此等之事。余於授業篇已詳論之。

沖野孝寬。字南溟。田中尚。章名采菟。字雁宕。晁涵德。名文淵。字玄洲。清水彦八。名虎。賀安長。字精齋。五人

詩史

卷之五

十三

並張藩人。其詩見熙朝文苑者。不過一二首。姑錄其姓名。以備重考。

松秀雲。亦張藩人。熙朝文苑載其詩七首。頃日大江禪主。刻玄圃集。贈余一部。有秀雲序。斯知其人無恙。老益把弄翰墨。

崑玉玉壺二集。撰次無倫。余已前論其張人。與他邦人相混。不可分別。則姑從二集所錄。以論及一二。若夫張人。與不張人。姑置之耳。伊長卿。名章。字崆峒。玉壺詩稿載其詩二首。歲晚寄井良重七律。雖勦竊嘉靖七子。而漸近自然。但第五句。芳樽萬里河山遠。不

免日上文王。之謗。若作芳樽。一夕則佳矣。又贈人小

詩。東海多秋思。況逢夜色新。遙知莫水月。不照去年人。雖無奇警。亦自可誦。德良。春城寓目。華瞻可觀。澤元喜。寄蘭皋夢澤二子七律。頗能結構。又留別諸子。絕句云。落魄無人不可憐。一句太是悲愴。惜乎結不成語。固長祐咏雪云。一庭地白。非關月。萬樹花明。不待春。興象甚肖。惜乎首尾不稱。福昌言九日作。中南來池亭五律。尾有字。七絕二首。竝占得地步。其餘天信景。磯長。博鈴子都。嶺文谿。出敬。野俊明。關德亮。元文邦。藤本弘。江子永。林文清。喬惟寧。葉日洞。山

詩史

卷之五

四

泰信。山芝岩。池子圭。仲文輔。并天目。倉立大。關範良。須玉澗。谷秀實。丁忠利。竹山東。馬意信。村馬六。筒恒德。森東。菴蒲。梧。陸知規。吉大。壑。田仲文。源基。長源。長英。平蘭。溪等。其中不無玉石之辨。而余未詳其人。且二集所載。人不過一二篇。則亦俟重考云。崑玉玉壺二集。所載僧詩亦夥。今論其一二。僧寶性。寄夢澤云。伏枕青春日。聞君解纜歸。鳥窺移地。童待映花扉。探勝支公馬。舞雩曾點衣。昨宵芳草夢。相引到漁磯。頗華暢矣。興善寺分韻作亦佳。據二詩。則足稱方外作家。

僧宜牧詩。嘉靖七子之末響。極意勦襲。然其中自有佳者。宿圓通寺云。古寺鐘聲度翠微。階庭柏葉亂斜暉。巖中說偈花為雨。定裡忘機月照衣。巢鳥閑窺雙樹入。香烟細結五雲飛。上方遙出藤蘿外。杖錫探奇信宿歸。首尾勻稱。足稱合作。

僧惠仁詩。崑王集載之殊多。其京館雜詩中云。晚來比屋絃歌起。疑是諸天贊我聲。可謂狂妄。又曰。此中無不有。唯少天女侍。雖用維摩事。亦復甚矣。近時學者。動曰。僧詩不可有香火氣。余則曰。僧詩不可有香火氣也。又不可無也。蓋有香火氣。以法害詩。無香火

詩史

卷之五

五

氣。以詩累德。僧家學詩者。宜了得此義。

尾張東隣參河。在參河。則扶桑千家詩載村田通信詩。余未詳其人。近時源京國仕刈谷侯。既已前錄岡崎候儒學秋子帥名。以正所著有澹園初稿。余未見之。又田原候太夫雍子方有奕槐詩稿。子方姓鷹見。省見為鷹。又惡鷹字。不雅。更為雍姓者。名正長。奕槐其号。嘗與護園諸子歡。是以詩名著聞。余謂護園諸子除服子遷外。孰不勦襲七子者。而莫甚于子方。如曰。薄官天涯耽濁酒。故人江上感綈袍。比比是也。要之以藩國太夫。有此文。雅可稱耳。

從參河以東。五州為遠。為駿。為豆。為相。父人才子。意謂當衆。余也孤陋。無所聞見。則不得不徵史之闕文。上野。下野。上總。下總。安房。五州。猶夫五州。

安房東為常陸。常藩當中納言義公時。儒術文藝之盛。至今人稱東平之賢。無俟余言。當時諸子詠言。必有可觀可傳者。但常藩與京師相距隔遠。所謂風馬牛不相及者。茫乎不可考索。若夫朱子瑜。余已前錄扶桑千家詩。載安積覺內藤貞顯。大串元善。青野叔元。一松拙忠。石井收。內藤延春。安藤為明。名越正通。人見野傳。清水三世。相田信也。白井信胤等。十三人。

詩史

卷之五

六

同咏菊詩各一首。蓋陪宴授簡之作。一時文雅可想。安積覺字子先。夙聞其名。所著有澹泊文集。余未見之。其餘未詳其人。又鶴飼金平。栗山伯立。森尚謙。三人亦常藩學職。金平名信勝。石齋長子云。

常陸東北為陸奥。陸奥大國。大小藩府無慮二十。而仙臺為大。余聞藩中以儒業世祿者有十數人。而其父輩無所聞見。會津亦大藩。往時山崎闇齋講學其地。至今人重經業。如其詩章亦無所聞見。森山常藩支封。夙以好學聞。藩中或多作家。若夫本朝詩集。可謂盛舉。余嘗過書肆。暫時寓目。其所收載京攝作者。



殊有可笑。所謂鸞鳳伏竄。鳴梟翔翔不啻也。亦唯距  
京攝絕遠。無由物色耳。今余論及關東。胡以異此。為  
之可登大噓。松前僻在海外。與蝦夷接壤。或曰。陋如  
之何。不知其地富庶。政寬俗朴。為一樂土。往者富仲  
達傳。松前候命。請詩於余。又松前醫生。來學京師。染  
指藝苑者。前後不斷。則其地頗嚮文雅可知也。從陸  
與傍北海。而西則有出羽。有越後。二州亦廣大。而其  
藝業。未有所徵。佐渡固亡論耳。

詩史

卷之五

七

本廓然矣。乃有湖松江在。松江姓多湖字。玄岱少時  
從學桂義樹。能詩能文。兼工臨池之伎。松江父字元  
泰。號岩萬菴。集中稱湖栢山是也。栢山父稱玄甫。至  
松江三世。以醫仕。松本侯而專。以儒術文藝著。稱焉。  
松江尚氣節。慚食糗於方伎。侯察其意。今春使松江  
嗣子玄室。代松江為侍醫。更命松江為儒學教授。蓋  
特恩云。  
飛驒在信之西北。在萬山中。地出良材。如高山府。号  
為殷富。俗頗事伎藝。而學事無聞。東涯益簪錄曰。先  
人講學時。弟子無國不至。唯飛驒。佐渡。壹歧。三州人

不至。其土風可知也。然客歲余遊越中。高山人某。因  
富山渡邊公庸。請詩於余。斯知其土人近稍嚮文學  
飛驒之北。即越中云。

詩史

卷之五

八

彼也。少年逸氣。漫為大言。恐終不讀書。李贄詩。山居  
云。結廬白雲裡。白日亦堪眠。啼鳥時驚夢。山花落枕  
邊。又過岡子。龍奮居有感云。春林鳥返夕陽斜。終日  
空關叔夜家。唯有隣人吹玉笛。荒園滿地落梅花。李  
贄伯父。佐伯子。挂名。望往為富山候文學。已沒云。士  
明。天授不及李贄。而罷勉讀書。潛思敲推。不懈有成。  
能登在越中西北。近時僧環空。出自其地。為僧金龍  
徒弟。從師在京師。弱齡好吟哦。頗有詩才。一朝短折。  
有遺稿在。

加賀在越中西。余遊越中。路出金澤。決々大都會哉。



魚物不有如其藝文。但未遑考。往時木靖泰室滄浪。並為賀藩文學。已前錄扶桑千家詩。載平岩仙桂詩。余未詳其人。

越前。在加賀西南。自余先太父。以及兄弟。辱越藩文學。余恐事涉不敬。因不論列。而余弟數稱清圓寺瑩上人。信義粹然。且好詩。越前南為美濃州。

在美濃。則岐阜最稱富庶。三十年前。學詩於余者。有十數人。追余為吏職。都絕音耗。唯山田大藏一人。通問至今。其人於詩頗有見解。時見合調大垣亦一都會。如守秀緯。已前錄。又谷大齡。田吉記。二人詩見崑

詩史

卷之五

九

玉集。嶺三折。鈴木藤助。二人詩。見熙朝文苑。並美濃人云。美濃之西南為近江。

近江。文雅必推彦藩。有龍草廬。野公臺。二人在。又往有澤村伯揚。雖其人沒。遺稿行世。伯揚名。維顯。稱宮內。号琴所。享保中人。其詩雖乏藻繪之美。鏗鏘之音。而清澹雅整。足稱作家。五言律最當行矣。早行中聯云。林聒棲禽散。江平宿霧流。鐘殘黃葉寺。露滿白蘆州。江之森山。有宇彦章。時時往來京師。名聲顯著。日野邑。則有建達。夫少時頗稱才穎。而數奇輒軻。糊口方伎。遂廢吟哦。可惜。下迫村。則有柚木伯華。為仲素

兄。好讀書。少時從學義兄青郊先生。辯博且能詩。

若狹。在近江西北。千家詩。載宮腰歷齋詩。余不詳其人。厥後有小栗霍臯。在小濱。素簫一鄉。文雅。余嘗覽

昆玉玉壺二集。所載佐元凱者。詩甚佳。因詳其人。乃知其為霍臯。蓋霍臯。少時有故客寓于張。尔時變姓名。称佐々木才八云。其詩雖蹈襲嘉靖七子。而天授

自富。鑪錘有法。是以往往有合調。登後瀨山云。峯回徑仄。石梯懸。杖屨飄飄。度碧天。萬頃海波。逐越。迥。兩行驛樹入江連。孤城鐘動寒雲外。極浦鳥還落日邊。臨眺自堪銷世慮。何勞燒煉學登仙。小濱以霍臯故

詩史

卷之五

十

至今言詩者。衆土之豪。称組屋者。數百年之家。今當戶者。名翰。字子鳳。博涉群籍。詩才殊雄。其人亦奇。又吹田定孝。學詩於余。歲時不懈。漸入佳境。若狹西南為丹波。

丹波。則扶桑千家詩。載人見卜幽詩。未詳其人。近時龜山侯太夫。多好文雅。若夫松崎白圭。詳于服子遷。久今嗣職者。君修。文辭益蔚。名聲煥發。篠山有儒學關士濟。

丹後。則宮津水上士。遜最可傳者。子遜名謙。自幼好讀書。能詩。能書。其人篤恭。季世無倫。今既八十餘歲。

余恐子遜操行終泯沒。近為著傳略。又有三上宗紀為士遜詩友。亦七十余云。

自丹後以西。但因伯雲石隱六州藝文。未有既考。雲州。抵井源藏著世說考。引證精當可嘉。近覽其絕句數首。詩或非長技。

山陰山陽二道。到長門而盡。長門南北西三面濱海。縣次公以來。以文學聞。次公已前錄。服子遷所撰周南墓碑中。列叙門人曰。若山子濯田望之。津士雅。倉彥平。滕子萼。田子恭。仲子路。魯子泉。林義卿。繼彌八。縣魯彥。秦貞父。彬彬輩出。義卿風講學京師。彌八今詩史

卷之五

十一

在東都。声名烜赫。士稚子萼。前卷已論及。子濯姓山根。名清。号華陽。子遷集中。屢稱特至。護園錄稿載其詩。如宿臺春望七律。殊雋爽矣。其男秦德。客歲遊京師。因武南山見余。頗能論詩。自運亦可觀。尔時謀刻乃翁集。望之彥平。子恭。子路。子泉。魯彥。貞夫。未詳其人。又左洸真。是世美二人。見儒林姓名錄。又扶桑千家詩。載山田原欽詩。

從長門逾海。抵豐前州。土伯曄。石麟洲。前錄。豐後莊子謙。亦前錄。豐後而筑前。而筑後。扶桑千家詩。收錄二州人士殊多。竹田春菴。黑田一貫。柴田風山。崔原

君玉。荻野隆亮。林恒德。林重一。並前州人。伊藤慎菴。伊福勝之。村井定菴。松下雪堂。並後州人。若夫貝原氏之於前州。安藤氏之於後州。亦已前錄。又前州神屋亨。著歸鞍吟草。其詩雖多。蕪累而議論昂昂。定非碌碌士矣。

長崎隸肥前州。往有林道榮。劉宣義。僧玄光。僧獨立。僧道本。僧玄海等。有詩見諸選。道本。清人。隨緣到此。所著有蕭鳴草。扶桑名勝詩集。載南部昌明。長崎八景詩。余不詳其人。或是草壽兄弟。近時高君秉。詞鋒頗銳。嘗東遊京師。締交諸文士。西歸後。作七言律八首。併書寄余。余心許和答。而未果。亡何君秉沒焉。君秉本姓渡邊。名彝。号賜谷。

卷之五

十二

肥後。近時有藝文之稱。秋玉山。名声煥發。詩才可嘉。又藪震菴。墨君微。水屏山。水博泉。四人見儒林姓名錄。余未詳其人。

薩摩州。及隅日二州。無考。對馬學事。前卷論及。自海西九州。沿南海而東。歷長門周防。到安藝藝之都會。曰廣島。大藩也。其文學。二屈氏。及松原一清。並已前錄。又味允明。見姓名錄。其人名虎。号立軒。所著有問槎錄云。近時竹原邑。有賴惟寬。有才子。称今佳。

浪華本庄邑有平賀中南在京師講說本庄邑北有  
佛通寺奇巖環寺地極幽邃往有僧寰海好詩偈已  
寂有遺稿二卷閱之疵謬殊多蓋雖有資才師承不  
正致此鹵莽可惜

三原雖在備後入藝候封內山海環抱殊覺形勝頗  
有好詩者芥彦章往遊其地尋余遊巖島彦章貽書  
三原諸子為余西道主人宇士龍安子桓川則之敬  
待最至三子好詩士龍最鋒鋒矣三原東有尾道一  
名珠浦地當海陸之衝人烟稠密多素封家而文雅  
無聞近有松本達夫者子桓姻婭也請賀島記於余  
詩史 卷之五 十三

其人少時受學東涯文辭則余不知焉  
備中文藝余未考之近惣社邑人藤野如水遊京師  
數過余家為人短小黑瘦口訥焉見之如無才者  
會晤再三漸測其所蘊殊為該博其詩雖乏華藻意  
義自全特怪西歸後寥乎無音問

備前往時熊澤了芥為政其國舉世所知余嘗聞松  
原一清出思稿其牛臚泊舟詩有渙家兒女亦知字  
笑將孝經教老翁向一時教化可想至今泮宮之設  
尚有典刑云若夫三宅氏已前錄昆玉集載近藤士  
業詩殊多士業名篤備前學職云又湯之祥井子叔

二人並以文學仕其國之祥名元禎子叔名通熙備  
前北有美作州文雅無聞東則為播磨

播州藩府西近備前者曰赤穗赤松良平以詩雄視  
其鄉赤穗東北有龍野和田宗允為其儒學文辭無  
聞儒林姓名錄以川口子深為姬路候文學名光遠  
所著有斯文源流云姬路東有廣川邑邑有清田君  
履名綏號藍卿余族也既有學殖又有文辭恬不近  
名人以長者稱若夫赤石梁峴岩以詩賦雄乎海內  
前卷既詳論焉赤石隔海近對淡列云

淡州航海達阿列阿列學職有數人栗野彦助有文  
辭去余弟祇後東都屢相往來云由岐浦有井河  
玄益謹篤之士詩文亦如其人余弟詳錄於孔雀樓  
筆記平島有島津琴王時有詩筒寄余阿列而讚州  
扶桑千家詩載岡部拙齋詩近時高松侯文學岡仲  
錫有文辭玉壺詩稿載其詩云渺渺春波夕照微白  
蘋風起鳥双飛曾攀楊柳江橋上楊柳掛絲人未歸  
婉順可誦九龜亦讚之都會僧羽山往遊其地藩太  
夫某聞之要羽山於途邀遊山莊尔後至今詩筒無  
斷其風雅可稱羽山余方外友屢稱其事余老善忘  
不記其太夫心氏讚州而豫州松山侯文學前田不



績詩見諸選了績名時棟所著有二酉洞吟譜云豫州而土州大高季明前錄土州隔海東對紀州云紀藩稱多學職若夫浩所南海玄輔已見前卷永田善齋名道慶羅山門人著贈餘雜錄其詩見千家詩荒川敬元名秀東涯門人八居題咏有和作又附錄他作三首頗巧整矣陰山淳夫名元質強記無倫至今為藝苑話柄著作非所長也又山君羣名鼎根伯修名遜志並徂徠門人在紀藩而著七經孟子考文者詩並見護園錄稿又有木村源進名之漸東涯門人享保中蘭嶠應聘紀藩尋勸源進源進後而無子詩史

卷之五

十五

今嗣職者任甫名景尹受業蘭嶠本姓岩橋氏因藩府命為源進嗣遂昌姓木村

伊勢宗廟所在山田宇治之間大小祠官無慮數百奉職多暇往往馳伎藝途而以文辭著者無幾八居題咏附錄度會清在福島末茂二人詩又有臼田陽山者在山田講說詩文無所解焉丁亥之歲祠官荒木田興正遊學京師屢過余家戊子之秋余父子遊勢州留山田凡三十日館于興正家興正以乃翁遺稿示余翁名正富字君忠其詩間有可傳今錄其一答能州菊山云孤鴻傳信落滄洲王露金風而

地秋北海清分乎後南天明月使人愁當今山田能詩者數人度會雅樂為翹楚云津城勢州大藩關之富淳于山田文學與田士亨嘗受業東涯世稱三角先生又有石川某亦其文學云近時山田東仙片岡順伯二人來京師攻黃岐術兼學詩於余頗有才思不憚有成恐以刀圭故廢耳又有大家公泰字稷卿稱正藏秉志堅固將以有成而溢乎天折頃日得一詩於篋底覽之慘然因為附錄聞鶯云翠柳參差弄晚晴為聞黃鳥不堪情一身已作他鄉客辜負春風喚友聲津城支封有久居熙朝文苑多載其土詩史

卷之五

十六

人士平玄龍押正胤佐柳意服彥進西正意平一興等余不知其人所觀一篇一章難別殿最衆名亦勢之一都會崑玉集載平義憲水應春二人詩又有南川文伯以詩著稱嘗來京師因僧金龍見余又南宮喬卿往下帷衆名後還津城余自山田還路出津城留止數日邂逅喬卿喬卿邀余父子譙其家樓喬卿今在東都又石大乙滕文二受業喬卿者文二從喬卿在東都大乙登來京師講說為業

志摩也伊賀也二國文雅無考大和則南都松元規詩見熙朝文苑當今今井邑有足高文碩者其人詩



其詩亦可傳。父業余弟者。河內則有生駒山人者。詩集行世。和泉則唐金興隆詩。見八居題咏。

攝之顯者。若水。春叟。守靜等。既已前錄。今追考諸書。

管子旭。沈東郭。以下。脫漏不數。異日重考補遺。今不

復喋喋。若夫當今下。惟授徒。鳥山片山之輩。名聲顯

著。無俟余言。亦復亡論耳。余男悰秉在時。論詩不可

一世之人。其所唱和。唯攝之葛子琴。子琴實工詩者。

聞子琴社中。雁行子琴者有數人。

京師藝文第三卷詳之。今追考之。遺逸殊多。亦俟異

日重考。若夫當今藉甚之聲。無俟余之掄揚。亡論耳。

詩史 卷之五 十七

湮晦無聞。而其實好詩善詩者。亦復不數。如松尾祠

官田雨龍。為好詩者。如端文仲。為善詩者。文仲東都

人。失意去鄉。西遊窮困益甚。前日播磨堀生。口占文

仲秋日遊巨椋湖詩三首。記得一首。欲得新詩漫獨

遊。斜陽半晌。又為留菰蒲。經雨沙初冷。雁驚畏人未

未收。山色猶明危塔外。水烟徐起去帆頭。終宵弄月

知何處。萬頃汪汪風露秋。

日本詩史跋

詩史就矣。使予及姪孔均校焉。予會奉藩職於關東。孔均勤焉。未畢。孔均沒矣。予適歸。乃始從事。云。論詩選詩。俱非容易。期主張者。率入頗僻。主調停者。或流軟弱。加之勢威所嚇。得失所眩。愛憎是非。自誣誣人。楚王弟。與方城外尹。證驗非必真。驚延項。鼈縮頭。冷熱非必實。魏蛺蝶。非無史才。史以穢稱。胡釘鉸。豈有詩學。詩藉妖顯。政理道術。皆有斯諸弊。近日詩家。莫甚焉。必如斯書所論。而後可謂公且正矣。若夫命名之義。讀者自當得之云。

詩史

跋

乙

明和辛卯之春

弟清絢拜撰

明和八辛卯歲六月

平安書林

堀河通蛸藥師下町

西村市郎右衛門

二條通間之町西入町

林伊兵衛

堀河通佛光寺下町

吉村吉左衛門

勢州津

大森傳右衛門

藤田東湖（彪） 著

# 回天詩史

明治二十五年（一八九二）東京野史臺鉛排本



據明治二十五年（一八九二）  
東京野史臺鉛排本影印

藤田彪斌卿著

# 回天詩史

青藍舎版

三決死矣而不死二十五回  
渡刃水五乞閑地不得閑三  
十九年七處徙邦家隆替非  
偶然人生得失豈徒爾自驚

塵垢盈皮膚猶餘忠義填骨  
髓嫖姚定遠不可期丘明馬  
遷空自企苟明大義正人心  
皇道奚患不興起斯心奮發

誓神明古人有云斃而  
述懷

藤田彪武卿題

回天詩史卷之上

水戶藤田彪斌卿題并錄

述懷有序

余之獲罪屏居也。偶得三決死矣而不死之句。既而又就其韻。賡二十五回渡刀水之句。每得一句追懷往事。感慨四集。乃就其句。錄事實於左。如此者連日。遂成八韻十四句。其句亦爲十篇。其叙事或觸類而長之。或託物而發之。雖固出於遣悶泄鬱之餘。亦可以觀世變矣。因命曰詩史。其冠以回天二字者。蓋竊有微意存焉。

回天詩史

卷之上

青藍舍藏

然言頗觸忌諱。亦事多機密。非敢示於他人。聊遺於子孫云。

三決死矣而不死。二十五回渡刀水。五乞閒地。不得閒。三十九年七處徙。邦家隆替非偶然。人生得失豈徒爾。自驚塵垢盈皮膚。猶餘忠義填骨髓。姚定遠不可期。丘明馬遷空自企。苟明大義正人心。皇道奚患不興起。斯心奮發誓神明。古人云斃而後已。

三決死矣而不死

彪頑鈍獲罪於幕府。禁錮默處。因徐憶從前之

事決死而不死者。至是凡三矣。文政甲申。彪年

十有九。會黯厄利亞夷舶。屢出沒東海。遂下輕

舸來於常北大津村。村人捕獲以告。大津村係

元老中山氏采地。廼發本藩騎士屬中山氏者

所謂組附者及今納言公襲封廢而不置赴急。又發先鋒隊。副以監

察。所謂目附行人。所謂番等之職。以備焉。事聞於

幕府。幕府使代官古山某。稱善譯者吉雄某。忠稱

等按驗事由。當時輿論皆謂幕府必脩舊典。

火夷船戮夷人。以耀威於海外。及古山等至。詰

問太寬。待以漂泊投陸之例。我先子聞之。竊謂

回天詩史

卷之上

青藍舍藏

彪曰。頻年醜虜窺窬邊海。時或鳴大砲。震驚我人民。傲慢無禮。其謂之何。而舉世姑息喜無事。吾恐其或出於放還之策。以苟一日之安。果然則堂堂神州。無一具眼人也。吾甚愧焉。汝速赴大津。竊伺動靜。若審其放還之議決。則直入夷人之舍。掉臂力鑿夷虜。然後從容就官請裁。雖出於一時權宜。庶乎足以少伸神州之正氣矣。吾不幸多女子。唯有汝一男耳。汝而死則吾祀絕矣。是吾與汝命窮之時也。汝勿顧慮。彪慨然曰。謹奉教矣。蓋義見於色。先子泣然曰。眞吾兒



也。因速辦行裝。適伯舅丹子正名就道。稱市。慨。

有奇節。尤長於和歌。來。先子因命杯杓。陰寓餞彪之意。酒

未酣。俄有飛使來自大津。曰古山某等詰問夷

奴。以爲其上陸唯爲乞薪水耳。非有他腸。乃給

以薪水及米菓。許其歸。巨艦時風波頗惡。不審

巨艦在何方位。而夷奴不以爲意。欣然乘二輕

舸而去。不知其所之。一座恍然。是彪決死而不

死之一也。文政己丑。彪年二十四。哀公疾病。人

心恟恟。初武公早喪。恭穆夫人以故。不有嫡嗣。

有庶公子四人。曰榮之允君。曰利之助君。曰敬

回天詩史

卷之上

三

青藍舍藏

三郎君。曰銓之允君。榮之允君立爲世子。即哀

公也。利之助君爲高松侯所養。銓之允君亦爲

穴戶侯所養。獨敬三郎君留在藩邸。蓋武公之

志也。當是時。大將軍恭文子姓振振。自尾紀二

藩。旁至於越前。家國主城主。苟無嫡嗣者。皆降

幕府。公子爲嗣。其國老有司等。或迎合希旨。甚

則不復問其庶子庶弟有無也。我先子常慨之。

齋志以沒。至是有飛語。曰萬一公病有不可諱。

則將請清水侯以爲嗣。侯亦大將軍庶子。一國

愕然。夫東照宮之所以建三藩將以廣其血胤。

共輔翼幕府。以保宗社磐石之安也。不幸台德

公及尾敬公之胤。既不可見。則東照宮之統。僅

係於紀南龍公與我威公之胤。萬一又不幸。失

威公之統。則奉南龍公之胤。有德公以來。幕府亦爲南龍公之統。

以爲嗣固也。今面有敬三郎君在焉。而有司若

奉清水侯。則將措敬三郎君於何地耶。於是日

夜企首。俟江邸之報。十月朔壬戌。彪以例登彰

考館。時彪攝總裁之職。陪執政。所謂年寄。參政。所謂下

之做。試諸生講經。適獲江邸親朋根本仲德。義稱敬

若三十郎。更稱五六郎。爲人容貌羸弱。書曰青山

回天詩史

卷之上

四

青藍舍藏

子世。該名延子。稱量介。時爲江邸史。館總裁。聞見

府館義通公。所命而書史館者。從官。憂儲嗣不定。詣

執政榊原淡州。責以大義。淡州晒曰。子何不

事理之甚。幕府三藩。鈞是東照宮之胤。萬一有

不可諱。則奉幕府公子繼統。何不可之有。子世

怫然而出云。又曰。邸中用事者。日夜出入於閣

老。所謂老中。沼津侯。羽守野出。之第。事情不測。倘

使山野邊氏。俸名義觀。稱兵庫。當時以門子別賜

武賢。下土。研究文。在江邸。則足以破有司之姦

謀。辭甚激切。而寄彪及杉山士元。名忠亮。稱六千

尺豪爽有<sub>後</sub>遊於先子之<sub>古</sub>賀彌之書也。彪謂此國  
助而學。志士授命報國之秋。直詣山野邊氏。竊  
家大事。志士授命報國之秋。直詣山野邊氏。竊  
示仲德書。且謂曰事急矣。夫子盍與士元謀。士  
元大夫所信。大夫領焉。彪歸家祭先子於寢。<sub>每</sub>  
<sub>後</sub>朔望登城則退公之。且告以實。筮南上赴急  
不吉。彪投策曰。見吉而行。見不吉而止者。尋常  
人事耳。至於大事。則固不可以吉凶變其節。今  
既決死。則不吉既兆。又復何筮。乃謝神主急裁  
書會二三同志於梅巷之宅。川瀨<sub>名</sub>教<sub>德</sub>稱<sub>七</sub>  
<sub>剛</sub>不<sub>讀</sub>書<sub>而</sub>剛<sub>者</sub>七<sub>年</sub>當<sub>時</sub>遇<sub>赦</sub>而<sub>出</sub>為<sub>小</sub>普<sub>以</sub>  
雖<sub>不</sub>獲<sub>罪</sub>禁<sub>鋼</sub>者<sub>七</sub>年<sub>當</sub>時<sub>遇</sub>赦<sub>而</sub>出<sub>為</sub>小<sub>普</sub>以

回天詩史

卷之上

五

青蘆舍藏

組<sub>請</sub>會<sub>澤</sub>有<sub>名</sub>安<sub>字</sub>伯<sub>民</sub>稱<sub>恒</sub>藏<sub>為</sub>高<sub>人</sub>第<sub>實</sub>純<sub>孝</sub>而  
論<sub>及</sub>延<sub>壽</sub>吉<sub>成</sub>入<sub>名</sub>忠<sub>信</sub>貞<sub>字</sub>履<sub>善</sub>稱<sub>又</sub>右<sub>衛</sub>之<sub>門</sub>才<sub>為</sub>  
後<sub>從</sub>大<sub>竹</sub>子<sub>虛</sub>而<sub>學</sub>飛<sub>田</sub>名<sub>勝</sub>以<sub>文</sub>章<sub>子</sub>健<sub>稱</sub>勝<sub>太</sub>  
出<sub>太</sub>田<sub>才</sub>佐<sub>而</sub>遊<sub>後</sub>鈴木<sub>藏</sub>名<sub>宜</sub>從<sub>尊</sub>先<sub>子</sub>而<sub>賢</sub>稱<sub>莊</sub>  
入<sub>溫</sub>醇<sub>而</sub>有<sub>氣</sub>修<sub>伯</sub>民<sub>子</sub>健<sub>士</sub>元<sub>當</sub>諸<sub>子</sub>往<sub>往</sub>  
時<sub>皆</sub>為<sub>史</sub>館<sub>有</sub>編<sub>修</sub>伯<sub>民</sub>子<sub>健</sub>士<sub>元</sub>當<sub>諸</sub>子<sub>往</sub>往  
來集。士元則在山野邊氏之宅。亦時往來於彪  
廬。議南上策。蓋不乞而出境者。國有刑典。以故  
其議紛紜不決。川瀨翁長於決斷。慨然曰。使吾  
輩幸不死而蒙出境之罪。則社稷之福孰大焉。  
議遂決矣。時山野邊氏父義質<sub>稱</sub>主<sub>水</sub>正<sub>良</sub>公<sub>之</sub>

野<sub>子</sub>出<sub>嗣</sub>山<sub>方</sub>以<sub>亞</sub>卿<sub>執</sub>國<sub>政</sub>告<sub>以</sub>實<sub>則</sub>不<sub>獲</sub>發  
也。乃陽為禱。公病於靜神社。乘夜跨馬而出。途  
過梅巷。川瀨會澤杉山吉成及彪。褰裳而俱出  
矣。時既五更。至長岡驛則吉成後矣。蓋歸而激  
監察戶田忠敬<sub>稱</sub>大<sub>銀</sub>戶<sub>田</sub>固<sub>沈</sub>深<sub>有</sub>義<sub>氣</sub>振<sub>袂</sub>  
俱上途云。彪等與山野邊氏以三日甲子之夕  
抵江戶。皆謂執政有司既不足與責。所可倚賴  
唯有守山侯耳。是夜山野邊氏詣小石川邸。候  
公病狀。彪等四人則至吹上第。請謁守山侯。侯  
蓋難之。其臣遲塚九二八周旋尤力。侯遂延四

回天詩史

卷之上

六

青蘆舍藏

人於燕室而見之。四人具陳飛語紛紜事情不  
測之狀。因請立敬三郎君為世子。侯謙遜持重。  
不肯為果斷之言。徐曰。本宗大事。寡人敢不竭  
力。然若其成否則非寡人所可豫言也。辭意慙  
懃。慰諭具至。四人感激而退。然猶竊憾其自任  
之或不厚也。夜既過三更。乃投劍客齋藤彌九  
郎於飯田街。彌九郎與彪及士元有舊。且驚且  
喜。延入擊劍場。供以鹽鼓粥。四人鼓腹就寢。四  
日乙丑黎明俱入小石川邸。叩監察今村某之  
門。達所以不請而南上之狀。會於仲德之舍。初

有岡井翁名典稱富五者憂哀公無儲嗣屢諷

公請立敬三郎君爲世子公諾焉而以其異母

弟慮其所生相軋生隙未決親裁其由以賜翁

及翁病將死以爲仲德可託大事竊示仲德以

公書謂曰吾老病交至而豚兒幼稚儲嗣之議

子其有以紹吾志矣仲德感激許諾至是仲德

日夜憂苦雖在下僚爲時仲德生以下士以身自任

至誠動人桑原名信略稱涉幾太耶爲人寡默而

吉田名令世字平坦稱爲平太耶少以才學補水

國三郎君妙和歌岡崎名正忠先字子而衛學精次耶敬

回天詩史 卷之上 七 青蘆舍藏

書記有常陸稽云古秘高須名榮清稱欽之尤後更

吉村名彰善稱榮諸子往往見訪皆江戶有志

之士適吉成亦來忠義慷慨議論奮發又訪立

原氏名任胸字遠稱甚太耶翠軒先生之長子

司用事者家人遽止之主人曰光明正大之論

唯憾聽者之少耳四人爲之釋然大泄憤懣是

夜投春日街之逆旅水戶同志之士不期而南

上者絡繹相踵巨室則將監松平氏今侯失世家

則三木名之則稱跡部名正生字伯道稱彥淺

利之名定應子之德操人稱六鵜殿名忠愛稱熊吉後

門子之監察則戶田見於近臣則友部名好正翠字

於世先生而學以篤實有才幹稱耆老則增子名

茂字當簡稱不幸八耶爲人大嶺名廣貞稱稱大世

仗義不惑則白石謂一重如隆稱生又右衛門所小原

忠名俊彦稱山中名幸當稱坂場稱名時敏安嶋名

順允稱明毅幹事則石河名幹忠五郎金子名

之孝稱孫次耶川瀨翁文雅有才則村田名正定

軒稱彌生門耶翠秋山名盛橋子大謙稱後彌遊九郎初

唯子之成門氣力及彪人相或尤深之守節不變則太田

回天詩史 卷之上 八 青蘆舍藏

名政德稱太五池原名正重岡野名貞行見義

敢爲則馬場祐盛稱小戶田名忠敏弟稱今彌次郎

別於其父兄以下做之者岡本名平秀俊稱菊池名

秀介稱狷介有守則後藤名則敬稱小瀨名則藏

小川瀨川名教忠稱準子太小吉成名亨稱之十次陪

臣而有義則小田野名松平氏稱家臣之介小官而有

志則中村名雅言稱三衛門蓋皆一時之選其留

在水戶抑而不發隱然致禦侮之力者亦不尠

云是夜哀公薨同志之士相與號慟歆耳俟命

五日丙寅未有一號令鎮人心乃又與川會杉



三子詣吹上第見侯曰事太迫矣願侯勿猶豫也侯曰戶田吉成桑原吉田之輩亦來責寡人皆若卿等所言寡人敢不盡力卿等勿憂也四人反覆陳說而退六日丁卯始聞元老中山備立原氏之說始詳先公有遺書題曰朶雲片片首載立敬三郎君之事且戒厚葬奉美諡士皆感泣人心頗安其在逆旅者稍稍北歸同行之士亦或欲引去彪不可曰以先公之遺言有元老之請則事既就緒乃俟其愈允不亦善乎忽

回天詩史 卷之上

九 青藍舍藏

有浮說曰小歛儀節未載主喪者事情難測人心復騷然向之北歸者聞之或途反南上至八日己巳始有幕府允立敬三郎君爲嗣之令敬三郎君即今納言公也藩邸之士爭寫其令到逆旅而相示悲歡交至不覺涕泗橫流也時既過未牌皆欲以明日上途彪又曰既不請而出境又相率震驚都下其罪不細也然信宿至今者以其無君也今既有君不宜暫躊躇川瀨翁深是彪言即時相促與同志之士三十人許北既人歸者十發春日街至葛西新宿而投焉以十日

辛未還家當是時堂堂大藩無君者三日三夜疏外小臣不知廟謨而浮說滿巷事情不測其間日夕會議反覆論難非殺身成仁之說則高蹈遠引之計不圖納言公得立而又見有世子及公子振振如此之盛矣川公以辛卯夏娶有栖美宮夫人生二鶴千代麻呂君二郎君七郎君山野邊氏生二鶴千代麻呂君三郎君六郎君生三郎君五郎君九郎君某氏生六郎君立原氏生餘一君不幸二郎君三郎君二郎君六郎君子君強健而公鶴千代麻呂君益廣矣此彪決死而不死之二也今茲天保甲辰彪年三十有九公在國四月二十日幕府閣老連署阿土井大炊頭

回天詩史 卷之上

十 青藍舍藏

牧野備前守其不署眞田傳宜參府凡諸侯到信濃守蓋以其移病也下參府之命所謂奉書者而本月十八日所發也先是二日閣老阿部勢州招我元老中山備州詰以七事其目頗類疑公或挾異志者公在寅賓閣聞之速還城謂有司曰寡人以庚子歲就國例當以翌年參府而正經界建學校事頗繁雜因更乞一年之暇適文恭公薨寡人請奔其喪幕府有旨遂不果亡幾幕府大張紀綱庶政一新翁然有中興之勢越一二月閣老太田備州寄書慫慂寡人參府寡人心謂使幕府



用寡人耶。宜閣老連署傳台命。倘使其忌寡人耶。寡人既不奔故將軍之喪。而因備州一人之言。自請參府。則恐招躁進之謗。不如恬退自守。以俟命也。迺以實報備州。何圖旬日之間。備州免職致仕。而寡人則賜五六年之暇。時閣老水野越州等寄書曰。寡人不欲參府。故有是命。嗚呼。寡人雖無似。以懿親備員三藩。而當此中興之運。豈無速參府以補涓埃之志耶。自顧唐突進取。徒爲小人所譏。斯其所以持重。而閣老誣以寡人不欲參府。不亦戾乎。寡人嘗上中興之

回天詩史

卷之上

十二

青藍舍藏

議。首論日光神廟不可不拜也。亡幾有外夷之警。幕府令諸侯嚴繕兵備。承平日久。金革鏽腐。兵銃不完。一旦補脩。其費不貲。寡人因又議。上自幕府。下至諸侯。及麾下士林。悉傾拜神廟之費。以充金革兵銃之用。待數年之後。風俗儉素。財用漸足。然後有日光之行。則奮武追孝。兩得其宜矣。閣老又寄書曰。日光之行既決矣。君若不能預參。則宜辭以窮乏。嗚呼。水戶雖貧。豈欠數十里行旅之資耶。且寡人所議。固非一國一家之事。而閣老疑寡人託正議以營私。不亦異

回天詩史

卷之上

十二

青藍舍藏

乎。去歲四月。還自日光。越一月。誤蒙褒賞。加以雄刀鞍鐙黃金之賜。使寡人繼義公遺志。以效奉公之誠。寡人感激。自顧經界既正。學校粗就。器械甲兵。頗得繕修。國中子弟亦漸知方。而佛教蠱民心者未除。僧徒害風俗者未沙汰。神祇荒廢者亦未興復。昔者義公定一村一祠之制。毀淫祠者不可枚舉。沙汰無賴之僧徒。遂毀佛寺者。蓋以千數矣。百歲之久。其弊復生。豈可不脩公之緒。以對幕府之盛意乎。乃發命令下。其於神祇興廢繼絕。以致尊崇之誠。其於浮屠所謂如法也。賞之。破戒也。罰之。伽藍傾頽。無由補葺者。因毀之。沙門壯強。請爲氓者。因髮之。凡有害於俗無益於民者。務除其弊。今未能行義公十分之一。曰十分之一者。公謙遜之辭。而彪而記其言。觀者不以辭害意。可也。群議鼎沸。僧徒獲罪者極口誹謗。甚則以寡人爲懷異志。凡寡人之所爲。動涉群疑者如此。而寡人不以經意。自信愈厚。常謂慎形迹避嫌疑。陰講武備。戒不虞者。所謂國主及外諸侯之事耳。至於親藩。則固宜公然張皇。以示治不忘亂。效忠於宗室之意於天下。乃鑄銃於郊。閱兵於

野責臣庶以實用實效。毫無有隱諱也。讒人因以間之。抑亦危矣。然大將軍英明絕倫。豈信讒而疑骨肉之親。使破戒不律之僧。甘心於寡人哉。汝等以爲何如。有司惶懼不知所對。公曰。台命至嚴。不可依違。其遽辦行裝。有司請以五月二日發軔。公許焉。執政結城寅壽。番頭雜賀孫市。側用人彪等從焉。彪自四月二十八日臥病。至是惡寒頭痛殊甚。衆醫爲難其行。彪心謂斯行死且不辭。區區病痾奚足經意。慨然自奮。告別於萱堂及妻孥。心誓永訣。適姻好武田伯道

回天詩史 卷之上

十三 青藍舍藏

來餞。揣知彪心事。不忍把杯杓而去。彪慮家人怪之。故呼親戚數人強飲酒。亦不能醉也。遂以二日黎明辭家。蓋行程四日間。粒食僅不過二三碗。其苦可知也。五日已牌。從公入小石川邸。故事三藩之君參府。即日大將軍使閣老就第賀之。而是日闕焉。邸中失望。皆曰。公必獲嚴譴。彪竊謂事既發。則噬臍無及。不如及其未發。早爲之計。然臣子之處變也。殺身以訴衷。則人或憐其志。而信其言。徒以口舌爭。則愈來猜疑。而受奇禍。嘗聞幕府監察有櫻井莊兵衛者。其人

回天詩史 卷之上

十四 青藍舍藏

好善有氣槩。迺欲從容就死。遺一書訴公之冤。終之以彪篤疾。臨絕無復一點自求之念。因莊兵衛達諸台聽。則庶乎可以挽回頹瀾也。意既決矣。然扈從公駕者。有謁見兩君之儀。事頗嚴密。不得輒歸舍。默坐參政府。側用人之局。本在中央。近來與參政同。以俟焉。將留一詩訣親朋。獲君辱臣當死。死豈毫可辭之二句。會近臣傳命。遽召彪。趨而至公所。則元老中山執政戶田在座。公反復談論。大率如曩日與水戶有司言者。中山等將退。公改容曰。寡人不肖。不能撫育士民。以他事獲罪。於幕府固所不辭。但以懷異志藏禍心受疑。則不啻寡人之辱。威公以來相傳之意荒矣。使寡人不幸無壽。則徒吞憾懷恨而死。苟天假餘年。則必洗冤雪辱。然後已。汝等其體寡人之意。聲色俱厲。三人感憤不能仰視而退。彪歸參政府。幡然謂吾過矣。吾過矣。幕府所以疑公者。既深。其處分蓋既定。假令公萬一有不良之跡。則彪寸裂肢體以代公之難。固其分也。今公之精忠日月爭光。不幸爲讒人所間。而彪以死訴之。則彼將謂水藩無辭可以自明。乃其臣某自盡。以

贖其罪。是彪欲明公之冤。反實讒者之言。殺身害於國。不忠不孝孰大焉。忽有報。閣老傳命。以

明朝召高松松平讚守山松平大長沼松平播

本藩之支封其不召松平大三侯政府爲之愕

然。會議至夜分。遂不能詳其故也。六日詰旦。閣

老傳命於中山備州曰。今日幕使就邸。傳旨於

兩君。於是舉邸皆卜公之致仕與世子之襲封。

而未詳何人來而傳旨也。過已牌。閣老又傳命

於備州曰。使於水戶殿者。則松平讚岐守。松平

大學頭。松平播磨守。使於鶴千代麻呂殿者。則

回天詩史

卷之上

十五

青蘆舍藏

阿部伊勢守。牧野備前守。且曰。公不須見讚州等。又勿煩送迎。家老中山備州。興津能州等受命。告諸公。以公言傳諸讚州等可也。午牌三侯俱來。元老執政延之於對面所。受命。則曰。公近年政事不肅。且驕慢自用。不憚嫌疑。大將軍不憚。公其致仕移駒籠邸。堅閉門戶。勿有不謹。若其襲封。則命諸世子云。俄頃而勢州備州亦俱來。世子送迎如禮。備州班在勢州之下。是日以其直月先勢州而坐。傳旨於世子。其辭命與所命。公大同小異。二人畢使事而去。時世子年僅

十三。坐作進退綽然可觀。群臣悲喜交至。一邸

肅然。既而公召彪於燕室曰。寡人既受命矣。有

司用事者。得無譴責耶。彪對曰。有司亦蒙譴也

必矣。他人則不知也。彪叨竊虛名。決知不免。假

使幕府網泄吞舟。彪何面目復碌碌立於世乎。

公曰。然則汝將奈何。彪曰。誠獲脫然致仕。以從

老公於寂寞之濱。則志願足矣。公曰。寡人亦了

汝心事。寡人將以今夕命汝致仕。汝其待焉。彪

拜謝而退。是日公裁親書授中山備州。有彪致

仕之事云。適閣老土井氏招執政肥田大助。授

回天詩史

卷之上

十六

青蘆舍藏

罰中山氏以下有司之狀。彪聞之不復入政府。日既暮。公命駕徒駒籠。彪與同班諸子送諸中興廊下。公戴烏帽。著黑衣。風姿蕭然。諸臣莫不流涕。是夜四更。執政肥田傳命。中山興津二氏蒙責。所謂戶田與彪奪職禁錮五更歸舍。差扣戶田與彪奪職禁錮戒僮鎖門戶。後數日獲鄉書。始詳亞卿山野邊氏與中山興津同科。執政鵜殿名廣生奪職蒙譴。所謂而寺社奉行今井則與戶田及彪同科。嗚呼彪浴公之殊遇。非他人比。而不能察禍於未萌。尸位素餐。以致我公今日之辱。死有餘罪。



而幕府寬仁。使彪獲生路有所悔悟。抑亦幸矣。此彪決死而不死之三也。古人有言。死生亦大矣。彪生於平世。齡未盈強仕。而三處死生之間。豈天厭彪生無益於世。欲挈而投之冥漠之鄉耶。抑人惡彪冥頑不屈。必擠之死地。然後已耶。抑亦彪愚暗剛褊。常蹈危機。臨陷阱而自不悟耶。至是彪無復意於人間之事矣。苟獲保餘齡。閉戶幽居。尚友古人。時或著作泄憤。全首領以從。先子於九原則雖死不朽也。感慨之餘。援筆錄之。不覺叙事冗長。而亦不忍削者。蓋臣子之

回天詩史

卷之上

十七

青蘆舍藏

至情也。時五月十六日。梅雨濛濛。黯雲慘愴。杜鵑悲鳴於其間。投筆悵然者良久。

二十五回渡刀水

彪夙有四方之志。不幸早丁大艱。忽就仕途。不能復償宿志。然其往來武常之路者。可謂頻矣。文政己卯。彪年十有四。會先子祗役於江戶。彪與豐田天功名亮。當時以神童稱。今稱彥次郎。類才學精敏。往而寓先子之舍。因始獲見當時不見其比云。往而寓先子之舍。因始獲見當時碩學龜田鵬齋。太田錦城諸子。亦時遊於岡田十松之門。試劍術數十日而歸鄉。乙酉之冬。外

回天詩史

卷之上

十八

青蘆舍藏

舅原氏祗役於江邸。時彪方專力於武技。請先君子往而寓原氏之舍。每夜半出而至擊劍館。岡田氏教場。切磋磨礪於祁寒霜雪之中者月餘。明年丙戌之春。先子又祗役於江邸。彪復從焉。初彪學十字槍法於鄉先生。獲所謂免許者。自知華法不適用也。至是從伊能一雲齋而學其槍法。及先子將竣事而歸。留彪寓於吉田愚谷翁翁名尚典。稱本介。平坦之父。之舍。戒曰。文武之道。相待而爲用。不可偏廢。汝勿效腐儒迂生之爲。勿混武人劍客之流。於是彪慨然發憤。命所居之舍曰不息。取諸乾象辭。今納言公以哀公之介弟在藩邸。聞之親書不息二字。付之翁之子平坦。以賜彪。彪自信愈厚。入則讀書講學。出則弄槍揮劍。未嘗一日廢業。至十月下澣。聞伯父嬰病危。驚驚而歸鄉。伯父見彪頗慰病苦。先子大喜。與侍病蓐。居二三日。伯父捐舍。彪在鄉二旬餘。先子謂文武研精。不可失時。使彪復往而寓吉田翁之舍。居四五日。急足來告。先子亦嬰篤疾。時彪在擊劍場。狼狽憂懼。日夜兼行歸家。則先子不可復見矣。數日前受教於膝下者。忽爲遺訓。



悲哀號慟。旻天罔極。既過五旬。則就仕途。乃私

持心制者三年。己丑之冬。哀公疾病。彪與今亞

卿山野邊氏等。間行赴小石川邸。居數日而歸。

天保庚寅之冬。彪以郡宰。與同僚川瀨會澤吉

成三子。應召到江邸。屢賜召對。初同召四人。後或

召一人。每召對。未嘗不移晷也。時公方銳意圖治。唯恐失時。召

對之間。自安民固本之說。以至脩文奮武之論。

往往及職事之外。而公不少以爲意。四人亦感

激盡言。無有所避。將竣事而歸。公手賜親筆。堯分

典克明。俊德。章三十。字。爲四幅。各見藏於家。勸勉具至。拜恩而退。壬

回天詩史 卷之上

十九 青藍舍藏

辰之夏。彪轉通事。今頭之取小徙家於江戶。既而爲

政府吏。公將正經界以制民產。又建學校。以化

士風。而兩地政府。依違不決。徒費文移往復。乃

使彪就水戶政府達公之盛意。且與館職及郡

宰相會協議。於是戊戌己亥。抵水戶者再矣。皆

閱月而歸。庚子之春。擢爲側用人。會公就藩。彪

從焉。公嘗憂北虜猖獗。有開拓蝦夷之志。屢建

議於幕府。及就藩。亦與閣老往復簡牘。而事情

不通。乃託於他事。遣彪於江戶。以通其情。於是

庚子辛丑。抵江戶者再矣。因是始獲見閣老濱

松水野松代與眞公田信州信州當世州務彪與二三同志

特命侍宴。席後執調。是爲始人。而有名之吏。矢部駿州監時稱左近將岡本江州稱時

忠次郎。爲勸羽倉外記等相識也。或一閱月。或

數閱月而歸。癸卯之春。公參府。將有日光之行。

適彪墮馬傷足。就醫於下總扇島。不得從焉。月

餘復常。會公召諸公子。五郎君。七郎君。八郎君。九郎君。十郎君。於

藩邸。命彪俱就途。公既拜日光神廟。六月就國。

艤船於邸門之前。沿江戶川而下。過墨水。抵行

德。捨船從陸。館於大森。明日蚤抵木下風。水手

隊長佐野勘兵衛。艤所謂君臣丸而待。風帆如

回天詩史 卷之上

二十 青藍舍藏

飛。刀水兩岸及十六洲之民。爭出小艇。請牽纜

纜短艇多。雜選誼誼。殆不可制。公命水手。接纜

以數百丈之繩。比至潮來。小艇蓋三百餘。民亦

以千數。公命郡吏。具大樽於岸。撤蓋酌酒。盛諸

巨碗。賜民之牽纜者。民喜而傾之。猶長鯨之吸

百川也。明日亦擬舟行。適風波險惡。乃陸行抵

小川而館焉。又明日抵海老澤。乘輕颺丸。輕颺丸。輕臣。

皆船名。過蒜湖。泝那珂水而歸城。是行也。彪與執

政戶田番頭中村等陪從。其侍舟中也。近臣吹

管而奏樂。舟子扣舷而發歌。既飽酒肴之賜。又覽觀江山之勝。時方盛夏。而清風四至。眼界豁然。不復知炎熱爲何物。真一時之壯遊也。今茲甲辰。幕府命公參府。彪又從焉。公遂致仕。幽居駒籠邸。彪等則禁錮於小石川邸舍。屈指而數之。凡往來渡刀根之水者。至是既二十五回矣。蘇東坡詩云。便合與官充水手。此生何啻略知津。今東湖居士諳熟於武常之路。亦不在尋常驛使之下也。屏處默坐。仰望駒邸。憂老公之幽鬱或致病。俯憶故鄉。察阿母之痛心倚門。雖以

回天詩史 卷之上

二十一 青藍舍藏

彪頑鈍。血淚沾臆者數矣。嗚呼。天定勝人。老公之冤。一旦水釋。飄然就閒於仙湖之上。彪輩亦少緩其禁。去而歸舊廬。奉萱堂膝下之歡者。不知其在何日也。刀水而有靈。則必俟彪之渡江。更添一回。五月十八日錄

五乞閒地不得閒

文政年間。我先子與青山子世。爲史館總裁。子世在江戶。先子居水戶。及先子歿。水館不復置。總裁以大竹子虛名親從。稱與五兵衛。會澤伯民。權攝其職。彪以丁亥之春。襲先子之後。以進物番補館

職。而先輩鈴子賢。杉士元。飛子健等。班皆在彪之下。意頗不安也。先是川口嬰卿名長孺。稱爲助九郎。江館總裁。以汚行獲罪。禁錮於水戶。子世代焉。未數年。哀公惜嬰卿之才。起之於廢黜之餘。以番補編修。徙於江戶。凡幾復總裁之職。兩館之士。議論喧然。伯民嘗與嬰卿絕交。謂義不可受其指揮。因頻陳情辭館職。遂出爲教授。當時文柄悉在史館。其曰教授者。有名無實。一以彪同子開散之職。大非今弘道館教授之比。虛攝總裁之職。時子虛齡既垂七十。沈痾家居。彪則年僅二十四。一旦立於先輩諸子之上。統

回天詩史 卷之上

二十二 青藍舍藏

紀館務。愈益不安也。年少氣銳。不能自抑。乃裁一書寄子世。陳奉身自退之意。且附以館局大弊五事。其目曰。心術不正者。不宜居館職。曰正人實學。不宜廢棄。曰攝職之選。不宜在彪。曰史業督課。不宜迫蹙。曰虛文粉飾。不宜助長。反復辦論。蓋數千言。彪謂嬰卿亦先子所嘗共事。今致書於子世。論嬰卿不宜居館職。而無一言責嬰卿。豈不愧於心乎。乃又裁一書勸嬰卿以引過乞閒。議論剴切。頗震一時。當是時。江邸罹災之後。新建史館於後樂園之傍。土木之美。輪奐

可觀。公方銳意於文事。子世嬰卿遵奉不違。屢寄書於水館。責以校史怠惰。而不問人心之服否也。水館之士。愈有解體之勢。至是子世等。以爲兩館隔絕。正議之士。皆群居水館。所以動生波瀾。不如移二三館僚於江戶。以殺其勢。蓋以聞於公。而公從之。於是子世等。又寄書於水館。令彪及子賢士元子健等各探闢。其中者皆徙於江戶。蓋示其公平無愛憎也。彪與諸子議。皆謂應命咫尺左右。事體不輕。安做兒童遊嬉探闢而博之哉。乃答子世等。以實。因子虛請辭職。

回天詩史

卷之上

1141

青藍舍藏

政府未有處分也。會公薨。今納言公立。時勢一變。子世嬰卿相。踵免職。子賢轉奧右筆。士元爲寺社役。伯民與彪任郡宰。宰之爲職。事極紛冗。非曩日假總裁之比。是彪乞閒地。不得閒之一也。公勵精圖治。尤用心於民事。悉變易七郡之宰。山口稱名正德賴母治大里部。友部見於上石神部。田丸稻名直衛稱濱田部。川瀨紅葉部。會澤常磐部。吉成大子部。彪八田部。旣受命徙各所。當時務革正舊弊。禁奢教儉。扶弱抑強。洗冤枉。恤無告。其他沙汰僚吏。賞罰村老之類。事尤多端。每有

一疑議七郡互馳遞諮詢。文移如織。而遂不能盡其情。於是四郡之議起。川瀨尤主張其說。其略曰。昔者威公分封內爲南北中。置郡宰三人。寬永年間。大丈量田野。亦以三人爲之。爾來沿革不一。然未有郡宰出居各所者。蓋以封內狹小。可坐治也。近來分封內爲十一。旣而爲九。爲七。以至今。其制本摸倣肥之熊本。以爲郡宰親察民間疾苦。其撫字庶民。猶慈母之於赤子。則戶口可殖。風俗可變。殊不知庶民狎而不畏。吏村老怠而廢其職。訟獄日滋。廳務日繁。且郡宰

回天詩史

卷之上

二十四

青藍舍藏

會議不過歲一再。七郡處置或多矛盾。齟齬守尋常則善矣。若欲大有爲。非減郡廳省冗事。宰吏皆居城下協力一心而後從事。則決不見成功矣。時七郡僚吏久居各所懷土狃安不欲變更百計沮之。公斷然用川瀨之說辛卯之春復四郡之制以友部會澤爲政府吏幹奧右筆局要務。

入所謂御之用調役者文公文時始置以菊池親平

武書草案又置之常在政府及一耶爲之廢其職政文化初舉樞要之職務委諸書記於是與右筆局執政乏人舉密之固不拔武公有見於此欲置調權柄於舊弊



記之。上出一史。洗其舊弊。而流言謗一。時雖然。高  
橋遂出。爲一史館總裁。其職亦廢。謗一。時雖然。高  
以納言公。新置。側右筆。乃廢其座。右機密文書。小  
人尤忌之。而公斷之。然不惑。居四年。與右筆往  
往。轉除。無復。公時之。舊弊。居五年。與右筆往  
五年。嘗有言曰。調役之。大職。有爲。苟發。大則。以維  
持國家之紀綱。而不役之。大職。有爲。苟發。大則。以維  
紀綱。亦可以。禍敗。逞。其。人。居。矣。嗚呼。其。選。豈。容。易。哉。

山口爲目附。田丸爲勘定奉行。其留在郡宰者

三人。川瀨治南。彪治大田。今改。北。稱。吉成治松岡。今。稱。

新以石河幹忠爲宰。治武茂。今。稱。有志之士。

皆企首望中興之化。而政府任事者。猶執舊弊。不欲更張也。初哀公季年。命史臣修東藩文獻。

回天詩史

卷之上

二十五

青藍舍藏

志公薨不果。至是會澤鈴木等。以爲欲成中興之業。則宜先修祖宗典刑。斟酌增損。以歸於至當。乃建議復修文獻志。設局於城中。政府有志之徒。時往來其局。小人因讒會澤鈴木等。以朋黨。遂出會澤爲史館總裁。以鈴木原田。名成。祐介。荻爲馬廻。於是政府正議。一網打盡。無復子遺。深澤。名敦忠。稱。亦與四人。同局相親。至是移病不出。彪與同僚議。以爲郡宰本踈外之職。而頗爲樞要之地者。以公專信任吾儕也。今政府變革如此。凡吾儕建議者。皆從中制之。隔絕上下。

之情。則公之盛意孤矣。因上書屢陳。所以退小

人進君子。挽回正氣之說。凡驛使往來於江戶

者。每月六次。未嘗一次無郡宰上書也。公亦時

下親書慰焉。而讒譟先入。無可奈何。明年壬辰

之春。深澤亦坐廢。所謂。謂。小。彪。料。不。可。以。口。舌。爭。

即日亦移病不出。朋黨之論益熾。公赫然震怒。

遽召川瀨石河二人於江邸。問以事情。二人侃

然正議。不遺餘力。公釋然而悟。轉彪爲通事。徙

於江戶。鈴木子賢代焉。進會澤伯民之資格。而

原田深澤荻之徒。亦往往見任用。今。小。姓。頭。取。

回天詩史

卷之上

二十六

青藍舍藏

之爲職。宿直中興。稱。後。宮。爲。大。典。而。正。寢。及。日。近。臣。所。宿。直。皆。稱。中。興。

昵近左右。自非生長於近臣之間。則坐作言動。

或不能如法。而彪以野人任其職。又蒙常扈從

公駕。御。所。謂。定。御。供。之命。更掌所謂衣紋猿樂等之事。

其用心尤苦。是彪乞閒地。不得閒之二也。乙未

之夏。轉爲政府吏。己亥之歲。公發令將以明年

庚子就藩。時公方務修武備。又戒士大夫。因田

祿多寡。備兵馬器械。而巨室世家皆乏軍用。竊

恐其或獲罪。乃結黨密議。欲妨公之就藩也。以

爲去歲年穀不登。減士人俸祿。一國皆不聊生。



而公就藩。則士大夫職事繁劇。冗費不貲。皆怨嗟嘆息。離心解體。恐大損公之盛德。宜全賜俸祿以慰人心。若不能然。則不如無就藩之爲愈也。因激所謂小番頭及物頭之職。各書劄子達之於政府。政府不能制。以狀以聞。公大怒。謂姦人比周要君而政府無一人制之。取其劄子以聞於寡人。奉職無狀。遂按問事情。將罰巨室某等及水戶執政有司與其事者。彪謂執政曰。公之所以赫怒。旣聞命矣。抑其聞於公者。非江戶有司耶。今水戶有司蒙罪。而吾儕免於譴。則

回天詩史

卷之上

二十七

青藍舍藏

何面目復見水戶有司耶。執政慰以本末輕重之別。彪不能自安。乃引罪移病。懇請辭職。未一句免職。以先手物頭之班。先是彪班充史館編修。彪在劇職前後十年。始獲閒地。殆有超然於物外之思。何圖未盈二月。忽擢爲側用人。復出入政府。從事於獻替。時彪非不得閒而忽失之。則要之不得閒之三也。公之就藩。宵旰勵精。督責有司。不三二年。經界粗改。學校漸就。文教武備頗就端緒。而公方獲五六年之暇於幕府。於是小人日進。佞媚之說。以迎合公意。公以其易

制。或命以事。小人竭力贊成。勢殆類於勇於敢爲者。以故便嬖少年。或遽獲顯官。彪從容屢言於公。以君子小人之辨。而公不省也。彪因懇請辭職。適有讒彪者。謂彪以今井名惟典。稱金右衛門。擢爲參政。心懷不平。又謂彪家計窘急。勢不能居職。乃託正議。請閒地。人或以告彪。公亦賜手書曰。寡人信汝。而汝疑寡人。汝而去。則寡人亦將致仕矣。彪竊恐跡甚涉嫌疑。或連及今井。乃勉強視事。適執政傳命。賜以黃金。曰。子屢苦於行役。察其或乏資用。所以有斯賜。彪心竊愠之。噤口

回天詩史

卷之上

二十八

青藍舍藏

受賜而退。直入奧右筆局。以金託其局長。且謂曰。彪固貧徹骨。向者行役之日。有斯賜。則彪何辭之。抑今日又有行役之命。則亦何辭斯賜。今無故而受之。古人所謂貨之也。幸謝於執政。彪雖飢餓。不拜如此之賜。局長不能對。執政亦不能強而止。當時有司非皆不知彪者。而有是事。彪於是有知浸潤膚受之可畏也。明年癸卯之秋。今井出爲寺社奉行。前一日。彪入奧右筆局。始聞今井以明日轉職。將直入執政府辨之。而執政退。乃趨而至公所。旣屏左右。公大聲曰。無

乃今井外補之事耶。對曰誠如尊言。公曰事已決矣。勿復紛紜。彪曰既命惟典則可謂決矣。今未命也。進退唯在公之處分耳。公曰去歲寡人排衆言擢今井於不次。既而諸有司屢告寡人以今井不容人言。寡人保護以至今日。而近來執政亦以爲宜外補。參政任重。而今井既失人望。寡人將以今井爲寺社奉行。從事於敬神排佛。不亦善乎。彪曰惟典峭直冰清。疾惡之心有餘。而乏容物之量。斯其所以取譏。而至於面折敢言。執政憚之。監察畏之。佞邪小人尤忌之。則

彪決知無出於惟典之右者。閣下不擢之則可也。既擢之而又遠之。臣恐小人竊拍手相慶。其損國家之元氣不細也。且惟典在政府。則正議抗論大有益於廟謨。使其處獨任之地。則峻急迫切其取敗也必矣。公曰汝盍與執政議焉。彪流涕而退。出而見結城執政曰。今井不能救耶。結城赧然曰不能矣。彪謝而去。遂上書具陳平生欲言而不能言者。杜門移病。使姻戚武田伯道請辭職於政府。居二日。今井來傳公命。勸出視事。且謂曰吾罷參政。而猶勉視事。子何苦

而逡巡至是。彪曰子之出而視事。猶吾之退而移病。理不得不然。復何怪焉。今井笑而去。又一日島村志摩頭取小姓來傳公命。又使彪勉強從事。彪拜謝曰。病瘳則雖無公命固將出也。而彪之病恐非小故。又一日安島彌次郎頭取小姓盛服而來傳公命曰。曩日奏議深感於寡人之心。寡人將思之。而汝移病家居。則浮言沸騰。寡人甚憂焉。請爲寡人暫出而視事。彪心謂公之優待至是。而猶固執前議。不敬既甚。且公之悔悟如此。則國家之事未忍袖手旁觀也。頓首曰謹奉

命矣。安島大喜而去。明日起視事。此彪乞閒地不得閒之四五也。距今僅半歲餘。而有今日之禍。彪等亦蒙譴責。彪嘗讀史傳。常憾潔身自重之士。知退而不知進。當路用事之臣。知進而不知退。因又疑其退者固處貧賤。以故恬於勢利。其進者漸獲富貴。所以有顧望之念。今而思之。君臣之情義。固有不得已者。存乎其間。非獨富貴貧賤使之然也。夫人臣之事君。苟志於道義者。孰不欲進而行其道。又孰不欲退而全其義。而其在踈外之職也。一事一議。動苦於有司掣

肘而見君亦罕。無由吐肝膽。以故其心常憂懣。憤激每有一政一事失體者。謂國事殆去。建議於有司。不可則以爲拒己。溫顏容之。則疑其或見欺。其上書於君。亦多不免有矯激過實之辭。是其所以難進。至於處親密之地。則其如意也。君臣和樂。固不勝其喜。其不如意也。相與歎息於政府。又相與覆議於君前。諷議論辯。無復遺憾。而君臣之間。顏情稔熟。自非大事。不忍面折廷爭。其或直言抗議。君視以爲其常。君怒則臣謝。臣激則君諭。昨者爭而今日和。是其所以難

回天詩史

卷之上

三十一

青藍舍藏

退。若夫居無道之世。立於暗君之朝。阿諛迎合。徒貪戀富貴。而不能退者。固不足論也。嗚呼。使十年前之彪。見今日之彪。則將笑其見機而不能去。然使今日之彪。處十年前之地。則亦將知退而不知進。非彪之操心有二。所處使之然也。抑向者使彪辭職得閒地。而公獨遭今日之禍。則彪亦豈得恬然高枕耶。然則屢請閒地而不得者。安知非天賜彪以今日大閒散之兆。世道之變。可勝慨哉。

二五  
十月  
日十  
錄九  
日

三十九年七處徙

初彪生而三歲。先子新爲濱田郡宰。徙民巷官舍。明年武公就國。或臂鷹或跨馬。屢過民巷。蓋當時彪與小兒輩拜觀於路傍。又明年公將參府。彪始謁見於大廣間。後二年從先子歸梅巷之廬。距今三十餘年。恍如夢中。雖公之容貌不能道其詳也。蓋年六歲。先子授以孝經。受句讀於堀川潛藏。名潛字文淵那珂港人彪能記又

師  
能忘潛藏諄諄教而不倦。宮本翁名虎孝稱左屢往來寓居。削竹爲刀。使彪擊。僅僕出於其

不意以爲戲。木村子虛名謙號醉古館天下每

回天詩史

卷之上

三十一

青  
盧  
舍  
藏

至城下來投官舍。其人六十餘。貌厚氣完。登城則必汲井浴水而出。歸則與先子把杯談論。酒酣或大聲叫呼。或拔劍稱快。今而思之。僅記此數事耳。既歸梅巷。居十九年。而彪以郡宰。徙於八田。八田在水戶城之西六里。那珂久慈二水之間。地極瘠。民亦貧。寬政年間。文公廢四郡之制。分封內爲十一部。置郡廳於各所。曰濱田。曰常葉。曰紅。曰子。曰增井。曰八田。曰大里。曰小菅。曰鷺川。曰太山氏。采地也。旣而廢小菅。鷺川。以爲中井。爲七郡至天保辛卯。復四郡之制。高野子隱。擢自醫員。新爲宰於此。後白石名意隆。稱又意衛。

稱名世龍介擢自醫員新爲宰於此後白石稱名又意隆衛



門一致仕如仕石川儀兵衛稱一二翁友部見於井坂

相踵任焉。以及彪。高野石川皆有才學。尤長於詞章。白石以忠誠稱。友部以才學敏捷聞。獨井坂舉自胥吏。齷齪自守。然七郡之宰。皆以奉職無狀奪祿貶斥。而井坂則外補就閒耳。先輩皆如此。以故僚屬子弟。頗存忠愍之俗。又粗有文雅風流之趣。彪日坐廳事。與老吏論議。唯革其近來弊事數件。餘皆循白石友部之舊。而不變更也。廳務少閒。則會僚吏子弟。吟咏風月。談論古今亦足慰索居之情。數月而郡制一變。於是

回天詩史 卷之上

三十三 青藍舍藏

彪又徙民巷。民巷本良公所營營別館。見御田殿當時四郡之宰。皆設廳於其私宅。及別館廢。建郡廳於其址。而宰猶居宅。日臨廳視事。寬政中四郡廢。以其東廳爲濱田部官舍。西廳則常磐部官舍。宰始徙居焉。至是濱田入南部。常磐入武茂。乃以東廳爲松岡部官舍。西廳太田部官舍。彪居焉。更設南及武茂之官舍於梅巷。彪至民巷。熟視其官舍及園林。猶逢故友。所謂恍然如夢者。亦或得繹一二端緒。愴然有感舊之情。太田部者。其堺起於久慈郡太田。經稻木藤田

等諸村。泝久慈川而上。南至太子及開田金澤。

西北限八溝山。廻而東過生瀨高倉。至所謂天

下野洞諸村。方言稱洞地頗肥良。民亦不甚貧。又

富於名山水。其巡視部下。時或登臨跋涉。足以

盪滌郡宰之俗腸。但憾父老導焉。僚吏從焉。農

夫輟耕。拜伏於道左耳。四郡之制。皆與同僚相

議。施設如約。以故其於部下。無別出意見。布新

政者。嘗欲設常平倉於太田部垂。大宮改太子三

所。太田部垂則粗成。未遑及太子而止。後人善

知彪意而善脩之。則庶乎民不患米價之甚上

回天詩史 卷之上

三十四 青藍舍藏

下。而姦商無所逞其欲矣。倉公亦嘗有設常平

倉奉米行。務儲蓄米穀。以爲其資。今茲甲辰之春。見有米四千苞。粟七萬苞。金千六百兩。餘常平

之變。則民以大貴。糶糴爲主。其術如疎而善觀。時應。變則民以大貴。糶糶爲主。其術如疎而善觀。時

於不知。商大體動。欲糶糶於人。則道不虛行。信哉。居

歲餘。徙家於江戶之邸。居所謂臺之西偏。牆外

數步。則常泉西岸二寺當其西。朝夕唯聞念佛

誦經之聲。出戶十數步。則後樂園之深樹蔽其

東。日出三竿。紙窓猶暗。其稱南北隣者。僅隔一

壁耳。我梅巷之廬。比之他第宅。尤爲狹隘。而邸

舍之地。不過敵廬八分之一。適夏秋之交。炎熱



逼人殆不可堪。彪自奮曰：昔者寓吉田翁之舍也。其室不過方九尺。四面皆壁。僅取明於小窓。而猶能刻苦於其間。大丈夫苟居天下之廣居。則室之廣狹。於我何哉。蓋涉旬經月。習以爲常。至於二三年之久。則不復覺舍之狹隘也。丙申歲。公大發令。移江邸之士於水戶。昔者祖宗之時。士皆居水戶。祇役於江戶。以一年爲期。後者來而先者去。名曰交代。或曰在番。其移家累於江戶者。蓋亦甚少。肅公以來。公就藩既稀。士之移於江戶亦頗多。而若諸有司及物頭步卒之徒。則猶依舊交代。文公慈惠。憐士之苦於行役。始使諸有司及諸職移家於江戶。名曰定府。爾來藩邸官舍稠密。風俗浮薄。而江戶水戶事情不通。文書往復動相疑難。至是邸中士庶移於水戶者二百餘人。僮僕奴婢不可勝數。咨嗟怨歎。猶流人之赴謫也。邸舍爲之頗空。公乃使水戶諸有司交代焉。將擴而及諸職。又令步卒每一隊授一舍。居常相親睦。彪之舍當授步卒。乃移而居臺之東隅。其地踞富阪之上。東北望駒籠白山。眼界頗濶。大非他舍之比。庚子之春。公

就藩。彪又徙於水戶。南北奔走者十餘年。而獲歸舊廬。彪之移家累者。至是凡七矣。傳曰：士而懷居。不足以爲士。又曰：小人懷土。夫士之志於道。其居與土不足思固也。然孟母擇隣。而夫子亦有里仁之語。則其生長子弟教育人材者。未嘗不由風土鄉里之美也。姑以彪所目擊論之。八田之俗。其人非不質。其地非不靜。而其民鄙猥褻陋。乏超邁俊偉之氣象。江戶之俗。其人非不勤。其見聞非不廣。而其君子生於深宮之中。不知稼穡之艱難。其小人長於伶俐油滑之習。絕無質直樸茂之風。水戶之俗。慷慨好義。勇於敢爲。雖時有汗隆。要之大非江戶及八田之比。獨不免聞見寡陋。與言動粗俗也。由是觀之。士苟欲教育子弟。則其幼也居之城下。講武學文。以立其志。或逍遙田野。跋涉山水。以諳艱難。以養士氣。及其心術志操不可奪。則出之於江戶。汎愛親仁。以廣其固陋。周旋士君子之間。以醫其粗俗。則天之所以與我者。自陶冶練熟。庶乎可以無大過不及矣。今夫絲之在繭。不熟而練之。麻之在野。不浸而曝之。徒視其如絮如蓬者。

曰絲麻不如菅蒯。不亦冤乎。斯論非獨爲我水  
戶發也。近來論者。動建土著之說。以彪觀之。使  
農爲士。以居其地。則勢易爲而義不可爲也。使  
士離城就田畝。則義易爲而勢不可爲也。假令  
斷然果決。驅而著之於土。能立其制度。無士農  
雜居之憂。則或可也。若夫不然。則滿城士林變  
爲泯然農夫。可弗思哉。五月廿一日錄

回天詩史卷之下

水戶藤田彪斌卿題并錄

邦家隆替非偶然

恭惟我東藩威公建基以廉耻節義鼓舞士風  
義公繼述申以孝悌忠信之教其盛德大業雖  
樵夫牧童猶飽聞而厭道固不俟臣彪贊美也  
義公既老肅公襲封大將軍常憲公使隨性院  
夫人韓八重歸我恭伯世子一國相賀獨義公  
以爲國家不幸權事見於公所賜木村蓋恐其或  
長奢侈之風也既而風俗日衰財用不足義公

回天詩史

卷之下

三十八

青藍舍藏

薨未數年至於寶永年間有松並勘十郎之禍  
而勘十郎京師人長於功利處士遊江戶公聘  
者士民憤怨遂以寶永六年被逐者頗衆其  
壞紀綱害風俗蔑如典章以貽邦家之辱者臣  
子實不忍言焉成公夙以聰明之姿懷有爲之  
志享保之政翕然可觀不幸享年不長公年四  
襲封僅三歲政出於巨室以故元老以下頗營  
其私門寬保寬延之餘毒今猶或存焉公既親  
政其聰明英武蓋不出於成公之下今拜觀其

手錄筆記公之頭取及奧右筆掌焉小其奉公之

誠圖治之志可謂勤矣昔者唐主李隆基勤於  
開元惰於天寶論者憾焉公亦有始而不能有  
終或曰當時大臣憚公之英明佞媚迎合遂以  
宴安逸樂蕩公之心理其或然悲夫文公恭儉  
自率慈仁撫下兩野常陸間之產孽慘毒尤甚而民  
習以爲常恬然不怪公深慨之不能命郡官市給司等  
資猶准行凡民有賴以活者上者褒褒賞其官云其  
讀書右文義公以來不有其比初義公補千歲大日  
於缺典然以其書多而私撰不得後公諸學世其傳其任

回天詩史

卷之下

三十九

青藍舍藏

館職曰總裁曰編修實不足副名文公好文高一  
橋廣備先刊臣脩之事校倫和補其後公遂委  
年乃間上其先就藤公取木獻於天進獲傳書名公  
公繼述公之志也當時大將軍文恭富於春秋  
十四位白河源侯號松平越中守名定信致仕居宰  
輔之任援三藩之君以倚賴焉今恭觀公親筆  
秘錄亦藏於秘府以藏分部納諸桐匣其  
有裨益於天下者不可勝數矣其於國政亦不  
乏美事而公承奢侈之後財用不足功利之徒  
或乘之而起遂累公之德者或有焉然在位三

之間勢不得甚傾而弊漸素之則用盡公稟性

貝變一國之作修文藝奮正術持爾嘉服以爲



中興之嚆矢。於是日夜孜孜。從事於此者。十六年一日也。而群臣材器德量。副公之盛意者不衆。以故其施設之間。雖不能無緩急違序寬猛失用之類。而至於其脩文奮武盡忠於天下。則三百諸侯。恐未有及公之用心者。此非臣彪諛言。識者苟因其事業。而察其情實。則灼然可知也。而蒼蠅集落。萋斐成錦。忽然羅織今日之禍。威義二公而有靈。則臣彪見其怒髮上衝。瑞龍之巔也。每一念及此。歎息痛恨。不能自己。因徐繹公之所以蒙禍。幕府諸臣忌公之大志者。蓋非一朝一夕之故也。公嘗慨山陵之荒廢。圖其修覆。而欲先脩畝傍陵以序。及他陵。因下野處士蒲生君臧。名秀實。一世之奇士。文化中沒於江戶。所著有恤緯山陵志。職官志及革弊諸論等。所著山陵志。辨其方位及遠近高低。適桑原信毅。見於上。祇役於京師。躬至畝傍陵。或詢之於土人。或參之於舊記。以貝原篤信之說。詳於篤信所著大和迴松爲可據。始辨山陵志之謬。下見林之說亦同。蓋篤信之時。山陵雖廢。其址猶存。至於君臧之時。其址亦亡。所以有謬。信毅筆其說爲一卷。因彪上之。時公既建議於幕府。至是屢促之。其說

回天詩史 卷之下

四十二

青藍舍藏

以爲自神武天皇辛酉元年。至今二千四百九十餘年。近年庚子之歲。將盈二千五百。宜及斯時脩其山陵。以明忠孝於天下。今議者或謂尊天朝。則幕府失威。惡是何言也。山陵荒廢日久。天下忠義孰不欲培一抔報國恩。而不能爲者。憚幕府也。萬一不軌之民。或唱禍難。首脩山陵。以義倡於天下。則豈非幕府之大耻耶。然則尊天朝者。所以明忠孝以絕非望之念。天下人民將益服幕府之義。而何失威之有。幕府遂不能用公之說。居數年。太上天皇崩。公聞之。又建葬祭之議於幕府。又寄書謀於關白藤公。公深感公之忠。蓋入乙夜之覽云。藤公以爲葬祭之禮。難遽復古。至於諡號。則不可不奉也。乃議之於關東。又使公贊成之。幕府不敢違。遂奉諡曰光格天皇。彪按。諡號之議。必有京師公卿慨然倡而亡幾泉涌寺災。公欲因以廢其佛刹。清其地。又謀於關老與藤公。事遂不果。公之斯舉。皆出於忠孝之誠。而自其忌者而觀之。則益忌焉。乙酉正月。公發令脩武庫器械。又閱藩邸士大夫戎衣。二月十二日。是爲東照宮拜征夷大將軍。

回天詩史 卷之下

四十三

青藍舍藏

於無窮故公親授甲冑拜東照宮遺物於後樂園之琴畫亭元老以下皆戎服謁見或賜盃或賜餘瀝而退每歲以爲恒例居數日賊大搃平

八郎結黨構難於大阪近畿騷擾關左亦爲之紛然戎衣兵革之價驟相倍徙於是人皆服公

之先見而自其憚者而觀之則益憚焉丙申歲大饑戊戌亦饑關左尤甚

錢江戶米價騰貴至三升於

奧羽兩野之民扶老携幼爭赴江戶者陸續不已米穀愈乏餓莩盈路一日公登城自轎中視

之路公駕有不出所出前一命去若其不可過則

回天詩史 卷之下 四十四 青藍舍藏

易其所過之路公駕既出後有送死者適當其前則命避之旁侯駕既出後有送死者適當其前

君雖大狗之屍不得易其目太平習俗然也

爲其雖多餓死公駕履其目定路既而死屍盈衢地處無公始視之其破格可過知也

歸邸之後猶悽然不樂召有司曰封內之民得無餓死乎對

曰未也然米粟日乏臣等日夜憂之公曰食盡而餓寡人無如之何苟食未盡而有餓莩奚在

於爲民父母也乃賜手書於郡宰勵以至誠郡宰亦竭力賑恤既大開稷倉

創俗稱義公所在苦於以新易舊其積荒之術世多其說而利之

之臣或視以爲無術必生貨人收息甚則變米粟

回天詩史 卷之下 四十五 青藍舍藏

爲我金穀則以年一取定之額於民實之政是以不遂若

似年拙而豐稷之爲日則經其百歲久而無利欲之

今飢餓數十年之而國味免飢而飽之患義公創建

倉居以多則其年似拙而米價可置甚巧倉以政者設

被則庶乎矣賑之又豫設賞科令富民救貧窮又散

境無一人餓死者其餘澤波及境外傍近之民者亦不

而觀之則益妬焉庚子歲公就藩請介冑講兵於野幕府允之以每年三月大蒐於城南仙坡

回天詩史 卷之下 四十五 青藍舍藏

原四方來觀不知其幾萬人巨礮之聲或震於北總

下無比而自其嫉者而觀之則益嫉焉壬寅歲幕府發令使濱海之國嚴其海防公嘗毀封內

銅佛及梵鐘鑄以造煩銃議者或難之公曰昔者大猷公使松平豆州毀大佛以鑄錢無他變

無益爲有用也且夫佛能濟度衆生鐘能戒怠惰今變而用諸海防鑿腥膻之夷賊濟神州之

生靈以振起天下之怠惰其用不亦大且廣乎於是人皆服公之識而自其憤者而觀之則益

回天詩史 卷之下 四十七

回天詩史 卷之下

回天詩史 卷之下

回天詩史 卷之下

回天詩史 卷之下

回天詩史 卷之下

回天詩史 卷之下

回天詩史 卷之下

回天詩史 卷之下

回天詩史 卷之下

回天詩史 卷之下

回天詩史 卷之下

回天詩史 卷之下

回天詩史 卷之下

回天詩史 卷之下

回天詩史 卷之下

回天詩史 卷之下

憤焉。公夙有興隆神道之神道非其大所謂神道者所流

作弘道之志。蓋威公每當受神道於萩原兼從

之遺志而義公之所述也。至是神祇祭儀混於

浮屠者。務歸清潔。逐破戒之僧者若干人。其畏

罪自逃者。亦若干人。毀佛寺者前後二百數十

區。其所謂修驗之徒。或轉爲祠官。或降爲農夫

之類。不遑枚舉。葬祭之禮。殆布於都鄙。於是人

皆服公之果斷。而自其怒者而觀之。則益怒焉。

其他正二百年紛淆之經界。建三千載未嘗有

之學校。公之於國事。經界尤爲大業。而經

回天詩史

卷之下

四十六

青藍舍藏

從事於二大業。以故頗詳其本末曲折。而非百

千言所能盡也。請別論述二事。使後人有所考

復不贅。凡公之所爲。皆出人意表。其所謂忌憚妬

嫉憤怒者。環而讒之。則公之遭奇禍。亦非偶然

也。雖然今日之事。豈公一身之禍哉。抑獨本藩

之不幸哉。噫。五月二十三日。二十

人生得失豈徒爾

公之致仕幽居也。元老以下獲罪於幕府者七

人。見於而戶田今井與彪就禁錮。蓋亦有以也。

初文政季年。戶田爲大番轉目附。以其不請而

赴江戶。落職家居。亡幾爲近臣。事通

遂歷用人側

用人參政。擢爲執政。班上大夫。今井初以遊倅

給事公於龜間。及公立爲馬廻。轉與右筆。入爲

近臣。次番及歷勘定奉行用人。遂爲參政。班中

大夫之上。出爲寺社奉行。班猶仍舊。彪初以進

物番。補史館編修。轉郡宰爲近臣。事通任政府吏

乍免職。又乍擢爲側用人。遂班下大夫之上。封

建之制。世貴門地。人重閥閱。官職轉除率有定

格。蓋中大夫之家。或得爲上大夫。而下大夫之

家。亦或得爲中大夫。餘皆視之。戶田之先。與信

州松本侯。松平丹波守同族。以太田備州之薦。始事

回天詩史

卷之下

四十七

青藍舍藏

威公。頗稱閥閱。而家世不過上士。今井之宗。以

醫事義公。今井之祖。以其餘子。別賜俸祿。家世

中士。而間亦有爲上士者。彪則先子解褐。以文

學始事文公。以其職類近臣。班通事耳。通事之

簡頭小十人頭之間。以故自稱三人之職事。班

次雖不同。因其門地論其定格。則其寵榮可謂

皆極矣。一國愕然。不嘲則罵焉。環而讒之者。非

一朝一夕。則平居無事。猶恐不知所稅駕。況時

勢一變。我公猶且有今日之禍。則三人之免死。

固爲大幸。其就禁錮。豈徒爾哉。有客難之曰。子



之說不爲亡謂也。然公之用人不必拘門地。其起自士。超遷至大夫者。不止子等三人。而未聞其人獲罪於幕府。亦有說乎。主人應之曰。子不見彼卉木乎。方大風雨雪之時。其枝幹軟弱者。東西披靡縱橫低垂。無復折傷破碎之患。至其剛強者。屹然不屈。確乎不動。其不摧幹拔根者。殆希。居吾語子。沈深寬弘。舉止嫻雅。愛人容物。則今井藤田不如戶田也。風岸孤峭。直言抗議。清潔無私。則戶田藤田不如今井也。粗通古今。頗達事體。立志不變。則戶田今井恐不如藤田。

回天詩史

卷之下

四十八

青藍舍藏

也。要之皆屹然確乎之士。假使敵國伺我。不除斯三人。則水藩之事。不易遽圖也。至於彼便嬖阿諛之臣。則東西披靡者耳。縱橫低垂者耳。昔者菅公起自文章生。致位三公。而忠憤剛正。遂以取禍。設使菅公少自貶阿藤氏之黨。則豈有西海之謫哉。而公不遭貶竄之禍。則安能得使其盛名千載傳誦不已哉。由是言之。我公之遭讒。未可必弔。而三人者之就禁錮。亦不爲甚不幸矣。客罵曰。戶田今井吾未知其人。觀子之慙。愚自信愈篤。則子之不免於禍也。信非徒爾。主

人爲之默然

五月廿五日錄

自驚塵垢盈皮膚

余嘗讀柳宗元文。至於其叙謫居之苦曰。一搔皮膚。塵垢盈爪。愛其文之極奇。而疑其言之浮實也。今處實地。始信其言之不妄矣。余之被禁錮也。既自閉戶默處。亡幾監察府僚吏率工而來。檢視舍之東西及南北隣之境。凡有寸隙者。皆以板塞之。最後又以板掩門戶。固釘而去。雖奴僕。理不能出入。然米鹽不繼。薪水不通。飢渴而死。則亦恐非所禁錮之意。於是請北隣主人

回天詩史

卷之下

四十九

青藍舍藏

鱸氏竊穿其牆。潤可橫身。余衣家素質。至是益窮。者沽却通殆盡。猶有一俗吏與余約。賣其於一買。而無門戶。可通乃止。一俗吏與余約。賣其於一買。而無甚。何哉。必先沽却之迂也。苟欲得其術。則不可券。曰。凡取貨於己。貨金於子。奚在。其爲質。僕今恃一紙券。舍又待金。於夫。子。之。奚。在。其。爲。質。僕。今。恃。一。紙。券。而。每。乏。酒。錢。熟。視。之。輒。自。失。耳。亦。可。憫。笑。復。自。是。奴僕得因鱸氏之門而出入。然監察僚屬時時巡視舍外。以故家奴汲井。率不過一日一再。僅供朝夕爨炊之用耳。余以本月二日發家。而前數日獲疾。以故不浴者殆三旬。今既瘳矣。爲水之乏。僅盥漱洗面而止。當是夏日。蒸熱逼人。發



汗淋漓。衣服日污。臭氣衝鼻。因一搔皮膚。則蝨亦入爪。不啻子厚所謂塵垢也。古諺云。湯沐具

而蟣蝨相弔。余之具湯沐。不知在何日。則蟣蝨

相慶。而樂年豐於禪衣之間。必矣。亦可一笑。因

忽憶前月念七。訪武田伯道於箕川。伯道固與余友善。而

以余小妹歸於其長子正勝。今爲姻戚。其宅本在黒羽根街。箕川本妙雲寺之地。及去歲癸卯。

毀妙雲寺。遂移而居焉。伯道携酒肴而出。餞余

於綠岡之傍。適原田在座。蓋二人竊患余之行。

離情尤切。殆有易水之趣。而余亦不能無怒髮

衝冠之態。酒酣耳熱。原田出一大紙。乞余書。余

回天詩史

卷之下

五十一

青藍舍藏

爲書文天祥正氣歌。寓余心事。以爲留別。當時

余唯取於天祥正氣凜凜。殺身成仁。今而思之。

其所謂夏日諸氣萃然四集者。亦似爲余今日

之兆。可謂奇矣。抑余之舍雖矮。比之於天祥土

室。猶玉堂華屋。則塵垢之盈爪。蟣蝨之侵膚。未

足以吾正氣敵之也。五月二十日錄

猶餘忠義填骨髓

蘇軾有言。道理貫心肝。忠義填骨髓。直須談笑

於死生之間。余深服斯語。亦舉以勵子弟。以爲

蘇子斯語。可以註孟子浩然之氣也。夫浩然之

氣。孟子既曰以直養。又曰集義所生。又曰配義與

道。其所以示人。反覆丁寧不一而足。推其說則

大學所謂心廣體胖。中庸不愧屋漏。論語內省

不疚者。皆浩然之地。而非胸中別有一箇盛大

之物也。後世黃吻耳學之徒。或以豪放磊落跌

蕩不羈者。爲浩然之氣。大非孟子之本意。何者

豪放跌蕩之人。固愈於小廉曲謹。稱鄉愿者萬

萬。而苟欠慎獨內省之工夫。則不能無行不慊

於心者。小不慊則斯氣欲然餒於中。安在其爲

浩然哉。夫浩然之氣。以下先子必道理貫心肝。所持論。今舉其大略。

回天詩史

卷之下

五十一

青藍舍藏

忠義填骨髓。然後正氣充實於中。及其至。則可

塞於天地之間矣。余嘗讀蘇子之書。尤愛其策

略之論。謂苟使其說行。則趙宋豈有他日播遷

之禍哉。既不能用其人。又併廢其言者。非獨蘇

氏不幸也。抑方王安石用事。一觸其邪說者。無

有噍類。蘇子兄弟。奉其家學。確乎不變。屢貶竄

於瘴厲魍魎之鄉。而心腸鐵石。胸襟風月。超然

於事物之表。其所謂談笑於死生之間者。不爲

夸也。而世之稱蘇子者。或取於其風流。或取於

其文辭。至於其甚。則徒愛其書畫。以爲玩好。昔時

先輩聰明若熊澤伯繼猶目蘇子以一是奚異  
詩人蓋伯繼不讀其策略等之書也

於取皮膚而捨骨髓。夫士有大策略大節義。然後可以與言文采風流矣。不然則與彼俳優者奚擇焉。此彪平日所持論。客舍兀坐無書可讀。杜門屏居無友可談。朝夕所追隨唯一片耿耿之氣耳。聊舉以相發培養浩然之地云。五月廿六日錄

### 嫖姚定遠不可期

文化初年。鄂羅斯屢到蝦夷地方。北邊騷擾。先子嘗有歲旦之詩曰。春來一夜斗迴杓。北顧還憂胡虜驕。投筆自憐班定遠。忘家誰擬霍嫖姚。

### 回天詩史 卷之下

五十二

青藍舍藏

長蛇應畏神兵利。粒食曾資瑞穗饒。字內至尊天日嗣。須令萬國仰皇朝。先子夙憤北虜有圖南之志。寬政年間。上書於文公。極陳備豫之計。至是夷虜猖獗日甚。先子慷慨自奮。鬻書裝甲。沽衣買鞍。竊有馳驅朔漠一掃胡塵之志。其詩中所謂以嫖姚定遠自期者。非寓言也。亡幾北陸有丁卯之變。西邊有戊辰之警。其後十餘年。文政初。黯厄利亞航海。再抵相之浦。賀亡幾又上我常北大津之陸。又上薩之寶島。掠牛而去。其誘漁民於海上。陷以珍異之物。或授以邪教。

之書。或鳴巨礮震驚內地者。無歲無之。乙酉之

春。幕府大發攘夷之令。凡外夷之船近於海濱者。一切發砲碎之。且嚴禁漁民竊貿易於洋中。自是虜舶不復近海岸。但時見帆影於遠洋。窈冥之中耳。夫西北虜情之可惡。非一朝一夕之故也。天文以來。洋夷天文十二年癸卯八月南蠻始傳鳥銃蓋是為洋夷觀我之始當時稱南蠻者蓋伊爾斯把爾亞波留杜瓦留之類併南蠻諸國其針路皆自南方也乘戰國擾亂。屢航海而來。漸布其邪教。至弘治永祿間。若大友宗麟小西攝津守亦奉其法而布之於國中。織田氏

### 回天詩史 卷之下

五十三

青藍舍藏

亦嘗試其法。而其聰明忽察其姦邪。欲禁其教而不果。豐臣氏始設其禁。務驅除邪教之徒。而洋夷狡黠。潛匿各所者未盡除也。東照宮深察其害。大令於天下搜索追捕。命板倉伊賀守山崎長門守按驗畿內及諸國。苟奉其法者。皆執而斬之。於五條河原。既而又毀其教寺。在長崎及各所者。破碎其佛像及什物。而邪教之蠱惑民心者。牢固不拔。至於寬永年間。遂有鳴原之變。內地之民以奉邪教遭刑戮者。至是前後二十八萬人云。其禍毒可勝言哉。大猷公脩東照

宮舊典。益明邪教之禁。又始設外夷之禁。凡蟹文之國。一切拒絕。不得復窺窬。獨以和蘭教法與西洋諸夷異。其宗特許往來長崎。通有無。以爲洋夷間諜。使其歲書西洋事情。以上於府。然虜之桀驁冥頑者。猶或犯禁而來者。不啻一再。當時國威方熾。必火其船。磔其人。無有噍類。洋夷寒膽。不窺邊陲者。百數十年。承平日久。武備稍弛。於是鄂諸二夷復垂涎於我。而我苟一日之安。或諭而還之。至於其甚。則給薪水米菓而遣之。徵乙酉之令。則東照大猷二公之貽謀殆荒矣。我納言公夙慨然有攘夷之志。深體祖宗之意。又洞察洋夷之謀。以爲夷之出沒海上。禍心不測。其守備不可不嚴也。然假使彼侵沿海之地。燒我廬舍。害我人民。勢不得久住內地。又假使彼據內地。守要害。我人心憤怒激昂。勇氣百倍。苟爲將帥者。善用其鋒。因機制變。以我所長。衝彼所短。則我可以得大捷矣。抑又使彼日往來海上數十里之間。連艦鳴砲。張虛聲以震驚內地。其始也濱海騷擾。不堪奔命。其終也不過肅然不動。使彼自疲於往來。要之彼勢不得

回天詩史

卷之下

五十四

青蘆舍藏

不上陸地。決勝敗。則我亦可以逞志矣。由是言之。虜之出沒海上。非不可惡。而其禍不甚大也。今夫蝦夷地方者。神州北門之鎖鑰。而委之於一小諸侯。而諸侯又委之於商賈。以貪互市權場之利。今鄂夷既開府於加模沙徒加。又進據宇留圖不。其先鋒既逼我惠登呂府之北。宇留圖不。此地蝦夷人嘗爲漁獵之場。其地而蝦夷人亦來互相漁獵。今鄂夷作爲廬舍。專據其地。蝦夷不得復往。云。寬政戊午。幕府使近藤十藏守重。按蝦夷北。到惠登呂府。幕府既建。其十藏守重。按蝦夷。我水戶村謙從守重。而大行守重。命謙拔府字。柱。易以木標。謙執筆。大書。而日。本。惠登呂府。此。距今四十七年。而鄂夷用心。既已如萬一彼稍

稍蠶食。併吞蝦夷。則松前既失其府庫矣。松前不守。則三廐之外。皆爲敵國。此其禍豈可與窺窬邊海者。同日而語哉。因竊講其策者。日久。初哀公季年。國用不足。有司謂本藩封內幅員。比之尾紀二國。廣狹懸隔。而儀仗鹵簿。及諸事。與二國頡頏。成鼎立之勢。所以常苦於窮乏。元和建甕。威公尙幼。倘使東照宮。迨見威公之長。則其增封也必矣。因有請增封之議。而哀公薨。至是國用告急。有司復爲以請。公曰。土地人民。所以賞有功。夫三百諸侯之浴恩澤者。皆非其祖

回天詩史

卷之下

五十五

青蘆舍藏



先蹈鋒鏑。冒矢石。則有勳勞於社稷也。今寡人以父祖餘澤。備員三藩。無毫髮報幕府。而徒以窮乏望增封。何以示訓於諸侯。無已。則蝦夷地方乎。有司愕然。公曰。居吾語汝。昔者大猷公戒長崎奉行曰。內地戰爭。彼此勝負。皆其一家之幸不幸耳。至於沒土地。人民於夷狄。則日本之辱孰大焉。雖一寸一口。以死守之可也。夫蝦夷千島本我神州之地。其加模沙斯加者。既出於蝦夷方言。則其地亦安知非源豫州所經略。源豫州實不死於奧州。竊逃於蝦夷。今蝦夷之俗極愚癡。而曰義經則尊崇不啻世之所傳。亦傳世之

愚者漸智。弱者日強。不出十數年。而宛然爲一大國也。必矣。而自非櫛風沐雨。凌寒冒雪。辛楚艱難。從事於萬死。則其大業不易致也。則雖請之於幕府。無愧於心矣。因出所嘗講之策及地圖一匣。示有司。有司愈益恐怖。公遂書其由。以謀於閣老。故小田原侯。大賀久保實天保五年也。侯得公書。亦大驚。以久保忠臣曾語余。時忠臣原侯。侯每讀五六行。且驚且感。遂謂忠臣曰。有君如此。其於國事何事不可成。忠臣侯之同族。獎勵云。然侯近來名宰輔也。常慨洋夷之跋扈。乙酉之令。蓋出於侯決斷。以故亦深感公之用心。出人意表。迺往復辨難者數矣。其大要以爲往年幕府以松前家微弱。不能當折衝之任。徙之於梁川。新置松前奉行。從事於鎮撫開拓。既而又還之於松前家。今欲嚴其鎖鑰。則有循往年故事耳。然長崎奉行二員。每難其選。而更置松前奉行。恐乏其人。公又難曰。昔者東北海路未通。故外夷之患常在長崎。方今蝦夷直與鄂夷爲隣。則今日之患在松前。而不在長崎也。幕府復置松前奉行。鎮之。則社稷之福何加焉。今姑息偷安。既不能置奉行。徒以之拒寡人。不亦



異乎。其相見於城中。亦屢以爲言。侯持重。未有以遽對也。亡幾。侯病卒。

滿州其後往來邊陲從事無可復致力也卒川路語余曰小田原往矣我輩不可復見也公

聖謨亦謂余曰自今以往才可用事之人或公

又謀於濱松侯。上見於侯。大是公之說。蓋侯沈鷺

有智略。慮公之銳氣不可當。暫避其鋒耳。而公

自信愈厚。有暇則按地圖審形勢。時或寓鷹獵

習身於祁寒霜雪。彪雖孱弱。嘗服先子之遺訓。

加之。以公之鼓舞作興。於是與二三同志之士

回天詩史

卷之下

五十八

青藍舍藏

日也。四五年來訛言流行。以爲黠夷將護送我民。漂泊夷地者。又清國爲黠夷所侵。大取敗衄。其說蓋出於蘭夷。壬寅歲。幕府廢乙酉攘夷之令。用寬政文化之令。於是濱海之國。不得輒碎虜舶。天下有志之士。索然而解體矣。公歎曰。天下之事不可爲也。若一國則不可不盡力。迺陳狀於幕府。謂封內民俗愚戇。而漁父饕丁尤甚。日布攘夷之令。猶恐或昵夷人於洋中。今廢其令。則貿易之姦決不可防。請暫沿乙酉之令。以全愚戇之民。幕府不能制也。公益脩武備繕器

械。新鑄大砲者若干。議者或諫以銃數過多。公

哂而不應。蓋公之志在極北千里之外。不啻封

內二十里之海港也。國中之人猶不能察公之遠

略。則讒間之所由生。不爲亡謂矣。前月中閣老

阿部勢州詰我元老中山氏以七事。其一則曰。

公未絕蝦夷之念耶。由是觀之。公之大忠。所以

來幕府之大疑。而蝦夷之事尤爲有司所忌。可

知也。嗚呼。公屈萬里飛揚之志。幽處別邸小室

之中。彪等亦不得探虎穴。而偃蹇於蝸廬之下。

夫天未欲驅除醜虜乎。然則黠夷窺窬邊海者

回天詩史

卷之下

五十九

青藍舍藏

何日而攘。鄂虜蠶食北陲者曷時而遏。東照大

猷二公之靈其謂之何。杞人嫠婦之憂其可已

哉。五月廿七日錄

丘明馬遷空自企

嗚呼。嫠姚定遠既不可期。則此筆豈易投哉。司

馬子長有言曰。昔西伯拘羑里。演周易。孔子厄

陳蔡。作春秋。屈原放逐。著離騷。左丘失明。厥有

國語。孫子贖脚而論兵法。不韋遷蜀。世傳呂覽。

韓非囚秦。說難孤憤。詩三百篇。大抵聖賢發憤

之所爲作也。此人皆有所鬱結。不得通其道也。

當是時。子長亦遭禍。幽於縲紲。所以有斯感。而其史記五十餘萬言。永傳於後世。子長豈欺我哉。夫人之業。情於安樂。勤於危苦。志立於寡欲。廢於多念。故困厄作。知命之端。不遇爲發憤之地。尋常行路之人。猶或然。況於純明剛毅之士乎。故曰。天將降大任於斯人也。必先苦其心志。勞其筋骨。餓其體膚。空乏其身。行拂亂其所爲。子輿亦豈欺我哉。後世脩史述作。不及左丘司馬者。非啻其才學之高下深淺使之然。蓋其苦心發憤。有所不足。而其鬱結於胸中者。或有所

回天詩史

卷之下

六十一

青藍舍藏

泄於外也。昔者蘇子美讀漢書。至於張良狙擊秦政。則曰。惜乎擊之不中也。因滿引一太白。至於感君臣相遇之難。則亦復滿引一太白。蓋讀史者如此。而後爲善讀史。余謂讀史猶然。況於修史乎。大之神聖經綸之業。明良輔弼之蹟。小之風士民俗之美惡。錢穀布帛之消長。自忠義孝烈賢良方正之言行。至於亂臣賊子讒佞姦邪之心術。凡事之關治亂盛衰者。必如身處其間。親視其曲折。或籌其謀略。或畫其形勢。尙友其人。尙論其世。一言不輕發。一事不妄叙。則文辭

雖不甚巧。可以傳於不朽而無愧矣。若其不然。則癡人之說夢也。俳優之奏技也。何足以觀世變。明時勢。垂勸懲於將來也。恭惟神州質勝其文。其正史足取信者。寥寥固希。而六史以下。炳焉如日星者。未有及我大日本史者也。其曰鈔日記。其他家乘日錄。汗牛充棟而巍然如山嶽者。莫神皇正統記若焉。正統記之神州龜鑑而正名分實爲神州龜鑑而正名此無佞佛之累。嗚呼。卓識如准。人可畏哉。源准后素懷忠貞之節。遭世之喪亂。間關流寓千里漂泊。仰歎皇道之陵遲。伏憤奸兇之驕恣。想其痛心發憤。果何如也。我贈亞相公。天錫勇智。兼文

回天詩史

卷之下

六十一

青藍舍藏

備武。雖身在外。乃心王室。而九重深遠。不能效節於本朝。群小側目。不能展力於霸府。遠大之畧。抑而不發。有爲之志。屈而不伸。嗚呼。二公所鬱結。旣已如此。則忠憤之所發。懸而爲日星。峙而爲山嶽者。非偶然也。彪雖鹵莽。然胸中所鬱結。勢不得不發。諸刪述。苟得附驥尾。鞭駑馬。仰炳焉之餘光。託巍然之末塵。則志願足矣。非所敢望也。五月二十九日錄

苟明大義正人心。皇道奚患不興起。

斯心奮發誓神明。古人云斃而後已。

嗚呼我公之所以遭禍者。彪既粗言之矣。然則王室陵夷者。不可復尊乎。蠻夷猖獗者。不可復攘乎。幕府之政。讒慝日行。異端之說。浸淫益甚。而神皇所以經綸天地。控制宇內之道。湮晦否塞。不可復闡明。開通乎。曰。奚其然。物有本末。事有終始。天尊地卑。日月昭明。彝倫猶存。苟能反其本。通其末。厚其始。要其終。允執其中。以明大義於天下。則王室可尊。蠻夷可攘。幕府益昌。異端自衰。而皇道之隆。可企首而望也。請言其畧。

回天詩史

卷之下

六十二

青藍舍藏

謹惟天祖天孫之盛德大業。八百萬神之鴻勳偉績。今不可得而詳。然載在古典者。昭然不可誣也。神武天皇。敬神奮武。恢弘天業。奠都秩祀。開萬世之基。崇神天皇。加之以厚生利用之政。黎庶樂業。蠻夷率服。應神天皇。取於人爲善。始闡儒教。仁德天皇。謙讓慈仁。四海悅服。當是時。大義明。人心正。德澤中洽。威武外振。豈不盛且美歟。及欽明天皇之時。佛教西來。使我人民。奉其胡教。拜其胡鬼。幾何其不率爲夷狄也。是中國二氏之所以憤激諫爭。天皇明斷。撻其僧徒。

燒其伽藍。毀其佛像。而奸臣蘇我佞其教。一意

尊崇。遂以瀰漫。遺永世之禍。而子孫罪惡貫盈。遂構天地以來未曾有之禍。佛教之害。可勝言哉。天智天皇。慨然懷廓清之志。中臣鎌子。輔翼贊成。攘除姦兇。大振皇綱。爾來明良相踵。世濟其美。大化大寶之治。冠絕古今。當是之際。在上之人。能明其本末。原神皇之道。翼之以周孔之教。明國體。叙彝倫。以定其典章制度。則佛教雖狡。自委靡潰敗。無所施其能矣。而當時徒眩西土之文華。捨此取彼。摸倣是務。譬諸山林之人。

回天詩史

卷之下

六十三

青藍舍藏

羨市井之繁盛。衣服居室。凡百器用。悉倣商賈風俗。以爲得計。特不知子孫捨本趨末。利口捷給。泯然失淳厚質樸之故態。豈不大可憾乎。且夫物之美者。易消。而惡者易長。天地之常理。正直者憚而踈之。邪曲者狎而親之。亦人之常情也。然則明皇道資儒教。以臨天下。猶恐惡者之長。而邪曲之不禁也。而當時未聞有其舉。其於佛教。則既營寺觀於畿內。又建國分寺於各國。舉兆民之衆。納之於釋氏之軌物。宜乎其浸淫人心。牢固不拔。至今日而不悟也。夫神皇之道。



聖賢之教。尤重祭祀。配之於政教。而釋氏既奪祭祀之權。用之於朝野。施之於政教。神皇之道。僅委諸祠官。周孔之教降而爲博士之業。皇風之不振。大道之不明。職是之由。中葉以降。皇綱解紐。權歸藤氏。藤氏衰而平氏盛。平氏滅而源氏興。而兵馬之權。遂歸武人。後醍醐天皇憤陪臣跋扈。奮英偉之畧。藉忠義之力。天下翕然。再仰望太平之隆。而中興不遂。併其政柄兵權。爲霸府之有。其間政體萬變。運有污隆。而皇室之所以衰。未嘗不由大義不明。人心不正。異端邪

回天詩史

卷之下

六十四

青藍舍藏

說。蠱惑風俗之故也。應仁以來海內麻亂。豪傑並爭。民之苦於塗炭亦甚矣。織田右府雄斷果決。深惡佛氏之害。燒伽藍。戮僧徒。天台淨土。膽奪氣索。我東照宮聰明英武。救民於水火。以開太平之基。洞察西洋邪教之害。嚴其禁令。大猷公脩其遺緒。一切拒絕。狡黠夷類。二公之於邪教也。芟夷驅除。夷戮殄滅。永絕其根本。不令遺種於神州。其功烈豈不大哉。我義公亦惡異端之傷風俗。大廢淫祠。逐奸僧。其毀佛寺。以千數矣。今納言公脩其緒。又逐僧毀寺者若干。蓋自

欽明帝燒伽藍毀佛像。千百餘年。而始有織田氏。尋有東照大猷二公。又尋有義公。又百數十年。而有納言公。東照大猷二公之功烈。非所敢贊也。而納言公與義公。非有霸府之權。將軍之威。僅守東藩彈丸之地。欲除千餘年之宿弊於一國一郡之間。其勢實難矣。織田氏雖有其權威。然不察禍毒之所由來。欲徒以兵力鋤之。抑亦難矣。至於欽明帝。則其禍猶小。其毒猶淺。苟使當時芟夷驅除。若慶長寬永之於洋教。則蘇我雖驕。僧徒雖狡。將垂頭就戮之不遑。而隱忍

回天詩史

卷之下

六十五

青藍舍藏

姑息。遂養成滔天之禍。豈非千古一大遺憾哉。所恃者神皇在天之靈。赫赫照臨。敬神之俗。未盡喪。奮武之風。未必沮。仁厚勇猛。忠義孝烈之士。往往出於其間。天地之正氣。亡於彼。存於此。廢於前。興於後。以維持神州之紀綱。何也者。夏之尙忠。殷之尙質。周之尙文。皆至其末世而不可變者。苟變之也。不衰則亡矣。神州尊神尙武之政。萬世不可變者也。極天不可易者也。今皇道雖衰。天祖之訓。萬世罔墜。民之仰勢廟。與天日無間。名神大祠之在。各國者。威靈如在。上自



朝廷大嘗諸祭。下至於閭巷。所謂神事祭禮。上古之風。猶或可徵。天皇即天祖之胤。臣民皆群神之裔。故尊神之義明。則皇室自尊。異端自衰。忠孝之教立。而神皇之道興矣。抑古者尙武之俗。冠絕宇內。亡論也。而釋氏柔和忍辱之教。或折其鋒。和歌者流。浮靡淫惰之習。又從而移其氣。公卿百官。手不知兵。尙武之俗。一變移於武家。然猶亡於室而存於堂也。故胡元之窺我也。先斬其使。以明示與彼絕。戒諸國嚴兵備。遂殲十萬之衆於西海。朝鮮之無禮也。航海遠征。八

回天詩史

卷之下

六十六

青藍舍藏

道驚潰餘威。震明國。洋夷之藏禍心也。火其船。戮其人。醜虜破膽。今者承平日久。風俗偷薄。尙武之俗。或讓古焉。而因循不察。萬一失其存於堂者。則姦民狡夷。將有起而拾之者。豈可不寒心哉。孔子曰。必也正名乎。今日武家。則尙武之風。不可以不振。曰弓馬之道。則將帥之術。不可以不講。當獎學之任。則五典之教。不可以不明。奉征夷之職。則膺懲之典。不可以不脩也。故尙武之風振。則幕府自昌。夷狄自遠。天地之正氣充。而神州之紀綱張矣。此其大較也。若夫施設

之緩急與運用之巧拙。固存乎其人。唯至於其以尊神尙武爲政教之根本。以明尊攘之大義。則臣彪質諸鬼神而不謬。百世以俟其人而不惑。資質雖駑。竭畢生之心。極終身之力。從事於斯。將上以報國家之鴻恩。下以述先臣之遺志也。所謂斯心奮發。誓神明。斃而後已者。豈徒乎哉。豈徒乎哉。

五月二十九日  
六月初九日  
錄畢

回天詩史

卷之下

六十七

青藍舍藏

回天詩史卷之下 畢

先子遭厄貶謫其述此書雖固出於遣悶泄鬱之餘平生出處進退之大節亦可以概見矣世已有二三刻本然誤謬頗多健常以爲憾焉今就先子手定本校訂以付印刷嗚乎先子即世已三十有餘年矣去歲己丑紀元節有贈位之榮今茲庚寅聖駕東幸亦有祭粢之賜顧其寵命之所以屢降者安知非由此等書或瀆乙夜之覽哉先子而有知則其感激於九泉之下者果何如也

回天詩史

青藍舍藏

明治二十三年十一月 男 健識



明治二十五年五月~~四~~<sup>五</sup>日印刷

明治二十五年五月~~五~~<sup>六</sup>日出版

定價金四拾錢

著者 故人 藤田 誠之進

印刷兼發行者 茨城縣士族 藤田 健

東京市本所區本所北二葉町三十四番地

發行所 野史臺

東京市神田區猿樂町十一番地

正誤

十九丁	竣事ハ竣事ノ誤
二十三丁	太子ハ太子ノ誤
四十三丁	乙酉ハ丁酉ノ誤
六十丁	風士ハ風土ノ誤
六十四丁	博士ハ博士ノ誤

三谷良朴 著

和漢茶誌

享保十三年（一七二八）京都刻本



據享保十三年（一七二八）  
京都刻本影印

和漢茶誌序

茶道出矣。自盧瑩玉蔡丁歷之。而  
中邦珠光。不之其人。終通文藝。未  
解。今後世。茶人徒以爲茶。禮。故。平。然  
而。不知其源。故。中。每。有。其。出。如。未。識  
傳。學。人。本。之。少。都。根。瑣。破。不。已。親。也。王。之。家。

大序一

宋。德。氏。自。知。嗜。斯。道。且。深。好。文。學。今。仕。于  
華。州。明。府。公。凡。和。澄。茶。書。皆。不。涉。提。薦  
而。而。特。錄。古。之。事。實。歷。代。以。華。昌。爲。之。  
書。名。曰。和。澄。茶。誌。及。因。其。古。多。至。北。元。初。  
品。極。之。態。度。之。文。又。物。其。和。之。繁。華。井。  
然。如。畫。眉。繁。采。如。指。掌。亦。形。其。源。委。也。

源流淵可謂勤矣。茶家者法不可不守。  
於是乎序。

享保丁未之秋

大町賢四郎作

大序二

著志序

予性推素。少嗜好。凡彈琴。圍  
碁。踞鞠。戲丹青。之工。一不  
能。其趣。人事稍閒。必讀小說。  
法帖。以適日。予偶值清泉

序一

茂林之旨。一字淘草。茶煙雖  
過。其辭丁然。外聞必立。如依  
然。所未會。其趣也。原夫。亦世  
類人。屏迹。城市。構斗室。砌怪  
石。吸茗。乎其中。壁掛。名畫。凡

古鼎。瓶。挿。奇花。以自遣。世  
之人。歎其雅趣。以為靈陸。  
流亞。乃生久也。乃至邦夫達  
官。貴游子弟。爭相慕。會之  
有。所。講。有式。當。有人。而也。

序二

之。王。為。門。之。名家。為。予。所。護  
三谷南川氏。受。生。法。子。宗。易。氏  
之。門。今。宦。于。親。藩。而。實。膺。其  
任。李。氏。嘗。慕。吾。先。人。之。道。  
從。予。問。道。近。齋。臥。之。所。輯。茶

志三卷。則凡興茶之事。固不  
傳載。乃讀弁其序。予以不  
趣而發。而以南川氏私泚  
之道。而心不固。况讀其  
殆得會其趣。乃言曰。茶  
尚

序三

也。自晉唐而後。陽羨小  
。產龍圖鳳餅之製。著  
冊者。可謂也。元氏而後。稍  
其。制。而凡所云茶者。皆葉而  
。此後古之茶。而

本邦。當時。法。友。而。不。渝。其。禮。  
。失。以。必。求。諸。野。邵。曰。叔。生。  
。以。廣。志。之。云。云。  
享保丁未。歲。秋。九。月。伊。  
藤。長。源。叙。

序四



本記序

京之中于國也。開創最居先焉。故制作大備。文物至盛。加以風敎之高雅。賞鑒之精刻。較視四方。莫之與二也。是以百家衆技。非微諸京。則不得要上。游矣。世之掉鞅于文墨之林。游刃乎術藝之場者。皆莫不輻湊星聚。規取定準矣。方今治安百年。庶

香序一

藝成興而於賞茶為元盛。王侯貴人固使設其職。掌之。至于閭人遊民。坐甘冷之強標。枯寂仇禱。金大務事侈靡。競鬪珍奇。浮采濫費。驕抗成風。或誇世傳行家秘範圍。印定契舟守株。而不能隨時隨。領畧活法。要皆無學以文之也。三谷氏尚好茶事。亦少日自西州來。取徵於京。而後歎世之賞茶

宗無學以文之故。習因仍有志未立。予嘗以茶錄一編為贈。蓋警發之也。三谷氏見之大喜。始知非學以文之則茶事拘蔽。不通權變。尔未立志學文。茶事所係涉獵頗多。而後益知華之賞茶。肇於唐陸羽。弘於宋蔡丁數人。幽情玄趣。至於近時高濂李漁之徒。而極焉。其風流好尚。神運意匠。皆

香序二

無非先得我心矣。何可不學以文之乎哉。吾邦之稱宗工者。殊光紹鷗宗。易幟部遠。別姑無論已。其也。閭人指不遑屈。而亦皆由無學以文之。遂被隱沒。無聞著錄。不傳所道。固陋無可述據。三谷氏今之賞茶宗之巨擘。蓋已取徵於京。以其技鳴焉。比年志編茶志。大凡茶事之名稱物數。與華人所言

為相合者。搜家裏。謄僕之不倦。帶成三卷。復之同。  
好在賞茶家。從前所未嘗有之書也。可謂學以文。  
之矣。予與善。志為作序。言云。

皇和享保丁未仲秋既望京兆香川修德太冲父  
言于一本堂。

香序三

茶誌叙

煙揮汗拭其神。之原也。與是左。禮。  
眼。諸飲食也。方子曰。神者。敬也。已。  
吾。文。則。生。乎。自然。不。定。強。人。以。  
為。觀。矣。引。亦。罷。墨。抑。末。也。夫。茶。注。  
法。亦。生。而。飲。用。代。酒。助。于。孫。氏。而。得。

茶序一

茶。飲。好。與。無。復。相。涉。不。可。也。吾。  
邦。饗。禮。以。茶。飲。為。尚。而。點。茶。為。為。  
一。技。而。禮。家。為。吾。左。禮。家。者。亦。不。  
得。不。向。焉。唐。時。陸。羽。與。常。伯。能。皆。  
精。茶。理。且。著。茶。譜。至。乃。芳。叢。烏。帳。  
手。執。具。口。通。名。區。分。指。點。具。有。左。事。

宋郭屏涵老幼于茶事自云得之  
手而應其心我所以言傳學於有  
陸固亦飲食之人之為也然其事則  
禮以重而靡一不為敬吾南川子  
少小潛心茶事幾進於技及于拙  
幸而譚乃典大涵老之言棄之而

屈序二

付設或斲輪有米亦不足多吾觀  
其隨具而入其止閒詳正少得此之  
似亦鷄子嘗自為茶法以論茶  
事乃置之而聽烏頃造予索題  
其間予先以托月寓之今故復不  
少岐涉且支操一技之能克入其

室君子益有述今因誦小邑而  
有少觀者以為贈云  
享保丁未歲八月屈正超君燕撰

屈序三

和漢茶誌自序

余性嗜茗弱冠姑居東山下嘗探討唐宋茶譜茶錄及必備寓寄等諸書到茶事品題器制備用彼國記此莫不詳盡精覈本國嗜士或未之見者多矣故日夜講之揀擇取捨以頗記所合于

自序  
本國茶道者倚几數歲稿亦屢易然余之

不文不能自定質諸一二同志名曰和漢茶誌凡三卷實茶癖之所為俟後哲之是正焉耳

享保丁未素秋南川三谷良朴題



引用書目

周易

禮記

爾雅

神農食經

廣雅

揚子方言

前漢書

和漢茶誌

唐書

遵生八牋

茶經

吳興記

括地圖

永嘉圖經

淮張圖經

星鏡群玉

書目

不偏齋藏書

海玉篇

本草

古文前集

千家詩

茶圖

茶譜

茶具圖贊

茶集

和漢茶誌

茶錄

東溪試茶錄

居家必備

閑情寓寄

東鑑

要錄

名物飭書

書目

不偏齋藏書

和書

同

同

和漢茶誌卷一

日東洛陽三谷良朴宗鎮著

茶來由

茶雖不見於禹貢三皇炎帝神農氏周魯周公旦  
齊相晏嬰漢僊人丹丘子黃山君司馬相如楊執  
戟歸命侯晉惠帝劉司空琨各至于烹試神農食  
經曰茶  
爾雅曰蓋全乎民用而不為利也後世惟茶立制  
以括其利唐陸鴻漸分別茶檟設茗荈著茶經三

和漢茶誌

卷一

不偏齋藏書

篇茶之源之法之具最備天下益知飲茶孟諫議  
寄盧玉川三百月團之後至龍鳳之飾為入貢之  
制也宋羅大經曰陸羽茶經裴汶茶述皆不載建  
品唐末然後北苑出焉宋朝開寶間始命造龍團  
以別庶品厥後丁晉公乃載之茶錄蔡忠惠又造  
小龍團以進  
按古今茶人為不少然陸羽珠光和漢宗師故附  
陸羽本傳及珠光履歷

唐書陸羽傳

陸羽字鴻漸一名疾字季疵復州竟陵人不知所  
生或言有僧得諸水濱畜之既長以易自人得養  
之漸曰鴻漸于陸其羽可用為儀乃以陸為氏名  
而字之幼時其師教以旁行書答曰終鮮兄弟而  
絕後嗣得為孝乎師怒使執糞除圻填以苦之又  
使牧牛三十羽潛以竹畫牛背為字得張衡兩都  
賦不能讀危坐効群兒囁嚅若成誦狀師拘之令

和漢茶誌

卷一

不偏齋藏書

華草莽當其記文字惜惜若有遺過日不作主者  
鞭笞因嘆曰歲月往矣奈何不知書嗚咽不自勝  
因亡去匿為優人作詆諧數千言天寶中州人酈  
吏署羽伶師大守李齊物見異之授以書遂廬火  
門山貌悅陋口吃而辯聞人善若在已見有過者  
規切至忤人朋友燕處意有所行輒去人疑其多  
嗔與人期雨雪虎狼不避也上元初更隱苕溪自  
稱桑苎翁又號竟陵子東園先生東岡子闔門著

書或獨行野語詩擊木徘徊不得意或慟哭而歸

故時謂今接輿也久之詔拜羽太子文學徙太常

寺太祝不就職貞元末卒貞元德宗年號當本國第五十代桓武帝時

羽嗜茶著茶經三篇茶之源之法之具尤備天下

益知飲矣時鬻茶者至陶羽形置煬突間祀為茶

神有常伯熊者因羽論復廣著茶之功御史大夫

李李卿宣慰江南次臨淮知伯熊善煮茶召之伯

熊執器前李卿為再舉盃至江南又有薦羽者召

和漢茶誌 卷一 不偏齋藏書

之羽衣野服挈具而入李卿不為禮羽悅之更著

毀茶論其後尚茶成風時回紇入朝始驅馬市茶

羽所錄書君臣契三卷源解三十卷江表四姓十

卷南北人物志十卷吳興歷官記三卷湖州刺史

記一卷占夢上中下三卷不行于世羽嗜茶著茶

經一卷馬皮目休曰李疵之茶經三卷分其源其

為利也於人宣小哉後又獲其顧渚山記一篇其

中多茶事大原溫徙雲武成既礪之各補茶事數

十節並存於方冊茶之事自周至唐無纖遺矣肯

晉杜育之辭賦亦李疵之餘恨也

羽誠有功於茶者也止自宮省下迨邑里外及戎

夷蠻狄賓記燕享陳于前山澤以成市商賈以起

家又有功于人者也可謂智也陳師道曰全書曰

茶否臧存之口訣則書所載猶其粗也蓋以為茶

之為藝下矣至其精微書有不盡況天下之至理

而欲求之文字紙墨之間其有得乎昔時人說曰

和漢茶誌 卷一 不偏齋藏書

陸先生詩書道德而已此乃世外執方之論枯槁

自守之行矣又曰藝者君子有之德成而後所以

同民也不務本而趨末故藝成而下也雖茶道小

於其理最然明徐贍曰茶集曰陸羽先生者博物

洽聞聞茶氏名就山中訪之登其堂直入其室寂

無纖塵躊躇四顧北窓間僅石榻一設山水畫一

隔蒲團數枚香一爐碁一枰古琴一張案上有周

易義皇墳典古詩書若干卷茶氏不出戒諸子曰

先生識者若等次第往見之，以日月為序，少者最尾。先生擊筑而歌，乃出迎，披蒙茸裘衣，朴古之衣，或蒼蘚迹尚存。

### 珠光履歷

文明年間有僧珠光者，住南都，稱名寺，以茅經營，扁曰須臾屋，掛墨痕在於壁上者，欲尋跡而到真也。或先臘尋梅，或未秋，未漬存之瓶中，安之床邊者，欲令人不俗。卓橫上設茶具，迎賓，斟自適，世慕。

### 和漢茶誌

卷一

### 不偏齋藏書

其風雅，其名聞宇內。將軍義政公召珠光，問曰：茶事可得而聞也？答曰：源非乎遊，非乎藝，非放樂矣。復問有何所作？為乎曰：以茶道行禮，以茶禮飲之。且大禮設食，小禮則飲，飲者非酒漿之謂也。鼎湛溪礪之耳泉，爐燒池田之香炭，漢器茶甌，高麗盞結草作廬，示陋巷之樂，聚石築庭，表深山之趣也。重問次第如何？曰：古之所謂道猶路，凡物之所以通行者皆多之，曰道合于茶，曰茶道次第。君子由

所貴之飲禮為次第，意風者因陸處士也。以唐貞日休宋陳師道等序文，函答公曰：得聞善哉。茶道之稱實茶禮之號，亦然。說茶道者莫明於此道，莫正於此禮矣。按珠光嘗辟佛氏來居京師三條街，其室四顧四筵之外，加半筵以為嗜茶處矣。其子宗珠其徒引拙古市等傳其術，鳴乎南都。宗悟宗陳鳴乎京師，紹鷗利休鳴乎海後。宗吸宗及宗易召事大闢宗易實此道有功者，損益補否之精。

### 和漢茶誌

卷一

### 不偏齋藏書

無可捨其孫元伯能深得其意，而其心汲汲不已。之達士也是亦宗易之心思之所經緯，此乃陸羽之賜而珠光之所尊教也。雖宗易之弟子多古田織部獨得之者也。織部書百箇條而授遠州，其一篇織部未必所自安處也。姑立條目為俾人疑以問焉耳。其言似不足者，然默觀之，表裏精粗其歸一耳。嗚呼門葉之徒，豈能有識得之者哉？予數歲嘗竊其所可補者補之，其所可省者省之，其間日



夜倚几几十有五年屢易稿而惟病吾才乏然當其梗概耳庶幾為于姓一助藏於巾笥云

閑情寓寄曰

學技必先學文非曰先難後易正欲先易而後難也天下萬事為物盡有開門之鎖鑰鎖鑰何文理二字是也尋常鎖鑰一鑰止開一鎖一鎖止管一門而文理二字之為鎖鑰其所管者不止十門萬和漢茶誌 卷一 不偏齋藏書

戶蓋合天上下萬國九州其大至于無外其小至于無內一切當行當學之事無不握其樞紐而司其出入者也此論之發不獨為婦人女子通天下之士農工賈三教九流百工技藝皆當作如是觀以許大世界攝入文理二字之中可謂約矣不知二字之中又分賓主凡學文者非為學文但欲明此理也此理既明則天下技藝無窮其源頭止出一理明理之人學技與不明理之人學技其誰

易判若天淵然不讀書不識字何由明理故學技必先學文然女子所學之文無事求全責備識得一字有一字之用多多益善少亦未嘗不善事事能精一事自可愈精並翁嘗謂土木匠工但有能識字記帳者其所造之房屋器皿定與拙匠不同且有事半功倍之益人初不信後擇數人驗之果如予言鹿技若此精者可知甚矣字之不可不識理之不可不明也文字又屬敲門之磚可以廢而不用矣

和漢茶誌

卷一

不偏齋藏書

器玩位置

器玩未得則講購求及其既得則講位置位置器玩與位置人才同一理也設官授職者期于天地相宜安器置物者務在縱橫得當高閣房舍列于案頭是猶理繁治劇之材處清靜無為之地方圓曲直齊整參差皆有位置立局之方因時制宜之法能于此等處展其才略使人入其戶登其堂見

物皆非局設事事具有深情未闕有顛倒其家而能整齊其國者

### 忌排偶

古玩切忌排偶此陳說也予生平耻拾唾餘更蹈其轍但排偶之中亦有分別有似排非排非偶是偶又有排偶其名而不排偶其實者如天生一月復生一月似乎排矣然二曜出不同時且有極明微明之別是同中有異不得竟以排比目之矣所

### 和漢茶誌

卷一

### 不偏齋藏書

忌乎排偶者謂其有意使然如左置一物右無一物以配之必求一色相俱同者與之相並是則非偶而是偶所當急急者矣若夫天生一對地生一雙如雌雄二斂鴛鴦二壺本來原在一處者而我必欲分之以避排偶之跡亦矯揉執滯大失物理人情之正矣即避排偶之跡亦不必強使分開或比肩其形或連環其勢使二物合成一物即排偶其名而不排偶其實矣大約擺列之法忌作八字

形一物並列不分前後不爽分寸者是也忌作四方形每角一物勢如小菜樣者是也忌作梅花體

中置一大物周遭以小物是也餘可類推當行之法則與時變化就地權宜視形體為縱橫曲直非可預設規模者也如必欲強指一一若三物相俱宜作品字格或一前二後或一後二前或左一右二或右一左一皆謂錯綜若以三者並列則犯排矣四物相共宜作心字及火字樣或一或高或長

### 和漢茶誌

卷一

### 不偏齋藏書

者為主餘前後左右列之但宜疎密斷連不得均勻配合是謂參差若左右各二不使單行則犯偶矣此其大畧也若夫潤澤之則在雅人君子

### 出簷深淺

居宅無論精麤總以能蔽風雨為貴常有畫棟雕梁瓊樓玉檻而止可堪晴不堪坐雨者非寒之大厭則病於過峻故柱不宜長長為招雨之媒窗不宜多多為匿風之蔽務使虛實相半長短得宜又

貧士之家房舍寬而餘地少欲作深簷以障風雨則苦于暗欲置長牖以受光明則慮在陰劑其兩難則有添置活簷一法

簷地

古人茅茨土階雖崇儉朴亦以法制未盡備也惟幕天者可以席地梁棟既設即有階除與戴冠者不可跣足同一理也且土不覆磚嘗苦其濕又易生塵有用板作地者又病其步履有聲誼而不寂

和漢茶誌

卷一

不偏齋藏書

灑掃

精義之房宜勤灑掃然灑掃中亦具大段學問非僮僕所能知也欲去浮塵先用水灑此古人傳示之法今世行之者十中不得一二蓋因童子性懶慮有汲水之煩止掃不灑是以兩事併為一事惜其力也久之習為固然非特童子忘之并主人亦

不知掃地之先更有二事矣精舍之內自明窗淨几而外尚有圖書翰墨骨董器玩之種種無一不忌浮塵不灑而掃是以紅塵慘物物物皆受其蒙併棟梁之上棧桶之間亦生障翳只須塵尾一拂一日清晨之事畢矣灑掃二事勢必相因缺一不可然亦有時以孤行為歎是又不可不知先灑後掃言其常也若且且如是則土膠於水積而不去日厚一日磚板受其塵名而有土階之實矣故灑

和漢茶誌

卷一

不偏齋藏書

房舍

人之不能無屋猶體之不能無衣衣貴夏涼冬煖房舍亦然堂高數仞棧題數尺壯則壯矣然宜于夏而不宜于冬登貴人之堂令人不寒而慄雖勢使之然亦家廟有以致之我有重裘而彼難挾

故也及肩之牆容膝之屋儉則儉矣然適于主而  
不適于賓造寒士之廬使人無憂而歎雖氣使感  
之亦境地有以迫之此耐蕭疎而彼憎岑寂故也

又云人生百年所歷之時日居其半夜居其半日  
間所處之地或堂或廡或舟或車無一定之在而  
夜間所處則止有一床是床也者乃我半生相共  
之物居室全有南北二牖來風亦有啓塞突竈當  
操暗明按板蓋轉軸置於兩頭以一方木撐之也茶室用之矣其本做之天窓像千風

和漢茶誌

卷一

不偏齋藏書

俗曰突揚窓是也用障于一雙以備於雨晴好晴  
明則高檮欲陰暗則少下上障者以油紙下障者  
紙以白

又云屋以南面為正向然不可必得則面北者宜  
處其後以受南薰面東者虛右面西者虛左亦猶  
是也如東西北皆無餘地則開窗借天以補之牖  
之大者可抵小門二扇亢之高者可敵低窗二扇  
不可不知也

途徑

徑莫便于捷而又莫妙于迂凡有故作迂途以取  
別致者必另開耳門一扇以便家人奔走急則開  
之緩則閉之斯雅俗俱利而理致無收矣

高下

房舍忌似平原須有高下之勢不獨園圃為然居  
宅亦應如是前卑後高理之常也然地不如是而  
強欲如是亦病其拘總有因時制宜之法高者造  
屋卑者建樓一法也卑處疊石為山高處浚水為

和漢茶誌

卷一

不偏齋藏書

池二法也又有因其高而愈高之豎閣磊峰于峻  
坡之上因其卑而愈卑之穿塘鑿井于下濕之區  
總無一定之法神而明之存乎其人此非可以遙  
授方略者矣

活簷

曰何為活簷法於尾簷之下另設板棚一扇置轉  
軸于兩頭可撐可下晴則反撐使正面向下以當  
簷外頂格雨則正撐使正面向上以美簷溜是我



能用天而天不能窮我矣

私考

時宜

條目式法者萬世之常次序隨時平日之功凡物有損益斟酌茶事亦然備權衡之稱物臨時得中迷者不達其理固守式法猶膠柱鼓瑟故雖不差萬歲之常然平日之功未也行茶事者不可不知

和漢茶誌

卷一  
十五

不偏齋藏書

此意

師友

欲善其事者必可先擇其交也家語曰與善人居如入芝蘭之室與不善人居如入鮑魚之肆丹之所藏者赤漆之所藏者黑善友者善事之資助焉無善師無善友則不可得其成功得其善師則茶道日進得善友則日切磋其理精群居終日淫媒戲慢則日喫茶亦何益之有非啻茶道之不進終

臨平俗調耳是亦不可不謹

茶道

世人以動作之容貌謂茶道者其實非也自古及今有連用茶道二字者有以茶之道言者所連用者即以茶由道之意字義重押之字者泛言茶之義今呼茶職以稱茶道者行茶之法有司也其意亦通苟知動作之為茶道而不知由道說義則言語躁妄舉動輕浮日日貪邪利夜夜謀姦詐或竊

和漢茶誌

卷一  
十六

不偏齋藏書

弄筆以寫和漢舊墨或勞力以制木竹新器亂其驚屢只要售於人其計不行則後騙詐典賣以惑他人掠其利其心無時而已不得所貪則自病然久寐計寤較欲自己不能已駸駸陷乎不義之地謂之茶人而可也乎是皆不知茶道之罪也不容不辨

動作

凡天下之嗜茶由古及今不知幾千萬然其人貴

賤其行之高卑其思之遠近相見之進退各其情之所在而由資性卑阜矣其動作發于右則自右發于左則自左始終先後排偶收藏且重者手提輕者指使之法南人東士古今一也居室然否人能見之器玩好惡目能分之然一時視聽之間稱義之黜出則受喫空盤則還之是即千古無不同歸也

和漢茶誌

卷一  
十七

不偏齋藏書

或問

或問凡動作有善惡者何哉曰茶事者禮之所在故以直內義以方外也或俯仰遲速進退屈伸各中其節四體順理容貌正直者善也或其內浮躁其外粗厲俯仰遲速進退屈伸其節者惡也然善之又善自至正者謂之極功之妙先詣茶事之法明其理而事理相附合則不知手之舞之足之蹈之此之謂極功之妙至其境界臨幾應變何

定之有暗此理者皆徇我所好罔彼是此或應人招則其安排寄寓睨而視之譏其位列或誇目巧辨器物真偽嘲之如此規規於事為之末不知其理所在況通萬變乎蓋以為天地之間人物器玩以造草木昆蟲無一肖其形無日不新至茶事獨疑之哉故令其節之至柔而強動而靜靜而活微而精質朴文章相兼始終本末盡備但其意微妙難見耳雖然非索隱行怪事故樵夫鹽婦之陋知

和漢茶誌

卷一  
十八

不偏齋藏書

其為卑竟其所行不過乎平常耳

或問我好此道譬諸不來行於千里而止百里雖地有遠近然其理一也猶咫尺窻中視大虛如何曰是未免馳高騫遠子之言似近却遠可謂躡等之人也夫行千里必始一步行行不息則終至其境苟止百里徒想像高山巨海則終在一處耳茶事至理亦如此故不可躡等可以漸至其奧所謂升堂入室之義也

或問古人所遺舊式人做而行之其是否如何然不可不做也古人所遺者載其入所能成後人就于跡而唯恐不遺一定則十件只是十件百件只是百件徒止言語耳矣所謂古人糟粕者也語曰溫故而知新蓋不溫故則必忘其所能不知新則無得其所亡故其要在能知古人之意以施自己巧焉耳

或問凡茶道有此流有彼流求之於師窮其下法

和漢茶誌

卷一  
十九

不偏齋藏書

可乎曰然不知先師之機無取捨之辨一守其流殆為師之所誤矣師語子曰吾此流儀一定如是終身勿違於所傳或器列排偶動作剛柔或把玩位飾前後左右各有一定之法既傳授之畢而為至珍至寶必記其所學以特遺之雲仍然茶道本一耳有流儀者後世妄唱之以誇其家法也及與人共圖爐容膝也彼之動作與我所聽太甚相遠如按排寄偶心不肯以議人善我或有冒他人功

和漢茶誌

卷一  
二十

不偏齋藏書

圓鑿面南適北者也

又問有流無流畢竟如何曰始于一流千萬彼此各隨其宜後見之謂之流能收其業者自離一定之流極其與肯若然則顧我無流無式唯夫一茶道耳

傍人曰然則茶道執一行之乎曰似而非也執一廢百則安於暴棄博學多聞奮厲勉強孜孜不已則化愚以為明變柔以為強教法之効不可誣者

也。及其成功，至於無聲無臭而止。若執一廢百，則彼問此而不知此，語彼而不達，可謂淺陋固滯也已。

他日復來問茶道之業，其術多端，難以能日用。其功夫胸中交鬪難了，其義事事放下，欲循我性之所好，可乎？曰：子之氣稟我不得，而識古者非以循我性之自然為貴也。使人造于道者，實教之功也。人性之異，自萬品也。所謂性者，生之自然也。與

和漢茶誌

卷一  
二十一

不偏齋藏書

因其教自成其性者，不可同日而語。其近而相去之遠也，實隔天淵。廢其術，循其生，吾不知也。

或問：古今器玩不知幾千萬，有貴有賤，勢色剛柔不等，低昂縱橫不同者，猶人物之殊，其類其價萬變。購之者亦然有降其貴而如賤用之者，有升其賤而如貴用之者。其說如何？曰：價之貴賤本有定分，然亦至行茶事時，其雅道所容孰能拒之乎？且富貴者求得其願，貪賤者欲而不得，其得失雖

但為閑情之趣，一也。高閑茅室何別之有？貴介公

子降，貴器於燧壘，不可謂為卑者之事，是即一會

一樂之雅也。隱者食士升，賤器於秘閣，亦不可謂

犯尊者之事，是即臨時供奉之禮也。是乃茶道之

禮也。器品貴賤豈強分尊卑乎哉？

或問：王公大人嗜茶，其茶禮式法無異於尋常人

間所行茶事乎？曰：能講茶禮者，有司之職耳。何王

公大人之所關乎？何者？禮也者，君子之所施乎天

和漢茶誌

卷一  
二十二

不偏齋藏書

下而士庶人從之，故士庶固以禮為茶道之本。然以尋常茶禮比於王公之禮，經稍輕，故多使有司以行之。耳若君子自嗜之手行之，則依於尋常茶禮，自雖不能相遠，然其崇高富貴文飾風雅，非庶人之所能及也。

有僧曰：昔明慧上人入宋藏茶實於瓷壺，歸朝後移植本山，始施於六十州。此難信用，茶茗亦自上古生於



本國然當時不知採用徒新之耳何俟明慧之  
植哉然賞茶者昉於明慧也且想自宋所傳者制  
法耳噲無碾濃烹煎之別二者唯在所養耳霜下  
龍茶而來春摘之為點茶養粗而夏月採之為煎  
茗也非本有雌雄其法陸羽茶經茶裏茶錄備載  
之又按東鑑二十三卷曰建保二年二月四日葉  
上僧正榮西自宋還召進茶一盞相副茶書一卷  
云云所謂葉上僧正者即是洛東建仁寺開基明  
和漢茶誌

卷一  
二十三

不偏齋藏書

菴也  
或問有文藝文理之別否乎曰自茶事既開之後  
之固文藝而已若自茶事未開之前觀之只文  
理而已文藝者蓋出自文理中何以謂茶道茶禮  
耶曰夫往則必來來則必往禮之所從而生又道  
之所從而在也故知茶事之間只是茶道茶禮而  
已既開而為文藝則文理全備於其中也但非有  
理而後生斯文所謂理者是文中之條理而已由

此言之則千歲茶道今日之茶道何有始終千歲  
之後珠光再闢於斯道今也三百歲其時茶具不  
過於數十耳爾來萬邦漢器大來且制於  
本國器玩益多而為居家之備而後往往盛行茶  
事法式亦愈精而互相授受以迨紹興宗易真盡  
其蘊奧其他動有迂遠之訛而探其情則只是戲  
言妄動或寸方定式或把玩最惡或按排奇偶已  
無一合乎實事也想粗聞迂怪不經之說互相附  
和漢茶誌

卷一  
二十四

不偏齋藏書

會而一槩說之蓋此道之靈而已蓋不分文藝之  
理故於動靜事業必固偏一定而不知有動作威  
儀美惡之說謠曰驚仰天上居蟹似甲穿孔其弊  
使高才之人陷污穢之地猶瘦脚引鐵驢  
又問中華亦有如  
本國茶道耶不審如何曰中華不可必謂有如  
本國茶道亦不可必謂無如  
本國茶道何者茶道語其用則文藝耳語其體則

和漢茶誌

卷一  
二十五

不偏齋藏書

文理耳既文藝見於外文理主於內可從而知子之所謂有無者指尋常所行茶禮及茶室器玩之屬乎如季疵之墩爐蘇軾之竹爐或湯提點都監之屬以此等器行之者皆是外面之文藝非茶道之謂也何者王公大人所嗜於金殿高閣與士庶下民所嗜於草宅茅舍語其高卑遠近則雲上地下大異矣然至其行之之道其趣一也子將謂茶道在於金殿高閣乎抑將謂在於草宅茅舍乎所

為事雖異雅道風情不異於天下此所以為其道也一常出入自一疊半至四疊半茶室或慣器玩位置按排奇偶耳門迎披室內動作之式以為中

本國茶道者抑末也本之則無然則不可無茶道也斷而可知也

或問

本國嗜茶珠光始也如何曰不然珠光嘗視唐宋

和漢茶誌

卷一  
二十六

不偏齋藏書

所載茶書嘆其雅道感其風情闢茶道備茶禮成茶事者也既向三百歲於是後世往往設官授職或茶房茶會之法全備夫本國嗜茶如上節所引東鑑說則至今漸五百九十餘歲宣謂始於珠光乎但珠光為本朝茶事之祖耳或問茶事與茶道之別如何曰先可見事與道二字則思過半矣文藝者即事文理者即道也蓋茶

茶事者也

和漢茶誌一畢

和漢茶誌卷二

日東洛陽三合良朴宗鎮著

水品

陸處士茶經中論水次第凡二十一水皆以山江井為佳宋歐陽修論水以七等縣邑山村地里悉見乎茶經

本國所取之水亦同山江井矣茶經曰山水乳泉石池漫流者上江水取去人遠者井水取汲多者

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

和漢同意如此者不損茶真味也茶集曰江山井之清泉輕甘者沫餘如花花薄者白沫厚者曰餘輕細者曰花浮益中如雲脚又如迴潭曲渚青萍之始生又如晴天爽朗有浮雲鱗然其沫者若綠錢浮於水湄又如菊英重花累沫皎皎然若積雪者益其真香養味以其水勢清潔汲之可不辨乎於本國所汲之水尤同山水遠流其色如乳白者上江以平且取之過日出者不取井水亦同之不然蓋中不茶色神香騰

炭記月令季秋乃命伐薪為炭中春至初秋所製者劣

丁謂茶圖曰黑謂烏金白謂烏銀也皆炭取櫚皮柞

木為之於床下經十二月者勢香共長也

本國櫚柞多出於攝州丹州之諸山生攝州者其勢強其香長生丹州者其勢弱其香短且桑槐櫚櫪栢桂檜等不用其他枯櫪朽腐者絕不取矣

白炭 本國之俗白炭或云枝炭

出於泉州香瀧者其製精出於丹州者其品粗雜

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

木之梢或根或節或桂枝松竹實葉以所新伐者為之此其要也全書曰能通甌起爐昔日所用者多躑躅山茶也今時不用之

本國傳來而世同之矣爐中如山澤溪澗瀧湍波

流而賓主互見悅目樂耳實風雅之助也茶圖曰

烏金烏銀蓋贊嘆之辭也

本國櫚炭白炭其遺製也用躑躅山茶亦本國陳說

以何等木乎未見其說唯本國今以桐柞之枝為佳

筥 俗云炭斗 圓曰筥

字書曰圓如箱篋古盛饗餼之米致於賓館之器也按茶經曰以竹織之高一尺二寸徑一尺或用

藤或用蒚如筥形織之六出圓眼其底蓋若利篋又方曰篋適有漆其口者漆者不足為風雅今時不用至梁元明齊茶之好士等異其形或高一尺徑九寸或八寸七寸大者徑一尺二寸高三寸此外大小各有異同

烏府 炭斗也 見茶譜

烏府貯炭之篋龍也 和名曰手菜龍是也

和漢茶誌 卷二 不偏齋藏書

品形不一定以竹織之或以藤蒚造之必以有提

梁者曰烏府贊見下

菜籠 本國以細篋之篋誤焉

茶籠茶賦註曰茶菜籃子之屬蓋以謂青茶猶有

菜之謂乎由茶菜籃而轉來謂菜籠 本茶籠也

本國因之以竹織之或出於吉野和者剖木造之

出於有馬州出於府州者以竹為之洛陽之制

多以竹或用藤蒚其形圓方低昂唯其意所縱然

不及漢器造之以竹則所提共竹以藤蒚亦同其內以紉紙糊之或以漆塗之適有以紅漆者其舊者以漆者耳又曰先以細布貼之然後可以漆紙者不耐久不細則漏塵

籃篋 炭斗也

籃篋皆用有唇口尚之間方隅員旁縫紋為花以藤竹系之矣亦有加竹籊者適有三足四足者其用亦取便茶譜稱烏府者皆自有提梁者也籃篋者以竹皮縫花紋有唇口者上唇一者次口一者

和漢茶誌 卷二 不偏齋藏書

亦其次也 唇與口之間有

烏府圖贊曰 茶譜見

炭之為物貌玄性剛遇火則威靈氣熾赫然可畏

觸之者腐犯之者焦殆猶憲司行部而姦宄無狀

者望風自靡苦節君得此甚利於用也況其別號

烏銀故特表章其所藏之具曰烏府不亦宜哉

見於茶譜者有提梁今貯炭者總云烏府品形不一高低長短精粗共有異同於本邦造者亦如之

烏檀 箱炭斗 檀古箱字漢以檀檀造之



本國以真桑與白桐造之俗云箱炭取或抹精漆抹粗漆且精漆之製者以檜粗漆之製者以桐其漆淺深其用隨時措之宜人人以有提梁好之者便於日用之故也中世宗易所作之尺度圖書見之圖書者下倣此茶家者流各隨其所好其形不一

籩 漢書註曰音盈所謂黃金滿籩不如一經顏師古曰籩竹器也按今俗用之云亂箱借用之本國

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

經山谷採茗之器執其蓋以貯炭一曰籃二曰籠三曰筥有圓方大小各以竹織之兒婦相共取便宜者負之以採茗其形大小皆有蓋也用其蓋以貯炭也其制有精粗有唇口者最尚之右三者茶葉籠受茶五升大者或以一斗一斗二斗或以抹茶蓋也

本國一曰菜籠或由其形呼曰圓菜籠角菜籠平菜籠右三者皆本國所呼之皆以是等者一統名也大一小精粗有異同其名而曰菜籠定可以於其用者捨之不

本國俗以菜籠曰組物又曰籃菜籠

茈莉音把菜籠之屬如圖人土羅以列茶具適貯炭也

一曰籩子一曰筥音良即茶經註曰籩

籩常貯置炭之器也筥良以其上貯炭

紙糊以篾織方眼也與茈莉旁其各內以

菜籠大異形平深一寸濶二尺或一尺

本國未見此器全書曰有大小操其便今世所好

尚之籠漢土之製也本以二小竹長三尺距二尺五寸柄五寸以篾編方眼

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

珠茶借之貯炭

瓢 一名胡蘆俗云夕顏和名一曰普

胡邊二曰普胡部三曰浮壺便四曰福

部五曰福便或曰服部本國於城州田中村產之者上

產攝州泉州者次之有厚薄肉厚者最好

昔於攝州服部名種之故從其音呼之云服部此

二字上所謂五樣通音也近世用福便字今改之

茶集中無貯炭瓢後始本國也且按茶集王果

氏並張氏之書內外十有一卷其餘杜育荈賦其書多未見以瓢貯炭者今也

入國以風雅好之也各取團瓢虛其中以貯炭蓋以謂無裁成縫織之費亦無屈曲口脣之煩其形寂然不動其性自虛也新生之瓢其用一年乃止明年復以新換之實洒落物也又鑿開其兩肩則殘者自為提梁或內以漆一再抹乃止歲歲不捨用之其便宜哉

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

炭槌 俗名云金火箸

按茶經以鐵六稜制之長一尺銑一豐中執細頭系一小銀以飾視也若今之河隴軍人木吾也或作鉗作斧隨其便也陸子所常用者是也後世以真銅白銅製之四稜六稜或長短各有異同

又云義政公所用之炭槌珠光常尚之蓋漢物也

今在何所乎 此外漢土炭槌至今猶多有古新遠近長一尺及一尺一寸者人玩之

或六寸七寸者置手爐置煙爐總蠻人所造者為佳

降紅 火箸也 見茶譜十六事中

以銅造者謂降紅 本國真鍮火鋸亦同歸頭有蔥臺勾鎮適有如炭槌作鉗作斧其色如真鍮故別其名云降紅也炭槌火筴皆以銅造然分其品云白銅云青銅者以其色異也無虛其內而充實者也

火筴 火箸也

茶經云一名鋸也 鋸者頂平截無蔥臺勾鎮之屬以

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

鐵式熟銅製之無勾臺屈曲謂之火筴漢土雖以文字分其品其實同也有蔥臺勾鎮之箸多以銅為之實其內者也又張著本以鐵造之虛內者也無鳥無鉗無斧只有蔥臺勾鎮耳或頭屈曲共總其名謂之張著諸家動有以銅造者其製不古矣

今所尚之箸皆漢器也擇其長短勾鎮適於籃籠

者是乃茶人之巧也昔日珠光所常用之箸各漢

器也引拙紹鴈傳之中世宗易以鉄銅為之便於

茶事之用可謂深思之至矣又云朝鮮國制以鐵為之以銀加紋頭有惹臺千氏世世傳之珠首日光所用者非此火筴其實白銅頭作鳥形此火筴者與平截無惹臺勾填鳥形屈曲故別其名云火筴其實赤銅也以耳品異而別呼之耳

柄火著 和名

柄者以真桑為之其長短異同隨其便多圍爐之間之或置于瓢置于箱置于籠皆所以對圍爐之具也若對風爐則無柄也漢羅銅鉄共製之又

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

口全置諸具於臺子而對風爐則四時通用且比及暮秋以桑柄又比及中春不以柄可知對臺子與風爐則六物無備六物者風爐釜水壺柄按立建水火箸是也唐陸茶疵玉川子宋蔡襄所常用箸炭槌火筴降紅之三耳未聞有柄者元明亦然本國珠光紹鷗以降用有柄者以對圍爐用無柄者以對風爐及宗易專由之也然間長短有異同其品形長短諸家各異之適其用何以為一定乎

凡此類推之而可識也於

本國家家以銅鐵少異其形或有內實者文或有內虛者各任其所好

遞火一名煨攪俗云十能用銅火斗也用以熨火

茶譜十六事器局中收之自唐宋至明之間其形異

本國以梨桐桑三者為柄各便其用茶譜顧元慶所著下倣此

風爐 自唐宋元明至本國同字

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

按居家必備加一子字則湯提點之屬也

茶經曰以銅鐵鑄之如古鼎形九三足古文書二

十一字而其一足云坎上巽下離於中一足云均

五行去百疾一足云聖唐滅胡明年鑄三足之間

設三窓前後有三口後通廳前漏爐上並書古文

六字一窓上伊公二字一窓上羹陸二字一窓上

氏茶二字所謂伊公羹陸氏茶也置埽塙於其內

以設三格其一格有翟翟者火禽也畫離卦其一

拾有彫彫者風獸也畫巽卦其一格有魚魚者水蟲也畫坎卦巽主風離主火坎主水風能興火火能熟水故備其三卦焉其飾以蓮葩垂蔓曲水方

又其土風爐運泥為之運泥見下

本國亦同銅鐵鑄之又俗有稱鬼風爐者或銅或鐵為之其足如乳故茶人呼乳足從未人人聞得之自知為鬼風爐雅名語其形則固不異也三足也

和漢茶誌

卷一

不偏齋藏書

又有藥風爐以鐵為之其足有軸有乳足亦三足也

本國古今之製或鑄山里院關河海魚鳥或鑄茶氏寺進之字冶工姓名所謂文字風爐是也昔宋人築禪院於筑前州博多號安國山聖福寺其山門上之橫額扶桑最初禪窟六字後鳥羽院宸翰也當時宋寄風爐釜臺子於此寺後傳于大山山其後洛陽龍寶山大德禪院復傳受之義政公乞

之以為茶會之飾凡二百九十年來識與不識大尚臺子以珍焉然其釜不足於

本國風雅中世宗易自有意匠更命工造彼二物

各窮其雅舉世人能知之矣宗易所命之釜因古

釜形以增減之其製最精到今古田織部造釜稱經筒

具列 本國所謂長板之類

按茶經曰具列一片版耳

本國長板者其式特異且長版之為用以長短分

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

冬夏之式然茶事之用威儀之度位置動作時措之宜豈非

本國之風雅乎於長版諸具全備者夏之式也不然風爐則冬之式也式外之趣在

也濃漆之質者以檜淡漆之質者以白桐其製備

內書內書家所

又曰小版以相杉為之無表裏其中夾漆一再抹

四邊布質黑漆殊尚堅緻也尺度各貯圖書圖書家



也。今書曰古有瓦爐考未今以

本國推之蓋位於樓閣甃砌風爐之屬乎如唐苦節君宋竹爐賓主相倚于椅時便於其用故也歟

本國云瓦爐者奈良風爐之外皆瓦爐也於山城深草造

者瓦爐也

臺子一層臺也呼之云臺子

下盤方隅設四柱而冠版為臺以黑漆塗之

按陸羽為建安龍鳳之飾時無以臺子對圖爐文

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

想當時以無圖爐故乎且其式下盤上置風爐與

熱盃水盃也前後置分盃柄抄也與建水臺上雲甌盃也

也與秘閣茶臺也位之其外或花瓶或香筋或珠玉

或詩文之書以此等物位臺上而助嗜茶之興可

謂風雅多情矣又曰自宋迄元明惟備諸具於臺

上以嗜茶者蓋平日便宜故乎晨昏諸具全備者古今定式也

中世宗易有令匠造之臺子即匠欵識以盛字

本國之雅雖原由之茶道不絕盛精其具又曰金

諸具於臺子則通四時用之也下盤置雲屯與金

盃以對圖爐則其飾亦異春冬之初與暮秋奇偶

宜時或夜陰燭影亦然而動作之先後進退器玩

品形低昂或位置白黑隨時以取之捨之因其人

耳風情之雅與不雅皆在於茲矣通四時用之者

自唐及明且其飾與定式異者對圖爐之時宜也

本國珠光所相傳之陳說也

及弟子二柱臺也其製真桑白桐或漆槽板

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

下盤設二柱冠版之形如及第門

本國何人以臺代第耶或中世呼之謂宗甫棚按

先宗甫家物也其漆精全黑元來漢器也蓋長短

高起本無一定之法其名雖異其實一物也

本邦製其形前後左右低昂長短從其所好或下

盤上設中棚或上臺下設橫版定一家之式故謂

何人棚則可也總稱及弟子者不可也何者其形

製與古異以及第二字可知焉蓋世人以及字

於臺字而稱及臺者想非古人名之後人之附會也對圖爐具其定式晨昏設水壺柄抄建水蓋置等也但點茶時不拘定法者在自已之巧耳

爪紅臺子及第一子之屬

下盤上設二柱冠版為臺則如及第子然其製塗以青漆而其下盤四面加紅漆也中世以來尚其器以玩之辦事不異於及第子只其器品形物色位置把玩各以時宜也偏膠義物謂別有定式則不當之論也惟可知時宜相應已也其式同上

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

竹臺子 和製一

下盤上設四柱冠版為臺也上版下盤共用白桐質也竹節亦有定數見圖書或人云紹興始作之或人曰竹臺子茅檐之具也無用於公館如何曰瓊筵粗席或隱士茅屋茶人小亭皆各設之豈必謂茅屋之具乎三公諸士凡有雅情者無處而不可其製或以真桑造之其二柱共用桑世以尚之然以桑者不佳白桐竹柱者可也

其初何人作之又對圖爐具也其式同上

高麗臺子 朝鮮之製

設四柱冠版為臺於下盤底旋四片版為足以黑漆一兩抹其制粗者也其用宜圍爐不宜風爐也本國倣之制此四方以精漆塗之或有以金銀粉畫紋者多婚禮之具也比高麗制上下左右寬濶也故置風爐亦可也其具與式本同上置風爐者近世式也

紹興棚 和製

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

即紹興所作也其制檜櫓為質淡漆塗之設四柱冠版於上下盤之間四分許設版為棚虛其下前以障子一雙左右開闔其內藏水壺與分盈蓋置等故名之袋棚其中棚茶器茶盃等上盤或設香盒羽帚茶籠等其式法世人能知之然膠古式不知善變則好嗜之拙也

袋棚 和製

其制用白桐質設四柱上橫一片版上下盤之間

有一棚一片高，一片低，其高處設柄，拔與蓋置，低處茶器與茶盃也。其下全虛，前以版一片為障，隨意取捨或藏於其中，物不一定隨時宜也。因其所虛名曰袋棚，呼利休袋棚者是也。本條道其之設香具物也。或間謂篠棚是也。宗易借之以為圍爐具，全不得對風爐，是亦其法大槩人能知之。然時宜萬變在其人耳。斗室堂上俱同上

四方棚 和製

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

其制用白桐質，設二柱上，版徑大下，版少狹當時方其隅中世缺其角，是亦為好也。先對圍爐之具也。或風爐亦用之，其法式世人能知之。然隨時之宜者巧也。此式上與三棚略同

圓卓 和製

其制用白桐質，設二柱上下，版全圓也。下版底設三足，當時位香爐之卓也。後借之以為茶事具，圍爐風爐共通用之。此式亦同上

小卓 和製

其制設四柱上，版及中棚四方同，尺度下盤少潤。當時是亦用白桐質，本架香爐之卓也。後借之以為茶事具，圍爐風爐共用之也。上棚柄拔與蓋置設之，或茶器茶盃中，棚置水壺，其下盤或蓋置或設白銅建水等，又近以真桑造之，唯人之所好。右五棚千氏家具，尺度各備，秘書他家所用，棚多然不詳其傳。此式亦同上

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

土風爐 茶集云運泥爐

按陸鴻漸茶經，唐人以鍛鐵爐與竹爐云。及南宋亦然，元至正年中始運泥而造，呼之曰運泥爐，是也。古有謂瓦爐者。

本邦所謂燒拔風爐，屬數然其爐火熾則病其爛，指故至元運泥以為之，其製精，珠光始悟運泥製而命匠作之，至今傳之云。奈良風爐是也。陶人款識姓名於砌中，繼世皆同。

又洛陽南二里許深草東邑有陶匠而做此爐然  
奈良風爐深草風爐其品貴賤如漆與墨昔宗易  
作二十七種爐宗易弟子古田織部別創爐底又  
別作一品以稱經筒宗易所造之爐至今不廢各  
三是有軸有乳火熾觸之則自猶人氣溫溫然也  
其法位釜於鼎頭前置土蓋乃使火氣直上不漏  
於外日爐名以釜呼之如小雲龍風爐小阿弥陀  
堂風爐或小金小虎張  
等之又以雲洞覆之只屏風養火耳何別為風雅  
和漢茶誌 卷二 不偏齋藏書

之便手二十五七爐陶匠  
記之至今不失之

局版 今俗云小板是也

以方版架風爐者也珠光及引拙珠德宗悟宗陳  
紹鵬未能定其大小尺度至宗易以正焉其法見  
圖書

又曰近世何人作中版用之最佳然而定其尺度  
以為常製豈其然哉想不知其中故也何者大小  
有所定謂之常也中者不偏不倚應物自宜之謂  
也人多膠於一定之中而不知變故中版一定而

不合矩圭則議之蓋時有萬變事有萬殊物有萬  
類不知中無定體故也惜哉  
風爐小版者以相杉漆之全黑昔創杉為之古創  
者隨其質直塗之今時有云起目  
做此或以栗或以白桐皆漆之  
員局 俗云團版是也

全書曰以檜檀為之

本國員版以檜桐為之皆位鐵爐耳尤以漆塗宗  
易以降其形圓徑高厚皆一版也因今有中形之

和漢茶誌 卷二 不偏齋藏書

版而稱昔日版以為大也歟

版風爐 和製以杉木  
來用其質杉以產於秋田

者為 一曰野風爐二曰左風爐三曰小

田原風爐

左風爐者巧者造之以杉六片其內以帶塚塗四  
方上下上一片平而中設員穴橫兩方木以架釜  
前有一口漏爐尺一度見  
圖書 宗易嘗於小田原造之也  
一說巧者自作之其言難信宗易使巧者作之乎



或山林亭齋或石榻簷瓦之間皆以竹其用也唐  
苦節君宋竹爐之屬平茶譜所謂苦節君與竹  
相備而嗜茶者風雅至情漢桑自相通者也然竹  
爐與竹爐語其形則甚異惟便用同意容灰或無  
如土風爐鐵風爐故不得見其罅隙是非尋常之  
釜所適當別合於爐形以製之

苦節君 蘇子瞻所云竹是也形見茶譜

茶譜曰

和漢茶誌

卷二 二十一

不偏齋藏書

肖形天地匪治匪陶心存活火聲帶湘濤一滴甘  
露潄我詩腸清風兩腋洞然一荒 鐵土二爐者陶治造之獨苦節

君藤竹為制之故曰匪治匪陶也

至宋稱竹爐東坡詩寒夜客來茶當酒竹爐湯沸  
火初紅 宋人劉主倚兩椅則令置爐於焚地矣

千家詩曰杜小山詩也未知孰是

注子 水壺也

金紫銅胡銅之屬今俗各其器云金水指

古者用金紫銅元明皆以胡銅為之今亦同又有

鐵製 或有水提其形大一小低昂任人必備用  
本國有水瓶其形各異間有銅鐵或花紋禽獸鑄  
之雕之又有真鍮白銅白銅者尚南蠻之製胡銅  
者其次也朝鮮白銅又其次也

本邦用陶器出於伊賀信樂備前唐津且京師東  
乾山亦造之然經緯剛柔之理不能得其趣又曰  
石漆付之製模草木山澤花鳥雲堂之屬間亦加  
金銀以銷錄之漢土器亦然其瓷膚青白者皆雲

和漢茶誌

卷二 二十二

不偏齋藏書

脚不浮也又曰京師有樂燒其形各異其色有赤  
黑昔日有朝次即者造茶盞其品七皆黑赤也至  
今稱名物繼世造之俱云樂燒能浮雲脚猶建安  
之寶文茶色青白粥而熟而味真義也又彼作水  
壺宜盛熱水 其下 其用與前所謂信樂等五座並  
用雖有苦窳人皆為雅器而取之若有提梁而舊  
者世人好尚之 右七品曰東陽坊大黑小黑此三  
此四者赤盞也其皆宗易名之

雲屯 此亦水壺也 以有環乳六雲

茶譜曰泉汲於雲根取其潔也欲全香液之腴故以石子同貯瓶正中用供烹煮水泉不甘者能損茶味前世之論必以惠山泉宜之今名雲屯蓋即泉也雖與列聯諸君同事而獨屯於斯豈不消高絕俗而自貴哉遵生八牋云磁瓶受水一外所見茶譜瓶並有提梁者其形有大小低昂之異

熟孟 又水壺也受水二外 受其水不一者

和漢茶誌 卷二 二十三 不偏齋藏書

大鼎 其宜

按茶經曰貯熟水或以瓷以沙曰熟水者汲清泉而以此水澆之者也

又水指者以杉片屈曲其厚三重蓋亦同以杉為之猶古之棹杉合子而高凡四寸八分受水

一升半其水未滿十分為雅源出珠光之所造建水也紹鵬之時固有此器然宗易損益之以傳之

其製內漆筋三行外以櫻皮縫之底設三足內外

俱質入曰宗易嘗獻朝廷以粉盞白角漆青葉蓋權時之製也或曰其孫元伯禁之也師曰此器用之不宜於歲不宜於寒春秋所用器也亦可思焉耳

瓶 和製宗易以雌松元伯以檜樹

本并中瓶也俗冠鈞字以鈞瓶呼之以檜造之蓋徒以瓶一字則疑於花瓶酒瓶水瓶銀瓶銅瓶也并卦曰羸其瓶漢書註曰盛水瓶禪語曰雲在天

和漢茶誌 卷二 二十四 不偏齋藏書

水在瓶是也

本邦宗易始用之以代水壺其形方如箱以五版造之上大下細又以版為蓋以剖其半四面及底皆以鐵釘之或人曰紹鵬作之也不知其所據蓋

宗易以降也視其底面有花押可見也其釘浸鐵花水凡五十日 尺度見圖書多以五葉松造之其製精然與檜樹難辨

建水 以杉製之一名滴器

世用繅覆滴三字漢書曰建瓴水今從之古多用

銅器、楊杉之製、珠光之所始、作後世諸家皆用之、

自珠光以降、其形不變、以楊杉一版、屈曲為之、相

合處、楔皮縫之、內外無漆、尺度見圖

又曰後世或雜用鐵、銅、瓷、三物皆借其名、稱建水、

其銅者、自古諸家所尚者、蠻人所造、白銅也、形有

大小、低昂、間有胡銅、之制其價、貴賤萬變也、南蠻白銅

鮮次之本邦白銅又次之、然中華胡銅有勝於鮮者、以其品形有優劣也、擇其品而用之、則

雨寶也

和漢茶誌

卷二 二十五

不偏齋藏書

金

茶經曰、鑊音輔或作、柔曰、鑊、三足、釜也、以生鐵鑊

之、治工以急鐵為之、論曰、鐵以耕刀之起、鍊而為

之、則其湯熟、耳、唐世用銀為之、雅則雅矣、潔則潔

矣、而後侈麗、若其用之恒、則卒歸鐵也、又曰洪州

以瓷為之、蒙州以石為之、瓷與石皆雅器也、銀與

瓷、石皆是湯提點之屬、今其實釜也、急鑊生銕、三

歲不止、日用之者、自止、然一年藏之、再如初、以

刀鑊之者、銕少

商象 見茶譜十六事中

古、石鼎也、或以瓷為之、如今茶瓶、一云鑊也、鑊、金也

俗有呼云、唐金甌比之、

本國釜、其形不雅、

湯提點實見下

按茶具圖、贊以湯提點、建茶、馬蓋、尋常民間山

谷皆以此器、嗜茶、俗又試烹煎、云建茶者、以碾、直、嘗之也、建安外

和漢茶誌

卷二 二十六

不偏齋藏書

以餅茶餅茶、鳳團小龍、團等、品、嗜之、惟建安、

龍團等、一碾、末也、耳、故萬方謂之建茶也、譬、如、

名、好、碾、末、散、其、說、詳、茶、錄、國名、此器曰茶瓶、不當試碾茶、動以此器、當真

茶禮、茶道、粗者也、又曰提點之湯瓶、或以銀、雕之、

銷鑊之、其餘多以陶器也、其陶器銀器者、雖老湯

不成、毒銅器者、其湯銅青之氣、腥若經宿、則生毒

氣、

提釜 俗云手取釜 提梁釜 是也

提深釜本無益於用風雅亦不足昔日洛陽東山栗田有云善法者世人皆云為隱士也常專以一鉄提釜嗜茶使此釜每朝和糝而後既滌之懸之以間彷彿松清而獨啜茶當時以為有高達幽邃之情因以微之於茶道茶禮其何益之有

古釜

古釜者於前州芦屋或說曰攝州芦屋所造者也星霜

餘歲僧明慧自宋歸朝後命冶工鑄之

和漢茶誌

卷二  
二十七

不偏齋藏書

大凡一百或萬松竹山川及禽獸為之其後越州古屋亦為之兩處同名今並尚之其蓋者有直蓋落込手蓋一文宇明慧等其鈕者所謂透茄子槓實鬼面遠山或銅製花實之屬是也

平雲釜松永彈正破裂之而亡其他紹鷗小霞受水五外祖母口平釜地執釜責柿各受水五外五

吊皆稱大名物

又有天貓者下野佐野地名也相州所作亦號天貓故俗

田原天貓一號曰越州亦有此名未知其詳且天貓之製凡五百年或人曰通用命與明二字羅山先生改命明字以代貓今也稱古器物而貴賤尚之也其後珠光紹鷗各於京師作之纔一二耳宗易復命冶工造之其釜不為不多矣原於古釜形增減之云古田織部所造者皆於及落之下有隅面也小堀遠州亦取之自古至今各方其耳以為之準或鑄詩文山澤草木及鳥獸卦圖又冶

和漢茶誌

卷二  
二十八

不偏齋藏書

工手書其姓名大小低昂不可盡取故宗易織部遠州以降增減其形諸家皆用之也夫以古釜點茶則沫浮粥面浮盞無水痕其尚之也不亦宜乎使用與風雅能思之謀之

茶盞

陸羽茶經顧元慶茶譜蔡襄茶錄全書中各以盞字玉川子雖有七碗語碗與盞同無茶碗連合之字皆茶盞茶盃耳居家必備多作盃



本國呼其器曰茶碗古來名物多亡信長公以本

於本能寺失之引拙茶盤磁珠光茶盤其亦

時失之方圓大小所傳來家家各飭書記之然其

實不後世好事者有用其品形不任於茶碗者然

俗以珍焉又曰盤字冠茶曰茶盤者見全書字書曰盤

按茶經越州之製上岳州壽州洪州次邢州亦上

若邢州瓷類銀越州類玉邢州不如越一也若邢

瓷類雪則越瓷類冰邢不如越二也邢瓷白而茶

和漢茶誌卷二十九不偏齋藏書

色丹越瓷青而茶色綠邢不如越三也以為建安

之陶寶文紫黑而茶色青白也實極品之古玩也

蓋中色內茶色丹暗紅之謂蓋中青茶色綠者深青之謂以風知建蓋鮮黑本國樂燒供是相宜也

天目今於本邦所尚之天目七品其名各見下

建蓋之屬也建安天目山造之和漢同字古來尚

之其形大小及色有少異而本建安之蓋也建蓋

與六目有異同之說難以別今總稱天目謂之建

蓋者其中極品也謂之天目者總名也有如虎毫

之紋按蔡襄茶錄曰出於諸山者或色黃白而蓋

中之茶色不勝惟以寶文尚之矣如此則建蓋者

極品第一也蓋建蓋天目皆建安之製也今呼之

七品者亦其屬也本國自珠光以降有七品名物各建安之蓋也以其品色呼為

見下

或曰以蓋字代山謂建山者蓋山音相通也竊謂

建山之建與天目山之山合二字云建山乎又曰

和漢茶誌卷二十九不偏齋藏書

或人曰昔藏蓋箱上或書山字則不為無蓋矣恐

非耶書建蓋則無異論俗用乾蓋字殊不知乾山

之誤

啜香 十六事之一

蓋曰建蓋也用以啜茶居家必備曰建蓋也用

以茶謂其蓋粗者也遵生八牋曰磁瓦甌也用

以啜茶

陶寶文 十二先生之一俗云建蓋也形見茶外圖贊

茶具圖贊曰

出河濱而無苦窳經緯之象剛柔之理炳其明中  
虛已待物不飾外貌位高秘閣宜無愧焉

蔡襄曰建安陶寶文色紫黑而內有如栗毫紋點

茶其色青白此盞既陶而無罅漏為官物

茶錄曰茶色白宜黑盞建安所造者紺黑紋如鬼  
毫火熟難冷最為要用出他處者或薄或色異皆  
不及也於

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

本邦所好尚亦然近有瀬戸天目盞取建盞之形  
品而擬之最任位秘閣其色黃白積年變色或以  
水湯投之以布巾拭之浸淫自透故似古物而人  
悅之好之者然不如建安之紺黑位秘閣者建  
中秘製也本邦中世以來漸作秘閣以架瀬戸樂燒亦然

熊川 高麗之產

其形無苦窳其色如雞卵殼以高自三寸及三寸  
五分徑自四寸及四寸五分許之間而不厚不薄

其濃經緯液汁肌理細膩底裏內外之精密  
者為上品極製人人所好尚皆然呼之者直以其  
地名

又有云平熊川其名以形平呼之

又有鬼熊川比常所玩熊川形低重厚其瓊乳不  
濃其底輪郭或大土亦不美而品形共粗者也此  
上二品本劣也然其中却有勝者所冠鬼字者以  
其形剛堅而製粗故也耶

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

三嶋 高麗之產

謂古三嶋者上品也或湖中書禮賓之字以此云  
禮賓手或以有檜垣紋者曰檜垣三嶋有花紋者  
曰花三嶋又其地全青其上再以刷毛塗白藥者  
曰刷毛目三嶋就中世之所好者最古三嶋也是  
亦以地名呼之

五器 高麗之產

昔出於京師大德寺者曰大德寺五器又有曰紅

葉五品者凡其形同上以全紅色稱紅葉五品者  
二品者自古至今人人尚之其外游擊錐番匠尾  
等四品亦其次也品形不一其優劣甚多總稱五  
器者蓋其形如盛飯之器故俗呼之

堅手 高麗之產 堅手也俗以手字云堅手

九品產於高麗者品形甚多俗總以某手呼之  
蓋以其製堅實之謂耶

漆雕秘閣 十二先生之一 俗云天目臺也形如茶具

和漢茶誌

卷二 三十三

不偏齋藏書

圖贊

茶具圖贊曰

危而不持奠而不扶則吾斯之未能信以其弭執  
之患無坳堂之覆宜輔以實文而親近君子焉  
重之器由之可見茶道之禮以之可知今  
本邦臺天目之臺原之居家必備曰以玉璫為之  
近以玉碾螭文卧蚕梅花等樣長六七寸者以棠  
檀雕花或有以竹雕花巧人物者倭人造黑漆

閣如圭元首方下濶二寸金泥花樣為文其輕如  
紙為秘閣上品又以貝螺為之形狀亦雅有古玉  
物如大鏡傍有三耳可貫不知何物為貝光深沈  
其色甚有以紅瑪瑙製九水晶玉石皆可做為

之按使秘閣位茶蓋語其初則始建中蜀相崔寧  
之女以茶盃無襯病其熨指取標子美之既吸盃  
後乃以蠟環標子中央其盃遂定即命匠以漆環  
代蠟進蜀相秘閣納教皆原之後世蓋閣或大小

和漢茶誌

卷二 三十四

不偏齋藏書

精粗悉赤黑漆塗之或有海貝之製或有雕之鏤  
之者其尺度低昂漆工之所造中世宗易定豎橫  
之式備于茶家圖書 本國所尚之臺七品各為名物皆漢土器也其悉見下

納教 十六事之一 俗云茶臺也

茶譜註曰竹之茶臺也用如秘閣按其製外纖細  
筠內全漆之或黑或赤又以精漆堅實其內外不  
見其細筠者供貴賓之具也  
本國所作者多質也 於攝州有馬駿州府中所造者是也然比之中華不足

水曹

遵生八牋曰磁缸貯泉木邦或局陶器或用胡銅或用木桶俗細呼水

見茶譜

茶譜曰

器物用事之餘未免有殘瀝微垢皆賴水沃盥名其器曰水曹如人之濯於盤水垢除體潔而有日新之功豈不有關於世教也耶

水方

水曹之屬受水一斗

和漢茶誌

卷二 三十五

不偏齋藏書

按茶經以桐槐楸梓等寄合之其表裏縫之漆一兩重或亦以瓷為之以木者如宮寄之

條方

水曹之屬受水八升

右三品者其用略同

滓方

受滓器也今用為布洗盤是也

本邦擇其器大小或為建水或為熟盂或貯菓各取其用便

器局

十六事俱收藏之如簞筥者也

茶譜曰剖竹為之或加藤如蒲以茶具十六事收貯之蓋欲統歸於一以其素有貞雅操而自能守之

行省

苦節君行省也

形見茶譜

茶譜曰收茶具六事分封悉貯之或山谷亭館執事之具故以行省名之按鴻漸之都籃其用全同丁謂曰教識以湘筠以湘筠之字書行省六事者春是也雲屯俗云水指茶盃茶碗分盛戰方建水注帳子建水水滴注春茶盃其外有撥雲受汚竺則

和漢茶誌

卷二 三十六

不偏齋藏書

帥三省器盡收於茶盃中故唯云六事撥雲竹茶匙受汚茶巾竺副帥茶筴

澆水囊

水澆也澆水囊本僧家名也

按茶經若常用者以生銅為之以備水濕無有苔穢腥滋之意也按林栖谷隱者或用之木與竹不耐久故用生銅其囊織青竹以揅之裁碧練以縫之細翠鈿以綴之

本國以生銅其囊用精布也中世或杉或檜曲之為之凡其柄八寸用揀其便今曰水澆是也



受汚 十六事之一 俗云茶巾

茶譜曰茶、水點止之巾以精布要之長二尺作杖互用之以潔諸器

本國云茶巾者長一尺或九寸幅五寸或六寸凡不過於此出於江州高宮者上出於和州南都者雖其製差入水采靱含水濕故次之

竺副帥 十二先生之一 俗云茶筵或作筵字形見茶具

圖贊

和漢茶誌

卷二 三十七

不偏齋藏書

茶具圖贊曰

首陽餓夫穀諫於兵沸之時方令鼎揚湯能探其沸者幾布子之清節獨以身試非臨難不顧者時見爾 茶譜曰歸潔是也註曰筵筵也 按其軸書畫雕鏤飾之

本國以白竹或紫竹一節造之糾絲綴之先時用

寶來之製令高山造之 寶來高山皆名

分五 十六事之一俗呼之云柄杓

陸子、籃中及器、句各收之以為六事之一也

世宗易應千釜而分其大小差等其柄或量于之

中上下相迫或自爐近于身者少切之五分六分

許而止此其陳說也應乎釜之製凡冬夏之用

二十二品雖有二十二品之別無冬無夏其合大

小皆同只辨以其柄所反之多少

司職方 十二先生之一 俗呼之云服鉢又曰鉢子或不洗

中

茶具圖贊曰

和漢茶誌

卷二 三十八

不偏齋藏書

互御童子聖人猶且與其進况端方質素純綿有

理終身涅而不緇者此孔子所以與潔也

丁謂茶圖曰以紋綃也

本邦以深綃其色五品紫栗梅淺蔥綠色壽福是

也 紫栗梅淺蔥綠色之四品者本國所織也 壽福純子之屬或壽福之字或偶人或草花

不一

古以方五寸許為式後及宗易為九寸一尺今也

依之世人所常用之色多紫也婦人或火年適以

絳緋茶黃一色者老長閒用之又曰其用之者除器中塵也又賓造于門則主人拂帶出以迎接便為禮容既入茶亭賓主相對之時亦然是即茶禮之一全書曰如代佩玉擊筑出迎披時無不佩玉由此視之則拂帶蓋如代佩玉也珠尤蓋法之可謂和漢並行而不相悖者矣點茶之巾八寸九寸為之半行禮之巾九寸一尺是蓋本國陳說也

和漢茶誌

卷二十九

不偏齋藏書

茶匙款名也

唐宋元明或以銀造之以竹造之以梨造之以海貝造之茶匙其惣名也又有以銅造之者可謂陋矣

玉搗象牙茶匙也

珠德作一品當本能寺乳失之適有柄作

者葱臺

茶裏以金造之蓋供尚茶之職也茶錄曰竹輕不便於取建茶故以金造之玉搗亦同

撩雲 十六事之一

茶譜曰撩雲者竹茶匙也

本國自古至今茶人所作品形不一長短縱之撩雲之中有節者珠見之或表質裏漆或以金銀泥畫花也珠光引拙珠德紹鴟所造有節者蓋鮮矣柄端五六分之間餘節者亦有之中世宗易節買市中分諸家做之又曰茶匙本末隨處有五名人能知之象牙者珠德及宗易俱作之中世漆

和漢茶誌

卷二十四

不偏齋藏書

之或人曰始於宗易也

雲葉 茶匙也見全書

茶經曰以桑以梨也又曰以柳也柳者味之見

則 茶匙也如七策之類

按茶經云以金銀銅為之所謂則者量也准也度

也亦好稀者減茶嗜濃者增茶故曰則也又以海

貝造之海貝者螺蛤之屬以金銀者固其也

以銅者固其也然至今見之則其色沈而或如

羅樞密 十二先生之一

後世茶集云：此  
師同形見茶具

贊

茶具圖贊曰

幾事不密則害成。今高者抑之，下者揚之，使精粗不致於混淆，人其難諸奈何？矜細行而事諱譁，惜之。

按茶經：羅合，即羅樞密也。其說曰：羅末以合蓋貯之，以則置合中，用巨竹剖而屈之，以紉紉衣之，其

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

合以竹節為之，或以屈杉漆之，高三寸，蓋一寸底

二寸口徑四寸矣

本國亦然。尺度無定，大小任其人，之  
好精者以漆粗者以質

石轉運 十二先生之一

名其器云：茶磨  
形見茶具圖贊

茶具圖贊曰

抱堅實，懷直心，嚙嚙英華，周行不怠，幹摘山之利，揀漕權之重，循環自常，不捨正而適他，雖波濤無

怨言

按茶錄：所謂茶碾以銀或鐵為之，黃金性柔，銅人

喻石者不用，惟銑故也。喻石者石之次，王者也。

本國用石，其石出于宇治朝日山，石工居橋路以

造之，有濃茶碾、淡茶碾，二品濃淡之事見茶錄二

篇之解。茶裏所謂喻石，石之次，玉  
者也。本國銀垂石之類。

宗從事

十二先生之一

俗呼之云  
茶掃帚

茶具圖贊曰

孔弟當洒掃應對事之末者，亦所不棄。又況

和漢茶誌

卷二

不偏齋藏書

氣其散拾其已遺，運寸毫而使過塵，不飛功

亦善哉。漢以散毫為之，  
形見茶具圖贊

蓋宗從事以其一柄運掃

左右

本國以鳥羽作之，或有一羽者，有三羽者，有束用

衆羽者，又或取採茶以左右鳥羽掃碾上，使英花

不飛，是亦宗從事之屬

胡員外 十二先生之一

一名胡盧形  
見茶具圖贊

茶具圖贊曰

周旋中規而不踰其間動靜有常而性其平其  
結之患悉能破之雖中無所有而外研究其精微  
不足以望圓機之士矣

本國自珠光迨紹鵬宗易無如此製況當世乎今  
問定人皆不知想彼國碾石其製粗故用此器  
乎碾石其肌理而不假彼丸

幸鴻臚 十二先生之一俗云焙籠形見茶目圖贊

茶具圖贊曰

和漢茶誌

卷二 四十三

不偏齋藏書

祀司夏萬物焦燥火炎昆岡玉石俱焚爾無與  
焉乃若不使山谷之英墮於塗炭子與有力矣  
御之號頗著微稱微穀滿作微

木待制 十二先生之一形見茶具圖贊

茶具圖贊曰

上應列宿萬民以濟稟性剛直摧折彊梗使隨方  
迷罔之徒不能保其身善則善矣然非佐以法曹  
資之樞密亦莫能成厥功

安山谷之茶人以此製作其外諸山亦然  
本國之製不類之

金法曹 十二先生之一形見茶具圖贊

茶具圖贊曰

衆亦不茹剛亦不吐圓機運用一皆有法使強梗  
者不得殊軌亂輻豈不題與

古昔

本國茶商用此器近來不類之此器以木造之製茶之類固有用

和漢茶誌

卷二 四十四

不偏齋藏書

湯提點 十二先生之一形見茶具圖贊

茶具圖贊曰

養浩然之氣發沸騰之聲以執中之能輔成湯之  
德斟酌賓主間功過仲叔固然未免外燥之憂後

有內熱之患奈何矣事見前說

建城形見茶具圖贊

茶譜曰



茶宜密裹故以窮籠錫之宜於高閣不宜濕氣忌  
夫真味也古人因以用火依時焙之常如人體溫  
溫則禦濕潤今稱建城按茶錄曰建安民間以茶  
為尚故據地以城封之

本國雖有密裹之事無窮籠之製其高閣濕氣之  
說和漢自同

注春 十六事之一 本國名之云茶入

茶譜註曰磁壺也

和漢茶誌

卷二 四十五

不偏齋藏書

本國以為名物者凡百五十餘品又曰

本國皆收于袋袋口以紐結之發積古製以七樣

今用六樣也紐色紫紅綃天鵝絨韓茶黃韓茶石

六品之外不用紐結如蜻蛉形袋帛或金欄或純

子之屬皆以漢土所出最舊者愈尚之其色目甚

多

雲甌 是亦茶入之屬也

茶集之中宋范仲淹茶歌曰黃金碾畔綠雲飛碧

玉甌中翠香白寓寄茶具部曰茗注莫妙于砂  
砂壺之精者又莫過于陽羨是人而知之矣然  
之過情使與全銀比值無乃仲尼不為之已甚乎  
置物但取其適用何必幽渺其說必至理窮義盡  
而後止哉凡製茗壺其嘴務直購者亦然一曲便  
可愛再曲則稱棄物矣纖毫入嘴則塞而不流直  
則係無是患矣

靜沸 十六事之一 今俗云金敦是也

和漢茶誌

卷二 四十六

不偏齋藏書

有靜沸者設圓  
眼其中央

茶譜曰靜沸竹架也按有其形高如鼓腰者此亦

以藤蒺造之蓋支炊金者其中擇形低者而用之

支鑊 俗亦呼金敦

茶經曰剡中今虛其形薄以藤蒺造之支茶碾者

亦如此也又曰交床同支鑊者也 支鑊蓋以板為

茶甌 今俗云茶茶是也

一茗甌其底入腹者能養茶按前所謂雲甌者受

未散小壺也其用不與此同

唐皮日休詩

見茶集

邢客與越人皆能造茲器圓似月魂墮輕如雲魄起  
葉花勢旋眼蘊沫香沾齒松下時一看支公亦  
如此石家必滿曰茗甌亦是也  
茗甌茶甌其用同歸  
按茶集藏茗之器也其形有大小異同一曰茗壘  
者呂宋國之製也崎陽人云昔或以藤或以荔為  
網提之

### 和漢茶誌

卷二  
四十七

不偏齋藏書

本國自珠尤以降以紅紫網提之其製六出貝眼  
也高寄曰壺受紙之處在崎崕凹凸之場勢必剪  
碎紙條作蓑衣樣式能貼服以使內外不通風也  
故錫瓶之蓋止宜厚不宜雙矣又曰藏茗之家凡  
收藏不即開者于瓶口向上處先用封紙二三層  
實褶封固俟其既乾然後覆之以蓋則剛柔並用  
永無洩氣之時矣其時開時閉者則于蓋內塞紙  
一二層使香氣開而不洩此貯茗之善策也

按蓑衣樣式者俗曰口蓋也初冬新開壺之時俗  
謂之口切

本國由古及今所尚之葉茶壺凡二十二品其中  
三日月與松嶋亡於本能寺之亂又八重櫻一品  
失於江州坂本之亂藏服容色所傳來書載之此  
外自古所稱名壺失之者多右三品者為重寶故  
人鮮知之

本國呼此器云真壺能養茶存香或容三斤四斤

### 和漢茶誌

卷二  
四十八

不偏齋藏書

五斤者好尚之其事世人皆知之  
官庫或四方侯家傳真壺義稱之者亦多適於人  
間稱其名耳不能盡見

金其品甚多總以稱金

按居家必備曰樣子是也古來有圓盒底裏識額  
川東房字或雕其字又有加箔者又有四花盆梅  
椿菊牡丹等花葉共雕之又有五花盆四花中加  
山梔花葉共雕之  
其製堆朱也或圓盒或四花樣五花

樣共全黑漆為覆輪者亦有之或有堆朱方盆多雕花葉適有雜青漆且雕之者又有稱若狹盆者此等小堀遠州嘗尚之於今以珍焉

按世傳云若狹盆者北齊渤海之制或云明朝之初漂流於若州海濱也其證未詳又曰先來者五枚後來者七枚未聞其所擬且底裏文字及紋不同或識德字或識業字或畫梅樣形是茶入盆最極品者也

和漢茶誌

卷二 四十九

不偏齋藏書

藍盆

以細筠織之云  
條蓋一云簪盆

昔嵯陽人云藍盆者南北宋至大元之際多來也其盆內細筠而外以生漆或內外筠質底裏黑漆者間有青漆紅漆者又有生漆粗塗者內多筠質也或有以細筠為質內外共以黑漆精塗者俗曰籠質是也又有內外紅漆者

五葉盆

一五樣

漢土制也或有雕鏤或有屈輪繼世為之古物今

為官物其製不能見之

木瓜盆

一様盆又四葉

其盆古者南北宋之間專造之嵯陽人曰其色雕紋又間屈輪有如此之製是也大明之製亦有如之者多於南京製之故有遠近淺深或有內全紅漆外雕梅梳菊牡丹椿等五花者昔有菱盆失於本能寺之亂云菱盆中有謂珪璋者或間識其字於底裏然多無字香盆其製甚多堆朱為極品

和漢茶誌

卷二 五十

不偏齋藏書

遵生八牋曰倭人造秘閣香合合盆之黑漆紅堆皆倣之按

本國製香合其品精者曰堆朱其紋或鳥獸山澤人形草花於底裏款識漆匠姓名蓋至宋其製精今也於

本國所好尚之金十品謂之十作有嵯陽製又有京師製雖初自

本國傳之今也却粗也所貴十品皆漢器也各以

漆匠姓名為器名呼之悉見下

堆紅

自唐迄宋製粗也至宋精之本是

本國之製蓋堆朱之粗者也古來誤以堆烏呼堆

紅者非也故遵生八牋曰紅者堆紅也黑者堆烏

也以上品謂堆朱以下品謂堆紅宋元明世世造

之崎陽京師亦製之堆紅今放之昔曰於相州鑄

稱此曰堆紅凡堆朱之類始於本國本鑄

和漢茶誌

卷二 五十二

不偏齋藏書

屈輪

崎陽人曰北鄙之製也未知如何其全以黑漆塗

之而或紅縷一筋或二筋三筋又有全黑不見紅

縷者乃是屈輪粗者也故為香盒下品

金絲

中華之製也其色紅而剔出深筋多者謂之金絲

是亦屈輪之屬也其縷赤黑黃者上赤黑者次之

全赤者又次之

黑金絲

中華之製也其色黑而剔出紅縷故謂黑金絲

桂漿

中華之製也其色紅黑黃相雜或又雜淺青色其

縷或一或二此為上品其色全黑者為下品其

剔出者也金亦有知之者

犀皮

中華之製也以金泥銀泥為地以紅漆畫草花或

和漢茶誌

卷二 五十二

不偏齋藏書

蛟龍或飛鳥其形品色樣若俗所謂紋皮者也

本國諸家書偶指曰其色全黑剔出潤黃紅相雜

者誤矣蓋俗認桂漿以為犀皮也只金銀紅黃相

雜而如漆紋革而無一刀剔出

堆烏

屈輪之屬內外全黑剔出最精而無筋呼之謂堆

烏俗以之謂堆紅者非也又一別稱堆烏者精義

堆漆



堆為之類也。剔出，無縷俗以之，謂堆朱屈輪也。

紅花綠葉

中華之製也。以五色漆畫花鳥竹木之樣，其地平而異剔，出盆亦有之。古者稱此盆謂存星者，誤矣。有星者蓋工之名也。其製甚精，與紅花綠葉少同大異。

右十品宋人總名曰剔紅，通生八牋詳解之。

沉金

和漢茶誌

卷二 五十三

不偏齋藏書

其紋極細比之堆朱等甚粗者也。然其漢器尚之香盒印籠紙匣此製多本國亦製。

交趾

其製多香盒也。象鳥獸形，青黃赤白紫相雜陶之。或有青磁其品粗也。蓋出於交趾故名之。

東京

諸具有之其製粗也。適有用海貝者粗中之精者。

也是小地名呼之。

廣東

西蜀共出好絹俗云之古金襴然蜀絹者不如廣東美銀襴亦然。壺囊皆以其舊尚之指名為某者以其所藏地及所持人呼之也。所謂本龍寺及白極等之類是也。

高麗

高麗所產具甚多其所最尚者茶盤也。今也藏於官庫候家之器也。人不能盡見流落于人財者多。

和漢茶誌

卷二 五十四

不偏齋藏書

矣其名以和漢州縣及陶匠名呼之。又有白銅器建水花瓶及盛飯水菜之器其品不一。然不知變人之製。

印度

俗呼井戶蓋字之誤也。本以自印度來為名。然高麗所造益亦通謂之印度。

金馬

時珍集解曰有馬檳榔有馬金南有紫檳榔常食。

者馬槽柳也金馬之製其肌理似換柳故取馬槽柳與馬金南之字合之以呼金馬耶然無所考證茶器香盒之屬皆有之峭陽人曰此器者莫卧爾人造之一說曰南京之製也未知孰是巧則南邦製之說迎是

灰焙轆

要錄曰

要錄和書也

土鎔

又云焙爐

具又云豐膏號土釜之別名也

世人實代焙祿代轆不知其所以又雖有一說難

和漢茶誌

卷二  
五十五

不偏齋藏書

信用今人所尚有謂朝次郎製者不審又云取南蠻之熟蓋以貯灰或代建水各操其便

和漢茶誌二畢

和漢茶誌卷二

日東洛陽三谷良朴宗鎮著

急須 本國薄茶入之類也

於漢土亦入稀茶具也 薄茶國語也 以犀角象牙類造

之其蓋多有鈕茶集宋黃裳龍鳳茶寄照覺禪師

詩中註曰急須東南之茶器也詩見下

本國珍之者何治即帽子亭是也 本自南漢器也

義故公之後往往模擬其形以造之以木或以角

和漢茶誌

卷三

不偏齋藏書

為家家之具當世或以此器為藏茶入櫃 俗曰珠挽家

光引拙紹鷗之時多有之後又橐中次由之製及

雪吹藥器等類競出矣

黃裳詩有物吞食月輪盡鳳翥龍驤紫光隱雨前

已見纖雲從雪意猶在渾淪中忽帶天香墮香篋

自有同幹欣相逢寄向仙廬引飛瀑一簇蠅聲急

須臾禪翁初起宴坐間接見陶公方解頤願指長

鬚運金碾未白眉毛且須轉

又謝人惠茶具并茶詩

義材見器安所施六角靈犀用相副 前後

都籃 都統籠

茶經曰以悉設諸器而名之以竹篾內作三角方

眼外以雙篾濶者經之以單篾織者縛之雙經作

方眼使玲瓏高一尺五寸底濶一尺高二寸長二

尺四寸濶二尺

本國以木造之謂之簞筥其內設版二片隨時或

和漢茶誌

卷三

不偏齋藏書

或插之以取其便 白桐篾製之他家間以淡漆塗之

而篇曰旅簞筥是也

離籃

茶經曰離籃以篋為之圓徑四寸若合形 合即字

疊貯鹽花也其揭竹製長四寸一分濶九分

愚按

本國民間翁姬動加鹽飲茶山谷邊鄙之人亦然

札

茶經曰札緝拊攔皮以茶葉木夾而縛之或截竹束而管之若巨筆形

本國滌潔茶鼎及茶具用此器或人曰律僧每日喫飯後滌鐵鉢之具亦類之

短檠

蘇退之短檠歌曰長檠八尺空自長短檠二尺便且光下宗易嘗定其尺度以濃漆塗之或以淡漆抹之其後他家有異其形且未漆者又近世以竹

和漢茶誌

卷三

不偏齋藏書

造燈臺呼之曰竹檠非也何者以檠字從木也只謂竹燈臺則可也

地爐

此非風爐陷入床中者也茶集所謂墩爐圍爐是也按古詩曰天地風霜日夜新地爐穩坐暖如春筋骸已暢心無用轉愧窓間映雪人又曰地爐火暖黃昏睡更有何人似我慵按昔圍爐方一尺六寸其席以長六尺五寸為度

宗易宗吸宗及嘗定於一尺四寸其席亦長六尺三寸至今為好爐緣栗木造之古今或以桑心柿等為之其於堂傍茶房者用其質或別構茶亭限四席半則必用漆製又以金銀粉飾之者適施院閣堂上義則美矣然侈麗奢靡却妨風雅寓寄曰看圍爐而飲茶形容之而謂圍爐也茶集曰圍爐交膝以之可識圍字之義本非居室之謂後世借用之以茶室謂圍非無謂也

和漢茶誌

卷三

不偏齋藏書

香爐

本國古有以木造之者金銷銀鑲其內或施金銀銅鐵以貯火又有陶器或有銅鐵二爐共鑄鳥獸之形寓寄曰位置香爐之法當由風力起見如一室之中有南北二牖風從南來則宜位置于正南風從北入則宜位置于正北若風從東南或從西北則又當位置稍偏總以不離乎風者近是若反風所向風去香隨而我不沾其味矣皆以風為過



客而玩之陳說也今也塞風未路

香毬 俗名之云轉香爐

邦之製也或人曰紅毛夷造之又漢南造之

本國昔有崎陽製今有洛陽制香毬又謂中香爐

一物二名也寓寄曰古玩中香爐一物其体極靜

其用又妙在極動是一日數遷其位片刻不容膠

柱者也蓋以中字命之者極靜極動之謂也

用茶事

和漢茶誌

卷三

不偏齋藏書

獨香爐

寓寄曰位置香爐是也無動靜者也

位置稍偏故謂獨香爐寓寄曰獨香爐一物勢有

不能愛之無勞待人之法也蓋以為陶香爐金香

爐銅鐵爐其品數多各位置稍偏者總謂獨香爐

今也以木香爐謂火執香爐者以其用名爐也蓋

獨字訓同故誤矣以獨字命之者亦位置稍偏之

謂耳非取諸執火之義也

凡獨香爐今尚陶器其製世有遠近且品形多目

巧者能詰其物

本國稱名物者五品各見下

本國之製亦品形多瀬戸唐津備前信樂等是也

又云或以銀或以銅銀者侈麗而不足風雅銅者

若似胡銅等漢器世以尚之適鐵製有蘆屋天貓

之古者多以獸形愈以珍焉又曰以桑梨桐栢為

之閒金銀銷鑠多畫草花其形如瓜或丑樣六樣

或七樣八樣其內或施銀銅貯灰存火今也謂火

和漢茶誌

卷三

不偏齋藏書

取香爐其誤見前又云陶爐中有自印度來其物

藏侯家庶人不能輒見又曰高麗百濟呂宋亞媽

港臺灣等陶器有其形似香爐者則貯灰為爐如

此類非舊式只其人所好又曰近世間用樂燒好

尚之昔者不然然臨時設之者主人之巧也不可

槩而論焉或位于盆者其器可否最不容不能辨

名物香爐 五品

一不破香爐

一珠光香爐

一千鳥香爐

一禪香爐

一居香爐

右五品皆中華製蓋自宋朝來各青磁也少有遠近耳義政公以降以為名物其中珠光香爐宗易傳受之千鳥香爐名卿收藏之今不知其所在

名物花瓶 七品 俗云花生

和漢茶誌

卷三

不偏齋藏書

一鎚無

本國飾書曰青磁漢器也

一碁

青磁漢器也

一筒

青磁漢器也

一桃尾

鑄五樣紋胡銅漢器也

一鉈

無紋紫銅漢器也

一鶴一聲

無紋胡銅漢器也

以上是位置之瓶也必備曰春冬用

銅夏秋用磁

一釣船

南邦製或曰紅毛製合子金也

六品最為名物

一坐露吏 無紋胡銅漢器也宗易名之

一管耳 無紋胡銅漢器也何人名之

一角木 能通 無紋紫銅漢器也

手燈籠

手燈籠以輪開類掛壁上花筐也或曰漢器然未所據或人曰府中長製其品似漢器也後世

稱手古於藝州巖嶋所造者亦與漢器同品

和漢茶誌

卷三

不偏齋藏書

名物天目臺

七品

今呼輪花名或四花或五花皆於本國

名也

一若狹臺 長樣元首內朱外青漆

一印臺

識印業字

以八分字書之故形如蜈蚣俗謂蜈蚣臺者誤矣

一朱臺

內外全紅朱

執印臺製造之然不如印臺

一殷紅臺

內外同色無地紋石三品之次者也

一花紋臺

其地黑紅朱紋

一海貝臺

俗云青貝也以貝為花葉式紋其品

精義者也

一擇欄臺或作花梨字其制質也以熟銅為覆輪

右七品最為名物凡其濶五十二分高不過一寸

一黑臺俗云數臺是也一名謂尼崎臺其數

多故云數臺所謂黑臺者為七品外

也或曰以海貝臺為外以黑臺為充

七品數者蓋誤矣其覆輪皆真鍮也

其中五品失於本能寺亂云

和漢茶誌

卷三

不偏齋藏書

交龍臺堆朱制

或人曰和州南都至今藏之其濶五寸五分高二

寸五分內外雕蛟龍比之七品高濶過於三五分

故為七品外

名物天目七品

一建盞俗云建山丁謂茶圖曰有如兔毫紋矣世人云

穎利是也茶錄亦云有如兔毫紋俗

云芒目是也穎利者極品建盞也芒目者次之

一曜變點液如星故為之名

一灰被一本灰蒙液汁如灰覆故為之名

一黃盞俗云黃天目是也以其色為之名

一油滴其色滑而如滴油故為之名

一玳比一名蟹甲盞或有杜若梅花等紋尚

其形之大

一烏盞其色如烏間點金液一色如鳥無金液者次之

右七品為名物

和漢茶誌

卷三

不偏齋藏書

又有謂熊皮盞者烏盞之類而有花鳥紋液色不

一又有謂馬上盞者是亦烏盞之類也但馬上盞

飲者乎

名物香盒十品

一張成

一揚茂

一周明

右上品也

一 張源

一 錢珍

一 呂甫

一 金甫

一 王圓

一 王賢

一 印堆 其中錢珍以下六品者於本館時之亂失之江州坂本失之不知孰是

右十品為名物張成最精所雕者深揚茂次之所

和漢茶誌

卷三

不偏齋藏書

雕者淺周明又其次也而近世所尚者楊茂與周明也底面雕其姓名者愈以為佳且蓋面或有立布袋居布袋草敷觀音等像

又有謂錢永者疑珍永一人二名也

右外有謂存星者紅花綠葉之屬也 謂存星者其制精美者

也

懸畫 俗云懸物

李氏云寓寄曰裱軸居家必備曰懸畫禪畫者始

於南北宋也茶集曰徐嶺曰陸士生平山水之

一幅古琴一張案上有墳典古詩之書若干卷

按古懸畫耳至宋專懸禪畫禪畫者想僧徒之所

畫乎

本國舊式亦懸畫也至源義政公懸禪僧書簡畫

替等墨痕也宗易以來和俗文章割紙等類亦揭

之

帷裱襖 和語表具也

和漢茶誌

卷三

不偏齋藏書

紙裱絹裱襖合錦之法及裱匠之事詳見寓寄又曰合二之法即其權在我授意于作書作畫之人裱匠則行其無事者也

按軸制有自軸撥軸塗軸渦軸寓寄曰軸者以梅

木又以玉角也雖以漆塗之時而發其香故李氏

以梅為雅近世尋常以檜枏桐杉為之佛氏像軸

以銅鐵張之或以漆入陳說新說只所好笠翁曰

實貼皆在此也自裱襖左右通於其中一木者為



好不然則易搖動故笠翁亦云

輪襪背 俗云輪補也

又左右合錦之紙謂輪襪襪之反對者也守土人  
法式者工匠批也時措之宜為巧

襪補背 俗云佛襪具也

左右全襪襪而其中加合錦紅絹者也然輪襪中  
無之也又按襪稍者飾寫真象者多用之茶人  
亦飲此

和漢茶誌

卷三  
十三

不偏齋藏書

中條 俗曰一行物或單下物或一下物

笠翁制度第一曰中條於

本國以二行三行者為整物或二字三字豎者人

曰二三字物或橫者呼之亦同故數字以下者云

一行物

斗方 俗云一枚物

李氏制度曰斗方

本國襪和文或割紙等類蓋新說也其制始中世

俗以和歌等呼一枚物以漢文呼小墨跡其餘倣  
此

橫批 俗云橫物也

笠翁曰橫批

以上三者襪式精粗大小長短皆隨物應變者可  
謂意匠稱先師式者拘泥以不通變者也

所被物甚多金縷金紗綾羅錦繡綃絳皆以用之  
紙襪亦陳說也

和漢茶誌

卷三  
十四

不偏齋藏書

自在 和語也

或人曰本野人煮羹之具也取用為茶房器玩其  
上懸天井下至地爐活火沸騰則上之若湯火冷  
則下之可謂升降自由動靜自在者其雅宜哉  
其制用竹為幹懸下在鍵其竹以四尺七寸或  
寸不過七節八節若天井高竹不足則以鐵助之  
其所釣木以茱萸木按以沫滿五土則不許用之  
然為宗師者不在此例也

鎖 或作鎖

火壯者許玩之其制古用赤小豆鎖中世用大鎖釣釜者以銅鐵造之其形有圓鈎木瓜鎖及不過此三者而以應千釜宜者也或間取南蠻鐵帶用之多兩面銀鑲之今用大鎖者始宗易又有以真鍮為之且由古及今施於堂上不容茶房蓋天上有蛭鈎則爐中無鼎頭是乃其式也

和漢茶誌

卷三十五

不偏齋藏書

宋蔡襄茶錄二篇雖曾刻之于當時而予明已失之為可惜耳幸予三十餘年前受得之於武人藏笥中數年矣常想此篇正是見中華之名實知我國之遺傳何可捨乎故今遂舉於斯云

茶錄序

朝奉郎右正言同修起居注 臣蔡襄上進

臣前因奉事伏蒙

陛下諭先任福建轉運使日所進上品龍茶最為精好臣退念草木之微首辱

陛下知鑒若處之得地則能盡其材昔陸羽茶經

不第建安之品丁謂茶圖獨論採造之木至于烹

試曾未有聞臣輒條數事簡而易明勒成二篇名

曰茶錄伏惟

清問之宴或賜

觀采臣不勝惶懼榮幸之至謹序

和漢茶誌

卷三十六

不偏齋藏書

新刻茶錄 全

宋蔡襄 君謨 著

明胡文煥德父 校

上篇論茶

色

茶色貴白而餅茶多以珍膏油其面故有青黃

紫黑之異善別茶者正如相工之脈人氣色也隱

然察之于內以肉理潤者為上既已未之黃白者

受水昏重青白者受水鮮明故建安人關試以青白勝黃白

愚按以珍膏者在餅茶如團茶不用之油其面珍膏者果膏也只以懼外風與濕氣也青黃紫黑之異者油其面以藏後出之見之其色或青或黃或紫或黑然

本國無此說善別茶者察茗芽直知味之厚薄正如相工之取人氣色也肉理潤者味最厚為

和漢茶誌

卷三  
十七

不偏齋藏書

上黃白者真味損肉亦不潤受水其色昏重也青白者香味如初而其色不損受水鮮明也故建安諸山人關之試之時盞中以青白勝黃白本國由古諸山商賈負壺集鬼途為市關之試之今尚然以青白鮮明為勝又曰於本國分濃茶稀茶二者其制作有精粗故也彼國以謂青白者味至而濃故自為濃茶黃白者味粗故自為稀茶本無二者之別然

本國嗜濃則賓主互厚其禮備其具異其飾也

嗜稀則殺其禮略其備於斯二者等最明也充途人曰抹茶制作之間呼濃茶曰白呼稀茶曰首收藏之後呼濃茶曰袋茶呼稀茶曰詰茶矣濃茶曰一袋者其重二十錢曰半袋者半此曰小半袋者四分之也又曰詰茶一者亦其重二十錢也以十倍其二十錢謂一斤

香

和漢茶誌

卷三  
十八

不偏齋藏書

茶有真香而入貢者微以龍腦和膏欲助其香建安民間試茶皆不入香恐奪其真若烹煎之際又雜珍果香草其奪益甚正當不用

按茶經司馬相如烹煎或加桔梗欬冬貝母芍藥白薇白芷菖蒲茱萸等如建安真茶不用此恐奪其真蔡君謨之說宜哉

本國之陳說用大蒜塗壺中其法受茶二斤者蒜一兩受一斤者半兩塗之燥之藏茶大禦濕

潤然近來不聞此制予試以蒜一分入碾茶三日而開其器察之則茶色不變其香不減也今按茶經無加大蒜之說入貢者以龍腦和膏欲助其香想入貢者重之耶今

本國以甌蒸之焙籠藏之皆唐陸羽與宋蔡襄之遺言而中世以來兔途小倉土人能知之其制至精諸山湯制者皆其味淡薄也兔途小倉

和漢茶誌

卷三

不偏齋藏書

廿六町餘西平川去兔途西三十町餘佐古去兔途西十六町餘佐山去兔途西三町餘田井去兔途西十七町餘白川去兔途西北十町餘三室去兔途東十八町餘大鳳寺去兔途東十八町餘水幡去兔途東十町餘之邑各湯制出之右十邑之外宇治

味

依信樂二邑皆出青茶尤粗者也

茶味主于甘滑惟北苑鳳凰山連屬諸焙所產者味佳隔溪諸山雖及時加意製作色味皆重莫能

也又水泉不甘能損茶味前世之論水品者以此

按茶味元苦淡者也而茶君謨曰甘滑者不苦不澁無死中惡臭有飲中好氣其真味和口古而甘滑之謂也按茶經雖品彙多北苑之餅焙鳳凰山之鳳焙已極真也故曰隔溪諸山雖及時加意製作色味皆重矣

本國兔途茶猶北苑鳳凰味至佳出於諸山無

和漢茶誌

卷三

不偏齋藏書

及兔途者水泉不甘能損茶味此說至今同前世論水品者陸鴻漸二十一水歐陽修七等之類也

本國以謂初昔後昔三月朔二日採之謂之初昔三日四日採之謂之後昔也然家家不必拘上日數三月中始取謂之初後取謂之後耳古有雷鳴茶之說正當不用也

藏茶



茶葉而長香藥喜溫燥而忌濕冷故收藏之家以蒟葉封裹入焙中兩三日一次用火常如人體溫溫則禦濕潤若火多則茶焦不可食

按蒟葉禦濕故以此封裹茶譜曰蒟小生食之長生織之茶具圖贊韋鴻臚皆以蒟葉為焙籠去火尺許有棚是也畏香藥之說始乎君謨司馬相如以八藥藏之如建安真茶自古不用藥蔡君亦復由之蒟葉焙籠之說

和漢茶誌

卷三

不偏齋藏書

本國無之初入焙中三日者同制既藏之而後必以火入焙一日二日者五月初或七月初之事也凡入焙藏之日忌雨疾風晴天焙之不宜夜陰壺位高闊去地遠則冷能養之又風雨與夜陰不開壺旋碾之時最避雨屏風不然則損色失香必不容不謹

炙茶

茶或經年則茶色味皆陳於淨器中以沸湯漬之

則去膏油一兩重乃止以鈴煎之微火炙乾然後碎碾若當年新茶不用此說鈴其厲切音鈴

按茶經年則色味皆陳之說謂餅茶也於淨器中以沸湯漬取之則去膏油其漬一兩重乃止以鈴煎之以微火炙乾後點之則隨其多少碎點若當年新茶則不用此其言最然如建安自古無此制或在黑蓋中熱面青白之說皆謂極末細散濃茶孟唐陸鴻漸宋蔡君謨之言也

和漢茶誌

卷三

不偏齋藏書

然則當時嗜龍團餅茶者間多故蔡君於斯論之又曰團餅與末散烹煎與筴點文理混難分別委曲察之而後可辨其等耳本國之茶專謂碾茶耳由古無餅團之說況於管油鈴煎乎彼國者不然別制多品隨其所嗜或歌之或賦之不可槩論也

碾茶

碾茶先以淨紙密裹槌碎然後熟碾其大要旋碾

則色白或經宿則色已昏矣

按碾茶以淨紙密裹以槌碎之說不必通言或  
崔古鷹爪者不及槌碎有骨有莖或於甌中合  
肉堅實者難碾如此者槌碎碾之也又曰以二  
三芽旋碾則色青白至精微而其味神也盛白  
孔則粗經宿則昏重也

羅茶

羅細則茶浮麤則水浮

和漢茶誌

卷三  
二十三

不偏齋藏書

按羅茶者以羅篩之故愈精茶浮也羅者以蜀  
絹為上如

本國旋碾精者不及用羅然間苦茗芽落於磨  
中故供大人者用此如民間手旋碾者不用亦  
可也茶浮水浮之說論羅絹精粗耳

候湯

候湯最難未熟則沫浮過熟則茶沈前世謂之蟹  
眼者過熟湯也沈甌中煮之不可辨故曰候湯故

難

按是謂煮茶法然暗合點茶世人曰一沸二沸  
崖波三沸熟湯以熟點茶也此說最合正文熟  
茶法老湯則盞中湯浮沈茶於粥中欲使終日  
不熟湯者當頻頻添炭助活火火衰則必過熟  
也甌中煮之不可辨蓋煮茶時雖甌中沸聲未  
絕其芳沸沈於甌底自外不可辨之也故煎茶  
點茶俱候湯最難

和漢茶誌

卷三  
二十四

不偏齋藏書

燂盞字彙燂虛業切  
音骨火迫也

凡欲點茶先須燂盞令熱冷則茶不浮

按燂盞以沸湯令熱其粥中也或盞大厚者燂  
迫一兩重則粥中自熱而茶色味香最神也

本國謂之投筴其言雖異其意同冷則茶不  
之言最然人人能知之

點茶

世人謂立茶大觀茶論曰  
拂擊無力茶不發立是也

茶少湯多則雲脚散湯少茶多則粥面聚建安  
雲脚散

和漢茶誌

卷三  
二十五

不偏齋藏書

而鈔茶一錢匙也。先注湯調令極勻。又添注八環。迥擊沸湯上蓋。可四分則止。眠其面色鮮白著。蓋無水痕為絕佳。建安關試以水痕先者為負。耐久者為勝。故較勝負之說曰。相去一水兩水。按茶少湯多則雲脚散。點茶之時蓋中茶少湯多則散也。雲脚者茶與湯相合如雲垂脚者湯多則無之。湯少茶多則粥面聚。湯與茶相合則粥面聚於蓋中也。免途人必以曰合柄抄者量水其合稱茶一錢匙合也。以是點之則茶與湯合。勻注湯調令極勻者。四時共如此。初寒節最為好。又添注八環。添注以筴八次環之。迥擊沸湯則粥面上蓋四分而止也。其蓋中面色眠之鮮白著茶蓋而無水痕者。以是為絕佳。建安人關試以水痕有無所謂水痕先者為負。水痕耐久為勝。故較勝負之說曰。相去一水兩水矣。

茶焙

和漢茶誌

卷三  
二十六

不偏齋藏書

茶焙。為之裹以弱葉。蓋其上以收火也。隔其中以有容也。納火其下去茶尺許。常溫溫然。所以養茶色香味也。

按茶焙者焙籠也。編竹為之。其上全封裹以弱葉也。蓋其上即封裹之謂也。蓋為收火也。隔其中以有容焙籠中有棚納火其下去茶一尺許。常不絕其火溫溫然則能養之不損茶色香味也。初其火炎上時不容茶。後溫溫而容茶。常藏之所載茶圖韋鴻臚建城之類皆是也。本國不用此制。新焙茶之間兩三日以柞炭埋灰中焙之。顛倒茶九一時二十度晝夜同之。次日火勢溫溫顛倒一時五六度又次日慢火如人肌溫溫而且猶顛倒之以紙被蓋茶上令其香氣不漏既而出晒之紙上把木鋤以手之乾而後當晴天藏之壺中常禦濕潤故置之高閣。雨後五月七月暑溫時再出之焙一日其火亦

猶人肌，溫溫顛倒，略如初寒，畢後令位高闊而受涼風矣。

### 茶籠

下入焙者，宜密封裏，以弱籠盛之，置高處，不見濕氣。

按：茶不入焙者，言一焙畢不復入焙籠，火上者置高處，不見濕氣之說，詳於上。焙後本國亦然，然以弱籠者，未見之。

## 和漢茶誌

卷三  
二十七

### 不偏齋藏書

### 砧椎

星，鏡，玉，並，槌，衣，石，也，槌，緯，石，之，類。

砧椎蓋以砧茶以木為之，椎或金或鐵，取于便用。按：碎茶之重，葉骨莖之具也。

本國自古及今，不見之，只封裹于淨紙，碎而止。

### 茶鈴

其，應，切，音，箱，鐵，鈴，鋤，也，星，鏡，寒，乾，二，音。

茶鈴，屈金鐵為之用，以炙茶。

按：煎茶，漬沸湯後，以微火炙之，具也。於建安不見此說，蔡君間用之也乎。

本國亦不聞之。

### 茶碾

索與輓同，群玉海，篇音輓磨也。

茶碾以銀或鐵為之，黃金性柔，銅及礪石皆能生銹，不入用。

按：茶碾者磨也，宜於銀鐵也。黃金性柔，銅與礪石皆生銹，故不入用也。今考之，礪石似玉，石也。蔡君所好者，銀鐵也。

本國所用者，銀垂石也。然五月六月之間，見其

## 和漢茶誌

卷三  
二十八

### 不偏齋藏書

中則有水氣，猶蔡君所謂銹也。故臨時炙之，按字書，礪，音史，諸切。石，石，次玉者，銀垂石之類也。於宇治造之，其石出於朝日山。

### 茶羅

茶羅以絕細為佳，羅底用蜀東川鵝溪畫絹之密者，投湯中揉洗以羅之。

### 茶盞

按：茶羅茶具圖，贊曰：羅，樞密是也。其說見前。



茶色白宜黑盞建安所造者紺黑紋如鬼毫其坯微厚燒之久熱難冷最為要用出他處者或薄或色紫皆不及也其青白盞閩家自不用

按茶色白宜黑盞矣此說見前建安關試專用之鴻漸常以建盞嗜茶建安所造之盞紺黑紋如鬼毫者是也今俗呼此紋曰芒目其中紋明曰頽利皆液汁之別也建安外出他處者其形品薄或其色白皆不及建安關試家不用青白

和漢茶誌

卷三  
二十九

不偏齋藏書

盞者盞中之茶色不宜也

茶匙

茶匙要重擊拂有力黃金為上人間以銀鐵為之竹者輕建茶不取

按茶匙者有黃金有銀有鐵有玉有角有桑有梨有柳有竹也各見前擊拂有力之言欲令黃金為之也蔡君蓋為供君乎人間以銀鐵為之所謂竹者輕建茶不取之言蓋謂庶人之用

銀匙無則義矣然不足風雅故本國專以竹造之

湯瓶

瓶要小者易候湯又點茶注湯有準黃金為上人間以銀鐵或瓷石為之

按瓶要小者以其輕而沸湯易候也點茶注湯者不用分盈直由湯瓶注湯為自有準也於本國家家有之黃金為上者天子之事以銀者

和漢茶誌

卷三  
三十

不偏齋藏書

公卿之事鐵或以客石者民間之事以銅者上下之常茶瓶湯瓶見前

茶錄後序

臣 皇祐中修

起居注奏事

仁宗皇帝屢承

天問以建安貢茶并所以試茶之狀臣謂論茶雖禁中語無事于密造茶錄二篇上進後知福州為

掌書記竊去藏稿不復能記知懷安縣楚紀贖得之遂以刊勒於好事者然多舛謬臣追念先帝顧遇之恩攬本流涕輒加正定書之石以永其傳

治平元年五月二十六日三司使給事中

臣蔡襄謹記

後序 畢

### 和漢茶誌

卷三十一

不偏齋藏書

所輯宋子安新刻東溪試茶錄曰

抹茶辨茶須知製造之始

建溪茶比他郡最先北苑壑源者尤早歲多暖則先驚蟄十日即芽歲多寒則後驚蟄五日始發先芽者氣味俱不佳唯過驚蟄者最為第一民間常以驚蟄為候諸焙後北苑者半月去遠則益晚凡抹茶必以晨興不以日出日出露晞為陽所薄則使芽之膏腴泣耗于內茶及受水而不鮮明故常

以早為最凡斷芽必以甲不以指以甲則速斷不柔以指則多溫易損擇之必精濯之必潔蒸之必香火之必良俱為茶病民間常以春陰出而抹則芽損建人謂之抹茶鮮是也

茶病試茶辨味必須知茶之病故又次之

芽擇肥乳則耳香而粥面着蓋而不散土瘠而芽短雲脚渾亂去盞而易散葉梗半則受水鮮白葉梗短而色黃而泛梗謂芽之身除去白合處茶烏民以茶之色味俱在梗中

### 和漢茶誌

卷三十二

不偏齋藏書

蒂白合茶之大病不去烏蒂則色黃黑而惡不去白合則味苦澁丁謂之論備矣蒸芽必熟去膏必盡蒸芽未熟則草木氣存通口去膏未盡則色濁而味重受煙則香棄壓黃則味失此皆茶之病也受煙謂火中有烟使茶香盡而烟臭不丟也壓去膏氣如雞卵臭也

茶經一之源

唐陸鴻漸茶經曰茶者南方之嘉木也丁尺二尺

通至數十尺其已山峽川有兩人合抱者伐而擬之其樹如瓜蘆葉如梔子花如白蒿薇實如柗欄葉如丁香根如胡桃

瓜蘆木出廣州似茶至苦澁柗欄蒲葵之屬其子似茶胡桃與茶根皆下孕兆至尾際

其字或從草或從木或從木并

從草當作茶其字出開元文字者義從木當作

柗其字出本草草才并作茶其字出爾雅

和漢茶誌

卷三 三十三

不偏齋藏書

其名一曰茶二曰櫻三曰設四曰茗五曰荈

周公曰攬苦茶揚執戟曰蜀西南人謂茶曰設郭

弘農曰早取為茶晚取為茗或一曰荈耳

其地上者生爛石中者生榛壤榛字當從石為礫下者生

黃土凡藝而不實植而罕茂法如種瓜三歲可採

野者上園者次陽崖陰林紫者上綠者次筍者上

芽者次葉卷上葉舒次陰山坡谷者不堪採採茶

之為用味至寒為飲最宜精若熱渴凝悶腦疼目

澁四肢煩百節不舒聊四五啜醍醐耳實也採不時造不精雜以草莽飲之成疾也亦猶人參上者生上黨中者生百濟新羅下者生高麗在澤州易州幽州檀州者為藥無効

茶經二之具

此一節大槩見前

茶經三之造

鴻漸曰凡採茶在二月三月四月之間茶之筍者

和漢茶誌

卷三 三十四

不偏齋藏書

生爛石沃土長四寸若薇蕨始抽凌露珠為有三

枝四枝五枝者選其中枝穎拔者採焉有雨不採

晴有雲不採晴採之蒸之焙之穿之封之茶之乾

矣茶有千萬狀

茶經四之器

風爐 見前

筥 同

炭 同

火筴 同

鍤 同

交床 支鍤是也一節見前

夾 以小青竹為之長一尺二寸令一寸有節飾

已上剖之以炙茶也彼竹之篠津潤於火假其香

潔以益茶味恐非林谷間莫之致或用精鐵熟銅

之類取其久也

紙囊 以藤紙白厚者夾縫之所以貯炙茶使不

和漢茶誌

卷三  
三十五

不偏齋藏書

池其香也

碾 見前

羅合 同

則 同

水方 同

漉水 同

鑊 同

熟 同

盞 同

盞 盛土器也省之

扎 見前

滌方 同

滓方 同

巾 同

具列 同

都藍 同

和漢茶誌

卷三  
三十六

不偏齋藏書

茶經五之煮

烹煎資之

水論 大槩見前篇又曰一沸緣邊如湧泉連

珠為一沸騰波鼓浪為三沸已上水老不可食也

一本曰其味苦而不耳槓也耳而不苦癖也蝦芒

咽其茶也

古人有勞薪之味信哉其水山水上江水中井

水下也豈可不辨哉



種曰茶茗久服人有力悅志  
爾雅曰檟苦茶

廣雅曰荆巴間採葉老者作餅

楊雄方言曰蜀西南人謂茶曰葭

括地圖曰臨遂縣東一百四十里有茶溪

山謙之吳興記烏程縣西二十里有溫山出御

永嘉圖經曰永嘉縣東三百里有白茶山

淮陰圖經曰山陽縣南二十里有茶坡

和漢茶誌

卷三  
三十七

不偏齋藏書

本草木部茗苦茶味苦微寒無毒利小便去痰渴  
熱令人少睡秋採之若春採之耳

茶部苦茶一名茶一名選一名游冬生益州川谷

山陵道傍凌冬不死三月三日採乾是今茶

詩

六義歌

唐陸羽

不羨黃金壘不羨白玉盃不羨朝入省不羨暮入

畫千羨篇羨西江水流向竟陵城下來

孟諫議寄新茶

盧仝

日高大五睡正

扣門驚周公口傳諫議送

書信白紵斜封三道印開紙見諫議面首閱月

團三百片聞道新年入山裡蟄蟲驚動春風起天

子須嘗陽羨茶百草不敢先開花仁風暗結珠倍

蓄先春抽出黃金芽摘鮮焙芳旋封製至精至好

且不奢至尊之餘合王公何事便到山人家柴門

和漢茶誌

卷三  
三十八

不偏齋藏書

反關無俗客紗帽籠頭自煎吃碧雲引風吹不斷

白花浮光凝碗面一碗喉吻潤二碗破孤悶三碗

探枯腸惟有文字五千卷四碗發輕汗平生不平

事盡向毛孔散五碗肌骨清六碗通仙靈七碗吃

不得也唯覺兩腋習習清風生蓬萊山在何處玉

川子乘此清風欲歸去山上群仙司下土地位清

高隔風雨安知百萬億蒼生生命墜巖崖受辛苦便

從評議問蒼生到頭恰得蘇息否

陸羽採茶

皇甫曾

千峰待遠客，香茗復叢生。採摘知深處，烟霞羨獨行。幽期山寺遠，野飯石泉清。寂寂燃燈夜，相思罄一聲。

茶鼎

同

龍舒有良匠，鑄此佳樣成。立作蒲螽勢，煎為清瀝聲。草堂暮雲陰，松窓殘雪明。此時勻複茗，野語知逾清。

和漢茶誌

卷三  
三十九

不偏齋藏書

茶甌

同

邢客與越人，皆能造茲器。圓似月魂墜，輕如雲魄起。棗花勢旋眼，蘋沫香沾齒。松下時一看，支公亦如此。

茶籬

陸龜蒙

金刀劈翠筠，織似波文斜。製作自野老，持伴山娃。昨日鬪烟粒，今朝貯綠華。爭歌調笑曲，日暮方還家。

茶舍

同

旋取山上材，架為山下屋。門因水勢斜，壁任巖隈曲。朝隨烏俱散，暮與雲同宿。不憚採掇勞，祇憂官未足。

茶鼎

同

新泉氣味良，古鐵形狀醜。耶堪風雪夜，更值煙霞友。曾過潁石下，又住清溪口。潁石清溪皆江南出茶處且共煮皇廬。名茶何勞傾斗酒

和漢茶誌

卷三  
四十

不偏齋藏書

茶人

同

天賦識靈草，自然鍾野姿。閑來北山下，似與東風期。雨後探芳去，雲間幽路危。唯應報春鳥，得共斯人知。

茶甌

同

昔人謝堰堤，徒為妍詞飾。謝堰堤皆臨也豈如珪壁姿，又有煙嵐色。先參筠席上，韻雅全壘側。直便于闌君從之。

煮茶

同

閑來松間坐，看煮松上雪。時於浪花裏，併下藍英  
未傾餘精爽，健忽似氛埃。滅不合別觀，書但宜窺  
玉札。

睡後茶

白樂天

婆娑綠陰樹，斑駁青苔地。此處置繾綣，旁邊洗茶  
器。白甕甕甚潔，紅爐炭方熾。未下麴塵香，花浮魚  
眼沸。盞末有佳色，嚙罷餘芳氣。不見揚蓀巢，誰人

和漢茶誌

卷三  
四十一

不偏齋藏書

知此味

送陸羽棲霞寺採茶 皇甫冉

採茶非採菜，遠遠上層崖。布葉春風暖，盈筐白日  
細。猶知山寺路，時宿野人家。借問王孫草，何如浮  
掩花。

茶人

皮日休

生於顧渚山，老在漫石塢。語氣是茶薺，衣香是烟  
霧。庭從顚子遮，果任孺師虜。日晚相笑歸，腰間佩

輕羹

茶壺

宋蔡襄

造化曾無私，亦有意所加。夜雨作春力，朝雲護日  
車。千萬碧玉枝，戢戢抽靈芽。

採茶

同

春紅旗散入青林下，陰崖喜先至。新苗斷盤  
托，競携筠籠歸。更帶山雲濕。

試茶

同

和漢茶誌

卷三  
四十二

不偏齋藏書

兔毫紫甌新，蟹眼清泉煮。雪凍作成花，雲間未垂  
縷。願爾池中波，去作人間雨。

嘗茶

梅堯臣

都藍携具向都堂，碾破雲團北焙香。湯嫩水輕花  
不散，口甘神爽味偏長。莫誇李白仙人掌，且作盧  
仝走筆章。亦欲清風生兩腋，從教吹去月輪傍。

寄新茶

同

貢時天上雙龍去，闕處人間一水爭。分得餘甘慰

憔悴瘵骨終夜骨毛清

茶巖

同

岩下繞經昨夜雷風爐尾鼎一時來便將槐火煎  
岩溜聽作松風萬壑迴

茶苑

黃裳

豆道雨芽非北苑須知山脉是東溪旋燒石鼎供  
吟嘯容照岩中日未西

又

同

和漢茶誌

卷三  
四十三

不偏齋藏書

想見春來喊動山雨前收得幾籃還斧斤不落  
人平且喜家園禁已開

乞茶

同

未終七椀似盧仝解誇駸駸兩腋風北苑搶旗應  
滿篋可能為惠向詩翁

送龍茶與許道士

歐陽永叔

潁陽道士青霞客來似浮雲去無蹟夜朝北斗大  
清壇不道姓名又不識我有龍團古蒼壁九龍泉

深一石八惠君汲井試烹之不是人間香味色

雙井茶

同

西江水清江石老石上生茶如鳳爪窮臘不寒春  
氣早雙井芽生先百草白毛囊以紅碧紗十斤茶  
養一兩芽長安富貴五侯家一啜猶須三日誇寶  
雲日注非不精爭新棄舊世人情豈知君子有常  
德至寶不隨時變易君不見建溪龍鳳團不改舊  
時香味色

和漢茶誌

卷三  
四十四

不偏齋藏書

種茶

蘇子瞻

松間旅生茶已與松俱瘦茨棘尚未容蒙翳爭交  
攢天公所遺棄百歲仍穉幼紫荀雖不長孤根  
獨壽移栽白鶴嶺土軟春雨後彌旬得連陰似許  
晚遂茂能忘沅博苦戢戢出鳥味未仕供白糜且  
可資摘嗅千團輸大官百餅衛私闥何如此一啜  
有味出吾園

送南屏謙師

同



道人曉出南屏山來試點茶三昧手忽驚午盞鬼  
毛斑打作春鵝鵝兒酒天台乳花世不見玉川風  
腋今安有先生有意續茶經會使老謙名不朽

過陸羽茶井

王元之

甕石苔封百尺深試今甞味少知音惟餘半夜泉  
中月留取先生一片心

試茶詩

林和靖

白雲峯下雨槍新膩綠長鮮穀雨春靜試恰如湖

和漢茶誌

卷三  
四十五

不偏齋藏書

上雪對窗魚憶刺中人

詠茶

丁謂

建水正春清茶民已夙興萌芽先社雨採掇帶春  
破細香塵起烹新玉乳凝煩襟時一啜寧笑澗  
如澗

雙井茶送蘓子瞻

黃山谷

想見東坡舊居士揮毫百斛瀉明珠我家江南摘  
雲腴落磴霏霏雪不如

黃吳州索煎雙井

同

家山鷹爪是小草敢與好賜雲龍同不嫌水厄幸  
來辱寒泉湯鼎聽松風

許覺之惠椰子茶盃同

碩果不食寒林指削而器之如懸匏故人相見各  
貧病且可烹茶當酒肴

煎茶

羅大經

松風槍雨到來初急引銅瓶離竹爐待得聲聞俱

和漢茶誌

卷三  
四十六

不偏齋藏書

寂後一甌春雪勝醍醐

武夷茶

趙希樞

和氣滿六合靈芽生武夷人間渾本覺天上已  
知

武夷茶

白玉蟾

仙掌峰前仙子家家來活火煮新茶主人遙指  
烟裏瀑布懸崖剪雪花

武夷茶

劉說道

雲手得先春。龍焙收奇芬。進入蓬萊宮。翠瓊生白雲。坡詩咏粟粒。猶記少時聞。

武夷茶竈

同

仙翁遺石竈。宛在水中央。飲罷方丹去。茶烟裊細香。

雲谷茶坂

同

携簾北嶺西。采擷供茗飲。一啜夜窓寒。跣趺謝余枕。

和漢茶誌

卷三  
四十七

不偏齋藏書

建守送小春茶

王十朋

建安分送建溪春。驚起松堂午夢人。盧老書中亦見面。范公碾畔忽飛塵。卜篇北苑詩無敵。兩腋清風思有神。日鑄卧龍非不義。賢如張禹想非真。坡

武夷茶

元陳夢庚

儘誇六碗便通靈。得似仙山石乳清。此水此茶須此甯。無人肯說與端明。

御茶園

鄭主忠

御園此日焙新芳。石乳何年已就荒。應是山靈知獻納。不將口脂媚君王。

貢茶

藍靜之

河官暫託貢茶臣。行李山中生數旬。萬指入雲頻采。千峰過雨自生春。封題上品頒天府。收拾餘芳寄野人。老我空腸無一字。清風兩腋願輕身。

武夷茶

林錫翁

和漢茶誌

卷三  
四十八

不偏齋藏書

百草逢春未敢花。御茶苦蕾拾瓊芽。武夷直是神仙境。已產靈芝更產茶。

試武夷茶

杜本

一徑入烟霞。青葱渺四涯。卧虹橋百尺。寧羨玉川家。

寄茶

明文徵明

小印輕囊遠寄遺。故人珍重手新題。暖含烟雨開封潤。翠展旗鎗出焙齊。片月分明逢錦議。春風彷彿

佛在荆溪松根自汲山泉煮一洗詩腸萬斛泥

試茶

徐熈

高枕殘書小石床偶來新味競芬芳盈盈七抄渾  
閒事直入窮探最苦腸

竹爐眼薦新甞愈苦從教愈有香我亦有香還  
有苦儘令湯火更何妨

御茶園采茶詞

同

萬壑輕雷乍發聲山中風景近清明筠籠竹筥相

和漢茶誌

卷三  
四十九

不偏齋藏書

勢去亂採雲芽趁雨晴

貢茶

同

雨前初出半巖香十萬人家未敢嘗一自尚公傳  
進貢年年先納縣宮堂

茶洞

謝肇淛

草屋編茅竹結亭薰床尾鼎黑磁瓶山中一夜清  
明雨收却先春一片青

寫酒德之頌以俟他日陳仲濤

柴桑托於酒臨酌忽忘天而我亦如是玄心照茗  
泉

茶品在塵外何須人出塵茫茫塵眼醉誰是  
人

團餅乳花巧卷芽雲氣深將芽來作餅隱士糲朝  
簪

賓來手自潑入口羨孤絕自是韻相同非關精水  
法

和漢茶誌

卷三  
五十

不偏齋藏書

好友蘭言密寄書玄義折此意不能傳茶甌答以  
點

酒談美如蘭茶神清如竹花外有真香終推此君  
獨

酒德泛然親茶風必擇友所以湯社事湧經我輩  
手

露下水雲清踈林如墮髮試茗石泉邊一甌蘸秋  
月

白石含雲潤丹砂出火凝今時無石鼎托客覓宜興

雪是穀之精却與茶同調洗餅花片來茶色欣然笑

泉山憶雪遙得雪茶神足無雪使茶孤不孤頭有

所世氣損靈骨何物仗延年吾是烟霞癖君稱草水僊

和漢茶誌

卷三  
五十一

不偏齋藏書

泉鳴細雨來風靜孤烟直遙煮林氣青知有卧雲客

春林過雨淨春鳥帶雲來夢餘茶火熟一酌山花開

和漢茶誌卷三畢大尾



跋南川氏茶誌

周公作易象及酒卦再四尤致  
意於未濟之上九曰有孚于飲  
酒无咎濡身首有孚失是孔子  
曰飲酒濡首不知節也故聖  
人之設教不欲外乎人情而

整

之使人即凡起居飲食日用之  
間以求一是而已矣唯人情不  
能無好尚好尚之專天下成風  
如唐陸羽之於茶先也相送民  
也宜其超然事物之外而顧自  
區於是方其撰茶經云茶之

尔之法之具惟恐天下後世不  
好之及其不為一字卿不禮愧  
之著論毀茶惟恐天下後世好  
之噫羽之志可不哀邪夫茶雖  
無功可行也而羽獨以其所悅  
而卒名不朽則使羽復出無如

生

之何者又於羽也嘆之矣然羽  
之後詩流騷輩嗜茶而不厭  
二語推羽之事以廣之羽為全  
茶而極矣獨叢林清規有茶禮  
行之最久此方為羽之事若茶  
雖踞山林与禪人往來別立會

約安淡玄率自將調淡自甘陶  
情養性澄思慮於而野服草具  
由羽之類也彼者習於身樂之  
而不願乎其外若是可傳乎耳  
若乃因茶思畫思易藝博蠱  
思欲得乎不可得致乎不可致

後三

而一玩之者主以衝實小以媚  
主一延之者主以身視目食較  
之需者之義同一歸於失是上  
不知節也谷南川氏以學和自  
名者三十年矣今也老矣乃其  
茶法三卷綜舉茶事其澄飲博

將以傳諸後求諸君子之文又  
請余題其末余復以言哉意以  
其與余仕同其始同其終不  
獲辭且避也遂書以塞其請  
享保丁未八月

後

屈止脩身之撰

享保戊申春正月新鐫

書林

中門藤四郎

同茂兵衛

堀川通六角下九町



狩野永納 檜山義慎 著

本朝畫史  
續本朝畫史

明治十六年（一八八三）東京刻本



據明治十六年（一八八三）  
東京刻本影印

狩野永納撰  
檜山義慎撰

# 本朝畫史

正續 五冊

續本朝畫史、舊皇朝名畫拾遺、改題  
シタモノニテ、本朝畫史、合編シ完璧トナシ  
且又畫史、舊撰板、画家ノ印章ヲ付スルト  
雅ニ誤認不解故、異日校正副刻スル也

佚存書坊印行

## 本朝畫史序

傳曰百工居肆以成其事、畫圖亦百工之一也、故周禮考工之屬記畫績之事、是以古來遊於此藝者、不少、既有其事、則各不能無務、務而成其事、則得其名、得名宜其容易哉、余見焦氏經籍志有畫錄、畫品、畫評、畫繼、畫斷等若干卷、目乃知輯錄能成其務、得其名者、也。本朝亦非無達此技者、然輯錄不聞、則殆失其傳也、方今洛人狩野永納以畫世業、遍考舊記、

## 本朝畫史序

一

搜索倭字小說、尋問輦下古寺所藏、收拾耳學口碑之所、傳聞而得其達者、四百數十人、作之小傳、其友黑川道祐頗補助之、遂勒成五卷、曾以與余通信、求弁一語於其端、然余不知繪事故、不肯而闕之道祐頻請、不措祐之父陪我先考之門、通奕世之交、故雖有好事之慮、不能峻拒焉、詳曰日月星辰雲霞在天、成象山川艸木鳥獸在地、成形共是自然之文也、人物亦各有象形、其象也其形也千變萬化不可勝言、

也自然之文得於心而應於手者畫也然則覃思於此窺觀天地模寫人物而設各色以盡其變則成一藝之務乎此五卷暗與米芾朱芳之錄同名而我邦之名畫者不朽而存也蓋其庶幾張彥遠乎延寶戊午之秋鷺峰林叟操觚於東武岡塾

本朝畫史序

本朝畫史總目錄

畫原 畫官 畫所 畫考 畫運 畫式

畫題 上古畫錄是惟本朝習來古風不擬貴賤

門之以為專 中世名品但古風習來者變而後漢

貴賤者至隱 專門家族狩野長谷川之類或

雜傳近世桑門遊藝之一端弄筆 補遺 附錄

繪畫器具

總目終

凡例

一此書ニ出ス所略傳ハ唯後素ノ為ニ記セシナレバ其智徳藝龍  
ノ事ハ載セザルモノ多シ但シ年代春秋等ニ於テハ鑒定ノ考據  
クルヘニ聊カ記セリ

一傳ニ引ク所ノ紹運錄及公武諸家ノ系傳ハ悉ク其出處ヲ  
出サシモ煩ハレケレバ書名ヲ省キ又且ツ上佐狩野氏等ノ系譜  
ハ僕未ダソノ家ニ傳フル所ノモノヲ見ズ只世間ニ行ハル所ノ  
數本ヲ以テ記ルスノミ其他數百家ノ傳僕ノ管見ニテ究ムル  
ヲ得ンヤモ其氏ヲ舉ルノミ委キテハ各家ニ需タマフ  
ベシ

凡例

一此書ニ多ク引ル書名ハ省略ノ記ス所謂元亨釋書ハ釈書  
延寶傳燈錄ハ傳燈錄本朝高僧傳ハ高僧傳画巧便覽  
ハ便覽ト出セル類也

一本傳ノ下ニ引書ヲ記サルモノニアリ一ニハ刊行ノ書ニ出テ普ク  
世ニ知ル所ノモノニハ即今何某ノ所ニ傳ハリ或ハ自ラ其真跡  
ヲ見聞セルモノニハ其画現ニ傳ハルトイヘドモ在所ヲ審カニ  
セザル或ハ在所ヲ聞ドモ筆記セサル類ナリ

一畫史ノ末ニ畫家ノ印章ヲ載ルトイヘドモ此書ニ出サルモノハ阮塘舎  
氏管原ノ撰ベル画師冠字類考ニ畫家ノ印ヲ悉ク出サレシ故ニ  
コニハ載サルナリ



本朝畫史卷之上

畫原

狩野永納撰

夫以我本朝之初天神以太占而卜合之太古謂天是既有觀象察理之道又伊弉諾伊弉冉二神以天璫牙畫海而成焉天璫牙謂天璫安未乃自爾有運筆成形之勢地神之代諸神能工藝之事然不明言能書畫者之名及人皇氏世其術大興盛行矣

画官

令云中務省画工司正一人掌繪事彩色義解云画之雜之類其及内藏察隨其用度臨時判司事餘正判事隸之佑一人令史一人畫師四人畫部十六人使部十六人直丁一人又藤左丞相實熙院拾芥抄曰畫所有別當頭今按中世有画所五位藏人預墨書等有熟食本是内匠寮雜等也分内堅按中世職負不立畫工

本朝畫史卷之上

一

司蓋以內匠寮兼畫所職也凡內匠寮所統廣故源亞相親房北職原鈔曰內匠寮掌工匠事但近代木工修理知其事頗似無其實

畫所

拾芥抄曰畫所訓患士古俗作繪所在建春門內東脇御書所北按是木内裏之畫所也今以京城圖考之拾芥抄建春門皇居東面之中門在壬生之勘解小路也中世有任其官者而不知其所又有春日画所或曰南京宅間住吉氏部芝四法眼等皆為斯任多為佛像今京師畫工有稱画所者專主圖神佛畫法亦因舊其在昔時士大夫掌之而天下諸画皆統於此也

畫考

趙宋宣和畫譜曰宣和徽宗年號當本朝末仁帝時畫譜宣和殿所製日本國有画不知姓

名傳寫其國風物山水小景設色甚重多用金碧考之未必真此第欲絲繪其有繁然以取觀美耳又曰太平興國中宋太宗年號日本僧與其徒五六人附海舶而至不通華語問其風土並以書對書以諫為法其言大率以中州為指式其后再遣弟子以筆塵硯鹿毛筆倭畫屏風奉表稱賀今御府所藏海山風景風俗圖是也胡元夏文彦圖繪寶鑑曰文彦字士良吳興人順宗至正年中著至倭僧多能作墨畫觀音佛像按所謂設重色用金碧者古來倭畫皆然矣其墨畫佛像是五山禪侶倭宋僧之所為者也

畫運

古之以畫鳴者有大岡有巨勢而今其跡不明著然十世之畫木抵真細之體而已此為古画之式其後分為二曰倭画曰漢画倭者雖漸取氣韻而未離真體藤信實鳥羽僧正二法眼等其傑者

本朝畫史卷之上

二

也漢者學宋元之名踪而亦有真者其行草二體是共用粗筆此法之行也亦已久矣至可翁明兆及如拙周文方得其精妙而人有賴焉其後又分為三家曰土佐曰雪舟曰狩野土佐氏是倭畫之專門也雪舟字是漢画之粗筆狩野家是漢而兼倭者也土佐之倭樣是有情而婉者也都其大小人面引鼻目而成輕筆一引引目引鼻太低於松畫雖不畫雄其他皆可以類推之雪舟是有操而奇者也凡大小諸畫寫其意筆鋒常在中心行無表裏翻翻之法斂法只鹿齒而了凡雪舟狩野同學周文而各成一家別之者也狩野之家法每物求其實擇其正故集前世名手所善以為己有惟其主筆力故無小畫而纖麗又無細筆而容易狩野是畫家之長而宗族廣遠家孫門弟之間不乏良才土佐雪舟之技術亦能舉而用之也

畫式

朝廷所用繪畫者多則南殿御障子畫賢聖像自金岡已來至近世畫工勤之矣上世每有慶事令畫屏風當時使歌人書其上或先倭歌後繪畫其法可依時代所謂大嘗會御屏風御賀御屏風是也如今四方拜御屏風大來御屏風皆有粉本而官家之役人所藏也每造內裏乃以舊本調進之尤不擇能畫耶隨舊例耳然畫之用可知入者也

秋戶世荒海鬼間手長足長等皆依其繪而名其所今內裏略以素布貼壁而代板畫或又殿壁有畫雜景者是中世之流例也中古殿上有繪合之御遊然則繪之所被重也自古然也

畫題

萬里江山圖波與岸兩圖或滿湖八景西湖十景金山十雪等皆

本朝畫史卷之上

三

命題也此圖今往往有焉然習寫之者誤古圖者多譬杭州西湖上泛船掛布帆不知其湖狹小矣又畫長恨歌太液芙蓉不知為荷花而畫木芙蓉我 先考堯源主人嘆有此病以古圖改之者粗多見之者擇焉

上古畫錄

大岡忌寸氏大岡姓忌寸氏也訓於保於萬多姓氏錄曰萬多親

詳於仁中大岡忌寸出自魏文帝之後安貴王也按魏文九子

晉南北朝亦無曹氏封王者恐是本朝所賜姓尸手尸有玉訓於保貴美雄略天皇御世率四部眾

歸化男龍一名辰貴善畫工男龍承貴小瀨雅鶴鶴天皇

此書大抵連姓尸五世孫勤大壹惠尊訓未亦工繪亦智天皇御

世賜姓倭畫師詳訓未高野天皇神德帝孫高野山因為神護景雲三年依

此書大抵連姓尸五世孫勤大壹惠尊訓未亦工繪亦智天皇御

居復賜大岡忌寸姓按大岡之祖自武烈賜姓後至於稱德二十有三朝子孫宗族名畫者多然歷年已久惜哉其跡不傳也畫工之見於史也蓋男龍為其始也

聖德太子用明帝長子也生而神智好學又多能也書跡今猶多

而其所畫世少傳太子自畫像一在難波天王寺大若舍人正

面而安坐紅袍冠帶執笏佩太刀然未知實孰觀之筆力偉雄

又非凡手之作

僧曇徵高麗人也推古天皇十八年三月貢來徵涉外學善五經

又有技藝造碾磑工彩畫詳見於元亨釋書

百濟朝臣河成本姓余復改百濟長於武猛能牽強弓大同三年

為左近衛以善圖畫屢被召所寫古人真及山川草木皆如自

生昔在宮中令或人喚從者或人辭以未見顏色河成則取一

本朝畫史卷之上

四

紙圖其形體或人認得其機妙類如此後世言畫者多取則於

河成任從五位下任諸國介或說河成與本匠長飛驒內匠為知

己時時互爭技時人招一人令論其所長催一座之興云詳見

于文德實錄並今昔物語

狛堅部子麻呂訓多和遍品鯽魚戶直乃奈遠之等畫佛像有名于

時孝德帝白雄四年六月命此二人畫工多寫佛菩薩像安置

於川原寺出於日本紀

畫工白加百濟畫工也用明帝時至本朝出日本紀用明帝記

高麗師麻呂高麗畫師也來朝任齊明帝出於日本紀

倭畫師音壽訓遠登授小山下位乃封二十戶任天武帝出於日

本紀

左衛門府生掃守並在上不知其姓任朱雀帝有能畫之名承平

年中純友反使橋遠保殺純友於伊豫國持其父子之首歸京而襲之帝欲見此首使掃宇與在上画之入上覽其事載今昔物語

宇多天皇世奉稱寬平法皇至政道則不及論之天性嗜画圖寄心於丹青曾寫長恨歌之意圖亭子院之屏風

冷泉天皇政務之暇愛圖画自運御筆見于記錄寬和帝曾潛出宮中而入華山寺祝髮遊藝諸名山其風致洒落之餘好画藝真天縱之妙曾以墨画車以淡濃墨作輪居多其運轉之勢如親見之又寫手長足長之形見于國史

師足以画鳴于時画樂府屏風具載大鏡

源信嗟哉天皇御子也天性好讀書又喜隸書其餘力能丹青馬形特寫真載于三代實錄十四卷

本朝畫史卷上

五

弘法大師諱空海俗姓佐伯氏佐伯訓讚州人也桓武帝朝入唐

受密法於慧果阿闍梨蓋本朝真言宗之祖也入定後論弘法

大師博學多才善文其書冠古今画亦造於神妙每寫神佛祖

師之像又能用水筆為梵漢字並佛像至於雜画亦有之今高

雄山有山水屏風又有所書經卷字皆篆百物形者或曰凡佛

像等點睛用石油按密教之傳金剛智傳不空又名大廣三藏不空

傳慧果慧果傳空海元亨釋書載空海在唐日慧果曾與

金剛頂等諸密經並圖画曼荼羅及諸佛具於空海曰宜以此

金剛乘教及三藏所付供養什物歸本土又教画工李真等十

餘人圖胎金諸曼荼羅一十鋪以附之空海亦画龍猛龍智金

剛智不空善無畏一行慧果及自己像八圖今在京城東寺

智證大師諱圓珍讚州人而弘法之俗姪也初師事延曆寺座主

義真其後在唐數年而歸本朝貞觀十年有教以近州三井園城寺賜珍為傳法灌頂道場其德業措而不論曾不動尊被授密軌故其所寫不動像往往有之

空光善佛像仁明天皇承和五年戊午三井寺智證大師令画工空光寫所夢之不動像所謂黃不動尊是也此事見智證大師年譜

僧真濟姓紀氏洛陽人朝議郎御國子也其國訓從弘法大師受

密教後居高雄峰承和初奉敕入唐詳見美久具太同帝子僧真如亦

師弘法師入定之後真如深慕之真濟為之寫肖像師垂來格點其睛

乃建影堂于高雄山上正曆久安之火灾像龕不焚而到于今

矣事出益囊抄

真如法親主師弘法大師與真濟寫大師像其所筆者和州十市

本朝畫史卷上

六

鄉藥師寺所藏也今在三輪寺中坊和歌緣起云高岳親王者

平城天皇御子也後號真如親王

慈覺大師諱圓仁姓壬生氏野之下州人為延曆寺座主善画不

動尊其德業措而不論

覺起號阿闍梨公所謂橫川谷元三大師慈慧像阿闍梨公所筆

也其有靈驗或曰號卿君者覺起也則師慈慧而令阿闍梨公

画之天台宗往往藏之

常曉阿闍梨密宗之祖也在子于和州秋篠欲取關伽井水忽現太

元明王見之画之以為本尊今所在醍醐理性院之本尊也故

太元明王之法者傳彼寺載元亨釋書小栗栖常曉是也此像

者新造內裏之後掛紫宸殿修此法曰

小野篁小野氏名篁峰守子為世重也仕弘仁帝官至參議博學廣才



人之所不及也其畫亦臻神

忠仁公姓藤原諱良房其所畫春日明神化現赤童子今現有焉  
皇后藤氏名明子忠仁公良房女而文德帝后清和帝母公也世  
號深殿后乃其左其尤巧畫艸花近世豐臣太閤秀吉公得其  
所畫白菊屏風珍之高一尺六寸撒金銀密飾地

巨勢金岡中納言巨勢野足之子也舊難波氏也仕清和陽成光  
孝宇多醍醐五朝官至太納言曾與菅丞相善國史載仁和平  
年九月十五日令真方興基惟範時平等撰詩又弘仁以後鴻  
儒之堪詩者令金岡圖其形又畫皇后南庭東西障子作歷代  
鴻儒像所謂紫宸殿賢聖像也是也金岡始畫之小野道風書其  
贊詞其後數百年來當時繪所預畫之或一時有名畫史應詔  
者至今不絕當其撰者為畫家之榮為贊詞亦如是雖然贊詞

本朝畫史卷之上

七

不傳金岡所畫古像之粉本十二人者余家世所傳只使當時能  
識也最有銘存于今惜哉此外之像不相傳書播紳書名於其上多世尊寺家書之近世持明院家獨掌此  
事矣夫金岡畫跡今不分明然古今書史至繪事每稱巨勢世  
傳嘗為水墨之山其層十五遠近可分又謂能畫水石江水第  
載仁平三年八月被行釋奠先聖先師九哲像則巨勢金岡所  
寄也又延久四年三月十四日甲午權中納言源隆俊卿著伏  
座奏大學寮先聖先師九哲廟像令修補之件像元慶四年巨  
勢金岡以唐畫所奉圖繪也古今著聞集載曾所藏御府之金  
岡畫馬每夜於秋戶邊噴秋花因救畫工以筆使繫之果而止  
又仁和寺御室金岡畫馬每夜出于近境甲間食稻苗里人怒  
穿兩眼依之而止焉凡其所畫佛像居多於子孫善畫者不絕  
金岡生相見或曰金岡之玄孫有公忠者其弟公望公望生深

江深江生弘高或記晚年剃髮閑居仁和寺醍醐帝有敕令畫  
賢聖障子金岡假著髮又戴冠粧男子之容貌登紫宸殿畫之  
云云

菅丞相任寬平昌泰朝為天下之鴻儒沒而有精靈贈正一位太  
政大臣號太滿太自在天神處處立祠世有稱自画像者筆勢  
不凡威儀可仰矣曾筆跡稀蓋在于北野東向觀音寺及洛東  
高臺寺又在於攝州上宮社納之其真蹟無疑者也

貞仁公姓藤原諱忠平昭宣公基經子也官至太政大臣其為中  
將也當畫杜鵑於扇面每開扇則畫鵲發聲矣源平盛衰記載  
之

巨勢相見金岡子也除自成未抄曰讚岐少目從八位下畫師巨  
勢朝臣相見昌泰二年二月除目執筆時平公時平者昭  
宣公子又源

本朝畫史卷之上

八

氏繪合卷云竹採翁之事蹟巨勢相見畫之紀貫之書其事  
飛鳥部常則任左衛門少志以善畫祿重名高源氏物語曰曾源  
君之在須麻也戲畫其所見之山海景又欲招當時高手千枝  
常則新圖之千枝常則時稱一雙妙手古今著聞載常則也太  
上手公望也小上手世俗所稱也又常則曾畫獅子生狗見之  
則吹常則事高名錄載之或曰常則仕延喜天曆之二朝應詔  
而畫于屏風其色紙形者小野道風書之榮花物語詳載之  
千枝不知世姓常則同時之名手也其事實亦未詳  
巨勢公忠能繼其表曾有欲賣画屏者時大臣將買之先使公望  
弘高見之公望曰是公忠之所画屏風其則裏面紙縫之間悉  
記姓名須剝而試之翻而見之則果然也其用心於画也如此  
巨勢公望世其家小野宮大臣造屏風使公望画小松



巨勢弘高或作業世其家名拔其尤性善諸畫為其平親王所重  
畫地獄變相或畫不動尊千體而為其供養弘高初為僧後還  
俗故悔其罪障畫此像又於宇治殿令為成畫屏上為成臨扉  
而一日畫了宇治殿謂弘高欲畫時一日費工夫然後揮筆墨  
為成何卒爾哉

為成未詳姓氏弘高同時之好手以速畫被稱  
僧興義曾住江州三井寺有畫名

成姓未詳曾畫雞於閑院障子其後生雞來蹴之其画法學僧  
興義

良親姓氏未詳一條院朝以畫被稱曾畫屏風其上色紙形書則  
四條太納言公任筆跡也

有房姓氏未詳為繪所預兼前加賀權守建長造內裏時應詔欲

本朝畫史卷之上

九

畫之然無舊本自鴨居殿神倉出金國畫本以是傳有房今勤  
此役

伊豫入道自幼好畫其父不悅之一日以破土器畫不動尊於中  
門之廊壁見者驚歎爾後父亦不戒之

賢慶能畫圖叙法眼位其弟子能畫者多矣

藤原兼房能畫元永元年六月十日修理太夫顯季卿於一條東

洞院亭被修補本人九供其人九像令兼房新圖之大學頭敦  
光加贊於其上此圖樣並贊詞今行于世或曰兼房者栗田關

白之孫也

右十一條者見于古今著聞集

僧圓深紀氏之子也號朝日阿闍梨金國一雙名譽所畫為世被  
稱

五條御者山蔭中納言之女也一日自畫己身發火焰之圖其烟  
散亂因書倭歌于其上贈己所戀之男子君子思比奈麻奈麻  
志身乎燒時者烟於保加留物爾曾阿里計留云云見于大和  
物語

挂御子者伊勢御息所之所誕也八歲而夭其平生所戲畫之  
雜圖不忍棄置自藤壺被送麗景殿女御女御宮君作歌而贈  
之無人之形見登思爾阿也志幾者惠美底毛禰之奴留留奈  
里計里見于拾遺集

一條女者曾與伊勢女同時伊勢一日寄相思之詞於一條一條  
于時畫鬼形加歌于其上而答之戀俱者影半多爾見底奈俱  
佐目與我字知登計底忍顏奈利見後撰集

僧延圓藤伊尹公之孫也能畫故世稱繪阿闍梨

本朝畫史卷之上

十

延長公主者延長第四公主柔德早樹淑姿如花公主時時戲  
閑者畫畫之戲而已於是因點成蠅之妙殆上屏風以筆迴鸞  
之能亦巧筆露則公主兼翰墨丹青而能之者也其事載于源  
順和名抄

慧心院僧都諱源信姓卜氏和州人寬仁元年化常作彌陀來迎  
圖且雕刻之今和州當麻寺中有十界圖屏風又洛東新黑谷  
有二河白道圖屏風蓋上古風致也

延源關梨善傳神曾寬和上皇入書寫山幸性空上人之廬救延  
源關梨圖性空像并記行業下彩筆時山動地震見元亨釋書  
緣起曰花山帝令畫所預巨勢廣貴畫上人像贊詞中務卿具

平親王作書者行成卿也今存于書寫山余拜之  
巨勢宗義義一任出羽權守亦稱為畫師其女為後白川院宮女

名安藝善彈琴宮內卿其女也蓋世其家得仕官也

平清盛法諱淨海安德帝之外祖父而官至太政大臣曾圖兩幅大曼荼羅以寄附於高野木塔蓋胎藏界有七百餘佛金剛界有五百餘佛詳見太平記

常明法印不知世姓平相國曾畫曼荼羅二圖掛於高野山金堂在東者則自為之在西者使常明畫之出平家物語

圓心法師不知其姓氏嘗在藤相國賴通家賴通世所稱子畫雞於中門曉天報時者數矣事出盛衰記

夫人平氏相國清盛女也初嫁中納言成範後為花山藤氏夫人善丹青嘗畫伊勢物語於紫宸殿障子見於盛衰記

繪所預藤原光範魚住文章博士畫大嘗會御屏風

本朝畫史卷之上

十一

繪所預佐伯季景任大藏史生畫大嘗會御屏風

繪所藤原有宗任修理進畫大嘗會修基御屏風侍墨畫之役

中原光永任內匠少允畫大嘗會修基屏風為淡畫所謂淡畫者謂淡彩

中原吉久不知官位曾畫大嘗會修基屏風為作繪有職家稱彩色至濃曰都久利繪

繪所預藤原業實任文章博士畫大嘗會主基屏風

中原清俊任右史生畫大嘗會主基屏風

大中臣國弘任主稅史生畫大嘗會主基屏風

藤原行安不知官位畫大嘗會主基屏風為淡畫

藤原宗弘官位不知之畫大嘗會主基屏風為作繪右十人畫工者見于二條殿玉海中世大嘗會時應製者

也

藻壁門院姓藤原諱尊子攝政道家公之女也後堀河院后而四條院神母也性好圖畫曾畫於源氏物語故事則載于定家卿昭光記

後高倉院者高倉院皇子守貞親王也後堀河院之尊父也故號太上天皇天性嗜圖畫曾畫於袂衣物語故實載于昭光記

後鳥羽院高倉院第四皇子也製和歌冠千古矣多能而畫亦工如今賀茂神主松下家所藏尊像所謂自畫自贊也贊御製謠者二首而已蓋松下之先祖氏久以上皇之末子為神主敬遺此尊容及宸翰

並隨寺攝政姓藤原諱基信通近衛關白基實公之子也奉仕於五朝而攝政於三朝歲七十四薨葬普賢寺遊藝惟多殊工書畫

本朝畫史卷之上

十二

曾畫半得其精妙

後京極攝政姓藤原諱良經九條兼實公之子也奉仕土御門院攝政於時歲三十八薨葬後京極其和歌也英逸不可言矣詩亦奇及書法當時三跡之一也吟詠之暇好圖馬形丹青諸家皆服其妙時人稱曰普賢寺殿之牛後京極殿之馬又稱之為一雙名手兩公此事見于駿牛繪詞

藤原濟時丞相師忠公之子也官任左大將弱時能畫康保年中為繪所別當預丹青之事疑是侍于繪所之輩者皆令別當奏聞歟

藤原相信任內藏頭中納言敦忠卿之孫也工畫所往障子之畫圖皆所自筆也當時栗田關白遊此殿而觀此畫樣愛重之甚矣

夫人家長卿妻者大納言行成之女也天性工畫

右三條者載榮花物語

藤原隆信任右京大夫叙正四位能作和歌其先祖出自長良画善寫真元曆年中人也其和歌出於撰集

藤原信實藤隆信子也曾為右京權大夫工和歌且善圖画尤長於寫真諸画亦優柔為中世妙手每画人麻呂像令人得之為

珍凡人丸圖像世亦傳者居多但以髭鬚黑稍多為微也仕後

鳥羽順德兩院朝聖譽于時著聞集載後鳥羽院欲有御幸時

先使信實画其行遊甚奇新承久記載平相州義時奉遷先帝

於隱岐帝于時使信實寫真以贈大皇太后藤氏名種子先帝之母也在此條

既今在於水無瀬神影堂每月二十一日於神影堂公卿及士

庶人桑門相會詠和歌于今無斷絕又九條殿家有順德院中

本朝畫史卷之上

十三

殿御會圖中殿清涼殿也曾集群臣作歌神會其後惟音樂為有連宴天子御是時諸臣各把樂器列坐殿中

一太卷當時之名臣皆列于圖信實亦預為寫其生傳其神尤

足以徵之者乎信實生前手画自己之像死後如圓法師對像

詠歌以寄悲哀之情思出底見毛悲幾面景遠奈爾奈如奈加

爾字都志遠幾計年如圓法師疑是信實之子平見新拾遺集

哀傷部

逢坂關寺住僧某以萬壽二年營建大堂于寺中安置彌勒像其

材木尤巨大唯有一牛能運轉之以致於堂址一日人假此牛

將適於他用其夜牛夢於其人曰我是迦葉佛也為此堂現

此身焉何勞於他事乎假牛之人驚嘆以告人聞者無貴賤

無不入關寺拜彼牛矣厥後彼牛將死住僧為之寫真既成至

於筆點其瞳而牛遂死於是王公大人皆迎其所寫之真以禮

拜之時稱牛佛云載榮花物語

婦人右京大夫者仕昭明門院藤原隆信朝臣之女也性能画是

亦画古昔物語故事載于照光記

宮内卿曾仕後鳥羽院右京大夫師先女而大納言師通之孫出

羽守巨勢宗義外孫女也善和歌得其名又工丹青

鳥羽僧正諱覺猷源隆國子而西宮左丞相高明公孫也早歲從

東北院大僧正覺圓為弟子覺圓西園寺相國實魚公子也覺

猷為天台座主法務及三井長吏大僧正又能圖画曾住醍醐

又居鳥羽故號鳥羽僧正住法輪院僧正專為倭画善人物自

成一家惟画戲事寫意不求形似著聞集載曾東寺之供米俵

子內不充是監吏之奸曲也覺猷戲画倭子飄風之圖以諷之

則達上聞如法納之監吏亦恥之又画馬形極其妙僧正曾見

本朝畫史卷之上

十四

天開十二匹馬妙為之此圖如今流布于世

小野僧正諱範俊家宗小野流之一員也是亦號鳥羽僧正能圖

画故世與覺猷誤之者多

小川僧正承澄為橫川長史曾画馬其筆法似鳥羽僧正一說承

澄即覺猷之別號也

醍醐僧正仁海住醍醐寺真言小野流之始祖也曾修請雨經法

詔寧九度皆降雨世稱雨僧正能寫佛像今亦存者多

託摩為遠姓藤原任豐後守仕近衛院于時有神願造高野山

覺皇院而令為遠画其堂壁曾根來寺開山覺鑲上人筆法師

為遠画佛像為遠晚年辨勝知剃髮叙法印見于覺鑲上人行

狀

和道元洛陽人而遊客於鎌倉源賴朝在豆州蛭小島也欲致平



兼隆館然不知其地形密遺邦道圖彼館舍並其道路一戰而克之

藤原秀衡創無量光院世號新神堂堂中四壁圖無量壽經大意加之秀衡自圖狩獵之體三重寶塔院內莊嚴委模字治平等院

修理少進季長畫鍊倉永福寺扉並於門板壁

藤原為久住下總權守豐前守為遠三男而長畫圖為當時無雙也壽永年中源賴朝使為久畫聖觀音像為久著衣冠畫之圖成而歸洛陽于時賴朝賜鞍馬資之錢之

宅磨為行住將軍賴經以能畫住左近將監然則宅磨氏不必畫佛者可知右五人者詳載東鑑

宅間澄賀敘法印性能圖畫佛像人物臻神妙生氣活動魚工雜畫

本朝畫史卷上

十五

九條藤相公使澄賀寫法然上人真今在嵯峨二尊院所謂足引之影是也凡欲畫上人像者皆因之枹尾高山寺有春日住吉二神像俗傳二神來受法於明惠澄賀請見之明惠曰凡眼拜之則恐有害然固請不已而姑許之澄賀竊見便模寫低其駕歸京城隨馬而卒於道上人之言果然也今宅間之塚在鳴瀑取終於此地乎

宅間勝賀敘法橋東寺長者補任曰建久二年新造屏風奉寫十二天其種字者御室二品親王守覺之所筆其繪者宅間法橋勝賀作之疑是澄賀之族乎

佛師湛慶能畫佛像源賴經卿令衆僧修仁手經於六波羅密寺本尊釋迦像者湛慶以大安寺釋迦自模之云載于通宗卿日次記

僧成忍號慧日坊者明慧上人弟子也性好圖畫學宅間法眼或曰宅間之子也故畫本在於枹尾高山寺寶藏筆格能似宅間專工佛像兼能雜畫

繪師信貞能畫馬形及打毬圖為特所重當時多畫公卿殿閣天承年中人也見于中右記

住吉法眼不知姓名善佛像人物兼能花艸畫法比宅間則稍草和州法隆寺有聖德太子行狀六幅又當麻寺有中將姬緣起二幅

芝法眼諱琳賢南都東大寺之緣起畫者此人之所圖

栗田口民部卿法眼隆光蓋春日繪所也畫融通念佛緣起我聞宅間住吉栗田口芝四人者春日畫所也共住南都世業寫佛像國史所謂繪佛師是也至于今畫佛像者稱畫所又有窪田

本朝畫史卷上

十六

筆力類之

宅磨榮賀畫釋迦又殊普賢三尊自書宅磨世多作宅間榮賀者勝賀之裔乎不知其實否觀其佛像頗似李龍眠顏輝先是未看此體蓋變倭畫之古風而新學中華之筆法者多始於此乎良秀不知世姓亦佛畫工也一日居宅惟火災逃在其邊著眼望見莞爾而笑相知者來問其故今幸見大外而知所画不動尊之大矣不幸乎雖變百十家不可換焉後世爭求其不動事載于宇治拾遺集

勝法坊者法然上人之高弟也性能畫寫上人之像諸贊上人觀之左右手持明鏡二面又盛水於器自臨之若形容之疑似少有所違則加胡粉以是授勝法坊其後自加贊詞法然上人繪緣起載之



乘臺畫上，也法然一夕夢中見淨土，見善導大師醒後，令乘臺圖其所以見其後，自宋朝善導大師之画像未觀之，則與夢中所見之像毫釐不差，是專修念佛之所致乎？今世所謂夢中善導者是也。法然上人繪緣起載之。

尊智以繪事叙法眼，曾法然上人行狀曰：四天王寺別當大僧正行慶撰倭漢往生傳，使尊智法眼畫九品往生之人，入道相國賴實公九人各吟詠歌一首，又令菅宰相為長卿賦四韻之唐詩，色紙形書者大納言教家卿所筆也。

土佐司善畫仕侍賢門院，曾並岡山下法金剛院有侍賢門院離宮使土佐司畫倭國名勝地圖於其障子，所在其上，色紙形之歌者法性寺殿下書之，詳見于三語集。

僧都珍海醍醐寺僧而住禪那院，性能畫舊記曰：其師三寶院定

本朝畫史卷之上

十七

海欽教珍海畫曼陀羅圖，珍辭之，一夜中神入珍夢，青其不肯畫，而自橋上蹴倒珍醒而驚，則寫曼陀羅圖，然其所圖畫之痕甚多，珍至今矣。吾近遊醍醐寺有觀之，畫文殊粉本，其裏有建仁二年十月珍海筆之字，筆法上古之風而已。或曰住東大寺也。

根來寺開山覺鑊上人天性能畫佛像，祖師託問為遠傳，画法尤善。梵書其梵字多用木筆，則以木筆淡墨圖，不動尊像，生意發動有神妙。後世善梵書如梅鳥者，善畫如朗然者，見皆絕歎，以為非凡手之所及者。

真海僧都者蓮藏院實際僧正弟子也，書畫並善，曾畫三寶院山水屏風及二天像。

能慧得業梅尾僧也，住壹畫其所寫在梅尾。

兼康未詳其姓氏，是亦明慧之時人而有畫圖之名。能慧兼康共見于梅尾書畫之目錄。

良賀以畫工叙法眼位，曾土御門院承元二年和州當麻寺僧鏡忍坊良喜坊慧阿彌等合心欲圖新曼陀羅，慈按察使藤原光親奏之有敕許，詔繪師良賀源慶令寫之。今所在當麻寺之新曼陀羅是也。

源慶叙法眼與良賀預曼陀羅繪事，畫繪未成源慶罹病而死。源尊源慶之子也，慶死後共良賀成曼陀羅圖，後叙法眼。

藤原隆能大織冠，高中納言正二位藤原清隆子，繪所始而畫土名手也。叙正五位下住主殿頭，勸修寺家庶流也。中古以來所謂繪所者自此時始乎。

藤原隆親隆能子也，住備前守，又為伊豫守，叙從五位下，晚年任

本朝畫史卷之上

十八

中務少輔始名隆成，曾為繪所。

藤原行智隆能子隆親弟也，有畫名。

藤原忠李朝臣為頭中將，于時法性寺執行法印能圓女督典侍有國色忠李久雖戀之不相從，一日入夜雪降，尺餘忠李因公事乘馬而詣，關忠李自畫雪中之景，使不位，投送督品中督取而視之，因生哀憐之情，乎又愛其畫圖，乎無幾而為雲雨之盟。

其後數年互相通果生少將親乎見于古今著聞集。

尊海世稱法眼，南都興福寺東大寺其所畫多春日安居屋有相撲，節會屏風以是觀之，則疑是春日之繪所乎。余觀彼所畫卜有別號宗軒，畫東大寺緣起與琳賢同時，疑是東大寺之繪所乎。

定禪曾叙法橋住於洛第七條，本願寺元祖親鸞上人傳記載上

人之弟子入西房請上人則使定禪畫其真今藏本寺

僧淨賀叙法眼居信州康樂寺始畫本願寺元祖親鸞上人之行狀書其詞者上人之後覺如上人也末寺僧徒傳寫之是謂畫傳淨賀亦畫今藏本寺

僧豪信能畫為山法印藤信實六世孫也或曰亦在洛西梅津長福寺花園院宸影者豪信奉命所寫也

覺玄阿闍梨能圖畫不知何許人

松葉上人<sub>和州般若寺僧也</sub>性態畫于時興福寺邊有妖恠之變諸人畏之松葉上人畫不動像於講堂後壁妖恠立消

介法橋不知姓名攝州住吉人記其畫曰建長六年曾畫佛像介之子慶忍忍之子某皆世家業

願行上人能圖畫始住於東山泉湧寺而正法國師<sub>後</sub>五世之孫

本朝畫卷之上

十九

也又居于東寺遍照心院或住高野金剛三昧院曾經歷諸山為真言宗之主張至于今推願行為密法一流常修念不動尊酷有靈驗而畫不動尊最精妙筆法似宅間住吉世稱願行上人不動尊

日蓮上人亦畫法華經寶塔品圖彼宗寺有之彩色極其美世稱日蓮上人所筆寶塔圖曾不見雜畫

大藏卿未詳其姓名釋日蓮教大藏卿畫大黑天像加贊語於其上者往往有之又日蓮令寫己像而自贊者亦有之或多有畫天神像

蓮行者畫工六郎兵衛剃髮稱蓮行也曾鎌倉貴族使蓮行畫鑑真和尚之行狀施於極樂律寺沙門忍性于時永仁六年戊戌八月也事在于行狀之末此畫軸在于大和招提寺之寶藏焉

筆法出於宅間稍優者而我國之風韻亦有勝於中華者唐鑑真和尚來朝之僧也故表中華本朝之事實

圓伊叙法眼畫於六條道場一遍上人緣起蓋有十一卷筆法類宅間住吉其山川樹石彩墨圓熟意趣有餘者也卷尾云正安元年八月二十三日畫之

僧寬耀不知世姓元應帝朝人也任僧都善圖畫曾居高尾山釋頌阿草菴和歌集載見紅葉於寬耀坊互贈答之和歌

金剛佛子印玄善畫佛像其圖數卷在于東寺寶輪院其卷尾曰延慶三年六月十六日於仁和寺南勝院畫行年三十三此外不見雜畫

僧正文觀能畫祖師像見畫慈恩太師像固不凡更不見雜畫文觀者本在播州法華寺自壯年登醍醐寺而為真言太阿闍梨

本朝畫卷之上

二十

兼東寺長者事行狀者載太平記並佛寺緣起

等持院丞相尊氏公政務之暇好畫圖其所寫有地藏像自加贊詞於其上曰夢中有感通令我畫尊容利濟徧沙界善根無所窮觀應元年十月四日仁山書曾平日信地藏菩薩故畫其像者略多矣

豐後法橋不知其姓名學畫於覺玄阿闍梨畫八坂法觀寺緣起安房守仲氏曾畫法觀寺之緣起不知何許人

惟久不知姓氏曾住飛騨守畫與羽軍記圖

康房不知姓氏曾醍醐寺水本報恩院所藏之畫山水屏風者則康房筆也蓋上古之風耳

僧康保住醍醐寺水本報恩院任權律師畫於十二天像或曰繪之所用粉彩之具者遠求得於中華以設色云爾

而差劣耳然非無妙世譜不詳焉

藤原經隆任土佐守叙從五位下為繪所土佐氏元祖也

藤原行光經隆子也任越前守延文六年為繪所

藤原光重行光子也任越前守明德元年為繪所

藤原廣周光重子也永享十一年為繪所任土佐守兼彈正忠

土佐光信藤原廣周子也雖為藤原氏支別家世以土佐任官為

譜代故世俗呼土佐以為氏任右近將監為繪所預明應平手

任刑部太輔或記曰敘四品好能連歌其畫倭樣也悉皆輝映

前古時凡古來倭畫之有名者藤信實僧覺齋之間住吉等是

也今光信兼之合之得其意和之暢之立其法其人物用意處

在身體衣冠之姿與男鬚婦髮之態其彩墨質共皆用細筆彩

畫施金碧墨畫如內有筆力外惟逸遊芳艷之情纖麗而雅以

窺其巧妙故畫歌書草子詞以為宮院閨房之玩則諸氏畫工

亦用其格也又近世漆器描金此云未倣其來画法衣袂描花

倣其墨画法光信尤有功於倭畫者也

土佐光茂光信之子也享祿五年任刑部大輔又兼土佐任右近

將監叙正五位下余所見和州當麻寺中將姬緣起風情有餘

能世其規矩

益繼不知世姓工畫有十二支獸作不間之事業圖誠為戲畫也

畫後書曰寶德三年八月日益繼筆專守倭畫之法者也寶德

者後花園院年號也然則當時土佐家者流乎

土佐光益世其家亦光信之裔也

土佐經光假名將監則光信之裔也剃髮後亦以經光為法諱矣

倣家風而微加筆力其於光信則為差粗然亦有妙處

土佐刑部者經光之子也不知其諱刑部其假名也太抵守家法

本朝畫史卷之上 終

本朝畫史卷之上

廿二

本朝畫史跋

此書梓行而後遠奉寄大學頭林君時命予曰先年聞之書稱本朝畫史今何處傳哉予答曰吾技藝之書名畫史者恐似國史乎林君曰所名之史字古來有之況先君弘文院學士作益史序如何有所憚哉於是予欣然改之曰本朝畫史蓋書中甚有文字之誤不少尋校合再附梓者也

元祿六年癸酉暮春

一功齋永納

本朝畫史跋



本朝畫史卷之中

中世名品

狩野永納撰

無外和尚諱爾然為聖一國師弟子而為實相寺之開基性好圖畫

僧可翁稱宗然號良全南浦紹明之弟子而虛堂之法孫也每畫

多有釋靈十一山之贊題名曰海西人良全作或作觀夫人物佛仙

傳彩學顏輝墨畫學牧溪精極骨法故墨畫而無印者世人誤

為牧溪之所畫也

墨芳和尚字周應天龍寺開山夢聽國師弟子也居建長寺墨畫

學牧溪善花鳥竹石筆力粗豪耳

鐵舟和尚字德濟與墨芳同師住于萬壽寺畫長於山水花鳥亦

善水墨而少設色比墨芳為稍實差哉龍光院之開基也

本朝畫史卷之中

一

妙澤和尚諱周澤或號夢聽國師弟子也住天龍寺壽寧院曾視

篆臨川前後化七會到處應機說法嘗居三會塔日大發至誠

願心竊求塔院擁護之冥助忽有紙一枚隨風飄墮而至把而

觀之即不動像也由是寫不動像每白一尊凡一百日一日不

敢怠如此者殆二十餘年一年不敢欠其靈驗甚多密家特稱

妙澤之不動又觀墨達摩像學牧溪顏輝

僧周位在天龍寺為侍者惟能畫所所有夢聽國師之畫像多

周位之所圖也或曰為夢聽國師之侍者有道德之名

僧淨慧號愚溪居于壽福寺師無惑諱良畫法學牧溪有咧咧鳥

之墨戲

或曰惠愚溪中華之僧也性能畫曾逢義堂和尚義堂贈以詩

其詩曰惠不惠兮愚不愚筆端幻出萬形模明朝別後應相憶

萬里江山一幅圖依此詩而觀之則暫來本朝而後歸中華者

乎此詩在義堂空華集

僧周豪亦與夢聽同時其畫也大抵似鐵舟

僧梵芳號玉峯子師南禪寺春屋妙葩妙葩夢聽之弟子而為相

學明雪牕法得蘭花妙處其所畫得趣適意自題詩於畫上又

書蘭蕙同芳嘗觀狗舍蝶之圖有牧溪之風更不見著色及不

見人物山水獨所寫之蘭竹墨畫也超出物表號知足軒

仲安和尚諱梵師晉明國師弟子也常畫不動尊及太黑筆法學

牧溪皆艸筆也畫上自贊而書明應六年十一月前天龍松屋

梵師筆又號竹天叟或畫不動畫後曰末年梵師為悅藏主圖

焉

僧明兆號吉山淡路人為東福寺大道弟子自少年甚好圖畫太

道甚戒之至欲絕師資之約於是明兆以為凡被牽道路者破

屣也今我以繪事被棄大道因之以破艸鞋為號一日偶候太

道師出而畫不動像師忽還兆驚駭藏之於鄰下時畫中火蝕

勃起不能掩自爾師亦服其神不戒之應永間為東福寺之殿

主而住南明院其畫法道釋之像學宋李龍眠宛然可觀又儼

元顏輝體時有用其圖式者其雲行水流者天性自得超絕入神

遠貢宋元間相比者少矣山水花鳥雖非其所長至佛像人物

宜以兆為本朝第一矣凡所畫多有巨幅皆能以意製其規而

其勢如龍飛如鳳翔非凡筆之所及也其在東福所作釋迦涅槃

像圖橫二丈六尺縱三丈九尺畫圖下有應永十五年五月百

羅漢圖專儼顏輝之圖顏輝真跡在鎌倉建長寺明兆寫之歸

東福寺後所畫也其艸木亦今在常樂菴此外十六羅漢圖四

十八祖像遠磨為始半像寒山拾得大像聖一國師像左鐵拐石蝦蟆劉海三幅各八達磨正面像大像正面白衣觀音像大像今

現在馬佛殿後門觀音像左右各一像法堂蟠龍長十餘丈始紙面

圖之其後揭之貼堂字天井故為露雨所侵逐年處處朽腐一

旦被暴風吹片片飛揚散四方京師為之語曰畫龍昇天其殘

片于今在常樂菴鱗刺恰如生凡天井畫龍以兆為權輿矣始

明兆老母在淡路國臥病故欲一見兆兆時在東福寺方畫五

百羅漢其功未半雖背老母之命佛像圖畫之事又不忍捨之

因自寫真致之於母慰其心退耕菴性海贊其像曰衣破戒不

破身貧道不貧此像著勝定院義持公甚愛兆畫圖故時招之

一日令兆言其志若有所望則須足之明兆謂財貨本無望官

爵亦非願一衣一鉢於吾身為足今有一於此近來東福眾僧

### 本朝畫史卷之中

三

好植櫻樹至後世則精舍變為遊宴場是予所歎也願奉命伐

之義持公大感之乃任所請而悉使伐之至今寺中櫻樹少矣

明兆遂終殿主義持公益愛其質素

僧一之稱江藏主曾隨明兆而學畫今見一之所筆之文殊像且

倣雪潤之蒲衣文殊

僧長尊在河內觀心寺住蓮嚴院應永年中人也密宗僧而天性

工畫師明兆專畫佛像其筆法尤得大畫之法余偶到觀心寺

所見本堂中兩界并四木王像及涅槃像皆精妙

勝定院殿姓源諱義持鹿園院義滿長子而足利氏第四將軍也

官至內大臣法名道詮號顯山正長元年正月十八日薨曾師

明兆善畫觀音有自贊從聞思修入三摩地潮吼海門月生空

際畫中不用印而用押字工詩能書東福寺五百羅漢是公使

兆畫者也又有杜子美騎驢之圖自加贊詞其語意亦卓絕也

畫中書曰應永二十年顯山為正忠首座書

慈照院殿姓源諱義政世所謂東山殿是也曾讓政務於義尚公

閑居東山東求堂寄興於詩歌運筆於畫圖今所存往往有之

其中寫藤原定家之像自加贊詞于其上者特拔其尤又玩古畫

古器當其時也下有真能真相之屬周文宗丹之類

僧寒或寒殿主彌赤脚子居東福寺師明兆善畫佛像人物而終

不及兆但其佛像亦過於他東福三門閣上樂器圖相傳是寒

之所筆也

一休和尚諱宗純嗣於大德寺宗曇華叟或謂後小松帝之子也

其德行措不論每善書畫其畫狂逸山水人物花鳥皆草草而

成粗有清趣而氣韻幽閑足為茶房清玩於畫加贊詞者多蓋

### 本朝畫史卷之中

四

可謂道德之餘藝耳

愚極和尚諱禮才居於東福寺曹源院自聖一六世孫而有道德

名天性能書畫工詩賦好畫墨觀音文殊兼工雜畫專學牧溪

又慕明兆然采畫少

僧如拙九州人居相國寺善畫山水人物花鳥似南宋馬遠夏珪

牧溪玉潤及胡元顏輝古來倭手能畫者未學宋元風如拙始

學之大得其法

僧周文稱春育在相國寺為都司其印文越溪周文者所謂江州

山上永源寺之境越溪也有故居此處稱之其所畫淡彩山水

人物花鳥用馬夏顏之法墨畫極收玉之奧興彥龍曰胸吞王

吳眼睨韋郭畫中三昧手也師如拙有出藍之質無不臻妙然

不為倭畫近世雪舟小栗狩野之徒以文為階梯得上宋元堂

僧雪舟諱等楊又稱備溪齋或稱朱元山主氏小田備之中州赤濱人也到今赤濱之田間有雪舟所產之地天性工畫師如拙及周文得其法更出新意或曰雪舟及十二三歲其父攜之投州井山寶福寺而為一僧弟子雪舟自幼好畫不事經卷一朝師僧大怒縛雪舟於堂柱日漸及暮師僧又憐之自到堂上將解縛索于時雪舟膝下鼠齧走師僧亦驚駭思傷雪舟急逐之然鼠不動搖師僧恠見之雪舟終日愁苦之所致淚痕滿堂雪舟自以脚大拇指點鼠齧於堂板其勢恰似活鼠奔走之體於是師僧服其妙自是後不戒畫及壯年為相國禪寺左街僧錄司洪德禪師弟子又趣鎌倉從建長寺玉隱永興為雪舟作漁樵齋記即為雪舟別號曾寬正年中乘海舶入大明登四明天童為第一座故畫後多書四明天童第一座又稱扶桑

本朝畫史卷之中

五

紫陽等楊在明也問當時能畫之人明人曰今世能畫不乏其人就中李氏張氏推為一雙高手等楊見其所畫曰我遠遊明國其志在求畫師今見二氏跡不足學然則大明國重無可師之人唯明國名勝之地山川草木是我師也然則師在我而不在于人豈他求乎自是激勵不怠圖畫成奇大明君臣共稱其美遂奉敕畫禮部院之壁不又榮乎曾應明人之請而畫本朝之富士三保清見三絕景當時鴻儒詹仲和加贊於其上詹仲和字鐵冠道人書法卓絕名動京師曰巨嶂接層巒海涯扶桑堪作上天梯岩寒六月常留雪勢似青蓮直過氏名利雲連清建古虛堂塵遠老禪栖乘風吾欲東遊去持到松原竊羽衣雪舟弟子寫其圖贊以歸本朝下等楊墨印成化年中促歸裝于時四明徐璉字希賢送別以詩曰家住蓬萊弱水灣丰姿瀟灑出塵寰久用詩

本朝畫史卷之中

六

賦超方外睹有丹青落世間驚嶺千層飛錫去鯨波萬里踏杯還懸知別後相思處月在中天雲在山其後記成化五年歲次丁未仲夏下泅四明徐璉書其所重可知歸朝後居周防州山口雲谷主故稱雲谷或號雲谷軒至其妙處則得之天性不踐古人蹤跡而既立一家尤長於山水人物次之花鳥又次之兼善牛馬而龍虎次之凡於人物牛馬一點筆而成此法始自雪舟常好水墨少設丹青專尚風致故太抵寫意不求形似筆力位置清氣豪放聊有無墨法但傳于世者無不至妙也每欲畫微醺後吹尺八數聲或吟詩唱歌箕坐盤薄及就筆意氣揚揚如龍之得水鋪排草草而成矣體製奇奇而出矣先輩稱畫中三昧手宜哉然雪舟不矜其能又有謙讓之情公方家金殿畫圖薦狩野氏而讓之以此可觀矣至晚年筆力不衰八十有餘歲後所畫者今往往有焉興彥龍子萬里為之作傳今行于世矣在明日學彩画法於李在其傳也薩州士人家有舟画像秋月所筆也其像身著九條袈裟首戴烏紗巾手彈琵琶此圖並自畫半身像後書雪舟亦往往有焉小栗宗丹蓋不知俗名性好圖畫落筆雄偉自成一家師周文稟清潤矣仕室町家且每新年請獻画扇一柄命飯尾左衛門而許之每年即賜綾衣一領窮臘又賜練衣一領中年入相國禪寺剃髮為僧稱宗丹上座世人并尊作單狩野祐勢初師宗丹學画孜孜而後使祐勢為周文之弟子狩野之技藝起於此或謂宗丹晚年居大德寺故筆跡多一日宗丹請別號於蔭涼軒李瓊和尚以為其畫之神妙也可比牧溪之筆法因號自牧自茲後世人以自牧呼之李瓊和尚曾浴有馬溫湯自牧亦從之一日登阿彌



陀堂自寫山中之風景所到以妙手被稱其子亦為相國寺僧  
宗丹持長山水其景中態煙雲變滅林泉點綴自有天成之趣  
其山水也學牧溪玉潤二家法又學夏圭馬遠其用筆潤於周  
文柔於雪舟畫人物也行筆磊落畫花鳥也設色稍麗然得動  
植生意又不見倭畫曾宗丹墨痕世間稀惜哉今人不及知至  
其妙處

小栗宗栗或曰宗丹之子未詳亦得周文之法世其學然無風致  
又不見諸類近觀胡人乘馬之圖畫後書錄事有李安忠之骨  
氣而甚佳吾聞之若州人曰彼地宗栗之筆跡多矣有故而住  
彼地乎晚年寓居大德寺當時所畫者多矣

曾我蛇足不知其諱越之前州人而世為武臣性好畫師周文畫  
山水人物花鳥筆力粗而不似其師氣韻蕭疎非繩墨所拘也

本朝畫史卷之中

七

嘗與純一休有師檀之緣故畫大德寺真珠菴方丈純一休然  
不見倭畫觀夫畫寒山拾得有一條禪閣贊詞其畫用濃墨麗  
筆如草書勢其豪放耳

曾我宗文者蛇足之子而世為武臣學技於嚴父最可其所畫有  
彩花鳥

曾我紹仙宗文之子學祖風有鷹栖柳之畫筆力頗得其法

曾我宗譽紹仙之子世其業能畫花鳥印文有玉院崇政之字近

觀禪祖二幅對人物亦工又畫阿彌陀佛設色專學思恭畫上  
書曰為慈父重賢大德畫有押字

曾我紹祥宗譽之子又畫花鳥蛇足偶弄筆墨而及子孫者乎

土岐富景世傳濃州之太守也好圖畫其源出周文之筆法善畫  
鷹銳氣威質嚴然有所可畏赫然不可近絕倫之技更無可比

然不視其他所長只是一乎其裔今在尾州猶畫鷹云

和久壹岐守不知其諱住公方慈照院家嘗為京尹善畫其畫  
板面俗謂馬繪昔在於清水觀音樓上曾為朱火亡矣古老曰墨毛  
色而有靈氣也

土藏若京師畫士也永享十一年五月十四日公方普廣院殿欲  
令土藏畫千手觀音厨子同年八月廿日終厨子畫圖之功普  
廣院殿賜鳥目千足使正實坊命之土藏如賀將監安藝四人  
新年各獻畫扇於公方家永享十二年二月十五日普廣院殿  
命伊勢備後守使四人畫上設相國寺山門羅漢像之粉彩  
畫師景阿彌永享七年十一月七日室町家命李瓊和尚來年正  
月景阿彌所獻之畫扇便令造唐扇形

僧祥啟曾在建長寺為書記墨畫學牧溪其傳出於周文善佛像

本朝畫史卷之中

八

人物山水尤工雜畫然不視倭畫或曰野州宇都宮畫家九良  
氏之子也九良訓或稱雪溪又歸貧樂齋世謂啟書記是也早  
霖集曰啟書記入洛國土藝阿一見其畫以賞有高超遂招到  
其家悉出相府所藏畫本為之摹以故筆勢益進來季有殷濟  
川者稱名畫常收溪從之學今也似之及其歸藝阿親作觀瀑  
僧圖付之書記就岩惟肖求贊詞

慈雲居士不詳其姓曾畫觀音像求贊辭於岩惟肖載早霖集佛畫  
佛學書

真盛首座寶祐院之尼也性能畫曾親繪北野神君龍淵神遊之

遺容以授禪侍者富惟肖加贊詞於其上載東海瓊華集

僧濟翁諱景樹東福寺南山士雲之弟子也而為萬壽寺僧號明

雲子或稱紫塞逸民畫法學明兆



僧朴堂諱祖淳建仁寺興雲菴之僧也常畫不動廣傳于世  
僧子建西堂相國寺之僧也常嗜丹青之工慕牧溪之風自稱自  
牧又號松屋老人書法亦妙絕又號是菴

江西和尚諱龍派其所居稱靈泉翁翁其別稱也其印文曰文溪  
然則靈泉翁翁文溪蓋一人也画法學小栗宗丹多寫墨觀音  
畫後多有暮齡七十四筆之字

九淵和尚諱龍縣別號葵齋以文字禪鳴于叢林後陞位于東山  
建仁壯年有南渡之志其將南則竊謂凡遊中華者必先補  
陀洛山拜觀音太士而祈風難我亦非太士庇助恐不得志仍  
每日自畫太士像積日積月而得一千七百餘軀歸機之日示  
之于法姪正宗龍就且請之記統乃製文而稱爲靈泉江西者  
九淵之法兄正宗之師也

本朝畫史卷之中

九

僧桂詰畫墨戲大黑自題其上曰生佛二界化身自由肩頭脚下  
珍寶應求前住萬壽慕真野衲桂詰拜書又畫八景及扇面雜  
圖文龜年中人而画跋書遊中華曰爲

僧鑑貞彌墨溪叙法眼世謂奈良法眼也画法師周文蓋於人物  
也粗蹈南宋梁楷之蹤筆法細而不詳草而成者也画屏施淡  
彩設水墨而不用濃色或曰本律僧而往南都招提寺總持坊  
僧楊月號和玉本薩州人居城南笠置寺故世謂笠置楊月師周  
文雪舟墨画學牧溪能画山水人物花鳥筆法大粗矣然畧有  
柔潤之體印文曰臣僧楊月又有和玉之印文

山田道安始稱民部不知其諱道安者剃髮之號也世武門而居  
和州福住鄉福住在春日山南或曰筒井一族也性好能画師  
周文雪舟又學宋画而用其意然筆法疎而草其後三世工画而

同印然筆力有勝劣又精刻木曾南都興福寺西堂中有擊鳧  
鍾之小僧爲賊竊去道安重刻此像或曰東大寺釋迦像頭頂  
爲松永久秀被燒落後道安出資財以補鑄之可知又其富榮  
殊有功於佛寺者也

真能稱能阿彌仕公方家爲童明鑑定古今書画題名在于今世  
人以斯爲證彌鶴齋或春鷗齋平日能書工歌所画專慕牧溪  
師周文爲墨戲則筆力稍健然平淡趣高世間不多其筆跡其  
圖中多有画墨竹石善於花鳥及山水猿猴

真藝稱藝阿彌彌學史真能之子也吾觀画仙人屏風筆法似真  
能稍有氣韻近觀于若州之古寺萬壽寺桂詰跋其相之所筆  
八景画軸其詞曰能之子藝藝之子相精妙皆傳于世三世家  
業胥繼爲字矣

本朝畫史卷之中

十

真相又稱相阿彌真能之孫真藝之子彌鑑岳又號松雪齋與祖  
父相繼而侍童朋兼爲茶人仕公方慈照院家世謂東爲山水  
人物花鳥之墨画又施淡彩清雅可愛其傳出於周文其用筆  
也專主牧溪陪東山左右每有宴會賦詩歌作圖画如今有書  
倭歌短尺數枚且以掌公方家茶器鑑定古今之書画而題其  
名至今人信之而爲證所撰君臺觀行于世其中之名題蓋在  
公方家所藏之画軸俗呼之曰御物之相阿彌画後有書真相六十七歲者  
不知其餘年

珠光不知履歷曾玉画或曰即是茶人珠光也每所画師真能未  
知然否

洞玄画法師周文淡彩山水人物學馬夏之風或曰土岐氏之一  
族也

等春不知姓氏備之前州人也曾周文之備州有一馬童天性能得  
畫馬文視其馬欠一脚則問其趣馬童曰師亦能知画法乎是  
勢也其妙在於此文奇之已而從文到洛學畫果成其技則等  
春是也春既得周文之妙處亦取等楊之長處善山水並花鳥  
僧雪村諱周繼號鶴舫翁老佐竹一族而常州邵垂村田鄉人也  
其父廢雪村而欲立其庶因之薙髮為僧性好畫慕雪舟之筆  
法然約師弟之義所學不失天真潑墨雅淡務去華藻太低略  
出新意所用筆狂逸而有奇思長於山水人物花鳥次之雪舟  
之徒弟居多也繼在其左聲聞獨高或謂雪舟在西邊雪村居  
東極未曾面只見畫跡而為師弟故不相似但不作倣畫  
僧宗淵字如水相陽僧也又自書畫中曰才下子師雪舟筆差細  
其山水彩墨每有咫尺千里趣從雪舟學畫有年臨別請一圖

本朝畫史卷之中

十一

雪舟感其志洒淡墨贈之且添以本章雪舟画法措不論亦有  
法其文章後記明應乙卯季春中浣日老境七十六雪舟書翰  
林胡蘆集曰如水宗淵禪誦之暇遊意於殷濟川常牧溪之戲  
墨以西周之雪舟為師親炙之者有年矣獲究其妙也一日訪  
予宜竹之室出小橫畫以見示幻作彼所謂王津島和歌浦者  
小詩三章題其上亦自作也請題其後瑞龍雪樵老師已有  
贊辭胸次瀟灑頗得趣向又雪舟畫自像有附宗淵藏主  
僧等觀號秋月本姓高城氏世武門而仕薩州太守後剃髮為僧  
時師雪舟能畫圖乃從師入中華而得其名印文有山本薩陽  
釋氏等觀之字  
能雖得其所傳耶出已意而長於水墨雜畫標格清秀勝於諸  
徒故秋月所畫其無印者世人誤為雪舟筆其為潑墨筆愈簡  
而氣愈壯品自甚高曾雪舟寫自像有附秋月

僧周耕不知世姓住和州多武峯學雪舟而善畫水墨山水艸艸  
而成極似雪舟矣人物花鳥次之又畫鍾馗像然有靈焉曾從  
雪舟遊于中華故其印文書曰東海周耕

僧照陽不知世姓画法學等楊而善相似矣間有水冰之作也但  
其氣弱耳

等禪不知世姓號甫雪師等楊而畧相似矣時時用己意又學於  
宋元名画法

等碩秋月之子也又仕薩州太守而能畫自雪舟到秋月等碩為  
一家然用筆粗矣印文有牧雲之字

僧雲溪諱文山世姓土岐之種族也故公改字為諱筆法學雪舟  
能畫山水人物花鳥畧不相似矣其畫軸皆有天文年號

僧等歲不知世姓九州人住高野山師雪舟能畫然筆力稍粗而

本朝畫史卷之中

十二

不相似

僧等揚不知世姓自書畫後曰日本禪人等揚筆有二印一曰等  
揚一曰拙宗墨畫學周文極似等楊或謂等楊始用揚字後改  
楊字也不知其實否蓋其徒之傑者乎

僧周德號淮齋師雪舟山水墨戲甚似雪舟真體傳彩剛真而有  
無墨之法余近觀墨山水畫上有龜陰僧周良贊云雲谷庵主

周德藏局以繪事鳴西周者也其徒波月等薩出紙以見墨畫  
本周德所筆寫玉潤所摹之佳山水以什焉然則周德者雪舟  
之高弟而為雲谷庵後住者乎

弓削等薩號波月隅州之產而仕薩州太守曾師秋月及周德喜  
善畫山水花鳥人物次之粗豪而雄健書於畫中曰六十歲天  
正三年乙亥六月日後為僧徒周德而居周防者也

小島亮僊師周文画山水花鳥人物而彩墨兩相似矣但筆力差荒不逮周文然雅趣可愛自書画中有曰天文八己亥中夏越溪小島亮仙筆者越溪者即越州乎一曰曾我氏之族也余觀画彩花鳥之屏風又印中有白紙壹興可竹之字

景種稱兵部不知世姓學雪舟周文嘗有画杜雨艸堂圖者乃筆力老成矣幻雲更壽桂贊其圖並有小序壽桂者即月舟也

玄照居士不知世姓好画布袋而學牧溪画中曰玄照居士八十歲筆其源出於周文

僧義圓更不知世姓余觀其所画渡唐天神像其學出於周文雪舟画中曰為天神法樂義圓更一百十四歲画並贊觀之則知長壽而強健也

榮普齋不知姓名蓋画僧也善作布袋並文殊其画學牧溪其源

本朝畫史卷之中

十三

出於周文或曰啓書記之號也不知其實画意與楊月相侔僧智傳號單菴不知世姓學牧溪玉潤其墨戲也能用善筆太低似真相其源出於周文者也或曰智傳相國寺之僧也性好画画好作水墨圖

慧龐不知世姓墨画學狀王長於人物筆法出於周文稍似而略粗耳印文曰德鼎蓋其諱乎

王堂清波不知世姓筆法學明兆能画彩色白鶴及花果衆鳥其傍所画竹葉用墨者多

良敏不知世姓號金溪道人能画人物花鳥筆法學牧溪而其源出於周文

岳翁不知世姓蓋画僧乎學夏珪能画淡彩山水而似周文或曰周文別號也不知其實否

祖繼不知世姓能画觀音像其筆力全似明兆墨色清潤干澀有餘

明就不知世姓善画觀音像画中自書以金沼字其末字似明兆画法亦然也疑明兆或號明就乎

偷閑齋印文曰興悅不知世姓筆法學周文多画花鳥精菴能画墨出山釋迦像

龍登不知世姓能画山水水仙梅竹學周文雪舟而筆意有清奇書画後曰年八十八龍登筆

僧遶莫彌月能画學周文而畧相似筆力蒼老善画人物山水花鳥蓋墨色又類于真相印文曰方外

仙可不知世姓學周文能画山水彩墨共多雖不逮其師清雅不亢

本朝畫史卷之中

十四

圭叱能画墨戲花鳥源出於周文画意與單菴同松谿能画墨觀音像而學牧溪或曰它間之裔也

雪汀學雪舟画墨竹燕雀

等梅學雪舟能画戴笠鍾馗圖筆格與周耕相似矣

等藝學雪舟画意與等梅相同其名有等之字者皆是雪舟之徒也

牧松能画禪家祖師像筑陽画雜圖

東海謝琮其印文曰元美画雜圖等耕學周文雪舟画人物花鳥能得其氣韻雪舟徒弟中聊勝者乎

長柳齊能画墨布袋畫意與楊月相似矣



嚴潘能畫墨猿猴學周文

周楊畫墨鍾馗學雪舟

楊富好畫達磨像學雪舟

雪林學雪舟能畫雖鹿惡清雅不凡

昌圮畫彩色鷹

野宮能畫墨布袋學牧溪画法本出於周文者也

訥菴畫墨花鳥鶯筆法學宗丹而祖鹿矣

寧安學雪舟而畫為雅趣也

超秀畫席竹石筆法草草而成者也

似牧好畫彩花鳥

自當畫墨山水

梅軒學雪舟畫出山釋迦像

本朝畫史卷之中

十五

等傳跡清良畫墨山水學雪舟又有畫大黑

李忻能畫鍾馗像画法出於周文而長於大像

完山善畫彩色狗子學宋毛益而最佳矣

浪松好畫墨草瓜茄學牧溪

宗自能畫墨花鳥小景

日東孫郎畫馬形而得妙矣

曹洞能畫墨人物其筆出於真相

正茂能畫墨梅筆法有啟書記之風又見荷葉鷺筆力出從雪舟

而畧有潤

源直朝號月舉不知何許人也筆法學雪舟又慕王潤能畫墨山

水近見鷹居枯樹羽毛細巧曾有土岐之風疑是其氏族乎畫

後書曰從五位下源直朝筆

左素能畫墨文殊像筆格出於可翁周文

宗觀墨畫太根亦出於可翁周文

道賀畫仙女筆法出於周文雪舟

雲甫能畫墨觀音像學周文之風畫上自書曰是千幅之內也又

辨周苦

守拙道人畫墨觀音學周文

良富畫學周文雪舟而卒畧也然筆力老成矣

如寄不知其姓號樗屋畫後曰大明遊子一翁宗藝筆力學雪舟

其所畫有神農鍾馗圖為彩色人九像添兩贊皆大明人之作

文也然則老之畫人物有人九其筆法慕雪舟者疑是大明人

師雪舟從來於吾國者乎

如圭能畫山水曾學周文

本朝畫史卷之中

十六

墨隱畫臨濟像筆格出於周文

是菴或曰相國寺僧也畫意似真相畫滿湘八景發墨柔潤有氣

韻

等本畫法出於周文雪舟其山水花鳥有師傳所畫扇面多

等空畫墨觀音學雪舟

僧楊溪能畫墨達磨學雪舟每畫自贊其上

僧寄堂學寄翁能似之矣曾見一山叟贊其畫上者

塞白畫牧牛蓋本朝於畫牛如戴嵩者不相聞是亦似有恨乎

斯英畫文殊為墨戲

僧等與專念宗之僧而居泉州堺津安養寺學雪舟畫鍾馗並雜

圖得其名

葫蘆子畫墨鷹則有瓢印一箇



等悅画大黑並雜圖筆意學雪舟

宗白画小鳥

慧林画墨文殊

心叟画墨花鳥筆法似真相印形亦似相之壺形印又有淡彩山水圖筆學周文画上有萬里贊近觀彩色入九筆法亦出於周文不用和樣

茹閱画墨鍾馗

阿氏女振蓋婦人乎不知何許人画彩色觀音筆力細密有上世之風

象先画墨觀音學明兆疑是相國象先梵超乎蓋不知画僧也

宗歲画淡彩山水學雪舟

即梅画達磨並墨雜圖

本朝畫史卷之中

十七

月友画釋迦文殊普賢像學雪舟

殊賢画釋迦文殊普賢似雲溪其筆法出於雪舟

雪洞能画墨花鳥又画半身達磨像其法出於雪舟之風

元賀能画墨画有其所画扇面雜圖

良富能画墨出山釋迦並蘆鴈墨色筆法出於雪舟曾似秋月

宗珊画普賢像

愚菴師智蓋画僧也画墨猿猴每画贊于其上學牧溪之風

希應画墨山水學玉礪之風

岸村画人磨像筆格有周文雪舟之風

雪舫画雜圖

萃隱画墨觀音學牧溪之風

相鑑画雜圖

石谿画墨達摩像並雜圖

大集画三教像墨色筆意似啓書記

信春住南都世爲春日繪所蓋佛像家也善雜画而長於花鳥墨戲也出於牧溪画意似能相尤柔潤耳藻魚圖亦可

文孫工画此名在印文

昌安画杯渡和尚彩色秀潤可愛

僧智怡画法學明兆得其趣

宗滿工画爲雜画

永信画墨梅

細川久之阿波國之座細川賴春五世之孫也玩倭歌好圖画永正八年九月十二日卒法諱道空號大川稱慈雲院當載于天隱詩集細川阿州太守見惠海石兩片副之以倭歌一章卒綴

本朝畫史卷之中

十八

俚語以奉答詩詞畧之

細川讚州太守好圖画其所画扇面贊天隱和尚作也又所圖村田樂圖及木杵岩杜若士峯皆點雲天隱有贊之則載于天隱詩集

醉墨齋桃林能画而有天隱和尚醉墨齋之詩并序然附画者桃林云右三條者載于天隱詩集

本朝畫史卷之中 終

本朝畫史卷之下

專門家族

狩野永納撰

狩野正信稱大炊助，刺髮改名祐勢。或作藤氏支別而相州小田

原人也。曾仕公方慈照院。東山為近侍畫法師周文又師小栗

宗丹而能得其趣。人物倣宋，綵摺始公方家造金殿。今宗丹畫

之未竟而死矣。當時雪舟入明，未歸朝，故無能繼其功者。舟

之歸，自明也。宿泉州堺，津其家有花鳥屏風，舟視之曰：「美哉，似

吾友小栗宗丹。」又有自然而至者，是為誰？主人曰：「先有公方臣

狩野大炊助者，自謂學畫於宗丹，是其人之所畫也。舟歸京，公

方家命曰：「宗丹畫殿之功未終而死矣。」子須成之，雪對曰：「幸有

狩野氏之子在近，臣中善畫，況金殿之畫不宜於僧。」公曰：「未，知

也。」乃使之繼畫，然後知正信之能畫，其筆法適意而無定法，獨

本朝畫史卷之下

一

超格式，至得元信。狩野氏終為天下畫工之長也。或記曰：長亨

三年四月朔日，東山殿命狩野大炊助使寫常德院殿像。先令

僧功叔見之，畧加臆見，最長人物，喜用減筆，曾不見倭畫，晚年

因一藝叙法眼位。

狩野元信，祐勢之長子也。小名四郎二郎，始稱大炊助，後任越前

守。祝髮歸永仙，曾叙法眼位。學畫遠過於父，遂作一家。世稱古

法眼。狩野氏所宗也。家在上京，人呼為狩野廚子。倭俗謂小其

為畫也。溫良而細密，滋潤而清秀。山水人物鳥獸花水俱窮乎

妙處，殆入於神品矣。夫近世土佐氏倭畫雪舟子墨畫各臻其

極處，若元信彩墨盡其美，和漢得其宜，譬諸義之書，真不勝鍾

繇草不勝張芝，惟義之兼篆隸行草俱造於神妙。元信之於畫

亦猶如此，是以得冠於古今而甲於倭漢也。永正間作數幅山水

花鳥，附南舶以達明國。知勤城鄭澤一作澤觀之日本五百年來

未聞有此。若遭夏士良之時，必在圖繪寶鑑之列也。乃贈書曰：

「吾看先生畫彩，恰若趙昌。」又如馬遠筆跡，甚可觀也。若進貢船

來時得遊我國者，必作先生門下弟子焉。布傳達為幸。起居拜

知勤城鄭澤狩野四郎二郎先生座下。正德五年仲春書。然則

元信不惟得名於本朝，至於異域，服其技。元信少負，嘗欲出尋

山川，勝而開胸臆，蘊自負。小藤匡藏麻衣畫具，往芳野高野到

根來熊野，適意處皆遺筆跡。悠悠蕩蕩更忘歸，得其畫者甚為

珍。故旅宿不求其償，又雕金工倭藤氏之宗子友乘者，元信之

友也。尤善雕獅龍，家名大顯，實是得其妙。於元信畫者也。至今

後藤之雕法皆倣狩野之畫格也。或適意則憑机而畫，扇十數

片，一日武士十餘輩卒爾來見其所畫，妄評之。織田信長公時

本朝畫史卷之下

二

為上總介，為見其畫而共眾人竊來也。元信知之，然默而不顧

出脚於机間作畫，不已。客去後，隣人來曰：「太守之來何無禮乎？」

答曰：「彼潛來故我又不敬之，且我無求于彼故然也。」元信貧而

不諂也。如宋元君之畫史所記者，是真畫者也。每歲正月二日

畫末廣扇以獻公方家，而成賀。公舉土器而賜酒，第一典藥頭

某次。元信以及諸士其後公方朝天子，以其扇載於柳筥，使隨

身捧於車前。及禁闕下車而執之子孫榮之。世謂鞍馬寺之僧

正者，山中魔鬼之長也。先是公方家夢一山僧曰：「我是鞍馬僧，

正也。」願公使狩野元信圖我像，以安於寺中。公驚寤而告之，元

信亦信。亦同夢，公乃欲令元信寫其像。元信實不知其形，而世

亦無圖像，茫然臨紙上，不得下手。忽有蜘蛛引絲行紙面，隨其

跡以觀之，而彷彿得儀表。於是三像畫成，中僧正坊左役行者

右源牛若義經幼名也世謂學兵法於其門狹小而難出之時其屋舊矣破其簷以出之當時兒女相其門狹小而難出之時其屋舊矣破其簷以出之當時兒女相

言曰圖既成而風破屋也圖到鞍馬寺今在當寺堂西設龕帳

以藏之元信名蹟傳世者多矣今不能具載凡元信所學之山水則馬遠夏珪牧溪玉澗及舜舉子昭之濃色人物則馬遠夏珪梁楷顏輝花鳥則趙昌馬遠舜舉倭畫則因信實光信之法其短者除之其長者取之使入正門行直路其有功於畫也大哉永祿己未冬十月甲辰卒年八十三

狩野雅樂助印有朝隱之字祐勢仲子也善山水人物花鳥極似元信其無印者乃元信之畫也大抵能守家法而風格高舉氣韻蕭爽而聊乏老成者雖然其妙處亦至矣

狩野國松蓋幼名也祐勢季子而善山水人物花鳥筆力稍粗矣

本朝畫史卷之下

常憾元信畫溫潤有餘曰我以鍼砭深刺之而欲去其肥膩之

之氣也其有度量也如此惜哉不幸短命而死矣

婦人土佐氏光茂之女而狩野元信妻也善倭畫每為源氏故實儼有父家風至其為花草水石則倣元信傳言光茂之子稱刑是故其婦元信為繪所預也又慶長年中土佐久欲者住居和泉郡津葉畫也蓋土佐家族手筆法專守規矩尤優柔也方今在子京師稱土佐氏者謂是傳耳

狩野松榮或稱松榮叙法眼位圖畫能守家法然不及於父其中至其秀逸則大似而小粗耳天正年中卒壽八十

狩野養拙元信之養子也不知其父矣善畫山水人物花鳥筆力稍弱然不凡乎

狩野宗珍傳言元信姪也不知其實能畫山水人物花鳥元信數

令助其功所至可知矣

狩野秀賴稱洛部少輔元信仲子而祐雪弟也先父卒畧有父祖之風今世畫扇多

狩野真笑季賴子也又稱洛部畫扇面者多矣饒守家風而已

狩野玉樂相傳狩野元信之姪姪也筆法能學得元信其秀逸而無印者世人多誤為元信之筆其所至可知矣

木村永光剃髮號善了江州蒲生人仕淺井長政為近侍曾師狩野元信學畫善花鳥又長於寫真平素適意則作之故世所傳者少矣

季也不知其世姓古老曰元信晚年弟子也能大畫其筆法似永德然有甲乙而已

狩野永德始字源四郎松榮長子而元信孫也狩野家之嫡流而受教於元信山水人物花鳥皆為細畫間有太畫望之則似舞鶴奔蛇之勢其人物岩木花艸有過於祖先也豐臣秀吉公築聚樂大坂二城建太殿使永德畫其金壁當時諸候大夫第亦營太厦設金壁則必求其畫然永德細筆無暇故專為大畫或松梅長一二十丈或人物高三四尺其筆法皆粗而草然與元信無論其優劣者墨畫用葉筆太抵有祖風頗出新意惟恠奇奇自得前輩不傳之妙以獨步一時骨氣正而奇凡得手於太畫者五百年來未曾有者也嘗賜法眼位然辭之天正庚寅秋九月癸丑先父而卒年四十八

狩野宗秀松榮仲子也畫法專學家兄永德能守規矩然不及父兄叙法眼位

狩野源七即松榮之三男也能畫學永德得其畫法而有新奇先

本朝畫史卷之下

四



松榮永德太卒

長谷川等伯初名久六能州七尾人而世染色家也至久六好畫遂棄其家業入京寓于太秦廣隆寺因狩野氏畫法而後立已意以立一家自稱雪舟五代廟社之掛畫皆自書如此既而至法眼位然雪舟僧也不可有子孫彼之所言稱畫法之世系乎不知其實也等伯曾嫉狩野家為畫氏之長茶人千利休亦氏千名素與狩野氏不相好而與等伯結交合心相共譏狩野氏然等伯畧有才凡至諸畫大幅莫不作木法寺涅槃圖橫大餘三丈餘今所藏及老年筆力不衰雖有龐惡之瑕疵又有豪氣之風體時輩無及之者焉其子久藏不隨家聲其幸哉雪舟模夏珪山水二軸後謂之大軸小軸等伯得之

長谷川久藏等伯之第二子也為畫清雅過於父家流無能及者

本朝畫史卷下

五

太抵守父法而精密又倣狩野元信長於人物禽鳥花草清水寺有和田酒宴之掛畫俗稱板畫之絕妙長谷川宗也等伯之庶子也世其家業然筆力不逮父或其後裔至于今乎

狩野光信者永德嫡子也稱右京進畫樣不如父意故未傳家法永德沒後從家族及諸門生孜孜得家法為花草禽虫倣畫風情輕柔可愛又倣玉澗之山水雖不及父不凡慶長壬寅年死壽四十二歲今洛下相國寺法堂天井蟠龍圖乃光信之墨痕也狩野孝信者永德之季子也稱右近將監永德沒光信死後禁裏綠洞榮中考信皆勤繪事其技雖不及父兄然亦能守規矩而有雅趣今洛泉湧寺賢聖南禪寺法堂天井蟠龍乃孝信之作也曾生三男一女伯曰守信仲曰尚信稱主馬叔曰安信稱

右京祝髮叙法眼位今也安信繼宗子之家統不墜名聲

狩野守信者永德之孫孝信之長子也初稱采女剃髮歸探幽齋自孝信預繪所故至于探幽畫南殿賢聖者兩度曾丹青之妙緬超越于父海內獨步更無異論上自王公下逮賤隸珍之重之以金玉纂索冠古今猶足從一時之好以所畫水纂雪舟之奇蹤於是筆墨飄逸傳彩簡易而自然一變狩野氏自成一家天性得搜奇者也今夫鳴當世輩皆非不詆探幽之糟粕者末流漸漸失古法而不能論其本豈知探幽出新意有思趣哉起自法眼叙法印於此時應太上法皇製泰拜王體今探幽畫之今所藏于般舟院之尊像是也延寶二年甲寅十月七日沒于家壽七十三

友松諱紹益氏海北江州蒲生郡人也師狩野永德為畫工所画

本朝畫史卷下

六

人物禽獸艸花能似之矣然輕而逸耳永德數令友松助其功晚年為世所重畫法遂改筆法其墨戲甚清潤而不蹈古人軌轍當時有故畫墨龍而贈朝鮮國王於是給書於友松甚重之愛之其子友雪不墜家聲

狩野山樂近江國蒲生郡人也木氏木村名光賴小名平三木村永光子也永光初事淺井氏既而謁豐臣秀吉公于時稱羽柴筑州大守事之為近侍公營城郭屢監臨焉光賴幼年持公之杖從其後而以其杖沙上畫馬不顧傍觀公見而奇之曰汝好丹青乎乃附當時畫工長狩野永德學習而後因台命約父子之義授狩野氏稱修理亮用筆法專得其正傳然猶接士林之列而勤其役者居多公修營東福寺法堂天井有僧明兆畫龍嘗逢雷火而損公使永德補之畫雲木畫龍而永德罹病危急



乃授其草本於光賴以補成之。明兆所畫其紙壞矣。光賴欲畫之。去其紙。施粉於板上。龍頭二丈餘。身長十八丈數日而終其功。時光賴三十餘歲。自是禪林法堂天井板必畫。蟠龍焉。公嘗興復天王寺。令光賴初畫聖德太子緣起於堂壁。及秀吉公薨。猶在浪速。浪速陷。後寄身於男山。龍木坊由是蒙恩赦拜東照大神君。於駿城而歸。沐浴陽。剃髮改號。山樂。元和年中。天王寺罹災。及其重興。山樂復蒙鈞命。圖之。其餘洛中畿內金殿王樓多遺墨痕。其所畫之龍虎鷹馬頗有青藍之。作人物花禽。草木亦追永德太畫之風。晚年深慕宋元平生好畫。鍾馗病者求之。果有靈驗。又聞古先所語。佐佐木初圖犬追物式。又見張氏帝鑑圖說。始模寫之。或畫騎法七段。皆流播於世。寬永乙亥秋八月丁酉以病終。歲七十七。

本朝畫卷之下

七

狩野家累世所用畫法

山水畫法序

夫水墨生於筆下造化之功。滌尺千里之景。平淡高遠之致。遂以潑墨草筆得名者。宋之牧溪王澐及高然暉也。如夏珪馬遠者。以淡彩精工得名者也。如錢舜舉盛子昭以青綠精密得名者也。各有風格。成一家。皆吾家所用而往往多宗之。

人物畫法序

世畫人物精神在於阿堵中。上世名手有其體無其痕。後世施水墨者出於牧溪王澐。如梁楷顏輝馬遠馬麟亦一體焉。如李龍眠宋朝第一也。李安忠者出於龍眠。有一格趙子昂及錢舜舉彩墨皆精細小大用描筆更不事潑墨。凡圖像者以三教附之。故衣紋曲直從其威儀也。聊成一家以往往宗之。

花鳥畫法序

墨走歌

詩人多知於鳥獸草木名以繪事之妙。與詩思相表裡焉。如邊鸞黃筌少其痕墨畫者徐熙為精工。陳常以飛白筆也。草筆者牧溪為潑墨。累世每所用也。彩色者徽宗御筆趙昌李安忠錢舜舉等也。走獸者宣和殿御筆毛益任月山筆意也。技乎其萃者矣。墨龍者有蛟蟄升降之態。如弗與博古董羽等上世而其筆不相傳。陳所翁者有得變化之意。大槩為近世之法。蓋其神妙出於天成者。嘗難傳模。惟隨數得其形似。而以訓蒙子云尔。

右吾家世以所藏之粉本模寫之。為三卷。序之以附與於長子永敬者如此。

倭畫布置之法

古來倭畫之法者有情而婉者也。所謂伊勢物語源氏物語及歌

本朝畫卷之下

八

仙寺社之緣起等圖畫也。古來有其法窮玄妙者多矣。如造屋宇除其天井去於梁間寬顯。梁間門之事實。呼本朝之畫趣可知。有才思觀中華畫事實柱間甚廣。而今其中置人物欲見其故事也。思致頗遠乎。又畫雲於圖中置上下定遠近。以塞短揚長。圖中多畫松樹。重數技以爲一樣而施青綠也。奇哉有倭畫之法焉。粵狩野倭樣者人物衣紋隨于官位其殿屋也應于一時之尊卑。於山水奇石恠樹聊用漢畫著色。彼如李思訓之林石用金碧。如舜舉子昭用青綠。悉綴紋細密甚纖麗也。必至于四時景候或取瀟灑平淡之趣居多。有舊圖而千形萬狀極於其奇巧而已。

翰墨游戲說

學書 詩情 倭歌 聯句 連歌 茶興 築假山 挿瓶花

竊以書畫異名而同體也象形字學者則畫之意也故知蘇軾米芾有畫名矣詩也者無形而畫也者有形詩也多取古人之名言秀句瀟灑幽玄之趣以布列於心中頓見筆下焉耳倭歌亦奇絕也六義三體之品皆本於心地出於言外散而成詩歌聚而成畫其文流為聯句為連歌豈是非與畫術同胞哉是故畫之屬也廣矣大矣以天地風雲為生意四時造物為氣韻尤從運氣適時宜所指此餘事也如愛茶好事雖為俗間之逸興出塵表之楷樣也至其玄微者何愛玲器弄美饌以為己有哉固微鴻漸龜蒙之趣而深留意於此則寒夜客來茶當酒竹爐湯沸火初紅風韻若此誰廢之或有臨庭隙疊石行水以摸曠野遠山者或有束枝葉聚瓶裏以作茂林陰鬱之態像山水之彷彿者皆自然佳趣而盡天機之所動既而所以屬予之一藝今之業期者鉤名譽於俗觀道矣

本朝畫史卷之下

九

畫壁障圖樣式法

作畫之序純墨為初而山水居多淡彩為中而人物居多濃色為終而花鳥居多以及於荒草大樹是可知其大意以山水為殿中上段以人物為殿中中段以花鳥為殿中下段以走獸為殿間之中或金殿玉樓自上段至下段為極彩色畫雜圖然則從于時宜應於求筆之亦一家之法而已

畫屏風步障圖樣

太抵以為四季要之山水人物花鳥皆同但山川樹艸應於大小圖樣所謂六枚之圍屏是也二枚圍屏太緊為大畫步障畫表裏太緊為太畫蓋所用二枚圍屏格也

杉戶圖樣

所畫人物花鳥走獸都是濃色最可尚墨畫者後世難分明也圖大人形大鳥虎獅子等隨其用度板面者尚正目無脂

棚障子圖樣

畫四季花為菓瓜草虫大槩不過此類

扇面畫法

蝙蝠扇者本是吾朝之器也有檜扇有紙扇所用因其禮節也檜扇用官家有品目

松目扇官家童形持之所謂元服之時持之為先例扇面圖樣多雲間地

雲間地

女御扇金桐鳳凰在雲間雲彩五色加侍女扇水鳥岸有梅花施五色雲間

本朝畫史卷之下

右三扇者以五色粗絲

十

男扇木有其扇端尤有長短

紙扇末廣王公卿大夫所用者皆樂金地土畫雜圖有松下

白紙扇圖樣不定當時應其需扇地都不同膠漆行筆

卷軸畫樣

古者有年中行事圖卷吁有秘畫珍圖以可為鑒戒苟布形莫大

於畫雖然古圖樣稀

押繪

古來有十二支之圖有十二月花鳥又畫仙人禪祖師花鳥山水

居多隨其需耳

本曰松目之

扇俗曰柏者

持之依目之

雜傳

僧正尊俊住于和州菩提山報恩院能佛像及雜畫蓋其畫學狩野元信之筆法也俗呼菩提山古僧正俗姓出於官家柳原爲仁和寺院家住菩提院其畫後印文有文釜之字蓋別號也余偶遊于菩提山寺中處見之龍虎墨梅竹及半身達磨等皆有雅趣尊俊初作倭歌兼倭字之書後汪思於圖書其德行有餘技藝隨之者乎

僧正祐宜智積院第二世之祖而真言宗之碩學也暇日好丹青善墨畫學雪舟之筆法得其真趣如今僧正泊如老師才名道德爲世所重偶寫先師像而有工妙苟有故哉

僧昭乘號惺惺翁本中沼氏也少而登男山學密法遂住龍本坊天性能書爲世所重畫亦工所交者騷人雅友也往來無暇日

本朝畫史卷之十

十一

蓋聞慶長年中難波城陷後狩野山樂出大坂逃隱男山昭乘從之學畫有年自立一家風且善學牧溪潑墨尤得其肯趣矣讓龍本坊於弟子坊後營方丈室自稱松花堂寬永十六年九月十八日寂歲五十六

僧張川一名永海九州人也天性工畫元和年中游于京師而畫于權貴之家蓋予先考山雪翁每會面相與談畫事其筆法出自雪舟更有新意而清雅可愛

宗祐能畫山水有馬遠夏珪之風筆法出自祐勢乎似元信筆稍不優徒有規矩耳當時觀探幽所極之外題王樂筆也其所畫山水花鳥多真細著色耳

竹木畫雜圖學祐勢

意精筆法學元信有真山水畫守規矩

金龍爲雜畫筆力學元信

正祐筆法學元信爲雜畫

江北元忠筆法學元信画上印文有源之字

重信畫雜圖學元信

清信畫人九像全倣信實之圖筆法學周文兼狩野家風

定信能畫學元信

狩野光正畫墨布袋筆法學元信或以爲狩野氏族乎

慰俊畫人物學元信

家續畫花鳥菓子其彩墨甚清潤筆法出於祐勢元信

雪心畫出山釋迦墨色枯槁聊似雪舟

拙宗畫墨觀音出自周文筆意

雪江畫渡唐天神像專學雪舟能相似

本朝畫史卷之十

十二

作仙畫墨花鳥出自雪舟筆意

山林此名在印文畫墨蘭似王曉子筆法其無印者疑王曉子筆也略得自然趣

靈彩畫三教一致圖印文有腳踏實地之字筆法似明兆墨清潤而蒼光疑是明兆之別號乎

林居畫墨布袋筆法似真相

僧季英名周孫河內人也學畫於雪舟得師傳能雜畫

僧玄澤不知世系能畫遊和州名山寄身於菩提山所筆屏風障

子畫者觀夫出自周文而有真相之風

了歸畫墨竹雀筆法學真相者也

宗用畫漁人筆法出於真相

墨澤印文在澤墨之字畫束帶天神像筆法學雪舟



等雪畫，半身達磨，有雪舟之風，雖有豪氣之作，聊近俗。明浦宮鑑勢州人，是名皆在印文畫墨梅，甚清奇，遠學補之之風，而非庸史之流。

柴庵畫墨八景及拓摺折枝，能似真相，蓋聞相國寺僧也。

等牧畫墨不動像，蓋類木筆之法，筆意出自雪舟。

甫舟畫壽老人筆法學雪舟，印文有等元之字。

孤月印文有周林之字，畫束帶天神像，學雪舟筆意。

清忠不知何許人，畫墨山水，筆法有能相之風，阿雅玩。

良海蓋畫僧，乎畫柳水，人九像，筆法似雪村，有贊前，真如寺用林。

叟書之彩墨尤麗，傳世者鮮。

周元畫，半身達磨，筆法出自雪舟，潑墨尤清雅可愛。

守絜畫，福祿壽，其墨色學雪舟者也。

本朝畫史卷之下

十三

家繼畫，鍾馗，學雪舟筆意。

等坡畫，十牛圖，其水墨蒼老，出於雪舟，筆法品不俗。

祐周畫，墨山水，似雪村筆意。

巴泉畫，布袋，其墨戲學周文筆意，但不見其餘圖，苟有清趣。

善元畫，龍虎二幅，其法學牧溪，筆意其傳出，自周文風格，善得活。

動之態。

登米水月畫，文珠像及雜圖，墨色甚佳，筆力恰似秋月。

長谷川等重，蓋等伯之族，乎能墨畫，且畫竹林七賢，有圍屏其筆。

法脫家傳，而有古風之格，苟清奇甚佳。

長谷川珠，長為墨戲，所筆渡唐天神像，能學雪舟筆意，而更無家。

派，但不見其餘，都是自等伯興起，其家已往，雖有家法之習，去。

雪舟，甚遠耳。

或如今有以雲谷為姓氏者，則稱雪舟之後胤，曾雲谷者，寺諦也。雪舟者，僧之道號也，非姓氏必矣。嗚呼！技藝流而後為世業，宜也。姓氏雖未詳，或有俗生輩，或有仕權門者也。况元祖也，等顏者，起專門家，山水工潑墨，人物作古野之良，以有墨妙其子等益專其業，筆力自相守，子孫在于長門師事之者，能彷彿其流，得其名者，粗多。

補遺

僧瞻西上人為雲居寺，本願能作倭歌，故其名在于撰集曾圖倭歌曼荼羅繪，其圖本往往有之，此載倭歌緣起。

僧觀證西山三鈇寺二世之祖也，能畫佛像，今所藏於此寺之佛。

眼太妃者，則觀證所畫也，蓋工倭歌，其所詠世載撰集。

婦人冷泉者，九條民部卿女也，常嗜畫，每日繪阿彌陀佛為所業。

本朝畫史卷之下

十四

詳載鴨長明發心集，但念佛修行人也。

巨勢行忠畫，釋迦十六羅漢像，皆學中華之風，筆力絕妙也，蓋金岡之裔，乎其筆跡今在，于和州三輪寺中，坊余見之。

良全法印能畫，偶與可翁同諱，然其人異時，其画法亦別也，本國寺什物中有羅漢三十二幅，畫後記曰：正平七年壬辰三月七日，畫工良全筆，蓋正平者，南朝後村上帝之年號也，然則和州人乎。

良圓畫，佛像，叙法橋，曾攝州多田光遍寺，開山釋空圓像者，良圓所畫也，裏書曰：康安二年二月二十三日，畫工法橋良圓筆，余至于多田，居光遍寺而觀之，蓋本願寺之孤也。

繪所前兵部少輔。

備後守藤原光國。

繪所前兵部少輔。

備後守藤原光國。



大夫法眼永春

土佐守藤原行廣

行秀但春日繪所也

修理亮

右六人画工者画融通念佛緣起者也如今在于嵯峨清涼寺也

慶彛能画叙法眼是亦稱芝法眼

懷慶叙法眼画佛像長弥陀三尊之像

兼英画文殊半身像有書模畫墨戲画上

隆兼為繪所預叙四品未詳何許人能画有賀茂祭草子画後書

云元以為信卿筆寫之然此隆兼疑是土佐家乎當時光信叙四品也則其家族乎又不知官家氏族者

本朝畫史卷之下

十五

賢正不知何許人能梵樣木筆故有渡唐天神像用木筆苟非專門之習筆法飄逸全不凡疑是密宗人之墨戲歟偶居于河内天野山寺觀之

越後法眼文明年中人有能画之名

盛雲師越後法眼享祿年中人能画

吉次郎師盛雲而能画

僧智海不知何許人以梵樣木筆画不動尊及二童子專極奇怪

之勢其画後云智海七十五歲明應四年乙卯十一月一日或

画不動像十萬體餘幅云如此多其筆之墨痕在江州飯道寺

中余見之

僧尊海文祿年中人也有画涅槃像與芝法眼同名然筆力異其画後記山法眼尊海筆在于二條殿文庫余昔觀之

婦人一位飛鳥井榮雅之息女也天性善画偶画岩屋物語事實書其詞

後圓明寺關白姓藤原諱兼冬唯心院關白房道公之息也性好丹青天文十年十月行年十四歲之冬自画月輪攝政光明峰寺攝政普光園院攝政洞院攝政圓明寺關白之遺像而為一卷筆法上世之遺風清雅非凡手之作此卷今在于一條殿而為寶物焉

藤原光行為繪所光源院義輝公元服日画於御櫛手中見于元服記又有土佐行光者疑是其諱字以其上誤為其下者乎武田晴信剃髮歸信玄其英雄世所重也蓋其雄略謀計之功指而不論工詩画清神雅量天才絕出矣余偶所見禪祖之像筆法如能相其風韻甚清而不凡印文有武田晴信之字

本朝畫史卷之下

十六

武田逍遙軒信玄之弟也性好繪善寫信玄之壽像又画十王及十二天之像在紀州高野山

李欽若州多田村人也能画曾入大明以揚其名所筆者有武田元光像至于若州小濱見之

附錄

圖畫器

硯

紫石 自古所用者長門下關之產為上品但近世石面龐而濃石少故如今若州宮河之產石為上品面濃而尤溫潤生微濕青石 自古所用近江高嶋及洛西嵯峨之產也處二有名者多瓦硯 雖有感陽美英之題銘所殘稀於本朝雖有東大寺之瓦其面甚龐不足用耳惟可為清玩可

墨

南都墨 蓋和州之產物也自古以松烟和膠合成且如今所用者鷄卵紙上或膠礬紙上佳

平安墨 墨面題銘上世年號或有菊桐之紋所遺稀且烟氣已

本朝畫史卷之下

十七

去然其色潤美觀今所用者如奈良墨之法當世略知於唐墨之法調之亦佳唐紙不引膠礬者則相應矣

筆

冬鹿毛 夏鹿毛 狐毛 鼠鬚毛 各隨所用皆無其心而直其腰者尚之

紙

鷄卵紙 以越前紙為上品中品下品處二所作居多以用之

唐紙 以官紙為上品也先考桃源子云唐紙者先紙之不取舌者善紙也而其面厚重其地濃者尚之矣但色者用淺黃赤也白紙者墨青色薄紙者墨白色也以是可知墨色者極黑而護不尤者最上品也

美濃紙 雜紙雖有其類幾多以美濃紙為上品能施膠礬用之

所謂要用者則以真本臨之模寫而後為粉本

畫絹 絲目纖細而無片織色清白而無縷節者尚之

絹子 以冬鹿毛結之自一寸二寸至五寸又有廣物是用

膠礬并糊刷

葉筆 採葉筆能擊之而束之為大小也但可經年用之可余家世有相傳者所謂永德之葉筆也作枯槁甚佳

朽筆 今俗云燒筆 幾如用檜能枯木

繪具題名

源順倭名類聚鈔載圖繪具題名

丹砂 朱砂 燕支 青黛 空青 金青 金青之最上者空青

白青 白青一名魚目青 綠青 本草云綠青 雌黃 一名金其精黃

雌黃 同黃 胡粉 燒錫成胡粉

本朝畫史卷之下

十八

近世畫家所用繪具題名

紺青 倭名云金青 綠青 白綠 出白綠 白青 俗曰群

光明朱 倭朱 丹 綿胭脂 俗云生胭脂 散花 或云

藍紫 倭名云青黛 雌黃 倭名云土來物所 胡粉 黃土 升紫

胭脂 金箔 銀箔 金泥 銀泥 黑色 膠 明礬 來唐土

雲母 調合色

繪具

紺青 合膠用之於礬中沈而不和與膠惟以筆端雜之以可施

色指之出群青

綠青 合膠用之所調者與紺青同於綠青之中出白綠

光明朱 自中華來此具也極鮮色而料重合膠用之

倭朱 合膠尤微所用者墨画而聊所點之朱色也又與墨調合云

朱墨色

丹 自中華來也淺赤有光輝合膠用之

綿胭脂 用水浸指絞之蓋以火溫之漸々出於色不加膠

雌黃 唐之具也不加膠灌水可摺之畫書云雌黃是也

靛花 或螺青不加膠摺之可無限漸々灑水以沈之及半日後

用之摺之可經刻并青黛調合如靛花聊疎

胡粉 礪中以杵能摺之有數刻而可加膠以如餅而漸澱入麗

水伸用之

黃土 不合膠因所用有加膠用度多并紫土專加膠而用之尤

和胡粉可施色

胭脂 俗云燕支 本蘇枋木也取入明礬煎堅之終出紫色濃也

尤可加胡粉於是其形如墨用之

本朝畫史卷之下

十九

金箔 自打出來更以微油紙移之而後置之屏障上其地汁者

解海羅加膠以押之

銀箔 同金箔押之

金泥 取金和膠消之初於盆中以指摺之無間暇終色出光輝

銀泥 同金泥消之

切箔 俗曰金銀砂子以小鹿皮張於盤上以竹刀切之其名微

塵山椒小石居多

墨色 濃淡與用之或綿布等麤者墨上塗螺青要無光又用有

光

膠 畫書云不可用鍋頭不可用日晒苟的論也但以火煎之漸

漸而可好惟以明膠訓須喜和最上

明礬 滾湯泡化開澄清次將好膠鉢內用水溶化畫書曰春秋

膠礬傳夏月膠多礬少冬天礬多膠少

雲母 大抵所用者白櫻白菊花上微塗雲母則增其英光以類

可推之白箔上皆如此

調合色

淺紫 主胡粉加胭脂或加綿燕支是云燕支之具

淺紅 主胡粉加朱是云朱之具有濃淡

桃紅 加胡粉入丹與綿燕支合是云桃色之具俗云肉色具

肉紅 用粉為主入燕支兼螺青

疾色 又青瘵是訓字習調合同肉紅青色多

朽葉 朱之具上以雌黃塗之變其色

蜆色 加胡粉入朱胭脂墨皆濃色

淺柳色 加胡粉用黃土淺者粉多濃者粉少或加朱隨其要用

本朝畫史卷之十

二十

是云薄柳色

檜皮色 加胡粉入朱與墨又加紫土是曰朱墨之具

栗色 加粉入朱墨其上塗綿胭脂

茶色 唐曰茶褐是也類色多以胡粉入朱墨其上塗雌黃以變

色

淺黃 主胡粉加入雌黃多少是云雌黃之具

萌木 淺綠青又白綠之上塗雌黃變之

淺青 訓阿佐 主胡粉加入螺青多少隨其要

青茶 淺青之具上以雌黃變之

鼠色 唐曰皂也胡粉與墨加入之用之

淺綠 主胡粉加入白綠

右調合計其濃淡以用之蓋諸色加入胡粉者悉極彩色也

朱墨 朱與墨也但不加粉膠

草汁 唐云苦綠也螺青與雌黃合之以云草汁最有淺深濃淡不加粉膠

作黃土 唐云土朱標也朱與雌黃合之不加粉膠或有加黃土

和訓律久利

生胭脂實綿脂以不加膠用淡彩

螺青同

右調合所用者在淡粉施色也

或為墨畫著色者是具專用之件二尚遺者不少乎

僕所收積繪具不過此調合品目者恐有遺略然平日不才而文字少雖有言外之傳不能盡顯嘗中華之彩色者題名多是亦不能詳之惟述其大抵云

本朝畫史卷下

二十一

所謂紺青在昔自中華來也慶長年中攝州多田銀山之中初有紺青掘之蓋此山者祖父山樂當時所賜之採地也是故取之獻故太閤豐臣公於是賜朱印自今後可出振之而後至于今掘之不止曾綠青者於紺青之中撰之採之此二色者多田山之產物也

本朝畫史卷之下

終



本朝畫史跋

凡厥繪畫之爲事也造化之妙術而游藝之一端也然吾祖考山樂翁性之所好而欲罷不能故才命不偶焉昔閻立本已爲郎中寫異鳥於春苑池上歸戒其子曰若曹慎毋習深愧丹青之嘲郭熙郭汾陽之後也然爲御畫院藝學郭熙自悔能教其子思以學起家往昔士人一藝掩其德不爲少矣立本郭熙之所恥亦宜哉王維曾自爲詩云夙世謬詞客前身應畫師杜甫送鄭廣詩云鄭公樛散髮如絲酒後嘗稱老畫師又以是觀之則畫師未必爲賤術乎非耶其於本朝亦然矣自王公尊宿至鄉太夫士庶人留神於圖畫必德成而一藝隨之非損本務末也惟於畫家碌碌而無高致之機昏而終晚年其亦不思而已雖然今幸經太平之日事翰墨以當一命敬謝聖恩況於養微躬也足豈不

本朝畫史卷之下

二十二

能無務哉吾先考桃源主人手錄國朝古今能畫者百餘人以爲之傳艸穉已成然不終其功而卒矣嗚呼痛哉予設色之餘暇雖欲繼此編短才薄知不堪成之且本朝自古無畫記之可徵是亦難奈之何今其所聞所見粗集成之繼先考之志曾元朝夏文彥以宣和畫譜附之他書益以南渡遼金元人品其序曰豈無博雅君子與我同志者歟明人錦衣苗公吳齊與賓山吳麟纂當代名士以繼夏氏之編予編述亦感發興起於茲者乎後之覽者益其未脩正其有誤而傳永久則是余所庶幾也因之爲所用畫法又附錄於畫器繪具彼若賞鑑好事亦思之不然已何爲有淺深乎是故雅俗並宜云

金門畫史狩野永納伯受書于洛西梅岳堂中

日本漢文史

籍叢刊

卷二

維史

[General Information]

书名=14664081

SS号=14664081